
ヴァルキリープロフィール 神に挑む者、天を穿て
との。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴァルキリープロファイル 神に挑む者、天を穿て

【Nコード】

N0199N

【作者名】

との。

【あらすじ】

元・銀河連邦軍人として、未開惑星ミッドガルで当り前のように人助けをしていたアレンは、ある日「神が定めた運命を変える者」として戦乙女に神の敵と認定される。

SO3を知らない人にも分かるよう書いています。一部グロウラナーの要素あり。

現在、ハイパー鈍足更新期に突入しております。ご注意ください
い

1 アリユーズ編 始まり(前書き)

ルシオと言つ名の少年が出てきますが、V Pルシオのことではありません。

1 アリユーズ編 始まり

「困ったな……」

大陸の中央に位置する小国アルトリアは、伝統的に国王による独裁政治が続いている。だが、長年の政治的墮落は国力の低下を招き、現在は大陸の西側を制する軍事国ヴィルノアと、東側を制する宗教国クレルモンフェランによる侵攻の脅威にさらされていた。

これでも数年前までは、世界は表面的とは言え平和だったのだ。ヴィルノアとクレルモンフェランの国力は拮抗していたため、冷戦状態だった。

だが、事態はヴィルノアが『原初の秘法』を手にすることによって急変した。鋼鉄と火薬の扱いに長けた『原初の秘法』は、ヴィルノアの軍力を拡大させ、クレルモンフェランを圧倒し始めたのである。

ヴィルノアがクレルモンフェラン侵攻に成功すれば、間違いなく次の標的は、大陸中央に位置するアルトリアである。

アルトリア現国王は、この事態に対応すべく正規兵の他に傭兵を雇って兵士の数を増やすという政策を打ち出したが、大国クレルモンフェランすらも呑み込んだヴィルノアの脅威に太刀打ちできるものか、と国民の恐怖感情はピークに達していた。

陰惨とした王都、アルトリア。

土埃を被った石畳は広くも狭くもなく、白煉瓦の家屋はどれも年季が入っている。平屋ではなく二階建てで、一軒家よりも集団住宅が多い。その家屋に寄り添うように立った街灯は等間隔だ。

街に活気はないがまだ貧困に喘いでいる訳でもない。それが、

今のアルトリアを最も端的に表す言葉である。

そんな街並みを見回して、二メートル強の白筒を担いだ青年は眉根を寄せた。年は二十前後。カーキ色のジャケットに黒のシャツ、白のズボンという。この大陸ではあまり見かけない出で立ちだ。彼は淡い金髪をなびかせ、深い蒼瞳で街行く人を呼び止める。

「すみません」

「あん？」

ふり返ったのは、彼よりも頭一つ大きい。二メートルはありそうな大柄の男だった。男は背に三メートルほどありそうな幅広の剣を差し、引き締まった体躯に青い肩当てとガントレット、膝当てのみの質素な防具を付けている。金はなさそうだが、動きに無駄がない。男は正規兵ではなく傭兵のようだ。まるで虎のように獰猛な顔立ちで、男の顔には、額から左顎にかけて大きな刀傷がある。

堅気の間人ならば誰も声をかけないような男に、青年は動じることもなく尋ねる。

「旅の連れを探しているのですが、この辺りでヘルメットをかぶった少年と、カーキ色のバンダナをした少年を見かけませんでしたか？」

「見てねえな」

「そうですか……。ありがとうございます」

青年は丁寧に一礼すると、踵を返した。

「おい」

歩き出そうとした所で、男に呼び止められる。青年は肩越しにふり返った。

「 なにか? 」

問うと同時に、青年は目を細めた。それまで人畜無害そうだった蒼の眼差しに、鋭さが混じる。男が薄く笑い、青年が担いでいる白筒を顎でしゃくつた。

「お前、この辺りじゃ見ない顔だが。傭兵かなにかか? 」

男は尋ねた。

戦乱の中、二十歳そこそこの青年が、武器を持ち歩くのは珍しくない。だが、この青年のように自分の得物をわざわざ筒に入れる者はいない。

(恐らく、こいつは相当腕が立つ)

男は青年の拳動を観察しながら、思った。

筒に入れているのは、相手の目を欺くためではない。己の力をセーブするためだ。

男の質問に青年は答えず、代わりに、男の背にある三メートルの大剣を見た。

わずかな沈黙を置き、青年は微笑^{わら}う。

「そういう貴方は、腕利き傭兵とお見受けしますが? 」

男 アリユーゼはにやりと嗤った。アリユーゼは、防御性の高

い鎧を好まず、限界まで鍛え上げた己の肉体だけで戦う熟練の戦士なのだ。その虎のようなアリューゼの眼差しに、青年は興味を引かれる。

一瞬奥に引つ込んだ鋭い眼差しが、また表に現れる。

アリューゼが言った。

「試してみるか？」

「上等」

青年は短く頷くと、白筒を地面に置いた。

その時。

「おお〜い！」

「アレン兄ちゃ〜ん！」

大通りから、二人の少年が駆けてきた。青年が言った通り、一人は大きめのヘルメットを被った七、八歳くらいの少年。もう一人はカーキ色のバンダナをした十歳くらいのつり目の少年だ。

「ロジャー、ルシオ！」

白筒を置いた青年が、二人の少年をふり返る。青年は、アレンという名だ。

アリューゼが大剣にかけた手を止め、片眉をつり上げる。

「……どうやら、連れがきたようだな」

「ええ」

「どうする？ 続けるか？」

好戦的に笑って誘われ、アレンは名残惜しさを感じながらも、首を横にふった。

「申し訳ない。先に、彼等と飯を食べる約束なんです。……手合わせは、次の機会に願いたい」

アレンの言葉に、アリュージェは鼻を鳴らす。大剣から完全に手を離れた。

「まあいい。俺はこの先の青い屋根の家にいる。仕事がなけりゃ、テメエとやり合う機会もあるだろ」

「……ありがとう」

アレンは微笑うと、アリュージェに一礼してその場を去った。

「……………」

アリュージェは顎に手をやる。金にもならない野試合を、自ら望んだことが珍しかった。

それも、弟分のロウファと同じ年嵩の男に。

アリュージェは踵を返すと、目の前にある自宅へと入って行った。

「お帰りなさい、兄さん」

一軒屋にしては小さめの、青い屋根の家がアリユーゼの自宅だ。小さいといっても、このアルトリアで一軒家を持つとなれば、それなりの財がある。特に弟のロイは足が悪く、日がな一日、カンバスに向かつて絵を描いているような男なので、狭いのは逆に好都合だった。

「あ、怪我はない？」

絵筆を置いて立ち上がるつとめるロイを、アリユーゼは視線で制した。

「いいから座ってる」

そうやって古びた木製のテーブルに、アリユーゼは金貨袋を置く。金貨袋はテーブルに当たると、がしゃりと重い音を立てた。アルトリア山岳地帯に現れたハルピユイア討伐の報奨金だ。その隣に、アリユーゼはまた無造作に頭のない銅像を添えた。

「兄さん、それは？」

ロイはカンバスに向き直りかけて、その首から上のない銅像を見咎めた。アリユーゼは殊更に溜息を吐くと、大きな体を揺すって両手を広げる。

「お偉いさんがくれたのさ。戦いで最も人を殺した奴に渡すもんなんだとよ」

「……………」

アリユーゼの物言いに引っかかるものを感じたのか、ロイは哀しげに目を伏せた。

「なあロイ。物を作ってなにが楽しいんだ？」

アリユーゼは弟の機微を感じ取らず、適当に椅子を引くと、そこに座って、ロイの絵を覗きこんだ。相変わらず、今日も窓から見える景色だけを描いている。退屈な絵だ。そう思いながら椅子を揺ると、アリユーゼの重みで床がぎしぎしと軋んだ。

「つまらないと感じるのは、兄さんが満たされているからだよ……。僕なんか体が不自由だし、絵を描くことで満たされるような気がするから」

ロイはハッと口を噤んだ。

「ごめん。兄さんが戦っているのは僕のためなのに」

「夕方まで寝る。客が来たら起こせ」

陰鬱に視線を落とす弟を置いて、アリユーゼはぶっきらぼうに言い放つ。弟が窓から見える景色以外を描かないのは、それ以外の景色を見たことがないから。

だが、それを知っていたとて金がなければ首が回らない。

アリユーゼはいつものように弟を適当な所で突き離すと、のそりと熊のように自室に引っ込んで行った。

「……………」

そのアリユーズの横顔が、なぜか嬉しそうで、
珍しく上機嫌な兄に、ロイは不思議そうに首を傾げた。

××××

カランツ！ カランカラン……ッ、

上質な大理石の床に、ルビーをあしらった黄金の杖が横たわる。
それを拾い上げ、アルトリアの重臣・ロンベルトは眉根を寄せた。

「姫。いずれは民の指導者となられる御身でありながら、杖に八つ
当たりとはいささか見苦しゅうございますぞ」

頭に白いモノが混じり始めた五十絡みの男は、眼鏡の奥にある理
知的な眼差しを、部屋の主に向けた。

アルトリア王国第一王女、ジェラード。

彼女は、見事な飴色の金髪に陶器のような白皙をしている。唇は
桜色で、目が大きく、睫毛も長い。まるで神に愛されたような“
美姫”だ。これで「口を開かねば傍に置きたい」という陰口さえな
ければ、完璧なアルトリア王女として、ジェラードは社交界に華々
しくデビューしたことだろう。

ジェラードは、今年で十四歳になるアルトリア第一王位継承者だ
った。彼女はあどけなさの残る愛らしい面持ちを真っ赤にして、大
臣のロンベルトを怒鳴りつけた。

「黙りなさいロンベルト！ 妾はこれほどの辱めを受けて黙っていただけるほど腰抜けではないわ！」

ジェラードが顔を俯けると、縦ロールにした金髪が、彼女の肩にこぼれる。

「たかが傭兵風情が！ 妾を甘く見たらどうなるか」

「ジェラード姫！」

鋭いロンベルトの一喝が、ジェラードの動きを止める。

ロンベルトは銀縁眼鏡をゆっくりと押し上げると、やや冷たさを感じさせる灰色の目で、ジェラードを見据えた。

「この件に關しましては、姫はなんもお考えなさらぬように。全ては私めにお任せ下さい」

「……………」

ジェラードの沈黙を肯定と取ったのか。

ロンベルトは拾った杖をジェラードに持たせて、さっさと部屋を出て行った。事務的な男だ。いつ会っても、あの男はジェラードに小言しか言わない。

その背を見送って、ジェラードは忌々しげに杖を投げつけた。ロンベルトが去って行った、扉に向かって。

所詮、そなたも、父を真に案じてはおらぬ癖に！

ジェラードの心の奥に秘められた怒りは、どこに届くこともない。投げつけた杖が扉にぶつかって、また床に転がるだけだった。

「この度はそなたらの活躍によって蛮族を退けることができた。心から礼を申すぞ」

アルトリア山岳地帯に発生したハルピュイア討伐隊に向けて、王は大仰とした態度で言った。紅の絨毯に平伏した騎士たちが、神妙な面持ちで王の言葉を聞いている。

王はそれらをぐるりと見渡して、騎士の最後尾に控えた、甲冑すら着けていない男を目に止めた。

「して、その中において最も功多き者、アリユーゼよ」

「はっ」

「そなたには報奨金と彫像を授けよう」

アルトリア最強の傭兵、アリユーゼ。

大陸において、この男の持っている肩書は決して安くはない。

だが、王と謁見する今においても、アリユーゼはまったく正装しない。平民用の甲冑に袖を通す気がまったくくないのだ。

王は、手にした報奨金と彫像を受け取りにくるアリユーゼを、内心舌打ちして迎えた。

（傭兵風情が……。貴様も蛮族と変わらぬクセに）

豪華なアルトリア城において、アリユーゼの肩当てとガントレットのみという軽装は、酷く浮く。

「ありがたき幸せ。身分を問わぬ広き心遣い、感謝いたします」

アリューゼは、服装でアルトリアの仕来たりをまったく無視しながらも、丁寧に報奨金と彫像を受け取った。それを意外そうに王が見ていると、整列した騎士たちが歓声を上げる。

アルトリア万歳の斉唱である。

(取り繕いやがって)

騎士たちの声を背景に、アリューゼは小さく鼻を鳴らした。

(この像はまるで“欺瞞の像”だな)

軍事大国ヴィルノアと宗教大国クレルモンフェランの全面戦争は近い。そんな情勢下で、たかがハルピユイア一体を倒すのに、八人がかりのアルトリア騎士団が、喜び勇んでアルトリア万歳を斉唱している。

自分のような 金さえ貰えば、どこに鞍替えするとも分からない傭兵を讃えて。

まさに馬鹿騒ぎだ。

(それで、アルトリア万歳だと?)

アリューゼは虚しさすら覚え、歓声を？き消すように腹の底から笑い出した。

「ははは……！ 悲しいな、王よ」

高らかに叫ぶと、騎士たちの万歳斉唱が一瞬で消えた。

凍りついた空気の中、王が面を食らった様子で瞬いている。

「なっ、なにを……」

その間拔けな顔を嘲笑混じりに見据えて、アリューゼは背中の大剣に手をかけた。

「俺はこんな茶番に付き合うほど暇じゃあない！　この彫像はまるで、あんたを象った物のようだな」

アリューゼは手にした彫像に向かって、剣をふるった。数十センチ先にいる王の目の前で、三メートル近い大剣を。

「！」

「父上！」

隣に控えていた王女が、咄嗟に庇う。凶悪な大剣は玉座のすぐ脇を通り過ぎ、アルトリア王を模った彫像の首から上を砕いた。

「俺はこんな物には興味がないんだ」

血の気の失せた顔でこちらを凝視する王に言い放つと、アリューゼは踵を返した。

「無礼者！　父王の心遣いを無視した暴言！　万死に値するぞ！」

ぱくぱくと、酸欠の金魚のように固まっている王の隣で、王女が鋭く怒号を上げる。だがアリューゼは構わず、凍りついたように動かない兵士たちの間を歩いて行く。

悠然と、

山野を支配する野生の獣の如く。

「その者を捕らえよ！」

王女の気丈な、甲高い声。

だが騎士たちは誰も動かず、結局アリュージェはそのまま謁見の間を後にした。

丁寧に、両開きの扉まで閉めて。

「なにをしている！」

王女ジェラードに共感する者は、誰ひとりとして存在しなかった。

.....

「あの無礼な男に一泡吹かせる方法はないものか」

軽い追想を終えて、私室の机を指で叩いていたジェラードは考えをめぐらせた。

“やはり、城内にいる人間はいまひとつ信用が置けない。”

アルトリアは、王を国主とした絶対王政である。地方領主に対して絶大な力を持ち、常備軍を置くことにより質の高い兵士を育成している。

だが、指導力の弱い者が王になると、国の中枢を担う大臣たちが権力闘争を繰り返し、実権を握って、王を傀儡とするケースが少な

くない。歴史上は封建制を廃すことで、地方領主の権力を削ぎ、王こそが絶対無二の権力の象徴、として捉えられているが、なんのことはない。

封建制から絶対王政となった今では、昔に地方領主として幅を利かせていた貴族たちが、王の文官や武官として中央国政に潜り込んでき、新たな甘い蜜を吸おうと躍起になっているだけの話であった。ジェラードは十四歳にしてその辺りの世情を読んでいたがために、重臣の誰の言葉も信じていない。

これはジェラードの知性と言うよりも、彼女自身の勘である。この城で、唯一信じていいのは、父王だけ。

(それを　！)

無礼な傭兵の顔を思い出して、ジェラードの頭に血が上った。なんとかギャフンと言わせてやりたい。その一心で作戦を考える。

「例えば　」

自らの手で、どうにかあの男に“ギャフン”と。ジェラードは机を叩く指を止めて、ハッと顔を上げた。

「そっじゃ　」

無邪気に笑った王女は、にんまりと口端をつり上げた。黄昏色に染まる、空を見上げて……。

2 アリユーゼ編 青いリボン帽子のアンジェラ

アリユーゼが帰宅してから一夜明けた。正午にはまだ時間があるが、もう朝とも言えない時間帯。

ロイはカンバスから、椅子に座ったまま動かないアリユーゼを覗き込んだ。

「兄さんが家でゆっくりしてるのって、久しぶりじゃない？」

「まあな……」

大剣は部屋に置いている。あれから、アレンが腕試しにくるのを待っているのだが、戸を叩く気配は一向になかった。

久しぶりに、息の良い剣士を見つけたと思ったが。
アリユーゼは溜息を吐くと、テーブルに突っ伏した。

こんこんっ、

そんなときだ。

家の戸がノックされ、ロイが立ち上がるうとする。の、アリユーゼが制した。

「いいから座ってろ」

言いながら、アリユーゼは好戦的な笑みを浮かべる。それも、戸を開けてノックした主を見るまでのわずかな間だった。

「な、なんか用か？」

きよとんと瞬いて、アリユーゼが言い淀んだのも無理はない。戸を叩いたのは、子供といつても指し障りのない、小柄な少女だった。「アリユーゼ殿じゃな？ いや、ですね？」

年は十四歳くらいだろうか。少女は美貌に似合わない大きめの眼鏡を押し上げ、アリユーゼを振り仰いだ。

大き過ぎる青いリボンのついた帽子が、少女の顔を半分以上覆っている。特に長身のアリユーゼからすれば、小柄な少女はほぼ帽子以外見えない。だが、彼女は顔を隠すための“へんそう”帽子を惜しみなく押し上げ、見るからに怪しい眼鏡の奥から、挑戦的な眼差しを向けている。気の強そうな、整った顔立ちの少女だ。ただし、二言目には“おてんば”という言葉が似合う。

得意顔の少女は 残念ながら少しも自分が怪しいとは気付いていない様子で 腰に手を据えた。アリユーゼはなんとも言えない表情だった。

「ああ。そうだが」

言葉を濁しながらも頷くと、少女はアリユーゼの反応に満足そうに頷き、人差し指を立てた。

「妾は、いや、私は、ジエラー……」

「ジエラー？」

「いいいい、いや！ ……ジエラ、……」

少女は視線をさ迷わせ、 一つ、頷いた。

「アンジェラと申します」

どうだ、といわんばかりに、胸を張る少女。

アリユーゼが返したのは当然、不審そうな眼差しだ。

「……………」

「……………」

沈黙。

アリユーゼはボリボリと黒い頭を掻き、溜息を吐いた。

「で、そのアンジェラお嬢さんがなんの用なんだ？」

「あの……仕事の依頼をしたいんです」

「……………マジか？」

少女に最も不釣り合いな単語を聞いて、アリユーゼは目を丸めた。部屋の奥から、ロイが笑いをこらえながら言ってくる。

「暇なんですよ。相手してあげれば？」

「……………」

アリユーゼは黙って額を叩き、苦々しい表情で“アンジェラ”と名乗る少女を見た。

「で、どこに行くんだ？」

ともかく自宅を出たアリユーゼは、今後の段取りについてアンジエラに問いかけた。

「まず、どこかお店に入りましょう。いい所はありませんか？」

「じゃあ、どこか適当に入るか」

そう言ってアリユーゼが選んだのは、本当に適当に決めただけの自宅にほど近い倭国料理店である。

「ご注文はなにに致しましょう」

倭国衣装を着こなしたアルトリア人が、恭しく尋ねてくる。アリユーゼは見たことも聞いたこともないメニューを見つめて、早くも諸手を挙げた。

（ぜんっぜんわからん）

文字はすべてアルトリア語であったが、料理の想像がまったく付かない。諦めて、アンジエラと同じ物を頼むことにすると、向かいに座ったアンジエラが、ウェイトレスに言った。

「もし」

「はい」

ウェイトレスが伝票を構える。
アンジェラはメニューを握りしめた。

「え〜と、これとこれとこれと」

「お飲み物は……」

「え〜と、これとこれと」

眉間に皺を刻みながら、アンジェラがメニューを上から順に読み上げている。アリユーゼはたまらず、倭国料理店のテーブルを叩きつけた。

「おいつ！ それ全部食うつもりか?!」

「全部？ 食べ切れなければ残せばいいではないか」

「……………」

え、と口の中でつぶやいたのも束の間。アリユーゼは目を見開いた。
小市民とは感覚が違うのだ。

(どこの貴族様だ……)

アリユーゼは、ぴしゃりと額を打った。その間に、ウェイトレスが淡々と注文を取り、去っていく。それを呼び止める気も起こらず、アリユーゼは椅子に座り直した。

「それじゃあ、依頼の内容でも話してくれないか」

「食事しながらでもいいんじゃないですか？」

澄ました顔で言うアンジェラは、見たこともない倭国料理に興味を引かれたのか。嬉しそうに厨房を見つめていた。

……………

「係の者を呼べ！」

「は？」

平和だったのも数分だ。アンジェラは料理がテーブルに運ばれてくるなり、血相を変えて立ちあがった。

呼び止められたウエイトレスが、不思議そうに目を丸くする。

「係りの者を呼べと言っておろう！」

構わず怒鳴り立てるアンジェラに、ウエイトレスはそそくさと奥に引っ込んだ。

「おろうって……、王様じゃないんだから……」

感覚が違うにも程がある！　と言いたかったが、やめた。胸中で洩れ出た溜息は、半ば以上悲鳴だ。周りの客が、興味深そうにアリュージェたちを窺っている。アリュージェは頭を抱えた。

「なにかご不満でも？」

アンジェラに呼び出され、料理長と思しき男が奥からやってきた。気難しそうな職人肌の男。見慣れない倭国衣装に身を包み、厳格そうな瞳が、じろりとアンジェラを見る。

しかしアンジェラは気圧されず、その男を見るなり怒鳴りつけた。

「不満もクソもあるか！ なんだこの肉は？ 生であろう！」

「お客様……。それは倭国料理の一つでお刺身といって……」

不審そうに眉を寄せる料理長に最後まで言わず、アンジェラはテーブルの上に置かれた椀を指さした。

「なんだこの濁ったスープは！ おまけに臭い！ 腐っているぞ！」

「お客様……。それは倭国料理の一つで、お味噌汁といって……」

やはりそれも最後まで言わず、アンジェラはテーブルを叩いて、居並ぶ皿の中でも、一際大きい皿を指差した。

「なんだこれは！ これは怪物であろう！ ここではクラーケンの子を食わせるのか?!」

「お客様……。それはタコと聞いて……」

「ここはゲテモノ屋か？」

「とんでもないません」

気色ばむアンジェラに、料理長はきつぱりと答えた。

不毛だ。

それも途方もなく。

アリュージェはもつどこをどう修正すればいいのか分からず、ただ人目を忍ぶようにテーブルに突っ伏した。

「……妾はこんな屈辱を受けたのは初めてじゃ」

アンジェラが、拳を震わせて料理長を睨みつける。それはいいが、

(……妾?)

そんな言葉を使う人間が、このアルトリアには少数であることをアリュージェは知っていた。どこかの貴族令嬢と想っていたが、“妾”と言っているのは王族関係者だけだ。

そんなアリュージェの疑問を払拭するように、隣のテーブルから、ばんっ、と大きな音を立てて少年が立ち上がった。

「やいやい！ このワガママ娘！」

見た目、7、8歳ほどの、変わったヘルメットを被った少年だ。

昨日、通りで見かけた少年。

(確か……ロジャー、……だったか?)

アリュージェが首をひねりながら思い出していると、当のロジャーは凄まじい剣幕でアンジェラに歩み寄り、全身で怒りを表すように、ぴょんぴょんと二度ほど跳ねた。

「黙って大人しく聞いてりゃ、さつきから一口も食べずにケチ付けやがって！ 食い物を粗末にすんのは、人を騙す次にやつちやいけないことなんだぞ！ 父ちゃんも言ってたんだ！ メラ間違いねえじゃんか！」

「な、なんじゃお前は！？ 小汚い小僧が、偉そうに」

言いかけた所で、アンジェラはぎよつと目を見開いた。

自分の腰にも満たない、小さな下民の少年が、タヌキの耳と尻尾を、ふりふりと優雅に振っていたのだ。

「し、し……っ！??」

アンジェラは息を吸い込んだ。驚き過ぎて、尻尾という言葉が発せられない。代わりに、アリューゼが、驚いた顔でロジャーを見た。

「お前……、一体……！」

昨日は気付かなかった少年の特徴だ。アリューゼも、エルフという種族の存在は聞いたことがある。傭兵をやってきた所為もあって、少年のように人間の部品を一部持った魔物にも、何度か会ったことはある。

が。

この少年のように、どこにも害がなさそうな魔物とも人間とも言えない生物と会ったのは、初めてのことだった。

「オイラ？ オイラは、ロジャー！ ロジャー様だ！ 団長なんだぞ、偉いんだぞ！」

得意げに両腕を組んで、ふふんと鼻を鳴らすロジャーを、彼と同

じテーブルに居るもう一人の少年が制した。

「おい、バカダヌキ！ 浮いてんのが分かんねえのか！ この大馬鹿！」

ロジャーという少年と同じく　こちらは黒猫の尻尾と耳を持った、ロジャーより少し背の高い少年・ルシオだ。

「し、しっぱ……、みみ……」

茫然自失といった様子でつぶやくアンジェラに、ロジャーとルシオは、ん？ と首を傾げながら彼女を見上げた。

「どうした？ 姉ちゃん、どっか気分でも悪いのか？」

「医者呼んだ方がいいか？ バカダヌキにバカ移されると、もう治んねえぜ。アンタ」

「んだとお！ このアホネコ！」

「やんのか、バカダヌキ！」

ぐうう、と迫力のない唸りを上げる二人の少年は、額のくっつく至近距離で互いを睨み合った。

「二人とも」

案の定、あの金髪の青年が二人を押し止めた。
アリユーズは改めて青年を観察したが、彼に動物の尻尾や耳はな

い。こちらは、完全に人間のようだ。

「よお」

アリユーゼがにやりと笑うと、青年 アレンも挑戦的に笑い返した。

「どうも。昨日ぶりですね」

何事もなく答えるアレンに、アリユーゼは鼻を鳴らす。

「なんだ。やり合ってたのは昨日きりの話かと思ったが……、まだ闘志は衰えてないようだな」

今にも白筒から得物を抜きそうなアレンを揶揄すると、アレンは視線をアリユーゼから向かいに座っている少女に向けた。

「それで、そっちは？」

触れてほしくない所を。

胸中でつぶやきながら、アリユーゼもアンジェラに視線を移す。

「ええい。喉が渴いた！」

テーブルのグラスを手に取ったアンジェラが、やや自暴自棄で一気にそれを飲み干した。

途端、

「げほっげほっ!?!」

目を白黒させながら、アンジェラがすぐに吐き出す。

「げほっ、げほっ……なんだこの水は!? 毒を盛って殺すつもりか!? こんなことをして……どうなるか……」

アンジェラの顔がみるみる紅潮していく。彼女の可愛らしい顔が振り子のように揺れ、そして

「万死に、値、するぞおっ!」

全身の力が抜け落ちたように、アンジェラはばたきと倒れた。

「お、おい!? 姉ちゃん!」

「大丈夫かよ!? アンタ!」

亜人の少年二人に続いて、向かいの席からアレンが立ち上がる。アリュューゼは呆れた表情で、ちらりとアンジェラのコップを見た。

「それ、酒……」

彼が言い終わる間に、アンジェラは意識を手放したようだった。アレンが少女に駆け寄り、なにがしらの魔術方陣を展開する。青白い光が、すう、と少女に降り注ぐ。

「急激にアルコールを摂取して、意識が混濁しています。毒性は抜いたので心配ありませんが、しばらくはこのままで」

アレンはゆっくりと少女を横たえた。どうやら、アンジェラは眠ったようだ。

アリユーゼはため息を吐いて、

「世話をかけたな」

言っと、対峙したアレンが小さく、いえ、と苦笑する。それを尻目に、アリユーゼはアンジェラを背負って席を立った。

「悪いが、勝負は……またお預けだ」

「お大事に」

「ああ」

と。

「お会計をお願いいたします」

ウェイトレスが差し出した紙片を見て、アリユーゼは目を見開いた。度肝を抜いたのは、その金額。いつもアリユーゼが通う酒場なら、三度は気持ちよくなれる超高額だ。

「っ、っっ」

険しく表情をしかめながらも、アリユーゼは財布を引っ張り出す。札を数えた。

「なあ、兄ちゃん」

アリユーゼの後ろで、ロジャーが猫なで声を上げた。

「この料理……、食っちゃダメかあ？」

結局、一口もつけずに並べられた倭国料理。それをモノ欲しげに見つめているロジャーに、アリユーゼは小さく肩をすくめた。

「好きにしる。どうせ捨てた金だ」

半ば自暴自棄で、財布ごと給仕の娘に渡すような心境で金を取り出すと、アリユーゼは乾いた失笑を残して店を出ていった。彼の後ろでロジャーが、あんがとな！ と、店の外まで聞こえる声で礼を返してきたが、アリユーゼに答える元気は残っていなかった。

倭国料理店から自宅に戻ったアリユーゼは、アンジェラをベッドに寝かしつけた。

ロイも興味を引かれたのか、珍しくアリユーゼの部屋に入ってきた。

「それで、結局は内容は聞けず仕舞いだったの？」

「……まあな」

アリユーゼは椅子に腰掛け、アンジェラの顔を眺めながら先程のことを思い起こした。

まったく、とんだ災難である。

軽くなった財布が、ポケットの中で存在を主張している気さえする。

「う、うん……」

と、

ベッドに眠った少女が、寝苦しそうに眉間にしわを寄せ、寝返りを打った。

「いい気なもんだぜ」

アリユーゼは溜息を吐くと、台所で水を呑もうと席を立った。そのときだ。

彼女の目許を覆っていた、やけに似合わない丸眼鏡と帽子がずり落ちた。輝くような白皙の美貌が、アリユーゼの眼に入る。

アリユーゼは思わず目を瞠った。あまりの事態に、一瞬思考が凍る。

「じえ、ジェラード、王女!？」

「一体どうということなの?」

同じく、驚いた様子のロイが、訝しげに眉を寄せて問ってくる。

アリユーゼは首を振った。

「さあな。変装してまで俺に仕事を依頼する理由なんて、わからねえよ」

率直な感想だった。

だが、目の前で眠る王女は、間違いなくアルトリア王女であり

謁見の間での、あの勝ち気そうな風貌がアリュージェの脳裡に蘇る。

一体どういうことなのか。

問い正そうにも、ジェラードが目覚める気配は一向になく。

ロイもしばらく部屋で様子を見ていたものの、結局、首を捻りながら居間へと引き揚げていった。

.....

.....

「うん……」

昼食ついでに倭国料理店に赴いたというのに、王女は夕方になっても目を覚まさなかった。眉間にしわを寄せて、寝言ともつかない譫言をつぶやいている。

「……つたく、」

平和そうな彼女の顔を見据えて、アリュージェはやれやれとため息を吐いた。いろいろ考えてみたが、王女と接点を持ったことは今までに一度もない。

この少女が一体なにを考えているというのか。

何度逡巡しても、答えは出ない。
と。

「……ちま」

「ん？ 寝言か」

ふと寝息を立てていた王女が、なに言かつぶやいた。それが言葉のように聞こえて、アリュージェは耳をそばだてる。

「お父、さま……」

「……………」

王女の眉間に寄ったしわを見据えて、アリュージェは表情を改めた。お父様 アルトリア国王の顔を、なんとはなしに思い出す。

王の印象も、アリュージェの中では薄い。弱小国の主に相応しい、冴えない男だと思った。

そこで更に、王女の顔が歪んだ。

「侮辱した、アリュージェ、万死に値、する、ぞ」

むむむ、と唸りながら。王女はベッドの中で身を小さくする。

アリュージェは笑った。失笑、とっていい。

「そうか、そうだったな」

一向に繋がらなかった点と点が、ピン、と一本の線になった気がした。

アリュージェはつぶやきながら、王女の眠るベッドに歩み寄り、腰掛けた。

俺はあのとき、娘の目の前で父をこき下ろしたんだ。

もちろん、そんなつもりはなかった。

俺は国王としてのふがいなさを指摘したのだから。

自分が間違っているとは思っていない。

だが

娘にとって父はやはり父なんだ。

親をバカにされて黙っていられる子供が、いるわけがない。

.....

.....

「ここは？ もう夕方ではないか！」

部屋の小窓から空を見上げて、王女は悲鳴に近い声で叫んだ。
アリユーゼは自室の椅子に腰かけたまま、小さく頷く。

「ああ

「もう帰らないと、あ、依頼は明日でいいか？ いや、いいですか？」

「ああ

慌てる王女に反して、アリユーゼは淡泊なものだった。

王女は、まだ変装に気付かれていないと思っている。

謝るなら　そうタイミングを窺うアリユーゼに反して、王女は
居住いを直すなり転がるように部屋から走り去って行った。

慌ただしく閉められたドアと、あの目立つ青いリボンの帽子を思
い出して、アリユーゼは小さく溜息を吐いた。

「依頼、ね。まあ、父親の仕返しってことなんだろうが……」

自分にとっては、忘れ去ってしまえるほどの小さな出来事。

だが、

王女にとっては、城を抜け出してまで達成せねばならない、不倶戴天の出来事だ。

アリユーゼは、王女が見上げたように小窓から夕暮れを見上げて、ぼつりとつぶやいた。

「明日会ったら、謝ってみてもいいか」

少なくとも、王女の身でありながらここまで無茶をした返礼として。

3 アリユーゼ編 不審な積荷

だが、翌日になっても、アンジェラがアリユーゼの家の戸を叩くことはなかった。

「お姫様、来ないね」

「ああ」

ロイは絵を描く手を止めて、後ろをふり返った。見慣れた窓の景色から あまり見慣れない、兄のだらりとした姿を見る。

アリユーゼは居間の椅子に座って、ぼんやりとロイが絵を描く様を眺めていた。

あまりに“らしからぬ姿”に、ロイは溜息を吐く。絵筆をカンバスに置き、向き直った。

「でも、冷静に考えると城から抜け出すのって、本当は難しいんじゃない？」

「ああ」

「お姫様が何度も抜け出したら臣下の首も飛ぶだろうし」

「ああ」

「うわの空、か」

まともに会話を続けようにも、アリユーゼはロイの絵 正確には、カンバスの“ある方向”を見ているだけだ。

アリユーゼとロイは、絵に描いたような仲の良い兄弟ではない。だがそれを差し置いても今日は、兄とコミュニケーションを取るのには難しそうだった。

ロイはもう一度溜息を吐くと、キャンバスに筆を走らせた。

それから、しばらく。

家の戸が叩かれた。

「兄さん、お客さんだよ」

自室に引つ込んだアリユーゼに向けて、ロイが声をかけて来る。

慌てる風もなく、アリユーゼが戸に向かうと、そこに黒いフードをかぶった女が立っていた。青いリボンのアンジェラとは、雰囲気からして違う。“こちら側”の女が。

「あなたにお話が……」

「……………」

アリユーゼは無言のまま、女を奥に通した。

「仕事の依頼？」

「ああ」

女が家を去ったのを見届けてから、ロイが尋ねてきた。眉間にしわを寄せ、ロイが顔をのぞきこんでくる。

「受けたの？」

「明日の朝からまたしばらく家を空けることになるな」

「お姫様の方はどうするの？」

「破談、だろうな」

こともなく言うアリュージェに、ロイの心配そうな視線が注がれていた。

「こりや驚いたぜ。もう一人の相棒ってのはあんたかい」

女が指定した街道に向かうと、青いバンダナをした品のない男が立っていた。

年嵩は四十絡み。傭兵やギルドに属する者ならば一度は聞いたことのある“バドラック”という名の、悪名高い盗賊だ。

本人は一匹狼を気取っているようだが、善人悪人を問わずに食い物にする彼のやり口は、特に、裏稼業の人間にすこぶる嫌われていた。

「……………」

「そう構えんなよ。俺はバドラック。よろしくな、アリュージェさんよ。御高名はよく耳にしていますぜ」

バドラックはにやにやと口端を緩めながら言った。なにも知らな

い者が見れば、人好きそうな男だ。

アリユーゼは鼻を鳴らすと、バドラックが差し伸べた手を一瞥だけして、握り返さなかった。

人好きそうな男の眼には 相手を貶めることに長けた者の、欺瞞の嘲笑が混じっている。

「無駄話は道すがらでしてくれろ？ 今は一刻も早くこの荷を届けなければいけないのよ」

「へいへい」

依頼主の女に言われ、バドラックは所在のなくなった手を引っ込め、肩をすくめた。

女が用意した荷馬車は、上等な二頭立ての四輪馬車だった。馬の毛並みも上質で、女の裏にいる依頼主の資産性を窺わせる。

「……………」

金持ちが一体どのような道楽で、この荷を運ぶのかは知らないが、アリユーゼは鼻を鳴らして馬の尻を叩いた。

得体の知れない、積み荷を載せて。

結局。

倭国料理店でアリユーゼたちが残していった料理を、すべて胃に納めたロジャーとルシオは、その小さな体に詰めるだけ食べ物詰め込んだ所為で、宿で身動きが取れなくなっていた。

「胃薬を買ってくるから、大人しくしている。二人とも」

身支度を整え、部屋のドアノブに手をかけながら、アレンはふり返る。今日は元気がなさそうな狸と猫の尻尾がゆらゆらと揺れ、返事をするように布団の中に引っ込んでいった。

その様に苦笑して。

アレンは二メートル強の筒を背に担ぐと、改めて部屋を出た。

「くっそお〜……。なんでだ〜！ 兄ちゃんだって、あの料理の凄まじい量を食べたハズなのにい〜……」

「は、は……ん！ バカ、ダヌキめ！ アレン、さ、は……俺たち……とは、ひと味、もふた味も違えんだよ！ ……バ〜カ！ ぐううっ……」

「んだと！ このアホ……っ、うっ！ 力むと腹が……！」

布団の中に丸まって呻くロジャーを嘲笑おうとして、思わず腹に力を込めたルシオも、蒼い顔で布団に包まった。

昨日は宿のトイレをどちらが使用するかで揉めたが、今日はその元気もない。

ロジャーは心底困り果てた顔で、うう、と唸りながらつぶやいた。

「兄ちゃん……！ 早く帰って来〜い……！」

アレンが宿を出ると、ちょうど王城から騎乗した兵たちが、凄まじい速度で街路を駆けていった。

「？」

なにかあったのだろうか、と首を傾げながら街の商店街を南に歩く。大通りに面した路を歩いていると、質素だが平和そうな顔の人たちが、何人か見受けられた。

「すみません」

その内の適当な人物に話しかける。ふり返ったのは、四十がらみの無精ひげの生えた男だ。

「この辺りに薬局はありませんか？ 薬を買いたいのですが」

「病気かなにかかい？」

男はアレンを他所者と見るや、どこか面倒くさそうな渋面を作って問い返してきた。

「いえ、連れが腹痛を起こしたもので。下剤など手に入りませんか？」

「その小径を右に曲がれば、すぐに薬局だ」

「ありがとうございます」

几帳面に一礼して、アレンは踵を返す。
と。

ふと、アレンは思い出したように男をふり返った。

「もうすぐ、戦でも始まるんですか？」

先ほどの騎士団の慌て様が、微妙に引つかかったのだ。歩き始めた男が、不思議そうにアレンをふり返る。

「ヴィルノアが勢力を伸ばしてきてるって話だからな。まあ、あの慌てぶりからすると、なにか事件でもあったんじゃないかい？」

そう言い置いて、すぐ去っていく男の背を見送りながら、アレンは騎士団が駆け抜けた街路を見た。

「事件……」

つぶやくと、昨日倭国料理店で出会った男を思い出した。左目に刀傷を負った、鎧の男を。

アレンはハッと瞬き、視線を伏せて小さく苦笑した。

「……悪い癖だな」

血が疼く。あの男の、強い眼差しと視線が合ったそのときから。自分の身長より長い相棒の入った筒を、アレンは強く握り締める。湧き立つような衝動を抑えるが、意に反して口許に浮かんだのは、好戦的な笑みだった。踵を返す。

馬の速さについていくのは、なかなか骨の折れる作業だ。が、幸いと、小型解析器クオットドスキャナーを使えば騎士団の座標が特定出来る。

だから。

「行くか」

アレンはつぶやくなり、アルトリアの街路を風のように疾駆した。

ヴィルノアまでは約一週間の道のりだった。
旅は順調で、三日目には全行程の半分を踏破することができた。

「こんな仕事でたんまり金がもらえるんだから、たまんねエゼ。なあ、相棒」

馴れ馴れしく話しかけてくるバドラックを、アリュージェは長い道中、一度も相手にはしなかった。

傭兵とは、戦場で輝けばそれでいい。

ましてや、ハイエナのように強者に媚びへつらうバドラックの態度が、アリュージェには気に入らなかったのだ。

「……………」

黙々と馬車を走らせるアリュージェに、会話は不可能と悟ったのか。バドラックは溜息を吐くなり、荷台にどっかりと背をもたれさせた。

「まったく、ロンベルト様々だぜ」

吐き捨てるように言いながら、両腕を頭の後ろで組む。

ロンベルト。

アルトリアの重臣の名前を聞いて、アリュージェは、はた、と瞬いた。

「ロンベルト？ アルトリアの重臣の？ あの女が依頼主じゃないのか？」

女は“こちら側”の人間だ。見れば分かった。

しかし、ロンベルトと聞いてアリューゼが連想したのは 青いリボンの帽子の少女。

関連性のない二つの事象に、バドラックは戸惑うこともなく、にやりと笑った。

「なんだ、そんなことも」

初めて、アリューゼが反応を返した。そのことに満足して、バドラックが答えようとしたとき。

ふと、彼の耳に異音が届いた。
馬車を止めてみる。

「おい相棒。後ろからなにか迫ってくるぜ」

「なんだと？」

言われて、アリューゼも耳をそばだてた。

確かに。

なにかが それも複数の蹄の音が、猛スピードでこちらに向かってくる。

バドラックは荷台から覗きこむようにして、後ろの様子を見やっ
た。

「ありゃ、騎兵だぜ！ しかもあんなに！」

「騎兵？」

首を傾げるアリューゼに対して、バドラックはなにかしらの危機を感じたようだった。

慌てて手綱を叩くが、あっという間に騎兵に追いつかれる。

そのときになって初めて、アリューゼはアルトリア騎兵の銀の甲冑を視認した。

なにかを追っている様子だったが、それがまさか俺たちだったとは……。

今にして思えば、このとき、疑問を抱くべきだったのだろう。

自分の愚鈍さと、

周りの目まぐるしい状況の変化に。

「アルトリア国王の命だ。至急、荷物を確認させてもらおう」

「おい、待てよ！」

一団を先導していた部隊長は、バドラックの制止も聞かずに部下の兵を動かした。他の兵士がアリューゼたちを押し退けるようにして木箱の周囲に集まり、鎖を取り外しにかかる。まったく、アリューゼたちに見向きもしない。

「逃げるぞ！」

その隙に、アリューゼは駆けた。馬車の手綱をさっさと放り投げ、素早く街道の端 森の中へと駆けこんでいく。
が。

アリユーゼよりも先に騎兵に気付いたハズのバドラックが、なぜかもたついていた。

「おい、なんだちょっと…」

ハイエナ感覚を持つ男が、歯切れ悪く騎兵の様子を窺っている。ちょうど、アリユーゼたちが引いていた馬車の積み荷 木箱の錠が壊され、外側の鎖が引き千切るように外された所だった。

兵士の手が、木箱の蓋に手がかかる。
瞬間。

「いました!」

「あつ!」

バドラックの驚きが、耳をつく。

アリユーゼは息を呑んだ。驚きが、声にならない。

ただ息を呑んで目を睜った。

開け放たれた木箱から、兵士が抱きかかえるようにして取り出したのは、一人の人間。

それも少女だった。

飴細工のような見事な金髪がだらりと垂れ、きつく閉じた瞼は開く様子がない。

アリユーゼの位置から少女の姿は見えづらかったが、そのあどけない横顔を、彼が見紛うハズもなかった。

荷から出てきたのは。

青いリボンの帽子と似合わない眼鏡。

あの、お転婆王女。

愚鈍な父を殊勝にも慕う、誇り高きアルトリアの娘。

ジェラードだった。

.....

「こりや夜を待つて逃げるしかねえぞ」

バドラックの声を頭の端で聞き流して、アリューゼは事態を整理していた。幸い、騎兵は王女の対応に追われ、アリューゼたちを捕縛するには至っていない。

ひとまず身を隠すことには成功したが、安心など出来るはずもなかった。

なぜだ。

アリューゼは混乱する頭を静めるように、自分に問いかけた。

なぜ、あのおてんば姫が馬車の荷物として運ばれていたのか。

「.....」

「しかしロンベルトの野郎、しくじりやがって！」

ふと。

バドラックが洩らした言葉に、アリユーズはカツと頭に血が上るのを感じた。

「てめえ！ 知ってたのか！」

背中の大剣に手をかける。

バドラックは慌てて、首をふった。

「な、中身は知らねエ。だが依頼主はいつもロンベルトだったんだ
いつも。。

不穏なバドラックの言葉に、アリユーズの眼光が鋭くなる。

「あの騎兵たちはロンベルトのことは知ってるのか？」

「は？ んなわけねエだろうが。ロンベルトはなあ、ヴィルノアの
スパイなのさ」

「なんだと？」

思いもよらぬ発言にアリユーズが絶句する中、バドラックは肩を
すくめた。

「中身が分かれば訳はねエ。王女を誘拐したら、アルトリアはヴィ
ルノアの好き放題だろうさ」

そうバドラックは安穩と言い捨てる。

そこまで分かっていながら。。

アリユーズは拳を握り締めた。

荷から降ろされたジェラードの　ぐったりとした姿が脳裡に浮かぶ。

性根の腐ったこいつを殺してやりたかったが、それよりも今、俺は

はあ、アリユージェ……

苦しい、助けて……

助けて！

「うわあああ！」

「ぎゃあああ！」

突如、男の悲鳴が聞こえ、バドラックとアリユージェは来た道を引き返した。

「なんだ？」

茂みに隠れながら、街道を見やる。

そこに、一体の魔物がいた。

赤く頑強そうな表皮の　筋骨隆々な二足歩行の魔物。

魔物はすでにアルトリア騎兵数人を屠ったらしく、鋭い爪にはおびただしい血の量がこびりついていた。

「おいおい、なんだありゃア！」

「た、助けて……」

唯一生き残ったアルトリア騎兵が、必死に地面を這いながら近づいてくる。その騎兵に、アリユージェは問いかけた。

「おい、一体なにがあったんだ？ ジェラードは？」

「あ、姫の意識がなかったから、隊長が、ロンベルト様から預かった薬を飲ませたら……」

「あれが、お姫様だったのか！？」

バドラックの驚きはもつともだった。

可憐な王女の面影が、この魔物にはまるでない。

ロンベルトは二重の手を打っていたのだ。

誘拐の発覚を予見し、王女搜索部隊に薬を持たせ

俺たちがヴィルノアにたどり着けばなんの問題もなく、仮に発見されたとしても

騎兵は薬を使うだろう。

王女の意識がないのは、最初から分かっているのだ。

効果は見てのとおり。

王女は魔物と化し、真相を知る者は残らず死ぬ。

たぶん王女すらも。

「あれは、グールパウダーを飲まされたに違いねエぞ」

確信を持って言うバドラックに、アリユーズは眉をひそめた。

「グールパウダー？」

「ああ。人間を魔物にしちまう薬。ネクロマンサーの常套手段だぜ」

「ロンベルトが、ネクロマンサー？」

思っていたよりもショックが大きかったのか。
アリュージェの思考は空転するばかりだった。

異形 見る影もない魔物を見据え、彼は苦しげに目を細める。

「アンジェラ……」

「アンジェラ？ って、ジェラードだろうが。オメエ、こんなときになに言ってるんだ？」

バドラックは呆れたように言うと、さっさと荷物を担いで踵を返した。

「もうアルトリアには戻れねエぞ。俺は逃げるぜ、あばよ」

そんな捨て台詞さえ吐いて、飄々とバドラックは茂みの奥に走り去って行く。

それを見送るでもなく、アリュージェはただ茫然と、目の前の魔物を見据えていた。

たぶんあいつの選択が正しいんだろう。

だが、俺は逃げる気にはなれなかった。

戦場でもこんな気分になったことはない。

異形の姿が、ジェラードとかけ離れていればいるほど。

アリュージェの中で、青いリボンの帽子をかぶったアンジェラの顔が浮かんだ。

あんなバレバレの変装で無邪気に笑って、

突拍子もないことで怒り、

父王のために、単身でアリュージェの家に乗り込んできた

ロンベルト……。
絶対、殺してやる。

心の中で、つぶやく。
だが 問題は、

ジェラードはどうすればいいのか……。

考えを巡らせている間に、魔物が鋭い爪をふり下ろしてきた。その軌道は完全に、アリュージェの首から上を薙ぎ倒す。
このままでは、

(やられる……！)

闘争本能が危険を告げる。だが意に反して、アリュージェの身体はぴくりとも動かなかった。

すべてがスローモーションに。
鋭い爪が、己に向かってふり落ちて来るのを見据えている。
ゆっくと

斬っ！

空気を切り裂く音がした。
あまりに突然の出来事で、一体なにが起きたのか。アリュージェですら咄嗟に判断できない。

まるで彼の意識ごと切断するような鋭い音。

「！」

アリユーゼは、はた、と瞬いた。

眼前で、白刃が縦に一閃。ふり抜かれている。アリユーゼの首を、たったいま跳ね飛ばそうとした魔物の右腕が、その斬線と共に地面に転がって行く。

飛び散る魔物の血。

アリユーゼの目を奪ったのは、陽に映える淡い金髪。魔物を切り裂く白刃の、凄まじい煌きだった。

「……な……！」

思わず息を呑む。

剣鬼。

不意に、アリユーゼは思った。

魔物の腕を断ち切った青年が、意志の強そうな蒼穹の瞳をぎらつかせる。青年の、身の丈以上もある剛刀が、彼の意志に合わせてきらりと輝いた。ぐつと。

彼が刀を握り込む。

アンジエラが、斬られる！

「待てっ！」

咄嗟の予感にアリユーゼが叫ぶと、動きを止めた青年が、驚いたようにこちらをふり返って、後ろに跳んだ。

魔物の豪腕が、その一寸先を掠めていく。

青年の淡い金髪をさらって。

気付けばアリユーゼの体も、青年によって引き倒されていた。

「どうした！？　なんかあるのか！？」

刀を握っているからか、それとも、魔物が目の前にいるからか。
青年　アレンは、鋭い口調で問いかけた。
と、同時。

アリュウゼの頭上で光が生じ、炸裂するのを感じた。魔物が吹き飛ばされ、背中から地面に倒れる。

「人間よ。命は投げ捨てるものではない。お前も戦士ならば、戦いの渦中にこそ道を見出すべきだろう」

光が、アリュウゼの目を奪った。

アリュウゼが顔を上げると、天空から蒼穹の鎧が浮かび上がる。

陽光を跳ね返す、透き通る白い両手足。

やわらかな風になびく、長い白銀の髪。

華奢な女の腰には、一振りの剣が差してあった。

「戦乙女、ヴァルキリー？」

神々しい光を放って現れた女は、凜とした眼差しを魔物に向けていた。

聞いたことがあった。

神々は魂を冒瀆する存在と常に人知れぬ場所で戦いを繰り広げているのだということ。

「……戦乙女？」

傍らで、アレンが不思議そうに首を傾げている。突如空から現れた女神と、聳え立った魔物を見比べるように。
と。

(……なんだ、この感覚は。寒気がする)

アレンは、じっと女神　レナス・ヴァルキュリアを見据えて、
剛刀を握る手に力を込めた。

見た目では、魔物の方が遙かにおぞましい。
なのに妙な感覚だった。

まるで目の前にいる女性が、人に非ざる者のような　。

だが、それよりも先に、アレンはなぜ、アリュージェがここまで憔悴しているのか、その理由を探していた。

(鍵は……あの魔物)

魔物を睨み据えて、アレンは推理する。同時。アリュージェが大剣を握りこんだ。

その手から、アリュージェは気付いていないが白い羽が零れ落ちる。
小さな、光の微粒子が。

「……羽？」

微かな気の流れを感じ取って、アレンが首を傾げると、魔物が腕をふり翳してレナスに襲いかかった。

「！」

アレンが兼定カタナをふる　よりも速く、レナスは軽く跳躍して躲すと、剣を両手で握り直して素早くふり下ろした。

「ガアアアア……！」

魔物は耳障りな悲鳴を上げた。瞬間。彼女の隣を、アリュージェが駆った。レナスがわずかに目を見開く。

だが、それも一瞬だ。

思い直したようにレナスが目を細めたときには、間合いを詰めたアリュージェが、獣のように吼えた。

「おおっ！」

恫喝とともにアリュージェの大剣が、魔物の心臓を貫く。びくりと体を奮わせる魔物に、アリュージェは構わず大剣を引き抜いた。魔物の血が噴き出る。瞬間。アリュージェの大剣に、炎がまとわり付いた。

「……今、楽にしてやる」

アリュージェは、自分の声が、どこか遠くに聞こえた。

轟音を立てて、魔物を刺し貫いた大剣が上空に向かって切り上げられる。分厚い筋肉で覆われていた魔物の胸板が削がれ、飛び散る血が大剣にまとわり付いた炎によって蒸発された。

「気功……!!」

アレンがつぶやく間に、魔物の巨体が転がった。

魔物が動く気配はない。アリュージェはぎりつと奥歯を噛み締めた。

戦いは、アリュージェにとって最高の喜びだった。

だが、今は。

死体と呼ぶにはあまりにも陰惨とした異形の骸を見据えて、アリュージェは踵を返した。肩で息をしながら幽鬼のように歩き始める。

その背に、アレンは声をかけようとして、止めた。
代わりに空を仰ぐ。そこに現れた“ヴァルキリー”と呼ばれた女
性を見上げて、

「貴方は、一体……？」

事態が呑み込めず、問いかける。

レナスは異形の傍まで行くと、静かにこちらをふり返った。

「お前は、本当に人間か？」

真顔で問ってくる。

アレンは訝しげにレナスを見た。

「……ああ？」

むしろ人間以外のなんだというのか。

アレンは質問の意味が読めないまま頷いた。レナスは無言で目を
伏せると、アレンの問いに答える気がないのか、そのまま異形に向
き直った。

（人間が、私の加護も受けずに不死者の右腕を断ったというのか……）

胸中でつぶやきながら、レナスは精神を集中させる。

異形の屍が、淡い光を放ち始めた。

レナスの胸許　差し伸べられた彼女の両手の中に向かって、屍
から浮かんだ光が、ゆっくりと舞い上がっていく。

すう　……、

何者にも侵し難い、清廉な空気が広がっていく。

「
」
そのあまりに幻想的な光景に、アレンは数瞬、目を奪われた。

この女性が人でないモノだと、ある程度は気付いていた。

原理は分からないが、彼女がした行動をアレンはなんとなく感覚でつかめる。

異形の屍から舞いあがった光が、レナスの身体に溶け込んでいった。

「教えてくれ。その魔物は一体
」

アレンは言いかけて、ざっと辺りを見渡した。

……ッ、

今度は、冷えた空気を感じたのだ。

人の気配。

言うなれば、狂気。

「そこか！」

手許の剛刀を払うと、アレンの剣先から真空の刃が地面に奔った。ふり切った先の、森の中の大木が苦もなく切り倒される。

この凄惨な現場に居合わせた、狂気を孕んだ人物。

深く考えなくとも、事件に関わる人物と分かった。こちらを監視するような、視線を感じたときから。

だが手応えがあったにも関わらず、切り倒された大木の先にはな

にもない。

否。

アレンは目を細めた。

(……揺れている?)

大木の陰に隠れていたのは、アレンは知らないが 魔術師風の男だった。丸眼鏡をかけ、慇懃で暗い笑みを浮かべている男。その男の気配が、アレンの斬線で揺らいだ。

まるでこの場にいるように見せているだけの、影のような。

「何者だっ、お前は！」

レナスが跳躍し、男のいる方へと剣を抜いて走った。そのわずかな間。男にレナスが詰め寄る間に、木陰にいた男の影はなくなっていた。

「……………」

油断なく、レナスが視線を左右にふる。だが、もう気配を探ってもなんも感じない。見通しがいい場所ではないが、レナスの目を掻い潜れるほどの見通しの悪い場所ではない。なのに、見失った。

忽然と、男が消えたのだ。

「……………何者だ……………？」

誰も居ない街道の脇を睨んで、レナスはつぶやく。先ほどまで、木陰に居た男は完全に人間の気配であったというのに。

それに、

(私ですら気付かなかった気配に、気付いたのか。……人間が)

いくら浄化した魂を取り込む、精神集中の最中とはいえ。

レナスは横目でアレンを睨むと、空に溶け込むように消えた。後に残ったのは横たわる異形の死体と、騎士十数人の遺体。

そして、

「……一体、なにが起きている……？」

レナスが去った空を見上げて、アレンは小さくつぶやいた。

4 アリユーゼ編完結 道

レーテ街道を歩きながら、アリユーゼは酷く虚ろな　ぎらついた殺気を纏わせていた。

いつか、弟が言っていた言葉が脳裏に過ぎる。

つまらないと感じるのは、兄さんが満たされているからだよ。

(違う！)

アリユーゼは、ぎ、と奥歯を噛みしめ、吐き捨てた。

(他人が朽ち果てることで、自分を確認できる)

戦場で、いくつも屍を作った。

背負った大剣をふり、己の力を誇示するように、笑みさえ浮かべて何人もの人間を葬ってきた。

(……そうだ。絶対的な価値観を持つことができず、相対的にしか判断できない人種)

何人も、何人も何人も。

殺して、殺して

他人を見下す思い。歪み。

戦場で自分が浮かべる笑みを、胸の昂ぶりを思い出して、アリユーゼは虚ろな気持ちで空を見上げた。

「俺も、あの国王と同じなんだ」

つぶやいた言葉が、あまりにも他人事のように感じながら。

.....

「お願いじゃ！ アリユーゼを助けてやってくれ！」

悲痛な少女の、レナスによって魂を取り込まれたジェラードの
声に、レナスは眉一つ動かさずに問いかけた。

「助ける？ 助けるとは一体どのようなことを指す？」

静かに、厳かに。

思わず、えっと口を噤んだジェラードは、幽鬼のように街道を歩
くアリユーゼを見下ろして、うろつくと視線をさ迷わせた。

「そ、それは.....」

「生き続けることか？ それとも、私に選ばれることか？」

ぱくぱくと酸欠の金魚のように口を開閉させるジェラード。逡巡
しているうちに、うまく言葉に出せない自分に、苛立ちが涙となっ
て溢れそうだった。

「それは.....」

それは、

.....

「そのうちくるだろうとは思っていたが。おとなしく逃げていればよいものを……。ここで騒ぎを起こしたところでなんの得もあるまい」

執務室に悠然と佇むロンベルト。その鼠顔を睨んで、アリュージェは心の底から吼えた。

「ほざくな！ 貴様に得があることが許せねえだけだ！」

大剣を握りしめる。ロンベルトとの間合いは五メートル弱。アリュージェはいつでも切りかかれるよう膝を曲げた。

怒りで犬歯をむき出し、凄まじい殺気を放つアリュージェを前に、ロンベルトはなぜか笑みを崩さない。

「なるほど。アリュージェよ、お前は武勇に優れてはいるようだが、呪に関しては知識が浅いようだな」

「なに？」

「それが、命取りだ」

わずかに目を細めるアリュージェに、ロンベルトは人差し指を突き出し、下に向けた。

「金字方陣とはな。フフ、このようなものを言うのだよ」

「！」

瞬間。

アリューゼの足もとに黄金の方陣が浮かび上がった。

「ぐあああああ……っっ！！！」

脳髓を焼かれるような鋭い痛みが、アリューゼの全身を駆け巡った。

黄金の方陣から雷花が放たれ、火花を散らして中空で踊る。その様を、眼鏡の奥で冷静に観察しながら、ロンベルトは思案顔を作った。

「しかし不思議だ。逃げたならまだしも、グールを倒すことが人間に可能なのか？」

アリューゼの武勇は兼ねてから聞いている。故に、彼が生きてアルトリアに帰ってきたこと自体には驚かなかった。

問題は、
ロンベルトはちらりと、金字方陣の中で悲鳴を上げるアリューゼを見やる。

“人にあらざる不死者^{グール}を殺すことが出来るのは、人にあらざる者ではない。”

昔、ロンベルトが読んだ神学書の一文だ。

それに関連する“ある女神”のことを思い出して、ロンベルトは、はた、と瞬きを落とした。

「まさか」

アリュージェが本当に、自力のみでグールを倒したとすれば、この金字方陣すらも今頃無力化しているに違いない。それがいまも為されていないことを考えれば

こいつじゃ、妾を裏切った男は！

不意に、聞き覚えのある少女の聲がして、ロンベルトは鋭く周囲を見渡した。

(！)

固唾を呑む。

完全にグール化した人間の 死んだはずの王女の声だ。

ロンベルトの杖を握る力が、強まる。と。

カッ！

落雷のような眩さに、ロンベルトは目をつむった。

すぐさま、隙を作らぬよう目を開ける。そこに、殺意に満ちたアリュージェが、低く唸っているのが見えた。

その背には、塵気楼のように揺らめく、何者かの影。それをロンベルトが凝視すると、蒼穹の鎧と白銀の髪がうっすらと浮かび上がった。

戦乙女 ヴアルキリー。

「なにっ!?!」

ロンベルトは息を呑む。

視認した瞬間、アリュージェを縛っていた金字方陣が、音を立てて消し飛んだ。

「ロンベルトおおおっ！」

幽鬼と化したアリュージェの大剣が、直後。ロンベルトの腹を深々と抉る。

「ぐ、あ、はっっ！」

あまりの激痛にロンベルトは顔を歪め、口から血を吐いた。助けを求めるように、ロンベルトの手が宙を掻く。

彼の視線は、アリュージェの後ろで悠然と佇んでいる、戦乙女を向いていた。

「なる、ほど……！ やはり貴様が……、暗躍していたのか……！」

人間の魂を冒とくする者と、戦い続ける神。

冥界の女王・ヘルを信奉するネクロマンサーにとっては、まさに天敵と呼べる相手。

「なに言ってやがる、暗躍は貴様の得意技だろうが！」

アリュージェは吐き捨てるように言うと、無造作に大剣を引き抜いた。

ロンベルトの意識が暗転する。

床に転がったロンベルトの命は もう、尽きていた。

「ロンベルト様！ いかがなされ ……」

数瞬後。

物音を聞いて駆けつけた兵士が、床に転がったロンベルトの死体を見て色を失った。

「ア、アリュューゼっ！ 貴様っ！」

兵士が己をいきり立たせて、剣をふってくる。

それを造作もなくアリュューゼが切り捨てると、また新たに、別の兵士が部屋に駆け込んできた。

何人も、
何人も。

.....

「賊め！ 覚悟しろ！」

（俺が賊だと？）

心の中で失笑しながら、アリュューゼは単調に襲いかかってくる兵士たちを斬り殺した。

どれもこれも、片手間に始末出来る。

それほどまでに、アルトリア騎士団の質は最悪だった。

「俺はどうやらお前の世話にはなれないらしいぜ。死ねないんだからな」

後ろで静かに佇んでいる 恐らく、アリュューゼ以外には見えていない女神をふり返って、アリュューゼは乾いた笑みを洩らした。

「真に強い勇者の魂は神界には導けないってか？ ははは！」

「うぬぼれるな人間よ。強さが全てではない」

「ふん、言ってくれるぜ。死神が」

敵を前にして、

この大剣をふるって、
今までで、一番空虚な時間だった。

どれもこれも、まるで紙のように死んでいく。

どれもこれも、まるで意志を持たない人形のように。

何人もの兵士を斬り殺しながら、アリュージェの心は空虚だった。

戦いは、己の中で生きがいだったハズだ。

なのに、今は なにも感じない。

稚拙な兵士の上段切りを剣の腹で弾き、そして、止めの一撃を

止められた。

「!?!」

わずかに、アリュージェが目を見開く。

いつの間にか目の前に居たのは、玉の汗を掻いた、金髪の青年だった。おそらく彼より長身の、剛刀を手にして。

「……それ以上、殺すな」

蒼穹のように澄んだ瞳で、彼は言った。

殺人という狂気に、憎悪という悪意に突き動かされたアリューゼを、戒めるように。

「てめえは……」

青年の アレンの剣を払い除けて、アリューゼは距離を置く。弾いた、と思ったアリューゼの大剣が、それと同時に、

真っ二つに切り裂かれた。

「！」

長年、アリューゼと共に激戦を生き延びてきた大剣が。

瞠目して、アリューゼがアレンを見ると、アレンは鋭い眼差しを兵士たちに向けた。

「剣を納める！」

空気が震えるほどの叱責だった。

アリューゼに多くの仲間を殺され、気色ばんでいた兵たちが、びくりと肩を震わせる。

静寂が場を満たした。物言わぬ死体となった、ロンベルトを置いて。

アレンはアリューゼに向き直ると、複雑な表情を浮かべて、じ、とアリューゼを見据えた。あまりにも、哀しそうに。

「……すまない」

それがなにに対しての謝罪か、アリューゼには分からなかったが、

アレンはなにかを悔やんでいる様子だった。

拳を握りしめる彼を見返して、アリュージェは不意に、腹の底から笑い出した。

虚しく響く、笑い声で。

そう言えば、この青年は。

自分が、酷く馬鹿げたことをしていると思いつ出した。

馬鹿げてはいるが 後悔はない。

アリュージェは一頻り笑ったあと、アレンに向き直ると、静かな眼差しに向けてくる青年を見据えた。

「まさか、こんな所でもう一度会うとはな。一体、どういつつもりで追ってきやがった？」

「……訊きたいことがある。貴方が、あの魔物を殺すことを躊躇した理由。今は復讐鬼の顔で剣をふるう、その理由」

復讐鬼。

きつぱりと言い放つアレンに、アリュージェは苦笑を洩らした。

「……別に。こうするのが一番手っ取り早いつつだけのことだ。まあ、お前に話したところで、どうにもならねえよ」

ロンベルトを殺した、この状況では。

全てが終わった、今では。

アリュージェは失笑にも似た溜息を吐くと、背後に浮かぶ戦乙女を挑戦的に見上げて、言った。

「俺を迎えにきたんだろ、死神？」

「無礼者！ 一度ならず二度までも！ 戦乙女は死神ではない！
そのような物言い、万死に値するぞ！」

「ア、アンジエラ……？」

思わずつぶやいた。異形と化し、凄惨な末路を歩むことを強いられた、気高い王女を。

「へっ？ し、知っておったのか？」

ジェラードが意外そうに目を丸めて、ばたばたと両手を動かしている。その様子は、あまりにも“アンジエラ”として自分の前に現れたときと同じで、

「フフ……。そうか、お前も無事だったんだな」

アリユーゼは久しぶりに見るその姿に、知らずと安堵の笑みが零れた。

「一つだけ訊きたい」

アリユーゼはレナスに向かって、言った。

「お前は死神とどこが違う」

「……死神は、お前に終焉しかもたらさない」

レナスは言った。

「だが、私はお前に道を作ってやることができる」

「道？」

「そつだ。だから、自らの足で歩くがよいだろう」

道か。

自嘲的な笑みを浮かべて、アリユーゼはつぶやいた。

途端。

アリユーゼの気配が変わったことに気付いてか、目を見開いたアレンが、引き止めるように腕を伸ばした。

「待て！」

(いつかと、まったく逆だな……)

アリユーゼは失笑して、溜息とも取れる笑みをアレンに返した。

「お前とは、もう少し早く会ってみたかったぜ」

折れた剣を投げ捨て、つぶやくアリユーゼに、アレンは首を横にふった。ゆったりと悟ったようなアリユーゼの表情に、彼がなにをするのか察したのかもしれない。

「……人は、死ぬために生きるんじゃない！」

「未練はねえ。……もう決着^{ケリ}はつけたからな」

決意は固まっていた。

言い切るアリューゼに、アレンの瞳が力を帯びる。まるで自分が死ぬ覚悟を決めたかのように、最早、アレンがなにを言ってもどうしようもないほどの次元で、アリューゼが覚悟を決めたことを認識したように。

だが、その前に。

「俺はアリューゼだ。……お前、名は？」

奇妙な縁で出会ったアレンに問うと、彼は静かに拳を握った。

「……アレン・ガード」

「アレン、か。……覚えとく」

アリューゼは口許に好戦的な笑みを浮かべると、腰に挿した短剣に手をかけた。

「アリューゼ！」

「親父さん……」

短剣を胸の前にかざした所で、ロンベルトの部屋にアルトリア騎士団長が駆けこんできた。

部屋に積み重なった、数十の死体に騎士団長は顔色を失う。

そして、

「アリューゼ。私にも剣を向けるのか？」

緊張した面持ちで問うアルトリア騎士団長に、アリューゼは静か

に、穏やかに微笑った。

どうせこの世に未練など、

ない。

アレンは噛み締めるように、拳を握り締めた。アリュージェの握る短剣が、分厚い胸板を突き破る。

そして、

倒れることもなく、両膝をついたアリュージェの亡骸は、白い羽が舞い落ちるとともに突如炎に包まれ、燃え上がった。

.....

「なぜ俺を助けた？」

勇者の魂エインフェリアと成った身で、アリュージェはレナスと対峙するなり問いかけた。

彼の眼下には、燃え盛る自分の体がある。恐らく、彼が命を絶つたあとも、ろくな扱いをされなかったであろう、彼の死体が。

「私からの、せめてもの餞だ」

餞という割に、レナスの表情に感情はない。語調も淡白だった。アリュージェが訝しげな表情で睨んでいると、レナスとともに居たもう一人の勇者エインフェリアの魂が、明るい笑みを浮かべて、嬉しそうに言った。

「長いつきあいになりそうじゃの」

本当に、“アンジェラ”として出会ったあと同じように無

邪気に、とても死んでいるようには見えない彼女を見返して、アリエーゼは小さく鼻を鳴らした。

「……確かに。長くなりそうだな」

まるで溜息と失笑を混ぜたような、そんな息を吐いて。

「ここが、道だ。」

「始まりの道。」

アリエーゼは顔を上げるなり、言った。

「行こうぜ」

言い放った彼に、レナスは静かに頷いた ……。

1 ロウファ編 囚人

今に思えば、奴と出会ったのは“縁”だったのだろう。

神に仇なすその男は、二メートル強の剛刀を背に担いでいる。

陰惨とした地上には疎遠の、強き意志を宿した蒼穹の瞳。

俺が唯一、この世に残した未練とも言うべき相手。

アレン・ガード。

奴は俺の死に際に、まるで自分が自決するかのような顔でそう名乗った。

「アリュージェさんが？ なにかの間違いですよ！ もう一度調べ直して下さい！」

アルトリア城の廊下に、青年の声が響く。

コツコツと軍靴が床を叩き、止まる。と、アルトリア軍近衛騎士団長の父は、無表情に息子をふり返った。『王立騎士団長』の名に相応しく、父は厳格な男だ。歳は五十前半。明るく映える金髪に、気難しそうな凜とした彫り深い面立ち。蓄えた鬚は几帳面に整っており、ギリシヤ神話の男神を思わせる精悍な男だった。

絹で出来た上等なマントを翻し、父は息子に向きなおると頭をふる。

「ジェラード王女、ロンベルト殿、そして兵士三十数名の死者。：

…事態は明白だ」

「父さん！」

珍しく息子が食い下がった。普段は聞き分けの良い息子　ロウファの思いに比例して、彼が着ている銀の甲冑がカシャリと鳴った。

無理もない。

このロウファは、アルトリア最強と謳われた傭兵アリューゼを、誰よりも慕っていたのだから。

父の凛々しさに反して、ロウファは中性的な美青年だった。銀の甲冑に流れる細い金髪。青の瞳。女性のように線の細い面立ちが、今は怒りできゅっと引きしめられている。

父は溜息を吐いた。

「わかってくれ」

去り際に、ロウファの肩を叩く。会話を終えるときの、父の癖だ。いつも一方的で、それ以上の質問は許さない。

ロウファは唇を噛んだ。俯く。

槍を握る自分の手が震えた。自分の無力が、無知が、歯痒い。

(アリューゼさん……)

胸中の声こゝろが、力なく零れていく。

まるで暗闇で灯火を失った幼子のように、ロウファの胸には、ぽっかりと穴が開いていた。

三日前。

「ここに、男性が駆け込んでこなかったか!? 左目に刀傷のある、長身の男性だ!」

ロウファが昼の稽古を終えて門前を過ぎると、西門の門番に、血相を変えて一人の青年が詰め寄っていた。

歳はロウファと同じ二十前後。ロウファより色素の薄い金髪と、蒼色の瞳が印象的だ。カーキ色のジャケットに黒のＴシャツ、白のスボンという 鎧が剣士の標準装備であるアルトリアでは、珍しい姿の青年だった。彼は背に、二メートル強の白い大きな筒を抱えていた。

(左目に刀傷のある、長身の男性……?)

突然現れた青年の言葉に、ロウファはびたりと足を止めた。

左目に刀傷

アリューゼの特徴だ。

ロウファはハッと目を剥いた。

「ちょ、ちょっと君! それってもしかして、アリューゼさんの

」

「頼む! 通してくれ! 急がないと、手遅れになる!」

ロウファに心当たりがあると見るや、青年は門番を押しつけて城に割り込もうとした。慌てて、門番とロウファが、青年を押しとめる。

「ちょっと待ってくれ！ その前に事情を」

ロウファが問うと、青年はなにかに気付いたように、は、と瞬きを落とした。

「……悲鳴」

そう、確かに彼は言った。

ロウファは怪訝に思いながらも、青年に倣って耳を澄ましてみる。途端、青年は二人の意識が別を向いたと見るや、脇を押さええた門番を肘鉄で黙らせ、城中に駆け出した。

「こ、こらっ！」

慌てて、ロウファがあとを追う。

だが青年はすでに、十数メートル前を駆けていた。

多くの兵が倒れた、血みどろの廊下を無言で駆け抜けて……。

……
……

ロウファがハッと顔を上げると、部屋の蠟燭が、ゆらゆらと自分を照らしていた。

今日は槍の稽古にも身が入らない。そう思って、自室の本を読み漁っていたときのことだ。

いつの間にか、うたた寝したらしい。アリューゼが事件を起こして以来、ロウファは眠れない夜が続いている。部屋に灯した蠟燭を見やると、半分くらいの高さにすり減っていた。

つまり今、深夜だ。

蝋燭の揺れる火を見据え、ロウファは右手で額にかかった金髪を、くしゃりと掻きあげた。

「……どうして、忘れていたんだ……」

アリユーゼの死。

そのショックがあまりに大きすぎて、一部記憶が欠落したのかも
しれない。それから、思考も。

ロウファは慌てて机から立ち上がると、愛用の槍斧を手に、地下
牢に向かった。

アルトリア最強の傭兵が、大臣のロンベルトを殺害し、自害して
から三日。

アルトリア城最奥の地下牢に、一人の青年が投獄されていた。表
向きは不審者として、実際はアリユーゼとの共犯容疑で。

アリユーゼが凶行に及んだあの日、青年はその場にいた。アルト
リア城内の関係者でないにも関わらず。

青年は、アルトリア人らしい金髪碧眼だった。碧眼、と称す
るには少し濃い蒼色。美青年というわけではないが、知的な鋭い双
眸が、勤勉なヴィルノア人に似ている。

服装は、奇妙なデザインジャケットと黒のTシャツ、白のズボ
ンというラフな格好だ。

名は、アレンといった。

投獄されたアレンは手錠と足枷で動きを封じられ、背に担いでい
た二メートル強の白筒 相棒の剛刀を六人がかりで兵士に取り上
げられている。

「……」

そんな地下牢の一室にて、アレンは三日前の出来事を思案する。レーテ街道で起きた惨劇を。そこから、アルトリア城まで兵士を斬り殺しながら進んで行ったアリューゼの真意を。

あの街道には、アレンが見たことのない魔物が現れた。

アリューゼが頑なに殺すことを拒んだ魔物。

その魔物を倒した、天使。

そして、アリューゼが血相を変えて城に殴りこみ、殺したロンベルトという男。

三日前の出来事で、気がかりな点はその三つだ。

ロンベルトについては、アレンは知らない。だが、この三日間の尋問で『ロンベルトが、アルトリアの大臣である』ということは把握できた。

一介の傭兵がなぜ、国の大臣を殺す決意を固めたのか。それも自らの命を投げ売ってまで。

(街道に現れた魔物の周りには、この国の騎士団の死体が山ほどあった。あの魔物と、彼の^{アリューゼ}関係。それが彼の死因を解く鍵だ。恐らくは)

アレンにある材料は、それだけ。

あの魔物と対峙したとき、アリューゼは憔悴し切っていた。街中にいたときは、あれほど好戦的な、ぎらついた目をしていたのに。それが、アレンには引つかかっていた。

(……まさか……、あの魔物は人……だったのか？ ……魔物と戦

った場所の近くに落ちていた小瓶。小型解析器では“グール・パウダー”と出ていたが……）

グール・パウダー。

スキャナーが分析した成分表を見ても、アレンの知る物質は一つとして出てこなかったこの惑星の粉だ。

仮説は出来ていたが、確かめる術が今はない。

牢には照明がなく、天窓から入る月明かりだけが頼りだった。アレンは鎮座して闇をじっと見つめている。

投獄されてから今日まで、食事を与えられていなかった。

……かつん、かつん、

また、足音が近づいてくる。

（尋問か……）

薄く瞼を開け、彼は足音に意識を向けた。

常人ならば、アリュージェと共犯でなくとも三度は自供してしまいそうな拷問。その中でも、アレンは正気だった。

こうしてこちらの眠りを妨げるように、あるいは思い出したように、彼らが現れるのは珍しくない。だからアレンは、いつもそうしているように毅然と尋問官を見据えた。

「何度言われても同じだ。俺を疑うなら、まずはこちらが要求した捜査を行ってもらおうか」

あの魔物が現れた、現場の捜査を。

しっかりと語調で言うと、足音が止まった。

尋問官が光を差し向けてくる。眩しさで、目を固く閉じた。

「要求？」

口が酸っぱくなるほど繰り返した言葉に、相手が不思議そうな声を返してきた。

アレンは顔を上げる。この三日間。尋問官は五人やってきたが、そのどれでもない。

若い男だった。

(新しい尋問官か?)

それとも、処刑人か。

アレンは目を細めると、若干の警戒を交えて相手を睨んだ。こちらの言い分をまるで歯牙にかけない対応は、もう身に染みついていく。だが、初めてアレンの下に現れた青年は、これまでの尋問官とは明らかに態度が違った。

傷だらけのアレンを見るなり目を見張ったのだ。

「誰がこんなことをっ!？」

慌てて駆け寄ってくる。アレンは首を傾げ、奇異なものを見るように青年をしげしげと観察した。

「君は……?」

「僕はロウファと言います。あの日、アリユーズさんが事件を起こしたときに。僕は貴方にお会いしましたね?」

ロウファに問われ、アレンは瞬いた。ロウファの顔を、もっと良く見る。すると、今までの尋問官たちとは真剣味が違った。

ロウファの真摯な眼差しがアレンに向けられている。

「なるほど。ようやく、俺にもツキが回ってきたということか」

アレンはわずかに口許を緩めると、少し、安堵したように言った。

「聞かせてもらえますか？ 貴方の事情を」

「ああ」

つぶやく彼に、ロウファは表情を引き締めた。アレンは順を追って、あの日の状況を説明する。ちらりと番兵の詰め所を一瞥して。

「これは、あそこの兵士たちにも話したことだが……。ことの始まりは、恐らくあの街道だ。俺はあの日、アルトリアの城下町で騎兵が慌ただしく走っていくのを見て、ヴィルノアに続く裏街道
レーテ街道と言うらしいな。そこに辿り着いた」

「レーテ街道、ですか……」

「ああ。そこで魔物に襲われているアリューゼと出合った。地面に座り込んで、魔物が襲いかかってくるのを茫然と見ている彼と」

「アリューゼさんが敵を前に？ ……失礼ですが、貴方は以前からアリューゼさんとは知り合いですか？」

アレンは首を横にふった。

「いや。その前日 今から四日前だな。倭国料理店で、アリューゼが女の子と食事しているときに知り合った」

「女の子?」

「その子についてはよく知らない。ただ、アリュューゼと親しそうな女の子だった。すぐく目立つ、青いリボンの帽子を被っていたんだが……」

該当する人物に、ロウファは心当たりがなかった。首を捻るロウファがよほど要を得ない顔をしたからか、アレンは話を本題に戻した。

「君の言いたいことは分かる。俺も、これでも剣士だ。アリュューゼが敵を前に戦意喪失するような男だとは思わない。まして、魔物の攻撃に反応出来なかったわけでもないだろう。だから。恐らく、彼はなんらかの事情があつて、あの魔物を庇っていたんじゃないかと思う」

「魔物を庇う? ……あのアリュューゼさんが、ですか?」

「ああ。彼はなにか ひどく絶望しているようだった。どうにか魔物を倒しはしたが 彼はなにも言わず、幽鬼のようにその場を立ち去っていったんだ」

ロウファを見上げた。

戦乙女のこととは語らない。あれが“この世”のものでないと、アレン自身が肌で感じたからだ。蝋燭に照らされたロウファの顔は、得てして表情がない。

アレンは話を続けた。

「あとは君も知ってる通り。アリュューゼはこの城のロンベルトとい

う大臣を殺して、自決した」

「……………」

ロウファは黙った。アレンの言葉が全て真実とは思わない。だが、ウソを吐いているようにも見えなかった。

問題は、どの程度この話に真実が含まれているのか、ということだ。

アレンは、まっすぐにロウファを見据えて言った。

「頼む。一度……俺があのかきいた、レーテ街道を調べてくれないか？」

「それが、貴方の希望する捜査、ということですか？」

「ああ。あのかき、どうしてアリューゼが魔物を庇おうとしたのか。それが分かれば、この真実が見えてくると思うんだ」

「……………」

「それに、あそこにはアルトリア騎兵の死体もある」

「えッ!？」

ロウファは息を呑んだ。アレンの無表情が、蠟燭に照らされている。

「魔物に殺された兵士だ。全員で八人にいる」

「アルトリア騎兵が、殺された？」

アレンが頷いた。

「傷口からして間違いない。まだ、この城に戻っていない部隊があるはずだ。少なくとも、彼らは君と同じ甲冑を着ていた」

「……！」

ロウファは鳥肌が立つのが分かった。王の勅命を受けて城を出た部隊といえば、王女捜索隊だ。まだ捜査が難航しているのだからと、思っていたが、この男の話が本当なら、彼らはすでに。 。
ごくりと唾を呑みこんだ。

ロウファの気配が変わる。緊張に満ちた彼の顔を見つめて、アレンは神妙な面持ちのまま続けた。

「ところで、グール・パウダーというのを知っているか？」

「グール・パウダー？」

耳慣れない言葉に、ロウファは首を傾げた。柵の向こうでアレンが、眉根をひそめる。

「この辺りで使われている品物だと思うんだが。……用途は俺も知らない。だが、兵士の死体の中に、それらしきものを握っている者がいた。これくらいの小瓶だ」

アレンは言って、親指と人差し指の間隔で小瓶の大きさを説明する。五センチくらいの大きさだった。

「装備からして、部隊長と思われる。魔物が目の前に居たというの

に、彼は剣ではなくその瓶を握っていた。自分が命の危機にさらされていたのに」

「……」

ロウファは押し黙った。彼の言いたいことは分かる。騎士として、敵前で剣を握らず、瓶を握っていた理由。

それは、部隊長が剣を抜く前に殺されたということだ。

「でも どうして貴方は、用途が分からない物を“グールパウダー”だと断定できるんです？」

ロウファが問うと、アレンが、う、と息を呑んだ。

「それは……」

「それは？」

「……以前に、同じような物を見たことがあるんだ。知り合いに、そう言ったことに詳しい人物がいて」

「なら、その人に“グールパウダー”のことを聞けば、分かるか？」

「ああ……。だが、その人はもう」

視線を伏せるアレンを見据え、ロウファは目を細めた。
数秒。

ロウファは真剣な表情のまま頷くと、颯爽と立ち上がった。

「まあ、いいでしょう。とりあえず 今は貴方を、信じてみます」

アレンに対する疑念がないと言えば嘘になるが。

調べてみると言われたなら、調べるだけだ。

そう目で答えるロウファに、アレンは顔をあげ、小さく頷いた。

城下に降りたロウファは、場末の酒場に向かった。

城の正規兵　ロウファの纏う白銀の甲冑は、うらびれたこの場所にはあまり似つかわしくない。高貴な生まれと一目で分かるロウファは、明らかに酒場で浮いていたのだ。

だがそれもいつものこととなれば、気にする者はいない。酒場に集まった客はロウファに一瞥されることもなく、テーブルを囲った面々と他愛もない会話を続ける。

そんな酒場の奥に、テーブルを囲っている二人組の冒険者がいた。

「で。そいつは信用しても大丈夫なのか？」

疑り深く訊いてきたのは、二人の冒険者の内の一人、青みがかつた黒髪を一つにまとめた青年だ。年はロウファと変わらない。だが、こちらはいかにもみすばらしい青銅の鎧を着た冒険者だった。

名を、カシエルという。

ロウファは逡巡のあと、頷いた。

「少なくとも、調べてみる価値はあると思います。話の筋は通つてますから」

「でも、囚人なんでしょう？」

眉根をひそめて、もう一人の冒険者、セリアは声を落とした。

こちらは女性で、長い茶髪を藍のリボンで纏め、白とピンクの鎧をセンスよく着こなしている。だが、カシエルと同じく、庶民臭い雰囲気的女性だ。

「……」

「セリア」

黙すロウファに、カシエルが窘めるようにセリアを制した。

“囚人”。

それは、今は亡きアリュージェのことをも意味する。

「ごめんなさい」

失言だったと気付いて、セリアが謝った。ロウファは空気が悪くならないように、いえ、とだけ答えて微笑う。

と、カシエルが、酒場のテーブルから勢いよく立ちあがった。

「じゃ。行ってみるか！ その“魔物”とやらが出たって街道に」

言って、カシエルはパンツと拳を打ちつけるなり、頭の後ろで腕を組んだ。ロウファも頷いて立ち上がる。肩越しに、ロウファは酒場の外を示した。

「行きましょう。外に馬を連れています」

酒場を出た三人は、ヴィルノアに続く街道、レーテ街道へと向かった。

アルトリア城下の宿。

そう広くない一室に部屋を取ったロジャーたちは、地獄のような腹痛を堪え凌ぎ、ようやく、ベッドの上に座り込むことが出来るようになった。

なのに。

「遅い……、遅すぎるじゃんよ！」

胃薬を買いに行ったアレんが、未だ帰ってこない。

腹痛で動けなかったときは深く考えなかったが、峠を越え、腹の虫もようやく治まり始めたところで、ロジャーはいらいらと自分の膝を叩いた。

もう三日だ。

待つにも限度がある。

「道草食ってるにしても、腹痛で苦しんでるイタイケなオイラを三日も放置するなんて、フェイト兄ちゃんたちならともかく、アレん兄ちゃんらしくないじゃんよ！……なにかあったのかあ？」

いかにも深刻そうな顔を作って、顎に手をやるロジャー。その彼に、失笑にも似た溜息が返ってきた。

んあ？ と首を傾げながら、ロジャーが視線を巡らせる。

悪友のルシオが部屋に置いてあるティー・ポットからお茶を注いだあと、いかにも優雅に飲み干して、やれやれと肩をすくめた。

「アレんさんに限って、んなコトあるかよ。それに、あつたにしても心配ないだろ？ アレんさんに敵う奴なんているワケねえもん」

「いるじゃん！」

「あ？」

首を傾げてルシオが覗き込むと、神妙な顔で俯いたロジャーが、ふふと顔を上げた。

「ガキと困ってる民間人”。アルフ兄ちゃんが言ってたぜ！」

「なっ！？ …… バツキャロ！ まさかアレンさんが、腹痛の俺たちを置いて……」

「いや、分かんねえぜ。なにせアレン兄ちゃんのお人よりは並じゃねえからな！ きつと、またなにか仕出かしてんじゃ……」

むむむ、と唸るロジャーに感化されてか、深刻そうな面持ちで押し黙ったルシオが、ぐっと拳を握る。

胃薬を買いに行った、その間に。

「…………… やっぱ、違えぜ！」

ルシオは感嘆したようにつぶやいた。

たったそれだけの間で“真の男”たる人助けを怠らない。

そんなアレンを勝手に想像し、ルシオはこくりと頷いた。慌ててカップを置き、愛用のカーキ色の頭巾を引っ被る。頭巾 否、“バンダナ”と称するのが、ルシオの拘りだ。

「お？ どした、アホネコ？」

間抜けな顔でこちらを見る狸少年に、バンダナを鏡の前できつちりと被ったルシオは、まったく視線を向けず、よし、とつぶやいて

踵を返した。

「決まってるだろ。アレンさんの手伝いだよ、手伝い。お前はここで大人しくゴロゴロしてろ、バカダヌキ」

「お？ 手伝いだ？ なにしでかす気だよ、アホネコ」

「ちよっ……！ ついてくんなよ！」

「へんっ！ オイラの行き先がこっちなだけだい！ 絡むなよ、アホネコ！」

「んだとお！」

ぎゃいぎゃいと騒がしく喚き立てながら、二人は宿を出る。そんな彼等が揃って迷子になったのは、それから間もなくのことだった。

レーテ街道を行くと、不意にロウファの愛馬が大きく嘶いた。

「どうしたんだ！？」

「うわっ！」

直立する馬にカシエルが悲鳴を上げる。ロウファは手綱を引いて愛馬を宥めてやったが、驚きを隠せなかった。この馬は気性が大人しい。こんな風に興奮するのは、珍しいことだ。

「だ、大丈夫!？」

ロウファとカシエルの後方についてきていたセリアが、馬を止めて尋ねてくる。

カシエルは暴れる馬の手綱を引いてどうにか踏み止まらせると、カラ元気で笑ったあと、頷いた。

「ん、まあ……なんとか」

「……おかしいですね」

そんなカシエルを尻目に、ロウファは首を傾げた。馬が一步も進みたがらない。戦場でも、勇敢に野を駆ける軍馬が。

「しょうがねえ。こっからは歩いて行こうぜ」

蹴つても叩いても、まったく反応しない軍馬にため息を吐いて、

カシエルは颯爽と馬から降りた。

なんの変哲もない山道。今のところ、囚人の青年が言ったような魔物も、城の兵士の死体も見当たらない。

「そうですね」

カシエルにならってロウファも馬から降りる。さく、と草を踏みしめると、爽やかな風が街道を吹き抜けた。

が。

馬が怯えた目で見ていた方角にロウファたちが歩き出すと、木々を抜けた所で異臭がした。眉をひそめて先を行くと、まるで地獄絵図のような醜い光景が広がっていた。

ひしゃげた荷車が街道を横断し、その周りに寄り添うように兵士

たちの死体がごろごろと転がっていたのだ。

「……ひどい」

思わずつぶやいたセリアは、自分の呼吸機構を守るように口許を庇った。あまりの光景に、顔がしかめられる。

無残に朽ち果てた騎士団の遺体　。

囚人の青年　アレンが話した通りだった。

彼が“魔物”と称した異形の骸はなかったが。

「……」

見知った人の遺体を越えて、ロウファは無言のまま、ひしゃげた荷車に歩み寄った。甲冑の種類が違う兵　部隊長の死体に。

「これが、」

真っ白になった部隊長の手に、小瓶が握られていた。栓は開けられていた。中身ももうないが、瓶の壁には少しだけ中身が付着していた。

「セリアさん！」

腰を上げ、痛ましい表情で兵士の死体を見やっっているセリアを呼ぶ。すると、セリアはこちらに視線を向け、なに？と首を傾げた。

ロウファは小瓶を持って、彼女に駆け寄る。

「これが、彼が言っていた小瓶のようです。　分かりますか？」

“グール・パウダーかどうか”。

そう続く言葉を暗に伏せて、ロウファは真剣な表情でセリアを見つめる。

人間を、魔物に変える薬。

魔法剣士のセリアは、“グール・パウダー”をそのように説明した。

ロウファにとっては、にわかには信じがたい話が、この瓶が本当にグール・パウダーなら、“魔物”が現れたというのは事実になる。

アリユーゼが、なぜその魔物と戦おうとしなかったのかは分らないが。

(というより、アリユーゼさんに限って、敵を前に剣を置くなんて……)

アレンが話した内容で、ロウファが一番納得のいかない所だ。だがそれ故に、アリユーゼの真意と深くつながっているような気がする。

自害など、普段のアリユーゼを考えればあり得ない。

父を斬らないためとはいえ。

(だから僕は……、知らなければならぬ)

アリユーゼの真意を、無念を晴らすために。

考え込むように小瓶を見つめていたセリアが、顔を上げた。

「……だめ。こんなに少ないんじゃない、グール・パウダーかどうかなんて、確認のしようがないわ」

「そうですか……」

平静を装って返事したつもりが、溜息が混ざった。

セリアが申し訳なさそうにこちらを見る。ロウファは場を誤魔化すように微笑った。

カシエルが兵士の死体を検めながらつぶやいた。

「でもよ。この死体、確かに人の手によるものじゃねえぜ。傷口見てみるよ。これ、少なくとも剣の痕じゃない。なにかに引きちぎられたみたいだ」

「……」

「それって。兵士が殺されたのは、“魔物”の仕業かも知れないってこと？」

セリアが問う。カシエルは死体の前に膝を折ったまま、頷いた。

「ただの獣に正規部隊を全滅させられるほど、アルトリア騎兵だって腑抜けじゃないだろ。ってことは……」

言葉を切ったカシエルが、ゆっくりとロウファを見る。顔色を窺うように。

ロウファは考え込むように目を閉じた。

「……至急、城に戻って応援を呼びましょう。少なくとも、彼らをここに放っておくわけにはいきません」

目を開けて、カシエルを見る。いつになく難しい顔のカシエルがいた。お調子者としての性格が強い彼だが、決して愚かではない。それを、ロウファは知っている。

「だな」

だから、明言を避けたロウファに対して、カシエルがニッと笑ってくれたのは、ロウファにとって救いだった。

ロウファはカシエルを見据えて、言った。

「それから、僕はもう一度。彼に会ってみようと思います。地
下牢の彼に」

つぶやいたロウファに、カシエルも神妙に頷いた。

2 ロウファ編 隠れた真実

カシャンと音を立てて、隣の牢が開けられた。

「大人しく入ってる！ 逆賊が！」

兵士の罵倒する声と、たたらを踏む靴音が重なった。

兵士の言葉で、アリューゼの身内、と察した囚人の青年 アレ
ンは、隣の牢に寄るなり、そつと耳をそばだてた。

かつかつと軍靴を鳴らして、番兵が牢を去っていく。

「痛たたた……っ」

隣の牢に残された囚人の声は、聞き覚えのない男だった。倭国料理店で会った、あの少女とは違う。

アレンは隣の牢に向かって問いかけた。

「大丈夫ですか？」

「……！」

ふと、隣の牢で息を呑むような気配が上がった。

まさか、こんな所で声をかけられるとは思わなかったらしい。戸惑っている様子が伝わってきた。

アレンはわずかに、語調だけを落としたりした。

「アリューゼさんに近い方、とお見受けしますが？」

途端。隣の牢に入れられた男が、はつきりと息を呑んだ。

「き、君はっ……!?!?」

「彼の知り合いです。彼が自害したその場に、居合わせました」

「ロンベルト様と王女様を殺した、兄さんの仲間……ってこと?」

「……王、女?」

隣牢の囚人　ロイの質問に、アレンはハッと息を呑んだ。

「もしま、あの魔物は。」

アレンは慎重に仮説を整理した。

「あのっ、彼女は元気ですか?　白い帽子に、青いリボンをつけた、貴族風のご令嬢です」

事情は良く分からないが、アリューゼと少女が、アレンには親しい仲のように見えた。

血生臭い傭兵の男と、いかにも貴族風の少女。

組合せとしては、あまりにも脈絡のない二人に、一種、物珍しさを感じていたのだが。

「……ジェラード王女のこと?」

ロイが声を潜めた瞬間。

アレンの中で、仮説は真理として繋がった。

では、

グール・パウダーとは。

「……………」

視線を下げ、アレンは息を呑んだ。

あの日出遭った、魔物のことを思い出す。

アリュージェの憔悴し切った顔を。

魔物を斬るなど訴えた、彼の悲痛な叫びを。

当然だ。

あれは、あの悪魔は、王女だったのだから。

あのとき、倭国料理店で仲良くアリュージェと話していた彼女が、

あの姿に……。

(そして、その犯人がロンベルト。そう言いたかったのか。貴方は)

自殺したアリュージェを思い出しながら、アレンは、ぐ、と奥歯を噛み締めた。

なにもかもが後手。

それが、どうしようもない現実だと分かっている。

「あの……?」

黙りこむアレンを不思議に思ってたか、ロイが尋ねてきた。

思考を解いたアレンが、顔を上げる。

まだ、問題は残っている。

未練はねえ。……もう、決着はつけたからな。

最期、アリュージェが死ぬ間に、アレンに向けた言葉だ。

“死ぬな”と伝えた、自分に対するアリュージェの解答。その剣一

本で、自らの復讐を遂げたアリユーゼの顔を思い出しながら。

（貴方は良くても、まだ……終わってはいない、か）

アレンは苦笑気味に、力ない笑みを浮かべた。フツと息を吐く。

これがアレンに出来る、唯一の手向けだ。

誇り高い死を選んだ彼への。

結論付けると、アレンは蒼瞳を開いた。

「自分は、アレン・ガードという者です。貴方のお名前は？」

問いかけるアレンに、ロイの不思議そうに首を傾げながらも、答えた。

ロウファが地下牢に向かうと、そこに目的の人物はいなかった。

ロイが鉄柵越しに、暗い視線を向けてくる。ロウファは慌てて、番兵に詰め寄った。

「もう一人の囚人は、どうしたんです!？」

「……い、いくら尋問しても口を割らないので、先に処刑することに……」

「っ、っっ!」

ロウファは番兵の胸倉を乱暴に手放すと、ロイに一瞥だけを送って地下牢をあとにした。

(くそっ！ あの人が殺されてしまったら、本当にアリユーゼさんの潔白を証明する人がいなくなる！)

走った。

アルトリアの代表的な処刑法は、ギロチンだ。牢獄から屋外に出ると、城壁を挟んでギロチン台がある。周りは木柵で、処刑の様子を見ることも可能だ。

アレンの容疑が、ただの不審者でないことをロウファも分かっている。王族殺しの犯人として祀り上げられては、ロウファにはどうすることも出来ない。

(だから　！)

それまでに、彼を捕らえねばならない。

祈るような気持ちで、ロウファは処刑場に行く道を走る。

あと一歩。

処刑場に行く、鉄扉を開ければ　。

そこで、

わああああ……っ！

歓声が、ロウファの耳に届いた。

「くそっっ！」

固く閉じられた鉄扉を、ロウファは力任せに殴った。

この扉を開ければ、もはや首なしの証人が、そこに　。
悔しさで、涙が滲んだ。

そのとき、

「なんとしても、捕える！」

「手の空いている者は、すべて奴の捕縛に向かええ！」

「……え？」

ロウファは瞬いた。

歓声、と思ったその声が、実は兵士によるものだった。処刑場から聞こえる声は、よくよく聞くと、城内からと分かる。

ロウファは目を剥いた。

「まさか……！」

考えるより先に、走り出した。

事情は分からない。だが、彼が死んでいないのであれば、まだ話を聞くことは出来る。

まだ、最悪の事態は防げる。

そう信じて、ロウファは走った。

「はっ、はっ、はっ！」

一步を踏みしめる度、甲冑がカシャカシャと音を立てる。槍を手にし、彼は全力で走った。

今度は、アリューゼのときのように遅れないように。

（頼む……！）

間に合え、と祈るような気持ちで、招集されていく兵士の先を追った。

謁見の間に行く廊下に、転がるようにして駆けこむ。

と。

そこに、例の囚人がいた。

並み居る近衛騎士たちに囲まれていながらも、堂々と立つ囚人が。

「くそっ！　なんて強さだ！！」

忌々しげに舌打った近衛騎士は、自分の折れた剣を見下ろした。相手は一人。

先ほど、城の廊下を堂々と歩いているアレンが目撃され、捕らえようとしたのだが、この男の強さに負けて、捕縛できずにいる。

囚人の背には、物干し竿のように長い、ニメートル強の筒があった。だが、実際に近衛騎士の剣を折ったのは、男の貫手。

彼は、素手だった。

「もう一度、言う」

静かに、厳かに。

アレンは兵士たちを睨み据えた。思わず、兵士たちが背筋を伸ばす。

「城主に会わせる。言うべきことがある」

「解せぬことを。お前は処刑されるべき囚人。口を慎むが良い！」

凜と声が響き、ロウファはハツと目を剥いた。振り返る。すると、自分の肩を叩く、父とすれ違った。

近衛騎士団長、ロウファの父だ。

白銀の鎧を纏った近衛騎士団長を前に、アレンは目を細めた。

「……王の側近か」

騎士団長の立ち振る舞いもさることながら、アレンの目に留まったのは、己の偉業を誇るような、騎士団長の胸の勲章だった。その数が、作りが、普通のものよりも華美である。

精彩のない城下の民からは想像もつかないほどに。

アルトリアをよく理解していないアレンにも、今の国内情勢がすぐに分かった。

なんと、虚勢に満ちた国なのか。

勲章など、称号など。

町行く人の笑顔に比べれば、なんの価値もないというのに。

(曇っている)

疲れた顔をした町の人々を思い出して、アレンは、すう、と騎士団長を睨んだ。

凍てつくような、同時に、激しく燃え盛るような、怒りの瞳で。

「これを見ても、同じことを吐くつもりか」

アレンは声を押し殺した。感情は乗せない、抑揚のない口調で。

内ポケットから取り出したのは、脱獄後、ロンベルトの部屋で見つけた報告書だ。

それをアレンは騎士団長にもはっきりと見えるよう、掲げた。

ヴィルノア宛の、ロンベルト直筆の報告書を。

「…………それは！」

ロウファが息を呑む。さしもの騎士団長も顔色を変えた。

ロンベルトの筆跡で書かれたその報告書には、アルトリアの内政は勿論、次の出兵予定、数、傭兵を招き入れる準備期間、そして。金で雇い入れた兵で国内を固めて、最終的にはアルトリアの防衛力を、まったくの無にするという謀略。

すべてが詳細に、明瞭に書かれていた。

「ロンベルトが…………、ヴィルノアのスパイだと？」

我が目を疑う騎士団長に、アレンは無言のまま、頷いた。

「ロンベルト様が…………」

茫然と、ロウファもつぶやく。

今は亡き宰相と、あまり話したことがないが、そういつた謀略をするような男には見えなかった。少なくとも、ジェラード王女の教育係として立っていた彼は。

騎士団長はしばらく黙っていたが、すぐに表情を元に戻した。

「それで…………これを見せたことで、己の罪が払拭できると言っつもりか？ その証拠は、提示していないというのに」

「父さん！」

「黙っているロウファ！」

「！」

ロウファに引き下がる気はなかった。今回の、このことだけは。だが、ロウファが決起して口を開く前に、視線で、アレンに止められた。

そして、

アレンは騎士団長を見、苦笑した。
騎士団長を前に、思い出したのだ。
自害する直前のアリューゼにかけた、騎士団長の言葉を。

アリューゼ。私にも剣を向けるのか？

そのときの、この男の顔を。

彼は、アリューゼが剣を向けないと知っていた。

その上で

アレンは固く、拳を握りしめた。

「そうやって、アンタはスパイに激怒した誇り高い戦士の死を不意にし、その弟まで罪人だと、国の決定だからと殺すつもりか！？俺の言葉を信じないのは構わない！」

だが。ならばなぜ、調査の手掛かりを不意にした！！なぜその手で真相を調べなかった！！なぜ、自分と親しい人間の死を、その意を汲んでやらなかった！！！！」

アレンの恫喝で、場の空気が一気に緊張する。金縛りにでもあったように、皆、息を吞んで動きを止めた。
激しい怒り。

今にも処刑される身の、ただの極悪犯の男に浮かんだ怒りが、蒼の瞳が、兵たちの胸の奥にあるなにかを、激しく揺さぶる。

“忠義”という名の。

「父さんに、捜査願を……?」

静寂に満ちた廊下で、ロウファはぼつりとつぶやいた。力なく、呆然と。

「……ああ」

アレンは静かに頷いた。

途端。

ロウファの瞳が、感情を帯び始める。

どれだけ嘆願しても、たとえ証拠が見つからなくとも、ロイだけは釈放すべきだとロウファが進言したときの、父の顔を思い出しながら。

「……なぜ、僕に黙っていたんですか。父さん……!」

アリュージェの死の真相に関する情報を、調べることすら許さなかったというのか。

尋ねる息子を前に、父の返事は素っ気ないものだった。

「お前には、知る必要がない」

能面のような父の無表情を見据えて、ロウファの顔色が怒りに染まった。

途端、くぐもった鈍い音が、城の廊下に響く。

ロウファは目を剥いた。

かっ頭が上がった血が、一瞬、冷えた気さえした。

「ぐうっ!」

たたらを踏んで　それでも堪え切れず、父の体が廊下に崩れた。左頬に内出血。父の唇から、一筋、血が流れた。

「っ！」

見上げる父の顔色が、怒りを帯びる。それを見下ろして、騎士団長の左頬を容赦なく殴り倒したアレンは、静かに問うた。

「殴られると、腹が立つか？」

淡々と、無表情に。

囚人でありながら、自分を見下ろす男。

許される無礼ではない。それでも騎士団長の唇は痛みで強張り、くぐもった呻き声を上げるだけだ。

反論すら、ない。

蒼アレンの瞳がゆらりと揺れた。

「……アンタの怒りは、その程度のものか！」

右腕一本で騎士団長の襟首を掴み、乱暴に立たせる。怒りで騎士団長を睨みつけたが、騎士団長はアレンと視線すら交わそうとしなかった。

曇っていた。

どうしようもないほど。

当然だろ。民間人の死は悲惨だが、軍人の死は立派。そんなもんだ。

昔、同僚が言っていた言葉を　唯一、自分と考えのまったく違

う同僚と、アレンが共通した考えを　軍人の、戦士の“死”を、この騎士団長は、ただの犬死に貶めたのだ。

戦場で散るのは“立派”。

そうやって、“立派”に死ぬのが軍人の務めだと、己に言い聞かせて戦場に立つ男たち。

だがそれは、同じ信念を持った仲間が後ろにいるからこそ、勇んで向かえるのだ。それを、この騎士団長は共に戦うどころか、後ろから突き放した。

軍人として、最もやってはならないこと。軍人の誇りを、泥で汚すような行為を平気で。

アレンには、それがどうしても許せなかった。頬を打たれた痛みなど、戦友を亡くした痛みには比べれば、取るに足りない。

ぎり、と奥歯を噛み締めて、アレンは騎士団長を無造作に跳ね除けた。重い尻餅について騎士団長が倒れる。だがアレンももう、見向きもしない。

こつこつと響き渡る靴音を耳にしながら、兵士たちは呆然とアレンの背を見送った。その中に、彼を追いかけるだけの気概のある者はいなかった。

抜けていた。

欠けていた。

腐っていた　。

軍人としての誇りも、信念も。

どうしようもない数の人間が、救いようもないほど根の部分で。

お前に話したところで、もうどうにもならねえよ。

ロンベルトを手にかけたあと、アリュージェが言っていた意味が、今のアレンにははつきりと理解できる。

それでも、恩師に刃は向けられぬと信義を貫き通した彼の強い心。アレンは目を閉じ、己の怒りを静めるように、ふ、と息を吐いて、歩き出す。

謁見の間は、もう目の前にあった。小国アルトリアに、あまりにも不釣合いに作った華美な虚栄の扉。その扉に手をかけて、アレンは静かに拳を握った。

自分の行為は無駄になるかもしれない。

曇った騎士団長の目を、死んだアリューゼの目を思い出して、アレンは思う。

だが生きていく限り、立ち向かわねばならない。どんなに不合理なことでも、己の本懐を遂げるためには、背を向け、逃げてはならない。それが、父から唯一学んだ家名ガードの誇りだ。

豪華な内装の、空虚な部屋を睨み据えて、アレンは一步、踏み出した。

「……！」

その背を見据えて、ロウファは目を瞠った。
なぜか、この青年がアリューゼと被って見えたのだ。

己のみを信じて生きる、強靱な精神力が。

ロウファは拳を握りしめると、きつ、と顔を上げた。

「僕もつきあいます」

「ロウファ!？」

父の叱責に近い声がかかる。だがロウファは、父に構わなかった。

「……………いいのか？」

騎士団長を視界の端に、アレンがロウファを見る。

ロウファは謁見の間へと続く扉を見据えて、言った。

「僕も、アリュージェさんの真意を知りたいと願っている者の一人ですから」

「そうか」

つぶやいたアレンは、ゆっくりと扉を開けた。

3 ロウファ編 王の目覚め

「ま、真を申しとおるのか!？」

度肝を抜かれたような顔で、アルトリア国王は渡された紙とアレンを交互に見比べた。

アレンに渡されたのは、三枚の報告書。

ロンベルトが最期に書いた、ヴィルノアへの報告書だ。アルトリアの重鎮だった彼の文字を、国王は一番よく知っていた。

それを手渡して、アレンはもう一つ。報告書と共に、ロンベルトの部屋から持ってきたグール・パウダーの原料を取り出した。

「その報告書とは別に、この瓶がロンベルトの机の小箱に入っていました。自分が話した現場に行けば、これと同じ物が見つかるハズです。王女を凄惨な死に追いやった、この瓶と同じ物が」

そう言って、アレンはロウファを見た。

うっ、とロウファが息を呑む。王女捜索隊の部隊長が手にしていた小瓶と、まったく同じ型の小瓶を目にして。

「それじゃあ、ジェラード王女を殺したのは……!!」

息を呑むロウファ。しかし、国王は状況を理解できないでいるのか、死んだ魚のような目をアレンに向けて、首をかしげた。

「その小瓶が、なんだと申すのだ?」

「グール・パウダーです」

「グール・パウダー？」

更に首を傾げる国王に、本来ならばグール・パウダーの説明など
必要ない。

なぜなら、玉座の傍らに、豪華な杖があるからだ。

魔導師の端くれならば一度は耳にするグール・パウダーの名。ネ
クロマンサーの研究過程で生まれる副産物という常識を、しかし、
王は知らなかった。

知識の象徴たる杖を、玉座の隣に置いていながら。

だが、そんな常識など知らないアレンは、起こった出来事から、
言うべきことを伝えた。

父親に見せるには あまりにも無残な、娘の遺骸を思い出しな
がら。

「人間を魔物に変える薬です。アリュージェは、魔物に変わってしまった
王女を救おうとした。だがそれも適わず、ロンベルトの策略を
知って、先日の暴拳に出たのです」

「そん、な……！」

あまりの真実に、ロウファは言葉を失った。

それでは、あんまりだった。

そうやって、スパイに激怒した誇り高い戦士の死を不意にし、
その弟まで罪人だと、国の決定だからと殺すつもりか！

先ほどのアレンの言葉に、今更ながらにぶるりと背筋が凍った。
彼がいなければ、アリュージェは、ロイはどうなっていたことか。

「な、なな、なんじゃと!? ならばなぜ、その理由を余に話さなんだのだ?」

震える唇で、本当に不思議そうに目を丸くする国王。

アレンは、じ、と蒼の瞳で見据えた。

「耳を、澄まされましたか?」

「……なに?」

「貴方は国を治める方だ。高貴な身分と引き換えに、果てなく重い責務を負った方だ。貴方はその責任を果たすために、多くの声を聞き、多くの家臣と、城下の民と言葉を交わされましたか?」

澄んだ蒼の瞳に浮かんでいたのは、最早怒りの色ではなかった。

深い、哀しみ。

王族という血筋に生まれたがために枷を受け、誤りを正す家臣もなかった王を憐れんでいるのか、

それともこの王によって命を落とした、多くの兵を悼んでいるのか。

王は、死んだ魚のような目を見開いて、ごくり、と固唾を飲み込んだ。

目の前の青年は、語調は穏やかだが、あの男を思い出させる。

ははは……哀しいな、王よ。

そう高貴な自分を嘲った、傭兵風情を。

俺はこんな茶番に付き合うほど暇じゃあない！

あの、傭兵風情と。

「……………」

同じように、己の間違いを真っ向から正されて、国王は手で顔を覆った。

否。

侮辱からの回避方法を、彼は知っている。

国王は掌の下で憤怒の表情を作ると、指の隙間からアレンを見据えて、ぎぎと奥歯を噛み締めた。

「無礼者が！」

恫喝、というより、ヒステリックな怒声でアレンを諷めると、目の前の青年は微かに目を細めた。その彼に、国王は、びつ、と人差し指を突きつける。

「ロンベルトがスパイじゃと？ ジェラードが化け物に変えられたじゃと？ あの傭兵風情が、娘のために命を投げ出したじゃと！？」

顔を真っ赤にして怒鳴り始めると、アレンを指差す指にも、力が籠もった。

不審人物として捕らえた男の虚言と、そう思ってしまえばなんのことはない。

「貴様、一体何様じゃ！？ なんの根拠があつて」

「陛下！」

国王を止めようとして、それをアレンに制された。しかし、ロウファの方も、アリュューゼに冤罪を着せたままにしておけない。

睨みつけるようにアレンをふり返ると、アレンは首を横にふった。ここは任せると。

彼の瞳が言っている。

「……………」

ロウファは不服ながらも、とりあえず黙した。アレンは言う。

「ロンベルトがスパイという証拠は、今、陛下が手にされている書類を見れば明らかです」

「黙れ無礼者が！ どうせ、これは貴様の作った紛い物じゃろうが」

怒鳴りつけると、アレンは小さく、自嘲気味に笑った。

「……………なるほど」

筆跡鑑定をすればすぐに分かることだが、どうやらそれも聞く耳は持たないらしい。

そして、騎士団に証拠を探させようにも、あの騎士たちでは。アレンはちらりとロウファを見やると、言った。

「馬を借してくれ。この人には、見せるべきものがある」

「見せるべきもの……?」

急に話題をふられて、ロウファが首を傾げる。が、それも一瞬のことだ。

ロウファは、ぐ、と表情を引き締めると、小さく頷いた。

アレンに連れてこられたその場所は、ロウファたちが調査に来たレーテ街道だった。

馬が思わず足を止める、異臭に満ちた、あまりにも醜い場所。そこに、無残に朽ち果てた騎士団の遺体が横たわっていた。

あまりにも禍々しい光景に、国王は口を両手で覆った。

「き、きき、貴様貴様っ! ……よ、よよ、よくも余を、こんな所に連れてきて……!」

「件のグール・パウダーを所持している遺体は、こちらです」

喚く王には取り入らず、アレンは無残に朽ち果てた騎士団の搜索部隊の小隊長を務めていた男の遺体に歩み寄った。ロウファたちも見たものだ。

「確かに、彼が小瓶を握っていました。陛下」

ロウファが言うと、国王は顔をしかめながらも頷いた。アレンが問う。

「彼が握っていた小瓶の底に、粉が付着していなかったか?」

「緑色の粉のことでしょうか？　しかし、あれは仲間にも確認してもらいましたが、グールパウダーと断定することは……」

あまりにも極微量の付着物に、ロウファが困惑する。
アレンは微笑った。

「なら、グールの死体があれば納得出来るな」

「……グールの死体、だと？」

後ろをふり返って国王が問うと、アレンは小さく頷いた。

「あれです」

一瞬、憂いの色を浮かべたアレンは、す、と崩れた荷馬車を指差した。

無残に飛び散った、ジェラードの物と思われる衣服の残骸を。

これには、ロウファよりも国王の方が反応を示した。

「う、ううう、嘘じゃー！」

か、と目を見開き、国王は首を横にふる。異形の死体はなかった。それでも、異形の血がついた馬車はひしゃげ、ボロ切れと化したジェラードの服には見覚えがある。

馬車の周りについた、おびただしい不死者の血が。

「こんなものが……！」

カシエルたちと来たときは気付かなかった。

思わずロウファがつばやくと、国王は場所を指差して怒鳴った。

「き、きき、貴様貴様っ！ これ、こここ、これっ、これが！？
これが……、ジェラード……じゃと？」

甚だしい無礼だ。とてつもない、侮辱だった。

怒りで目の前が暗くなりそうだ。

だがそれと同時に、国王の視界に入ってくるのは、変わり果ててはいるが、見知った騎士団の顔ぶれ。

どれも、自分が王女搜索のために差し向けた騎兵たちだった。

「これが……ジェラード……じゃと？」

もう一度、つぶやく。

人間を、魔物に変える薬。
魔物。

この男はそう言った。

だが。

だが、

「ジエ、ラ……ド……じゃと？」

面影など微塵もない。愛らしく整った娘の顔も、聞かん気の強そ
うな瞳も、美しく伸びた、あの金色の髪も。

どれも、この禍々しい馬車の痕からは見られなかった。

「……嘘じゃ、嘘じゃ嘘じゃ嘘じゃ！」

娘が、こんな身で死んだなど！

ロンベルトが、ヴィルノアのスパイだなど！
こんな男の言うことが、すべて現実にあるなど！

国王は首をふって、全てを否定した。

血の上った頭でアレンを睨み据える。こんな気味の悪い場所まで連れてきて、凝った芝居で自分をたぶらかそうとした、この男を

(余を……！)

そのとき、国王は目を剥いた。

後ろにいたアレンが、深く、目を閉じていたのだ。

騎士の死を、王女の死を悼むように。

彼は、そ、と蒼の瞳を閉じ、冥福を祈るように右手を握って立っていた。彼を虚言者とのたまうには、その光景は厳粛で、清廉で。

そしてあまりにも 残酷だった。

「……………うっ」

国王の頬に、涙が伝った。

嘘であって欲しかった。

すべて虚言で、すべてが悪い夢であって欲しかった。

「うう……っ、っっ！」

娘の遺体 とも言えない、馬車の残骸を見据えると、王は力な

く膝をついて、例えようのない絶望に涙した。

どうして。

(ジェラードを……、娘をこんな卑しい姿にするぐらいなら、どうして余を殺さなんだのじゃ……！)

本当は、分かっていた。証拠と差し出された書類を目にしたときから。

あまりにもロンベルトが推し進めていた政策に沿った報告書の内容と、ロンベルトの癖字を、誰よりも国王は理解していたのだ。見間違えるハズもない。

だが。

信じた家臣が、スパイだった。

卑しい傭兵が、娘の仇を討った恩人だった。

娘の無念を晴らすため、その身を犠牲に、汚名まで被ってロンベルトを討った。

それは、王にとって信じたくない現実だ。

「ふう……ふう……っつ！」

首を横にふる。手で耳を塞いで、嫌々する子供のように、蹲って首をふった。

一番大切なものを奪われた。

昨日、傭兵に娘が殺されたと聞かされたときよりも、ずっと。

惨めな現実が 真実が、弱い王の心には、受け止めようもなくのしかかる。立つ気力さえ、湧いてこないほどに。

「これ、が……」

骸さえも残っていない娘のボロ切れと、騎士団の遺体を見据えて、ロウファがつぶやく。

生前の王女を、当然騎士であるロウファも知っている。

あの可憐な少女が 今は、こんな姿で。

(この人が脱獄しなければ、こんな場所^{トコロ}で、野晒しとなっていたのか……)

こんな寂しい場所で。

そう思うと、ぶるっ、と身が震えた。

今なら分かる。

アリューゼがこんなものを目にして、黙っているはずがないと。

だからこそ、アリューゼなのだ。

父の本性を知って絶望した今、アリューゼの、あまりにも真つ直ぐな信念がロウファの胸を叩いた。

(アリューゼさん……)

涙が、込み上げてくるような気さえた。

アリューゼが、自分の思い描いた通りの人物であったことに改めて安堵して、それと同時に、それを失ったどうしようもない悲しみに、ロウファは喉の奥にある熱いものを飲み込んだ。

「……吊ってあげましょう。我々に出来ることは、もうそれしかない」

静かにつぶやくアレンに、失意の王は首を横にふった。

「なぜ、じゃ……！ なぜ、……こんなことに……！」

深く目を瞑る。他の言葉を聞かないように、王は喚く。

涙が、体中の力という力を、洗い流すように落ちていく。

(……もう、立てぬ……！)

だらしなく嗚咽を吐いて、王は無念に膝を折るしかない。
もうなにも、したくなかった。

「……それに関する答えは、もう知っておいででしょうか？ 本当は、
ずっと前から」

上から降るアレンの言葉が、深く、抉るように胸に刺さる。
なぜ。

アレンの言う通り、国王は知っていた。
なぜ、こんなことが起きたのか。なぜ、これを未然に防げなかつたのか。そしてなぜ、自分はそれを理解しようとしなかったのか。

「よ、……余……、……余、が、……悪い……のか……っっ！」

蹲る自分が、惨めだった。

違う！ 父上はなにも悪くなど、ないのじゃ！

そう言って励ましてくれていた娘は もう、この世にいない。

「余、が……！」

愚王だと、罵るばかりで具体的にどうすれば良いかなど、誰も教えてはくれなかった。

民の声。

民の声とは一体、なんだというのだ。

愚王と、罵る臣下と一体なにを話せというのだ。

「余は……、余は」

「……失礼を」

頂垂れた国王の頭上から、アレンの声が届いた。
白くなった頭の中で王は首を傾げるが、体は反応しない。
と。

ぐ、と王の襟首が掴まれ、片腕で、アレンに体を持ち上げられた。

「!?!」

目を白黒させる。何事か、王が事態を把握するよりも先に

「いつまで、寝惚けている!」

街道の脇に広がる草原に、恫喝が響き渡るようだった。
びくり、と硬直していた王の体が動き出す。顔を上げると、王の、
死んだ魚のような瞳を刺し貫くように、蒼の瞳がこちらを睨み据え
ていた。

「アンタは娘の死を前に、それでも自分の愚かさから背を向け、逃
げるつもりか!?!」

立ち向かえ! 歯を食いばれ! 泥水を飲み、辛酸を舐める
覚悟で乗り越えろ!」

ロウファは目を見開く。あまりに突拍子のないアレンの行動に、
一瞬、目を疑った。

王の目が見開かれる。本当に、今、目が覚めたかのように。

「……あ……」

つぶやく国王を見据え、アレンはゆっくりと、国王の襟首から手を離した。

国王の持ち上げられていた体が、支えを失って崩れ落ちる。腰から尻餅をつくように座り込んだ。ぺたり、と地面に手をつけて、国王は力のない瞳をアレンに向ける。

どれほど脱力しようとも、蒼穹の瞳から、目を背けられなかったのだ。

蒼の双眸を前に、拒否権はない。

一切の、甘えを許さない戦士の瞳だった。

「……ああ……」

痛感させられてしまう。

国王の苦悩が、この男の前ではちっぽけな言い訳に過ぎないと。

見下ろすアレンが、じ、とこちらを見据えている。澄んだ蒼の瞳が。

「……このまま、ヴィルノアの好きにさせるのか？」

「！」

静かに問われて、国王は、ぐっと歯の根を食いしばった。

娘を、こんな姿にした^{ヴィルノア}大国を。

許しておけるはずがない。だが、現実にはヴィルノアに立ち向かえるほど、アルトリアは強くない。

大国に比肩するには、この国はあまりに非力だった。

「……っ、っっ！」

悔しさで目が霞む。本当なら、ロンベルトの報告書を見た時点で決断しなければならなかった外交問題。

見てみぬフリをするべきか、否か。

ジェラードのことがなければ、考えるまでもなかった弱腰外交。

だが、

だがそれでは。

「くち、おいしい……！　口、惜しい……っ！」

なにも言えない自分が、なにも出来ない自分が。今も、昔もそして、将来も。

国王は拳を握り、歯の根から零れる嗚咽と、伝う涙に必死で堪えた。

どうしようもない屈辱だ。騎士団の弱体化という現実を知っているわけではない。だが、知らなくとも分かる。

ヴィルノアに勝てるはずがないと。

それほど、ヴィルノアは世界的脅威だった。

「屈するのか？　そうやって」

静かに降ってくる声に、国王は怒りの瞳をアレンに向ける。死んだ魚の目ではない、愛娘を殺された父親の怒りの目だ。

しかし、それを見下ろすアレンは冷たく、容赦がなかった。

「貴方が招いた結果だ。玉座にふんぞり返ったまま、民に耳を傾けなかった貴方の責任」

「黙れ！　無礼者が！」

くつくつと沸く怒りが、アレンの瞳をも睨み返した。だが、それも長くは続かない。次の言葉が、国王の胸に突き刺さったからだ。

「なぜ貴方はそうやって、身分ばかり気にする？ 貴族も平民も、貴方の前では同じ、アルトリア国民だというのに」

「っ……っ！」

弾かれたように顔を上げ、国王は眉根を寄せた。

「アルトリア国民……じゃと？」

脳裏を過ぎったのは、あの、異例の表彰式だった。蛮族退治で活躍した傭兵の男を、表彰したあのこと。

傭兵風情が……。貴様も蛮族と変わらぬクセに。

あのときの毒づきを、まるで知っているかのように。

「き、さま……」

ふるふると握る拳に力が入った。以ての外だ。なにを隠そう、あのような傭兵風情と、貴族と平民を、等価に見るなど

「出来ないことじゃない。貴方が指導者として力を発揮していたなら、貴族の献金に目を晦ませなければ」

「っ、っっ！」

氷塊を背に押し付けられたような気分だった。なぜかは分からない

い。

臣下が個人的に王族に贈り物をする事など当然だ。だが目の前の男は、それを許さないように、冷えた目をしていた。

「貴方が、国政から目を逸らさなければ」

つぶやかれた言葉とともにアレンは一步、前に踏み出した。それと同時に、国王は地面を這って後ろに下がる。

ひっ、と緊張した喉が声を洩らした。

壮絶な緊張感。頭に上っていた血が、残らず冷えていくのが分かった。

「都合の悪いときだけ、臆するのか？」

「っ！」

我に返って、国王はアレンを睨み上げる。目の前の青年はどこまでも冷たく、静かな表情だった。

「そして自分を守るために、怒ったフリをする」

アレンは国王の前で膝を折った。目線が同じ高さになる。なのに、見開いた国王の目には、同じ高さの視線が、遙か高みにあるような気がした。自分とは、まったく違う次元の高みに。

「っ……」

唾を飲み込んで、国王は覚悟を決めたようにアレンを見る。緊張で顔が引き攣った。だが、その緊張が恐怖からのものではないことに、国王はまだ気付かない。

「それではなにも変わらない。　　変わらないんだ」

アレンの瞳が、和らいだ。

国王を孕んでいた緊張が消える。肩の荷が、す、と下りたような錯覚さえした。

しかしそれでも、哀しい瞳だった。目の前の青年の瞳は。

国王は息を呑む。いくら緊張が解けた分、王には余裕が出来たが、先程のように青年を罵倒する気になれなかった。

ただ、

変われないと。

青年の言葉が、ずしりと胸に沈み込んだ。ヴィルノアに屈するしかない。その現実は変えようがないと　　そう思うと、国王の拳が震えた。

(不思議な、男じゃ……)

アレンを見上げて、国王は思う。相当無礼を働かれたというのに、国王の心は　　視界は、妙にすっきりと晴れていた。

(この男は……余に、勇気をくれる……)

亡くした娘のように。

精彩のない家臣たちとは違う。アレンの意志を持つ光に、王の心は揺れていた。

「余に……、余に、立ち直れと申すのか……？」

死んだ魚の瞳が、希望の光を見つけて、アレンを見返す。先程の怒りの目ではない。

今はまだ小さな、小さな光を眼に宿して、すう、とアレンを見る。その国王の変化に、アレンは嬉しそうに微笑った。

「自分の弱さを知った人間は必ず強くなれる。今の貴方のように、意志の光を宿せたなら」

「……………余が、つよ……………く？」

初めて耳にした言葉に、国王は目を丸くした。あまりにも縁遠い言葉過ぎて、一瞬、言葉の意味を理解出来なかったほどに。

頷くアレンの姿が、鮮やかに、王の目に焼きついた。

「人は過ち、迷い、見失うものです。自分のことも理解出来ないのに、相手のことも理解しなくてはならない。……………貴方の過ちは悲しい因果を生んだ。だが、貴方が齒を食いしぼり、その過ちに正面から立ち向かったなら。王女の死は、ただの死ではなく、貴方にとって最も重要な、意味のある死になる。少なくとも、俺はそう考えています」

「……………余は、お前を投獄し、処刑までしようとしたのじゃぞ？ ……なのにそれを、赦すと言うのか？」

どうして、この男は保身を考えない。

どうして、この男は最初から国王を奮い立たせるために、ここまでするの。

自分が殺されるかもしれない、そんな状況だというのに。

(……………なぜ、余を恨まないのじゃ……………)

ここまで賢明な、近衛騎士団でさえ明かせなかった真実を、解き

明かすほどの男だというのに。

アレンは国王をふり返ると、首を横にふった。

「いいえ。俺が貴方を赦すときは　この国に、笑顔が戻ったときだ」

「国の笑顔……それが、民の笑顔、と？」

神妙な顔で、しかし、本当の意味で“民の声”を理解していない王は、自信がなさそうに声を落とした。

すると、この不思議な青年は、冗談事のように言った。

「よろしければ手伝いましょうか？　城下がどんな町なのか。その目で確かめてください」

王の無知を、少しも責めずに。なぜなら王の目覚めは、今このときだと理解しているから。

意志の光を帯びた、王の瞳を見据えて、アレンは微笑った。

4 ロウファ編完結 そして、新たな旅立ちへ

「絶対、右だ！」

「いんや、絶対左だ！」

アルトリア山岳に続く街道のど真ん中で、二人の少年はいがみ合っていた。

一人はタヌキの耳としっぽを持つ、八十五センチの小柄な少年。
もう一人は、黒猫の耳としっぽを持つ、百センチ前後の小柄な少年。

二人はきりきりと奥歯を噛み、互いを睨む。

最早、どちらの道が合っているかなど関係なかった。

（右だ！ 絶対、右に行つてやる……！）

（左！ つつたら、左だぜい！）

迫力のない、しかし、やる気だけは伝わってくる睨み合いを繰り返しながら、二人は、むむむ、と眉を寄せる。

どこかに消えていったアレンを探して、早三日。街に下りたのはいいが、目撃証言が街の外にまで及んだため、こうやって街道まで出てきたのだ。

それから、クレルモンフェランとヴィルノア、どちらに向かうか悩んだ。考えても分からないので、結局じゃんけんで決め、東に向かうことにする。

クレルモンフェランがある東。

この時点で、アルトリアにいるアレンと会える可能性がなくなっていることに、二人が気付かない。

大小の山々が連なるアルトリア山脈を、二人は不毛な言い争いを続けながら歩く。

しばらくして、

「つうか、おかしいじゃんか！ さっきから二時間も歩いてんのに、ちっともアレン兄ちゃんに会わないぜ!？」

ロジャーは地団駄を踏んだ。

鬱蒼とした山合を歩いていくと、次第に街道から外れてしまったのだ。不毛な言い争いに夢中で、前をよく見ていなかった所為もある。

「う、うう、うっせうっせ！ 最初に町の外に出たとき、東に行けつつったのは、お前だろが！」

昼間だというのに、そこは鬱蒼とした木々で暗くなっていた。

ルシオが視線を左右にふりながら不安の色を浮かべる。だが、それをロジャーには気取られまいと、敢えて大声を張り上げた。

対するロジャーは、そんなルシオの心境など気付かない様子だ。

「棒切れ持ってきて倒れた方にしたのは、お前じゃんか！」

「う、うっせ！」

「んだとぉー！」

ぶんぶんと、頭から蒸気を出さん勢いでロジャーがぴよんぴよんと跳ねる。

それを視界の端で見ながら、ルシオは一層、不安そうな色を顔に浮かべた。

「……お、おい。バカダヌキ」

声をひそめて、ルシオは茂みに身を隠す。

「んだよ、アホネコ？」

ロジャーは無頓着だ。

不用意に声を暗い森に響かせるロジャーの口を、ルシオは、ひつ、と喉を鳴らしながら、手で押さえた。

(バッキヤロ！ ……アレ見ろ)

もごもごとルシオの手の中で暴れるロジャーを制して、ルシオは茂みの中から、そ、とそれを指さした。

石造りの建物だ。かなり年季の入った物と思われる。

アルトリア山岳遺跡と呼ばれる場所だった。

ルシオの手を払い除けたロジャーが、嬉しそうに目を光らせる。

(おお！ でかしたぜ、アホネコ！ まさに兄ちゃんが首を突っ込みそうな遺跡じゃんか)

口笛でも吹かんばかりの勢いで、ロジャーは背中に差した手斧を握るなり、さくさくと茂みから出て行く。

「お、おい…」

その彼を引きとめようとルシオが手を伸ばすと　　ふり返った口
ジャーが、に、と口の端をつり上げた。

「よっし、今はとにかく冒険を楽しむぞ　　アホネコっ」

ぴよんと一つ高く飛んで、ロジャーは遺跡の中に入っていく。その
あとに、慌ててルシオも続いた。

「ま、待てコラ！　　抜け駆けは許さねえぞ！」

迷走、続く。

.....

「マジかよ.....」

陰惨とした馬車のあるレーテ街道の空に、既に肉体をなくした二
つの魂が、地上を見下ろすように浮かんでいた。

一人は長身巨躯の、生前は最強の傭兵として名を馳せていた男。

もう一人は、豪華なピンク色のドレスに、美しく波打った金髪が
印象的な、人形のように顔の整った姫。

生前、ジェラードと呼ばれていた少女だった。

「まったくじゃ！」

彼女は可憐な顔を真っ赤に染めて、父の傍らに立った男を噛み付
かんばかりに睨み据えた。

「父上をあのようになんた無礼！！ 万死に値するぞー！！」

手に握った杖を、叩き折らんばかりの勢いで、アレンに向かって罵倒する。

と、

少女の傍らで同じく成り行きを見守っていたアリユーゼが、顔をしかめて首を横にふった。

「逆だ、ジェラード。奴はお前の父親の、あの死んだ目を醒ましやがったんだ。……暗君としか言いようのなかった、あの不甲斐ない王をな」

「な、ななんじゃと、アリユーゼ！ 父上に対する一度ならぬ二度の暴言！ 最早我慢ならぬ、妾が直にしか引導をくー！」

杖をふりかぶって、高々と詠唱を始めるジェラードを、アリユーゼは片手でむんずと掴んで押し止めた。

やはり信じられない、と驚愕した目を、アレンに向ける。

「……大した野郎だ」

もしかしたらこの男は、弟のロイを助けることやアリユーゼたちの無念を晴らすだけでなく、アルトリアそのものを変えるのかもしれない。

そんな突拍子もないことを、感じさせる男だった。

「早まるんじゃなかったぜ……！」

ぐつと拳を握り、口惜しげにふるふると首をふる。
せめて奴と一戦交えるまで。それまで生きていた方が

「もがぁ〜！ もが、もがぁ〜！」

押さえ込んだ王女が、暴れつつもなにか叫んでいる。

その王女に視線を落として、アリューゼは冗談混じりに考えた思考を、笑って掃き捨てた。

「……ん？ どうかしたのか、ヴァルキリー」

本当なら、来たくもなかったジェラードの遺体の残る地に、有無を言わせず連れてきた戦乙女を仰ぎ見る。

なぜか驚いたように、アレンを見る彼女を

（馬鹿な……。至宝をなくした地上界ミッドガルの混乱を……治さめるというのか、人間が）

アリューゼの言う通り、国王の心情の変化は、レナスにも感じていた。

国王の、顔つきが変わったのだ。
暗君と。

そう称されていた男とは思えないほど、なにかが変わっていた。

そして、

一カ月後。

王都アルトリアを一望できる丘の上に、ロウファとアレンは居た。ここはロウファにとって、かつてアリュージェと訓練後に訪れた思い出の場所だ。

アリュージェは丘の上に群生する草を一房掴んで、さっと風になびかせた。

お前は風に吹かれっぱなしの草か？

騎士団長の息子として、周囲の羨望、嫉妬、期待、失望……。

いろいろな感情を含んだ視線にさらされていたロウファは、あの頃伸び悩んでいた。

何度練習しても槍の腕が上がらず、なんのために槍を持っているのか。

それすらも分からず、ただ日々を生きて、時間に身を委ねていた頃。

アリュージェがふと、この丘に呼び出して、言ったのだ。

ロウファを、草と。

「……………」

今でも目を閉じれば、アリュージェがくれた言葉の一つ一つが、ロウファの脳裡に蘇ってくる。

丘に吹き上げる風を感じて、ロウファは目を細め、アリュージェよりも一回り小さい、自分と同年くらいの青年を見据えた。

「ありがとうございます、アレンさん。貴方の御蔭でアリュージェさんの濡れ衣はおろか、アルトリアも少しずつ、良くなっている気がします」

丘から王都を眺めていたアレンは、ロウファの声でこちらをふり

返った。

ロウファより淡い金髪が、風になびく。アレンの髪は色彩の淡さを物語るように、陽に当たると白く透けた。

ロウファほど繊細な面立ちではないが、それでもロウファと変わらない体格の彼が所持している“剛刀”はいささか青年が握るには違和感がある。なぜなら得物の大きさは同じでも、ロウファのように“槍”ではなく、彼が持っているのは“剣”なのだから。

白袋から解放された“兼定”は、全長二メートル三十センチほどの姿をさらしていた。

ロウファは槍斧を握りしめる。

アレンは王都に視線を向け、首をふった。

「アリュージェのことも、この国のことも。解決させたのは、これからも解決していくのは、君と国王陛下だ。俺はきっかけを作ったにすぎない」

「そんなことはありません。……少なくとも、そのきっかけがなければ、我々はとんでもない過ちを犯すところだったんですから」

「……ヴィルノアか」

「ええ。陛下と協議して、新しい騎士団の構想が出来たんです。良ければ、貴方にもその中に入っていたいただきたい」

アレンは首を横にふった。

「すまない。人を待たせてるんだ。……てっきり王都内で待っていると行ってたんだが、どうも外に移動したようだな。これから、彼

らを探さないといけない」

苦笑混じりに嘆息するアレンに、ロウファは小さく微笑った。

「そうですか……。不思議ですね。貴方なら断ると思ってました。
“騎士”なんて柄じゃないって。……。貴方はどこか、アリュージェさ
んと似ているから」

「俺が？」

「ええ」

頷いたロウファは、ザツと槍斧を構えた。

「アレンさん。どうせこの国を出るなら、最後に一度。僕と立ち合
っていただけませんか？ その剛刀の実力、しかと目に焼き付けて
おきたい。この国を変えた、貴方の実力を」

「……悪いが、この刀は人に向けるものじゃない。だが、相手には
なる。アリュージェに比べれば力不足かも知れないが、全力で行か
せてもらおう」

アレンは言う、剛刀を脇に置き、ジャケットの懐から一本の筒
を取り出した。

x x x x x

アルトリア国家防衛軍。

国王が立ちあげた新制度は、それまで金で雇うだけに過ぎなかつ
た傭兵を、希望すれば正規兵として雇用する、アルトリアの新騎士

団のことだった。

貴族と傭兵。

かけ離れた身分の差に、発足当初は衝突が絶えないと予想された新騎士団だったが、就任したアルトリアの若き騎士団長、ロウファの働きにより事態は早期に収束した。

そしてもう一つ。

新騎士団が発足されるのと同じ頃。

アルトリア王都に、ちよび髭を生やした貴族風の男が、度々現れた。その男に生活苦について相談をすると、なぜか救済措置が次の日には国から政策として発表されるらしい。

そんな、明るい都市伝説が王都を賑わせ、街が、国が、変革を始めた。

その影に、身の丈よりも長い剛刀を操る青年の姿があったことを、アルトリアの国民は知らない……。

「さて、と」

徐々に活気を取り戻し始めた王都を見下ろして、アレンは旅の一式を肩に担いだ。

片手間に通信機を展開する。以前、ロジャーとルシオに渡しておいた通信機が作動していれば、彼らの所在地が特定出来るのだ。

ほどなくして、ぴぴっ、という電子音。

画面に、ロジャーとルシオの所在地が示された。ここから、ちようど三十キロほど下った地点だ。

それを確認して、アレンは溜息を吐いた。

「結局、土産らしい土産を用意出来なかったな……。怒ってないといいんだが」

困ったように頭を掻きながら、アレンはアルトリアに背を向けた。

当てのない旅を、続けるために ……。

1 ベリナス編 貴族と奴隷

「なんてきれいな花。コレ、名前知ってますか？」

屋敷を出て、男は使用人を連れて奴隷市場へと向かった。戦乱の世にあつて、ラッセンという都市はヴィルノアに程近い。山野を挟んではいるものの、かの血気盛んな軍事大国がジェラベルンに侵攻しようものなら、真っ先に最前線として駆り出される街だ。

男は、そんな大国ヴィルノアの侵攻に備えて配された、防衛部隊の隊長だった。

商業盛んな衛星都市、ラッセン。

その執政権すらも握る男の肩書は、“衛士長”という。

「阿沙加、そんなに行きたくないのか」

赤みのある茶色の髪を肩まで伸ばした男は、貴族らしい顔立ちの男だった。焦げ茶色の髪はゆるやかなウェーブを描き、彫り深い顔立ちに太めの眉、整った鬚が男の精悍さを強調している。眼は決して大きくないが、生来の二重瞼と下瞼の肉付きが良さから、切れ長ながらもくつきりとしている。瞳は髪よりも濃い茶色。

男　ベリナスは整った眉根を寄せて、後ろをふり返った。そこに、屋敷で唯一奉公している使用人がいる。道端に咲いた白い花を手に、陰気な面持ちで俯いている倭人の娘が。

「……………」

ベリナスは娘をじつと見、彼女が握っている花を奪い取った。

あ、と小さな悲鳴を上げたあと。娘　阿沙加は存外大きな声で威嚇した。

「返して下さい！　ベリナス様！」

だが声を荒げたのは少しの間だけだった。もともと引つ込み思案な娘だ。すぐに黙り込んでしまう。それに、ベリナスがすることに、奴隷として抵抗するわけにもいかなかった。

阿沙加はきつく唇を噛んで、申し訳なさそうに頂垂れた。倭人らしい艶やかな黒髪が、陽の光を浴びて青く照りかえる。彼女は腰まで伸びるほど長い髪を持ち主だったが、白い三角巾に髪をひっ詰め、ており、俯いても乱れることはない。

メイド服に身を包んだ彼女は、どこか陰鬱な雰囲気秘めた娘だった。伏せ目がちでむっとりとした口許が、なにもしなくとも幸薄そうな印象を与えてくる。

「……人の売り買い、好きじゃないです。見るのも、嫌！」

それでもこんな風に、奴隷の阿沙加が意見が言えるのは、ベリナスがラッセンに住むどのジェラベルン人よりも優しい人物であるからだ。

ベリナスは困ったように溜息を吐き、阿沙加を見据えた。

「仕方がないことだ。私の妻も、マリアも、もういないんだ。お前一人で屋敷をきりもりするのは無理だろう？」

「ベリナス様に買われる人、幸せ。それはいいの。でも……他の子は皆かわいそう。私、見たくない」

「阿沙加にきて貰わないと困るんだ。異国の言葉は私にはわからないし、働けそうな子を選んで貰わないと」

「それが嫌なんです！ 私の一言が、人の一生を左右するなんて……」

「花ならいいのか？」

「……」

言われて、彼女は哀しげに目を伏せた。

「召使を選ぶのは、花を摘むのとどう違うんだ」

「……」

沈黙は、阿沙加にとっての防御手段なのか。
ベリナスは阿沙加から奪った白い花を一瞥すると、彼女の髪に、そっと花を挿した。艶やかな黒髪の中で、花は可憐に、自らの白を輝かせる。それを満足げに見据え、ベリナスは頷いた。

「こうなることが、この花の運命だったんだ」

「ウンメイ？」

「そう。神によって定められた」

「人と花は同じ、か……」

ふと、瞬きを落としたベリナスは、後ろをふり返った。

陽に透けるような薄い金色の髪と、深い蒼の瞳。身長は、長身のベリナスよりもまだ頭一つ分上にある青年だ。彼は黒いシャツに皮のジャケットという、一風変わった服装で、身の丈よりも長い、妙な筒を背負っていた。年齢は、二十前後といったところだ。

「私には、そちらの女性の言い分の方が、共感できますね」

青年は苦笑するようにつぶやくと、ベリナスの瞳を、す、と見据えた。深く、蒼い瞳で。

「……っ！」

言い知れず、ベリナスは息を呑んだ。傍らの阿沙加も、無意識に口に手をやる。防衛、のためではなく、感嘆のために。思わず息を呑むほど、青年の瞳は深く、澄んでいて
圧倒的な絶景を、目の前にしたような。

「君、は……？」

静かに問う。すると青年は、思い出したように、はた、と瞬いて、それから居住いを正した。

「私はアレン・ガードという者です。この地には先ほど着いたばかりでして……、新参者が出過ぎたことを申しました」

言って頭を下げる青年に、ベリナスは、いや、と生返事を返すと、横目で阿沙加を見た。自分と同じく、呆けた様子でアレンを見ている阿沙加を。

ベリナスは顔をしかめて、アレンに向き直った。

「私は気にしていない。ここにきたばかりと言うことは、旅人かね？」

「はい。私には他に、連れが二人いるのですが。街に入ると喧嘩ばかりなので、先に私が宿を探している所です」

つぶやくアレンは苦笑していたが、どこか楽しそうでもあった。ベリナスには、眩しく映るほどに。青年は、この絶望に満ちた街とは疎遠な、“光”に満ちた男だった。

「すると。宿はまだお決めになっていないのですか？」

引つ込み思案で人見知り。そんな阿沙加が、会話に入ってくるのは珍しいことだ。

ベリナスが驚き、阿沙加を横目見ると、アレンがええ、と頷いた。その返事を聞いて、阿沙加が、気まずそうにベリナスを見上げる。

「……ベリナス様」

物言いたげな彼女を見下ろして、ベリナスはため息を吐いた。彼女が一体なにを企んでいるのか、理解できたためだ。

「家に、お客人をお泊めしろと言うのだな？ 阿沙加」

柔らかい口調で問いかけると、阿沙加は項垂れながらも、小さく頷いた。

ベリナスは苦笑する。彼女の魂胆。それは、召使選びを先延ばしにするためだ。アレンに一瞬、目を奪われたこともあるだろうが、それ以上に。客人をもてなすために、早々に屋敷に帰ろうと。

陰気な顔で頭を垂れて、ぎゅ、と唇を引き結ぶ阿沙加の表情が、彼女の内面を映し出していた。

.....

結局、アレンと彼の連れを客人として招き入れたベリナスは、新しい奴隷を選ぶこともなく、屋敷に帰ってきてしまった。

「お二人のお心遣い、心より感謝します」

深々と頭を垂れるアレンに、ベリナスは破顔して首を横にふると、まだ残っている役人の仕事をするために私室に戻っていった。戻った、ところで。

(.....お二人?)

外出用のコートをハンガーにかけて、ベリナスは、はた、と瞬いた。

ベリナスに礼を言うのは当然だ。だが召使の阿沙加にまで 倭人の、奴隷の彼女にまで、同じように礼を言う者は、このジェラベルンには存在しない。

旅人、とアレンは言ったが、そのふる舞いから、彼が身分の低い者でないことは窺い知れた。だが、貴族と呼ぶにはあまりにも貧相な彼の身なりには、ギャップがある。

それに、アレンが連れてきたあの二人の少年も妙といえば妙だ。あのくらいの子が とても、アレンの息子や弟といった歳ではない子が、なぜ、彼と共に旅をしているのか。

考えれば考えるほど、妙な旅人だと思った。だが、そう思う一方

で、アレンに対して猜疑や警戒を抱けない自分も、確かにベリナスの中にいた。あの、深く澄んだ蒼の瞳の前では。

「……いかん」

軽く頭をふって、改めて仕事に取り掛かる。だがどうにも、上空だった。

こうなることが、この花の運命だったんだ。

ウンメイ……？

そう。神によって定められた

つい先ほどのことを思い出して、ベリナスは唇を噛んだ。

運命？

妻やマリアが死んだのも、運命というのか。

父や 多くの仲間が戦士したのも、運命といえるのか？

自分がいまここにいるのも、運命のたまものなのか？

阿沙加と出会ったのも！

あれは、数年前。まだ妻も、マリアや父も健在だったころの話だ。

阿沙加が初めて、この屋敷にきたときのこと

「も、申し訳ありません。あまりにかわいそうだったもので」

ベリナスは、代々ラッセンの衛士長を務める上流貴族の家系だった。父は血気盛んな性格で、ヴィルノアとの小競り合いによる領土

争いから、何度もラッセンを救ってきた名将でもあった。

「しばらく給金はいりません。ですからもう勘弁してください」

平身低頭で頭を下げる侍従長に、父は顔を真っ赤にして怒鳴りこんでいた。それもそのはず、侍従長の前には、一人の娘が座り込んで泣きじゃくっていたのだ。上流貴族であるベリナス家にはあまり似つかわしくない、奴隷身分の倭人の娘が。

「父さん、もういいだろ？ この子は俺とマリアでなんとかするか
らな」

気位の高い父は、倭人が屋敷に踏み入れていることが気に入らないようだった。しかも侍従長は、父に内緒でこの奴隷を買ってきてしまったのだ。

怒り心頭の父は、しかし、小一時間ほど怒鳴って落ち着いたのか。ベリナスを一瞥スルナリ、フンツ、と鼻を鳴らした。

「まあいい。マリア、責任を持ってお前が教育しろ」

侍従長　マリアという名の年配の女性にそう言い、ベリナスの父は執務室へと引っ込んでいく。それを見送ったあとで、ベリナスは呆れたようにマリアをふり返った。

「しっかし、マリアも無茶するよ」

「すみません、坊っちゃん」

申し訳なさそうにマリアが平伏する。ベリナスはそれを、手で制した。

「いや、いいよ。それよりこの子の名前はなんて言うんだい？」

「阿沙加です」

「アサカ？ 倭人の子か」

ベリナスがこう言ったのは、父がマリアを怒鳴りつけている途中で現れたためだ。先ほどからうずくまって、泣いている少女の顔は、ベリナスの位置から確認できない。

「はい」

目を伏せるマリアを置いて、ベリナスはすすり泣いている少女の前に膝を折った。ポケットチーフを取り出し、それを素早く花の形に折る。

と、

「あ……」

ポケットチーフの花を差し出された少女が、わずかに顔を上げた。

「やっと顔を見せてくれたね。怖い人はもういないから、泣かないで」

国が違えば、言葉も違う。

ベリナスの言葉は少女には理解出来なかったに違いないが、彼の優しい微笑みは、阿沙加にほんの少しの安らぎを与えていた。

そして、

このときの出会いが、
ベリナスの人生を狂わせていく ……。

……………

そもそも、“男勝負”に料理が付け足されたのは、アレンが原因だ。

三人が旅を始めて間もないころ、初めて口にしたアレンの料理に、ロジャーとルシオがいたく感激し、男は料理だ、と言い張ったのがことの始まりである。

以来、料理修行と称して、毎晩ロジャーたちの料理をアレンが食すことになったのだが。

自分では、“普通”だと思っているこの料理を、しかしこうやって嬉しそうに食べてもらうのは、アレンにとっても気分の悪いことではなかった。が、

「オイラたちも、一宿一飯の恩義は体で返すじゃん！」

自分の頭よりも大きめのヘルメットを押し上げて、短身の少年

ロジャーは、えへん、と胸を張った。彼の躍動に合わせて、タヌキの耳としっぽが愉快そうにフリフリと揺れる。

緑色のタートルネックに、カーキ色のサスペンダー付きの短パン。大きめの手袋もやはりカーキ色で、好奇心の強そうな焦茶色の瞳は、満月のように丸く、嬉しそうにジッと目の前を見据えている。

ロジャーは、ベリナスの屋敷の立派な厨房にて、どん、と背を反らして、包丁を掲げて叫んだ。それを尻目に、アレンは頭痛のする思いを必死に抑えた。

「あ、あの……」

そのアレンの傍らでは、夕飯の支度に取り掛かろうとした阿沙加が、しかし厨房を占拠した少年“たち”の所為で、おろおろしている。

ロジャーと対峙するように立っているのは、クロネコの耳としばを持つつり目の少年、ルシオだ。

こちらはお玉を片手に、どん、と胸を張っている。カーキ色の頭巾否、バンダナを頭に巻いたルシオは、長めの前髪をバンダナの左右から視界の邪魔にならないように流している。ロジャーよりも黒に近い瞳だ。

二人とも瞳にやる気の炎を漲らせ、互いを睨み合っていた。

「へん、バカダヌキ！ 俺と料理対決しようなんて片腹痛いぜ！
こちらら、父ちゃんと母ちゃんが出稼ぎに行ってる間、弟と二人で家を切り盛りしてきたんだ！ フォルテおばさんの料理食って、ぬくぬく育ってきたお前とじゃ、持つてる素材が違うんだよ！」

「はん、偉そうに！ いつもお前らの飯作ってんのベリオンじゃんか！ それに甘いのはそつちだぜアホネコ！ このロジャー様はフェイト兄ちゃんの目を盗んで、各地の工房を巡っては、マリア姉ちゃんと二人で料理の修業を積んできてんだい！ 言わばお前とは、住んでる次元が違うじゃんよ！」

「……二人とも……」

厨房の入り口で、脱力したように項垂れているアレンの手には、

阿沙加の使い古した雑巾が握られていた。小間使いの阿沙加が、忙しく屋敷内を駆け回っているのを見つけて、アレンが手伝うと言い出したためだ。

見た目、どう見ても奴隷や召使とは縁遠い彼が、そんな申し出をしてきたのが阿沙加にとって意外で、阿沙加は言葉の意味を理解するのに、数秒のときを要した。

「そんな、お客様にそのようなこと……！」

アレンに言われた当時、阿沙加は首をふって断った。だがアレンはやっぱりと微笑い、返してきたのが少年のさっきの言葉だ。

「一宿一飯の恩義は、必ず返すのが礼儀だ」

阿沙加から取り上げた雑巾を、表彰状かなにかのように見せびらかして。

意外にも、少年のような笑みを浮かべるアレンに、阿沙加は戸惑いながらも納得、はしなかったが、引き下がった。人の意見を跳ね除けられるほど、彼女の意思は強くない。そして、召使にそれほどの権利があるはずもなかった。

そうして、アレンが掃除を手伝ってくれるのを容認すると、高価な調度類や面積の広い屋敷を掃除する上で、彼は戦力になった。阿沙加が一日かけてようやく終える掃除を、二時間足らずで終わらせてみせたのだ。

「家事は得意なんだ」

そう言って得意げに微笑うアレンに、つられて阿沙加も微笑った、

そんなときだった。客室で大人しくしていたハズの少年たちが、アレンの活躍を目に、やる気を漲らせたのは。

そうして、今に至るわけである。

脱力したように、厨房の入り口に手をかけたアレンは、身の丈に合っていない厨房に、行儀悪くも仁王立ちしているロジャーたちを見据えて、す、と目を細めた。その瞳に、冷たい光を宿らせて。

机から跳び下り、勝手に食糧庫から食材を取り出そうとした少年たちを、アレンは声音を落として遮った。

「……そこまでだ、二人とも」

いつになく、容赦のない視線。それを受けてか、ロジャーとルシオが、う、と同時に息を呑む。ぎこちなく、少年たちは罰の悪そうな顔で背中をふり向くと、ため息を吐いたアレンが、どこか疲れたようにつぶやいた。

「……二人の腕は、俺がよく知っている」

このラッセンにくるまでの行程で、散々ふるわれた二人の手料理を思い出して、アレンは眉間に深いしわを刻んだ。翌日には必ず、腹痛で動けなくなった二人を担いで山野を越え、薬を求めて奔走した日々を。

それを、彼等も覚えているハズなのに。一体、この彼等の自信はどこから湧いてくるというのか。

(……クリフの影響か?)

首を傾げながらも自問して、アレンは大人しくなった二人の少年

を見下ろした。

「厨房は俺が受け持つから、心配いらない」

あの99.9%は劇物として出来上がる手料理を、間違っても阿沙加やベリナスに食べさせるわけにはいかない。固く決意し、強めの口調で言い切ると、しょんぼりとした少年たちの視線が、アレンを見上げてきた。

「兄ちゃん……」

「アレンさん……」

邪魔だ、と言外に言われ、酷く傷ついたようだ。

「……………」

アレンは無言のまま、ぴくり、と片眉を引き攣らせると、場を取り成すように、こほん、と小さく咳払いした。

「ロジャー、屋敷の外にまだ整理されていない薪があった。あれを割っておくと、ベリナスさんたちはすぐ助かるだろうな。それからルシオ。屋敷の裏に大きな甕がある。そこに井戸の水を溜めておくと、今後、炊事や洗濯のときに便利だ。……どちらも、単純だが相当辛い作業だ。今日の間によっておけば、一宿一飯の恩は返せるかもしれない」

言って、窺うようにロジャーとルシオを横目見ると、ぱあ、と表情を輝かせた二人が、間髪を置かずに頷いた。

「任せとけ!!」

仲良くそう言って、厨房を走り去っていく。また、どちらが先にその仕事を終えるか勝負だ、などと不毛な争いを騒がしく展開していたが。

「……やれやれ」

元気に走り去っていく二人を見据えて、アレンは小さく微笑うと、改めて厨房に向き直った。

「あ、あの……」

「？」

阿沙加に呼びかけられ、アレンがふり返る。ああ、と思い立ったように表情を改めて。

「すまない。ベリナスさんも忙しい人のようだったから、薪割や水汲みといった重労働は早めに済ませた方がいいと思っただ。余計な世話だったか？」

気さくに問いかけるアレンは、阿沙加が身分の低い召使だから、というより、年下の少女だったから、といった方が正しいほど、分け隔てがない。それに戸惑いを感じながらも、いえ、と首をふった阿沙加は、目を伏せて答えた。

「水汲みも、薪割りも、……私の仕事、ですから」

阿沙加が消え入りそうな声でつぶやくと、アレンは瞬きを落とし

て、思い立ったように小さく微笑った。

「失礼する」

アレンは彼女の手を、つい、と引く。ベリナスの屋敷にきたころを思えば、ずいぶんとマシになった、豆と輝あかぎれがいくつも出来た、その手を。

「っ！」

それでも、生娘にしてはあまりにも骨張った手に羞恥心を覚えて、阿沙加は手を引いた。だが、彼女の手を取ったアレンの手は意外なほど固く、彼女を掴んでいた。

強く、ではなく、固く。

アレンは少女の手を掴んだまま、ふ、と意識を集中させた。

「ヒーリング」

一瞬で構成された魔力が、少女の手に集まって青白く輝く。ふわり、と温かな感触。洗いたての毛布を、そ、と手の甲に当てられたような。

す、と視線を上げたアレンは、すまない、と勝手に阿沙加に触れたことを謝ると、あっさり手を離れた。戸惑いながら、こちらを見る阿沙加を置いて、アレンは厨房に向き直る。

「ベリナスさんに苦手な物はないか？ 一応、さっき露店で味見をしたから、大丈夫だとは思うんだが」

なんでもないように問いかけてくるアレンに、阿沙加はアレンに握られていた、自分の手を見下ろした。長い召使生活で、豆と輝あかぎれが

いくつも出来ていたハズの自分の指を。

「!」

今は白魚のように瑞々しい、見たこともないほど美しい肌をした、自分の手を。

阿沙加は息を呑みながら、じ、と見据えて、

「あ、……うっ!」

意味のない音を零しながら、アレンを見上げた。

阿沙加の声に、アレンが手際よく食材を切る手を止めた。本当に、なんでもないように。

アレンは彼女が胸の前で手を包んでいるのを見て、ああ、と小さくつぶやいた。

「俺は魔導師なんだ。だから、簡単な回復魔法くらいは使える」

「魔導師、様……?」

「正規ではないから、そんなに偉くはないが、な」

アレンはまな板に視線を落とすと、手際よく食材を切り始めた。

「あ、あの……!」

「?」

今度は手を止めず、切り分けた食材を、さっ、と皿に移すアレン。

「どうして、こんなに……良くして下さるんですか……？」

「阿沙加。煮込み鍋はこれを使って構わないのか？」

「え？ ……は、はい」

全く関係のない問いを返されて、阿沙加は所在なく視線を落とすと、煮込み鍋に水を入れ、火をつけたアレンが、火力を調節してからふり返った。

「一宿一飯の恩義、じゃ納得出来ないか？」

「……………」

首を傾げるアレンに、阿沙加は黙りこんで俯く。そんな彼女に、アレンは困ったように眉をひそめると、しばらく悩んでから、観念したように微笑った。

「一生懸命だったから」

「え……？」

言葉の意味が理解できず、阿沙加は顔を上げる。阿沙加の前にあるのは、どこか、遠慮しているようにも見える、苦笑めいたアレンの顔。これを言っているものかどうか、悩んでいるときのアレンの癖だ。

そんなことを、阿沙加が知っているはずもないが。

アレンは、意を決して答えた。

「君が、疲れているように見えた。ベリナスさんも含めて」

「……………」

そのアレンの言葉に、阿沙加はどう答えていいのか分からなかった。だが少なくとも、彼は阿沙加を同情しているわけではない。そして、阿沙加を奴隷として見ない代わりに、ベリナスを貴族として見てもいい。

分かったのは、その二つだけだ。

まるで古くからの知人のように、アレンには身分という概念がまったく欠如していた。あの、二人の少年たちと同様に。

「“外”は、自由で……………」

アレンは、旅人だと言った。それを聞いたときから思った。彼がいた国に行けば、“外”ならもっと自由に、幸福に。彼等のように、笑えるのだろうか。

最愛の人と、

ベリナスと。

だが、言葉は阿沙加の喉で詰まると、そのままため息と共に、空虚な宙に散っていった。

「……………苦しいのか、この場所が」

「！」

ずっと見られていると思わなかった阿沙加が、頬を赤くして顔を上げる。どこか、怯えた表情で。それを見据えて、アレンは静かに目を伏せた。

「だったら、立ち止まって深呼吸すればいい。君は、懸命に自分の

仕事を果たそうとしているが、反面、仕事だけを見つめて、全てを諦めようと、捨て去ろうとしている」

「……………」

「もつと頼っていていい。君は、君が思っている以上に、幸せになる素質を持っているハズだ。……………そうだろうか？」

最後に、ベリナスとの関係を指されているのだと知って、阿沙加は息を呑んだ。目を剥き、ふるふる頭を横にふる。

「違います……………！ 私とベリナス様は、決して……………っ！」

ゆっくりと下がって、彼女は首をふった。アレンの言葉を聞かないように、耳を塞ぐ。それだけでは堪えきれず、その場にうずくまっ

「……………すまない」

そんな阿沙加を見かねてか、寂しげな表情を浮かべる彼に、阿沙加は更に首をふった。

同情。

そんなもの、自分には。

「阿沙加。少し、味見をしてくれないか？」

火を入れた鍋に向き直ったアレンが、肩越しに問いかけてきた。うずくまっていた阿沙加が、反応できずにアレンを見上げる。

「ベリナスさんに食べてもらう前に、アドバイスを聞くことと思って。

……立てるか？」

心配そうに覗き込むアレンに、阿沙加は思わず泣き出しそうになった。

(どうして、そんなに ……！)

自分には、身に余る優しさを。

自分には、不釣り合いな温もりを。

阿沙加は唇をと噛んで、アレンの視線から逃れるように目を瞑った。やはり、同情ではない。この青年は、会って間もない阿沙加を、ベリナスを、心配してくれた。

「……阿沙加」

だから、阿沙加は目に浮かんだ涙を、感づかれないように拭うとアレンに手を引かれて、立ち上がった。

「すまない。付き合わせてしまって」

詫びるように苦笑する彼に、阿沙加は首を横にふった。悪いのは、すべて自分なのだ。

卑しい身分で、ベリナスを愛した。卑しい身分で、ベリナスの傍を、今もなお望んでいる。

少なくとも、彼女はそう思っていた。手渡された小皿に入ったスープを、つい、と含んでみる。

「……！」

するど。

ふわり、と温かな感触が、阿沙加の胸に広がった。痛みも、苦しみも。阿沙加が抱えていた悩みも全て、ふ、と忘れさせてくれる、そんな感覚。

肩の荷が下りる、といった感じだった。

「美味しい……！」

驚いた表情で、何度も瞬きを繰り返して、渡された小皿と、アレシオンを見比べる。すると、ほっとしたように笑んだアレンが、

「家事は得意なんだ。昔から」

少し照れて言った。 なにか、思い出しているように。

その彼を前に、阿沙加は口許に手をやる。すると、いつも強張っていたハズの筋肉が、ふ、と緩んでいるのが分かった。

(私、微笑ってる　?)

たった、こんなスプープ一口で。

驚いたように、不思議そうに首を傾げる阿沙加に、アレンは微笑うと、瞬きを落として、厨房の奥に視線をやった。

「アレンさん……！」

「おおい！ 兄ちゃん……！」

遠くで、ルシオとロジャーの声。二人の仕事が終わったにしては、少し早すぎる時間に、アレンは首を傾げる。そして、阿沙加を一瞥して言った。

「行くう」

厨房の窓から入る夕陽が、アレンを照らすように射し込んでいる。それに、ぐ、と息を呑んで、阿沙加は小さく頷くと、彼に連れられるようにして厨房を出た。

なかなか器用に薪を割る　　までは良かったが、勢い余って薪割り台まで割ったロジャーと、裏の桶に水を汲む　　までは良かったが、調子に乗って屋敷中の水を盛大に床にぶちまけたルシオ、をアレンが無言で、頭を抱えるようにして見下ろして。

その三人の間に流れる微妙な沈黙に、阿沙加は柄にもなく、ころころと笑った。

2 ベリナス編 一つの事実、食い違ふ現実

奴隷市場から帰った日の夕食。ようやく執務を終えたベリナスは、食卓についた。今日は客人もいるとあって、料理の品数が多く、色とりどりの食材が所狭しとテーブルに並んでいた。

だが、

ベリナスの目を引いたのは、そんな皿の数ではない。

「…………おや？」

いつも阿沙加が作ってくれる夕食とは全く別の、見たこともない料理の数々が、テーブルを占めていたのだ。

「すみません。ベリナス様…………」

いつも通り、ベリナスの隣に立って下を向く彼女に、しかし、ベリナスはいつもの彼女とは違う気配を感じ取って、首をかしげた。向かいの席に座ったアレンが、阿沙加の代わりに答える。

「私が無理を言って、厨房をお借りしたんです。阿沙加に味見してもらいましたから、お口には合うと思うのですが」

「君が？」

心底驚いて問いかけると、アレンは小さく頷いた。

「兄っちゃんの料理」 ひっさびさの料理」

「やっぱり見た目からして違うんだよなあ…………。つっても、確かにア

レンさんと同じ手順は踏んでるハズなんだけどなあ……」

ナイフとフォークを握って、上機嫌に歌うロジャーの隣で、ルシオが小首を傾げている。そんな彼等に、アレンがなにか言いたげにしかし、なにも言えずに複雑な表情で黙り込んだ。ベリナスの傍らに立った阿沙加が、くすくすと微笑う。

それに、ベリナスは目を見開いた。

「……！」

阿沙加の笑った顔。それも、こんな無邪気な笑顔は、ベリナスでさえも見たことのない表情だ。無意識にベリナスは、アレンを見やる。ロジャーたちを見据えて、仕方がないな、と言わんばかりに笑っている彼を。

「お客人に、すまないことを」

「いえ。私が無理を言いましたので。……よろしければ彼女も一緒にどうぞ」

「いいのかね？」

「我々は客というより、厄介者ですので」

「……ありがとう」

ベリナスは朗らかに笑むと、視線で傍らの席を示して、阿沙加に座るよう命じた。二人でいるときでさえ、一緒に食べることを極度に嫌う阿沙加が、こうして素直にベリナスの指示を聞いてくれたのは、人前ということがあったからかもしれない。

だが、それ以上に。
ベリナスは複雑な心境で小さく笑むと、見たこともない料理に、つ、とフォークを入れた。

「では、戴こう。アレン君」

「恐縮です」

社交辞令を返してくる彼に、笑みを返して、ベリナスはフォークで切り分けた鳥を、ぱくり、と含んだ。

瞬間。

思わず、驚愕に目を剥いたベリナスは、柄にもなく、さっ、とフォークを抜いて、本能のままに口の中の肉を咀嚼した。

「……!?!」

一噛みする毎に、ふわりと広がる香ばしさと、しっかりと落ち着いた肉の旨さ。肉汁もさることながら、完全に火の通ったそれは、舌の上で、ぷるんつ、と弾けると同時、ベリナスの歯によって、なんの抵抗もなく、す、と二つ、四つに分かれていく。

「美味しい……!」

無意識の内でベリナスがつぶやくと、アレンが嬉しそうに微笑った。ベリナスの隣で、同じように料理を食した阿沙加も、ふと、目を見開いた。

「これ、は……」

「阿沙加？」

阿沙加の異変に気付いて、ベリナスが阿沙加をふり返る。と。彼女の頬に、つう、と涙が滑り落ちていた。彼女が手許の小皿にすくったのは、ベリナスが食べたものと同じ、鶏肉をなにかのタレで焼いたもの。

ベリナスの向かいの席で、もりもりと料理を平らげていくロジャーが、どこか誇らしげに、手に持ったスプーンを掲げた。

「兄ちゃんは、一度食べた料理はなんでも覚えてんだぜ！」

姉ちゃん、倭国つてトコの人だろ？ オイラたち、アルトリアで倭国料理店の全メニューを制覇したから、倭国料理はお手の物じゃんよー!!」

「そうそう。なんたって俺たちは、途中でダウンした変な姉ちゃんに分まで食ってやったんだからな！」

ロジャーの隣で、やはりロジャーと同様に、テーブルに並んだ料理をもりもりと平らげていくルシオが、偉業を誇るように何度も頷く。と。

「……あれは、胃にも財布にも悪かった……」

深いため息を吐いて、じ、とどこかを見据えるアレンに、ベリナスは驚いた表情のまま、阿沙加をふり返る。とめどなく、ゆるゆると涙を流している阿沙加は、もしかしたら自分が泣いていることにさえ気付いていないのかもしれない。と。

「あり、がとう……」

味見のときは気付かなかった 否、思えば完成品の味見はしな

かったそれは、阿沙加が失くした 故郷の味だ。素材や、細かな
アレンジを加えているとはいえ、阿沙加には分かる。
遠い昔。

奴隷としてこの地を踏むよりも、ずっと前に。温かな食事を用意
して待つてくれていた、そんな穏やかな日々。

「……………う、……………つう！」

それはあまりに遠すぎて、阿沙加の思考の端にも掛からないほど、
別世界の記憶として刻まれた現実だった。過去、という名の。

「阿沙加……………」

ベリナスが心配そうに、穏やかな声で語りかけてくる。倭国に捨
てられ、奴隷としてどうしようもなく不安だったあのころ。優しく、
手を引いてくれた人の声が、今もここに。

「美味、しゅう……………ござい……………、ますね。ベリナス、様……………っ！」

ベリナスに精一杯笑いかけて、阿沙加は涙を袖で拭くと、それで
もぼたぼたと溢れる涙を落としながら、料理を食べる。

美味かった。

どれを取っても、この世でなにより美味しい料理に、阿沙加はめぐ
り合えた。

「美味、しい……………！ 美味しい……………！」

抑えた声で、嗚咽混じりにつぶやく。ベリナスは言葉を失い、圧

倒されたように目を睜った。

「ベリナスさんも、どうぞ」

そんな彼に、降ってくるのはアレンの声。ベリナスが戸惑った眼差しをアレンに向けると、彼は無言で小さく微笑んだ。気を取り直して、ベリナスも食事を再開する。今度は、鶏肉の隣に置いてある前菜のようなものを口に運んだ。

（確かに、美味しい……）

ベリナスが今まで食べてきた、どのシェフが作った料理よりも。だが、阿沙加のこの涙の理由は、それだけではないように思えた。倭国料理と先程ロジャーが言っていたが、珍味といわれるあの国の料理が、これほど抵抗なくベリナスに食べられるはずがない。少なくともベリナスの知る、ベリナスが今まで見てきた倭国料理は。

「……！」

そこまで考えて、ベリナスはハッと瞬きを落とした。

同じ倭国料理。

なのに、ベリナスまでもが美味いと感じる、この不思議な味を、阿沙加はまったく同じものとして食べている。即ち、故郷の味として。

狐につままれたような表情で、料理を見下ろすベリナスに、アレンは静かに言った。

「価値観というものは、状況が変われば変わるものです。人間にいても同じ。この国は、奴隷を貴族の“物”として扱っているようにで

すが、俺の国にそんなものは存在しない。人は人です。隔たりはない。俺の知る国は、ここよりもずっと、多くの人種で占められた国でしたが、対話だけは忘れようとしませんでした」

ベリナスは、ゆっくりとアレンを見やる。

「多くの人種がいたことで、反発や戦争も多かった。けれどいつも誰かが平和のために、幸せのために必死に声を荒げていました。同じ考えを持つ人と手を取り合って。……運命は、確かに抗い難い力を持っているかもしれない。だがそれは、誰も知り得ぬ未来だからこそ、人は強く、齒を食いしばって生きていけると思っんです」

「……アレン君」

若いな。

いつものベリナスなら、そう笑って済ませることだった。ほんの少し、自嘲気味に。

だが目の前の青年は、深い蒼穹のような眼差しをベリナスに向けて、はつきりと言った。

「貴方は戦っていない。真の絶望に倒れるほど、運命に立ち向かっていない。ただ倒れるのを怖れて、すべてを運命の所為にして逃げているだけだ。世間の風評から、自分の気持ちから背を向け、諦めているだけなのに、自分は抗った気になって、幸福だけを求めて彷徨っているに過ぎない」

「……」

ベリナスは目を見開いた。自分の中で、自分を罵倒した言葉。それよりも更に深い部分を抉られたような気がして、返す言葉が見つ

からなかった。

(…………私が、逃げている…………だと?)

厳然たる身分差から。

妻や父の、死の影から。

アレンが知っているのは、ベリナスの、ほんの些細な一部にしか過ぎないというのに、その蒼瞳はベリナスの全てを見抜くように、じ、とベリナスを見据えていた。強い意志を宿した人間の瞳。

言葉を失くすベリナスに、彼は静かに言った。

「貴方が成したいことは、確かに容易ではありません。だが、貴方がそれを成すことで、多くの人の心は動かせる。…………貴方には、そう出来るだけの力があるハズです」

「力…………?」

そんなもの、矮小な自分の影を見つめていたベリナスには、微塵もないように思われた。だがアレンは、力強く頷く。じ、とベリナスの胸許を見据えて。

「…………!」

その視線で、気付いた。ベリナスの胸に誇らしげに飾られた、役人の称号。貴族として爵位をもらっているベリナスの家系は、確かに無力である平民とは、持つ権威が違う。だが。

「…………私の、手腕一つで周囲を黙らせるというのか?」

「恐ろしく才気優れた者を、大国ヴィルノアと戦わねばならない今の情勢で、逃す手はありません。大事の前の小事。それですべては片付けられる」

「……っつ!」

舌を巻いた。彼が若者だからと。多くの絶望を知らないから、そんな淡い希望を持ってしまふのだと。そう一蹴しようとした自分が恥ずかしく、惨めで小さく見えた。

(彼は……、戦い方を知っているのだ……!)

運命と、ベリナスが定義づけた阿沙加との絶対的な身分差を、少しも臆さずに跳ね返せと言えるほどの強さを。ベリナスは、ごくりと固唾を飲み込んだ。

「んあ? なんの話だ? 兄ちゃん??」

「うっせ、バカダヌキ。“セーじ”の話だよ、“セーじ”の!」

「んあ???」

こそこそと脇で話すルシオとロジャーに、アレンは一瞥だけを送って、ベリナスを見る。気高い。

途方もなく、誇り高い青年だ。

ベリナスは胸中でつぶやくと同時に、視線を落とした。

(運命と、戦う強さ……)

戸惑った風に、しかし、拳を握り締めるベリナスに、アレンは小さく微笑った。

その夜。

ベリナスの身には異変が起こった。

……みし、

布団の上に、なにかが乗っている。上質な木製のベッドが、ベリナス以外の重みで軋んだのだ。

(?)

夢半分に瞼を開ける 否、開けようとした。だが、身体は金縛りにあつたように動かず、指一本すら動かない。不意に、首を絞められたように息苦しくなった。

「っ、っつ!!」

喉許に絡みついた奇妙な感触を、ベリナスはふり払おうと足掻く。だが、やはり身体が動かない。冷や汗が背にどっと流れた。開かない瞼の向こうに、濃密な質量を感じる。

冷たく、重く、暗い気配が。

キン、

そのとき。

ベリナスの耳の奥で、金属がすれ合う音がした。閉じた視界が光に包まれていく。

「っ!!」

反射的に腕に力を込める。と、身体はそれまでの鬱屈を晴らすように、バネ仕掛けの如く跳ね起きた。直後、身構えるベリナスの、視界に入ったのは

「死霊?!」

つい先ほどまで自分の上に乗っていた女の顔をした白い霧に、ベリナスは息を呑んだ。

顔立ちはくつきりしない。なのに、その恨みがましい視線が見知ったものである気がして

ぞくり……!

背中に怖気が走るのと同様、夜闇に包まれた部屋が、光に照らされた。

ばさあっ……!

ベリナスの感じた光が、部屋全体を覆う。その光の中から、白い翼を広げて現れたのは 銀髪の女神。蒼穹の鎧を身にまとった、運命の導き手だった。

「お前は何者だ! ……まさか!」

ベリナスは息を呑み、銀髪の女神を凝視した。彼女は無言で腰に差した剣を抜き、目の前の死霊に向かって一閃する。死霊から声は出ない。

ただ、

ねっとり恨みがましそうにベリナスを見据えて　死霊は霧散していった。

部屋に残ったのは、淡い光を放つ女神と、ベリナスのみ。

死霊との遭遇。

戦乙女との邂逅。

これらが繋がっていると一瞬で分かるほど、ベリナスは死に近くも、信仰心が厚いわけでもなかった。ただ動揺するベリナスに向かって、女神は淡々と告げた。死霊を切り裂いた、片手剣を鞘に仕舞いながら。

「……この屋敷は不死者に呪われている。娘が危ない」

「阿沙加が！」

半ば悲鳴だった。

動転していても、事態が把握しきれなくとも。あの死霊が決して好意的なものでないことはベリナスにはすぐに分かった。

あれは、自分を殺そうとした。

そして、

恐らくその殺意は、阿沙加にも

「阿沙加！」

3 ベリナス編完結 妻が遺したものの

「あ、おっちゃん!」

「こらっ! ロジャー!」

必死の形相で部屋に駆け込むと、ロジャーの呑気な声と、アレンの慌てた叱責が阿沙加の部屋に飛んだ。一瞬、ベリナスが酷く馬鹿げた勘違いをしてしまったと思わせるほど、緊張感のない部屋で。

ロジャーとルシオに守られるようにして、部屋の入り口近くに立った阿沙加は、しかし、怯えた表情でベリナスを見返した。

「ベリナス様!」

「なにっ!?!」

ロジャーと、ルシオの前。部屋の奥に立っているアレンと、対峙している影があった。ゆらりと浮いたヴァンパイアだ。それと目が合った途端、ベリナスの背筋に、びりいっ、と電流が走った。

「貴様は ！?!」

夢に見た、妻の悪魔。それに似た面影、はないが、雰囲気を感じて、ベリナスは絶望に息を飲んだ。ベリナスの前で、腰に手を当てたルシオが、ヴァンパイアに向かって自信たっぷりに言い放つ。

「ま、お前もアレンさんに見つかったのが運の尽きだったな! 悪魔だかなんだか知らねえけど、“けーやく”だかなんだかの悪巧み

は、ここまでだぜ！」

「よ！ 虎の威を借る狐ならぬアホネコ！」

「うっせ！ バカダヌキ！！」

ぎゃいぎゃいと言い合う二人とは視線を交わさず、アレンは街にいたときと同じ、ニメートル近い巨大な筒を手にしていた。なにかが入った筒であるが、筒が長すぎて、中がなにかは分からない。

アレンは静かに、その悪魔 エルダー・ヴァンパイアを見据えた。

「方陣が崩れれば、契約書を失くしたのも同じ。貴様がここにいる理由は、もうないハズだ」

愚かな。契約は既に成せり。対価を受け取り、我がきた時点で成就しているのだ

エルダー・ヴァンパイアは愉悦の表情で阿沙加を見ると、にいと口端をつり上げた。

「……そうか」

つぶやいたアレンが筒に手をかける。と、筒を巻いていた紐を一瞬にして解いた。中から現れたのは、ニメートル超の剛刀。それを握り締めて、アレンはもう一度だけ、言った。

「ならばその契約ごと、俺が断ち切る！」

莫迦^{バカ}な

！

嘲笑にも似たつぶやきをエルダー・ヴァンパイアが零した瞬間。その悪魔の手に宿った魔力が、

斬っ！！

魔法として放たれるよりも先に、切られた。その意味を理解できず、軽く首を傾げたエルダー・ヴァンパイアが不思議そうに自分の体を見下ろす。

それも、一瞬のことで。

ず、ずず……っ、

頭から足先まで、一刀両断されたエルダー・ヴァンパイアの魂が、

ぎぎ。いいいやああああ……っ！！

凄まじい叫声と共に、闇の中へと沈んでいった。暗い、深い闇の中に沈んだような部屋の中で、そこだけ、壮絶なまでに清廉な輝きを放つ、青白く光るアレンの持つ剛刀が。

チンと、存外、小さな音を立てて鞘に納められた。部屋を覆う、暗い瘴気ごと真っ二つに切り裂いて。

「……終わりだ、ヴァンパイア」

エルダー・ヴァンパイアが居た辺りの部屋の壁を検めながら、アレンは傷がないことを確かめると、小さく頷いた。アレンを見上げて、ベリナスは譫言たつわんごんのようにつぶやく。

「君は、一体……アレン君？」

夢に出てきた妻に似た悪魔。それが阿沙加を襲ったという事実から、ベリナスは金縛りにあったように動けずに居た。ふり返ったアレンが、静かに笑う。

「貴方々を見かけたときから、妙な感じがしたんです。俺は魔導師だから、そういう感覚に敏感で……。だから屋敷の掃除をさせて頂いたときに原因を探って、阿沙加に憑いた魔術の、厄除けをしたんですよ」

「しかし……、あれは……！」

「昼間に気付いて、念のために身代わり人形を仕込んでおいたのが幸いしたようです。方陣を崩しても、この威力。……さっきの使い魔の主は、相当高位の魔族か」

最後は独り言だった。アレンは改めて、阿沙加に向き直る。

「怪我は？」

「いえ……！」

ふるふると小さく首を横にふる彼女に、そうか、と頷いてアレンは踵を返した。ベリナスが、引き止めるように彼の名を呼んだ。

「アレン君！」

「すみません。見知った気配がするので会ってきます。ルシオ、ロジャー。夜更かしはほどほどに、な」

「任せてください！」

「今夜はふかふかベッドで“枕投げ男勝負”だぜ！ アレン兄ちゃん、早く帰って来いよな！」

「……ほどほど、は伝わりにくいかな？」

「じゃ、後でな！ 兄ちゃん」

どこまでもマイペースで言い切つて、客間に戻っていくロジャーたちの背中を見つめて、アレンはため息を吐くなり阿沙加の部屋を後にした。

阿沙加の部屋は使用人ということもあつてか、二階の隅だ。そこから四、五メートルほど歩いて玄関ホールに行くと、彼の見知ったというか、最近知つたばかりの女性が、神々しい光を放つてそこに立っていた。

月明かりの中でただ静かに映える、銀の女神。

長い銀髪を肩のあたりから三つ編みにした女神は、アレンの姿を認めるなり、青い瞳をそつと押し上げた。白い彼女の肌を強調するように、彼女の全身からは淡い燐光が放たれている。

「また、会つたな……」

アレンが静かにつぶやくと、銀の女神、レナス・ヴァルキュリア

は無言のままアレンを見返した。階段を下りるアレンの足音が、レナスのいる玄関ホールで止まる。

ちょうど、二メートル。

アレンに染み付いた戦闘習慣が、ぴたりと足を止めるその場所で、アレンは頭上の部屋を仰いだ。阿沙加の部屋とは真逆の 左側の部屋を。

「……貴方は知っているのか？ 阿沙加にかけられた呪いの主が、一体なんなのかを」

問うと、女神はわずかに身を動かした。腰に差した剣が、ちやりと鞘鳴り音を立てる。“戦”乙女といわれるだけあって、彼女の動きに隙はない。蒼穹色の鎧に身を包んだ女神は戦における凛々しさと、女神ゆえの美しさを兼ね備えた存在だった。

「この原理はお前が理解した通りだ。でなければ、あの部屋で見つけた魔神の方陣を、ああも容易く無力化させることは出来ない」

「魔神の、方陣……？」

初めて聞いた名を口にするように、思案顔を浮かべるアレンに、女神 レナスは小さく目を細めた。

「少なくともアレによって、あの少女は死ぬハズだった。そしてあの男がその命を代償に、彼女の代わり身となる運命だったのだ」

「それが貴方の予見、と？」

「……戦乙女が見定めた死期を、お前は狂わせた」

つぶやいたレナスは、淡く光る蒼白の鎧から白い翼を広げると、細身の剣を抜き放った。

ひゅんっ！

まさに神速。一気に放たれた白刃が、アレンの喉許で止まる。だがアレンは涼しい表情のまま微動だにせず、じ、とレナスを見据え返した。

「なぜ、抵抗しない？」

白刃を喉許に突きつけて、レナスは問いかける。

「貴方に斬る気配がなかった」

「甘いな。人間よ」

こともなく、はつきりと言い放つアレンに、レナスは小さく失笑した。レナスが本気になれば、殺気など起こさずとも首を落とせる。だが目の前の青年は、それすら理解した上で言っていた。彼は彼女の抜剣に、反応できる強さを持っていた。その事実をレナス自身は、知らない。

アレンは喉許にある剣を気にせず、微笑った。

「それに、貴方に礼を言いたかった。ベリナスさんを救ってくれて、ありがとう」

「！」

レナスは目を見開く。
彼は、知っていたのだ。

悪夢にうなされたベリナスが、レナスによって救われたことを。

ベリナスの悪夢は、妻の呪いの余波を受けた副産物のようなものだ。それに干渉する様な能力をアレンは持っていない。
彼自身、ベリナスが悪夢にうなされているのを察知したわけではないが、なんとなく分かった。

この戦乙女が、少なくともアレンが屋敷にいる間、ずっとベリナスの隣にいたことを。

見えなくとも、感じた。だからアレンは静かに微笑った。剣を突きつける相手に向かって、少しも臆さずに。

レナスはそんなアレンを見据えて、目を細めた。彼の心の強さ、そして 感覚の鋭さに。

「貴様……」

エルダー・ヴァンパイアの瘴気と対峙していたにも関わらず、絶対感知不可能な、神の気配を。

こちらが知らせなければ、絶対に知られるハズのないレナスの気配を。

たった二度の邂逅で感じ取って見せたのだ。警戒心を持ってアレンを睨むレナスに、アレンは小さく微笑った。

「貴方は死期の近い戦士の魂を、神界に連れて行く神、らしいな。
……だが、貴方自身は人に死を与える神じゃない。だろう？」

「……どういう意味だ」

「貴方は人の命を引き取る。だが、その心を守ろうとした。アリユ
ーゼが自害したあのときも。ベリナスさんが闇の気に晒された今も。
少なくとも、俺にはそう見えた」

レナスの成したことを、人には知れるはずもない彼女の行いを、
アレンはまるで見ていたようにつぶやいた。運命ノルンの女神の中で、最
も神格の高いレナスを以ってしても、目の前にいる男の瞳は、その
奥にあるものは窺い知れない。

人にしては、あまりにも澄んでいて。神にしては、あまりに
も深すぎるその瞳を。

「……………」

レナスは、ふ、と視線を下ろすと、アレンの喉許に突きつけた剣
を納めた。無言のまま踵を返すレナスに、アレンが問う。

「行くのか？」

だがレナスは質問に答えず、ただ肩越しにアレンをふり返って、
言った。

「戦乙女の見定める死期は絶対だ。……次の妨害は、容赦しない」

言い置いて。ふわりと中空に飛び立つレナスを、アレンは制した。

「一つだけ」

鮮やかな蒼の鎧から清廉な翼を広げて、レナスがふり返る。

自分でもどうしてふり返ったのか。

レナスが首をかしげる間もなく、アレンが言った。

「あの方陣を作った奥さんを。貴方なら助けられないか？」

アレンが昼間に見つけた魔神の方陣。それを発見した場所がベリナスの妻の部屋だった。

今日、屋敷にきたばかりのアレンが、犯人をベリナスの“妻”と断定できたのは、あの魔神の方陣が、妻の部屋のクローゼットに刻まれていたためだ。

阿沙加が着るにしては、あまりにも豪華な服装で。

ベリナスの母にしては、あまりにも若いデザインで。

そしてなにより、阿沙加とベリナスの関係を一目で看破したアレンには、誰がなぜ、そのような方陣を組んだのか、大体予想がついていた。

そして憎しみに駆られた妻が、すでに逝去していることも。

レナスはアレンをふり返って、首を横にふった。

「魔神に贄として魂を捧げた人間は、魔神の一部として取り込まれる。消滅した魂を、私が救うことは出来ない」

「魔神が死んだその後も、か？」

問いかけるアレンに、レナスは一瞬、耳を疑った。

人間が、魔神を？

蟻が象に挑むような話だ。

賢明であると思われた男が、しかし人間であるがゆえに無知だということを出して、レナスは、ふ、と失笑した。

「魔神に人間が挑むことは不可能だ」

「魔界にいるから、か？」

「そうだ」

それもヴェリザともなれば魔神でも上位神だ。アース神族のレナスたちでさえ、まともに相手をすればどうなるか分からない魔界を、まさか人間に扱えるはずもない。というより、論外だった。

彼は魔界に向かう術さえ、持っていないのだから。

アレンは静かに視線を落として、それからもう一度、レナスを見上げた。

「……それで。最初の質問の答えはどうなんだ？」

魔神を殺した後、解放される人間の魂を。

そんな小さなものに拘るアレンに、レナスは鼻で笑った。まるで話にならない。

「出来ないことを知っても、無駄なことだ。どの道、お前には関係ない」

きっぱりと言い放つレナスに、しかし、アレンは小さく微笑した。不敵とも言える底知れない蒼瞳を、すう、と輝かせて。

「それは俺が考える。俺に出来る最大限のことを。……だから」

言葉を切った人間は、恐れ多くも神であるレナスを、す、と真正

面から視線で射抜いた。

「もしも俺が成功したときは、奥さんをよろしく頼む」

射抜く、というにはあまりにも柔らかかに。しかし、確かな力を感じさせる、妙な躍動感を以って。アレンは言った。

だが人間の戯言にレナスは答えず、すう、と世間が消えていった。

「……すまない」

誰も居なくなつた虚空に、アレンのつぶやきが洩れる。

そして、ふ、とため息を吐いたアレンは、“枕投げ男勝負”が行われているであろう、客間へと帰っていった。

翌朝。

早朝とっていい時間帯に旅支度を終えたアレンは、眠気眼の口ジャーとルシオを連れて、ベリナスの屋敷の前に立っていた。

「もう行ってしまふのか？」

「ええ」

見送りにきたベリナスに言われ、アレンが小さく頷くと、ベリナスは不満そうに眉根を寄せた。

「君は阿沙加の命の恩人だ。せめて、その礼をしてからでも……」

「方陣を解いたのは、一宿一飯の恩義です。気になさらないで下さい」

「しかし……！」

物言いたげに口を噤むベリナスに、アレンは、ふ、と微笑いかけた。ベリナスの隣で、彼と一緒に見送りにきてくれた、阿沙加を一瞥して。

「お幸せに。吉報をお待ちしています」

アレンの言葉に、阿沙加とベリナスが照れたように笑った。そのベリナスに、アレンは手を差し伸べる。すると、ごしごしと、目許をこすったルシオとロジャーも続いた。

「元気でな！」

「世話になったぜ」

三人の、差し伸べられた手を見下ろして、ベリナスは大きく頷いた。これでは握手というより円陣のようだが、ベリナスは気にせず、に彼等の手に、自分の手を重ねた。

「ほら、阿沙加姉ちゃんも！」

ロジャーに言われて、阿沙加が戸惑いながらも手を差し出す。五人の手が重なった所で、アレンが言った。

「次に会う、そのときは」

ベリナスを見やってアレンは微笑う。それに、こくりと頷くベリナスが、後に続いた。

「私は誓いの言葉を、阿沙加と交わそう。例えいくらかかるうとも、ラッセンの市民に、私たちを認めさせてみせる」

「御武運を」

「君も。君たちの旅に、幸運が待ち受けんことを」

互いに、こく、と頷き合う。それと同時に、円陣を組んでいたロジヤーが張り切った声で叫んだ。

「がんばるぞー！」

「くくくおー！」「くくく」

円陣が解ける。

ベリナスは柄にもなく腹からの大声を出して、驚いた表情でこちらを見る阿沙加に笑いかけた。もう表に出ているというのに、その彼女の肩を抱く。

「ベリナス様……」

幸せそうな彼女の声が、今のベリナスには活力だった。

そして、

ベリナスに彼女を選ぶ勇気を与えてくれた青年の背を、ベリナスは建物の影で見えなくなっただけから、見送り続けた……。

1 カミール村編 アリユーゼvsアレン

レナス・ヴァルキュリアは天空から下界を見下ろした。凜とした白皙には、怒りの色が滲んでいる。

怒り。

本当にそう分類していいのかは、自分でも分からない。だが、レナスは地上を見下ろし、眉間に深い皺を刻んだ。

「あの、人間め……」

眼下に広がる鬱蒼とした森林の向こうに、小さな村がある。上から見ると、本当に些細な寂れた村だ。

レナスはその村を見据えて、忌々しげに目を細めた。

……

ラッセンを出立して数日。アレンたちは当てもなく旅を続けていた。鬱蒼とした森林を抜け、ようやく辿り着いたのは閑静な村だった。

一口に村といっても、ただの箱物に近い。動くものがなに一つない、呪われた村だった。

カミール村。

ここ数日で村人が一人も居なくなった、アルトリア領内の小さな

山村だ。

「に、兄ちゃん……」

「アレンさん……」

いつもはどこにいても賑やかな喧騒を忘れない亜人の少年たち
ロジャーとルシオですら、このときばかりはあまりの光景に息を
呑んだ。

アレンは視線を左右にふる。村のあちこちに、壊れた石像が何体
も散乱していた。

男性、女性、子供、老人 ……。

それらは例外なく、無残に村に転がっている。足だけ、手だけ、
首だけとなって。五体満足な石像は、一つも見当たらない。
アレンはわずかに目を細めると、ふと、足を止めた。

「あれは……」

つぶやいて、視線を上げる。ロジャーたちがあとを追うと、村の
奥にある遺跡の入り口に、冒険者風の男女が立っていた。 ち
らは石像ではない。生身の人間だ。

「おお！ ちゃんと人が居たじゃんかあ！」

ロジャーが飛びつくように駆け出した。建物の入り口に立った男
女が、びくりと肩を震わせてふり返る。若い二人組だった。二人の
内、青年の方が、ロジャーたちを見るなり目を瞠る。

「村の生存者！？……じゃあ、ない……か……」

黒髪を頂で一つにまとめた青年　カシエルは、ロジャーとアレン、ルシオを順に見やってから、ため息を吐いた。青銅の鎧は簡素だが、使い込まれている。失望したようなカシエルを見やって、アレンは首を傾げた。ロジャーのあとを追って、彼も建物の入り口に向かう。カシエルは見慣れない　やや錆びた剣を握っていた。

「我々は先ほど村に着いた者です。生存者、と言われましたが、これは一体……？」

慎重にアレンが問うと、カシエルの隣にいる茶髪の女剣士　セリアが、陰鬱な表情で答えた。

「私たちは、情報屋の依頼でこの村にきたの。村が魔物に襲われたから、助けてくれって」

「だが、実際は見ての通りさ。ここにいる村人は……全員石化された上で、破壊されちゃってる。村を出るなら、早い方がいいぜ」

カシエルは握った錆剣を見下ろして、やり切れない調子でつぶやいた。アレンの傍らから、ルシオが首を傾げる。

「そうすると、兄ちゃんたちはどうすんだ？　もう事件は終わってるように見えるけど、兄ちゃんたちは、まだ村を立ち去りそうにないぜ？」

「とりあえず、村の生存者を探さ。せつかく石化解除の薬を用意したんだ。一度くらい、使っておきたいだろ？」

動いている村人、という期待は捨てた。

言外に言い放つカシエルに、セリアの表情が曇る。

アレンは視線を落とし、カシエルが握っている古い剣を見据えて、尋ねた。

「村人全員を石化させる相手に、なにか心当たりが？」

「恐らく、メドーサだ。村人以外は石化してない。石化させたあとには必ず破壊する。そんな知恵がある魔物と言え、な」

口惜しげに下唇を噛み締めるカシエルに、アレンは頷いた。

「では、その剣は？」

「この建物の門代わりになった剣だよ。刀身のところにルーン文字が刻まれてて……、えっと、セリア？」

なんと書かれていたのか思い出せなくて、カシエルは首を傾げた。セリアが力なくだが、微笑う。

「“蒼穹の煌きを集め鍛えし剣、グラン・スティング。我、この地に絶対悪を封ずる”と刻まれていたの」

「“ぜつたいあく”ってなんだ？」

「それに、封じてあったものを外してもいいのか？ 兄ちゃん？」

首を傾げるロジャーとルシオに、カシエルは折り合い悪く頬を掻いた。

「それは……まあ、」

言葉を濁すカシエルを視界の端に、アレンは階段を上った。村の中でも一際存在感のある巨大な建物の扉が、わずかに開いている。アレンは門のあった場所と、カシエルの持っている剣を見比べて目を細めた。精神を集中するように、視線を鋭くして。

「……既に、封印は解かれたあとのようだ」

つぶやくアレンに、カシエルは意外そうに瞬いた。

「アンタ、魔導師かなんかなのか？」

「……ええ」

小さく頷いたアレンは、半開きになった建物の入り口を押し開けた。

ぎいいい……、

鉄錆びの扉が、悲鳴を上げるようにゆっくりと開かれる。中にあったのは、地下への階段。それをしばらく降りて行くと、曰くありげな埃っぽい部屋を見つけた。床に、なんらかの魔法陣が描かれている。

「あれは……！」

後ろからセリアが、驚きながらも駆け寄る。石造りの部屋の中祭壇に腰掛けた少女の石像がある。セリアは上ずった声で叫んだ。

「奇跡よ！ 石化した状態でそのまま残っているなんて。カシエル、薬をちょうだい！」

少女の石像に傷がないことを検めながら、セリアはふり向かずに言った。だが、彼女の興奮に反して、返ってきたのは沈黙だ。

遅れて部屋に入ってきたカシエルは、深刻な面持ちで少女の石像を見るなり、つぶやいた。

「……そういうことか」

「え？」

相棒を、セリアは不思議そうにふり返る。いつもなら、自分と同じように生存者の無事を喜ぶ彼が、緊張で声が強張っていた。

カシエルは堅い面持ちのまま、床に描かれた魔法陣の上で足を止めた。

「子供のいたずらで、魔物の封印が解かれたのさ。こんなところに子供がいるの、おかしいだろ？」

セリアの表情から、喜色が消える。

ルシオが眉をひそめた。

「子供の悪戯だった!?」

驚きに見開くルシオに、カシエルは頷いた。アレンの足許でロジャーが、憤然と、ぴよんぴよんと跳ねる。

「こらあっ！ そんな危ないモン封印してんなら、ちゃんと入れな

いように、貼り紙の一つでもしろってんだ！ 危なっかしいにも程があるじゃんよお！」

「……まったくだ」

呆れたように頷くルシオの傍らで、ロジャーは手斧を掲げて全身で怒りを表現する。

村から避難しろ、というカシエルたちの忠告は、どうやら聞く気がないようだ。カシエルはそんな彼等を横目に、セリアをふり返った。懐から石化の解薬が入った小瓶を取り出して、肩をすくめる。

「今すぐ石化を解く必要はないよな。子供の泣き声は苦手なんだ」

弱り切った声で言うカシエル。

壊れた石像が村人だと、この村に住んでいた少女が分からないわけがない。

眉根を寄せるカシエルに、セリアは曇った表情で頷いた。

「……そうね。村を出てからでも遅くはないけど」

瞬間、セリアの表情が固まった。

その少女は百年後に目覚めさせる予定だ。私からの謝礼としてな……。その方が、幸せだろうか？

地を這うような声。この場にいる誰でもない、第三者の声だった。

「「「「「！?」「」」」」

ざっ、と一同が構えた。各々、自慢の得物に手をかけ、油断なく

周囲を見渡すが、声の主は見当たらない。冷たく、硬く、どこか不吉な声だ。

「この野郎！ 姿を見せやがれ！」

カシエルが体格に似合わぬ大剣を抜いて、威嚇する。だが返ってきたのは、不吉な第三者の忍び笑いだった。

「善意と悪意を両立させて、なにが面白いの！？ 事実を覆い隠しても、なにも変わらないわ！」

細身の剣を鋭く構えながら、セリアが恫喝する。
瞬間。

石室の間が、ぬらりと動いた。

「「危ねえっ！」」

ロジャーとルシオの声。カシエルはただ、首を傾げた。

「え？」

セリアが、カシエルを見据えて表情を凍りつかせる。その瞳が、恐怖に揺れた。

火花が散る。

カシエルの視界に、白いなにかが、蛇のように地面に落ちていった。兼定カタナを納めていた、筒が。

なにつ！？

カシエルの背中を狙い打った『その者』は、暗い声で驚愕する。

『その者』の手にした槍が、カシエルの背を突き刺さんとした矛先が、音もなく零れ落ちる。

「……お前が犯人か」

ぽつりとつぶやいたアレンの兼定が、煌いた。

くっ！

舌打ちし、『その者』が咄嗟にあとずさる。柄の長い剛刀をアレンは苦もなくふる。あまりの剣速に、『その者』は表情を歪めたが、人間とは思えない抜群の跳躍力で、兼定の尺の外に逃れた。

ハズだった。

っ！？

だが、兼定は逃れたハズの『その者』を、容赦なく切り裂く。

馬鹿なっ！？

驚きに目を瞠る間に、兼定の刃から生じた真空波に、身を両断される。

斬ッ！

無惨にも、槍を握る『その者』の腕が地面に落ちた。

「……す、ごい……！」

一部始終を見ていたセリアが、ぽつりとつぶやく。カシエルが呆然と目を瞬くと、アレンは『その者』を見据えたまま、ぶんつ、と

兼定を一閃させた。

ぐう……、貴様アツ！

落とされた右腕を抱えて、『その者』は、カツと目を見開いた。石室の闇が集約され、ぐうう、と縮んでいく。瞬間。『その者』を中心に、闇が爆発した。

ハアツツ！！

壮絶な気魄が、暗い声とともに発せられる。カシエルは咄嗟に両腕で頭を庇い、その場に伏せた。吹き荒ぶ風が、カシエルの長い髪を強かに打ちつける。

「な、なんだ……！？」

事態が把握しきれず、カシエルは身を伏せたまま視線をめぐらせた。傍らで兼定を握るアレンは、集約した闇が放つ烈風の中でも、悠然と立っている。じ、と闇を見据えて。

カシエルと同じく身を縮めたセリアが、両腕の隙間から驚きの声を上げた。

「不死者　グレーターデーモン！？」

「^{デーモン}悪魔だと！？」

カシエルも目を見開く。

集約した闇の中から魔物が、巨大な四肢を広げて低く吼える。

グオオオオ……！！

今にも天井につきそうな巨躯を持ったその魔物は、アレンを見下ろして歪な唇を割った。

この姿となれば貴様に一片の勝利もない！ 死ね、人間よ！！

発達した筋肉に覆われた灰色の腕を、グレーターデーモンが掲げると同時に、その掌に一瞬にして闇が集約する。空気を丸ごと押し込めるように風を巻いて集う闇に、カシエルは心の底から恐怖した。

(殺される ！)

冷たい汗が、額を、背を、手を這う。かちかちと鳴る死への恐怖が、耳の奥から聞こえた。かちかちと、それが自分の咬音であることにも気づかずに、カシエルはただ、死のカウントダウンが近づくと錯覚に陥った。

「同じことだ」

アレンの声が、カシエルの震えをびたりと止めた。

「……………え？」

呆然とアレンを見上げる。アレンの身の丈以上もある剛刀が、ふり抜かれた。闇を掲げるグレーターデーモンを真横に両断して、

ば、馬鹿な！？ こんな、こんなことが……………！

目を見開くグレーターデーモンの、集約していた闇が霧散する。

ゆっくりと、バランスを崩したグレーターデーモンの巨体が、

ぱああああ……ッ！

突如、光に包まれた。

光の翼を広げた、女神によって。

「！」

アレンがわずかに視線を上げる。そのときには既に、銀色の髪をなびかせながら、レナスの手にした剣が、グレーターデーモンを縦に両断していた。

グアアアアア……ッッ！！

断末魔の悲鳴を上げて、グレーターデーモンが光の中で散っていく。

その様を、じっと見据え、カシエルはレナスに視線を向けた。空から降るように現れた、この女神を。

「戦乙女、ヴァルキリー！？」

蒼穹の鎧に身を包み、女神は溢れんばかりの光を放ちながら地上に降り立った。

金糸で刺繍された豪華なスカートから、すらりとした彼女の足が見え隠れする。手にした剣と、蒼穹の鎧。戦士の防備を身に纏いながら、尚も女性らしい神々しさを放つ、その美貌の女神を。

カシエルは呆然と見据える。

「忠告はした。覚悟は出来ているか、人間よ」

凜とした女神の美声が、アレンに向かって鋭く放たれる。対峙したアレンは兼定を納め、レナスに向き直った。

「この場で誰かが命を落とすことが、貴方の見た運命、ということか？」

「そうだ。お前の存在は、主神オーディンが定めた運命を狂わせる」
答えたレナスは剣先をアレンに向けた。と。レナスが剣を一閃する。上段から袈裟状に切り込んだ。

(速い！)

思わず息を呑んだカシエルが瞬く間に、レナスの剣がふり落ちる。明らかにグレーターデーモンとは比較にならない実力。カシエルは冷や汗が滲むのを感じた。

キーンツツ！

わずかな火花を散らして、剣戟が交じり合う。カシエルが瞬いたときには、アレンが黒刀を手に、レナスの剣と刃を合わせていた。兼定ではない。

この黒刀は、持ち主の意思に合わせて形状を変えるアレンの特殊武器だ。ウェポン
レイザー

「「なっ……！？」」

レナスを含めて、カシエル、セリアが驚愕に目を見開く。

「どこから、あんなものを……!?!」

「ヴァルキリーと、互角の剣速だと!?!」

セリアとカシエルの驚きが、レナスの舌打ちと重なる。同時。レナスの背に、光の翼が具現化された。

「我と共に生きるは冷厳なる勇者、出でよ!」

薄暗い石室に光が満ちる。ばさりと音を立てて光の翼が広がると、あまりの眩しさにカシエルたちは目を細めた。光の中から、カシエルの見知った男が現れるとも知らずに。

「……容赦しねえぜ」

石室に響き渡る、重低音。その声を聞いた瞬間、カシエルは大きく目を見開いた。ぶるりっ、と身体が震える。

「そ、の声は……っ!」

上ずった声でカシエルが叫ぶ。光の中から、三つの影が現れた。アレンの兼定よりも更に長い、三メートル近い大剣を苦もなく握り、挑発的な、不敵な笑みを口許に浮かべた凄腕の傭兵。アリユーゼ。そして、アルトリア王唯一の実子にして第一皇女、ジェラード。クレルモンフェランの若き弓士、ラウリイの三人だった。

「馬鹿な……! あいつ、確か死んで……!」

アリユーゼを見据えて、カシエルは混乱する頭で視線を左右にふる。カシエルの目に留まったのは、戦乙女ヴァルキリーの姿。

王女殺害の犯人として、死んだアリユーゼの魂は、

「そう、か……！ 勇者の魂エインフェリアになってやがったのか！」

一瞬だけカシエルを見やったアリユーゼが、に、と笑ってみせた。

「ヴァルキリー、手加減しないでいいんだろ？」

大剣を構え、アリユーゼはアレンを見やってつぶやく。

対峙したアレンが、ふ、と口端を緩めて、ロジャーとルシオをふり返った。

「兼定を頼む。ロジャー、ルシオ」

二メートル強ある剛刀を横たえ、自分の腰にも満たない少年たちにそう言うと、少年たちは自慢げに、おう、と小さく答えた。見た目にも重そうな剛刀が、アレンからロジャーたちの手に渡る。

「ちゃんと持てよ！ バカダヌキ！」

「お前こそバランス崩すんじゃないぞ！ アホネコ！」

口喧嘩を交えながら、二人は自分の身長の子三倍はありそうな剛刀の端と端を持つ。それを見届けるなり、アレンはアリユーゼをふり返った。

「……っい」

アレンは黒刀を象ったレーザーウェポンを、居合いの体勢で構える。対峙したアリユーゼが、に、と口端を緩めた。

「ふんっ。行くぜ！」

だんっ、と重い音を立てて、アリユーゼが踏み込む。同時。通常からは考えられない間合いで、アリユーゼが大剣をふり下ろした。豪快に風を切って、アレンを叩き潰すように刃がふり落ちる。

「ハアッ！」

ぶおんっ！

その威圧的な風が、カシエルたちにも届きそうだった。アリユーゼがふり切る寸前でアレンも踏み込む。重力に従って落ちる大剣を、抜刀術で薙ぎ倒すように、迷わずふる。

ギイイイツ、と擦れ合う刃の音が、火花を散らして不快に響いた。

かちかちかちかち……、

刀と化したレーザーウェポンと三メートル強の大剣。アレンとアリユーゼ。得物の上でも、体格の上でもアリユーゼが勝るに関わらず、刃を交え合った両者は、ぴたりと固まっていた。

「……やるじゃねえか」

卓越した筋肉を軋ませながら、アリユーゼがにやりと笑う。アレンは、に、と笑い返すと、くるりと刀を返した。横薙ぎから面打ち。アリユーゼの脳天を叩き切らんと走る斬線に、アリユーゼは息を呑むと同時、大剣を横に構えた。

ズドオンツツ！

「ぐ、うつ！」

みしみしとアリユーゼの腕が軋む。一瞬、握力が飛んだ。が、そんな彼の目に飛び込んできたのは、対峙した青年の、容赦ない追撃。

（突き　！？）

目を瞠る間もない。強烈な面打ちで完全に動きを止めたアリユーゼに、アレンは、ぐ、と刀を握るなり、踏み込んだ。

「疾風突き！」

ズドンツツツツ！！

黒刀の刀身が白い風を巻き、アレンの突きがアリユーゼの大剣と身体を軋ませる。

「アリユーゼ！」

「アリユーゼさん！」

唸るアリユーゼに、ジェラードとラウリイが目を瞠る。アリユーゼは歯を噛み、後方に吹き飛びそうな衝撃に耐えた。ざざざざと遺跡の床を掻いて後退したアリユーゼに、アレンは刀をふり下ろす。瞬間。アレンは目を見開いた。

背中に怖気。

（拳ッ！）

「兄ちゃん！」

「アレンさん！」

ロジャーとルシオの必死な叫び。

同時、

アレンの刀をかくぐって、アリユーゼの裏拳が走った。

前ぶりもなく最短の距離で走るアリユーゼの拳が、アレンの前髪をさらう。と、アレンが気付かなければ直撃したバックスピナーツクルが、不気味な轟音を立てて空を切った。

「破ッ！」

アレンが打ち込む。風を切って落ちる刃を、アリユーゼはわずかに身をひねって躲す。と、

「俺の勝ちだ」

にやりと笑うアリユーゼの大剣に、炎が宿った。

「奥義、ファイナリティブラスト！」

アリユーゼの身体が、数倍大きく見える。燃え盛る炎が大気を揺らし、重い踏み込み音を立てて弾けた。

ズドオンツツッ！！

アレンは咄嗟に受け太刀する。強力なアリユーゼの突き。それに伴う強烈な爆発が、波状攻撃でアレンの腕を痺れさせる。

「……っ！」

息を呑むアレン。同時。アリュージェの走り抜けたあとを、火柱が続いた。

ズドドドドオツッ！

幾筋もの火柱が、地面から生える。アレンは咄嗟に、剣を横に呷いだ。斬ッ、と音を立てて、火柱が両断される。が。

「っー！」

アリュージェの切り上げが、アレンの身体を吹き飛ばした。

ズガアアツッ！！

炎が爆ぜる。

「、カアッ！」

衝撃に耐え切れなかったアレンが、息を吐いた。地面に叩き落ちる。

「アレン兄ちゃん！」

「アレンさん！」

ロジャーたちが兼定を握り、叫ぶ。
ダアンツ、と弾けるような音と同時に、白い煙の中から、刃が走っ

た。

斬ッ！

疾風の刃。

「空破斬じゃん！」

ロジャーの嬉しそうな声を背景に、アリュューゼは大剣を払って、防ぐ。

「、チイツ！」

炎に焼かれた煙が晴れたところには、アレンが刀を手に立っていた。刀の柄を、両手で握り込んで。

「……ほう」

静かに口端を吊り上げたアリュューゼは、そこでレナスをふり返った。

「手え出すんじゃないぞ。ヴァルキリー」

大剣を横たえ、アリュューゼは己の領域テリトリーを示す。剣を構えたレナスが、アリュューゼを一瞥する。

「奴は、俺の獲物だ」

レナスにはなにも言わせないよう、アリュューゼは好戦的な笑みを浮かべたまま、大剣を握りこむ。

アレンがわずかに、目を細める。　　微笑う。

「貴方とは、一度本気でやりあってみたかった」

「俺もだ。だがな　」

アリユーゼのファイナリティブラストを喰らって、アレンとアリユーゼの間合いは三メートル強。剣戟の間合いとしては、遠距離と
いっついいい。

改めて、アレンが刀を構える。アリユーゼはそれを鼻で笑うと、
手にした大剣をふった。

「だったら、自分の得物。^{テメエ}抜いたらどうだ！」

アリユーゼの踏み込み速度が上がる。上段からのふり下ろし。ギ
インツ、と火の粉を散らして、刃を寝かせ受けるアレン。

瞬間。

アリユーゼの大剣が、息つく暇なくふり落ちた。踏み込もうとす
るアレンを押しつけ、卓越した腕力で大剣をふるって、間合いに入
れさせない。

「、っ！」

息を呑むアレンに、アリユーゼの不敵な笑みが向けられる。

「兄ちゃん！」

「兼定を早く！ アレンさん！」

少年たちの悲壮な声。

「剣のふりが速い！」

ロジャーたちの傍らで固唾を飲んでいたセリアが、譫言のようにつぶやく。

一際甲高い金属音が立つと同時に、更に激しい火花が散り、アレンの身体が後退いた。豪速の、アリュージェの剣。その破壊力と剣速に、カシエルが舌を巻く。

「アリュージェの奴、俺が知ってるときよりも、ずっと強くなってやる……！」

知らぬ間に、いつもカシエルたちの想像を超えた所に行くアリュージェ。その彼の凄まじさが、エインフエア勇者の魂となって磨きがかかったようだ。

レナスの傍らに立ったジェラードが、得意顔で叫ぶ。

「思い知ったか無礼者が！ アリュージェに勝とうなぞ、百年早いわ！」

腰に手を当てて、ふんぞり返るジェラード。ロジャーとルシオが鋭く反応した。

「んだとお！」

「アレン兄ちゃんは今こんなもんじゃねえ……！」

噴気するロジャーたちを置いて、アリュージェの剛剣を紙一重で捌き切るアレン。

ラウリイは、ほう、と息を吐いた。

ズドンツツツッ！

鋭い踏み込み音を立てて、アレンが滑走する。空間ごと叩き切るアリユーゼの剛剣と、空間ごと貫くアレンの速剣が、交り合う。両者がぶつかった瞬間。妙な風が、同心円状に広がった。

ぎしいいつつ、、、！

が。

「な、ツ！？」

目を見開くアリユーゼ。アレンは突きを放った。水平切りに合わせた突きと、もう一つ。

「！」

全く同じ威力を持って走る突きに、アリユーゼは舌打ちする。同時、拳で叩き落した。力など込める間もない。半ば強引に、自分と^{アレン}刀の間に、拳を割り入れたただけだ。
が。

（更に、だと！？）

アリユーゼが目を見開くより先に、弾いたハズの刀が、アリユーゼに向かって走っていた。

三連疾風突き。

その悪魔的な突きの連撃に、アリユーゼは命からがら、上体反らしでどうにか躲した。びゅんっ、と自分の真上を走る刃が、寒気を

呼ぶ。

同時。

「夢幻鏡面刹！」

アレンの斬線が、増殖した。

ぴっ、ぴびびびびびびっ、

音もなく、増殖した斬線がアリユーゼを襲う。ぱっと見ただけでも一瞬で十を超える斬線。残像と実体、その分別は 不可能に等しい。

「おおおっつー！」

大剣の柄を握り、アリユーゼは吼えた。

ギキキキキキキキインッ！！

息つく間もなく浴びせられる斬線に、アリユーゼの大剣が重なる。火花が散る。

怒涛の乱撃に、アリユーゼの食いしばった歯の根が、ぎしぎしと鳴った。

(くっ！ 速え ！)

アリユーゼが呻くと同時、アレンの刀が輝いた。白く、青く。

カァァ……っ！

アリユーゼが息を呑むと同時に、輝くアレンの白刃が、受け太刀したアリユーゼの身体ごと、上空に吹き飛ばした。

「破アツ!?!」

アレンの裂帛の気合と同時に、光の刃と化した刀が、アリユーゼを切り上げる。

轟音を立てて、アリユーゼの巨体が浮かぶ。が、すぐに体勢を立て直したアリユーゼは、上空に飛んだ状態から拳をふり下ろした。

「ハアツ!」

口の端に垂れた血など、拭う暇もない。アリユーゼは中空でくると反転するなり、アレンに向かって走った。同時。腰溜めに握った拳を、アレンも繰り出す。炎と気を巻いた、己に放てる最強の拳を。

「バーストナツクル!」

アレンが叫ぶと同時に、両者の拳が、ぶつかる。

ゴオツツ!!

衝撃波と熱風。全く互角の拳が、遺跡の中央で激突し合う。

「そんなっ!?!」

「兄ちゃんのバーストナツクルと、互角だっ!?!」

目を見開くルシオとロジャーを置いて、壮絶に笑んだアリユーゼ

が、ちゃっ、と大剣を握り締めた。

「奥義、ファイナリティブラストおをつっ!!」

超近距離から、アリュージェの突きが放たれる。大剣が炎を巻き、突きのあとに火柱が走るアリュージェの奥義。

ルシオとロジャーが、かつ、と目を見開いて叫んだ。

「「危ねえっ!!」」

アリュージェの突きが豪速で走る。

が、

キイインツツ!!

甲高い音を立てて、ファイナリティブラストの突きが、あっさりと受け流された。

「なっ!?!」

アリュージェが目を見開く。が、立ち直りも早い。瞬時に大剣を切り上げるアリュージェに、アレンは身をわずかにずらして躲した。

ズドドドドオツツ!

アリュージェの大剣が、火柱が、虚しく空をつかむ。瞬間。アレンは刀をふり下ろした。アリュージェの着地際を狙う、ふり下ろしから発せられる真空刃。空破斬を、アリュージェは舌打ちと同時に、大剣を薙いで凌いだ。

だんっ、と力強く着地したアリュージェが、間合いを空けてアレン

と見合う。

アレンは悠然と、刀を構えた。

「なんじゃと!? アリユーゼのファイナリティブラストを、あやつ……!」

「そんな……!」

息を呑むジエラードの隣で、ラウリイも蒼白になった顔で、目を瞬かせた。アレンが静かにつぶやく。

「俺に、一度見せた技は通じない」

発せられた言葉に、アリユーゼが、カッと目を見開いた。アリユーゼの肩が震える。くつくつと湧き上がる衝動に、アリユーゼは素直に従った。

「ハハッ！ コイツあ良い！ 最高だ！ ……初めてだぜ。俺の全力を試すに足る相手！」

右手で顔の半面を押さえて、アリユーゼは盛大に笑う。それを見据えて、アレンも不敵に笑い返した。

2 カミール村編完結 神に挑む者

「簡単に倒れんじゃねえぞ。アレン」

つぶやくアリューゼの目つきが、変わる。対するアレンも無言のまま、ぐ、と刀の柄を握り締めた。

ぴしっ……！

空気が、張り詰める。

そのとき、傍観していたレナスが、アリューゼの前に割り入った。

「座興はそこまでだ。アリューゼ」

静かに放たれるレナスの言葉。ふり返ったアリューゼが、眉間に皺を寄せた。

「なんの真似だ、ヴァルキリー」

「私の任務はこの男を倒し、主神の定めし運命を平定することだ。アリューゼ、お前にはそれなりに時間をやった。ゆえにこれ以上、お前の戯れに付き合っただけやる気はない」

「……テメエ！」

「あくまでも続けるといっているのであれば、お前は下がっている。私が決着をつける」

冷徹なレナスの物言いに、アリューゼは苦虫を噛み潰したような

表情を浮かべた。

数瞬の沈黙。

アリューゼは諦めたように、はんっ、と短い息つくと、アレンに
向き直る。

「と、そういうわけだ。悪いが、ここからは四人でやらせてもらおう
ぜ」

「構わない」

一分の迷いなく、アレンは答えた。同時。レナスが剣を一気に抜き放つ。

「人間よ、魂を冒涇した罪は重い」

「んあ？ “ぼくとく”？」

ロジャーが要領を得ず、首を傾げる。と、ルシオが、レナスを睨むようにして叫んだ。

「罪だつて！？ アレンさんが、一体なにしたらつてんだよ！！」

「……そうだぜ！ 兄ちゃんはまだ、困ってる人を助けてるだけだ
い！！」

ルシオとロジャーの言葉は、完全に無視された。
レナスは構わず、剣を握り込む。

「其は、聖の下に滅せよ！」

アリュージェのボックスピンナツクルが、風を切って強暴に走る。ガオンツ、と重い音を立てて動きを止めた拳は、アレンの刀の柄でぴたりと止められていた。

「なっ!?!」

「、チイツ!」

アリュージェが舌打つと同時に、拳に衝撃が走った。

ギインツ、

鈍い金属音を立ててアリュージェの拳が切り払われる。同時。アリュージェに隙。その傍らを、レナスがすり抜けた。

「ハアツ!」

だんつ、と重い踏み込み音を立てて、レナスの剣がふり落ちる。だが、

アレンの返す刃が速い。一瞬で向きを変えた刀が、レナスの剣撃を受け太刀した。かちかちと鏗を鳴り合わせながら、アレンはレナスを見据える。

「人の運命を変えることが、魂の冒涇だというのか」

静かに放たれるアレンの言葉は、感情を殺したように抑揚がなかった。

「そつだ。主神オーディンの定めし運命を変える　これは何者にも許されぬ大罪」

アレンの無表情に構わず、レナスも険しい色を瞳に宿す。瞬間。目の前の蒼瞳が、すう、と力を帯びた。

「つまり、これもオーデインとやらが仕組んだことなのか。平穩に暮らしていた少女が薬で化け物にされたことも、人が人を憎んで呪い殺そうとしたことも、この村人が全員石化されたことも！ 貴方は、容認しろと言うのか！ 俺に、……俺に、人を見捨てると！」

怒りの色が、アレンの瞳に宿る。

瞬間、

斬ッ！

至近距離から、アレンの空破斬が放たれた。アレンが刀をふり下ろすのと同時間、真空の刃がレナスを襲う。

レナスは、ちっ、と舌打ちし、サイドステップで躲した。ざざっ、と地面を掻いてあとずさったレナスが、口許に冷ややかな失笑を浮かべて言い放つ。

「人間の作った物如きが、神の武器に敵うと思ったのか？」

それと同時に、アレンの手許で、ぴしいっ、という不吉な音が響いた。アレンの黒刀に、ヒビ。ロジャーとルシオが、決死の表情で身を乗り出す。アレンは構わず、ざ、と右に視線をやった。

「神の名の下に！」

弓をつがえるラウリィが、黄金の光を集らせる。直後、それは無数の矢となってアレンに降り注いだ。

「奥義、レイヤーストーム！」

ズガガガガアンツッ！！

土埃を上げて、黄金の矢がアレンの下へ走る。
が、

「そんな……っ！」

すべて、紙一重で見切られる。まるで針の穴を通すかのような矢と矢の合間を縫って、アレンは最小限の動きでレイヤーストームの矢を全て回避した。

息を呑むラウリイの前で、踏み込んだアリュージェが凄絶に笑う。

「そこなくちゃ面白くねえぜ！」

大剣に炎が宿る。弾丸のような、豪速の突き。

「奥義、ファイナリティブラスト！」

突き、衝撃波、火柱。

三段階からなるアリュージェのファイナリティブラストに、アレンは抜刀から受け太刀した。

ズガガガガガアッ！！

受けた者の両腕をもぎ取るような衝撃が、刀を通して伝わってくる。

アレンは突きと衝撃波を完全に受け切って、その勢いがわずかに

弱まった所に踏み込んだ。

「碎牙！」

鋭く吼えると同時、手中の刀が青白く輝いた。雷撃を孕んだ、アレンの横薙ぎ。

ギキインウツツ、！

両者、交差する。

アレンの斬撃に、雷が走った。横に一閃。アリユーゼの突きと交差し、光の線が描かれる。その着地点を狙ったのは、ジェラードの、強烈な大魔法だった。

「我焦がれ、誘うは焦熱への儀式、其に捧げるは炎帝の抱擁！ イフリートキャラレス！」

ジェラードの持つ赤い宝珠の杖が煌く。瞬間、石室が闇に包まれた。

「な、なんだなんだなんだあっ！！？」

「ど、どどどど、どうしたってんだ！？ 一体！」

きよろきよろとロジャーとルシオが辺りを見渡す。

同時。

アレンの周囲に、漆黒の闇の中でも燦然と煌く、炎の円陣が描かれた。それはアレンの頭上で一本の赤い炎の線で繋がれると、巨大な炎の波となって走った。まるでマグマのよう。

ズガアアアンツツ！！

石室の気温が増す。伏せたカシエルとセリアの頭上を、熱風が撫でた。その炎の中で、アレンが笑う。

「スベルガード魔法防御！？」

セリアが目を睨った。杖を掲げたままのジェラードも、う、と息を呑む。

「あやつ、魔法使いか！？」

「魔法も使いやがるのかよ！」

ジェラードとアリユーゼの声が重なる。その二人の驚きに割って入るように、レナスが、たんっ、と踏み込んだ。

「見事だ。だが、神技は破れるか！」

レナスの剣が、縦横無尽に走る。まさに神速の連続攻撃。それにアレンも刃を合わせる。幾重にも重なる金属音を立てて、まったく同じ剣速で、両者、刃を交し合う。

が。

だんっ、と地面を蹴ったレナスが、背中に翼を具現化させて、上空高く飛び上がった。

「神技！」

ざっ、と掲げたレナスの右手に、青い光が集い始める。光 否、巨大な槍が。

「ニーベルン・ヴァレスティ！」

レナスの身の丈以上もある巨大な槍が、青い光を纏い、光の鳥と
なつてアレンに走つた。

コオオオオツツ！！

鋭い口を開けて、迫る鳥を見上げて、アレンは、ぐ、と刀の柄を
握りこんだ。

「……光の鳥か」

瞬間。

フツ、とアレンの身体から、赤い煙が巻き上がった。ゆらりと形
を成さぬ煙が、朱雀を象る。赤く、白く、輝く朱雀。それを背に、
アレンは蒼き瞳を滾らせる。

オオオオオオオオツツ！！！！

人を丸呑みするほどの朱雀が吼えた。アレンの握るレーザーウエ
ポンが、異様に輝く。

同時。

アレンは地を蹴つた。レナスの放つた光の鳥に向かって。

「朱雀疾風突き」

アレンは、つぶやいた。

ズドオオオオツツ！！！！

レナスの光の鳥と、朱雀と化したアレンの突きが激突する。凄まじい光と熱が石室を呑みこみ、爆散した。

かああああ……っ！

烈風が吹きすさぶ。

乱暴に逆立てられる髪を押さえつけると、暴発した力と力が、むせ返る様な熱気を帯びた。

たんつ、と軽やかにレナスが着地する。剣を払って見せたレナスは悠然と、反対側に着地したアレンをふり返った。

ばらばらばら……、

アレンの黒刀が、音もなく砕け散る。と、アレンの身体が、がくんと落ちた。

「アレンさん！」

「兄ちゃん！」

ルシオとロジャーが慌てて声を張り上げる。

たたらを踏み、体勢を立て直したアレンは、ニーベルン・ヴァレストイの余波で血まみれだった。技の威力は互角だ。だが、剣の強度が違いすぎる。アレンが放つ朱雀疾風突きの剣気に、レーザーウエポンでは耐えられないのだ。

手許の黒刀を見下ろして、アレンは息を吐いた。

(やはり……)

レーザーウェポンの核が壊れている。もう刀の復元は不可能だ。技の威力に、この武器も持たない。

最早鉄屑ですらないレーザーウェポンを握るアレンを見据えて、レナスはつぶやいた。

「神技を受け切ったか。だが、次で終わらせる」

ちやり、と金属音を鳴らして、レナスは剣を握りこむ。アレンは、ロジャーたちをふり仰いだ。

「兼定を」

「オツケ！」

顔を見合わせたロジャーとルシオが、同時に兼定を投げつける。それを受け取ったアレンは、壊れたレーザーウェポンを懐にしまうと、レナスに向き直った。

「ほう、ようやくその刀を手にしやがったか」

口端を吊り上げるアリユーズ。レナスはただ冷ややかに、アレンを見据えた。

「武器を持ち替えたくらいで、神が破れると？」

アレンは答えず、兼定を腰溜めに構えた。

瞬間。

彼を取り巻く気配が、変わった。

ドンッ！

空気の塊が、アレンを中心に弾ける。
走る剣気。

その場にいる全員が、思わず息を呑む。その中で唯一、レナスだけは顔色を変えない。

アレンは兼定を握った。

「この兼定に、斬れぬものはない」

自分の 己が放つ技すべてに応えてくれる、この刀だけは。

続く言葉を呑みこんで、アレンは静かにレナスを見据えた。

空気が張り詰まる瞬間、アリュージェを初めとした勇者の魂たちが動き出した。

「面白え！ 試してやらあ！」

だつ、とアリュージェが鋭く踏み込んだ。弓をつがえたラウリイが、黄金の光を矢に集約させて、放つ。

「神の名の下に！ 奥義、レイヤーストーム！」

「奥義！ ファイナリティブラストおをつ！」

無数に走る光の矢の間を、アリュージェの炎の突きが駆け抜ける。

今度は針の穴ほどの隙もないレイヤーストーム。
躲せない。

続いて、ジェラードが赤い宝玉の杖を掲げた。

「奉霊の時来りて此へ集う、鳩の眷属、幾千の放つ漆黒の炎 力

ラミティブラスト！」

ずどお……っ、っ、っ！

大魔法の影響を受け、石室内が再び黒く染まる。

前方にレイヤーストームとファイナリティブラスト。そして、ジエラードの頭上に集まった、巨大な炎の弾頭　カラミティブラスト。

炎と光が交じり合い、爆ぜる中で、カシエルは頭を庇いながら叫んだ。

「やべえ……ッ！」

アレンに対して、の言葉ではない。強大な気と熱の塊が、石室の中で爆発しようとしていたのだ。

カシエルの視界がすべて、金と赤で埋め尽くされる。

そこを、

「覇アツ！！！」

黄金の真空刃が切り裂いた。石室全てを覆い尽くすような爆発を、石室ごと切り裂く巨大な真空刃が。

斬ッッ！！

炎が、光が爆ぜる。アレンを中心に、両断された空間を除いて。一閃。

黄金の真空刃から逃れるように、

「ぐああああっ！！！」

「うわあああつー!!」

「あああつー!!」

音という音をも飲み込む世界の中で、アリューゼたちの悲鳴が上がった。

黄金の刃から逃れようと走った爆発が、呑まれたのだ。どれほど強力な光を放つていようと、強烈な炎を滾らせていようと、決して揺るがない、黄金の刀の下に。

アレンは兼定をふり切った体勢から直立すると、レナスをふり返った。

「……来い。どんな理由があれ、俺は俺の道に行く」

兼定を握りこみ、低く構えるアレン。

瞬間。

それまで抑えられていた彼の敵意が、レナスに向かって放たれた。

……ドンッ!

強烈な圧迫感^{プレッシャー}としてアレンに内包されていた気が、一瞬、顔を覗かせたようでもあった。

ぐう、と唸りながら、アリューゼが立ち上がろうと大剣を杖代わりに力を込める。ジェラードとラウリイは、爆発の衝撃波だけで軽い脳震盪を起こしたようだった。

「そんな……力が違いすぎる……!!」

立ち上がろうと体に力を込めても、思うように動かない。不安定

な頭を押さえながら、白くなった顔でラウリイはつぶやいた。
ジェラードが目を見開く。

「ア、リユーゼ……!!」

それでもアリユーゼだけは一人、まともに黄金の空破斬を喰らったというのに、立ち上がるうとしていいる。震える下肢は、力むたびに悲鳴を上げ、びしゃっ、と耳障りな音を立てて血が床を汚す。そんなアリユーゼの全身には、ぱっと見ただけでも生々しい、深い刀傷が刻まれていた。

「下がっている、エインフエリア勇者の魂たちよ」

レナスが剣の切っ先で止める。立ち上がるうとしたアリユーゼの強い眼差しが、レナスを睨み上げた。

「……ヴァルキリー」

抗議の目ではない。ただ、アレンの持つ危険性をレナスに伝えようとしていた。

レナスは小さく頷くと、アレンに向き直った。ジェラードが恐怖で身を竦ませながら、つぶやいた。

「これは……、強敵ではないのか……!?!」

兼定を持つ、アレンを見据えて。

かけられた言葉にアレンは身じろぎもせず、冷えた眼差しをレナスに向けた。凄絶なプレッシャー圧迫感。しかしレナスは、剣を強く握り締めて、言い放った。

「人間風情が、調子に乗るな」

だんつ、と鋭い踏み込み音を立てて、レナスが跳びこむ。瞬間。神速の連続攻撃がレナスから放たれた。そのレナスと、全く互角の剣速だったアレンの剣が　レナスを押し切る。

「、くうっ！」

アリュージェとカシエルが、茫然と目を見開いた。

「なにつ！？」

「ヴァルキリーが、打ち負けるだって！？」

思わず叫ぶ。ロジャーとルシオが、得意げに胸を張った。

「あつたりめえじゃん！　兼定持った兄ちゃんに、連続攻撃なんてムダムダア」

「行っけええ！　アレンさん！」

ルシオに呼応するように、アレンの剣速が上がる。

「、っく！」

レナスが舌打つ。同時、強烈なアレンのふり下ろしが落ちた。

ズドオツ、、、、！！

みしみしと、レナスの細腕が悲鳴を上げる。瞬間。レナスの剣が、

真つ二つに折れた。

パキンツ、、、、

存外、軽い音を立てて。

「馬鹿な！？ エーテルコーティングされた武器を、人間ごときが！？」

思わず悲鳴に近い声でレナスが叫んだのも束の間、彼女は地面を蹴って距離を取った。光の翼を具現化させ、高く、宙に飛ぶ。

「ならば！ 神技、ニーベルン・ヴァレスティ！」

上空に飛んだレナスが、翼をはためかせ、巨大な槍を具現化させた。青く、白く輝く光の槍をアレンに向かって投げると、それは光の鳥となって鋭い咆哮を上げた。

コオオオオオツツ！！

それを睨み上げて、アレンは、ぐ、と兼定を握る。
瞬間、

カアアアア……ツツ！！

兼定の刀身が青白く輝く。

同時。

アレンの背に、朱雀が現れた。兼定と同じ、澄み切った蒼瞳の朱雀だ。アレンと、朱雀が共鳴するように吼える。

黄金の、朱雀が。

「さっきと色が違う!？」

「な、に……!」

息を呑むラウリイの隣で、アリユーゼもあまりのことに目を見開いた。

兼定の　あの剛刀に集約された莫大な気の量に、黄金の朱雀が放つあまりにも神々しい光に、息が詰まる。

ニーベルン・ヴァレスティの光の鳥よりも、なお輝かしい光。それは、女神の放つ光を月とするなら、それをあっさりと消し去る太陽のようだ。

「ヴァルキリー!」

ジェラードの悲鳴。同時、トンツ、と地面を蹴ったアレンが、レナスに迫った。

「朱雀疾風突き!」

……つつ、コオオオオオ　　ツツ!!!!!

朱雀と化したアレンの突きが、一瞬でニーベルンヴァレスティを貫き、レナス自身をも飲み込む。

「ヴァルキリーイイ!!」

目を睨ったジェラードが、レナスに向かって叫ぶ。が、あまりの

轟音に、声が音をなさなかつた。

ただ、白い光が全てを包み込み

.....

静寂を取り戻したところで、膝をついたレナスの姿が、アリュウゼたちの前に現れた。

「「ヴァルキリー!?」」

「ヴァルキリー様!」

エインフェリア
勇者の魂たちが、声を揃えてレナスを呼ぶ。だが、肩で荒い息を繰り返すレナスには、答えるだけの気力は残っていないかつた。そのレナスを静かに見下ろして、アレンは兼定を鞘に納める。

「.....行こう。ロジャー、ルシオ」

アレンはレナスから興味を失ったように背を向けて、石壇にある少女の石像を抱き上げた。

「、くっ!」

剣を握り呻くレナスを、ロジャーとルシオが横目見ながら、遠慮がちにアレンのあとに続く。カシエルとセリアは、事態を呑みこめず、茫然と成り行きを見守っているままだ。

「待て!!」

傷を負いながらも、レナスは剣を杖に立ち上がるうとした。アレ

ンが肩越しにふり返る。が。ぴたりと足を止めたアレンの表情は、それまで彼がレナスに向けていたものより、ずっと静かった。なんの感情も映し出さない蒼瞳。

無。

レナスはアレンを睨んだ。

「この、程度で……神が、破れると……！」

血が滲み、失血の所為で唇が震えた。それでもどうにか、言葉を紡ぐレナスを　アレンは一瞬だけ、寂しそうに見据えた。

ほんの、一瞬だけ。

「今のアンタじゃ無理だ。……剣を交えて分かった。アンタの剣は、軽すぎる。人の死を、人の心を縛るにしては、あまりにも」

アレンはレナスに向かって、一言だけ付け足した。

「……付いてこい」

そう言って、まっすぐに遺跡の外へと向かう。その背を忌々しげに見据えて、レナスもあとを追った。剣を杖代わりに、身体を引きずりながら。

「、くっ！」

エインフェリア
マテリアライズ
勇者の魂にかけた物質化が、知らぬ間に解けていた。徐々に透明になっていくアリュウゼを見て、カシエルが目を剥き、叫んだ。

「アリュウゼ！」

ふり返ったアリユーゼが、に、と口端を緩めるより先に、勇者の魂^{リア}たちの姿は、カシエルの目の前から中空に、すう、と消えていく。まるで、白昼夢にでもあったように。石室に、静寂が満ちる。

「……………一体……………、なんだってんだよ……………？」

取り残されたカシエルが、やり切れずにつぶやいた。セリアが、はた、と瞬きを落として、慌てて立ち上がる。

「カシエル！ 彼らのあとを追わないと！」

アレンが石像の少女を連れ去ったのを思い出して、思わず声を荒げると、カシエルも、ぼんっ、と手を叩いて、その場から立ち上がった。

「そうだな！ 急ごうぜ！」

激戦のあとを物語るように、あちこちに巨大な傷跡を残した石室を出て、カシエルたちは村に向かった。ちょうど、アレンが村の中央で、兼定を水平に掲げていたところだ。

「俺は、俺の道に行く」

レナスに向かって、アレンは宣言した。あの無傷な石像の少女は、アレンの目の前に安置されている。

「お、おい」

アレンに、カシエルが声をかけようとした所で、光の紋章陣が、

アレンを中心に描かれた。村全体を、すっぽりと覆い尽くすような、巨大な紋章陣だ。

すう ……っ

空気が晴れる。

ふわり、と。ゆるやかな微風に、アレンの金髪がなびいた。

アレンが目を閉じる。

「フェアリーライト」

兼定を握る彼の右手に、淡い、蒼白の光が宿る。それはふわふわと彼の髪を撫でる風に乗って辺りに広がると、転瞬、アレンの右手を中心に眩い輝きを放ち始めた。

“眩しい”。

確かにそう感じるのに、不思議と、目の前に手をかざしたカシエルの目は痛くない。あの、目がくらむ時特有の痛みが。

「な、なんだ!?!」

思わず首を傾げる。と、傍らにいたセリアが、かすれた声で言った。

「これは……! 凄い魔力!」

ぐ、と息を呑むセリア。その驚きの声は、カシエルの耳に途中から入ってこなかった。ぽかん、とだらしなくカシエルの口が開く。だが、それも気付かず、カシエルは呆然と空を見上げた。

そこから降るように現れた、美しい女性を見るように。

「……エイ、ル……？」

アレンの傍らで、女性を見上げたレナスがつぶやく。エイル
アース神族において、治療を司る女神の名だ。

レナスをふり返った女神は、小さく微笑っただけで答えなかった。
レナスが知っている癒しの女神より、よく見れば幼い。エイルは二
十代後半の魅力を持った女神だが、アレンの呼び出した女神は、ま
だ十代後半の面影をわずかに残していた。

癒しの女神は、纏った白い衣から、波打つ亜麻色の髪から、優し
い蒼白の光を放つ。

白く細い指で、目を閉じたままのアレンを抱くように、アレンの
頬を、つう、と女神が撫でた。まるで豎琴を弾くように、優しく。
愛でるような、静かな眼差しで。

癒しの女神が、すう、と強く光を放った。全身から、己の姿を光
の粒子に換えるように。女神の身体が、徐々に透けていく。

ぱああああ……っ！！

光が強くなる。

「っ、うわっ！」

視界が白い。

思わず、カシエルは目を閉じた。だがその間にも、蒼白の光は輝
きを増し、カシエルの頬を、身体を、村全体を撫でていく。

波紋が、ゆらりと広がった。静寂という空気を、優しく波立たせ

るように。光の粒子が、一面に広がっていく。

そして ……。

光が、晴れた。

恐る恐る、カシエルが手を除ける。すると、変わらぬ村が、カシエルの目の前に広がっていた。彼は一瞬、首を傾げる。

「別になにも……」

変わっていない、と言いかけて、口を嚙んだ。確かに変わっていない。

破壊された村人の石像が、完全に修復されていること以外は。

「っ、奇跡……!!」

謔言のようにつぶやくセリアに、アレンが小さく表情を和らげた。

「……………」

レナスは、そんなアレンを、じ、と見据える。アレンが召喚した女神の慈悲は、平等にレナスにも降り注ぎ、彼女の傷をも完全に治した。

閑散とした村には、青々とした草花が生い茂り、くたびれた家が、生き生きと元の姿を取り戻している。

「…………この人たちを、もう一度殺すというのなら容赦はしない」

完全に復元された村人の石像を見据え、アレンは言った。レナス

を見据える蒼瞳に表情はなく、ラッセンで礼を言ってきた時とは、別人のようだ。

レナスは癒えた身体を抱きながら、口を開いた。

「石化した者は、草花と同じ存在だ。私が直接干渉することではなく、捨て置いたところで、不死者にもならない。……この村人の石像を、私が今一度破壊したところで、石の破片が増えるだけ」

レナスはそこで、だが、と言い置いた。アレンがジツと見据えてくる。レナスは見返し、ゆっくりと青瞳に、敵意の色を浮かび上がらせた。

「貴様が運命の輪を乱していることに、代わりはない」

淡々と告げるレナスに、迷いはない。アレンは一つ、頷いた。

「……アンタの慈悲は、死者だけに向くものなのかと思った」

小さく、つぶやくように。

アレンは一瞬だけ、ふ、と微笑った。ほんの、一瞬だけ。

「いつでもこい。受けて立つ」

兼定を掲げて、アレンは言い放つ。するとレナスは、唇を真一文字に引き結んだまま、すう、と空に消えていった。

「……良かったな！ アレン兄ちゃん！」

その空を見上げ、レナスを見送ったロジャーが言った。

ふり返ったアレンが、微笑のまま頷く。あの様子では、ベリナス

「私たちは無事のようにだ。安堵の息が、アレンの肩にのしかかるように零れた。」

「ああ……。本当に、良かった」

つぶやくと、緊張の糸が切れた。

“良かった”。

零れた言葉の意味が、重くアレンにのしかかる。安堵の理由が、ベリナスたちの無事と、もう一つ。

レナスの、心。

女神の去った空を見上げて、アレンは小さく苦笑した。

それを満足そうに見上げて、ロジャーはカシエルたちに向き直り、けたけたと明るく笑い声を上げて言った。

「よ。兄ちゃんたち！ 石化を解く薬つての、間に合いそうかあ？」

問われて、カシエルは、ぽかん、と開いた口を、とりあえず閉じた。

運命を、変える。

戦乙女が何度か言っていた言葉を思い出して、カシエルは胸の奥で頷いた。

確かに、彼ならば変えるかもしれない。この死に満ちた世界を、人の望む未来に。絶望を 希望に。

「いい、のかよ……。こんなことして……」

先ほど、神に命を狙われたばかりだというのに。

思わずつぶやくカシエルに、アレンは悪びれずに頷いた。

「問題ない。俺は軍人だ。民間人を守ることは、おれたち軍人の誇り。誰にも、邪魔はさせない」

アレンは空を見上げて、わずかに目を細める。

あそこに、なにがあるのかは分からない。レナスが　戦乙女が　いつも降りてくる、上空。

人を人が助けることをも否定する神。それは、人が人に干渉することを認めない神だ。

有り得ない。

同じ世界ミッドガル下にいる限り、人が人に干渉しないなど有り得ない。本当に神が運命を決めているのならば尚のこと、人間が起こす多少の揺らぎなど承知のハズだ。

(……なにかある)

恐らくアレンの行動を承知で、しかし、その行動が神にとって都合な理由が。

それが、まだはつきりとは分からないが。

アレンは一種のきな臭さを感じていた。

「アンタ、軍人なのか？　……アルトリア軍が、一人でこんなトコに？」

首を傾げるカシエルに、アレンは首を横にふった。ここ、カミール村は、アルトリア領内にある村だ。カシエルの誤解は、妥当なものだった。

「俺の勤めていた軍は、もうないんだ。少し前の、大きな戦争で」

つぶやいたアレンが、わずかに目を伏せる。つられて表情を曇らせたセリアも、しかし、不思議そうに首を傾げた。

「大きな戦争？ ヴイルノアや、クレルモンフェランとは、また違うの？」

「ああ」

短く頷いたアレンは、そこで話題を切るように、完全に復元された石像の村人たちに向き直った。

「さて」

再び掲げられた兼定を握って、セリアたちにとって“風変わり”なアレンの魔法が展開される。その、彼の使う魔法陣はあまりにも独特で、最初、セリアには理解出来なかった。

彼が放つ魔法そのものが、高位の僧侶でしか習得することの出来ない、状態異常回復の魔法　オーディナリイ・シエイプであることを、彼女は魔法発動後に、気付いた。

それも、一人の石化された人間に対してではなく、村全体を一瞬で。

「ディスベル破呪」

彼はそう、呼んでいたが。

蒼白の光に飲まれた瞬間、村全体がひらひらと輝いた。

(やっぱり、なんて魔力なの……！)

魔法剣士として、魔法知識を有しているセリアが、ごくりと息を

呑む。それを顔色一つ変えずに行ったアレンは、兼定を白い筒居合袋に納めるなり、肩に担いだ。

「…………おや？」

宿の前に立っていた男が、夢から覚めたように、はた、と瞬きを落とす。男の前にある大通りに立っていた老人が、杖を手に首を傾げた。

「なんじゃあ？ ……今日は陽が暖かいのう」

それを契機に、他の村人たちもだんだんと、意識を取り戻していく。

「…………あら？ こんな所に、花が！」

「そうそう！ 買い物、買い物しなきゃ！」

「あれ？ でも、さっきまで…………朝じゃなかったっけ？」

誰かが、空を見上げてそう言った。朝にしては、昇りすぎた太陽に。

「…………あ！」

「ええ！？」

「確かに…………！」

村人たちが、不思議そうに互いを見合う。その彼らを嬉しそうに

見据えて、アレンは踵を返した。

「行こう。ロジャー、ルシオ」

「おう！」

「はい、アレンさん！」

応えるルシオとロジャーに頷いて、アレンは最後に、セリアとカシエルに一礼だけして、村を去った。

まるで長い眠りにでも就いていたように、事態を把握できず、不思議そうに顔を見合わせる村人たちを、その場に残して……。

カミール村に活気が戻るまで、そう長い時間は必要なかった。

オリジナルキャラ紹介 十（前書き）

挿絵注意！ 苦手な方は、挿絵機能をOFFにしてください。

オリジナルキャラ紹介 十

1、アレン・ガード

> i 2 2 3 5 3 — 1 5 0 0 <

年齢：二十歳

身長：182cm

武器：剛刀『兼定』 or レーザーウエポン

一年前まで、銀河連邦軍（SO3）の軍人だった。当時の階級は少尉。

実はSO2主人公・クロード&レナの子孫。ただし直系血族ではない（ケニー家は別に居る）。

剣術・体術・魔術において並み外れた才能を持ち、銀河連邦軍で最も流布している剣術“ガード流”を用いる。

これはアレンの実家であるガード家が、一四百年前の十二人の英雄《クロード達》が用いていた剣術・体術・紋章術および気功術を体系化し、実戦において地球人が自分達より優れた惑星人と交戦する為に考案・開発した。

特に、内気功“活人剣”は、体内の気の通りを良くすることで術者の身体能力を高め、それまで自分が負っていたあらゆる傷を治すという、神々と戦う上で欠かせないスキルである。

ちなみに彼が使う「朱雀吼竜破」||「朱雀衝撃波」+「吼竜破」や「爆裂空破斬」||「爆裂破」+「空破斬」などは、彼自身が勝手に作った合成技で、ガード流ではない（一般の連邦軍人には知れ渡っていない）。

あと、どう考えてもSO2技ではないカウンター技「碎牙」は、Chaos Legionというゲームに出てくる盾の「アロガンスアヴェンジャー」を流用している《理由：カッコよかったから！ 一目惚れしたから！》。

これは、敵の攻撃を受けた時にタイミング良く ボタンを押すと、敵をすり抜けてカウンター出来る強力技。刃に吹き飛ばし効果、雷にダウン効果がある素敵仕様（威力は、こちらが受けたダメージの半分）。

得物は、刃渡り二メートルの剛刀「兼定」。

特殊能力・付加価値は一切無いが、単純に「頑丈」で、「凄まじい切れ味」を誇る。

また、普通の刀よりも“気”の通りが良い刀でもある。

アレンの人物特性をVP的に表すと、

母思い、頑固、勇敢、命知らず、注意深い、几帳面、感情的
こんな感じ。

几帳面な性格も相なって、家事全般は一通りこなせる。
特に料理スキルはシェフ。ただし飾り付けのセンスは無い。

幼少から剣術一筋で育った為か、アリュージェのような凄腕の剣士を見ると、好戦的な態度を自重しないことも。

初対面の相手や、あまり親しくない相手には好青年だが、ある程度以上仲良くなるといきなり理不尽な本性を現すと言う厄介な御仁。俗に言う「内弁慶」である（彼の理不尽っぷりは下記リンク『アレンとフェイトの因縁』で確認できます）。

ただ、ロジャーやルシオのような子どもには優しい。

レナスと出会ったことで神の存在を知り、人の生死を「運命」と

定める神のやり方に疑問と反感を抱いていく。

「民間人を護る事こそ軍人のあるべき姿」という信念を持っている彼は、今日もレナスの制止を聞かずにミッドガルドに住む人々の「運命」を変えていく。

その先に待つ、神の粛清を恐れずに。

レザードとは対極的な性格の「人間でありながら神に仇成す存在」と位置付けてみました。

2、ロジャー・S・ハクスリー

> i 2 1 5 1 6 — 1 5 0 0 <

年齢：十三歳

身長：85cm

武器：手斧など

どんな時も、明るく元気な十三歳児。パーティーのムードメーカー。
I。

タヌキを祖とする「メノデイクス族」の亜人で、人間の子供に、タヌキのシッポと耳が生えている。(S03から一年後とお考え下さい)m(—)m)

人間からすると、十三歳で身長85cmという短身ゆえに、実年齢より低く見える(はず)。

一年前、軍を辞めたアレンが旅に出る際、悪友ルシオとともについて来た。

ロジャーの武器が、手斧「など」になっているのは、彼が鞭を使ったり、爆弾使ったり、ヘルメット使ったり……と、非常に忙しい必殺技を持っているためである。

そんな彼をV P的に表すと、
元氣印、ど根性、感情的、可愛げ、力自慢、勇敢、世間知らず、
女好き

こんな感じ。三人中、最も高い勇者適正值を誇る。

アレンとレナスが険悪な仲になっても、ロジャーとレナスは仲が悪くならないという不思議。
女好き、恐るべし！

3、ルシオ（フルネームは不詳）

> i 2 1 5 1 7 — 1 5 0 0 <

年齢：十三歳

身長：100cm

武器：ナイフ（二本）

明るく元氣だが、ちょっと悪ぶりたいたい十三歳児。
ロジャーとは、男を磨くための“男勝負”で見栄を張り合う仲。

ネコを祖とするの亜人で、クロネコの耳としっぽを持つ。

武器はナイフ二本。俊敏そうだから。原作SO3では、戦うキャラにあらず。

ここでは、「危ない所をアレンに助けてもらい、戦うアレンに憧れて弟子入りしてきた」という設定を使用している。

戦闘力はアレンに鍛えられた事もあり、ゲームクリア時のロジャーと同レベル（Lv100くらい）。SOのLv上限は255である）。

ちなみに弟があり、名前はレザード。友達はベリオンという。ど

こかで聞いたことある名前である。

そんな彼をVP的に表すと、

元気印、ど根性、真面目、不運、敏捷、プライド高い、浅はか、
情け深い

こんな感じ。

プライド高いのに浅はかなのは、子供ゆえ仕方なし。

不運なのは、SO3に出てくる裏ボス“レナスちゃん”に見初められて追い回される運命にあるから（ご褒美とか言ってはならない）。

三人中、唯一の常識人でもある（このパーティに年長者などいない）。

アレンを見る時は「あこがれフィルター」を装着しているため、
正確な評価はしない。

ロジャーとは対称的に、旅を邪魔するレナスを 若干煙たがっている。

オリジナルキャラ紹介 十（後書き）

どうもお粗末さまでしたm（ | | ） m
それでは本編へどうぞ^^

用語解説（前書き）

ここでは、作中に出て来るS O 3アイテムについて触れます。

用語解説

1、クオツドスキャナー（出典：アルトリア編）
アレンが持っている小型解析器は、正式名称クオツドスキャナーと呼ばれるマイクロコンピュータです。

S O 3の辞書によると、

『手の平サイズの携帯用分析機で、これまでに発見されているありとあらゆるタイプの音波や光、そして電磁波や重力波などを測定することが可能になっている。また、このスキャナー自身からさまざまなタイプの波長の波を放出できるようにもなっている為、生物調査・地質調査・環境調査などといった、ありとあらゆる調査活動がこのスキャナー1つで行えるのである』

とのこと。

さすが宇宙暦773年、万能です……！

2、リバースドール（出典：ベリナス編）

名前の通り、致死ダメージを受けた時に身代りになってくれる人形です。

S O 3のファクターによると、

『行動不能から確実に復活、ただし、リバースドールの破壊確率100%』

とのこと。

つまり、【絶対復活するけど、復活は1回だけ】というアイテムです。

しかし、SO3ではアイテムを強化する事も可能であり、金さえつぎ込めばリバースドールの破壊確率を最大40%にまで減少させることが可能なので、私もややお世話になりました。
そんなアクセサリ。

3、レーザーウェポン（出典：カミール村以降）

持主の意思によって、先端から出るレーザーの形状を変える事が出来る特殊武器。これ一つあれば、銃・剣・斧・槍・弓……とレーザーを変形させて、自分が使いたい武器を生成する事が可能。

SO3では、魔法使いから剣士まで、全員が装備できる共通武器として、非常に重宝します。

威力もそこそ高く、改造したらラスボスと余裕で戦えるくらいの高性能ぶり。

とはいえ、普通に店で売ってる品物なので、VPIの剣士共通武器、「咎人の剣“神を斬獲せし者”」には遠くく及びません。
しかし市販されている武器なので、利便性はかなり高いです。

4、通信機（出典：クレルモンフェラン編）

ロジャーやアレンが、よく使っている通信機。

作中では、通信機とクオッドスキャナーを同じような扱いにしていますが、あれは若き日の過ちです。申し訳ない……orz

正式名称は「コミュニケーター」。

SO3の辞書によると、

『銀河連邦で使われている標準の通信機で、この機械が一つあれば

1 天文単位の距離までの重力通信と、音声パターンの解析による未知言語の翻訳が可能である。また一光年程度の距離までであれば、シグナル式の救難信号を発することも出来るようになっていく』

とのこと。

ちなみに重力通信とは、「主に恒星間で使用されている超長距離用の高速通信システム」らしいです。

ただし、ヴァルハラ・ミッドガルド地上界間で、コミュニケーターを使って通信できるかどうかは不明。

1 クレルモンフェラン編 旧い騎士、若い騎士

大陸東部のほぼ全域を領土に収める大国・クレルモンフェランは、神の名の下に大陸制覇を目指す宗教国家である。

この国において、宗教史というものは珍しくない。

「くちなし？ なんだ、それ？」

酒場で耳慣れぬ言葉を聞いたロジャーは、話主をふり仰いだ。安物の丸テーブルを囲む大柄の男たち、その一人に。

「んあ？ …… なんだ！？ ここはガキのくる所じゃねえぞ！！」

手にしたジョッキから口を離して、男は目を見開いた。陽も高いというのに酔っているのか、既に赤ら顔だ。額に特徴的な十字傷を抱えた男は、ロジャーに見るなり不快そうに眉をしかめた。巨漢、というよりは、どこにでも居そうな柄の悪い中年男といった風体。ロジャーは臆せず酒臭い男を見上げて、興味に目を輝かせた。

「ちよつとぐらい良いじゃんよお〜！ で？ くちなしって、なんなんだ？？」

「るっせえガキだな！ ったく、誰だ！？ こんな所にガキ連れてきやがった馬鹿は！！」

怒声を上げて、男は狭い酒場を見渡した。飯時も過ぎた場末の酒場は、連れを除けば、カウンターに若い男が一人座っているだけだ。異国の風変わりな服装に、荷物は傍らに置いた巨大な白筒だけという変わった雰囲気若者。

そして、
もう一人。

「だ・れ・が！ 馬鹿だとお！！！」

だんっ！

丸テーブルを激しく叩きつけて、男　ギューンターの背中に怒声が浴びせられた。酒場に不釣合いな高い声。　子供だ。先ほどの、ロジャーの声ではない。

「ああん？」

ギューンターが不思議がつて周りを見渡すと、椅子の上に立った吊目の少年が、牽制しているつもりなのか、目を細めてギューンターを睨んでいた。

先ほどは気付かなかったが、カウンターに座っていた若者の隣に居たようだ。若者の連れのようだが、カウンターの青年はギューンターに見向きもしない。代わりにつり目の少年・ルシオの背中になにやら動くものをギューンターは見つけた。ふりふりと規則正しく揺れる、なにかを。

「なっ！？」

それを認めた瞬間。

ギューンターの思考が停止した。

「し、尻尾だとお！！？」

同じテーブルについていたギューンターの連れも、驚きで立ち上が

る。ルシオの背中　正確には尻　には、人では存在し得ない、黒猫の尻尾が生えていたのだ。

「こ、こいつぁ……！」

ぐ、と息を呑むギウンター。先ほどの少年・ロジャーに視線を向けてみると　やはり彼にも、狸の尻尾が生えていた。

「んん？」

異常を察していないのか、ロジャーが不思議そうに首を傾げる。ギウンターは更にルシオとロジャーを見比べて、それから飲みすぎたのか、と首を傾げながら、ジョッキをあおった。

「ぶはっ、と、ともかく……！　ここはガキのくる所じゃねえんだ！！　さっさと行け！　野良犬どもが！！」

ジョッキで無造作にロジャーを殴る　否、殴りつけようとしたところで、足許の少年は軽く体を傾け、ジョッキをひらりと躲した。代わりに、

「ラストドイツチ！！」

地面を蹴ったロジャーの頭突きが　被っているヘルメットの角が、どむっ、と鈍い音を立てて、ギウンターの腹に突き刺さる。

「うぐっ！？」

思わず目を剥くギウンターが、テーブルや椅子を派手に蹴散らしながら床に崩れた。

「「「なっ!?!」」」

目を見開いたギョウターの連れが、気色ばんだ。

「野郎!」

「ガキが!?!」

吐き捨てた男たちがロジャーを睨む。と、足元のロジャーが、えへん、と胸を張った。

「オイラは犬じゃねえ! メノディクス族じゃん!」

「るっせえ!」

男は持っていた酒瓶を無造作にテーブルに叩きつけて、割れた破片でロジャーに殴りかかった。

「バカダヌキ!」

破片の切っ先がロジャーに迫る。と、同時。ロジャーはひらりと酒瓶をかわそうとして、

がっ、

途中で酒瓶が止まった。

「んん?」

ロジャーが顔を上げる。すると、割れた酒瓶を握る男の腕が、横合いから握りしめられていた。茶褐色の髪を無造作に伸ばした、隻眼の男に。

「貴様は……！」

目を見開く男の腕を、隻眼の男は、さ、と放すと、ロジャーを一瞥した。ロジャーに怪我はなかった。隻眼の男の眼差しが、酒瓶を握った男たちに向けられる。途端、あどずさる男たちの中で、机を散らして倒れていたギンターが、頭をふりながら身を起こした。

「痛ててて……。っのクソガキがあ！俺様を舐めるとどうなるか
っ……、」

ぶつぶつ言いながら顔を上げた。

妙に酒場が静かだ。

首を傾げるギンターの視界に、茶褐色の髪を頂で一つにまとめた男が映った。四十前後の壮年だ。酒瓶を苦もなく片手で止めた男。彼の左目は、刀傷で完全に閉ざされていた。

「……お前……」

ぼつり、とギンターはつぶやいた。は、と眼を瞪る。隻眼の男が何者かを思い出して、ギンターの口許に邪悪な笑みが浮かんだ。

「おい、おまえ。ジエイクだろ」

問いかけたが、隻眼の男は答えなかった。ただ、視線を少し下げただけだ。隻眼の男は白いシャツと茶のズボンを、青い腰布で縛っている。体格はしっかりとしているが、痩せ型だ。髪は茶褐色だが

左前髪の一房だけ白い。男の顎には、茶褐色の鬚がたくわえられていた。

「久しぶりじゃねーか。戻ってたのか」

親しげに話しかけるギユンターの足元で、ロジャーがぼそりとつぶやいた。

「……ちつ、加減が過ぎたか……」

が。その声は誰にも聞こえなかったらしい。

俄然強気を取り戻したギユンターの赤ら顔が、下から蔑みと嘲りの色を湛えて、隻眼の男を覗き込む。

「だが、なんでお前がここにいるんだ？　ここは、勇敢な戦士の集う場所だぜ？　臆病者のくる所じゃあない。　帰りな！」

酒臭い息を吐いてギユンターが怒鳴ると同時、ギユンターの拳が隻眼の男　ジェイクリーナスの左肩を打った。

「ごりつ、と。」

挨拶にしては鈍すぎる音に、ロジャーとルシオが気色ばむ。見ればギユンターは酒瓶を握りこんで、ジェイクリーナスを殴っていた。

「テメエ！」

「許さん！　じゃん！！」

がた、と立ち上がるロジャーとルシオに　ジェイクリーナスの静かな視線が重なった。思わず、ラストディッチの構えを取ったロジャーが制止する。と、ジェイクリーナスは優しい笑みを浮かべて、

ぼん、とロジャーのヘルメットを叩いた。

「んあ？」

不思議そうに顔を上げるロジャーと、ジェイクリーナスの優しい眼差しが重なる。ジェイクリーナスはなにも言わずに、左肩に手を当てて酒場をあとにした。

酒場を、静寂が満たす。

顔を見合わせたルシオとロジャーは、それからもう一度、ジェイクリーナスが去っていった戸口を見やった。二人とも茫然と押し黙る。カウンターに座ったアレンも、じ、とそちらを見やっていた。

それが、ジェイクリーナスとの出会いだった。

そのあと、「酒場で騒ぎが起きた」と通報を受けた近衛騎士団長のファーンは現場に急行した。武人らしい無骨な輪郭と、細目。長年の鍛錬で白人特有の肌は陽に焼け、くすんでいる。クレルモンフエランでは一般的な金髪を、額から頭頂に向かって撫でつけた彼は、癖のない直毛を肩にかかるか、かからない辺りまで伸ばしていた。

白い石畳の酒場に、銀の甲冑を着たファーンの登場は絵になる。店の周りには人だかりができていた。

「それで、騒ぎというのは？」

ファーンが問うと、酒場にいた赤ら顔の男　ギユンターは渋面を作った。幸い、騒動自体は既に収集している。だが騎士団が出張ってきた手前、ギユンターを始め、ロジャーたちも事情聴取を受ける羽目になったのだ。

それが終わったあと、ロジャーたちは酒場から出た。蔵かなクレルモンフェラン城を背景に、街路を歩く。アルトリアより人通りの多い街はしかし、笑顔という仮面を被って、無理に活気を作っているようにも見える。どこか空虚な雰囲気を持った街だ。

「なあ、アレン兄ちゃん」

とことこと小さな体を揺らしながら、ロジャーは顔を上げる。隣で、長身のアレンが、自分よりも背の高い、白い筒を肩に担いで歩いていた。

「なんだ？」

「オイラたち、なんであそこを追い出されたんだあ？」

言つて、ロジャーは不思議そうに首を傾げた。すると、傍らでルシオが、ち、と小さく舌打ちをした。

「バカダヌキが宿屋のカウンターで暴れるからだろ。馬鹿」

ぼそりとつぶやくルシオに、ロジャーが目じりをつり上げてふり返る。

「んだとお!! それだったら、最初に喧嘩売ってきたお前も同罪じゃんか!!」

「うっせ!! 酒場でお前が、変な連中に絡まれるからだろうが、馬鹿!!」

「なにをう!!」

睨み合う二人を横目に、アレンはため息を吐いた。二人は、自分たちの素行が原因で宿を追い出されたと思ったようだが、実際には違う。

宿に入り、店の主人と顔を合わせた瞬間。彼はロジャーとルシオの人に非ざる部分 すなわち耳と尻尾を見て、顔色を変えたのだ。どうやら、“亜人”という種族がこの国 この惑星には存在しないらしく、初めて見る奇異な二人を気味悪がった。

アレンは顎に手を当てて、わずかに視線を伏せる。

(……この街に、宿はあそこしかないようだし……)

街を一通り歩いて、他を当たろうとしたが徒労に終わった所だ。酒場以外、飲食店が見当たらないことから、あまりロジャーたちが伸び伸びと旅の出来る場所ではないらしい。

顔を上げたアレンは、ロジャーたちに向かって言った。

「仕方がない。今夜は野営しよう」

「ええええええ!!?!?」

案の定、ロジャーとルシオが口を台形にして渋い顔を作った。そして互いを睨み合ったかと思うと、再び喧嘩を始める。その二人にアレンは困ったように眉根を寄せながら、続きを切り出した。

「これも経験の内だ。 行こう」

「……くそ、バカダヌキめ」

「アホネコ、覚えてろ……」

口々に不平を言い合う二人に、更に眉根を寄せて、アレンは小さく苦笑した。

……
……

夜。

ジェイクリーナスが夜道を歩いていると、不審な人物がジェイクリーナスの背後を駆け抜けた。

殺気。

「何者だ!!」

ジェイクリーナスの鋭い一喝。同時、ぱつ、とジェイクリーナスは懐からボーガンを取り出した。迷わずそれを不審者に向けて放つが。

弓の名手といわれるジェイクリーナスの腕を以ってしても、妙な仮面をつけた男は、鮮やかな身のこなしでその場を去っていった。

三本放った矢の一本が、男の裾に当たって、紙片をばらまく。

男を追おうとしたジェイクリーナスだったが、相手も闇に身をやつした専門家だ。ものの数秒もしない内に見失った。代わりに、ジェイクリーナスの手元に残ったのは、男が残していった紙片。

クレルモンフェラン城における、機密文書だった。

「これは……、機密文書!？」

去っていった男の方角を見据えて、ジェイクリーナスが呆然とつぶやいた。

と、

……ドンツッ！

くぐもった鈍い音が、街の遠くで聞こえた。

機密文書を懐に収め、ジェイクリーナスはボーガンを手にとった。音のした方角に行ってみるとそこに、ジェイクリーナスでさえ取り逃がした、あの仮面を被った男が、金髪の青年に捕縛されていた。

「……大人しくしろ」

金髪の青年　アレンは、男を後ろ手に拘束すると、その上に跨って、男の口に自分の拳をこじ入れていた。空いた手で男の所持品を検める。男の外套コートの下には、二十センチ程の血糊のついたナイフが入っている。ヴィルノアの紋章が刻まれた、純製のナイフだ。

アレンはヴィルノアの国章など知らなかったが、国章の下にある文字が、アルトリアで見た大臣の文字と一致していることに気づいた。

ヴィルノアのスパイだった、アルトリア大臣の文字と。

「スパイ　それも、ヴィルノアか……」

わずかに目を細め、アレンは下唇を噛む。ヴィルノアの名を聞いたジェイクリーナスの眼が、かつ、と見開かれた。

仮面の男に眼を向けていたアレンが、ジェイクリーナスを見上げる。

「貴方は……」

わずかに驚いたように目を見開くアレン。彼の両隣には、酒場で一悶着を繰り広げた元気な少年が二人、アレンと同じように目を丸くしてジェイクリーナスを見ていた。

「あっ！ あのとのおっちゃん!!」

ロジャーが嬉しそうに顔を綻ばせる。ジェイクリーナスは慎重に、仮面の男を拘束したアレンに近づいた。

「……お前たちが、その男を？」

言葉少なに尋ねると、ルシオがこくりと頷いた。

「野宿してたら、いきなりこのおっさんが通りに走ってきたんだ。んで、アレンさんがなにかあったのか尋ねただけど、無視して走り抜けようとして」

「彼の服に、ナイフが仕込まれているのに気付き、拘束しました。

……貴方も、その件で追ってこられたのでは？」

アレンに問われて、ジェイクリーナスはこくりと頷いた。

「城の機密文書を、その男が持ち去ったらしい。ここにそれがある」

「……やはり、城の関係者でしたか」

書類を一目見て機密文書と断定したジェイクリーナスに、アレン

は僅かに表情を緩めた。

ジェイクリーナスの表情が、静かに曇る。彼は無言のまま、アレンから視線を逸らした。アレンは、そんなジェイクリーナスの変化を敏感に感じ取ると、話題をそこで切った。

「では、今より王城に向かいますか？ 手伝って頂けますか？」

「……ああ」

頷いたジェイクリーナスは、アレンの拳代わりに布の塊を男の口に入れて、王城に向かった。騒然とした城に、犯人と機密文書を連れて入る直前。

「……この気配は……、不死者か！」

なにかを感じ取ったアレンが、気配を鋭くして立ち止まった。不死者、とつぶやいた瞬間。ロジャーとルシオの顔にも、緊張が走る。ジェイクリーナスは首を傾げた。

「……不死者？」

問うと、アレンは小さく頷いた。

「アンデットと呼ばれる、魂や死体が魔物化した者です。自発的に魔物となるものと、他人によって魔物にされるもの。二通りありますが、その性質はどちらも暗く、重い。……闇を凝縮した存在のように思えます」

「異形の神々ということか……!!」

目を見開くジェイクリーナスに、アレンは少しだけ首を傾げて、しかし断固たる口調で言った。

「ジェイクリーナスさん。犯人と機密文書の件は、自分に任せて頂
けますか？ ……その代わり、貴方にこの二人を頼みたい」
ルシオとロジャー

城を睨み据えて、アレンは緊張した面持ちで告げる。この青年を、全面的に信頼してもいいものかはジェイクリーナスには分からない。が、少なくとも手柄に対して興味はない。恐らく、この青年も。

「城内を探る気か？」

「不死者が王城にいるのだとすれば、その裏に何者かの陰謀がある可能性が高い。……もう、逃す気はありませんから」

アレンの瞳が、力を帯びる。ジェイクリーナスは一つ頷くと、ルシオとロジャーのことを容認した。

「ならば、城内を探る役目は私が果たそう。お前よりも、私の方が城には詳しい」

「ありがとうございます」

そこで表情を緩めるアレンに、ジェイクリーナスは小さく頷いた。アレンが、虚か実か。

それはジェイクリーナスが調べれば、分かることだったからだ。

……
……

一週間後。

王立騎士団のすぐ隣にある図書館で本に埋もれたアレンは、昼過ぎにようやく、顔を上げた。手元にあるのは世界の成り立ちや神々の奇跡を記した神学書。開いたページは戦乙女の章だ。

「熱心に、なにを読んでいるんだ？」

後ろから問われて、アレンは身を捻った。そこにいたのは、緑がかつた金髪の青年。女性と見紛うばかりに線の細い、王立騎士団の先輩だった。彼はいつも通り、あまり感情を乗せない青い瞳でアレンを見ている。

「少しばかり神学を」

ぱたんと本を閉じて、アレンは椅子から立ち上がった。用もないのに話しかけてこないのが、このジェイルという青年だ。気立てはいいが、あまり他人には踏み込もうとしない。付かず、離れず。友人は多いが、話し込むほどの親友は居ない。ジェイルは他人と一線を隔し、近い人間を作りたがらない男だった。

「もうすぐ今日の練武が始まる。準備しろ」

中性的な外観に変わらず、ジェイルは高い声で言った。

「はっ」

アレンは小さく頷くと、読みかけの本を棚に戻し、練武の間へ急いだ。

クレルモンフェラン王城へと続く、長い坂の中腹にジェイクリーナスの家がある。そこに仮の宿を取って六日。ロジャーとルシオは、今日も家事に勤しんでいた。

「ちゃんと持つてる。バカダヌキ」

警告を発して、ルシオは緊張した面持ちで棚に向けて腕を伸ばした。ルシオが手にしているのは、十五センチほどの棒に取り付けられた叩きだ。それでパタパタと棚の上に積もった埃を払ってやると、白い煙が、もわん、とルシオの頭上に広がった。

「けほっ、けほけほっ!!」

思わず咳き込む。ルシオの下で椅子を支えていたロジャーが、不満の声を上げた。

「コラア、アホネコ！　なんか粉っぽいもんが……!!　、けほけほっ!!」

埃が落ち、ロジャーも咳き込む。使われていない台所を掃除し始めて二日。未だ、台所に積もった埃を、除去する作業は終わっていない。

ジェイクリーナスという人物は、部屋に物を置かない代わりに、生活観をまるで感じさせない、空虚な家に住んでいた。

「……飯にしよう」

台所の戸口に、いつの間にか帰ったジェイクリーナスが、買って

きたパンとりんごを手にした。

完全な男所帯。

ルシオとロジャーは昼食と聞いて、嬉しそうに顔を綻ばせた。

大国・クレルモンフェランの王城は、白亜の煉瓦を積んだ、精緻な城だ。宗教を第一に掲げるだけあって、芸術性はかなり高い。城内にはいくつもの女神像や戦士の石像が並んでおり、赤い絨毯の敷かれた廊下を過ぎると、部屋の左右を騎士の甲冑で固めた、練武の間に着いた。

正規兵の甲冑を授かったアレンは、それを纏って練武の間に入る。他の騎士たちと、同じように。

「では、今日の練武を始めろぞ」

陽が高くなり始めた昼ごろ。ファーンは騎士団を集めて言った。クレルモンフェランの王立騎士団は、主に細身の剣が標準装備だ。アレンはいつもの剛刀とは、まるで違う剣の重みを確かめながら、部屋の隅に移動した。

基礎稽古は既に終了している。“今日の練武”というのは、組み手のことだ。

「お前の相手は、私だ」

アレンが部屋の端に行くと、騎士団の中から一人、細面の青年が名乗り出てきた。王立騎士団の中でも団長と互角以上の実力を持つといわれる青年騎士、ジェイルだ。

「恐縮です」

アレンが几帳面に一礼すると、ジェイルは慣れた動作で細身の剣を抜き、構えた。重心を右に寄せての突きの構え。リズム良くステップを踏むジェイルに、アレンも細身の剣を抜いて、彼と剣を合わせた。

キンツ、

小さな金属音を立てて互いに剣を払う。同時。ジェイルは鋭く踏み込んだ。

「ハツ！！」

鋭い突き。認識すると同時、剣先がすぐ目の前に迫る。アレンは僅かに上体をずらした。風を切つて細身の剣が傍らを走る。と、

「タアツ！！」

過ぎたばかりの細身の剣が即座に反転し、上円を描いてアレンに迫った。変わらず、剣をふる速度スピードが速い。アレンは、キンツ、と直立させた剣でジェイルの打点をずらすと、完全に剣をふり切ったジェイルに向かって突きを放った。

ボツツ！！

練習剣とは思えない風切り音が、突きと共に走る。ジェイルは即座に手首を返すと、その突きを細身の剣の刃で受け止めた。

ジェイルは細身の剣の刃に右手を添える。それで衝撃を受け切るつもりだったが、

ぎゅいんっ!!

「くっく!!」

一瞬、受けた剣が曲がるような錯覚に陥った。ジェイルは小さく身体を丸めて衝撃を流すと、目を見開いた。眼前のアレンが、既に次の動作に入っている。

(突き …!!)

ジェイルが認識した瞬間。十発以上の突きが無造作に放たれた。

ズドドドドドオンッ、ッッ!!!!!!

「か、はっ!!」

全弾受けようとして、ジェイルは悲鳴を上げた。身体が傾ぐ。甲冑を着けていたが、それごと肉を抉られる感覚だ。ぐらりと視界が揺れる。そのとき、アレンのふり下ろしが弱ったジェイルに走っていた。

(っ、っつ …!!)

ふらつく足で、ジェイルは咄嗟に後ろに跳ぶ。びゅおんっ、と猛烈に風を切るアレンの細身レイピアの剣が、ジェイルの甲冑を掠めてふり落ちていった。

瞬間、

「え……?」

不意に、アレンがつぶやいた。ジェイルの一点を見詰めて目を丸くしている。その無防備な隙。ジェイルは細身の剣レイピアを握って鋭く踏み込むと、剣を逆袈裟にふり上げた。

「もらったあー!!」

裂帛の気合とともに、最高の剣速で相手を断つが、

ギンツ、、!!

鈍い金属音を立てて、細身の剣レイピアの刀身がくるくると宙を舞った。不意をついたと思ったジェイルの一撃は、しかし、アレンの本能的な反撃　横薙ぎによって叩き落された。

ジェイルの細身の剣レイピアが、見事にへし折れる。

「……!!」

それにジェイルが目を見開いていると、どつ、と鈍い音を立てて、ジェイルの細身の剣レイピアの刀身が、床に突き刺さった。

アレンが騎士団に入隊する折、手合わせしたファーンが惨敗したとの噂は聞いたが、ジェイルはそれを生で目撃したわけではなかった。

ゆえに、

(まさか、これほどまでに……っ!)

眼を大きく見開いてアレンを見上げると、深刻な表情をしたアレンが、こちらに歩み寄り、有無を言わさずジェイルの腕を掴んだ。

「え？ おい……！！！」

事態が理解できず、ジェイルは眼を白黒させる。まるでジェイルが肩を借りるような体勢だ。硬い鎧の胸と胸が、一分の隙なくぴたりとくっついた。

「少しだけ、我慢を」

それだけ言って、アレンは足早にファーンの許に行くなり、

「すみません。負傷者が出たので、医務室に運びます」

丁重に一礼して、ファーンの返事も待たずにジェイルを連れて練武の間をあとにする。アレンの腕の中で、ジェイルがばたばたと暴れた。

「お、おい！ 放せ！！ 私は負傷など　！！！」

「……。貴女の鎧を、斬りました」

わずかに視線をずらしながら、アレンは小声で囁く。瞬間。暴れていたジェイルの身体が、びくんっ、と痙攣したように跳ね　動かなくなつた。

ジェイルの視線が、下がる。

「……見、たのか……？」

問うと、ジェイルを抱く腕の力が和らいだ。ジェイルが自分の鎧を見下すと、ぱっくりと胸許が裂けていた。そこから垣間見える、ジェイルの白い肌と、
　　豊富な胸。

瞬間。ジェイルは、ぼつ、と頬を紅潮させた。そう言えば心なしか、視線を逸らしているアレンの頬も紅い。

「……すみません」

視線は相変わらず合わせないが、誠意だけは伝わってきそうなアレンの表情に、ジェイルは益々頬を紅潮させた。顔全体が熱い。アレンに彼女を見る余裕があれば、彼女が耳まで紅くしていることに気づいただろう。

「それで、その……。こんな……」

氣力を失った様子で、ジェイルはしどろもどろになりながらアレンを見上げた。鎧の胸と胸に隙間が出来ないように必要以上に密着しているのは、ジェイルの胸許。ふっくらとした彼女の乳房をさらさないためだ。彼は答える代りにジェイルを一瞥し、自分に宛がわれた部屋に彼女を連れ込んだ。その直前、周りに誰もいないことを確かめながら。

「……………」

ジェイルを椅子に下ろす。と、アレンはわずかに視線を逸らして右手を掲げた。ジェイルの胸許。鎧の裂け目の前に。

「じつとしてください」

そう言われ、ジェイルは少し、怯えたように鎧の裂け目を庇ったが、小さく頷いた。

アレンが右手に意識を集中させる。直後、右掌に、白い紋章陣がふわりと浮かんだ。直径十cmほどの小さな紋章陣だ。それが淡く

輝くと、鎧の裂け目がまるで意志を持つかのように塞がっていく。

「これは……！」

まるで映像を巻き戻すかのような不思議な現象に、ジェイルはアレンを見上げる。と、ぴたりと鎧の裂け目を繋がったことを確認して、アレンが頷き返した。

「魔法です。俺は、魔導師でもある」

「……！」

ジェイルが息を呑む間に、アレンは戸口を見やって目を細めた。遠くで足音がする。それも、かなり急いでいる。

「……ジェイルさん。貴女のことを、フーン騎士団長は？」

問われて、ジェイルは俯いた。クレルモンフェランの王立騎士団は女人禁制だ。それを責められていると勘違いしたジェイルは、小さく頭を垂れた。

「………知っている」

いつになく、覇気のないジェイルの声。

アレンは構わず戸口に視線をやると、無造作に部屋の扉を開けた。

「なら、問題はない。か」

独り言のようにつぶやいて。

開け放たれた扉から、ジェイルの視界に飛び込んできたのは、息

せき切って辺りを見渡している、ファーンの姿だった。

「……………ファーン……………！」

つぶやいたジェイルの声に、ファーンの視線がこちらを向く。彼は酷く驚いた表情で、ジェイルを見返してきた……………。

2 クレルモンフェラン編 それぞれが背負うもの

「……事情を、話してもらえますか？」

ファーンを部屋に招き入れたあとで、アレンは改めてジェイルとファーンを見やった。ジェイルは気まずそうに目を伏せて、膝の上に乗せた自分の手を見つめている。対するファーンはどこか残念そうに、眉間に皺を寄せていた。

「その前に、一つ約束して。……このことは、どうか秘密に」

顔を上げたジェイルが、弱った瞳をアレンに向ける。その董色の瞳をじつと見返して、アレンが黙っていると、ジェイルの傍らに座ったファーンも、頭を下げた。

「……私からも頼む！ どうか、彼女のごことは……」

アレンは小さく頷いた。

「ジェイルさんの人柄については、十分に承知しているつもりです。自分がお聞きしたいのはその理由。 差障りなければ、話してもらえますか？」

「……ええ」

力なく、ジェイルは頷いた。

「私は昔、化物の群れに襲われて、家族や財産を全て失ったの。その化物が人為的に呼び出されたものとも気づかずに、ただ、運がな

「かつたと涙に暮れていた」

「化け物が人為的に呼び出された　ネクロマンサー 屍術士の仕業だった、と？」

アレンが問うと、ジェイルとファーンは顔を見合わせて、こくりと頷いた。

「私から全てを奪った奴は、自らの出世と保身のために事件を起こした！！　この王立騎士団に棲む団員、マグナスが！！」

「…………。なぜ犯人がマグナス団員だと分かったんです？　ネクロマンサー 屍術士の仕業だとすれば、直接的なものとは考え辛い。特定は、かなり難しいのでは？」

「でも、私は見たの！！　化物の群れに家族が襲われた時、丘の上で笑っているアイツを！！」

「私も彼女の証言を下に、調べてみた。すると、確かにその事件鎮圧に当たった指揮官は、マグナスだったんだ。偶然とは考えがたい一致。…………しかし、君の言う通り、アレン 屍術士の仕業では確たる証拠がない。奴を失脚させるには、なにか口実が必要だ。最近、奴の周辺を洗わせているのだが…………」

言葉を詰まらせるファーンに、アレンは小さく頷いた。

「では、その身辺調査。私に任せて頂けませんか？　ファーン騎士団長」

「君が？」

目を丸くするファーンに、アレンは自信を含んだ眼差しで、少しだけ微笑った。

「私には、スペシャリスト 専門家がついていますので」

アレンの真意が読めずに、ジェイルとファーンは顔を見合わせた。

その夜、ロジャーの通信機が音を立てた。

ピーッ、ピーッ、ピーッ……、

無論、アレンからの通信である。

「お！ 兄ちゃんからだ!!」

ちょうど、ジェイクリーナスと夕食を取っている時のことだった。不思議そうに首を傾げているジェイクリーナスを置いて、ロジャーは嬉々として応答に出る。すると隣のルシオが、割り込んできた。

「なに!?! アレンさんだと!?!」

「おい、押すなよ! アホネコ!!」

「うつせ! 俺が“きかい”使えねえからって調子に乗ってんじやねえよ!! バカダヌキ!!」

「へっへっんだ!!」

「元気そうだな、二人とも」

騒いでいる間に回線が繋がり、画面モニター上にアレンが現れた。ロジャ―は、ルシオの顔をぐいぐいと脇に押しやると、嬉しそうに、にっ、と笑った。

「あつたり前じゃん　オイラ、頑強なメノディクス族の男だぜい
」

「そうだな」

モニター上のアレンも、小さく微笑う。と、ロジャ―は笑顔のまま、今日の報告を始めた。

「そうそう、そんでさあ〜！　聞いてくれよあ、アレン兄ちゃん！
！　実はオイラな、この街の近くにある森で、姉ちゃんに会ったんだよ！！　ええつと、そんで、名前は……」

「ミリアだ。バア〜カ！」

「そう！　ミリア姉ちゃん！！　それで。このアホネコの奴がよ、姉ちゃんが美人だからって……ぐふ、ぐふふふっ！！」

「バア〜カア〜ダア〜ヌウ〜キイ〜！！！！」

「ぐわっ、アブネ！？　ナイフはよせてー！！」

「うっせ！　黙れ！！　しゃべんなあー！！」

「ぎゃああああ……！！！！」

騒然とする部屋の様子を想像しながら、アレンはやや頭の痛い思いで黙り込んだ。が、覚悟を決めたのか、ロジャーの後ろに控えているジェイクリーナスに視線をやるなり、表情を引き締める。アレンは改めて、話を切り出した。

「すまないが、ロジャー。ジェイクリーナスさんと話をさせてくれないか？ 頼みたいことがあるんだ」

「んあ？」

首を傾げながら、ロジャーがジェイクリーナスをふり返る。すると、視線の合ったジェイクリーナスが、本当に不思議そうに瞬きを繰り返した。

……………

「……マグナス、という人物についてか」

通信機で話すことに慣れたのか、ジェイクリーナスは神妙な面持ちでつぶやいた。モニター越しにアレンが頷く。

「可能でしょうか」

「それがお前の言っていた、王城にまわりつく“不死者”とやらの気配と、関係があると言ったんだな？」

「ほぼ、間違いなく」

答えるアレンに、ジェイクリーナスは小さく頷いた。

「ならば、私に言えることは一つだ」

「感謝します。ジェイクリーナスさん」

確信を持って断言するジェイクリーナスに、アレンは微かに笑った。つられるようにして、ジェイクリーナスも口端を少しだけ、ふと緩める。

ジェイクリーナスがクレルモンフェラン城を裏で調べている間。

アレンは王立騎士団に入ること、表から城を調べていた。

アレンが現れた時期と、入団した理由 例の機密文書を持つていた犯人を捕まえた手柄という事柄から、彼が不死者に関係する者に眼をつけられる可能性は極めて高い。

なぜならば、不死者と関係を持つには、高度な知識と、不死者を召喚するための高額な魔術道具を必要とする。つまり、身分は資金に余裕のある貴族階級 城の要人だ。

そこで、アレンはジェイクリーナスとの連携を図り、且つ、城の者にそれを気取らせないために、ロジャーの持つ通信機を情報交換の主な道具としていた。未開惑星 科学技術がアレンたちのいた場所よりも進んでいないこの場所において、百パーセントの安全を得るために。

ジェイクリーナスは、マグナスという人物を調べるに当たって、青年がなぜロジャーたちを自分に託したのか、その真意をようやく知った。

「しかし、便利だな。通信機というのは」

今日の定時連絡を終えて、雑談のようにジェイクリーナスが言うと、^{モニター}画面の上のアレンが小さく苦笑した。

「そうですね。ですが、我々の世界では便利な分、盗聴も多くて。暗号化させるのにも一苦労です」

「そうか……」

こんな風に報告のあと、雑談を交えるのは、寡黙なジェイクリーナスには珍しいことだ。特に、ロジャーたちを引き取ってからは口数が増えた気がする。それはジェイクリーナス自身が不思議に思うほど、彼の中でなにかが変わっていた証拠だった。

今まで誰にも言わずにいた、自分のことをも吐露してしまうまでに。

ジェイク。お前はワシの誇りだ。

騎士、それも王の側近に選ばれるなんて。

十数年前。王立騎士団に任命されたジェイクリーナスは、父親から贅辞の言葉を受け取った。

王の側近。

騎士ならば誰もが目指す、王立騎士団の頂点という身分に、ジェイクリーナスの父は本当に嬉しそうだった。母に先立たれ、生きる気力をなくしていた父が、初めて笑った瞬間でもあった。

そうやって、我がことのように喜ぶ父のために。

「父のことを思えば、俺は王のためにどんな任務もこなしてきた」

アルコールを片手に、ジェイクリーナスは言った。ロジャーたち

が寝静まった深夜。閑散とした台所に、一つ、蝋燭の火を灯して、ジェイクリーナスは長年抱えていた闇を吐露した。

それは、滅多なことではない。

雑談をしている間にアレンの蒼瞳を見据えていて、なぜか話したい気分になったのだ。この青年になれば、なにを話しても良い様な、そんな気分だ。

真意のほどは、自分にも分からない。ただ単純に、十年ぶりに祖国に帰ってきて、酒場で“臆病者”と罵られたことが、その場にアレンも居合わせたことが、発端なのかもしれない。

「それで、汚れ役を」

画面上のアレンが、慎重に問いかけてきた。ジェイクリーナスは無言のまま、頷く。

「突然騎士の位を剥奪されて、あらぬ噂で俺が町にいられなくなるまでにそれほど時間はかからなかった。十年。残してきた父のことが気がかりなんだ……」

言つて、ジェイクリーナスは部屋の闇を見据える。暗闇の中、遠い眼差しで 父親の影を探すように。

その横顔を、じ、と見詰めて、アレンは僅かに視線を落とした。

「……分かるような気がします。自分も、母を置いて軍に上がった身ですから……」

アレンの言葉に、ジェイクリーナスは顔を上げた。まさに闇を見据えるジェイクリーナスと同じ目をしたアレンが、寂しげにジェイクリーナスを見返している。

(ああ、そうか……)

その蒼の瞳を見据えて、不意にジェイクリーナスは理解した。
彼に、昔のことを話そうと思った理由。それは強い意志の中にも、
自分と似た悲哀を瞳に秘めていたからだ。
気付いて、ジェイクリーナスは苦笑した。

「……すまん。また湿っぽくなってしまったな」

「いえ。貴方のお話が聞かせて頂けるのは、自分にとっても有意義なことです。それに、こちらこそ申し訳ありません。お父上の、捜索の邪魔をしてしまって……」

「気にすることはない。私が自分の意志で決めたことだ」

「……はう」

頷いて、アレンは安堵したように微笑った。

「では、のちほど」

「ああ」

恭しく頭を下げる青年に、ジェイクリーナスも微笑を返した。

深夜の王城は蠟燭の覚束ない光で満ちている。今は皆、寝室に身を置いてある時間帯で、廊下に人通りはなかった。

王立騎士団の、団長室にて。

ジェイルはいつも通り、ファーンと情報交換をしたあと、小さく下唇を噛み締めた。

「こんなに近くに居ながら、手が出せないなんて……！」

ファーンが独自に調べさせている調査団からの報告に、相変わらず進展はなかった。

ジェイルは苛立ちを隠せない。ファーンは彼女の背を叩いて、優しくなだめた。

「今はまだ、我慢するんだ」

「でも……！」

ジェイルは反論しようとファーンを見上げた。が。その董色の瞳をファーンが見返すと、ジェイルは力を失ったように、寂しげに顔を伏せた。

「……私は、あなたを利用していただけなのかもしれない」

いつになく弱々しい声音で語る彼女に、ファーンはわずかに視線を上げた。

マグナスを捕まえる。

そうファーンに打ち明けてから、三年。それ以上以前からずっと続いている彼女の意志が、ここにきて揺らいでいるように見えて、ファーンは胸が痛んだ。

弱気なジェイルは、初めて見た。

「……………」

蝋燭が灯すジェイルの横顔を、じ、と見詰める。悲しみに暮れた、ジェイルの表情を。

ジェイルは、泣いているのかも知れなかった。

「貴方が騎士団長という立場じゃなかったら、私は貴方には見向きもしなかったかも……………」

つぶやいた彼女は、うつむいて拳を握りこむ。自分を傷つけることで、正気を保とうとしている。そう思えた。

「私は、ずるい女ね」

悲鳴のような声。涙は出ていない。だが、震えている声。ジェイルの細い肩を、じ、と見詰めて、ファーンは唇を噛んだ。この肩を抱きしめられたなら、どれだけ。そう心で叫びながら。

「それでもいい。だから、一緒にいてくれ」

必死に悲しみに堪えるジェイルに、ファーンは心の中で言った。彼女の、本当の名を。

(愛してるんだ、 レテイシア)

それだけは、絶対に口に出れない皮肉に、唇を噛みながら。ファーンの声が、ジェイルのか細い嗚咽に混じっていった……………。

3 クレルモンフェラン編 vs J・D・ウォルス

アレンがマグナスの不祥事を持ってきたのは、ジエイルが弱音を零した、翌日のことだった。

「本当か！？ アレン！！」

逸る気持を抑えながらファーンが問うと、アレンは小さく頷いた。昨夜、ジエイクリーナスの身の上話を聞く前に、アレンは彼から報告を受けたのだ。マグナスの不祥事を掴んだと。

その経緯を話すなり、ファーンとジエイルは表情を綻ばせ、ジエイルは興奮の入り混じった声で叫んだ。

「マグナスが異形の神々を信奉しているというのは、本当だったのね！？」

「ええ。マグナス氏は出陣式の前、兵士たちに祝福の儀式を執り行います。チャンスは、そのときかと」

「ありがとうアレン！！ 君の御蔭で騎士団も、そして我々も救われる！！」

がっちりと手を握ってくるファーンに、アレンは首を横にふった。

「優秀な協力者がいればこそです。私の力では……」

「謙遜する！ ……それに、その方にものちほど礼を言いたい！ 紹介してくれるな！？」

「はい」

アレンが頷くと、ファーンも力強く頷いた。剣を手に取り、強く握りこむ。

「そつだ。……全ては終わった、そのあとに」

「本当にありがとう！ アレン！！」

涙混じりに礼を言ってくるジェルに、アレンは小さく、口端を緩めた。

……
……

天空を浮遊するレナス・ヴァルキュリアは、微風に身を置き、美しい銀髪をなびかせた。陽射を受けた彼女の髪が、反射して紫色に光る。蒼穹の鎧から零れる女性的な肉体は、凜とした中にも柔らかない女の色香を内に宿していた。

彼女は、そこに浮かんでいるだけで幻想的だ。

剣を交えて分かった。アンタの剣は、軽すぎる。

人の死を、人の心を縛るにしては、あまりにも。

ふと、青年の言葉を思い出して、レナスは唇を噛んだ。カミール村で受けた傷が、そうするとずきずきと疼く。傷は治ったが、レナスの胸が、心が、なぜか痛む。

「……アレン、といったか」

つぶやくと、更に、ずきんつ、と胸が痛んだ。黄金の朱雀を喰らったとき、アレンの兼定は、レナスの傍らを過ぎて行った。外されたのだ。レナスは朱雀の衝撃波だけで行動不能にさせられていた。

「……………」

ぎりりと奥歯を噛みながら、レナスは複雑な表情で空に浮遊する。ヴァルハラ神界に最も近いその場所で、今日はフレイからの定時連絡があった。

レナスは目の前の空間に、指でくるりと円を描く。すると、フレイから預かった水鏡がそこに生じ、波紋が広がった。

神界にいるフレイの顔が浮かび上がる。

相変わらず美しい女神は、凜とレナスを見据えて、言った。

「久しぶりね、レナス」

「……………ええ」

フレイの顔を見て、レナスはそれまで浮かべていた苦々しい表情を和らげた。

表情から、笑みが零れる。エインフェリアやアレンと話するときとは明らかに違う、慈愛に満ちた、柔らかい表情だった。

対するフレイの表情は、レナスと対峙しているというのに、いつもより少し硬い。それだけで大体の状況を察したレナスは、浮かべた微笑を押しとめて、わずかに目を細めた。

「そちらの様子はどつ?」

レナスが問うと、フレイは硬い表情のまま、首を横にふった。

「現在の状況としては、なにか手を打たないと厳しいわね。ヴァン神族の勢力が、我が方をわずかに上回っている」

「……………そう」

頷くレナスに、フレイの毅然とした眼差しが向けられる。

「レナス、これからの戦況は貴女にかかっているわ。私と離れてからこちら、貴女の働きぶりを見せてもらったけれど、もう少し頑張ってもらわないと困るわね。貴女に与えられた時間は、無限ではないと言ったはずよ」

「……………」

わずかにレナスの視線が下がった。その変動を感じ取ったフレイは眼を細めて、小さく笑った。窺うように尖った顎を下げて、フレイは、じ、とレナスを見る。

「よもや、下界で会った人間のことを気にしているの？」

探るように問う。フレイの脳裡に浮かんだのは、薄い金髪の青年だ。自分の身長よりも長い刀を手にし、不死者の腕を見事に両断した、あの青年。

目を伏せていたレナスが、す、と顔を上げた。

「……………あの人間は、私を感じ取った運命を変えたわ。それに不死者の討伐も。あの男は、なにか得体の知れないものを持っている。こちらの想像を上回る、なにかを」

「不死者を討つたですって？」

眉根を寄せるフレイに、レナスは頷いた。水鏡に映し出されたフレイが、形のいい顎に手を当てる。

数秒。

顔を上げたフレイは、口許に笑みを湛えて言った。

「確かに、それが本当なら由々しきことね。けれど所詮は人間、瑣末に過ぎないわ」

「……………」

俯くレナスに、フレイは笑った。美しいが、どこか冷たい笑みを。

「まあ、貴方が気にするというのがなら、いいでしょう。私の方でも少し観察してみるわ。それじゃあがんばって。いい戦力を期待しているわ」

「ええ」

フレイの顔をじつと見やって、レナスはわずかに視線を下げた。ふわりと水鏡に波紋が広がる。瞬間。中空に映し出されたフレイの姿が消えた。

静寂が、また辺りを占める。

これもオーデインとやらが仕組んだことなのか。

……………俺に、人を見捨てると！！

青年の言葉を思い出して、レナスは忌々しげに表情を曇らせた。忌々しいのになぜ、あるとき彼を殺せなかったことにわずかでも安堵してしまったのか。

あるとき、彼が微笑ったことに ……。

「……………」

途中で浮かんできた言葉を、首をふって追い払う。それでも彼の面影だけは消えず、レナスは脳裡に浮かぶ青年に向かってつぶやいた。

「お前が、運命にさえ関わらなければ……………」

見上げた空があまりにも蒼く澄んでいて、レナスは寂しげに眉を寄せた。

……………

……………

戦乙女たるレナス・ヴァルキュリアには二つ、ミッドガル下人間界で為すべきことがある。

一つは勇者の魂エインフェリアに相応しい人間の魂を選定すること。もう一つはミッドガル下地上界に巢食う不死者を討伐すること ……。

……………

……………

「これで終わりだ！ マグナス！！」

出陣式に躍り出たファーンは、邪神を呼び込む方陣を描いたマグナスに剣を向けた。

マグナスを討つ機会をうかがって三年。その間を共に過ごした騎士団のメンバーが、ファーンのとに続いて細身の剣を引き抜く。

「かかれえっ！！」

ファーンの号令と同時に、騎士団が一斉に剣をマグナスに向け、踊りかかった。先方を切った騎士たちがマグナスに剣をふり下ろす。が。

ギインツ！！

「なに！？」

「見えない壁が、邪魔を！！」

ファーンの疑問とジェイルの驚きが重なった。マグナスの前に見えない壁。上段から切りかかった三人の兵たちが、甲冑の下で目を剥いた。マグナスは小さく笑んで、つい、と人差指を弾くように伸ばした。

「……っ！！」

瞬間。切りかかった兵たちが、空気の塊、とでも言うべき圧力にかかって後ろに弾かれた。

ずだあんっ……！！

凄まじい勢いで壁に背が当たり、彼らは無造作に床に崩れ落ちた。

「……かはっ……！！」「」

「馬鹿な……！」

ファーンはそれを見やって、目を見開いた。魔法に疎いファーンには、なにが起きたのか理解できない。そしてまた不思議なことに、壁にぶち当たった兵たちに傷はなかった。挫傷していてもおかしくない衝撃であつたにも関わらず、だ。

マグナスは僅かに残る魔法の気配を察知して、ある青年に目を向けた。ファーンを先頭にした騎士団の中で、左手に、淡い燐光を宿した青年。

アレンだつた。

「……魔法障壁^{マジックシールド}か。確かに、この程度の剣を相手取るには有効な手段だ」

アレンはマグナスを見据えて、静かに言う。見返すマグナスが、神経質そうな顔を向けて、にやりと笑つた。

「ほう、少しは魔術の出来る者がいたか……。しかし、雑魚に違いあるまい？」

マグナスの足許にある方陣が、青い光を放つ。

召喚陣。

眩しさで皆が目を覆う中、アレンは城を覆う瘴気の根源が、そこ

から具現化されていくのを感じた。

(不死者……！)

手許の細身の剣^{レイピア}を握り締め、アレンは召喚された不死者を睨む。光の中から現れたのは、青白い肌の、魅惑的な女だった。血で濡れたような赤い髪は、しっとり背中^に流れ、吸い付くような深い闇を湛えた紅の瞳が、真っ直ぐにアレンを見返してくる。女は病的に白い美貌でねっとり微笑うと、緋色の唇を静かに割った。

「虜にしてあげる」

見た目を裏切らない、鼻から抜けるような猫撫で声だった。アレンが、は、と目を見開くと同時、女が左手をかざす。

(^{スベルガード}魔法防御を　！)

一瞬で構成した紋章陣が、アレンの前に現れる。
が、

「無駄よ」

女の濃密な声が響く。
と。

きい　い　い　い　……　っ　！！

甲高い耳障りな音が、耳を伝って脳を揺すった。女の放った紫色の方陣が、アレンの身体に絡みつく。

「っ、ー!!」

アレンは目を睜った。ぐうぐう、と胸の奥を握り潰されるような、鋭く、鈍い感覚。

同時、

「ファーン!? 皆っ!!」

ジェイルの悲鳴が、アレンの背後で響いた。ふり返った先に、昏倒したファーンたちの姿。アレンに纏わり付く紫の方陣が、ファーンたちにもこびりついている。

「、くっ!」

平衡感覚を奪われ、アレンは膝を折った。

「アレン!?!」

ジェイルが駆け寄ってくる。唯一、女の魔法を受けても平気なジェイルが。

「なんだと? 魅惑の呪が通じないのはなぜだ?」

マグナスが意外そうに目を睜る。方陣の光は、確かにジェイルにも降りかかっていた。だが方陣の光がジェイルに当たった瞬間。それはするりと、彼女の傍らを過ぎて行ったのだ。

ジェイルはマグナスを睨み、恫喝した。

「マグナス! 貴様、皆になにをした!」

紫色の方陣は完全にアレンを拘束し、ファーンたちの意識を奪っている。こちらに視線を向けたマグナスが、神経質そうな鼠顔を歪めた。

「お前は、ファーンの部下の……」

言いかけて、舐るようにジェイルを見る。ジェイルの傍らでは未だ、呪に逆らうようにアレンが歯を食いしばっていた。その彼と、ジェイルを見比べるように往復して。

「……なるほど。貴様は大した魔導師らしいが……」

そう、アレンに向けてつぶやいたマグナスは、ジェイルを見るなり嗤った。

「これは一体どうしたことが。女人禁制の騎士団に女が紛れ込むとは！ 男と偽ってファーンめ。女を困っていたのか！！ カタブツかと思っていたが、なるほどなるほど！」

「、っ！」

くく、と喉を鳴らすマグナスに、ジェイルは押し黙った。同時。ぼん、と肩を叩かれる。ジェイルがふり返ると、横から割って入るように、アレンが冷たい殺気を、女とマグナスに向けた。

「軍人が上官を侮辱するとは、……いい度胸だ」

方陣に絡まれながらも、不自由を一切感じさせずにアレンがつぶやく。その壮絶な殺気を感じて、マグナスは、ひっ、と息を呑んだ。血の気が引き、顔色が白く染まる。が。女は殺気を向けられても、

柳のように微笑うだけだった。

「フウ〜ン。可愛い顔してるじゃナイ」

女は興味深そうにじつとりとアレンとジェイルを見つめたあと。
ふとジェイルを見据えた。

不吉な紅の瞳が、静かな微笑とは反対に強烈な毒気を孕む。ジェイルを突き刺すような、棘のような視線だ。赤髪の女は、でも、と言の端を繋げると、ジェイルの後ろに倒れているファーンを見やっ
て、にい、と口端を吊り上げた。

「オトコを利用した悪いオンナ。けれども、いつしかそれも自分の
想いを制止するための理由と成り果てて……ああ！ 素直になれな
い女心つて、い〜わねえ」

クスクスと笑う女の言葉に、ジェイルがびくりと跳ねた。ぐ、と
顔を引き締め、ジェイルは鋭く細身レイピアの剣を抜き放つ。

「……魔物が、黙れ！！」

「アラ、魔物だなんて。せっかくアナタの気持ちを代弁してあげた
のに。言うなれば、私はキューピッドでしょう？」

「貴様……絶対に、斬る！」

右手で剣を掲げ、肩の位置で刃を水平に寝かせたジェイルが、踏
み込む。

「ハッ！！」

鋭い突き。相手が認識したときには既に、剣先がすぐ目の前に迫っていた。が。女は慌てた風もなく、くるりと宙に浮かせた杖を反転させた。

ギンツッ！！

見えない壁。

騎士たちの剣を受け止めた、魔法障壁がジェイルの突きを完全に止めている。く、と唸るジェイル。瞬間。女の白い腕が、ぬう、と障壁の向こうから伸びてきた。

「っ、っ！」

目を見開いて、ジェイルは無理やり体を捻ろうとした。が、そこで背筋に悪寒が走った。壁まで吹き飛ばされた、騎士たちを思い出す。

(あ！)

態勢を崩せば一気に弾かれる。あの騎士たちのように、壁まで吹き飛ばす。

魔法障壁マジックシールドの強力さにジェイルが唇を噛んだとき、勝ち誇った女の妖艶な笑みが重なった。

瞬間、

ジェイルの傍らを、アレンがすり抜けた。

タンツッ！！

鋭い踏み込み。

「馬鹿な、魅惑チャームの呪が効いてないの!？」

女が声を荒げた。だが確かに、彼は魅惑チャームの呪の束縛を受けている。が。その剣速はとて、呪を受けている人間のそれではない。

(なんて耐久力　!!)

そして、精神力。

女が舌を巻く間に、アレンが細身の剣レイピアを薙ぐ。ギインツツ、と鋭い音を立てて、刃は魔法障壁に防がれた。

「っ!」

舌打つアレン。女はしつとりと笑った。

「ポイズンブロー」

ズドオツ!!

女の指先から放たれた毒の方陣が、アレンとジェイルの足許で弾けた。爆発が起きる。

「ああっ!」

ジェイルが思わず頭を庇うと、アレンが彼女を遮った。毒の爆発が、アレンを一瞬、闇に沈める。
が、

「魔法防衛スベルガード? ……あの一瞬で!？」

ばああああ……ッ！！

アレンの周辺から、透明な球体が迫り出し出していた。女が目を見開くと同時、その瞳が警戒に染まる。壮絶な力の奔流。アレンからだ。

(なにっ?)

まだ、なにかある。

女が胸中で叫ぶと、ぴり、とかざした両手に、電流が走った。女の前で、アレンが細身の剣を水平に構える。右手を剣の刃に添え、彼は裂帛の気合を放った。

「覇アツ！！」

ドンッ！！

アレンに内包されていた気功が、細身の剣を伝って迸った。剣から腕へ、腕から全身へ、全身から大気へ。

瞬間。

黄金に迸った気功が、パンツ、と風船が割れる音を立てて、身体に絡み付いていた紫色の方陣を弾き飛ばした。

「つく！！」

女が息を呑む。風船の割れる音と同時に、印を結んでいた女の腕に、雷光が走ったのだ。誘惑の呪を跳ね返されたことで、魔力が逆流した。鋭い雷の感触が女の腕を焼く。女の貌が一瞬、歪んだ。

パリ、パリパリッ……！！

立ち込める肉の焦げた匂いを嗅ぎながら、女は雷光が作った火傷を見下ろして、異常に紅い舌で、ペロりと腕を舐めた。

「……やるわね、ボウヤ」

細身の剣を油断なく構え、アレンは女を睨み返した。呼吸は乱れていないが、よくよく見れば、アレンの額には玉の汗が滲んでいる。やせ我慢だった。

「アレン、無事か!？」

「ええ」

鋭く問いかけてくるジェイルに、アレンは端的に応える。油断なく女を睨み、アレンは細身の剣を握った。

妖艶な女だ。それも、強大な魔力を持つ女。ゆえに、呪いを解くのに時間がかかった。気配でフーンたちを探ってみるが、彼らが目を覚ます様子はない。

アレンは細身の剣の柄を両手で握った。それを上段から、ふり下ろす。

「ケイオスソード!!」

ズオツ!!

空気ごと切り裂きそうな、凄まじい斬撃が上段からふり落ちる。ギインツ、と鈍い音。細身の剣は先ほどと同じ、女の魔法障壁に防

が、

「なっ!?!」

完全に受け止めた細身の剣の剣先から、斬撃が魔法障壁マジック
シールドをすり抜けてきた。目を見開く女の貌を、二つに割る
寸前で、女は咄嗟に、後ろに下がる。

すばっ

女の貌が、浅く割れた。

「っ、ぐうっ!!」

貌の正中 鼻筋に走った傷から血が噴く。女は左手で貌を覆う
と、滴る血を見据えて目を見開いた。

「貴、様っつ! 私の、美しい貌を!!」

「……魔女が!」

細身の剣を構えて鋭く睨むアレンに、女の表情から妖艶なものが
消えた。

「アレン!」

後ろに押し込まれているジェイルが、細身の剣を握って加勢す
る、と視線で告げてくる。が、アレンは視線を返すだけで、ジェイ
ルの要請には答えなかった。ふ、と。ささやかな微笑だけを送って。
狂ったように笑う魔女に、アレンは氷の瞳を向けた。女が、白い
手を伸べる。

「誰を傷つけたのか、教えてやるわ！ その身に相応しい、死に化粧を施してね！！」

「やってみろ」

「馬鹿な子！！」

壮絶に笑う女の魔手から、方陣が放たれた。

ポイズンブロウの爆発が、アレンの足許で弾ける。が、その前にアレンは踏み込んだ。一瞬で剣の間合いへ。上段から細身の剣をふり下ろす。

瞬間、

女の傍らに浮遊する杖が、ぴかりと光った。

「破アツ！！」

両者、吼える。

ギキーンッ！！

左袈裟にふり下ろした斬線が、しかし、魔法障壁に阻まれた。火花を散らし、見えない魔法障壁が、斬撃を受けて白く輝く。

びきき……、

障壁にヒビが入った。アレンの持つ、細身の剣の刀身にも。だが、それでも尚。細身の剣の刀身は、気高い蒼白の光を放っていた。ただの斬撃では切れない。

そう判断したアレンが、己の気を刀身に籠め、ふり下ろしたのだ。

障壁が白く輝いたのは、アレンの気に触発された女の魔力が、放散した結果。

だが。

アレンの壮絶な“気”の量に細身の剣アレンが耐えられず、悲鳴を上げていた。徐々に障壁と激突した刃が、ひび割れていく。

アレンは素早く後ろに跳ぶと、ひび割れた剣を一閃した。

「空破斬つ！！」

斬つ！！

部屋ごと切り裂く黄金の疾風が走る。と、ふり切ったアレンの剣が、パリインツ、と音を立てて碎け散った。

豪速の疾風が女を捕らえる。が、女に浮かんでいたのは、悠然とした笑みだ。

障壁が、疾風を

スパンツ、！！

切り裂いた。

「なっ！？」

女の表情から余裕が消える。貌を歪め、寸でのところで疾風を躲すと、眼前にアレンが迫っていた。わずか数センチ、そこに蒼瞳。

「、くう！！」

杖をかざそうとした女の腹に、ずどんっ、と鋭く拳を握ったアレ

ンの右腕がめり込んだ。

「がふっ!?!」

凄まじい衝撃と、重みを持って。無様に唾液をばらまく女を、片腕で持ち上げて、アレンは拳を捻った。

「バーストナツクル!!」

アレンの拳に炎が宿る。壮絶に、苛烈に。女の身体を、黄金の炎が丸ごと焼き去る。

ズガアアアッッ!!

女の悲鳴と同時、炎が爆散した。

「ぐああああ……っっ!!」

女のものとは思えない、鈍い声が響いた。剣を手にジェイルが、呆然とアレンを見る。黄金の炎が、部屋を照らし、影を引いた。まるで花火のように、ぱらぱらと。

剣士にしては、非常識なまでに洗練された体術。魔導師にしては、鋭すぎる剣技、武術家にしては、偉大すぎる魔力。

人の、粹を集めたような男だった。

「……凄い……!」

ぼつり、とジェイルはつぶやいて、アレンに駆け寄った。

「倒したの!?!」

「いえ、まだ……」

深刻な面持ちでつぶやくアレンを置いて、ジェイルは、はっと目を見開いた。消し炭と化した女の貌が、嗤ったのだ。最後の気力をふり絞るように、砂となって、さらさらと崩れていく中で、そ、と。それは砂　ではなく、闇の粒子だった。

（幻影イルユージョン　！）

アレンが感づくと同時に、ジェイルの悲鳴が響いた。

「ファーン！？」

「！？」

ざ、とアレンがふり返る。と、そこには倒れていたハズのファーンが、細身レイヒアの剣をふり被っていた。ジェイルに向かって、真っ直ぐに。

「あ、」

突きがくる。

風を切って、ファーンの突きが。

「ジェイル！！」

アレンの声。

ファーンの剣線が分かっていたのに、ジェイルはなぜか、金縛りにあったように動けなくなっていた。目の合ったファーンの瞳は、

紅い。あの女と同じ、深紅の瞳だ。優しい彼の青瞳とは、まったく違う色。

正気ではなかった。

ド……ッ!!

容赦ない斬撃に、身が貫かれる。

「……っあ!!」

ジェイルは目を見開いた。鈍色の刃と、紅の鮮血。ぼんやりと思考が停止する。

肉を貫通した剣先。

それは、

「っ、っっ!!」

ジェイルの寸前で、アレンの掌を刺し貫くことで止まっていた。開かれたアレンの左手が、咄嗟の判断だったことを物語っている。あと一瞬、アレンの腕が遅ければ、それは確実にジェイルの胸を貫いていた。

「……アレン!!」

ジェイルは息を呑んだ。アレンは構わず、貫かれた左手でファーンの剣を握り締めた。無造作に剣を押しつけ、ファーンの身体をこじ開けると、アレンは無事な右手で、体勢の崩れたファーンの頬に拳を叩き込む。

ズドオンッ!!!!!!

「っ、つう！」

鈍い音を立ててファーンの身体が床に落ちる。悲鳴を上げる間もなく、ファーンは冗談のように床をバウンドして吹き飛んだ。反動で、アレンの左手から無造作に細身の剣レイピアが引き抜かれる。ぴしゃああつ、と左手から大量に血が噴き出した。

「っ、！」

と、

「よくがんばったわね、ボウヤ」

不意に、女の声があった。はっと左を見る。アレンの真横に女。近すぎる距離にいる女の貌から、アレンに刻まれた斬撃の痕が消えていく。見る間に裂けた女の皮膚が、癒着する。

「っー！」

アレンは舌打ちした。ちょうど女が現れたのは、動かなくなった左手方向。拳が伸びきった今の状態で、防ぐ手立てはない。女との直線状にはジェイルもいた。アレンが躲せば、ジェイルに当たる。

そこまで、計算したのかもしれない。

「ふふ、オシマイ」

女が手をふった。同時、

ズドドドオンツッ！！！！

無数の衝撃波が、放射状にアレンを襲った。アレンは両腕を固め、受けきる。

「…………ぐ！」

腕に衝撃波の重みが、ずんつ、と沈み込むように響いた。衝撃を流すことは出来ない。それではジェルに当たる。

「おをつー！！」

だからアレンは、風穴の開いた左手を握りこんだ。気を宿す。両手に。

腕の沈みが酷くなった。だが、これは相手の攻撃の所為ではない。全身に走る気功の激流が、己を焼く感触だ。アレンは恫喝で耐えた。

ズドドドドオンツッ！！！！

押し寄せる衝撃波が、アレンの全身を強烈に揺する。

「おおおおつー！！」

アレンは気功を迸らせる。黄金に、アレンの身体が輝いた。蒼瞳が、殺気でぎらつき始める。途端、優位にいる女の瞳が、蒼の殺気にわずかに恐怖した。

「……………凄……………！！　まだ……………！！」

恐怖と、恍惚。病的に白い頬を染めて、女は陶醉したように

叫んだ。

と同時、

アレンの足許に、毒の方陣が現れる。

「いいわ。絶対に屈服させてアゲル」

くるり、と女が掌を翻した。瞬間、アレンは目を見開いた。

「ポイズンブロー」

(しま　！)

衝撃波の所為で、両腕が塞がっている。これでは魔法防^{スベルガード}御できない。

足許の方陣が爆ぜた。

ズドオンツッ！！

「アレエエエンツッ！！！！」

ジエイルの絶叫。

爆発が、アレンのいた空間を黒く塗りつぶす。

そして、

現れたのは、純白の白い光だった。

「……！！」

アレンは呆然と空を見る。そこから現れた、蒼穹の鎧を纏う女神を。

毒の爆発から自分を守った、彼女を。」

「なぜ……？」

アレンは思わず問いかけたが、女神はこちらに視線を向けず、闇と契約したネクロマンサー屍術士、J・D・ウォルスを睨んだ。自らの手で生成マテリアライズした剣を手に。

「不死者よ、あるべき場所に還るがいい！」

剣先を突きつける女神レナスに、J・D・ウォルスは妖艶に笑んだ。

「あら、久しぶりネエ。でも前に会ったときは蒼穹の鎧だったかしら？ それとも漆黑？ 浅葱色ではなかったと思うのだけれど……。まあ、どれでもおんなじよネ」

J・D・ウォルスは宙に浮いた頭蓋骨の杖を握ると、その額に口付けた。

「でも悪いわね、女神さま。私、今はそのコと遊びたいの」

瞬間。J・D・ウォルスの姿が、ふ、と消えた。アレンの顔色が変わる。同時、J・D・ウォルスの貌がアレンの眼前に迫っていた。気配がない。

「ちっ！」

舌打ちながら右拳を握る。素早く走った正拳が、しかし捕らえたのはJ・D・ウォルスの影。J・D・ウォルスの死体のように冷たい手が、アレンの頬に触れた。

……ぞ、

悪寒が、アレンの背に走った。吸い付くような、柔らかい女の感触。

気付けば、背中から抱きしめられていた。死人のように冷たい、
J・D・ウォルスの肌。

「ウーン、いいオトコ」

ねっとり言つて、J・D・ウォルスの指が、つう、とアレンの頬を撫でる。瞬間。がつ、とJ・D・ウォルスの腕を掴んだアレンは、彼女の腕を吊るし上げた。肩で彼女の肘を固定し、掴んだ腕を容赦なく引き落とす。

「ごきんつ、と普通ならば、それでJ・D・ウォルスの肘の関節が呆気なく外れた。
が、

「でも。悪い子ネ」

関節が外れ、J・D・ウォルスの気が逸れた所を反撃しようとしたアレンは、ぐにやり、とあまりにも呆気なく垂れた女の腕を見て、目を見開いた。

（関節がないのか　！？）

「惚れちゃいそうよ」

耳許でささやいた女は、緋色の唇をアレンの首筋に口付けしようとした。

が、

「覇アツ!!」

ドンツ!!

突如、迸った壮絶な気の奔流に、J・D・ウォルスは大きく目を見開いた。バチインツ、と音を立ててJ・D・ウォルスの身体が吹き飛ばされる。が、彼女が退いたのは一歩。その間にJ・D・ウォルスをふり返ったアレンが、拳を握った。

「バースト、」

容赦ない蒼瞳を見据えて、J・D・ウォルスは陶醉したようにつぶやいた。

「アアン、ステキ……!!」

黄金の炎が、アレンの拳に宿る。ぎらり、と蒼瞳が殺意に光った。

「ナツクル!!」

炎が、爆ぜる。が。それは、J・D・ウォルスには届かなかった。

「また、あの見えない壁なの!？」

ジェイルが息を呑むのを尻目に、J・D・ウォルスはしつとりと笑った。魔法障壁マジックシールドの向こうで、壮絶な炎を上げるアレンを愛しむ様に。

「この結界、重ねられるのか……！」

忌々しげに舌打つアレンに、女は緋色の唇を割った。

「そうよ。……欲しい……貴方のすべて。ぞくぞくするワ……！」

頬を紅く染めて、女は艶めいた息を吐きながら、自らの身体を掻き抱いた。クスクスと女が笑う。アレンはJ・D・ウォルスを睨んで、手をジェイルに伸べた。

「剣を」

細身の剣レイピアを言われていると気付いて、ジェイルは素早く腰から引き抜こうとした。

が、

「……くっ！」

ギインッ……！

咄嗟に生じた気配に抜剣すると、そこには紅い瞳をぎらつかせたファーンが、凶悪な顔でジェイルに斬りかかっていた。

「ファーン！ 目を覚まして……！」

ファーンの細身の剣レイピアを受け止めて、ジェイルが悲痛に叫ぶ。だが、ファーンは獣のように荒い息を繰り返すだけで、ジェイルの声に応えない。

「フフツ、余程貴女が気に入っているのネ。自らが愛する者に剣を

向ける。その感情が強ければ強いホド。私の呪はそついうものだから」

「貴様！」

クスクスと笑う女に、アレンはジェイルから剣を受け取ることを諦めて、拳を握りこんだ。

「邪魔だ、人間よ」

トン、と静かな踏み込み音を立てて、アレンの傍らをレナスが過ぎていった。神剣　レイテル・パラツシュが瞬後、銀の一閃を描く。J・D・ウォルスに向けて、鋭く、速く。

斬ッ！！

走る斬線が、J・D・ウォルスの魔法障壁を苦もなく切り裂いた。マジックシールドしかし、J・D・ウォルスの表情に焦りはない。そうすることが当然のように。

「さすがね、女神サマ」

J・D・ウォルスはつぶやいた。ついで、白い手を伸べる。

「戯言を」

「つぶつぶ」

妖艶な笑い声と同時、女の手から、幾筋もの衝撃波が生まれた。

4 クレルモンフェラン編完結 門出

ズドドドオンツッ!!

弾丸のような物音を立てて、白い疾風がレナスに迫る。が、レナスは剣を縦横無尽にふると、並み居る衝撃波をすべて切り払った。

「その程度の攻撃で、私が倒せると?」

表情のない女神が息をつく間も見せずに、ダッ、と強く地を踏みしめる。一瞬で懐へ。

J・D・ウォルスは、ただ笑んだ。

「ポイズンブロウ」

喘ぎ声のような嬌声を発しながら、J・D・ウォルスは手を伸ばした。レナスの足許で、毒の方陣が爆せる。

ズドオンツッ!!

が、レナスは剣を横に一閃させると、毒の爆発を無造作に切り開いた。

「無駄だ」

レナスは、ちゃっ、と剣を寝かせる。いざ踏み込む瞬間、アレンが鋭く叫んだ。

「まだだ!」

「なに？」

レナスが首を傾げると、ポイズンブロー毒の方陣の下にもう一つ、巨大な方陣が
J・D・ウォルスの掌に浮かんでいた。

「!？」

レナスが目を見開く。J・D・ウォルスの唇が、勝ち誇ったように、にい、と割れた。

「ファイナルチェリオ!!」

部屋が、翳った。天井は闇へ続く無限の間と化し、そこから紅く
ぎらつく紋様を刃に描いた、巨大な槍が姿を現したのだ。それが、
レナスに向かって、

ズガアアアアアンツツ!!

容赦なくふり落ちる。

「しまっ　!!」

これは切り払えない。ニヘルン・ヴァレスニアイ神技を以ってしなければ。目を見開くレナ
スの隣で、アレンが炎を拳に纏わせた。

「バースト、」

全身の気すべてを凝縮させて、巨槍に挑む。頬には冷や汗。無理
は承知だ。死を覚悟したその瞬間。そこにいる誰でもない声が響い

た。

「待たせたな」

渋みのある重低音。アレンに聞き覚えのある声だった。

「っ！」

アレンが息を呑む。思考が像を結んだ瞬間、男のボーガンが火を噴いた。

「奥義、ギルティ・ブレイク！！」

男が鋭く叫ぶと同時に、ボーガンから火矢が八発、速射された。

ズドドドドドドドオオンッ！！

炎を纏ったボーガンが、正確無比に巨槍ファイナルチェリオに向かつて爆ぜる。一本一本は巨槍に比べて小さいが、九本目の炎の矢を受けたところで、その全てが爆ぜた。弓術と気功術。そのどちらも高い水準レベルで完成された、究極の技。

赤く爆ぜる巨槍と火矢が、激突して互いを相殺し合う。

J・D・ウォルスは小さく舌打ちした。アレンが力のこもった眼差しでふり返った。

「ジェイクリーナスさん！！」

「オイラたちもいるぜ！ アレン兄ちゃん！！」

「お待たせしました！ アレンさん！！」

「ロジャー！ ルシオ！！」

ジェイクリーナスに従うように現れた二人に、アレンは、に、と口端を吊り上げた。ロジャーとルシオの手には、二メートル強の剛刀・兼定が握られている。

「刀を！」

手を伸べるアレンに、ルシオとロジャーは、せーの、の合図で兼定をアレンに投げつけた。中空で弧を描き、兼定がアレンの手許に収まる。

「すまない！！」

その感触を確かめながら、アレンは兼定を抜き払った。右手を刀身に、左手で柄に握る。兼定を水平に寝かせ、己と対峙させるように。

「覇アツ！！」

裂帛の気合と同時に、兼定が歓喜するように黄金に輝いた。

ぱああああ……っ、っ、

すべてを呑み込むような、黄金の光。凄まじい気の塊が、強烈な輝きを持ってアレンの全身に行き渡った。ファーンに貫かれた左手の風穴が、見る間に塞がっていく。

ドンッ！！

瞬間。

アレンの空気が、変わった。

「……なに！？」

J・D・ウォルスは目を見開いた。

アレンの背に、黄金の朱雀。部屋全体を覆い尽くすほどの巨大な朱雀が、彼の気から現れた。まるで、彼に付き従うように。

「神獣ですって！？ たかが、人間が！！！？」

言う間にも、J・D・ウォルスは魔力を集める。少しでも早く、迅速に。

でなければ、魔法障壁が。

「終わりだ」

不吉な、彼の声が聞こえた瞬間、

スパ ツッ……！！

気付けば、アレンの斬線が、J・D・ウォルスの身体を縦に両断していた。踏み込み、ただ一閃。

「ど、どうしてこの私が！ い、嫌、嫌あつ！」

二つに割れたJ・D・ウォルスの顔が、言葉を紡ぐ。彼女を形成している闇の魔力が、兼定の刀身に宿った、黄金の光に被わられてい

くのが分かる。

J・D・ウォルスが、霧散する。

本能的に結末を悟ったJ・D・ウォルスは、ただ首を横にふつた。

「この美しい姿を失いたくない……うつ、ぐつ、」

自分の身体が砂のように零れていくのを感じながら、J・D・ウォルスはアレンへと手を伸べた。蒼穹のように、澄んだ彼の瞳を睨み据えて。

「私、私は……！　ぐつ、ぐおおおお……！！」

手は、助けを求めるために伸べられたのか。それとも、J・D・ウォルスが最期に呪いを残すための抵抗だったのか。

光に消えていくJ・D・ウォルスを見据えて、アレンは静かに、兼定を納めた。

チン、

鞘に納まる兼定が、まるで帰りを告げるように啼く。それを懐かしむように、じ、と見つめて、アレンは小さく頷いた。

「終わったな……」

後ろからジェイクリーナスに声をかけられ、アレンはふり返った。

「はー」

頷く。傍らでは、ジェイルが気絶したファーンを介抱していた。ファーンの鎧には、腹を穿つような凹みが、べこりと出来ている。まるでドリルかなにかで貫かれたような、そんな傷痕だ。

(ラストディッチか……)

ロジャーのヘルメットについた角を一瞥して、アレンは小さく苦笑した。ジェイルの傍らでロジャーとルシオが、に、と笑いかけてくる。恐らくルシオがファーンを攪乱し、その隙をロジャーが突いたのだろう。

「……………」

戦乙女の気配が変わったことに気付いて、アレンはレナスをふり返った。アレンに背を向けている、彼女を。

「さっきは」

「勘違いをするな、人間よ」

言いかけたアレンを制止するように、レナスはふり返らずに言った。

「不死者討滅は我が宿命。貴様の罪が消えたわけではない」

「……………」

冷たく言い放つ。それに対して、アレンの返事がないのを感じながら、レナスはそのまま地を蹴った。上空へ、その姿が霞んでいく。それを、じ、と見据えて、アレンはわずかに、寂しげに目を細めた。

「……運命、か」

小さくつぶやいて。

アレンは意識を取り戻し始めた、ファーンたちに向き直った。

……
……

事態が収束したあと、王立騎士団副団長のマグナスに、法の裁きが下った。

本懐を遂げた若き騎士・ジェイルは、マグナスの処分が決まったその日に騎士団を辞職した。天才と誉れ高かっただけに、彼が騎士団を抜けたことは大きな痛手だったが、代わりに、ファーンに叛意を持つマグナス一派が抜けたことで結束力が高まった。

そして、ファーンが騎士団長として更なる頭角を現したとき、彼の結婚式が行われた。

相手は緑がかった薄い金髪を腰までなびかせた、二十歳前後の女性だ。“ジェイル”の名を捨てた、レティシアだった。

「おめでとつございます、ファーン騎士団長」

婚礼の儀を終えたファーンは、休憩を兼ねて教会の外にいた。そこに、少し前に騎士団を脱退したアレンが現れたのだ。

「きてくれたのか!？」

王立騎士団の甲冑を脱ぎ、黒のシャツにジャケットという、いつもの出で立ちに戻ったアレンは、兼定を納めた白の居合い袋を担ぎながら、祝いの言葉を述べた。連れのロジャーとルシオも一緒だ。

「幸せにな! おっちゃん!！」

「……泣かすなよ!！」

二人の少年の祝いの言葉に、ファーンは苦笑しながら頷いた。クレルモンフェランの国章がついた、胸許の飾りを手に。

「我が誠意にかけて、必ず」

王立騎士団式の一礼を施すと、ルシオとロジャーは満足そうに頷いた。

背後で、クレルモンフェラン城の鐘がファーンたちを祝福するために鳴り響いている。新郎服に身を包んだファーンは、少し複雑な表情でアレンを見た。

「本当に、行ってしまっただけか?」

「はい。……自分には、やはり相棒コイツ以外にふる刀はありません」

言って、アレンは誇らしげに、肩に担いだ居合い袋を見やる。それにファーンはため息を吐くと、そうか、とだけ残念そうにつぶやいた。

「二人も有望な若者が去ることは、騎士団としても痛手なのだがな

……」

「冗談を」

アレンが揶揄すると、ファーンも気恥ずかしそうに頭を掻いた。

「おっと、いかんいかん」

愛嬌のある表情で小さく笑うファーン。そのとき、

「ファーン！」

教会の中から、ファーンを呼ぶ声が聞こえた。ふり返ると、純白のドレスに身を包んだレティシアが、緑がかった金髪をなびかせながら駆け寄ってくる。

「あ………！」

そのレティシアが、アレンを見つけるなり、表情を明るくした。朗らかに笑む彼女に、アレンも微笑を返した。

「おめでとつございます、レティシアさん」

「きてくれたの!?!」

滑らかなレティシアの頬に、わずかに朱が差す。アレンは小さく頷いた。

「はい。どうかお幸せに」

二人に向けて、アレンが手を差し伸べると、ファーンとレティシアが、互いの顔を見合わせたあと、ぎゅ、とそれを握り返した。

「オイラもオイラも！」

「あ！ 抜け駆けすんな！！ バカダヌキ！！」

慌ててロジャーたちも握手に加わる。それを微笑ましくレティシアが見返すと、彼女は俯いて、言った。

「……ファーン。少しだけ、許してね」

小さく、そう。

レティシアは重なった三人の手を見詰めた。

「？」

彼女の意図が読めず、ファーンがアレンと顔を見合わせる。

「ああ」

首を傾げながらもファーンが頷くと、レティシアは小さく笑んで、アレンを見上げた。握手を交わした手を少しだけ離して、それとは別の手で、アレンの項うなじを、そ、と抱く。

「！」

目を丸くしているアレンの頬に、柔らかなレティシアの唇が触れた。

……ちゅ、

「なっ!?!」

ファーンの表情が固まる。その下で、ルシオとロジャーが、ひやあつ、とつぶやきながら口許を両手で覆う。

「……っ!」

アレンは大きく目を見開き、呆けた表情でレティシアを見返した。レティシアが小さく笑む。

「本当に、ありがとう」

涙に滲んだ顔でそう言って。

ふんわりと笑う彼女に、アレンの顔が次第に紅く染まっていく。レティシアの唇が触れた頬を、知らぬ内に押さえていた。

「あ、……え、と……!」

顔が熱くなるのを感じながら、アレンは妙な汗を掻いて、ただ、首を横にふった。

「君が騎士団を去ってくれて、助かったのは私の方かもしれんな……」

ぼつりとつぶやいたファーンの手が、妙に寂しい。ファーンをふり返ったレティシアが、腰に手を添えて言った。

「もう! だから、許してって言ったでしょ! ファーン」

柳眉を困ったように吊り上げるレティシアに、ファーンは哀しげな視線を返す。と、レティシアはやっぱりと笑んで、ファーンの顔を、そ、と包んだ。

「…………私が愛してるのは、貴方だけよ」

蕩ける様なレティシアの声に、に、ファーンの表情も次第に緩んでいく。ファーンは彼女の腰を抱くと、本当に愛おしそうに、彼女の髪の中に自分の顔を埋めた。

「レティシア…………」

ずっと、人前で呼ぶことの叶わなかった、恋人の名を噛み締めて。

「私もだ。愛してる」

確かな重みを持ってつぶやくファーンに、彼の腕の中でレティシアが小さく頷き返した。その温もりが、なんとも愛おしくて。アレン、ロジャー、ルシオは、困ったように互いを見合わせたあと、そ、とその場をあとにした。

……………

クレルモンフェランの街を抜ける前、ファーンの婚約式では姿を見せなかった、ジェイクリーナスに出会った。

ジェイクリーナスが別れを告げたいと切り出して、街の門前で待ち合わせたのだ。

「……本当に、よろしいんですか？」

“臆病者”の汚名を晴らすこともなく、街を去ると決断したジェイクリーナスに、アレンは問うた。隻眼の男は穏やかな表情で、祝福の鐘を聞きながら頷く。

「私は、父の安否を確かめたかったただけだ。……この街に、未練はない」

アレンは小さく頷くと、拳を握った。ジェイクリーナスも、拳を握る。

……、

互いの拳を軽く拳で叩くと、二人は同時に、小さく微笑した。

「また、会うこともあるかもしれんな」

「そのときを楽しみにしています」

「……私もだ」

言った二人は、どちらともなく拳を離して、踵を返した。

アレンは西へ。ジェイクリーナスは東へ。

互いに新たな旅路についた二人は、最早、ふり返らなかつた……。

1 詩帆編 異形と少女(前書き)

ちょっと異色なお話です。詩帆が“異形の者”と出会います。

1 詩帆編 異形と少女

詩帆は、広大な海が一望できる岸辺にきていた。

もつ、夜も遅い時間帯だ。誰にも気付かれないように、こっそりと自分に宛がわれた部屋から抜け出した彼女はそこで、満天の星空の下に広がる黒い海を、見つめていた。

まったく、光を映さない瞳で。
盲目で。

「……………」

腰まで伸びた茶髪が、風になびく。癖のない、すらりとした美しい髪。

今年で彼女が生れ落ちて、二十一年が経過する。

申し訳ありません。私の力が至らないばかりに……、

侵攻する敵国から海藍を守るため、彼女は戦場で歌い続けた。海藍の兵士が、少しも恐れを抱くことなく、戦うために。

呪歌。

民草がそう呼んでいるとも知らずに、彼女は歌い続けた。

海藍に勝利を、不動の未きを与えるために。

力が至らない？ …… あんたの歌声に狂わされて、何人死んだんだい？

あんたがいなけりゃいいんだよ！ そんなこともわからないのかい！！

面と向かって言われるまで。

純粋な怒りを、憎悪をぶつけられるまで。
彼女は、疑うこともなかった。自分の、業を。

「……………」
涙が、頬を伝った。滑らかな褐色の頬をなぞるように、つう、と。
涙と一緒に、自分の心まで零れていくように。

勇敢な死を遂げることが戦士にとって最高の名誉なのです。
詩帆様はその導き手。

死を前にして恐れることのない強さを兵に分け与える、
ひいては、それが国の繁栄をもたらすのです。
先程の女の言葉などお忘れなさい。

城の文官に言われた言葉を思い出して、彼女は緩く首をふった。
癖のない薄茶色の髪が、それに合わせて、さらりと肩に落ちる。

優しい城の兵の声と、憎悪に満ちた民衆の声。

戦場から帰還し、哀悼の意を遺族に捧げたときに耳にした、あの
女性の言葉が、怒りが、胸に刺さったまま、離れない。

偽り、真実

疑うことを覚えた人形は、しかし、その弱い心がゆえに、事実を
事実として受け止め切れなかった。

「……………つ、う……………」

だからこうして、彼女は声も立てずに泣きじゃくる。城を出て、
一人、海辺に立って。

心を閉ざした。その瞳のように、なにも見ないようにした。より

完璧に、人形であるために。そうしなければ、自分がそれを否定したら、一体どれだけの人が自分の所為で死んだのか。考えるのだけで恐ろしく、彼女は命じられるまま歌を紡いだ。

考えたくなかった。

自分は悪くないと思いたい。

だから、

歌を否定したときに、自分は空っぽであると、必要とされないモノだと、言われるのが怖くて、

(……それでも、心が……!!)

胸許を握り締めて、詩帆はその場にうずくまった。この場所で、自分の想いを口にして慟哭する。それだけが、彼女に残された最後の自由だ。

もう、歌いたくない。

その願いさえ、歌にしてと。

滑らかな褐色の頬に、風が当たった。彼女は顔を上げる。そうしても、暗い闇ばかりを映す瞳を。

「どなた……？」

鈴の鳴る声でつぶやくと、彼女は不安げに眉根を寄せた。城の文官が探しにきたのかと思っただが、違う。

闇の中。潮騒に混じるように現れた気配は、場を乱さぬように、じ、と固まっていた。

普通の者ならば、意識の端にもかけない微細な気配。だが、盲目である彼女には、そんな微細なものこそを感じ取る自信があった。

声はしない。闇の静寂。されど、そこに人はいる。確信を持って言える彼女には、もう一つ、分かることがあった。

その“人”は、人ではない。

しかし、その“人”は亡霊でもなかった。亡霊のように虚ろではない。邪念は感じられない。自分を、傷つける者ではない。

「……………」

彼女は、じ、と海と対峙しながら、背後に感じる気配に意識を集中させた。瞼を伏せて潮騒と、風の音を聞き逃さぬように。気配に変化が訪れるのを、待つように。

じ、と。

……………、

そうしていると、やがて、瞼の裏に一つの像が結び上がってきた。暗闇しか知らぬ盲目の瞳の奥に、遠い　小さな光。

「！」

彼女は、はっ、と息を呑んだ。眩しいと感じる。闇の中の、一縷の光が。

「……………不思議。それ程に静寂の中に有りながら、はっきりと見えません。眩しい……………。これが、これこそが、光なのですね……………！」

詩帆の声に、力が宿る。

凄いことだった。彼女にとって、初めて見る光。

それとも、

余りに濃過ぎる闇ゆえにそう見えるのか。光を知らぬ少女には、闇も光に見えたのか。

いずれにしても、彼女の視界に変化があることは、凄いに違いない。

闇は答えない。

しかし、詩帆は気配の方を向いて、小さくお辞儀した。

「お待ちしていました……」

顔を上げた詩帆は、微笑った。涙に濡れた頬が、彼女の微笑を痛々しいものにさせていたが、それにも気付かず彼女は微笑った。

「私を、迎えに来てくださったのですね」

ひた、ひたと。

詩帆は海辺の砂を踏む。気配の方へ。光の方へ。

「私に死を、安息を与えて下さるために」

詩帆の足が止まった。ちょうど、気配のすぐ前で。彼女は目が見えないが、気配の“視線”が、自分の頭の上にあることを感じていた。

気配 否、青年だ。

「生憎だが、私は貴女を殺す者でも、神でもない」

青年が、初めて口を開いた。透き通るような低い美声。それを聞くと同時に、詩帆はその頬を紅潮させた。瞼の奥の瞳が、像を結ぶ。ただの光でしかなかった暗闇が、徐々に光度を落とし、人を象つていく。

人 青年を。

「……っ！」

詩帆は見えない目を見開いた。盲目の瞳が映した、青年の姿。それはまるでこの世のものとは思えない、美しい青年だった。詩帆が“光”と感じていたものは、青年の左目 蒼銀の瞳だった。

右と、左の目の色が違う青年。それが異常だと思うほど、詩帆は人の顔など見たことはない。それでも“美しい”と感じる青年の相貌を見据えて、蒼銀と黄金の瞳が、とても人間のそれとは思えなかった。

「……貴方は……」

神ではない。と、青年は言う。しかし、人ではない。と、詩帆は思った。“人”という枠組みに彼を入れるには、人はあまりに平凡すぎる。姿形にしても、この、吸い込まれそうな蒼銀と金の瞳にしても。何人も、詩帆の瞳には映らなかつた。

「……やめましょう。私はただ、貴方呼び止めただけなのですから」

詩帆はそこで首をふって、青年を見詰めた。美しい、青年を。

「眼が？」

問われて、詩帆は困ったように微笑った。今はもう、青年の瞳を見ているつもりであるのに、やはり、焦点は合っていないらしい。盲目であることを悟られて、少しだけ残念だった。

「はい。生まれたときから、この眼はなにも映りません。……貴方のことは、気配で」

「そうですか」

青年の声は美しいが抑揚がない。にも関わらず、なぜか詩帆には、温かく感じられた。

「……不思議な方。貴方は私に光を下さいました。どれほど望もうと、どれほど願おうと、もうこの眼で見ることは叶わぬと、……そう……」

語尾が小さく震えていく。詩帆は自分の肩を抱くと、涙を堪えるように唇を噛み締めた。

「……すみません。私は決して、多くを語る方では……」

「分かっています」

「……すみません」

涙が流れる。温かい、涙だった。詩帆は肩を抱きながら、青年を見上げる。どうして、青年はこうも与えてくれるのかと、涙を流しながら思った。

この青年に、全てを預けられればどれほど楽だろうか。

“人”として、泣く。

久しぶりのことだった。

「……分かる気がします」

青年に言われて、詩帆は、え？ と首を傾げた。

「私も、貴方と似た経験があります。心を閉ざし、盲目的に主の命令を聞いていた経験が。……けれど、私には生きる目的が出来た。ですから」

「私にも、出来るでしょうか？」

青年の返事の代わりに、潮騒が耳を打った。

静寂。

詩帆は伏せていた瞼を開けて、そ、と小さく微笑った。

「ありがとうございます。……もう少しだけ、信じてみます」

自分ではなく、青年の言葉なら。

そう思う詩帆の目を、ふ、と青年の手が覆った。不意のことに、詩帆は瞬きを繰り返す。
と。

「……あ、」

温かい光が青年の掌から生じ、辺りを照らしていく。盲目の、少女の視界を。

（もう少しだけ、希望を）

意識が遠のく寸前、詩帆は光に向かって、つぶやいた。

.....

戦場が彼女を呼ぶのか。それとも、彼女が戦を呼び込むのか。

「聞け！ 命高鳴る神韻の旋律！」

青年と出会ってからずいぶん日が経っていた。彼女はまた、血臭満ちるその場にいた。戦場の歌姫 呪歌の導き手として。

「海藍の兵の強さは噂以上だな」

「あの歌声が、兵を命知らずの狂戦士へと変えてしまうのだ。歌姫がいる限り、こちらの戦力は無に等しい」

同胞の遺体を見下ろして、敵軍の兵は嘆くように言った。

焦げた大地、折れた剣が、敵兵の視界をほとんど覆っている。同胞の死を悼んでいたその兵たちも、そのすぐあとには狂戦士と化した海藍軍によって屍の中に沈んでいった。

彼女は歌う。戦場の血臭を、断末魔の叫びを、刀のふり落ちる音を、すべて消し去っていくように。

人の死を感じる。断末魔の声が耳に残る。しかし、詩帆には兵士の死に顔は見えない。歌う。歌う。歌う、

もう少しだけ、希望を。

あのととき、失意に涙した彼女の許にやってきた青年は、彼女が気付いたときには海辺からいなくなっていた。彼女が生まれて初めて見た、不思議な青年が。

頬に、涙が伝った。ようやく見つけた、この世で唯一の光だったのに。

「う、……ううつ、つ……!!」

嗚咽が歌を途切らせる。瞬間。血相を変えてふり返った海藍軍の兵士が、仇でも見るような眼で、詩帆を睨み下ろした。

「歌を止めるとは言っていないぞ!! 歌え!!」

恫喝する兵。詩帆の嗚咽が、更に大きくなった。

歌いたくない。

そう伝えることも出来ずに、詩帆は涙する。兵の舌打ちが、殊更に聞こえた。

ばしいんっ!!

「ッ、!!」

頬に熱い衝撃が走る。分厚い感触だ。詩帆はまるで殴り倒されたように、床に転倒した。鞘鳴り音を立てて、兵士が大股に歩み寄る。

「歌えと言ってるだろう、この女!!」

「かふっ!!」

蹴りが、強かに詩帆の腹を打ち据えた。詩帆は細い身体をくの字に曲げて耐える。が、蹴りは一度では終わらない。詩帆の意思

は、変わらない。

もう、歌いたくない。

頬に涙が伝ったのは、痛みの所為か。それとも

.....
.....

呪歌を失った海藍軍は、それまでの獅子奮迅の戦ぶりが嘘のように消し飛び、まるで数だけの雑兵に陥った。元々、各人が自らの意志で戦っていたわけではない。そんな彼らが狂気を捨てれば、本当に、呆気ないものだった。

「た、助けっ、っ……っ!!」

敵本陣に残っていた最後の兵士を斬り殺して、蘇芳は死体の山を分け入るように、少女に歩み寄った。敵陣営の中で、ぐったりと倒れこんでいる少女に。

聞かずとも、この少女こそが呪歌を紡ぐ魔女なのだ。蘇芳は理解した。

「解せぬ。なぜ、呪歌をやめた？」

少女の前で足を止め、蘇芳は華奢な彼女を見下ろした。すると、少女が咳き込みながら、ゆっくりと顔を上げる。床を両手でついて、声する蘇芳をふり返った。

「……赤とは、どのような色でしょうか」

見上げてくる、あどけない少女の瞳を見詰めて、蘇芳はわずかに顔をしかめた。呪歌を紡ぐ魔女にしては、あまりにも無垢な、少女の顔。

「目が見えないのか」

蘇芳がつぶやくと、少女は蘇芳の方を見据えたまま、ゆっくりと一つ、瞬きを落とした。

「私は生まれたときから歌姫になることを運命付けられていました。でも神は、私に光を与えてはくれませんでした。私は　あの方に
出合つて、初めて光を知りました。けれども……、赤がどのような色なのかは、まだ分かりません」

「……………」

「与えることに疲れ、与えられることを望む私は、さもない女ではないか」

か細く啼く少女を見下ろし、蘇芳は眉間に皺を寄せた。光をひとときとはいえ垣間見たにも関わらず、詩帆は満ちていなかった。否。

“光”という温もりを、優しさを知ってしまった人形には、青年と出合ったあとの日々が、まるで拷問のように辛かった。それまで感じていた、日常への疑問よりも。

歌え、歌えと。

城の文官から、戦場の兵から。人の死を願う歌を強要される。生きたいと。そう願う自分があさましいほどに、血臭満ちる戦場で、

人の死を願う。

願う歌を、強要される。

希望を。

心でつぶやく度に、青年に合えない日々、詩帆は胸が千切れそうになった。

幻影なら良かった。あの温もりさえ忘れられたなら、また孤独に、人形で居られたのに。

「歌を捨てて、なにを望む」

蘇芳の静かな問いかけに、詩帆は疲れた微笑を落とした。

「死です」

迷うことなく、言い放つ。

蘇芳は、ぐ、と唇を引き結び、少女を見やる。握り締めた長刀をこの少女に、ちやり、とわずかな鏗鳴り音を立てて、蘇芳は構えた。最期の望みが 与えられるものが自らの死だと、つぶやく少女に、

「……………」

蘇芳は、刃をふり下ろすことが出来なかった。

じ、とこちらの方を見詰める少女は、覚悟を決めたように動かない。たかが、かすり傷程度で大慌てしていた海藍軍とは、まったく違う。

少女はただ、死を望む。まだ、これほど若い娘だというのに。まだ、これほど無垢な瞳を持っているというのに。彼女は希望も、人

並みの幸せさえも知らない。

蘇芳は無言のまま、少女の前に膝をついた。

「……………」

少女にかける言葉が思いつかない。だから代わりに、少女の細い身体を、そ、と抱き上げた。少女が不思議そうに蘇芳を見る。抵抗する素振りには、全くなかった。

人に、抱き上げられる。

それは彼女の生涯で初めての、人の優しさに触れた瞬間であったから。

2 詩帆編 百鬼衆

蘇芳が詩帆を連れて百鬼衆の本陣に辿り着くまで、二人とも、なにも話さなかった。蘇芳は詩帆を抱いて、黙々と戦場を歩く。その間、詩帆は蘇芳の返り血を浴びた赤い鎧に頭を預け、鎧の感触を味わうように眼を閉じていた。

蘇芳が足を止めたのは、百鬼衆の本陣に着いてからだ。

そこで地面に下ろされた詩帆は、蘇芳に誘導されながら、彼の上官の前に現れた。

「……敵の歌姫を保護しました」

凜とした声で、蘇芳が言う。少し緊張しているのか、わずかに声が震えていた。詩帆は前を向いたまま、動かない。

「美しい娘だな」

右目に大きな刀傷のある上官は、生き残った左目で、詩帆を睨んだ。盲目であるからこそ、詩帆には彼の殺気が手に取るように分かる。

ちりちりと焦がされるような、鋭い殺気。

案の定、上官は握っていた刀をふり上げ、

「だが」

迷わずそれをふり下ろした。

「っ！ 親方様！！」

蘇芳が息を呑む。が、その制止も適わず、刀は詩帆に向かってふり落ちた。

ギインツ！！

鋭い金属音が、辺りに響き渡る。

「っ、っっ！！」

そのとき、蘇芳は目を疑った。

完全にふり落ちた刃。上官の腕を以ってすれば、自分とて意識していなければ斬られる。その、斬撃を。

「なっ！？」

「貴様は……！？」

一人の、百鬼の兵が止めていた。

赤い鎧。鬼の面。そして、通常の刀よりも倍近く長い、野太刀。

どれも百鬼衆の装備であるのに、上官の刃を止めた斬線は、明らかに蘇芳の知っている仲間のものではない。

まず、剣術の次元が違う。

その兵士は、まるで当然のように上官の太刀を止めると、そと鬼の面を取った。

『っっ！！』

その場にいる誰もが、息を呑む。黒い髪。この辺りでは見られない、大陸特有の、彫りの深い整った相貌。金と蒼銀の、異なる色を持つ二つの瞳。その全てが完全に調和された、芸術的な美を誇る青

年。

詩帆が海辺で合った、あの青年だった。

「貴様、その姿は……！」

「曲者が……！」

上官が、青年の纏う鎧を見て眼の色を変えたとき、蘇芳もまた、刀を抜き払って恫喝した。

止められた太刀を切り払い、上官も、鋭く刃を構える。

しかし青年は、そのどちらの問いにも答えなかった。

「生きることで、人は希望の真意を知る」

青年は静かに言った。彼が答えたのは、詩帆の“声”。心の中にわだかまる、生への疑問。

詩帆は顔を上げた。瞳の奥にまた、光が見える。その間に上官が増援を呼び寄せた。軍としては僅かな生き残りだが、一人一人を囲むには申し分ない兵の数。ざっと、二百の兵が数秒の内に、本陣に集まる。

「……あ、あ……！」

詩帆は青年を見上げて、涙した。もう合えないのだと、そう頭の隅で理解していたのに。

集まった百鬼衆が、騒々しく太刀を抜き放つ。だが、詩帆と青年の間は、静寂に満ちていた。

ただ、静謐に。

青年の声だけが、詩帆の耳に届く。

「生きてください、詩帆様」

「っ！」

詩帆の心が、千切れそうに熱い。再び出会えた青年の姿に、涙が零れる。なにかを青年に伝えようとしたのに、唇から発せられたのは、ただの嗚咽だった。

青年は詩帆を見据えると、静かに言い放った。

「私も、生きます」

つぶやくと同時に、青年が百鬼衆に向き直る。と、太刀を正眼に構えた。

すう ……、

それだけで、空気が冷える。蘇芳は太刀を握り直し、慎重に青年との間合いを測る。

まだ太刀の届く距離ではない。が、背中を伝う冷や汗の感触が、目の前の青年を酷く警戒していた。人の姿をしているが、違う。

「親方様……！」

「分かっておる、蘇芳！ ……こやつ、異形の者よ……！」

上官が青年に向かって吼えると同時、青年は甲冑を脱ぎ捨てた。その下から現れたのは、異国の軍服。奇しくも、百鬼衆と同じ、赤の軍服だった。

「他国の異形が、倭に何用か!？」

恫喝する上官に、青年は答えない。上官は目を剥いて、太刀を強く握り締めた。

「応えい！！」

「貴様らに語る故など、ない」

静謐に、青年が述べる。瞬間。上官は太刀をふり上げた。

「ならば死ねい！！」

百鬼衆の兵たちが、一斉に青年に踊りかかる。上官の一声と同時に青年は二百の軍勢に、押し込まれていった。人という波が、青年を呑み込み、群がる。

が、

青年が完全に見えなくなる寸前、変化は静かに、素早く、唐突に起こった。

「なに……っ！？」

微細な空気の変化。それを感じ取ったのは、蘇芳、ただ一人だった。

ガオンツツ！！

凄まじい轟音と共に、襲い掛かった百鬼衆が、蟻の様に宙を舞う。人の波によって、青年がなにをしたのかは分からない。だが、吹き飛ばす部下たちを見据えて、上官は叫んだ。

「ぬう……！ 慌てるな、所詮は一人よ！！ 周りを囲み、一気に押し潰せ！！」

『おおおおおっつ！！！！！！』

怒号のような掛け声と同時に、百鬼衆がまた、雪崩のように押し寄せる。吼えることで意志を鼓舞する兵士たちを、青年は静かに見据えた。手にした刀が、吸い寄せられるように上段に構えられる。

瞬間。

その刀が、青き輝きを発し始めた。

……ぞくり、

蘇芳の背に、得も知れぬ悪寒が走る。今まで感じたことのない、強烈な胸騒ぎ。彼は目を剥いて、美しいが、どこか不気味な青年の、色違いの瞳を見据えた。その瞳に、殺気。

「いかん！！」

叫んで、蘇芳は後方にさがる。瞬後、青年の刀が強烈に、鋭く横に薙かれた。

一瞬の斬閃、

……ずしゅいんっつ！！

時が止まったように、青年に押し寄せた兵士たちが動きを止める。剣を手に、彼らは驚きに目を剥いて青年を見据えていた。青年の刀から放たれた斬線が、青年を中心に、同心円を描いて兵士たちをすり抜ける。

瞬後、

ズガアアアアンツツ！！

その軌跡に、炎が吹き荒れた。青く、白い猛炎が、地面から生じて兵士たちを飲み込み、爆散する。前後左右、余すことなく全方位を捕らえたその炎は、青年に向かって踏み込んだ兵士たちを例外なく吹き飛ばした。

「ぐああああ……！！！！！」

「ぬおおおっつ！！！！！」

兵士たちが悲鳴を上げる。その中を、蒼銀と金の瞳が駆ける。音もなく、軽やかに 速く。

上官の顔が引き攣った。控えていた弓兵たちが矢をつがえ、青年に向かって放つ。二十人を超える弓兵が引いた矢は、上空に飛び上がり、青年の頭上に降り注いだ。まるで雨のように降る矢に、間隙はない。

ヒュパパパパアンツツ！！

矢が空を切る音が、耳を割くように聞こえた。音の力強さが、矢の物語るように重い。が、青年はその矢雨を縫う様に走り、消えた。

「なにだと！？」

「消えた！！？」

標的を定めていた弓兵たちが、動揺で目を瞠る。同時。顔を引き

攣らせた上官が、血走った目で叫んだ。

「うるたえるな！ 数は我が方が上よ！！」

射よ、という号令の下、弓兵たちは再び矢をつがえようとしたりしたが目標は 矢雨の狭間に消えた青年が、彼らの目の前に迫っていた。

「しまっ …！」

矢を引く間もない。

斬っ！！

疾駆した青年の後ろに描かれた銀色の軌跡は、弓兵たちを余すことなく切り伏せた。上官が瞬いた、その間に。

「おのれい！！」

舌打ち混じりに上官が叫ぶ。それを守るように兵士たちが青年に向かつていくが、紙切れ同然に叩き伏せられていく。迅速に、苛烈に、爽快に。

風のように舞う青年に、上官の苛立ちが、次第に恐怖へと変わっていく。

「おのれ、化物が！！」

上官は、ぎり、と奥歯を軋らせると、蘇芳が連れてきた女の髪を、無造作に引き掴んだ。

「歌え！！ 魔女よ！！」

「あつ！」

喉許に太刀を向けられ、詩帆は息を呑む。目は見えないが、太刀の硬い感触が肌を通して伝わってくる。上官に髪を鷲掴まれた所為で、頭を吊るされるような格好になった。

「親方様！？」

蘇芳が目を見開いた。が、上官は鋭く蘇芳を見ただけで、太刀をふるう青年を睨み据えた。

「黙れ！！ 百鬼が潰えるわけにはいかんだ！！ 歌え！！

魔女よ！！」

詩帆の喉に太刀の感触が、更に強く突きたてられる。詩帆は息を呑んだが、決して首を縦にはふらなかつた。

「貴様つつ！！」

上官が太刀をふりかぶる。

瞬間、

蘇芳の中で、なにかが弾けた。

「親方様あああつ！！」

ギインツッ！！

斬光が、蘇芳の目の前で弾ける。

上官は目を睜り、己が太刀を、蘇芳を、見据えていた。

「……蘇芳!!」

詩帆にふり下ろした上官の太刀を、受け止めた蘇芳。まるで、立ちはだかるように現れた蘇芳に、上官の瞳が、ぎらり、と輝いた。

「どけいっ!! 気でも触れたか!!」

恫喝が電流のように、びりいつ、と蘇芳の腕に走る。が、蘇芳は上官の太刀を、咄嗟とはいえ受け止めた自分に、驚きと わずかな安堵を覚えていた。蘇芳本人も気付かない程の、わずかな安堵。

「蘇芳、様……」

詩帆のか細い声が、蘇芳の耳を打つ。
と、

聞け! 命高鳴る神韻の旋律!

そのとき、詩帆の唇が、意に反して動いた。

「!?!」

蘇芳が目を睜る。倒れていた百鬼衆たちが、立ち上がった。

「おおっ!!」

瞳を輝かせる上官の首が、次の瞬間、跳んだ。

斬っ！！

青年の太刀が、上官を無造作に刎ねたのだ。

「親方様！！」

蘇芳が叫ぶ。水音と、硬い音を立てて、上官の首が地面に落ちる。が。催促する者がなくなっても、詩帆の歌は止まらない。

詩帆は自分の意志に関係なく動く唇に恐怖し、首を横にふった気でいた。

(い、や……！)

うまくいかない。詩帆の傍らで蘇芳が、胸を押さえて蹲った。

「ぐ、お、おおお……！！」

くぐもった蘇芳の声。

自分の中にあるなにかが、無理やりこじ開けられるような感覚が、蘇芳を襲う。蘇芳は咄嗟に太刀を捨て、耳を塞いだ。頭の中に直接流れ込んでくる詩帆の歌が心を縛り、思考を奪っていく。

「や、め……！！」

蹲った蘇芳が、決死の抵抗を試みる。が。ぐうぐう、と胸に強烈な痛みが走る。心の痛みではない。それよりももっと強い、圧迫感。胸を押さえると、熱いものが、自分の身体から溢れ出しそうになって、蘇芳はふるふる頭を震わせながら、息を止めた。視界が、赤く染まる。

……ぶつ、

糸が、切れるような音が聞こえた。最後に蘇芳が見たのは、凄惨な戦場の中で美しく歌う詩帆の姿。

(魔、女 ……)

初めて、蘇芳は心の底から恐怖した。
美しい。

だが、恐ろしい。

詩帆の滑らかな頬に伝った涙が、月光に照らされて、きらり、と反射した。金と蒼銀の瞳を持つ青年の瞳が、すう、と細められる。蘇芳の目が、ぐるんつ、と反転した。

「お、お、おおおお……！！！」

蘇芳の唇が、低く唸る。目が血走っている。今となっては、百鬼で唯一生き残った若武者が、狂気に飲まれた瞬間だ。

『お、おおおお……！！！！』

蘇芳に呼応するように、切り伏せた兵たちも起き上がってくる。だが、青年が見据えていたのは 蘇芳でも、不死の兵たちでもなかった。戦場の歌姫、呪歌の導き手。そう呼ばれる、詩帆一人だ。正確には、彼女の背にある赤い霧。闇の気配を孕んだ不吉な気配を睨む。百鬼衆の血を吸い、徐々に明確な形を成そうとしている、闇の霧を。

オオオオオ……ッッ！！

百鬼の声に混ざって、獣の遠吠えが聞こえた。青年は、太刀を正眼に構える。瞬間、

斬っ！！

蘇芳が一気に踏み込んだ。太刀を上段に構えての、打ち込み。巨大な鉄塊が風を切る音が、豪快に耳を叩く。

青年はまだ、納刀された太刀に手をかけている。

「勝機　　！！」

蘇芳が正気であったならば、恐らくそう叫んだだろう。

蘇芳の太刀が、青年の脳天を割る瞬間。キンツ、と僅かな甲高い音を立てて、夜闇に火花が咲いた。その間に銀色の斬線が二つ、縦と横に走る。

交差した二人は、蘇芳が刀をふり下ろした体勢で、青年が刀を薙いだ体勢で止まっていた。

「が、あ、ああ……！！」

蘇芳の手から、太刀が零れ落ちた。血が、鎧の隙間から溢れ出す。

……めり、めりめりいつ……！！

腹に一線、刀傷と思えない程の太い溝が出来ていた。一方の青年の太刀も、

ばきい……

薙ぎ払った位置で静止した刃が、ゆっくりと砕けた。剣先のなく

なつた刀を、青年は軽くふつて鞘に納める。同時。蘇芳の身体が、地面に沈んだ。

オオオオオオツツ!!

獣の声が、近くなっている。青年は視線を横にずらすと、黒い狼の群れが、百鬼衆の死骸を踏み越えて、青年を囲んでいた。蒼銀と金の瞳が、詩帆を見据える。詩帆の背に浮かぶ赤い霧を。青年は表情のない顔で、低くつぶやいた。

「今すぐ出やがれ。 斬り伏せてやる」

無造作に、刃の砕けた太刀が青年の手から投げ捨てられる。代わって、黄金の光が、青年の左手から発せられた。

ぱああああ……っ!!

左手 否、指輪から。黄金の光の粒子は夜闇を裂くと、二本の長い棒を象った。

青年がその棒を手取る。瞬間。茫洋とした光の棒は鮮烈に輝き、長刀を象った。蘇芳たち百鬼衆の野太刀と尺は同じだ。二振りの長刀は、一本の柄が黒。もう一本の柄が白だった。

青年は、その二振りを静かに右腰に差すと、柄の白い方を抜き払った。

ひゅんっ!!

何気なく切った風が、清廉と輝く。その光に呼応するように、詩帆は歌い続ける自分の身体からなにかが迫り出してくるのを感じた。

きいいい、
ぎいいいい……っ、
しゃああああ……っっ、ず、ずずず……

戦場には不釣合いなまでにのどかな、生活音が場を満たす。木の
軋む音、船を漕ぐ音、水の音、収穫した藁を引きずる音。
聞き知った音が、いくつも重なって不思議な静けさを作り出す。
途端。

ハハハハハハハハ……！！

その中で、怖気が立つほどに美しい、男の声が響いた。高く、澄
んだ声だ。

青年の目の前で、赤い霧が形を成した。

3 詩帆編完結 呪歌 十・挿絵あり(前書き)

あとがきに挿絵があります。ご注意ください。

3 詩帆編完結 呪歌 十：挿絵あり

それは、赤と黒の男だった。

血に濡れたように紅い毛皮の外套に、黒の紳士服。死人の如き土気色の肌をした美貌の男は、色素のない白い髪の間髪から紅い瞳を覗かせて、青年に向かってにこりと微笑んだ。

「お初にお目にかかる」

男は、そ、と胸に手を当てて、恭しく一礼した。男の周りは赤い霧に覆われ、まるで陽炎のようにゆらゆらと揺れている。まるで闇が魅せる幻影のように、男の存在は儚い。

斬！！

一礼した男の胸が、無造作に刎ねられた。白の長刀、デュランダールで。

目を見開いたまま、男の上半身がぼとりと落ちた。が、それは地面に当たった瞬間、黒い泥となって散った。男の上半身だった泥に一瞥もくれず、金と蒼銀の瞳を持つ青年は、白の長刀をなにもないデュランダール虚空に突きつけた。

と、
ただの虚空から黒い泥が集い、それがまた、あの赤と黒の男を象る。

「これはこれは。私は、まだ己の名すら名乗っていないというのに」
男の喉許に、白の長刀。さしもの男も、やや苦笑を含んだ。青年は言う。

「死に行くテメエの戯言など、端から聞くつもりはねえ」

「あ、……ああ……！！！」

詩帆は息を呑んだ。ゆつたりと笑う男の顔が、詩帆の瞼の裏に映っている。金と蒼銀の瞳を持つ青年が光だとすれば、この男は闇。途方もなく深い、壮絶な闇だ。

詩帆の歌は止まっていた。

代わりに、この場に立つ者は詩帆以外、人間は誰一人いない。

赤と黒の男は、気を取り直すように微笑んで言った。

「つれないことを。我が名はメフィスト・フェレス。海藍に、永劫の勝利を与えるべく王と契約した、しがない悪魔です」

メフィスト・フェレス。

名乗った男の声は、美しかった。流れるような、歌うように澄んだ声。呪歌の調べに良く似た、詩帆にとっては最も馴染み深い声。

「あ、ああ……！！！」

この男の声に触れて、詩帆は理解した。

(これが、この者の歌が、兵士に、勇敢な死を……?)

長年、そう教えられてきた。

兵士に勇気を与え、戦に勝利をもたらす詩帆の歌。だが。その半面はあまりにも

(……違う！ この、恐ろしいまでの邪念は……！！)

そこにあるのは、冷たい死。男が放つ気配は、恐怖と慟哭だ。幾人も断末魔を凝縮した、騒がしいまでの圧力。涙をふり乱して恐怖し、嫌がる人間を突き落とす、絶対的な闇。

それが、呪歌の正体。

「っ、っっ！！」

詩帆は両手で口を押さえる。ここから放たれた歌の、目を背けた自分の罪の重さが、一瞬で全身を縛る。

や、め……！！

苦しげにつぶやいた蘇芳の声。

目の前にある、深い闇の存在が 詩帆の招いた、現実だ。

……赤とは、どのような色でしょうか。

なにも知らずにつぶやいた自分の、あまりの愚かしさに、詩帆は光のない瞳から涙を零した。

「……「じめんなさい……」

もう、誰も生き残ってはいないのに。

「ごめんなさい……」

もう、届かないというのに。

わずかでも手を引いて、詩帆を守ってくれた蘇芳でさえも、呪歌で。

「ごめん、なさいっ！！」

許されるはずもないのに、詩帆は肩を震わせて泣いた。メフィスト・フェレスは闇の中で、ふわりと笑っている。血の霧に包まれ、満足そうに。その赤と黒。どちらもが、詩帆にはよく見えた。

人の血煙から現れた、悪魔の姿が。

「良い歌い手でしたよ、姫君」

柔らかく歌う悪魔の声を、詩帆は耳を塞いで拒絶したが、無駄だった。

「私は人の苦悩、恐怖、慟哭を好む。これほどの美酒を味わえたのは、実に久しい。貴女の御蔭だ」

「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ！！」

「貴女は、本当に良い贄でした」

耳の奥から、頭の中に反芻する悪魔の声。詩帆は力なく肩を震わせる。嗚咽の中でも、悪魔の声だけは鮮明に耳に入る。

それが、

「テメエはもう喋るな……」

斬っ！！

青年の静かな声が聞こえると同時、快活に走った白い長刀デュランダルが、悪魔を一刀の下に切り伏せた。

「
」

悪魔の声が止む。それは、詩帆にとって不思議な感覚だった。百鬼衆に囲まれたとき、詩帆と青年の中のみで流れていた、静寂の気配。蒼銀の瞳が放つ、青年の光。

「生きてください、詩帆様」

彼の声が、言葉が、絶望に埋まった闇の中で輝く。詩帆は顔を上げ、無言で息を呑んだ。

白い長刀を手に、毅然と立つ青年の姿。

彼の背が言っている。生きろと。

毅然と前を向くことこそが、自らが生き残る手段だと。

「これだけの殺戮つたげを語って、それは許されるのですかな？」

「っ、！」

メフィスト・フェレスの言葉に、詩帆の身体がすくみ上がった。聞こえてくる。海藍に戻ったときに投げられた、母親の憎しみが。

あんたの歌声に狂わされて、何人死んだんだい？

あんたがいなけりやいいんだよ！ そんなこともわからないのかい！！

「貴女も、それを望んだでしょう？」

クスクスと笑う悪魔の音が、詩帆にあの言葉を思い出させる。つい先程のこと。蘇芳と出逢った、初めての場所。

歌を捨てて、なにを望む。

死です。

迷わずに答えた自分に、詩帆は心の底から戦慄した。震える。身体が。心が。

……パキツ、

まるで金縛りにあつたように、動かなくなった少女を一瞥して、メフィスト・フェレスは妖艶に笑んだ。

「……堕ちたか」

先ほどまでの柔らかな声が嘘のように、低く暗い声で。

メフィスト・フェレスは詩帆から視線を外すと、中空を左袈裟状に、さつ、と切った。同時。泡のように闇が広がり、メフィスト・フェレスの描いた軌道から、一本の剣が出現する。一見炎のようにも見える、血霧を放つ黒刃の剣。それを白い指で掴み取ると、メフィスト・フェレスは青年を見据えて微笑んだ。

「では、宴を始めましょう。貴公と、私めの」

歌うようにつぶやいて、メフィストは剣を一閃する。
瞬間、

ズドオオオオンツッ!!

爆炎が、風を切るように走った。直線と左右。三つ走った炎の線が、青年を捉える。青年は大きく跳躍した。一足飛びに、メフィストの懐へ。消えたように間合いを詰めた青年の白柄デュランダールの長刀が、瞬後、脳天からメフィストを両断すべく走った。

ギインツ!!

が、今まで青年の剣を受けることすら出来なかったメフィストは、手にある血煙の黒剣を持って青年の刃を受け流した。するりと白柄デュランダールの長刀の刃から逃れるように走った黒剣が、青年の首を

ズババババツ!!

刎ねる直前、青年の白柄デュランダールの長刀が煌いた。

「!!」

わずかに驚いたようにメフィストが目を瞪る。完全に己の外へ流した長刀デュランダールが、気付けばメフィストを微塵に斬っている。闇の中で、美しく閃く青年の剣線。

……どぶつ、

水音を立ててメフィストの身体が散る。が、確かな手応えの中、わずかな違和感を残したのは、青年の方だった。

“引きずられる”。闇の中に。^{メフィスト}

青年が動けなくなつたのは、たった一瞬。が。その間に、健在しているメフィストの右腕が、黒剣を無造作にふるつた。

「そら」

ドオンツドオンツ、ドオオオンツツ！！

左袈裟、右薙ぎ、左切り上げ。腕をふり回すだけにも見えるメフィストの強引な剣さばきで、青年の身体が吹き飛ぶ。初撃はまともには喰らつた。闇が、青年の動きを完全に止めていたからだ。が、最後の切り上げだけは、咄嗟に白柄の長刀^{デュランダル}を挟んでいる。黒剣の放つ凄まじい爆炎に、冗談のように放り投げられた。

ざんつ、と力強く着地して、青年はメフィストを睨む。メフィストは死人のように白い貌を、やんわりと緩めた。

「お見事、お見事。よくぞ私の闇から逃れましたね」

「じゃれるな、外道」

歌うようにささやくメフィストに、青年は僅かについた頬の傷を拭つて、白柄の長刀^{デュランダル}を静かに握りしめた。

瞬間、

……ズドオオオオオンツツ！！

青年の内から、白銀の光が迸った。光、と称すにはあまりにも禍々しい“白銀”。音という音を呑み込んで現れた白銀の煙は、一瞬、青年の影を作った。黒い影の中で、爛々と輝く、青年の黄金の瞳。

グオオオオオオオツツ!!!!!!

同時、獣の咆哮が天と地を割った。白銀の煙が、形を成す。現れたのは “鬼”。天を穿つほどの、巨大な闇の塊だった。

「……な、に……?」

メフィストの表情が、初めて変わる。美しく、気高い蒼銀の瞳。そう見えた青年の瞳が、今は闇に塗りつぶされ、暗くぎらついていく。

まるで別人。

青年は、地に響く低音で言った。

「お祈りは済ませたか? …… 貴様の逝く時間だ」

……びりいっ、

メフィストは息を呑む。闇の権化、人の恐怖と慟哭を司る闇の化身。そう言われている、魔神が。

「っっ!」

息つく間に、青年の刃がメフィストの眼前に迫っている。先ほどまでの速度とは明らかに違う、“消えた”としか言いようのない、青年の動きは。背の鬼を猛らせる、彼の姿は

「人、間……ではないだと!」

初めて、メフィストの表情が恐怖に引き變った。

ズガオアアアッ！！

メフィストの視界を巨大な光が覆った。大げさに青年が白の長刀をふり上げたと思つた瞬間、それはメフィストを縦に両断している。

「ぎ、やああああ……！！！」

死のない不死者が悲鳴を上げる。青年の刃に切り伏せられ、闇の中に還ろうとしたメフィストを、青年の背にある鬼が、斬撃と同時に喰らった。

ウオオオオオオ……！！！！！！

白銀の鬼が、吼える。メフィスト・フェレスの魂を噛み砕き、歓喜するように。

滅び行く自分の魂を感じながら、メフィストは己の闇を砕く闇に向かつてつぶやいた。

「……フ……まさか……鬼に討たれるとは……な……」

残り糟のような魂が闇に散っていく。それを睨み据えたあと、青年は静かに刀を払い、詩帆の前に立った。瞳に浮かんだ闇を、すと奥に潜めて。

「……天使、様……」

涙に濡れ腫らした詩帆の顔が、青年を見る。その彼女を見据えて、青年は静かに言った。

「私は天使ではありません」

先ほどまでの恐ろしい光と、気配はない。彼は初めて詩帆と出会ったときと同じ、夜の静寂のような存在に戻っていた。

「これで、貴女は自由だ」

きっぱりと告げる青年に、詩帆は力なく首を横にふる。地面に両手を付き、項垂れた。

「……いいのでしょうか……、私などが……」

メフィストが残した言葉は、重い。心に刻まれた言葉の重さに挫けそうになりながら、それでも声をしぼり出すと、自分の奪ってきたものすべてが脳裡に浮かんで、また一つ、詩帆の頬から涙が零れ落ちた。

許される、わけがない。

弾き出される罪悪の情念に、詩帆はただ、涙する。と、青年は、夜の静寂の中で言い放った。

「生きる意味は、誰にでも探す権利があります。……生きて下さい」

言葉と同時に、詩帆の視界を光が覆った。圧倒的に、眩い光が。

「天使様……！！」

詩帆は咄嗟に叫ぶ。それは直感に近い予感だった。この光の中に、彼女が“天使”と呼んだ青年が消えていってしまうような。

そしてその直感は、確かに真実を捉えていた。光が晴れたとき、青年の姿は出合ったときと同じように、ふっ、と消えていたのだ。

生きて下さい。

たった一言、詩帆の心に残して。

「……？」

だが、もう一つ。変化があった。

盲目だった詩帆の瞳が、生まれて初めてこの世を映し出したのだ。戦場で死に絶えた兵士たちの姿を、初めて見る。本物の血の色を。

「……っ！！」

身が竦んだ。なぜかは分からない。

初めて見たものなのに、それはただ、詩帆にとって恐ろしい存在^{モノ}だった。

呪歌が残した、兵士たちの末路は。

言い知れない不安、恐怖、罪悪感。そのすべてに細い肩を震わせながら、それでも今は、自分が死ぬことを考えられない。多くの人間に、強いてきた“死”を。

「う、……ん……！！」

と、そのとき。

地面に座り込んでいた詩帆の視界に、動く影があった。

まだ、生きている。

悟った瞬間、詩帆は衝動的に走った。急ぎのあまり、前につんのめりながらも、動く影へ駆け寄る。
蘇芳だった。

「、……っ！！」

詩帆は口許を押さえて涙を零す。意識を取り戻した蘇芳は、ゆっくりと瞼を開けた。詩帆が初めて見る蘇芳の顔。誠実さの中に、どこか暗い影を落とした、罪悪を知る男の顔。その黒瞳が、彼の傍らで泣き伏している詩帆の瞳と合った。

完全に蘇芳を見て、焦点の合った視線を向けている、詩帆の瞳と。

「……詩帆、その瞳……！！」

息を呑む蘇芳に、はい、と答えかけて、詩帆は、自分の喉が音を発さないことに気がついた。

「……っ！」

「……？ ……まさか、声が……！」

察する蘇芳に、詩帆は喉に手を当てて、顔を俯けた。魔神との契約を交わした彼女が、視力の代わりに失ったもの。

それが、声。

呪いの歌を発し続けた代償とでも言うように、詩帆の喉から声が消えていた。

涙が零れる。もう話すことも、歌うことも出来ない。だがそれでも詩帆には目的が出来ていた。人として『生きる』という目的が。

「……………」

涙する少女を無言のまま見据えて、蘇芳は、そ、と詩帆を抱きしめた。己の周りには、山のように積み重なった同胞の亡骸。先ほどまで自分と共に刀をふるった、仲間の死。

(……………なぜ、俺だけが……………)

詩帆をぼんやりと見下ろしている間、蘇芳は自分の身体に刻まれたはずの、腹の傷を見下ろした。最も、そのときに蘇芳の意識はなかったが。

彼が意識を失う前と変わった点は三つ。

あの、恐ろしいまでに強烈な太刀を操る青年が消えたこと。

詩帆の目が見えるようになったこと。

代わりに、声を失ったこと。

それ以外はなににも変わらない。自分以外死に絶えた百鬼衆。泣いている少女。なに一つ。

(俺は……………)

詩帆を死なせるために、連れてきたのではなかった。救いの道が死だと、言い切る彼女があまりに憐れで。

「……………」

蘇芳が逡巡している間に、彼の腕の中で泣いていた少女の嗚咽が弱くなってきた。蘇芳は少女を刺激しないよう、声をひそめて尋ねる。

「……落ち着いたか」

問うと、詩帆は小さく頷いた。

「一緒に来るか？」

どこへ、とは蘇芳は言えない。百鬼衆を失い、蘇芳一人生き残つては故郷くにに帰ることも出来ない、落ち武者だ。

否。

今は、なにを信念とすべきかが分からない。だから、刀をふるう気も起こらず、“武者”とも言えない浪人となるより他に、当面の蘇芳に生きる術はない。

ただ、時間が欲しかった。自分の心を、気持ちを整理するだけの時間が。

詩帆は、小さく頷いた。相変わらず弱々しい、しかし、今は確かに意志の光を灯した瞳で。

この少女ならば、蘇芳が生きるための意味を教えてくださいませんか。そう、本能的に蘇芳が思い留めると同時、彼は詩帆を見下ろして、静かにつぶやいた。

「……ありがとう、詩帆……」

言葉の途中で、声が震えた。若武者の頬に涙が一つ、
同胞の死を悼んでか。己の生きる意味を見失ったためか。それとも……

若武者は答えを探すため旅に出る。その傍らに立つ少女は一人、満天の星空を見上げて、音を発さない唇で、ぽつりとつぶやいた。

有難う……、私の天使様……。

夜の静寂に良く似た、彼に届くようにと。
一つになった影を、月光が照らしていた。
。

3 詩帆編完結 呪歌 十：挿絵あり（後書き）

【異形の騎士】

> i 1 6 9 6 6 | 1 5 0 0 <

年齢・不詳（見た目十八歳）

身長・172cm

デユランダ

武器・白柄の長刀、リーヴェイゲ黒柄の長刀

『惑星グローランド』という所で、脅威の存在だったゲウエル仮面騎士の一人。

現在は、主を探す旅をしている。

1 テイパン編 亡国の王

「人間如きが、J・D・ウォルスを下したとな」

ミッドガル下
下界を映す魔晶石を見つめて、オーディンは口の中で笑った。彼の傍らには第二級神フレイが控えている。フレイは魔晶石に映るレナスを、じ、と見据えていた。

「いかなさいますか、オーディン様。この男、やはり今のヴァルキュリアでは――」

カミール村での一戦を指すフレイに、オーディンは視線だけを寄越すと、口許の笑みを一層深く刻んだ。

「さしたる問題ではない。あの人間から、刀を奪えば良いだけの話だ」

「刀とは、やはり」

唇を引き締めるフレイに、オーディンは静かに頷いた。

「兼定と言ったか。あの刀、恰好ナリは違えど至宝にも匹敵する力だ。ラグナロクに備え、手中に収めて損はなかるう」

「ならばその任、私にお任せ下さい」

「ほう?」

片眉を上げるオーディンに、フレイは険しい表情のまま答えた。

「あの人間の持つ刀。ヴァルキュリアには少し荷が勝ち過ぎている
ようですので」

「……ふむ。成果を期待している」

「はっ」

恭しく膝を折ったフレイは、そこで魔晶石に視線を戻した。

「それとオーディン様。もう一つ、気がかりなことが」

眉を寄せるオーディンに、フレイは魔晶石に映る景色を海辺の戦
場へと変じた。場所は海藍^{ミッドガル}。下界では“白銀の鬼”^{ヘテロクロミア}とにわかには嘯か
れ始めている、異形の現れた土地だった。

フレイが魔晶石に触れると、映像にふわりと波紋が広がり、異形
を映し出す。金と銀の不揃いな瞳を持つ美しき異形を。

映像は、ちょうど異形が魔神と戦っているところだった。

フレイは言った。

「相手は第七位の魔神メフィストです。現在のヴァルキュリアでは
浄化不能な相手。この魔神を一瞬で滅するほどの異形が、下界^{ミッドガル}に現
れました。不死者とも違うようです」

「異形か。……ふふ、下界も騒がしくなったものだな」

オーディンは口端を緩め、肘掛に置いた手に頭を預けた。

「しばらく泳がせておけ。異形の目的、興味がある」

「はっ」

フレイが下がるのを尻目に、オーディンは魔晶石を見やった。ア
ー
ス神族の美神たちにも負けぬ美貌の異形を。その瞳に宿った、破
滅の闇と救世の光を。

オーディンは、頬杖をついた手に唇を埋めながら言った。

「異界の異形も、果たして勇者たり得る資格を持つのか」

零れた笑声を、オーディンは口の中で留め置いた。

.....

そこに辿り着いたのは、奇跡かもしれない。あるいは、引き込ま
れたのか。

“運命”という名の糸に。

アレンたちがクレルモンフェランを出て旅を続けていると、海を
渡ったところに巨大な都を発見した。

亡失都市、ディパン。

地元住民にそう呼ばれる、何百年も昔に滅びた大都市だ。

「うひゃあ〜！ すっげえ.....！！」

航路で観光にやってきたロジャーたちは、ディパンを見て歓声を
上げた。まるで、等身大の街の模型だ。そう評したくなるほどの広
大な廃墟は、荘厳で、物寂しい雰囲気満ちていた。

「.....一体、なにをどうすりゃここまで壊れるんだよ？」

余す所なく破壊された街並みに、ルシオが思わず息を呑んだ。家屋や城はもちろん、広場の噴水や、飾りの彫像まで壊されている。原型は想像できるが、復元するのは難しいだろう。

戦争で壊れたにしては、少し妙だった。

「まるで、故意に壊されたようだな……。見せしめ、と言った方がしっくりくる」

破損した彫像を見上げて、アレンはつぶやいた。

戦争で消えた街なら、そこに占拠した国の人間が住みついても良さそうなものだが、この場所は人はおるか、砂塵が街を吹き抜けるばかりで、鳥の声すら響いてこない。

「クレルモンフェランで情報を集めた甲斐があったな。この物々しい雰囲気……。これは、いる!！」

珍しく意気込むアレンに、ルシオとロジャーは顔を見合わせた。ぶるっ、と背筋に悪寒が走る気がしたが、彼らはカラ元気で誤魔化した。

「ま、まあ。俺は、こんなトコに“お化け”が出たって、微塵も怖かねえけどな!！」

「そう言ってるお前が、一番怖がってるジャンよ……」

「んだとお!?!」

「んだあ!?!」

虚勢を張りながらも、ロジャーの顔色も心なしが白い。

そんな彼らが“王”と出合ったのは、それから数分後のことだった。

.....

すべてが瓦礫と化した。

彼の記憶にあるもの、彼が愛したものの。

すべてが。

「おおお……！！　これが、ワシが愛した都の成れの果てなのか？
！　ワシを愛し、敬い、ワシもまた敬愛していた民は、一体！？
……ぐっ！！　ぐおおおお！！　ダレス！！　ガイン！！　ヴォ
ルザよ！！　ワシの腹心たる導師どもはおらんのか？！　独りでは、
なにを成そうとも無意味ではないか！！」

月夜の晩。

誰もいなくなった廃墟で、王は一人、己の無念を吐き捨てた。濃い金髪を肩まで伸ばした精悍な王だ。蓄えられた口髭と、彫りの深い顔が、いかにも貫禄を感じさせる。

「ワシは、ワシは一体どうすれば！？」

銀色の甲冑に身を包んで、王は天を仰いで慟哭した。もはや、どうすることも出来ない哀しみ。辛さ。憎しみ。

空を見上げることで、彼は、あの日のことを忘れまいとしていたのだ。

「……ん？」

不意に、気配を感じて、王は視線を地上に向けた。広場の階段を下った所に青年と、少年が二人、立っている。青年は背中に身の丈以上の長い布袋を担いで、こちらを見据えていた。

王は青年を見返して、眉根を寄せた。

「貴様は……、何者だ？ 貴様からは、強い光を感じる」

己の民でないことは、なぜか、彼と目を合わせた瞬間に分かった。青年は王を見据え返し、足許の少年たちに問う。

「……俺には人のようにも見える。ロジャー、ルシオ。お前たちはどう思う？」

いつにも増して、青年の表情は真剣だった。

「に、兄ちゃん……！」

「……ゆ、ゆゆゆ、幽霊……！！」

「そうか。やはり……、あれがそうかつ！」

“幽霊”という言葉聞いて、青年は期待に満ちた目で王を見る。王はそんな青年たちを睨みつけ、鋭い口調で言った。

「何者だ、貴様ら？ ワシが居るべき場所、ワシが愛すべきこの都を踏む不逞の輩か？ この地を汚すとあらば、もはや貴様らにくれてやるは滅殺のみ！！」

断言する王を見据えて、青年は訝しげに目を細めた。

「……なんだか、見えすぎてないか？」

「ぎゃああ！？ 怒ってる！！ 怒ってるぜ兄ちゃん！！ だからやめようって言ったのにに、このバカチインツ！！」

「うっうっうっ、うっせ！！ バカダヌキ！！ なあにびびってたんだよよよ、おお、お前！！」

と、同時。

青年は、は、と空を見上げた。気配を感じたのだ。そこから、降るようにして現れた女神の気配を。

「っ！ まさか、戦乙女ヴァルキリー……！？」

青年がつぶやくと同時に、天空から現れた女神が神聖な光を放って、王の前に現れた。白く冷厳な翼をはためかせ、月光にも似た銀色の髪が風に波打つ。女神は視界の端にアレンを認めると、不快げに眉間に皺を刻んだ。

「貴様ら、また……」

つぶやく女神と、廃墟の演台に仁王立ちした王を交互見やって、アレンは慎重に唾を飲み込んだ。一、二、三。口を開閉させてから、彼はうわ言のようにつぶやく。

「幽霊じゃ、なかったのか……」

同時、アレンの肩ががくりと落ちた。その傍らでロジャーが、嬉しそつに、ぴよんっ、と跳ねる。

「お！ なんだ！！ 不死者ってやつだな」

「あ、なんだ……。残念でしたね。アレンさん」

「……………ああ……………」

なにやら不可思議な会話を繰り返しているアレンたちを、訝しげにレナスが見やる。と、演台に立った王はレナスを睨み、ぎりぎりと歯の根を鳴らした。

「ぬううう！！ 貴様は魔王の手先、ヴァルキュリア……………！！ その冷酷な眼光、忘れてはおらぬぞ！！ 我が王国を破滅に導いた張本人め！！」

憎悪に満ちた表情で、王は拳を固く握りしめる。その王をレナスは睨み返した。憎悪に満ちた王の瞳。そして主神を魔王と語る冒瀆的な態度。

レナスは剣を生じさせると、その切っ先を王へと向けた。

「貴様の王国を滅ぼしたのが私だと？ ……もとより亡者へと墮ちた者と論じるつもりなどないが、身に覚えのないことで恨まれるいわれはない！！」

「いまさら戯言をぬかすな！！ 亡き民と導師たちの恨みを込めた我が一撃をくらうがいい！！」

ぱっ、と王がその手をふった瞬間。彼の足もとに方陣が、光が、彼を包み込んだ。

「ばあああああ……っ！！」

「なにっ！？」

レナスが目を細める。人の魂であった王が、それと同時に。巨大な鋼の鎧へと姿を変えた。中身のない、大剣を持つ鎧へと。

「……やはり、不死者なのか……」

「どう見たってそうだろ！ いい加減認めろよ、兄ちゃん」

外野がなにか言っていたが、剣を握ったレナスには関係なかった。

「我とともに生きるは冷厳なる勇者、出でよ！！」

「ばさあっ！！」

光の翼が生じると同時、ホタルのように溢れ出た光の粒子が勇者の魂を彩った。
エインフェリア

アリュージェ、ジェラード、ラウリィ……。

エインフェリア
三名の勇者の魂が集ったとき、巨大な鎧へと変じた王は、手にした剣をふるっていた。

「テアッ！」

もっとも王に近い位置に召喚された男 アリュージェに向かって。

「はんっ！」

その剣を鼻で笑ったアリュージェは、迷うことなくバックスピナー

ツクルを相手の剣の腹に叩きつけた。

ギィインッッ!!

横殴りに倒された王の剣が、壮絶な金属音を立てて、寂れた廃墟に響き渡る。

「ぬう!?!」

驚きを露にする王に、アリューゼは片手で握った大剣を迷うことなく薙ぎ払った。

「おら、ヨッ!!」

ずしゅいっいんっっ!!

大剣が、王の鎧を切り裂く。

「ぬうあっ……!!」

たたらを踏むように後ろに下がった王は、しかし、反撃しようとして剣を握りこんだ。

そこを、

レナスの斬撃が走る。

「ヤッ!!」

上段から縦断に、一閃。

キィンッ!!

「うぐう……っ！」

かろうじて防いだ王が、苦渋の声を洩らした。ルシオが、そんな王を見て首を傾げる。

「なんだ、あいつ？ てんで弱えじゃん」

「王道剣術……。実戦的ではない、ということだ」

「又アアアアッ！！！！！」

アレンの指摘通り、型にはまった上段切りが、返し刃となってレナスに肉薄する。だが、それも適わず。弓をつがえたラウリーの矢によって阻まれた。

「神の名の下に！」

カアンツ！！

鋭く走った矢が、剣の軌道を弾き変える。

「ぬう！？」

「氣勢を削がれた王が、驚いたようにラウリーを見た。
瞬間、

懐を一気に詰めたアリユーゼが、にやりと笑った。

「これで終わりだっ！ 奥義、ファイナリティブラストおおお！！！」

紅蓮の炎がアリューゼの大剣に宿ったとき、

ズドオオオンツツ!!

凶悪な烈風が王の身を掬い、必殺の突きが、鎧を穿った。

ゴオオツツ!!

「又アアアアアア……ッツ!!!!」

あまりの衝撃に、王が悲鳴を上げる。

そのとき。

上空に飛んだ女神の鉄槌が、棒立ちになった彼に撃ち落とされた。

「神技、ニーベルン・ヴァレスティ!!」

ズガアアンツツ!!

壮絶な光に一瞬、廃墟の街が明るさを取り戻した。まるで稲妻に打たれたような雷光。それと同時に。空を仰いだ王は、己の憎悪を吐き捨てるようにがむしゃらに剣をふり乱した。

「負け、ぬ! ……わしは、わしは王なのだ! 本来ならば貴様らごときが触れることすら適わぬ……ぬうつ、ぬうああっ!!!!」

だがその間にも、王は光の粒子となって散っていく。それを尻目に、アリューゼは大剣を肩に担いで、アレンをふり返った。

「よお、アレン。久しぶりだったのに、ずいぶんな顔してるじゃねえか」

いつもならば、頼まずとも不死者との戦いに名乗り出てくるアレ
ンが、今日は大人しいことを揶揄すると、アレンはどこか寂しげに、
アリユーゼを見返した。

「……………アリユーゼ……………」

「……………あん？」

そのいつもと違う様子に、アリユーゼが眉根を寄せると、彼と同
じく召喚されたジェラードが、杖を手に唇を尖らせた。

「なんじゃ。もう終わりか。妾の助成も必要ないとは、なんとも歯
応えのない」

言っ、おてんば姫は不満そうに杖をふりたくった。ラウリイが
なだめる。

「姫様、そう仰らないで下さい。戦いがすぐに済むのは好いことじ
やありませんか、ね？ ヴァルキリー様？」

話題をレナスにふってみると、レナスは沈黙したまま、どことも
視線を交わそうとはしなかった。ただ深刻に、一点を見据えて唇を
引き結んでいる。

「ヴァルキリー様？」

そのレナスの様子に、ラウリイが首を傾げる。と、こつん、と軽
やかな音を立てて、ジェラードがラウリイの頭を小突いた。ラウリ
イが頭を押さえてふり返ると、ルビーをはめ込んだ櫛の杖が、鼻先

に突きつけられる。

「これ、ラウリイ。ヴァルキリーは今、思い悩んでおるのじゃ。邪魔をしてはならぬ」

きゅ、と愛らしい眉を吊り上げて、ジェラードが言い切る。それに生返事を返すと、この好奇心の強い姫は、“お転婆”を全面に押し出した顔で、に、と口端を吊り上げた。

アリユーゼの方 彼と話しているアレンを一瞥する。

ジェラードはわざとらしく、ラウリイの耳許に唇を近付けた。

「不死者討伐が終わった今。残るはあ奴を勇者の魂エインフエリアに選定するのみじゃ。じゃが、神の定めを乱す者とはいえ、奴には恩も借りもある。妾もアリユーゼも、奴のお陰で胸がスツとしたしの。ヴァルキリーが惜しむのも無理はあるまいて……」

言ってジェラードは、にひひ、と嬉しそうに笑う。語調が、少し落ちた。

「それに、よくよく見れば男前じゃしの」

「……はあ……」

ともかく頷いておく。すると、乗りの悪いラウリイに気を悪くしたのか、ジェラードが眉根を、きゅ、と寄せた。まずい。

そうラウリイが直感したとき、アレンと話していたアリユーゼが声をかけてきた。

「なに言ってるんだ？ ジェラード」

「む？」

ジェラードの視線がアリユーゼを向く。そのことに、ほ、と安堵しながら、ラウリイもアリユーゼに視線を向けると、アリユーゼが怪訝な表情でジェラードを睨んでいた。

ジェラードはそんな男二人を交互に見据えて、眉根を困ったように寄せたあと。あたっ、と叫びながら額をぴしゃりと打った。

「なんたることじゃ。妾の下僕たる者どもが、こつも朴念仁の集いとは……！！！」

「おい、誰が下僕だ、誰が」

「朴念仁って……姫様……」

なにか言いたげにこちらを見据える男二人を無視して、ジェラードはレナスに向き直った。

「心配するでない、ヴァルキリーよ！ 男が頼りにならぬは世の常。妾がしっかりそなたの悩みを解決」

「……来るぞ！ 構えろ、勇者たちよ！！！」
エインフヘリア

「へ？」

ジェラードが目を点にして首を傾げた瞬間。とき 浄化されたはずの王が、再び光の粒子を集めて鎧をかたどった。

「ぐおお……！！ この程度の痛みなど、民や導師たちの苦しみに

比べれば！！　ワシは、滅びぬ！！　報われぬ魂となって彷徨う民を救い、かつての栄光を取り戻すまでは、ワシは決して死なれぬのだ！！」

「な、なんじゃと！？」

ジェラードが目を見張る。倒したハズの不死者が復活してくるなど、今まで一度もない体験だった。

「おい！　おてんば姫！！」

アリュージェの声が聞こえると同時、ジェラードの身体がアリュージェによって引き倒された。その一寸上を王の剣が通り過ぎる。

びゅっ！！

その剣速が、先ほどの王よりも格段に速くなっていた。

「くっ！　アリュージェさん！　姫様！！」

ラウリイが矢をつがえ、牽制のために射る。

ひゅひゅひゅんっ！！

黄金の軌跡を描いて走る矢を、しかし、王は一太刀の下にすべて叩き落した。

「甘いわああ！！」

「っ！　そんな！？」

ラウリイが目を瞪る。
懐に入ったレナスが、剣を空に向かって払い上げた。

「タアッ!!」

ギキンツツ!!

王の鎧を、先ほどならそれで断てた。
だが。

「あいつ、硬くなってやがる……!!」

ルシオの指摘通り、王の鎧はレナスの剣をも弾き返した。

「ちっ!!」

舌打ちして、レナスが更に二、三撃。剣を王に叩きこむ。だが切り裂けない。

「 退け」

そこを、アレンの兼定が割り入った。腰溜めに構えた居合の姿勢から、アレンは二メートルを超える剛刀を一気に抜き払う。

斬っ!!

「ぐっ、きいやああ……!!」

途端、

鋼の鎧が、兼定の斬撃とともに真っ二つに両断された。

……カシン、

それを認めて、アレンは刀を鞘におさめる。アリユーゼが、ジエラードを庇った態勢から身を起こして、肩をすくめた。

「ハン。……刀は相変わそっちらずらしいな？」

揶揄を含めて言うと、アレンはアリユーゼを見上げて、まるで宝物を褒められたように、嬉しそうに微笑った。

「ああ！」

「兼定の威力は、オイラもよく知ってるじゃんよ……」

どこか遠くを見つめて、ロジャーが口をへ字に結ぶ。が。その兼定によって両断されたハズの鎧が、再び形を成すまで。そう時間がかからなかった。

「なっ!?! ……う、そだろ!?!? アレンさん!?!」

復元していく鎧を見据えて、ルシオが目を見開く。即座。武器を構えるアレンとアリユーゼを、レナスが制した。

「あん？」

首を傾げながら、アリユーゼが動きを止める。その間に、アリユーゼの傍らをアレンが駆けた。

「テアツ！」

王の剣が、上段からふり下ろされる。

風を切って走る王の刃を、アレンは兼定を薙いで削ぎ落とした。が、刃を落とされた王は構わず、折れた剣で二の太刀をふり下ろす。同じ太刀筋が、アレンの上段から切りかかった。

「タアアアアツ！！！」

折れた刃分、王が踏み込む。重厚な鎧の力任せな一ふり。アレンはそれに、己の上段切りを重ねた。

ズシューインツ！！

圧倒的切れ味を持って、刃が重なる間もなく兼定が王の刃を、剣を持つ腕ごと真つ二つに断ち切る。王はそれを見据え、口惜しげに叫んだ。

「ぐ、おおおつ！！！」

だが、それだけでは終わらない。王は剣を持った両手のうち、左手を放すと、それを天に向かって掲げた。

「紅蓮の炎よ！！！」

己の内にあるすべての魔力に賭けて。王は力強い断末魔を放った。それは確実にアレンを狙い、吹き荒れた。王の左手から、火炎放射が襲いかかったのだ。

「おつ！！！」

人を丸呑みする炎が、アレンにぶつかる。が、灼熱が威力の片鱗を見せたのも束の間。薄い球状の壁が、アレンを炎から守っていた。アレンは爆炎の中で、静かに王を見据える。
ラウリイが息を呑んだ。

「スベルガード魔法防御……」

「相変わらず、なんたる速さじゃ……!!」

ジェラードは口惜しげに舌を巻く。と。兼定の刃が、

斬っ、

容赦なく王を、鎧を断った。だが、光の粒子となって散っていく王の魂が、復元するまでにそう時間はかからない。

「……むう！ 一体、どうしたことじゃ……!!」

「終わりが見えねえじゃんよぉ……!!」

ジェラードとロジャーが眉根を寄せて叫ぶ。と。王は虚空に散った己の魂を復元させる間、まるで怨嗟のように同じことをつぶやき続けた。

「ワシは、ワシは皆の無念を……!!」

再生していく王が、途切れ途切れに繰り返す。

民のため。

国のためと。

アレンは自らが断った王の感触を確かめるように、己の手を見や
った。兼定を握る手を、まだ緩めない。
だが。

(これは……！)

王が打ち込んでくる剣の感触に、アレンは目を瞠った。レナスが
わずかに目を細め、言う。

「無駄だ。奴を繋ぎ止めているものは現世への情念。すなわち執念
を断ち切らねば」

「倒せない、というのか？」

問うアレンに、レナスは頷いた。

「執念を断ち切るって、どうやってだよ!？」

「全っ然、思いつかないジャン!!」

くわ、と目を見開くロジャーに、ルシオが、ぼか、と拳を入れた。
が。ヘルメットで武装されたロジャーの頭は、素手で殴るには過ぎ
たものだ。

「、んのっ、……バ、カダヌキ!!」

自らの手を握りしめ、涙目になったルシオに、ロジャーが不思議
そうにふり返る。

「んだよ？ アホネコ？」

アレンはじつと王を見据えて、頷いた。

「分かった。ここは一旦退こう」

「……なに？」

レナスが不思議そうにふり返る。と、同時、

「爆裂破！！」

アレンは兼定の刃を、地面に叩きつけた。

ズガガガガアアツツ！！！！

裂けた地面から、岩の槍が無数に迫り出す。

「おっと！」

射線軸上にいたアリューゼが、慌てて岩槍から逃れた。突然出来た岩の城壁は、高さ三メートルにもたちし、復活した王とアレンたちとを一時的に分断した。

「く やるじゃねえか！」

岩の城壁を見上げて、アリューゼが口笛を鳴らす。アレンはレナスに言った。

「今のうちに策を練ろう。しばらくの時間は稼げる」

「……なるほど。それは、貴様を滅する時間が出来たということか」
言っ、レナスはレイテルパツシユの剣先をアレンに向けた。

「本気で言ってるのか？」

アレンがやや目を細める。兼定にこそ手をかけないものの、陰の籠り始めたアレンと、剣を突き付けるレナスを見据えて、腕組みしたアリューゼがジェラードを横目見た。

「誰がなにを思い悩むって？」

「あたっ！……なんたることじゃ……！！！」

ぴしゃりつとジェラードが額を打つ。ラウリィが弓を手に、不安そうに眉を下げた。

「あ、あの……。また僕ら、あの人と戦うんじゃ……？ でも、あの刀の前じゃ……」

弱い主張だが、言ってみる。すると予想通り、ジェラードたちに無視された。姫君は顎に手をやって、神妙な面持ちで、むう、と小さく呻く。

「意外にヴァルキリーも朴念仁じゃのう」

「お前が妙な妄想してるだけだろうが」

鼻で笑うアリューゼを、む、とジェラードが睨み上げると同時、剣先をアレンに向けていたレナスが、不快そうに眉間に皺を寄せた。

「貴様……」

アレンを睨み、レナスはつぶやいた。剣先を向けているのに、アレンはやはり、兼定を抜く気配を見せなかったのだ。

代わりに、

アレンは岩壁の向こう側に封じた王を見やった。

「あの剣を受けて、アンタはなにも思わなかったのか？ ……あの人は、今までの不死者とは違う。信念を持った、正気の者の剣だった」

「それがどうした」

あっさりと切り返されて、アレンの瞳が鋭くなった。レナスは剣を握ったまま、鼻を鳴らす。

「如何に不死者を滅するかなど、貴様が気にする必要はない。ただ、私によって貴様は討滅される。それだけのこと」

「……」

アレンは静かに、兼定に手をかけた。と、同時。レナスが突きつけた剣をふり下ろす、ところで。

「ぬおおおおおおお……！！！！！！」

爆裂破の岩壁の向こうで、王が岩壁に向かって体当たりを始めた。ずしいいんっ、と重い地響きがこちらに伝い、爆裂破の岩壁がみしみしと軋む。

「おい！ ヴァルキリー！！ やってる場合じゃねえらしいぜ」

アリューゼが言った。相手は不死者。それも、今は浄化不能な不死者となれば、消耗戦は避けられない。

レナスは小さく舌打った。

「……止むを得ないか」

剣を納め、レナスは踵を返す。それを見届けて、アレンも兼定の鐔から手を放した。

「すまない」

アリューゼに言うと、アリューゼは片眉をつり上げた。

「勘違いすんなよ。テメエとの決着は必ず着ける。 だろ？」

言つて、アリューゼは肩に担いだ大剣を軽く持ち上げる。それを横目に、アレンは小さく微笑った。

「ああ。そうだな」

それから視線を落とす。ロジャーとルシオが、いざというときのために岩壁の向こう側にいる王を警戒してくれていた。手斧と、短刀を油断なく構えた二人に、アレンは言う。

「行こう。彼の無念、出来れば晴らしてやりたい」

自分と同じく、国を護っていた者として。

彼方の王を見やるアレンに、ルシオとロジャーは首を縦にふった。

2 テイパン編 数百年前の過去

廃墟の広場から通りを抜けると、テイパン城に着いた。

王の執念の根源 現世との繋がり。

その手がかりが、恐らくこの中にある。バロック調の城に入ると、廊下を埋めるほどの大量の不死者が、唸り声を上げてひしめき合っていた。

「これは……！」

思わずレナスも目を瞪る。目につくだけでも十数を超える不死者。それも城という閉鎖空間に、この密集率は異常だ。間違いなく自然に集ったものではない。

これは、

「不死者が召喚されている……。綺麗事を並べたその結果がこれか……！」

怒りを露にレナスが毒づく、ルシオやロジャーも、城内のおびただしい量の不死者を見つめて唾を呑んだ。

「兄ちゃん……！」

「アレンさん、この数はちょっと……異常だぜ!？」

密集した不死者の瘴気が、それとも彼らの抱く情念の所為か。廃城は黒霧で覆われていた。気を抜けば、眩暈が起きる。

「……一体、なにが」

訝しげに目を細めるアレンに、レナスは無言のまま奥へ進んだ。並みいる不死者を片っ端から浄化し、城内を駆逐する。

そうして、しばらく城を探索していると、地下に辿りついた。丸い部屋だ。壁沿いの床を最高に、円形状に床が一段ずつ低くなっていく器のような部屋。一番窪んだ中央の床には、魔術方陣が描かれていた。長い年月の所為か、薄汚れた方陣だ。その方陣の真上、やたら高い天井には、魔術道具と思しき大きな装置が取り付けられている。

方陣の周りには、魔晶石も置いてあった。アレンは感心したように頷いた。

「この惑星にも、科学があったんだな」

（この惑星……？）

耳慣れないアレンの言葉を聞きながら、レナスは部屋に歩み入ると、最下段の床にある方陣を見やった。この陣には覚えがある。

ルーン文字だ。

（神の使う文字が、なぜこんな処に……？）

首を傾げながらも、レナスは方陣に刻まれたルーン文字を読み解いた。装置はすでに錆びついて、方陣も埃で薄くなっていたが。

「……時間制御装置？」

方陣に刻まれた文字を最後まで読み解いたところで、レナスは瞬きを落とした。

時間制御装置　　簡単にいえば、タイムマシンのことだ。

時の輪を反転させ、過去に帰依することは、神の中でも上位神でなければ許されない行為だ。破壊された理由は、おそらく主神の目に留ったためだろう。

「人間が、愚かな　　」

飽くなき人の欲望は、神であるレナスには到底理解できない。侮蔑をこめてレナスがつぶやいたとき、壊れていたハズの仕掛けが、ゆっくりと動き出した。

ぎ、きいいい……

金の軋る音を発しながら、装置が回り始めたのだ。それと同時に、薄汚れていた方陣が、鮮やかな光を放ち始めた。

「なっ!?!」

レナスは目を見開く。

術式の発動。床の、方陣の光に固定されたレナスの体が、中空に浮かび上がっていく。

「なんだと!?!　この装置、まだ生きているのか!?!」

「っ、!?!」

レナスに背を向けていたアレンが、異変に気付いてふり返った。が、そのときには既に、方陣に絡め取られたレナスの身体が宙に浮かんでいる。

「おおっ！？ 姉ちゃん！？ どうしたってんだ！？」

ロジャーがわたたとレナスを見上げる。ルシオは動き出したゼンマイに駆け寄って、その動きを止めようと、ゼンマイを驚掴んだ。

「くそっ！ 止まれ！！ このっ！！」

「オイラも手伝うじゃんよ！！ ふ、ぎぎぎぎぎ……！！！！！！」

ルシオとロジャーが、それぞれ巨大なゼンマイを握って押し止める。が、一度動きだした装置はもはや流れる川の如く、止めることは出来なかった。間に合わない。

「っ！！」

アレンが兼定に手をやる。が、布袋に入った兼定を抜くには、一瞬の時間が必要だった。

その間に、レナスが。

霞んでいく。光の中に。

「ヴァルキリー、つかまれ！！」

アレンは咄嗟に手を差し出した。方陣に絡まれたレナスを、強引に引き寄せる。

が、

「！？」

方陣は、そのアレンまでもを呑みこんだ。

「兄ちゃん!？」

「アレンさん!！」

ロジャーたちが絶叫する。駆け寄ろうとした彼らを、アレンの鋭い声が制した。

「来るな!！」

びく、とロジャーとルシオが驚いて体を震わせたとき、アレンは抵抗するように拳に気を集約させたが、

ばああああ……っ!!!!!

光の増した方陣は、その輝きの中に青年と女神を呑みこんでいった。

ばちいんっ!!

その姿が光の向こうに消える一瞬前。方陣の中で激しい火花が散った。

静寂。

「お、おい……」

残ったのは、少年二人。

茫然と、輝きを失った方陣を見下ろして、ルシオとロジャーは顔を見合わせた。

「アレン、さんは……?」

「……消えちゃった……」

ぽつかりと口を丸く開けながら、ロジャーは半ば、他人事のようにつぶやいた。

……

まばゆい光の所為か、それとも方陣の影響か。アレンが地面の感触を得て立ち上がると、ふらりと視界が揺れた。頭をふって、意識をはっきりと覚醒させる。周囲を見渡したが、案の定、ロジャーとルシオの姿はなかった。

その上。

彼の手許から、剛刀・兼定が消えていた。

「っ、兼定!?!」

息を呑むと同時、床に手を這わせる。が、すぐ傍にあるハズの剛刀は、部屋のどこにも見当たらなかった。この手で、しっかりと握っていたというのに。

「……まさか!」

ぐ、と息を呑む。あの、光の方陣に吞まれる寸前。己の手に走った、鋭い雷火の感触が脳裡を過つたのだ。

“弾かれた”。

まさに、そんな感触だった。

空になった自分の手を見つめて、アレンは拳を握りしめた。

(……………)

唇を噛みしめる。兼定に代わり、少し離れた所にレナスがいた。彼女も目のくらみを覚えたのか、頭を左右にふっている。

「大丈夫か？」

気を取り直してアレンが問うと、レナスは焦点の合った視線をこちらに向けるなり、きゅ、と表情を引き締めた。

「私はお前を滅する者。履き違えるな」

素気なく言っ、彼女は腰を上げる。

そこは先ほどと同じ、時間制御装置の部屋だった。だが様子が少し違う。方陣を囲む水晶は無残に砕け散り、柱やゼンマイが、こと切れたように床に捨てられている。

まるで部屋を突風に荒されたような、陰惨な部屋だった。

「「？」」

二人は首を傾げながらも、部屋を出た。

地下に広がる廊下は、城の土台たる柱がむき出しの状態で並んでいる。ロジャーたちと通ったときは、その柱の何本かが崩れていたというのに。

「…………直って、いるのか」

アレンは問うようにレナスを見た。が、レナスは構わず廊下を抜

け、城の一階へと向かう。瓦礫が床を占めていた先ほどと違って、今度は血まみれの兵士が何人も転がっていた。つん、と嗅ぎ慣れた血の臭いが、鼻を突く。アレンは咄嗟に、兵士に駆け寄った。

「おい！ しっかりしろ！！」

なるべく兵士の体を動かさないように気をつけながら、声をかける。が、無駄だった。

もう、死んでいたのだ。ここに倒れている、すべての人間が。廊下を埋めるように、無造作に転がる兵士の死体。

アレンは思わずつぶやいた。

「……一体、なにが」

駆け寄った兵の目を閉じてやりながら、アレンは改めて城を観察した。

瓦礫がいくつも転がっていた城内は、一転して整然としていた。死んでいるのは兵士ばかりで、あとは皆、奇麗なものだ。彫像も、柱も、階段も。城が美しい姿を取り戻しているばかりに、その中でこれだけ大量の死が転がっているのは、なんとも不気味な光景だった。

まるで、一人ずつ斬り殺したような。

横目でレナスをうかがったが、彼女もまた、事態を把握できていないのか、眉間に深いしわを刻んでいた。先ほどから沈黙したままだが、その視線は鋭く、城の様子に困惑している。

レナスとアレンは、どちらともなく街へ出た。

「周囲の景色が……。壊れていた建物が、復元されている？」

ゴーストタウン

廃墟の街並みが明るい光に満ち、磨かれた敷石がきらきらと輝いていた。城門の左右に並ぶ彫像は悠々と天に伸び、鳥のさえずりがどこからともなく聞こえてくる。

そして、人の喧騒も。

生きている者はいないように思われた、城の中からだ。

「……！」

レナスは素早く門扉の彫像の陰に隠れ、鎧マテリアライズの生成を解いた。

ばさっ……、

銀髪が羽兜から零れる。星を散りばめたようなレナスの髪が光を反射し、紫色に輝いた。甲冑で固められた女神の肢体が地上界の服ミッドガルドに包まれると、本来のレナスが浮き彫りになった。戦士の凛々しさから、女性の美しさへ。

町娘の衣装に身を包んだ女神は、可憐だった。

「……なんだ？」

ほう、と感心したように息を呑むアレンを、物陰のレナスが半眼で見やった。アレンははたと瞬きを落とすと、首をふってレナスから視線を外した。あまりのレナスの変貌に驚いたのだ。

「……？」

訝しげに、レナスが眉をひそめる。

が、それも一瞬だった。

城の中から近づいてくる足音が、次第に話し声を帯び始めたのだ。

「抵抗する者には容赦するな」

凜とした女性の声だった。足音が、城の中から近づいてくる。

「はい！」

答える男の声も、快活としたものだった。かつかつと規則的な靴音が不意に止む。レナスは、そ、と話主の顔をうかがった。

(……あれは、アーリイ……！)

レナスは思わず目を見開いた。城から出てきた漆黒の鎧の戦乙女は、運命ノルンの女神、アーリイに違いなかったのだ。レナスの、姉にあたる神。

(ヴァルキリーが、もう一人……？)

向かいの彫像からのぞいていたアレンも、目を見張った。黒の鎧を纏った女性は、あまりにも似ていた。背格好もさることながら、気配までもレナスに。

(それに、あれは……)

アーリイが連れている一組の男女。その内、男の方を見やっつてアレンは目を細めた。金髪を少し伸ばした細身の男。手にした大振りエインフェリアの弓と、気弱な彼の顔には見覚えがある。

勇者の魂の、ラウリイそっくりだった。

「バルバロッサはどうなった？」

静かに言ったアーリイは、そこでラウリイに似た勇者の魂と、もう一人、女魔術師をふり返った。
女魔術師が答えた。

「アリユーゼが公開処刑の用意を完了したようです。ですが、側近の魔導師三人の所在が不明のままです。城のどこかに隠し部屋があるとの情報をつかみましたが……」

「捨て置け。とりあえず、王と装置は我々が押さえたのだ。奴らにはもうなにも出来ぬ」

アーリイはレナスよりも硬質的な印象を持つ女神だった。女神、というよりも、軍神と言われた方がびたりとはまる。彼女は女魔術師とラウリイを一瞥して、鋭く言い放った。

「先に行け」

「はっ」

訓練された動きで、ラウリイと女魔術師は、街の方へと消えていった。それを見送って、場に留まったアーリイが、訝しげに周囲を見渡す。

「この波動は、レナス……？」

アーリイはつぶやいてみたが、当然、彼女の問いに答える者などいない。アーリイはそんな自分を笑うように鼻を鳴らしたあと、踵を返した。

「馬鹿な……。気のせいか」

自嘲気味に言って、アーリイは、ふわり、と飛び立った。天空の彼方に、彼女の姿が消えていく。それを完全に見送ったあとで、レナスは彫像の陰から抜け出た。

「……今のは、アーリイ。まさか、ここは過去の世界？ 時間制御装置で、私は過去に？」

「過去？」

確証はない。が、ノルンの女神が二人も同時に存在することはあり得ないのだ。

なぜなら、ノルンの女神が覚醒し行動するのはいつも一人で、一人の女神が覚醒している間はずっと、他の女神は眠っているのだから。

それに、この街の様子を鑑みれば。
。 。
思案に暮れていたレナスを、アレンの声が遮った。

「つまり。地下の装置を壊したのは、あそこにいるヴァルキリーということか……」

レナスは顔を上げる。見ると、アレンが状況を整理するように、思案顔を浮かべていた。

抵抗する者には容赦するな。

先ほどのアーリイの言葉。これは彼女自身が兵士たちを斬殺したことを示している。

それに、

貴様は魔王の手先、ヴァルキユリア……！！
その冷酷な眼光、忘れてはおらぬぞ！！ 我が王国を破滅に導いた張本人め！！

ゴーストタウン
廃墟で対峙した王の言葉を、アレンは嘘だと思わなかった。あの真っ直ぐな王の剣はどう考えても正気だ。何度か不死者と戦ったが、あれほどしっかりとした剣をふってきたのは、あの王だけだった。

(ヴァルキリーが兵士を殺し、あの装置を破壊した。ここが過去だと言つなら、この都市を滅ぼしたのは ディパン)

運命を乱す者。

そう定義し、幾度も自分の前に現れた女神が、こちらを見つめている。

アレンは目を細めた。

「……必要とあらば、街ごと破壊するのか。神が」

眼光が鋭くなる。それをレナスに言っても無駄なことは分かっていた。少なくとも、彼女はディパンについてなにも知らない。

ゴーストタウン
廃墟で王と出合ったとき、彼女は言ったのだから。身に覚えのないことで恨まれるいわれはない、と。

お前の存在は、主神オーディンが定めた運命を狂わせる ……

いつかレナスが語った、主神という存在がアレンの中で引つ掛かる。レナスたちに命令を下す神のことが。

鎧がない所為で幾分か気配が和らいではいるものの、鋭いレナスの視線がアレンを貫いた。

「そうだ。神とは、絶対不可侵の存在。人間の理解など必要としない」

「……………」

挑発的に放たれた言葉をアレンは聞き流した。物陰から立ち上がり、改めて街を見渡す。

「ともかく、情報を集めよう。ここが過去なら、あの装置を作った人物がまだ生きている可能性もある」

「……………」

今度はレナスが黙す番だった。

過去において、アーリイと協力してこの男を倒す。

願ってもない状況だ。この男はよりにもよって、あの剛刀を持っていない。その上でアーリイとの共闘。勝利は確実だろう。だが。

（戦乙女がこの世に二体同時に存在することは、摂理の輪を歪める。私は、その禁忌を侵すというのか）

レナスは沈黙した。運命の輪を正すために摂理を乱す。それはあまりに矛盾した考えだ。いかにこの男を倒せるとはいえ。

「……………来ないのか？」

アレンに問われ、レナスは胸の前に置いた手を、ぐ、と握り締め

た。

「お前と慣れ合うつもりはない。だが、決着は本来あるべき場所ですべてやる。この過去の場において、お前がまた摂理の輪を乱すようなことがあれば。二度とあの場所に帰れるとは思わないことだ」

「……………」

神妙に黙るアレンを視界から外し、レナスは颯爽と街に出た。

廃墟と化す前のデイパンは、まばらだが人が行き交っていた。城内に生存者は一人もいないが、街にはまだ、死人が出ていなかったのだ。

レナスは行き交う人に混じり、話を聞くことにした。だれもが道端で暗い顔をしている中、比較的、正気を保っていると思われる人間に問いかける。

「逃げないのですか？」

城が崩壊したばかりのデイパンと、廃墟と化した“現在”のデイパンを考えれば、このデイパンが“現在”のようになるまで、もう時間は残っていない。作戦を取り仕切っているのがアーリイならば尚のこと。容赦なく任務をこなすハズだ。

道端に座り込んだ娘は、黒煙を上げるデイパン城を見やりながら、力なく笑った。

「ここが、私の故郷ですから」

「……………」

「それに……国王を影で支える良妻にして、皆のあこがれでもあった王妃様が行方知れずなんです。王妃様までもが既にこの世の人ではないだなんて、考えたくもありません……。せめて、王妃様の無事が分かるまで」

娘は力ない表情のまま、泣き伏した。通りを人が行き交っているが、多くの者がこの娘と同じように、どこか茫然自失となっている。幽鬼のようにふらふらと街を歩き、レナスが問いかけると、彼らは謔言のように答えた。

「恐ろしい……。一体ワシらはどうなってしまうのじゃろう」

老爺は、黒煙を上げる城を寂しそうに見やった。

「漆黒の鎧に身を包んだ戦乙女の冷酷な眼光……。あれに見つめられて、なお信仰を失わずにいられる者が何人いることが……」

「時間制御装置の開発を推し進めていたのは、王の側近中の側近である魔導師ウォルザ様であって、バルバロッサ様ではなかったはずだ。なのに……！！」

「王の傍らに常にいた三人の魔導師さえいなければ、神の逆鱗に触れることなどなかったはずなんじゃ」

絶望と、怒り。

二つの感情に揺れる人々の声を聞きながら、レナスはそこで、有力な情報を得た。

行方不明の王妃が、城の隠し部屋に閉じこもっているのでは、との噂を聞いたのだ。

（バルバロッサの、現世の未練……）

レナスは、王妃に賭けてみることにした。

見る間に城門から遠ざかっていくレナスを見送って、アレンはため息を吐いた。空になった自分の手を見やる。ここに収まっているハズの、自分の愛刀を思い出しながら。

「……兼定……」

掌に若干、火傷が出来ていた。深いものではないが、時間制御装置に吞まれる寸前、愛刀と自分を別った傷だと思えば、あまりに情けない。

（俺がもう少し、お前をきっちり掴んでいれば）

恐らく、掴んでいても無駄だ。電撃が走った瞬間、弾かれた感触と共に、掴んでいた兼定が水のようにすり抜けていった。

言うなれば、消えたのだ。自分の掌から。そして、

（弾かれたあの感触には、覚えがある……）

アレンは自分の掌に出来た火傷を凍るような眼差しで見つめて、忌々しげに歯を噛んだ。

あれは、魔術だ。

時間制御装置の方陣に隠れて発動した、もう一つの魔術。

こちらに魔法防衛^{スベルガード}させる間もなく消えた兼定。

周到に準備された、何者かの罠だった。恐らくアレンほど注意深い人間でなければ“弾かれた”ことにすら気づけない、一瞬の罠。

（俺が、あの場に立つことを予想したのか？）

それとも、ただの偶然だったのか。こちらに、全く気配を感じさせずに。

「……………」

気を取り直して顔を上げると、アレンは二人の女神が去った通りを見つめた。

ディパンを滅ぼす女神と、未来を　アレンが元いた現実を変えるなど言う女神。

お前の存在は、主神オーディンが定めた運命を狂わせる　……

だが、

それでも。

ディパン城に転がった兵士の死体と漆黒の戦乙女を思い浮かべて、アレンは拳を握り締めた。

アーリイに気をつけながら、レナスはディパン城に入り、城内を

探った。すると城の最上階　王妃の部屋の本棚に、細工が施してあった。

巧妙に隠してあるが、こんこん、と棚を叩けば奥が空洞になっていることが分かる。レナスは意を決して細工をいじると、そこに、奥の部屋へと続く扉を見つけた。それを開け、がらんとした奥の部屋に入る。気配を探らずとも、彫像の陰に誰かが隠れているのはすぐに分かった。

「そこにいるのは誰？」

レナスはなるべく相手を刺激しないように、平静に問いかけた。

「私は、隠れなければならぬ境遇に置かれた者と、敵対するような立場の者では決してありません」

そう、全てはバルバロッサの現世への未練を断ち切るために。レナスの声が威嚇する者の声ではないことに、相手は安堵を覚えたのかもしれない。彫像の陰に隠れていた王妃は、しかし、警戒の色を瞳に浮かべながら、ゆっくりとレナスの前に姿を現した。

「あなたは？　このような所に、一人で？」

遠慮がちに問う王妃に、レナスは少し論点をずらした。

「このような所？　……このような所とは、この隠し部屋のことですか？」

城内の兵の死体を王妃が知っているのかどうかを試すような問いだった。だが王妃は問いに答えず、少なくともレナスに敵意がないことを判断して、わずかに雰囲気や和らげた。

王妃は、そ、と自分の胸許に手を置いた。

「……私はマルベス。国王、バルバロッサの妻」

予想通りの答えが、レナスに返ってくる。王妃は、レナスが誰であるかと死ぬ覚悟を決めたのかも知れなかった。

王妃・マルベスは、訥々とつとつとレナスに話し始めた。

「王は騙されていたんです。三人の魔導師の甘言に乗せられて、気付いたときには既に取り返しがつかなくなっていたのです。人間なものが永遠を望んだがために、神がお怒りになったのです」

「……………」

レナスはなにも言わない。次第に表情の薄くなっていく王妃に、死期を見て取ったのだ。わずかに目を伏せるレナスに、マルベスは力ない微笑みを浮かべて彫像の裏に隠した王冠を手を取った。

それを、そ、とレナスに握らせる。

「どこのどなたかも知らず、ましてや私と同じ女であるあなたにこのようなお願いをするのは心苦しいのですが……。どうか、この王冠を、王に……………」

「王に？」

問い返すと、マルベスは小さく頷いた。

「王は、最期まで王であつて欲しいと……………」

それ以上の言葉は続かない。彼女は俯くと白い長手袋で目許の涙

を拭った。

「よろしく、お願いします」

王妃は最期の希望を託して、にっこりと笑った。

.....

.....

3 テイパン編 黒衣の戦乙女

「そこまでだ」

黒衣の戦乙女を追って尖塔に潜り込んだアレンは、向けられた殺気に足を止めた。半身切る。すると、アーリーの冷たい眼光が睨んでいた。

アレンは尖塔の窓から外を見下ろす。街の広間に断頭台が作られ、その手前にテイパン国王のバルバロツサが手足の自由を奪われた状態で、あがたま跪かされていた。

遠目だが、うつすらと分かるバルバロツサの苦悶の表情。それを尻目に、アレンはアーリーを睨み返した。

「城を落としたのは、アンタか？」

抑揚のない声で、問う。するとアーリーは不審そうに目を細めながらも、冷酷な笑みを口許に浮かべた。鈍色の彼女の瞳が、仄かにぎらつく。

「それがどうした？」

ギインツツ！！

アレンが答えるより先に、アーリーは腰に差した剣を躊躇なくふり切った。眩い閃光と、火花が散る。顔の真横にアーリーの剣。アレンの首を刎ねようと伸びた刃は、しかし、彼の拳に止められた。かちかちと鳴る愛剣の鏗の音を耳に、アーリーは青年の拳を睨んだ。

壮絶な気を孕んだ青年の拳。アーリーでも気を抜けば、この拳は

剣を砕いて彼女を貫く。

まるで剣同士がぶつかったような音を立てて、アーリイの刃とアレンの拳が、ぴたりと静止した。
動かない。

アーリイは興味深そうに目を細めた。

「まだ兵士の生き残りがいたか」

つぶやくと、アーリイは動いた。

キンッ、

剣が払われる。否、彼女は自ら退いた。眼下でアレンの左手に雷が宿る。気ではない。一瞬で構成した、蒼白の“紋章陣”。

(……………?)

アーリイですら見たことのない魔法構成。彼女が首を傾げた刹那、アレンの手に浮かんだ陣が、パツと輝いた。

「ライトニングブラスト」

ズドオオオンッッ！！！！

アレンの左手から轟音を立てて雷が走る。アーリイは横に跳んだ。地面を蹴ると同時、野太い雷束がアーリイの脇を抜けて尖塔の壁を突き破る。

ドオッー！！

まるで鉛細工が溶けるように、石壁が崩れた。それを背に、アーリイは剣を引き寄せた。鋭い表情で、アレンに切り込む。

「ハアッ!!」

剣を寝かせ、脇から降り抜く横薙ぎ。

狙いは、首。

アレンを絶命させるのに十分な威力の横薙ぎは、次の瞬間、目標を見失った。

「!」

アーリイが目を見開く。消えた、と思ったアレンの顔は、後ろ。上体捻りで、アーリイの剣をミリ単位に凌いでいる。

(こいつ　!)

アーリイの剣術を、見切っている。

ギィ……インッ!!

眼の眩むような火花を散らして、アレンの拳が猛然と突きを弾く。剣線が空を掻き、押し出される様にアーリイはたたらを踏んだ。同時、アレンが拳を握る。

その拳に、炎。

「っ、!」

息を呑むアーリイの眼下で、炎が爆ぜた。

「バーストナツクル!!」

ズドオオンツツ!!

紅蓮の炎が、アーリイの横頬を殴り飛ばす。

「ガツツ……ッ!!」

彼女の視界が白く染まった。が、直撃ではない。彼女は剣をすり抜けるようにして放たれた拳を、咄嗟に空いた左手で止めていた。にも拘わらず、

……ズザザザアツ!

防御した彼女が、二メートルほど地面を擦った。拳を受け止めた左手が、もげたと思うほど痺れる。ザクロを割ったように、アーリイの左手はボロボロだった。

左手に庇われた唇から、つう、と血が滴る。アーリイは無事な右手で額を押さえると、意識を取り戻すために軽く首をふった。

「ただの人間ではない、ということか」

感情のない声でつぶやき、アーリイはアレンを睨む。語調が落ちた。途端。彼女を取り巻いていた空気が、冷え始める。

(……防いだのか)

アレンは驚いた。

完全に相手の先を打った、今の一撃で倒せなかったのは、痛い。少なくとも、相手がレナス以上の実力を持っているのであれば、長

期戦は臨めない。兼定も、レーザーウエポンすらもない今の状態では、相手に本気を出されるだけで敗北がほぼ確定するのだ。

それに、
恐らく相手がレナスならば、今ので倒せた。あの状況で防御するなど、彼の知っているヴァルキリーには不可能なことだ。

(格闘センスは、あのヴァルキリー以上か……)

素手でやるには、手強い相手だ。緊張がアレンの背に走る。兼定を持ってからは少し遠のいていた危険の香りに、アレンは口許を緩めた。

凍るような女神の殺気が、肌突き刺さる。

「私に適うと思ったのか？ 人間が」

アレンの心理を見通すように、女神はくすりと唇が歪めた。鈍色に光る女神の瞳が、す、とアレンを射る。

女神は剣をふる前に、問うた。

「貴様、以前に戦乙女と戦ったことがあるのか？」

「……」

質問、というよりは詰問だった。沈黙で相手の反応を窺うアレンに、アーリイは、ふ、と失笑を返す。人間の真偽を見極めることなど、神である彼女には容易いことだ。

それに彼の瞳が言っている。

“戦ったことがある”と。

アーリイは頷いた。

「……なるほど。だが、私はお前と戦ったことはない。今のタイミングで反撃してきたということは　レナス、か……。確かに、あいつならば今ので終わっていただろうな」

くく、と喉を鳴らすアーリイに、アレンは眉をひそめた。

「レナス？ ……あの、銀髪のヴァルキリーのことか？」

「やはりレナスを知っているのか。……貴様のような人間が、どうやってレナスと戦い、生き残ったのかは知らぬが、それにも興味はない。貴様を速やかに排除し、愚かなディパン王の首ともども刎ねてくれる」

鋭く彼女が言い放った瞬間。彼女の剣が、光を放ち始めた。

剣　否、アーリイの左手に、蒼白の光が宿る。

（この技　！）

アレンが視線を鋭くすると同時、アーリイの背に、美しく輝く白い翼が広がった。

ばさあっ！！

「その身に刻むがいい！！」

地面から三本の槍が、アレンに向かって走る。

カ、カ、カアンツッ、、！！

「っ、！！」

鋭く伸びた槍は、まるで雷のように素早く、アレンの身体を拘束した。が。槍が走る寸前、ギィンツ、と甲高い火花が散る。

(なに！？)

驚いて、アーリイが見下ろすと、両拳に気を蓄えたアレンが、三本の槍を絶妙な動きで捌いていた。あと一瞬、反応が遅ければ、確実に槍は彼の心臓を、四肢を三方から貫いている。

(ほう………)

三方同時攻撃を鮮やかにさばいたアレンを見下ろして、戦乙女は酷薄な笑みと共に目を細めた。

「ならばこれはどうだ？ ニーベルン・ヴァレスティー！！」

アーリイの手から容赦なく放たれる巨槍を見上げて、アレンは、ぐ、と奥歯を噛んだ。

「おをつ！！！！！！」

拳を握る。同時、彼の全身から紅蓮の炎が迸った。

ズオオツツ！！

空気が、螺旋を描いてアレンに集う。と、彼の背に紅蓮の朱雀が浮かび上がった。悠然とした朱雀の翼が、ばさりと広がる。

コオオオ……ツツ！！

朱雀が啼く。

瞬間、アレンを拘束していた三本の槍が、朱雀の炎で砕け散った。

バリインツツ！！

「ほう………！！」

アーリイが目を見開く。己の左手を焦がした炎に食い入るように。そのときには既に、彼女から放たれた光の鳥が、アレンに迫っていた。

「おおおおっつー！！」

アレンは拳を握る。蒼瞳が、ニール・ヘルン・ヴァレス・メイ光の鳥を睨んで鈍くぎらついた。

紅蓮の朱雀が、飛び立つ。

吹き荒れる炎が、鋭く輝く光の鳥と交差した ……。

そして、

「その目でしかと見るがいい。摂理を冒？した、神々の反逆者たるお前たちの王の最期を！！」

王都ディパンを見下すように高圧的なアーリイの声が、無情にも処刑場に響いた。

………

レナスがアーリーの目をかいくぐるため、人の姿で城外に出ると、街の彼方で一際大きな悲鳴と喧騒がわき上がった。

「……まさか！」

目を瞠って、レナスが駆け出す。

背筋に嫌な予感が走る。マルベスから預かった王冠を握る手に、若干力が籠った。

そして、

レナスの予感は的中した。

城から広間に向かってレナスが駆け出しているころ。

処刑場のアーリーが、断頭台にかけたバルバロッサ王の首を切り落としたのだ。

民衆が見守る中、悲痛な叫び声とともに、

王は。

王には、最期まで王であって欲しいと……。

最期に聞いたマルベスの言葉が、レナスの耳の奥で反響した。

……
……

三階と地下の四階層からなる尖塔は、今や見晴らしのいいいちばん抜きになっていた。ニールン・ヴァレスティによって碎かれた幾層もの床から、ぱらぱらと埃や床の残骸が雨のように降る。

「……っ！」

アレンはそれを見上げながら、軋む体を起こした。

あのとぎ。

「朱雀双爪撃！！」

強烈な質量を持つ光の鳥に向かって、アレンは炎と化した己の気を叩きこんだ。拳ではない。ニーベルン・ヴァレスティに、己の“気”を。

甲高く啼いた光の鳥が、一瞬にして紅蓮の炎を喰らう。だがその隙に、アレンの左手には紋章陣が浮かんでいた。

「ライトクロス！！」

鋭く叫ぶと同時、ニーベルン・ヴァレスティの蒼白の光が、辺り一面に反射した。

カアツツ！！

「なにっ！？」

幾つもの光の十字架が、アーリイの視界を奪う。だが、肝心のニーベルン・ヴァレスティの軌道は変わらない。眩い光の中、それだけは光を割いて、アレンに真っ直ぐ飛んでくる。

が。

一度食らった技の軌道を読むなど、アレンにとっては造作のないことだった。

かくして、アレンは尖塔に巨大な吹きぬけを作り、アーリイから

逃れた ……。

(だが。防御しても、この威力とは……)

半ば失笑して痺れる体をふる。少しして感触が戻った。レナスの技を受けていなければ、こつも上手く対処出来なかつただろう。

アレンはもう一度、吹きぬけになった。ここからすれば天井を見上げて、溜息を吐いた。どうにも、今はアーリイに対抗する手段がない。バルバロッサの処刑を妨害するにしても、なにか策を練らなくては。

アレンは辺りを見渡した。

今立っている場所は、窓や灯りのない密閉空間だった。湿度は感じない。気温が先ほどより低いことから、どうやら地下まで叩き落されようだ。尖塔に空いた大穴からも洩れる光は、地上からのものだった。

「ライト」

アレンがつぶやくと、手のひらに赤い小球が浮かび上がった。ふわりと浮かんだ炎の塊が、岩肌を照らす。

「……？」

視野が開けたところで、アレンは首を傾げた。迷路のように広がった縦横の地下道。尖塔の中だと思つたが、それよりも深いらしい。思つたよりも開放的なその道を、彼は歩き出した。

誰もいなくなった、深夜の処刑場。

片付けられず、野晒となったバルバロッサの遺体は、首と胸が完全に切り離されていた。その首を抱き上げ、レナスは目を細める。

月の綺麗な夜だ。日の光を完全に反射した、満月の夜。

レナスは首だけとなったバルバロッサの、最期の表情を見つめた。深く眼を閉じた、静かな顔。

「……全ては遅すぎた……。バルバロッサよ……」

現世の未練を断つ。

そう口にしたが、最早バルバロッサにどうしてやることも出来ない。過去の場において、レナスは彼の死に立ち会うことすら出来なかったのだ。もう少し過去に飛ばされていれば、忠告くらいは出来たかも知れない。もう少し早くこの場に来ていれば、断頭台にかけられる前に、この王冠を渡してやれたかもしれない。

彼が、生きているうちに。

だが。

「っ!？」

と。

レナスはそこで目を見開いた。黄金の光がレナスの身体に絡みつき、彼女を上空に浮かび上がらせる。

時間制御装置で見た方陣とは、逆さの陣。

「これは、引き戻される! ……そうか!! ……そういうことか

!!」

レナスが合点して叫ぶと同時に、満月の照らす処刑場から、人の姿が消えた。

……ふっ、

なに一つ。

レナスとアレンが姿を消してから、二日が過ぎていた。廃墟ゆえに食事も取れないまま、ロジャーとルシオは時間制御装置の前から動かず、ずっと二人の帰りを待っていたのだ。

「全然、音沙汰ないじゃんよぉ……」

「……アレンさん……」

暇そうにガリガリと地面を掻きながら、ロジャーが眠気眼で時間制御装置を見据える。
と。

「誰だっ！！？」

きつ、と視線を鋭くして、ロジャーは天井を仰いだ。独特の円形を描く儀式の間。吸い込まれる様に高い天井に、違和感を覚えたのだ。

何者かの、気配を。

「……バカダヌキ？」

ルシオが不思議そうにロジャーを見ている。が、ロジャーは構わず、天井に向けた目を凝らすように細めた。

人影がいた。三つ。そんな気がしたのだが

ぱああああ……っ、

と。

「な、なんだ!？」

ルシオの声に驚いて、視線を下げたロジャーは、それまで叩いても踏んでもびくともしなかつた床の方陣が、不意に光を放つのを見た。

「いつ!? これって……!!」

「まさか!」

二人が顔を見合わせる。方陣の光が増した。黄金の光の中から人が迫り出してくる。光の中から、まるで生まれ出るように。現れたのは銀髪の女神、レナス・ヴァルキュリアだった。

「……ここ、は」

たっ、と着地して、レナスは不思議そうに瞬いた。レナスの足下には古ぼけた時間制御装置。先ほどのディパンでは壊れていたハズの装置だ。

レナスは薄汚れた方陣を人差し指で、つう、となぞると、忌々しげに唇を噛みしめた。

誰かの手によって修復された装置。

ディパンが滅びてから。この、人気のない廃墟でこっそりと。

「姉、ちゃん……。アレン兄ちゃんは……。？」

ロジャーが遠慮がちに問いかけてくる。視線の合ったレナスは、意外そうに瞬くと、周囲を見渡して息を呑んだ。

「まさか……。！ まだ時の彼方に ？」

「なっ！？ なにいいいいいい！！？」

「冗談じゃないじゃんよおおおお！！！！！」

絶叫する二人に、レナスは鋭い表情で立ち上がった。

「案ずるな。首謀者は誰か、分かっている」

言って、レナスは肩で風を切る。そのあとをロジャーとルシオは、不思議そうにしながらも追った。

4 テイパン編 想い

ゴーストタウン
廃墟の広場にて。

見事に岩壁を打ち破ったバルバロッサは、まるで地縛霊だった。現世の未練ゆえに、広場から離れられないのだ。

鋼の鎧に身を包み、彼は大剣を掲げて、レナスを見るなり低く唸った。

「来おつたな、ヴァルキュリア……!!」

憎悪に満ちた声で威嚇する王に、ロジャーたちが心配そうにレナスを見る。

レナスは静かに言った。

「バルバロッサよ。私はお前の妃から全てを聞いたのだ」

「なんだと？ なにを馬鹿なことを……」

鼻で笑うバルバロッサに構わず、レナスはマルベスより預かった王冠を、そ、とバルバロッサの前に掲げた。

黄金の冠に、紅の宝玉がついたテイパン王の冠だ。

「馬鹿な……!!」

吐き捨てた、バルバロッサの気配が変わった。鎧姿に顔はない。が、明らかに見て取れる動揺だった。息を呑む彼に、レナスは静かに頷いた。

「これを預かってきたのだ」

「王冠を……?」

ロジャーが首を傾げる。するとルシオが、しっ、と人差し指を唇に当ててロジャーを黙らせた。

バルバロッサが、震える声でつぶやく。

「……まさか……。それは、ワシがマルベスに預けた……」

「そうだ」

一部の迷いもなく頷くレナスに、バルバロッサの鎧が光に包まれた。光の中で、鎧から人へ。あの、精悍だった王の姿へ転じていく。

王は改めてレナスから王冠を受け取った。それだけで、戦乙女が過去より見てきたことの真理が、バルバロッサの脳裏に駆け巡る。

・王は、騙されていたんです。

三人の魔導師の甘言に乗せられて、気付いた時には既に取り返しがつかなくなっていたのです。

人間などが永遠を望んだがために、神がお怒りになったのです……。

・どこのどなたかも知らず、ましてや私と同じ女であるあなたにこのようなお願いをするのは

心苦しいのですが……。どうか、この王冠を、王に……

・王は、最期まで王であって欲しいと……。

はた、と瞬きを落としたバルバロッサは、レナスを見るなり、そ

れまで浮かべていた憎悪の色を、ゆつくりと和らげた。
そしてただ、哀愁だけが彼の表情に残る。

「そうか……。だが、騙されていたかどうかは問題ではないのだ」

王冠を見つめて、バルバロッサは小さくつぶやいた。

「ワシが永遠を望み、その結果、全てを破滅に導いてしまった。全てはワシの責任であり、導師たちはワシの命令を忠実に実行したにすぎない」

「……………」

レナスはなにも言わない。ただ細まった彼女の瞳が、横顔を見据えるロジャーたちには悲哀のようにも見えた。

「導師たちはよくやってくれた。導師たちに罪はない。そうではないか？」

「そんなのおか　　！！」

訥々と真意を話すバルバロッサにロジャーが反論した時、レナスが制した。ロジャーが瞬いて、レナスを見上げる。

レナスはただ静かに、バルバロッサに言った。

「……………そうなのかもしれないな」

「うむ」

バルバロッサは頷いて、表情を和らげた。我がことのように怒る

ロジャーと、彼を制してくれたレナスを見やって、嬉しそうに微笑ったのだ。

最期にマルベスが見せた、美しくも儂い笑みを。

「又シと話が出来てよかった。これでワシも全てのわだかまりを捨てて逝くことができる。礼を言うぞ、戦乙女ヴァルキュリアよ!!」

ばああああ……っ

バルバロッサの魂が、光の粒子に包まれていく。

それをじっと見送って、レナスはわずかに俯いた。

静寂。

「姉、ちゃん……?」

気遣わしげにロジャーが問いかけてくる。が。顔を上げたレナスは、ロジャーに目もくれず、鋭い視線を天空に向かって投げた。

「黒幕は既にわかっている。私を時の彼方に追いやっていい気になつていたのだろうが、墓穴を掘ったようだな。貴様たちが現世に召喚した王と、王妃の絆の深さを思慮に入れられなかった愚かさよ!!」

レナスは恫喝すると、ぐ、と瞳に怒りを孕んだ。

「想いは時を越える。心の糸をたぐりよせて、私は戻ってきたぞ。聞こえているんだろう? 魔導師ども!!」

「魔導師だって……?」

ルシオがレナスの視線の先を追う。すると天空に、長い法衣をはためかせながら三人の魔導師がゆらりと浮かび上がった。

赤と、青と、緑の、三人の魔導師だ。

「忌まわしきは愚神ヴァルキュリアよ」

低く唸るような声で、緑の法衣を着た導師・ダレスはレナスを睨みつけた。

「一度ならず二度までも我らの邪魔をするか」

青の法衣の導師・ガインが続く。

「微塵と化した王の魂を呼び戻すまでに、幾百の年月を浪費したことが！！」

「だが所詮、奴も小者。愚昧な男よ」

「ふははは。まったくじゃ」

しわがれた声で笑ったのは、赤の法衣の導師・ウォルザだった。ウォルザが笑声を上げると同時、他の導師たちも忍び笑いを上げ始める。それを睨み据えて、レナスは鋭い語調で言った。

「バルバロッサを愚弄するか！！ あ奴こそ賢王の諡おくりなを冠すに相応しい……」

怒気を孕んだレナスの顔を、三賢者と呼ばれる導師たちは忍び笑いを止めずに見下ろした。

「ほほう。神が亡者に肩入れするとは」

「オーデインが知ったらどのような顔をするじゃろうなあ」

言つて、くつく、と三賢者が笑つた。

「……なんか、すっげえムカつく連中ジャン!!」

「理由はよくわかんねえけど……こんな奴らのために、あの人が犠牲になつたのかよ!!」

ルシオとロジャーが苛立った様子で拳を握りしめた。その彼らを置いて、レナスは天空に散つていった導師たちを睨みながら言つた。

「……城の中だな。待っている、すぐに滅してやるぞ」

つぶやくレナスに、ロジャーとルシオも続いた。

「助太刀するジャン!」

「つたりめえだ!!」

レナスが答える間もなく、二人が駆け寄ってくる。レナスは一瞬目を細めたあと、小さく苦笑した。

……

……

尖塔から広がる地下道は、アレンの想像以上に入り組んでいた。恐らく隠し通路だろう。人が通つた形跡のない道は埃っぽさと湿気

に満ち、獣かなにかが通った足跡がいくつも見受けられる。地上に続く階段を目指して、アレンは当てもなく地下を歩いた。

そんな彼がそこに辿り着いたのは、奇跡かもしれない。あるいは、引き込まれたのか。

“運命”という名の糸に。

深い暗闇と不快な湿気が充満するその場所で、彼は少女と出会った。

ディパン国皇女、アリーシャと。

「王妃様は、自害されました」

不穏な言葉が聞こえたのと同時、アレンは足を止めた。地下道の暗闇の先　右手方向の通路から、人の気配がする。全部で五つ。アレンは足音を殺し、耳をそばだてた。

「……そんな、お母様まで……」

声の方に近づくと、地下道の雰囲気が変わり、時間制御装置のあった石畳の通路に出た。物陰から様子を窺うと、少女が体を震わせて泣いている。失意の底に叩きこまれたのか。彼女は地面に手を付き、ただ泣いていた。

悲しみを堪えようとくぐもった嗚咽が、彼女の無力さを助長した。美しく梳いた飴色の金髪が、彼女の肩から地面に零れる。

(王妃……？ と、いうことは)

アレンは息を呑んだ。廃墟ディパンで出会った王を思い出す。先ほど尖塔から垣間見えた、処刑台にかけられた生前の彼を。

戦乙女に滅ぼされた、亡国の王を。
それに、
彼女は言った。

お母様まで。

つまり、断頭台にかけられた王は、処刑されたのだ。

(間に合わなかったか……！)

アレンは唇を噛んだ。少女の前に立った騎士が、沈鬱な表情のまま最後の言葉を少女にかける。亡国の、王女に。

「我々はこれより、王の最後の命に従い臣民を地下道より国外へ避難させます。アリーシャ姫も、すぐにでも逃げられますよう」

そう言うのと、騎士は会釈して棺を持ち上げ、仲間を引き連れて重々しく歩きだした。棺を連れていく騎士が、王女の視界から見えなくなる。

「あ……」

王女はさすがのように手を伸ばし、彼らを追いかけてようと踏み出した。

「アリーシャ！」

その彼女の両肩を、長髪の青年が押し止める。どことなく中性的な面立ちをした青年は、珍しい緑色の髪をしていた。力なく青年を見上げ、王女は目尻から零れる涙にも気づかず、表情を崩した。

「だって……、ルーファス……！」

青年の胸許に顔を埋め、王女・アリーシャは声を殺す。ルーファスと呼ばれた青年は、そんなアリーシャを、黙って見下ろすしかなかった。

「あ……ああ……お……とうさま……、おかあ……さま……」

アリーシャの嗚咽が響く。

閉じた地下の空間に、アリーシャの悲しみが広がった時、彼女の傍に控えていたもう一人の巨躯の男が、すっところこちらを見据えた。

「隠れてないで、出てきたらどうだ」

見た目を裏切らない重低音な声。太めの黒髪を無造作に束ねた巨漢の男は、アレンを見据えて剣を抜いた。中性的な面立ちの青年、ルーファスも顔を上げ、厳格な表情で愛用の弓を握る。だが王女は

アリーシャだけは、放心したままだ。

アレンは物陰から出た。

「貴方がたは、ディパンの」

言いかけて、アレンは口を閉ざした。

魔力を感じたのだ。前方に。それは風のようにざっと音を立てて集うと、瞬後、黄金の光を放った。

「なにっ!？」

ルーファスがうろたえたように周囲を見渡す。巨大な魔力の流れ。

なにかの異変が、起きようとしているのは分かる。
言わば、前兆。

「……ぬ」

巨漢の男も、光を見つめて表情を鋭くした。
アレンは思う。

(……似ている)

この光は、自分を過去に追いやった方陣と。
原理は分らない。

ただ、干渉の仕方が、時間制御装置と同じだった。

明らかに、魔術構成は違うが。

なにかが、来る。

アレンが確信して目を細めた時、光はぱつと四方に散った。

「っ、っっ！」

光の中から、一人の美女が現れる。

艶やかな黒髪を腰までなびかせ、彼女は着地するように長い脚を折った。黒の革ズボンが優雅な脚線美に光沢を与えている。光の中から零れるように広がった黒髪の中から、彼女の瞳が覗いた。
右が金、左が蒼銀の、色違いの瞳が。

「……！ シーティア！」

「久しぶり、アレン」

驚きにアレンが目を丸めると、光の中から現れた美女はにっこりと微笑った。大人びているが、まだ若い。今年で十八歳になったシューティアは、しかし、十八の少女が放つにしては凄艶な色香の持ち主だった。

人にしてはあまりにも整い過ぎた相貌と、肢体。肌は透けるように白く、胸の膨らみと腰のくびれ、引き締まった手足は、彫刻として緻密な計算を為されたように一分の狂いもない。美と言うものを体現すると彼女のようになるのだらう、と誰もが取りとめのない思考に捕らわれるほどだ。

「迎えにきたわ」

「迎え？」

率直に切り出すシューティアにアレンが問い返すと、彼女は不思議そうに首を傾げた。

「時の次元を越えたでしょ。帰らないの？」

「！」

当然のように聞き返されて、アレンは驚きとともに理解した。

「……時を越える。そんなことも出来るのか、君たちは」

「まあね」

くすりと笑った彼女は、革ズボンのポケットに手を入れると、ビ

「玉ほどの小さな硝子玉を取り出した。」

「キールから。この前の、剣術指南役のお礼ですって。」

そう言っつて、手渡してくる。それを受取つて、アレンは不思議そうにシーティアを見返した。

「報酬なら、温泉券を戴いたはずだが？」

「さあ？ 私は頼まれたただけだから。」

「……そうか。」

頷いて、硝子玉を見下ろしたときだった。

ずきんっ、……

アレンの視界に、火花が散った。

目を細める。蒼白の雷が 幻覚と分かるその光が、右手方向

アリーシャを示した。茫然とした少女の容貌が、金髪の女性と重なる。波打つ金髪に羽兜を乗せた、浅黄色の鎧の女性と。

（ヴァルキリー……？ だが、彼女は……）

突然流れってくるイメージ像に、アレンは目を閉じる。眉間には深いしわが刻まれ、アレンは頭痛を抑えるように額に手をやった。

“^{アリーシャ}王女が、ヴァルキリーに見える。”

それは不思議な感覚だった。アリーシャをアリーシャとして見て

いるのに、それと同時に、彼女がもう一人いるように見える。

浅黄色の鎧を身にまとった、金髪のヴァルキリーに。

どういうことだ、と頭痛に苛まれながらも、思考を整理しようとしたところで、

「はい、そこまで」

ぼん、と硝子玉を持つ手に、シーティアの手が重なった。同時。

硝子玉は光を発し、アレンの人差し指に指輪となって納まる。

途端頭痛と 映像が消えた。はた、とアレンが瞬きを落とす。

「……これ、は？」

「アルスイ・オーブ。世の真理を見通す宝珠よ。武器の粹を極めた伝説の鍛冶師、レギンが作った最高の魔術具。……と言っても、これはレプリカだけだね」

「世の、真理を……？」

自然、アレンはアリーシャを見る。一瞬だけ見えた、金髪のヴァルキリーを重ねるように。

(ディパンの王女が、ヴァルキリー……？)

「君は」

頭に湧いた疑問を解消するために、アレンがアリーシャに問いかけたときだった。

階段上に、カツ、と光が瞬いた。

……ぞくり、

背筋が震える悪寒。

アリーシャが視線を上げる。強張った表情で、放心から目覚めた彼女は、明らかな感情を浮かべていた。怒りと、憎しみを。

光の塊が、漆黒の戦乙女・アーリイを象った。

アリーシャはルーファスから身を離すと、猛然と戦乙女を睨んだ。

「王妃を殺したのは、まさか貴様の仕業か!!」

口火を切ったのは、アリーシャではなく、彼女の後ろにいる巨漢だった。階段から冷めた視線を向けるアーリイが、悠然とした足取りで降りてくる。

アーリイは鼻で笑った。

「そうしたかったが、あの女は勝手に死んだ」

「あなたが殺したも同じよ！」

アリーシャは声を限りに叫んだ。こめかみが震える。

「そう思いたければ思うがいい」

短く言ったアーリイは、まるで意に介さない。彼女はアリーシャの前で足を止めると、憎悪に歪んだアリーシャを見下ろした。

「だが、たとえそうだとしてなにが悪い。運命の女神、戦乙女が人の魂を輪廻させることになんの問題がある」

(なんの、問題……?)

放たれた言葉を反芻すると、アリーシャの中で、なにかがぷつんと音を立てて切れた。

「うわあああつー!!」

絶叫とともに剣を抜き、アリーシャはアリーのに向かって大きく踏み込んだ。

ビュッ!

剣戟が交り合う。が、それはアリーののものではなかった。剣がアリーのをかすめる寸前、横合いから三メートル近い剛剣がアリーのの剣を弾き飛ばしたのだ。

「っ、！」

アリーシャは体勢を崩し、後ろに倒れる。数歩、たたらを踏んで後ずさったアリーシャを、ルーファスが支えた。アリーシャは猛然と顔を上げる。が、次の瞬間。彼女は愕然とした。

「どうして……あなたまで」

「……アリューゼ」

剛剣を手にした男を見据えて、アレンはつぶやいた。

アリューゼと同じ顔をした、“この世界での”アリューゼ。半ば予想していたが、本当に出合った。

「知り合い？」

シーティアに尋ねられ、アレンは、かも知れない、と答えた。名を呼ばれたアリューゼが、不思議そうにアレンを一瞥する。が、彼は自嘲気味に肩をすくめると、視線をアリーシャに向けた。

「つまるところ、今の俺はオーディンの傭兵だ。じたばたしたってどうなるもんでもないだろ」

言ったアリューゼには、諦観が滲み出ていた。アレンの知っているアリューゼとは少し印象が違う。

「そんな……」

「見損なつたぞー!!」

怒りの形相で、巨漢の男　　ディランが駆けだした。

「傭兵に誇りを持っていたんじゃないのか！　非のある雇い主には、異を唱えるんじゃないのかー!!」

ディランは、アリューゼの胸倉をつかみ怒鳴りつけた。

「この人数でなにができる」

アリューゼの瞳が、ずっとディランを見据える。

「神々の力の前に、ディパンはこの有様だ。これ以上、なにができるってんだー!!」

ディランの腕をふり解いて、アリューゼは吠えた。ディランが齒

をむき出しにして睨み付ける。その二人を冷やかに見ていたアーリイが冷笑した。

「すべては主神オーディンの思し召し。お前たちとて、ディパンが神々に反逆を企てていると知ったとき、こうなると予見できなかったわけではあるまい」

言ってアーリイは、視線をアレンに向けた。

「まさか人間如きが私から逃れるとはな。だがそれも終わりだ。お前もまとめて始末してくれる」

「……」

アーリイが剣を抜く。シーティアが言った。

「なんだか良く分かんないけど、やるなら相手になるわ」

赤いジャケットに通した腕を彼女が、さつとふる。と、彼女の人差し指に嵌った指輪が光を放ち、それが槍を象った。

「マテリアライズだと!？」

アーリイが驚いたようにつぶやく。美笑を返したシーティアは答えず、槍を構えた。

そのとき。

「あなたはいつもそう。二言目には、オーディン様」

アーリーシャの唇が、動いた。

アレンははつと王女アリーシャを見る。彼女の気配が変わっていた。まるで人のものではない。この、神々しさと自然に溶け込むかのような透明な気配は。

「……………ヴァルキリー……………」

凜々しく引き締まった王女を見て、アレンは思わずつぶやいた。アリーシャが、アリーイを睨みつける。

「オーディンの考えは聞き飽きたわ。私は、あなたの考えが聞きたいの」

アリーイの表情が困惑したように歪んだ。だがそれはほんの一瞬で、彼女の顔はすぐにまた冷やかなものに戻った。

「なにを言う。我らはオーディン様に使役される身であることを忘れるな」

「もうたくさんよ」

アリーシャは切り捨てると、アリーイの眼前に剣先を突きつけた。

「神々が人間を愚弄していいという道理はないわ！」

「戦いに一時の慰めを求めるか。いいだろう」

アリーイも剣を抜き、アリーシャの眼前に剣を突きつけた。二つの刃が交差する。

「相手になつてやる」

アーリイが刃を弾き、踏み込んだ。剣を薙ぐ。が、アーリーシャは寸前で後ろに跳んでいる。アーリイの剣気で、白塵が舞った。

トツと着地すると同時、アーリーシャはアーリイとの間合いを詰め、剣を一気にふり下ろす。が、アーリイに見切られている。刃を止められたアーリーシャは、上段から袈裟切りに軌道をずらした。アーリイも剣を返す。

キインツ!!

ぶつかり合う剣が、刃から閃光を散らした。両者、打ち込む速度スピードが徐々に増していく。

ギ、キキキキインツ!!

「アーリーシャ!」

加勢しようとしたルーファスと、無言で槍を繰り出そうとしたシューティアを、アレンが制した。

「っ! 邪魔すんな!! あいつを援護しねえと……!!」

「……もう少しだけ、見極めたい」

戦乙女、ヴァルキリーの真意を。

剣戟を交わす二人のヴァルキリーを前に、アレンは意識を集中した。シューティアは言う。

「見極めるものにも、あの黒い人。敵なんでしょ?」

「……」

アレンが無言で見据えてくる。シーティアはため息を吐いた。

「はいはい、りょーかい」

手許の槍が光となって弾ける。と、彼女の人差し指にぴたりと嵌まる銀の指輪に戻った。

一方にはまだ取っ組み合いをしているディランとアリューゼの姿があった。

アーリイの突き出した剣が眼前に迫る。アーリィシャは首を捻る。ヒュンツと風切り音。空寒い音を立てて剣が頬をかすめ突き抜ける。瞬間、アーリィシャは身を翻してアーリイの胴を薙いだ。

ヒュンツ！！

後ろに跳んだアーリィが、光の球に変じて浮遊し、刃を躲す。アーリィシャとの距離が、二メートル程空いた。大階段の上に乗ったアーリィが、アーリィシャを睨み据える。と。二人が同時に地を蹴り込んだ。

ドンツ！

アーリィシャが剣を突きだす。アーリィも突きを放った。二人の身体が交錯する。そう思った瞬間、アーリィの剣先が揺らいだ。

「っ、ぐー！」

アーリィの剣はアーリィシャの頬をかすめて裂き、突き抜けた。だ

がアリーシャの剣は、アーリーの腹に深々と突き刺さっていた。

、ずしゅっ！

着地と同時に剣を引き抜いたアリーシャは茫然としていた。自分の剣がこうもあっさりアーリーを捉えたことが意外だったのかもしれない。腹を押さえ、顔を歪めるアーリーを見つめたまま、彼女は動かなかった。

「勝負あり、ね」

シーティアがつぶやく。傍らのアレンも、アーリーを見つめたまま動かなかった。シーティアは肩をすくめる。

「じゃ。帰るわよ」

「……ああ……」

なだめるように言うと、アレンはようやく頷いた。相変わらず視線をアーリーにやったまま、意外そうに目を見張っている。

シーティアはやれやれとつぶやきながら、術を展開した。

時空干渉能力。

あらゆる時間と次元を越える、彼女が持つ力を。

そのときだ。

「今じゃ」

不意に、しわがれた声が聞こえた。

「！」

アレンは視線を左右にふる。強力な魔力が集ってくる。それも、二つ。

弾かれたようにふり返ったアリーシャの視界に、二人の魔導師が見えた。赤と青の法衣の魔導師だ。二人の手の中に、光が集束していく。

「な、なんだ!?!」

ルーファスが驚きの声を上げる。と同時に、二人の魔導師が、手の中の光を放った。

ばああああ……っ!!

目の眩むような壮絶な光。思わず目を庇ったアレンは、細めた視界の中で、光がアリーイとアリーシャの頭上で弾け、足許と頭上に方陣を展開するのを見た。

「王呼の秘宝か!?!」

驚愕に顔をひきつらせ、アリュューゼと取っ組み合いをしていたデイルンが目を見開いた。彼の顔つきが変わる。彼は低く叫ぶと、背負っていた剣を投げ捨て駆けた。重戦士デイルンの全身が、炎に包まれる。アレンはシーティアをふり返った。

「待ってくれ、シーティア!?!」

5 **テイパン編完結 三賢者 十(前書き)**

あとがきに挿絵があります。ご注意ください。

5 テイパン編完結 三賢者 十

だがシーティアは既に時空干渉能力を顕現している。そして、能力を解放したシーティア本人も、驚いたように炎に包まれた重戦士を見ていた。

炎の中で、重戦士が叫ぶ。

「シルメリア ……！！」

と。

炎の中から赤い瞳とざんばらに伸びた髪の毛の獣じみた巨躯が飛び出した。肌が土気色の、不死者。 そう“不死者”だ。

（不死者が、ヴァルキリーを？）

魔力の奔流が渦を巻き、噴き上がる光が強さを増していく。金縛りにでもあったように、アーリイもアリーシャも動かなかった。

「っ、！」

すべてが光に吞まれていく中、不死者は大きく咆哮し、長く伸びた鋭い爪を赤の法衣の魔導師・ウォルザに向かって突き出した。

ドドオンッ！！

掌から光弾が飛ぶ。

「がはあ、っ！！」

光弾に直撃したウォルザが弾き飛ばされた。彼は中空で弧を描き、猛速度で飾り窓を破って下に落ちていく。

「じぼおっ、！」

同じく青の法衣を着た魔導師・ガインも、別の飾窓から外に落ちた。だが不死者は、そんなものに構わない。

「シルメリア！！」

彼は方陣の中に閉じこもった、アリーシャに手を伸ばす。
瞬間、

……きいいい、

アレンの耳に、兼定の音が聞こえた。ヒーリングで疾うに癒えた火傷が疼く。

なにかが、来るのを感じた。

光球。

それは音もなく不死者の背後に現れ、す、と手を伸ばた。伸ばた手のひらに、なにかの術式が顕現する。詠唱はない。魔力の乱れも、なにもない。まるで初めて感じた、戦乙女の気配の如く透明で。

「っ！」

ずきんっ、

アレンの指輪が光った。眼前では不死者が、肉体と乖離しつつある戦乙女に手を伸べている。アリーとアリーシャの身体から、魂が抜け出始めていた。アリーシャの身体の中から、あの金髪のヴァ

ルキリーの魂が。

「今度は私が、助けてやる!!！」

不死者は金髪のヴァルキリーに呼びかけるように一声吼えた。不死者の両腕に深淵の炎が宿る。方陣を割り入るように、炎が結界を焼いていく。

そのとき、

不死者の背後に現れた光が、魔晶石を放った。

ドオツ!

弾速が速い。不死者は術を破るのに必死だ、気付いていない。

「後ろだ!!！」

アレンは気を練った。

「いけない!!！」

同時、その場にいる誰とも違う女が叫んだ。王女の中にいた金髪のヴァルキリーだ。

訳が分らなかった。とりあえず、アレンは練った拳を魔晶石に叩き込もうとした瞬間。アリーシャから完全に分離したヴァルキリーが、不死者とアレンの間に割り入った。

正確には、魔晶石から不死者を護ろうとしたヴァルキリーが。

「っ、!!！」

咄嗟に、アレンは動きを止めた。

その、一瞬。

「なにっ!?!」

魔晶石を放った主が息を呑んだ。魔晶石が不死者ではなく、ヴァルキリーに直撃する。彼女の魂に。

光は魂に触れた瞬間、噴き出すように輝き、視界のすべてを白く染めた。

「っ!」

あまりの眩さにアレンが目を庇ったとき。奔流する壮絶な魔力の中で、シーティアのあっさりとした声が聞こえた。

「あ、ごめんなさい。そろそろ発動しちゃうみたい」

.....

.....

「ようこそ。我らはたとえ愚昧なる神といえども歓迎致しますぞ」

レナスたちがディパン城に入ると、三人の魔導師は中空からレナスを睥睨した。口火を切ったのは、緑の法衣の魔導師、ダレスだ。彼は恭しく礼を施すと、傍らの赤の法衣の魔導師、ウォルザがくつくと喉を鳴らした。

「それが貴公の考えた最初の台詞か?ならばワシはこうじゃ」

「黙れ!」

レナスが吐き捨てるように怒鳴ると、青の法衣の魔導師、ガインはがっかりしたように溜息を吐いた。

「……せっかく訪れた晩餐の機会。会話に興じては貰えないものか」

「晩餐だと？」

レナスが鋭い表情のまま問う。

「そうじゃ。戦乙女という魂を食らう、晩餐よ!!」

ふはは、と声高々に笑ったウォルザは、両腕をばさりと広げた。

赤い法衣の内から実体のない闇が姿を現す。レナスの表情が、険しくなった。

「咎人め!! 魂を冒涇した罪は重いぞ!! 貴様ら三者は滅絶に値する!!」

恫喝したレナスは、一気に剣を抜き払った。彼女の背に白い翼が顕現する。蒼白の光から、美しい白き翼に。

「我とともに生きるは冷厳なる勇者、出でよ!」

翼から零れた白羽が、雪のように舞った。全部で三カ所。それは光球となって集うと、パアツと輝いて弾けた。弾けた光の中から、三人の勇者の魂が具現化する。

それを尻目に、ルシオはナイフを引き抜いた。

「行くぞ、バカダヌキ!!」

「おう！ 勝利の栄光はオイラたちに！！」

頷き、ロジャーも手斧を握る。

タツと地面を蹴ったレナスは、中空にいる三賢者目掛けて剣をふり下ろした。

「ハアツ！！」

風を巻き、レナスの剣が走る。狙ったのは中央に立ったウォルザ。が、彼はレナスの剣を前に薄笑いを浮かべていた。

ハハハハハッ！

人でない声で、ウォルザが邪悪に笑う。と同時に、赤い法衣の内にある闇が彼自身を呑みこみ、不死者へと変化した。現れたのは、レイス巨大な悪霊。

「ヴァルキリー！！」

地上でアリュージェが叫ぶと同時に、レイスと化したウォルザの手のひらから紫色の闇球が迸った。

愚かな

ウォルザがつぶやく。

と、

「っ、！？」

剣をふり下ろすレナスを、闇球が襲った。

ズドドドオンッ！！

一つ、二つではない。闇球はレナスを取り囲むように飛ぶと、不規則な動きでふわりとレナスに襲いかかった。まるで絡みつくように、踊るように。

「これは　！」

紙一重で闇球を避けたレナスが、その闇が持つ破壊力に息を呑んだ。引き込まれる。直撃すれば、闇球の中に。そっと触れただけにも関わらず、闇球が壁をかすめると、壁は力尽きたようにくず折れた。

「姉ちゃん！！」

ロジャーが果敢にも闇球に向かって手斧をふりかざす。瞬間。青い法衣が闇に吞まれ、その中から白いのっぺりとした顔の魔術師が姿を現した。こちらも、不死者だ。

ストーン・トウチ

人に非ざる声で詠唱したガレスの手から、方陣が放たれた。瞬間。ロジャーの足もとに紫色の方陣が生まれた。

ズドンッ！！

小爆発。足許に浮かんだ方陣から、どす黒い闇が吹き荒れた。

「うおっ！！」

ロジャーが小さく悲鳴を上げる。

「バカダヌキっ!？」

ルシオが慌ててふり返った。ロジャーの身体が宙を舞う。それを見据え、ガレスが勝利を確信して言った、瞬間。

「ラスト・ディッチ!!」

中空を舞っていたロジャーの身体が反転し、ぴん、と直線上に伸びた彼の身体が、まるでロケット弾のようにガレスに走った。

ズドオオオンッ!!

鈍い音を立ててガレスの腹に、ロジャーの頭突きがめり込む。

があっ!! ば、ばかな……っつ、!!??

直撃を食らったガレスが目を見開く。不死者に吐瀉物などなかったが、少年の頭突きは 彼の被るヘルメットの角は、完全にガレスの鳩尾を貫いていた。

ガレスが冗談のように吹き飛ばされる。その落下地点でナイフを構えたルシオが、鋭く踏み込んだ。

「ソードダンス!!」

タンッ!

小さな踏み込み音を立てて、彼の両手に嵌った二振りのナイフが、

苛烈に、鮮烈に動く。それはガレスの身を千に刻むと、不死者であるガレスをいとも簡単に断った。

そんな、な……！？ 不死者たるこの……私が！ 戦乙女でもない、こんな……こんなガキに！！

消えたくない、と怨嗟のようにつぶやきながら、ガレスが首をふった。が、命の砂はぼろぼろと零れ、ガレスの魂が散り散りになって宙を舞っていく。

ルシオは両のナイフをびゅっ、とふった。

「アレンさんにもらったナイフだ。そんじょそこらのと、一緒にすんな」

まるで不死者の気を抜くように。

半眼でこちらを見据える少年を、不死者となった瞳で睨み続けてガレスは塵となった。

「ファイナリティ・ブラストオ！！」

一方のレナスは、襲いくる闇球を壮麗な剣術ですべて捌く。と。ぐつと身の丈よりも長い、三メートル近い巨大な剣を操るアリューゼが、自身の気を炎に変えてレナスに迫る闇球をすべて焼き払った。そしてそのまま、レイスと化したウォルザに切り込む。

なにっ！？

闇球を破られると思っていなかったのか、ウォルザは目を見開くと同時に、アリューゼの大剣に刺し貫かれた。

ズドオオオンツッ!!

瞬間、炎が爆ぜる。にやりと壮絶な笑みを浮かべたアリユーゼが、不死者を投げ飛ばすように上空へと切り上げた。

ば、ばかなあああ……!!!!

悲鳴とも、絶叫ともつかない声を上げて、ウォルザが塵になっていく。

その様に、ひっ、と喉を鳴らした緑の法衣　ダレスは、闇に自身を浸すと同時、不死者へと姿を変えた。

ぷ、プリズミック・ミサイル　!!

ダレスが慌てて方陣を描く。が、それを放とうとした瞬間、

「ハアツ!!」

レナスの横薙ぎに、方陣もろとも両腕を切断された。

ぎゃあああつっ!!!?

ダレスが悲鳴を上げる。交差気味にダレスを切りつけたレナスが、着地すると同時、叫んだ。

「ラウリイ!!　ジエラード!!」

呼ばれたジエラードが、にんまりと笑って杖を突きだす。

「任せよヴァルキリー！　これは神罰じゃ。　バーン・ストーム

「!!」

赤い方陣が、ダレスの足許に展開された。
魔力が凝縮する。

ズドドオオンッ!!

方陣は光を放ち、灼熱のマグマが吹き荒れた。上空に飛んだダレスを、弓をつがえたラウリイが黄金の矢で狙い打つ。

「奥義・レイヤーストーム!!」

ズドドドドドオオンッ!!

吹き荒れる光の矢が、幾重にもダレスに突き刺さった。ダレスは虚空を見つめ、ただ叫声を発して光の中に散っていった。

……ばらばらばら、

浄化された魂が、粉となって降り注ぐ。それを見据え、レナスは剣を握ったまま、ルシオとロジャーをふり返った。

「まさか、ミッドガルド地上界の住人が不死者を倒すとはな。……それも、このような子供が」

そう言った、レナスの表情は冷たい。その銀の瞳を見据えて、ロジャーとルシオは、それぞれ一歩ずつ後ずさった。

「い?」

「ね、姉ちゃん？」

じりじりと、尻すばみに後退する二人。

一方のアリユーゼは、どこか愉快そうだった。三メートルほどの大剣で、とんとんと肩を叩く。

「いいじゃねえか、ヴァルキリー。強かったのは奴だけじゃねえ。こんな隠し玉を抱えてやがったとはな」

言つて、にやりと笑う。ラウリイは不安そうに、ヴァルキリーとアリユーゼを見やった。

「あの……、お二人とも……」

「なんじゃ？ ヴァルキリー、こ奴らも神界に招くのか？」

不安そうにジェラードが首を傾げる。レナスはただ無言のまま、じつとロジャーとルシオを見据え、それから具現化させた剣を消した。

「なんだ、やらねえのか？」

アリユーゼが拍子抜けしたように眉根を寄せる。レナスは踵を返した。

「私は運命を平定する者。神の敵でない者を討つ気はない」

「……ほう？」

なにか言いたそうに、アリユーゼがにやりと見据える。が、レナ

スは構わなかった。肩越しにルシオとロジャーを一瞥し、言い残す。
「早めにあの男と別れておくことだ。それが、お前たちのためにもなる」

「んあ？」

「っ、」

不思議そうに首を傾げるロジャーと、むつと眉根を寄せるルシオを残して、レナスは飛び立った。それと共に、勇者の魂たちの姿も消える。

いつも通り、空の彼方へ。

「……感じ悪い奴……」

見送ったルシオが、ぼつりとつぶやいた。元より期待などしていないが、やはり戦乙女は礼の一つも口にしなかった。アレンを、どこかにやっておきながら。

「なあ、アホネコ」

「ん？」

取りとめのない考えに耽っていると、ロジャーに呼ばれた。軽く視線を上げる。傍らのロジャーは、空を見上げていた。いつになく神妙な面持ちで、楽天家のくせに気難しい表情を浮かべている。ルシオは眉根を寄せた。

「んだよ、バカダヌキ」

「姉ちゃん、バルバロッサっておっちゃんのために怒ってたな。不死者”だったってのに」

放たれたロジャーの言葉に、ルシオは、う、と言葉を呑んだ。

「それはっ!」

「事情はよく分かんねえけど、姉ちゃんにも色々あるじゃんよ。だから。いつか、ア

レン兄ちゃんのことも認めてくれんじゃねえかな? 姉ちゃん」

「……なわけねえだろ。だって、石頭じゃねえか」

「むむっ! お前、男たる者、綺麗なお姉様の敵になる気か!? アホネコ!」

「ちよつとは“げんじつ” 見るよ、バカダヌキ!」

いつも通りに言い合って、ルシオはじっと空を見上げた。目を細める。

アレンの手前、あまり全面には出さなかったが、ルシオはあまりレナスを好きではなかった。口には出さないが、いつも思ったのだ。

どうしてそこまでして庇うんだ。命を狙われているのに、と。

人助けを信条とするルシオの男道でも、レナス肩入れする必要性は感じられなかった。だから、ルシオにはアレンの真意が分らなかったのだ。

「でも」

“敵”として見ていたレナスが、一瞬だけ自分に向けた、優しく悲しい瞳を思い出して。

ルシオは神妙な面持ちで押し黙った。ヴァルキリーも、こんな表情をするのかと思った。こんな、普通の女性のような、

「ヴァルキリーとアレンさんが……か。いつかそうになったら、いいな」

ルシオは顔を上げ、独り言のようにつぶやいた。傍らのロジャーが、ジャンよ！、と律儀に答えてくる。ロジャーの方は高らかに、少しも迷った風もなく。

ルシオはそんな“バカダヌキ”に向けて、へっ、と小さく苦笑した。

「ルシオ！ ロジャー！」

名前を呼ばれた。

ルシオとロジャーが耳をぴんつと立つ。二人の神妙な面持ちが、満面の笑顔に変わる。ふり返ると、アレンが見えた。

「お！ アレン兄ちゃん！！」

「やっぱり！！ 無事だったんですね！！」

ロジャーがぱたぱたと尻尾をふりながら、手をふる。すると駆け寄ってきたアレンも、安堵したように笑った。

「すまない！ 心配させたな」

「いえ！ 帰ってくるって、信じてましたから！！」

ルシオもにこにこ笑う。気性の難しいルシオが、ここまで素直に笑うのは実に珍しいことだ。表情も、どこかすっきりとしている。いつもより。

「……そうか、ありがとう」

そのルシオの、わずかな変化を受けて、アレンは微笑った。ルシオの頭を、ぼん、撫でてやる。

「へへっ」

ルシオが嬉しそうに笑う。良く分らないが、ルシオの中でなにかが吹っ切れたようだ。

「ん？」

不意に、ロジャーの耳が、そそ、と動いた。

「んん？」

ロジャーは首を傾げた。場所はアレンがやってきた方角から。遠くで、見知らぬ女性の声が聞こえる。それと共にぱたぱたという足音が。

少しして、女性の人影が見えた。

「ホントマイペースね、あの人。はあ……、アレン！」

「ん、ん!？」

神妙な面持ちを作って、ロジャーはアレンを見上げた。アレンに変化はない。彼は思い出したように、ああ、と小さく頷いて、後ろをふり返った。

「すまない、つい……」

「ついじゃないわよ、ついじゃ」

唇を尖らせて現れたのは、絶世の美女だった。長い黒髪を腰まで伸ばした、透き通るような白い肌の、金と銀の瞳を持つ女性。すべてに置いて理想の均整を持つ彼女は、ロジャーたちを見ると柔らかく微笑った。

「あ、初めまして。私はシーティア・フォルスマイヤー。君たちがロジャーにルシオね」

彼女が口を開くと、まるでそこに花が咲いたように華やいだ。ロジャーは力の限りカツと目を見開き、口をぱくぱくと開閉させた。

「め、め、めっ……!!」

呼吸障害でも起こしたように、ロジャーは息を呑むと喋るを同時にこなした。その所為で、顔色が白くなったり、青くなったり、赤くなったりする。

「?」

シーティアが首を傾げた。傍らでは白けた表情をルシオが浮かべ、

アレンが苦笑している。

「??？」

シーティアが更に首を傾げる。と。そのときだった。

「メラ麗しいおねいさまぁああ……!!!!!!」

ロジャーの絶叫が、廃城ディパンに響いた……。

5 テイパン編完結 三賢者 十（後書き）

【シーティア・フォルスマイヤー】

> i16964—1500<

過去に飛ばされたアレンの前に現れた絶世の美女。

『ゲヴェル』という特殊な種族であるために、時空や次元を自由に行き来する【時空干渉能力】という力を持っている。

アレンが以前、シーティアと同種族のゲヴェルの人々に剣術を教えただために、その剣術指南のお礼としてアルスイ・オーブを渡しにきた。

また、時空干渉能力を用いて別次元に渡ったまま、行方不明となっている弟を探しているらしい。

彼女の武器は槍グンニゲルが主で、状況によって刀レギンレイジにも可変する。

戦乙女のようにマテリアライズが出来る訳ではなく、『リングウエポン』という指輪型の特殊武器が、持主の意思に反応して、槍や刀になっているだけである。

神界転送：ラウリイ

「本当に、行ってしまふのか……？」

豪華な金髪を縦ロールにした王女は、窺うようにラウリイを見上げた。

アルトリア人らしい白い肌と、形よく整った相貌。黙っていればフランス人形のように愛らしい14歳の少女は、初めての仲間との別れを惜しんだ。王女　ジェラードは不満そうに自慢のルビーの杖を握る。

呼び止められたラウリイは、困ったように微笑った。

「はい。こんな僕でも、ヴァルキリー様のお役に立たないと」

気弱そうな青年が、戦いには縁遠い温和な笑みを浮かべる。深い金髪と、茶色の瞳。左目に泣きボクロのある青年だ。もう少し髪が長ければ、見る者によっては女と間違うかもしれない。

ラウリイが放った言葉は、気弱な自分を奮い立たせるための言葉でもあった。彼の眼下には　故郷、クレルモンフェランがある。

かつて婚約者だったミアアを、ラウリイは神界に行く前に一目見ようと思ったのだ。ラウリイは、少し気遣わしげに銀髪の戦乙女を見た。

「ヴァルキリー様……。でも、本当にいいんですか？　僕なんかのために……」

戦乙女のレナスがふり返ると、肩から三つ編みにした長い銀髪が動きに合わせて波打った。蒼穹の鎧に、金の刺繍の入った白いスカート。凜としたレナスの青い瞳がラウリイを見据える。

戦乙女は、相変わらず勇者の魂エインフェリアたちとは一線を画すような、ぶっきらぼうな口調で言った。

「お前が気にすることではない。叶えられない望みであれば、私にここに來ることもない」

「……あ、すみません」

思わず謝る。別にレナスの口調は厳しくなかった。それでもラウリイがレナスの時間を奪うことをためらったのには、理由がある。

レナスが人間の魂と共存する存在であるように、勇者の魂エインフェリアとなったラウリイは、レナスが今、どのような立場に置かれているのか断片的に知っていた。

レナス、もう少し頑張ってもらわないと困るわね。

そう切り出した長い金髪の女神・フレイは、ガラス玉のように澄んだ青い瞳をわずかに細めた。口調自体は穏やかだが、陶器のような白い肌と滑らかな頬の稜線が、声の冷たさに比例して、およそ人間とは別次元の美しさを強調しているように見える。緻密な彫刻のように整った面立ちには、表情がなかった。

水鏡の向こうで 神界にいる女神は静かに告げる。

貴女に与えられた時間は、無限ではないと言ったはずよ。

感情を乗せない声音だったが、ラウリイにはレナスが突き離されたようにも見えた。彼はアリューゼやジェラードに比べれば、新参の勇者の魂エインフェリアだ。だが、レナスに仕えるようになってからこちら。レナスは一人も勇者の魂エインフェリアを神界に送っ

ていない。

第二級神フレイの物言いを聞いてみると、それはレナスが目覚めてからずっと続いているようだった。

(でも ……)

その理由は、ラウリイもレナスと共に生きて、良く分かっている。レナスがいくら精神集中をして勇者の魂エインフェリアを迎えに行っても、行く先々である剛刀を持った青年に出会い、運命を変えられてしまう。それゆえに、上位神から時間がないという忠告を、彼女が受けるハメになるのだ。

ラウリイは申し訳なく思った。

(僕は、悲しみに縛られているミアに前を向いてもらいたくて、彼女に別れを告げた……。でも、僕が彼女に別れを告げられたのは……。ヴァルキリー様が僕を後押ししてくれたからだ……)

それなのに、自分は

思考が回帰してしまう。自分もつとつかりアレンを食い止められれば、レナスは少なくとも、あの上位女神に怒られずに済むだろう。人間の感情としては、やはり勇者の魂エインフェリアが増えないことを望んでしまうのだが。

そんな想いを抱えるラウリイに、吉報が入ったのは少し前だ。

第二級神・フレイが、神界戦争において“弓兵”が足りないと言ってきた。

ラウリイは、いの一番にレナスに名乗り出た。

「ヴァルキリー様……！ ああ、……僕でよければ……神界に、送って頂けませんか……？」

複雑な感情に揺れ動くラウリイの心を、レナスは正確に見抜いたのだろう。それを聞いたときのレナスの顔が、今でも思い出される。最初は驚いて　そのあとすぐに、険しい表情になった彼女の顔を
ラウリイは、せめてアレンの足止め出来ないのであれば、神界で役に立とうと考えたのだ。自分が神界でがんばれば、地上ミッドガルドに住む者が死なずとも、神界の状況は少しは良くなる。　そう、考えて。

(……もつとも……僕なんかどこまで役に立てるのは、分らないけど……)

しかし、ジエラードは魔法使いで、アリュージェは剣士だ。だから、“弓兵”と聞いたときに、神界に向かうのは自分だと確信した。　それが、少し前のこと。

レナスが無言のまま、クレルモンフェランに降り立った。街の外れにある　ミリアとよく話し込んだ森へ、ラウリイは足を急がせた。
生きている者には見えないよう、霊体で。

ざざあ……ん……、

風に木々が揺れる。

ミリアは、この音が好きだった。　まるで葉音がさざ波のようだと。そう言って良く笑っていた。森の音。

生きていたころのように、ラウリイは森に向かう。いつも彼女と

待ち合わせた場所に。

巨木の前に、人がちょうど腰掛けられるほどの大きさの岩がある。この場所は、自分が出兵したころとまるで変わらない。ミアリアに、戦場に行つてくると告げたあのころと。

「……………」

ラウリイは岩に腰かけた。霊体になった自分が、風を感じることはないけれど。

ぞあ……………ん……………

葉音を聞いているだけで、あのころに戻れたような気がした。

(良かった……………)

自分が死ぬ前、帰りを待っていてくれた婚約者ミアリアは、ラウリイが死んだあと、この場所から動けなくなっていた。大好きな森の音を聞いて悲鳴を上げ、それが、さざ波のような音だからこそ耳をふさいで泣いていた。

自分が、海で溺れて死んでしまったがために。

ミアリアは、ラウリイの死を受け入れられなかった。ゆえに、いくら森の音を嫌つても、彼女は森に来てしまう。ここは、良く二人きりで話した場所だから。

人の死は、残された者にとって、その絆が強ければ強いほど、残された者が、弱ければ弱いほど、痛いほどに、心を縛り付けるもの。

戦乙女は、泣いているミアリアを見てラウリイにそう告げた。あのときを思い出すと、今でも涙がこみ上げそうになる。帰ると誓って、ミアリアの下に戻れなかった自分が、情けなくて。哀しくて。

わからないのか？ 彼女の思いが、時が止まっているのが。

お前が、彼女を殺しているのも同然だということが。

ミアリアが森から逃れられないのは、ラウリイを忘れられないから。そう戦乙女から聞いて、ラウリイはミアリアに別れを告げた。彼女がこれから、前を向いて生きていけるように。

だから この森にこうしてやってきて、彼女がまだここに座り込んでいないか、ラウリイは心配だった。あんなに泣き腫らした彼女を見たのは初めてだったから、どうしても脳裡をちらついたのだ。

(でも ……、ちゃんと……ミアリアの心は晴れたんだ)

葉音に耳を傾けながら、ラウリイは、ふう、と息を吐く。これがさざ波の音だとすれば、海難で死んだラウリイにはトラウマの音だ。それでも、ラウリイは心地良く感じていた。

(ミアリア……)

と。

不意に、一枚の白い羽根が、ラウリイの頭に舞い落ちた。クレルモンフェランを象徴する、白鳩の羽根だ。

「ん？」

首を傾げる。と、霊体だった彼の身体が

マテリアライズ
実体化された。

「え……！？」

驚いてラウリイは顔を上げる。その先に、無表情ながらも慈愛の瞳を向けるレナスがいた。

「ヴァルキリー様……」

ラウリイがミアアの無事を案ずる反面、少しだけ　そう、本当に少しだけ寂しさを感じたのを読み取ったのかも知れない。

レナスの視線が、しかし、ラウリイではなく、ラウリイの後ろにある巨木に向いているのを見て、ラウリイはぱちりと瞬いた。自分が腰掛けている巨岩　その、後ろにある木の根を見やる。

そこに、戦乙女をあしらったペンダントが置かれていた。

「……これはっ！」

ラウリイは息を呑む。ミアアを慰め、別れを告げたときには置かれていなかった物だ。ペンダントを手に取ると、レナスは優しい瞳のまま言った。

「お前の無事を祈って、彼女がずっと握りしめていたペンダントだ」

「っ！」

そんなことも分かってしまったのか、と言いたかったが　言葉よりも先に、喉に引っかかった熱がラウリイの声を奪った。ラウリイはペンダントを握り締める。

「……ありがとうございます、ヴァルキリー様……」

「……………」

レナスはなにも、言葉を返さない。代わりにじっと、ラウリイを見つめて

「お前は、それを神界に持って行け」

静かに、穏やかに、彼女は言った。ラウリイが顔を上げる。

「いいんですか……？ 地上にある物を、勝手に持ち出したりなんかして……」

「これからお前の先に待ち受けているのは、神界戦争という過酷な状況だ。そこでの魂の乱れは、お前の消滅を招きかねない」

ぼう、とレナスの胸許が光り、そこから白い光球が二つ、迫り出した。アリュューゼとジェラードだ。

「ヴァ、ヴァルキリー……もう送ってしまうのか？」

不安そうにジェラードが問う。レナスは頷いた。

ラウリイは“戦士”として見れば、まだまだ未熟な部分が多い。だが、ジェラードたちにとって彼の優しさは、戦いが終わったあとの清涼剤になっていた。

別れを惜しむジェラードに、ラウリイは穏やかに微笑う。

「姫様、アリュューゼさん。今までお世話になりました」

話題をふられて、終始黙っていた長身巨躯の男・アリューゼはがしがしと黒い頭を掻く。虎のように鋭い黒瞳が、今は決まり悪そうに泳いでいる。アリューゼは溜息を吐くと、ラウリイに向き直った。

「まあ、テメエの実力ならやられることもねえだろ。……先に行つて待つてろ」

「！」

ラウリイは目を丸くした。アリューゼほどの傭兵に、自分の実力が認められるなど夢にも思わなかったからだ。

ラウリイは頬を緩め、小さく頷いた。

「ありがとうございます」

ジェラードが、ぎゅっ、とラウリイの手を握る。

「よいか！ 妾が行くまで、決してやられてはならぬぞ！！」

「はい……！！」

ジェラードにも頷き返し、ラウリイはレナスに向き直った。

「ヴァルキリー様、お願いします」

レナスは静かに頷いた。彼女の掌に集った光が、ラウリイを包む。マテリアライズ
実体化されたラウリイの魂が、ゆっくりと透け　光に馴染んでいく。彼が胸に抱く、戦乙女のペンダントと共に。

「行ってきます」

ラウリイは光に溶けて神界に向かう直前、レナスたちに向かって微笑った。

いつもびくびくと周りを窺っているばかりだったラウリイが。

穏やかに微笑って、神界に行く。 英雄など、自分には相応しくないと震えていた彼が。

レナスを始め、アリュウゼたちは天空の雲間にラウリイの魂が見えなくなるまで、ジツとその様子を見送り続けた。

1 初の任務（前書き）

この話は、ヴァルキリープロフィール成分を含んでいません。
ご注意ください。

1 初の任務

銀河の三分の一を掌握する一大勢力 『銀河連邦』。

比類なき科学と資金を用いて、巨大勢力へのし上がったこの組織は、銀河連邦軍と言う、絶大な武力を持っている。

宇宙空間を航行する戦闘艦技術は向上に向上を重ね、もはや戦争と言えば、惑星を消滅させるエネルギーを有する『クリエイション砲』を積んだ艦隊同士の争いを指すまでになった。

とはいえ、たとえ戦う場所が宇宙に移ろうと、争いを起こすのはやはり人類である。

スパイ活動は高度な電子化によって過熱を極め、数百億もの星々が一つの組織として成り立つ銀河連邦では、様々な人種による犯罪やテロ工作が後を絶たない。

地球人を始めとした人間型を遥かに超越する存在が、宇宙には跋扈している。

そんな時代にあっても、『地球人』の地位は銀河連邦内で盤石だった。

理由は、一つ。

地球人のみで結成した銀河連邦軍最強の部隊 特殊任務施行部隊。

通称、『特務』と呼ばれる者たちが、常に地球人の強さを他の人種に証明してきたためだ。

彼らは四百億人以上いる同胞の中から、二百人だけを抽出して結成した最強の特殊部隊。戦闘、諜報、後方支援 あらゆる面にお

いて、彼らは優れた技能を持つ。

特務は第一小隊から第四小隊まで成り、数字が若いほど、より優秀で制圧力の高い部隊として認知されていた。

幼いアレンが目指すのは、そんな気も遠くなるような倍率の一人八億分の一。

特殊任務施行部隊の、第一小隊に所属することだ。

それが、父との約束である。

今時珍しい板間が、二十畳ある。

有体に言えば、道場だ。

そこは アレンが一日の大半を過ごす場所だった。

宇宙暦七五二年。

アレン・ガード、十一歳。

百四十センチほどの身長の際は、真剣を握りしめていた。
凜とした蒼瞳は鋭く前を睨み、光る。

じり……、

アレンは刀を下段に構えたまま、左に一步、摺足で動いた。

……じり、

父も半歩、動く。

互いに真剣を持って、二人は間合いを　飛び込むタイミングを、
気配を読み合う。

じり、じり……

円弧を描いて移動したアレンは、刀を下段から正眼に構える。父
は下段のまま、微動だにしない。

道場に射し込む光は少なく、早朝の爽やかな風が、二人の素足を
撫でる。冬に差しかかろうとしているこの時期の風は、　冷たい。

父は泰然と立っている。

アレンと同じ　濃い蒼の瞳だ。男らしく引き締まった顔立ちで、
母親似のアレンとは少し、毛色の違う顔。

だが、

この父　リード・ガードとアレンは、目がよく似ていた。

色白だったリードの肌は、紫外線の影響で黒ずんでいる。年齢は
三十三歳。いかにも軍人らしい厳格な男で、長身で筋肉質な体を黒
ずくめのトレーニングウェアで覆っている。

父から発せられる鋭い気迫を、アレンも気迫で押し返しながら止
まる。

ぴたりと、間合い二メートル。

瞬間。

父が駆った。

ドンッ……!

活人剣で強化された身体能力で 父は、重い踏み込み音を立てる。

アレンはカッと目を見開き、刀をふり上げた。父の初動は

（疾風突き！）

アレンの予測通り、父の真剣がアレンの顔、真横を過ぎる。風を巻いた鋭い突き。アレンは軽く首を傾げて躲しながら、父の首目掛けて刀をふり下ろす。

父は素早く反転し、アレンの切っ先に己が真剣を叩きつけた。下段からのふり上げ。両者、剣戟音を立てて正面からぶつかり合う。

鏢迫り合い。

力は 父が上。

「おおっ！！」

鋭く吼えたアレンは、刃の向きを変え、半ば体当たりするようにして、鏢迫り合いを解く。

瞬間。

両者の刀に、蒼白の気が宿った。

「吼竜破！！」

同時、親子は刀をふり下ろす。

薄暗い道場が光に包まれ、アレンと父の気龍が中央でぶつかり合った。

風が巻き起こる。

二メートル近い龍の顔は鋭く牙を剥き、互いに吼え合いながら激突する。

練気は 五分。

それを確認する前に、親子は同時に駆けていた。気龍が散り、光が晴れると共に互いの剣を薙ぐ。

剣舞『鏡面刹』。

横薙ぎから始まる五連斬を、両者、真っ向から打ち合う。 剣

速も、五分。

「っ！」

腕力に劣るアレンが、後ろに退けられる。

同時。

踏み込んでくる父に向け、アレンは抜刀術で応えた。

父は上段からのふり下ろし。アレンは抜刀術。

……インッ！

緊張が場を満たし、剣戟の音が止む。静寂は痛いほどピリピリと肌突き刺さり、両者、相手の首許に刀の切っ先を突きつけていた。

「……………」

どちらも互いを睨み、怯まない。

そして

ゆっくりと刃を退けた二人は、刀を納める。眼光は立ち合いが終わったと言うのにまだ鋭く、敵の動向を探っている。

そんな息子を見据え、リードは満足げに鼻を鳴らした。

稽古後、アレンが几帳面に一礼をして、踵を返す。リードは若輩

ながらも銀河連邦の一翼を担う軍人だ。ガード家はまだ小さな家系に過ぎないが、リードは頭の切れる男として政治家からの覚えがいい。それゆえ、父がガード本家にいる時間は少なく、アレンもそのことを承知している。

リードはふと、道場を去ろうとする我が子呼び止めた。

「アレンよ、お前に話がある」

そう言うと、アレンは足を止め、ふり返った。

妻によく似た顔の息子は、その蒼瞳だけが生意気にこちらを見据えている。この反骨心の強さが、息子の才能をのし上げる一番の理由だった。

アレンには五歳のときから、成人用の真剣を持って戦うよう徹底して教育している。

銀河連邦最強は、『地球人』でなければならない。

そのために結成された特殊部隊に、いつか“ガード流”を使わせる。

それが、リードの最終的な野望だった。ガード流は、地球人の身体機能を極限まで高め、相手を確実に殺傷せしめる武術だ。

だが、まだ家が小さいために連邦軍の正式な格闘術には認定されていない。

軍人の地位を押し上げるためにも、リード率いるガード流は、銀河最強でなければならぬ。それを証明するために、彼は息子に、ありとあらゆる努力をさせているのだ。

アレンが初めて真剣を握ったとき、母と離別させたのもその一環。

強い眼差しを向けてくる息子に、リードは口端をつり上げて、言った。

「ついて参れ」

.....

惑星ストリーム。

朝の稽古を終えて、初めて父に与えられた任務は、謎多き無人惑星　その調査団の護衛だった。

アレンの他に、銀河連邦軍人　見た所、一般士官のようだが二人、派遣されている。どちらも人の良さそうな青年だった。

調査団のリーダーは、ロキシ・ラインゴッド。

まだ三十前後の若い学者だが、将来必ず紋章遺伝学の権威になると言われており、彼の出す論文は、その時々において、衆目を集める発見や、画期的な発明ばかりだ。

しかし、ロキシは、同じ筋の権威学者にも毅然とした態度を貫くことから、古い学者たちには忌み嫌われている。その勢力の嫌がらせとして、“変人”の名を欲しいままにしているが、本人は気にしていないようだった。

衆目を集める論文を書くゆえ、彼はテレビに出る機会も多く、端正な顔立ちと独特の言い回しが受けて、一般人からは歓迎されている。

ロキシの妻、リョウコ・ラインゴッドも優秀な学者だ。

この調査団の副リーダーに当たるリョウコは、ロキシとは違い、周りと調和して、うまく溶け込めるタイプの女性である。才色兼備と名高い彼女は、結婚を機に公の場を退いた。今は完全に夫をサポートする存在だ。

アレンの父、リード・ガードは人を褒めることを知らない男であったが、このラインゴッド夫妻については、“連邦になくてはならない存在”として、アレンになにがあっても二人を守るよう言いつけた。

アレンは父に与えられた無銘の刀を手に、砂塵多きこの無人惑星ストリームに降り立つ。

「話には聞いていたが、本当にまだ幼いものだね」

調査団リーダー、ロキシ・ラインゴッドに声をかけられ、アレンは几帳面に一礼した。

「この度はよろしくお願い致します、ロキシ・ラインゴッド博士」

丁寧に答えると、ロキシは目を丸めて、穏やかに笑った。

いつも通り、アレンの周りは大人ばかりだ。浮いているとまでは行かずとも、十人ばかりの調査団に混じる彼を、ロキシなりに気遣ってくれたようだ。その気配りに感謝しながら、アレンは調査団の後に続く。

荒野ばかりが広がるこの惑星は、それでも大気組成が地球と同じで、ガスマスクなどの特殊装備を要しない。

ただ、風が強い。

赤茶色の砂塵が舞い、二メートル先も見渡せないほどだ。

アレンは調査団が持ってきたテントと研究機材の塊を背負い、黙

々と歩く。

時間にして、小一時間ほど。

この惑星内で一番の調査対象たる『タイムゲート』が、目にとま
った。

タイムゲートは十五メートルほどの、白い石の様なもので出来た、
縦長い長方形の門だ。

門　　と言うより、鏡枠のようにシンプルで不思議な造形物。
それにアレンたちが近づくと、不意に地響きが起きた。

ゴゴゴゴゴ……！！

「な、なんだっ！？」

アレンは刀に手をかけ、構える。調査団の最前線に位置した彼を
止め、ロキシがにやりと口端を緩めた。

「心配することはない。これは通常動作だよ」

「通常動作……？」

首を傾げながら、アレンはタイムゲートを見る。ただの鏡枠に過
ぎなかったタイムゲートの石が、動いた。二重枠になっていた門が
回り、上辺の石を中心に交差する。

上空から見ると、『一』だったタイムゲートが、『X』状に開い
た形だ。

交差した石が、蒼い透明なスクリーンとなって像を映し出す。細
かな字が流れ、いくつもの小さな映像が、早送りするようにくるく

ると変わっていく。

「?????」

アレンはタイムゲートを見上げて、おお、と声を上げた。

良く分からないが、凄い。

それが素直な感想だ。

タイムゲートの調査は三カ月を予定しており、一同はタイムゲートの作動を確認するや、先に寝床の確保　　テントを張る作業に取り掛かった。

テントを張り終わったあとは、博士たちの調査を遠目から見守るばかりの作業が続いた。

十日間。

特に目立った発見もなく、淡々と時間だけが過ぎて行く。それでもロキシたちに見れば、未知との対面は心躍るものがあるらしい。

「ごめんなさい。ちょっとこの機材、持ってもらえるかしら?」

体が鈍らないように、アレンがトレーニングをしていると、リョウコに呼び止められた。

アレンはテキパキと動き、彼女に言われた通り、機材を持って立ち止る。アレン以外の護衛役　　連邦軍人も、別の場所と同じように機材持ちとして使われているようだ。

護衛任務と言う大層な名目を付けられたが、その実、雑用がメインだった。

アレンは小さく息を吐く。

緊張が、徐々に解れた。

「……？」

と。

そこで彼は、タイムゲートの巨大スクリーンが明滅しているのを見た。いつもなんの変化もなく　蒼い透明なスクリーンを映し出すに過ぎなかった額縁が。

「リョウコ博士、あれは」

なんの変化ですか？

と、アレンが問おうとしたそのとき。

タイムゲートは眩い光を放ち、
そして

……
……

2 双子との出会い

最初に飛び込んできたのは、パシャンツという水音と、青空に浮かぶ太陽。そして自分の服と手を濡らす　流水の感触だ。

「っ！」

頭に降りかかる水飛沫を、アレンは頭をふって払い落す。

と。

目の前に少年がいた。右目が金、左目が蒼銀の不揃いな瞳を持つ少年。彼の艶やかな黒髪は陽光を浴びて美しく輝き、蒼銀の瞳を隠すように、長い前髪が左にかかっている。

彼は、“人”と称するにはあまりに美しく　精緻な彫刻のように無表情な少年だった。

年齢は自分と同じ、十一歳くらい。

彼の後ろに、彼と同じ顔の少女が立っていた。

双子だ。

少女の方は、肩にかかる黒髪の長さだった。

「あ、あの……！」

アレンが口を開くと、少女は後ろをふり仰いだ。

「人が落ちてきたぞー！！！」

「え……？」

建物に向かって、大声で叫ぶ少女。

ものの数秒で、わらわらと同世代の少年が現れた。どうやら“かくれんぼ”の最中だったようだ。

「え？」

「なにになに？」

「どーした？ シーティアちゃん」

好奇に目を丸めながら少年たちが寄ってくる。アレンが視線を横にふると、自分が噴水に座り込んでいるのだと分かった。

（ああ、それで）

ずぶ濡れになった自分自身を見下ろして、アレンは納得する。

視線を 双子に向けた。

「あの、ここは……」

「ここはローランディア王都、ローザリア。広場の噴水だ。……それで、アンタはどこから落ちてきた？」

「……ロー、ザリア……？」

要領を得ず、瞬く。

ここが町であることは、景色を見ればわかる。だが、聞いたことのない町の名前に、アレンは戸惑った。

美貌の少年は相変わらずの無表情で、淡々と続ける。

「三国大陸の北西に位置する国だ。名前くらい、聞いたことある？」

少年の口ぶりから、この“ローランディア”という国はそれなりに知名度の高い場所なのだろう。アレンは首を傾げながらも噴水の縁に手をかけ、水場から外に出た。

「あ……、」

その際、少年が手を差し伸べていたことに気付く。行き違いになった行為と厚意に、アレンは思わず固まった。

「気にするな」

少年はアレンの機微を感じ取ったのか、手を引っ込めてそう言った。アレンは頭を下げる。

「すまない」

「なぜ謝る？ ……変わってるな、アンタ」

自分と同じ年嵩の少年に言われ、アレンはそうなのか？ と首を傾げた。

「おい！ そのお前。いつまで私の弟と話しているつもりだ。弟から離れる。それは私の所有物だ」

服の水気を切っていると、双子の少女に怒られた。

途端。

表情を見せなかった少年が、ムツと明らかに不機嫌になる。少年

は姉を睨んだ。

「いつ、俺がお前の持ち物になった？」

アレンに話しかけるときは違う。低い声だ。

少女はふふん、と鼻を鳴らして腕を組んだ。

双子が睨み合う。

アレンはその間に、町を観察した。

町は白い石畳を敷いており、木や石を使った家屋がほとんどだった。町の雰囲気はおっとりとしていて、家々の色調には繊細な美しさがある。一番彼が不思議に思ったのは、地面から浮かぶようにして、まるでシャボン玉が空に吸い込まれて行くように飛んで行く、光の塊だ。ちょうど人の拳一つ分の大きさ。

光の球に触れてみると、“紋章力”を感じた。まだどの属性にもなっていない、紋章力の原石。とても言うべきなのか。

ともかく見知らぬ場所であることに変わりない。アレンはそう結論付けて、踵を返した。

長居無用だ。

「すまない。俺はこの辺で失礼する」

言っと、じろりと少女が腕を組んだまま、アレンを睨んできた。

「怪しい奴だな。この辺の服も着ていないし」

「ということ、アンタはこの国の外からやってきた旅人か？ その年で？ 家族はどうしてるんだ？」

美貌の少年は、わずかに目を丸めて尋ねてくる。表情はないが、心配しているようだ。彼の問いは的確で、アレンの事情を要点で捉えようとしているのが窺えた。

「……すまない。突然のことで、俺もよくわからないんだ……」

「家族とはぐれたのか？」

「かも知れない」

「特徴は？ ローザリア王都内なら、数刻もあればアンタみたいな服装の奴を見つけられるが」

問う少年に、アレンは首を横にふった。

出来るだけ、町の住人と関わらない。この信条は、彼が銀河連邦軍に属する人間であったからだ。

未開惑星保護条約 一定の文明水準レベルに達していない惑星住人と接触するのは、銀河連邦法で堅く禁止されている。この条約を破れば、たとえどんな身分の者でも罰せられることになっている。

つまり、罰せられれば、『一人前の軍人 特務第一小隊の隊員になる』という父との約束が遠退くのだ。
母に会うためにも、アレンは妙な所で躓つまくわけにいかない。

「ありがとう。しかし、自分で探すから心配いらない」

少年の親切に感謝して一礼すると、反対側から少女が、ふん、と鼻を鳴らした。

「ほう？ お前、本当に家族とはぐれたのか？ 怪しい奴だ……、お前ら！ とつちめてやれ！！」

「「「ういゝ！！」「」」

少女を取り巻く少年たちが、嬉しそうに声を揃えた。美貌の少年が、あからさまに眉間にしわを寄せる。

「いくらなんでも一人相手に数人がかりつてのは、卑怯だろ」

「うるせえ！ シーティアちゃんに逆らうなっ！！」

取り巻きの一人が美貌の少年に殴りかかる。少女は目を丸くした。

「コラッ！ 私が殴れと言ったのは、そいつじゃない！！」

叫ぶ。が、彼女が心配するまでもなく、美貌の少年はあっさりと取り巻き少年の拳を止めていた。拳をふるった少年を見つめ、彼は声を落とす。

「人に向かってあっさりと拳をふり回す奴は、感心しないぞ」

彼はそう言って、取り巻き少年の手を離すと、アレンに向き直った。

「行こう。アンタの人探し、付き合っぜ。 シーティアの子分といるよりマシだ」

噴水広場には多くの子供がいたが、彼とウマの合う者はいないら

しい。

一片の未練も感じさせずに言う少年に、アレンはふるふると首を横にふった。彼の事情は分かったが、アレンとて引き下がるわけにはいかない。

「君の親切はありがたいが、しばらく一人で探してみるよ」

「生憎だがこの街は入り組んでいて、初めての人間ではすぐに迷ってしまう。　　と言うか、アンタ本当に家族とはぐれたのか？　そこまで頑かたくなに拒絶するとは」

わずかに目を細めて、様子を窺ってくる彼に、アレンは思わず苦笑した。

双子の姉　　シーティアも、疑わしげにアレンを見る。

「本当に怪しい奴だな。剣を持っていることだし」

言われて、アレンはハツと腰に差している刀に触れた。　　確かに。町中で、子供が持つものではない。

アレンほどの、特殊な家の事情でもない限り。表情を凍らせたアレンの反応を見て気を良くしたシーティアは、整った朱唇をニツとつり上げた。

「……面白い」

「今度はなにを考えた？」

姉を睨んで、少年　　カーマイン・フォルスマイヤーは眉をひそめる。

シーティアはにんまりと笑った。

「おい、その怪しい奴」

「……随分な言い草だな」

キョトンとするアレンに代わり、カーマインが横から言う。

「気にしないでくれ。口と性格が悪いんだ」

「……」

姉をそう断言するカーマインを、アレンは首を傾げながら見て、瞬いた。そんな二人の様子が仲良さそうに見えて、シーティアの瞋がっつきあがる。

「そいつは、私のだ。勝手に近づくなと言ったぞ」

「だから、いつ、俺がアンタのモノになった？」

一つ一つ、区切って聞くカーマインだが、シーティアは聞いていない。静かに、自分の右手に嵌められた黄金の指輪を握りしめる。黄金の粒子となり、シーティアの指輪は一振りの刀へと変化した。

「……!?!」

アレンの表情に緊張が走る。

(物質変化だと?)

子どもが持つにしては、高価そうな金色の指輪。それが光と成っ

て刀に変化した。普通の刀よりも柄が長いそれを、シーティアは慣れた動きで腰の剣帯に通す。

と、

刃を鞘から抜き放った。

「どういつつもりだ？」

刀の切っ先を見据えながら、アレンは冷静に問う。

シーティアの動きに無駄はない。

(どこかで、訓練を受けている)

警戒の色が、アレンの瞳に宿った。

シーティアはニヤリと強気に笑う。顎でアレンが腰に差した刀業物でもなんでもない無銘の刀を示す。

「そんなおかしな作りの刀を持っているんだ。結構やれるんだろう？」

「悪いが、俺の剣は見世物じゃない」

「聞こえないな。構えろ」

強引なシーティアに、アレンはわずかに目を細めた。風の流れ、気の流れが、彼女の臨戦態勢を物語っている。

白昼の街中で、剣を抜いてはならない。

そう厳しく教えられているアレンだが、この洗練された動きをする少女を相手に、果たして素手で生き残れるかと問われれば、答えられない。

アレンはまだ、シーティアの実力の底を計れずにいる
アレンはゆっくりと息を吐き、刀を構えた。

(……少なくとも、ガード流は秘密にしておいた方がいいな。未開惑星のようだし。彼女の気が済むようにしよう)

剣を抜けば、アレンもそれなりに腕に自信がある。それゆえ、そんなことを考えていたアレンにシーティアが、肉食獣のような目で言い放った。

「加減は　しない！　いくぞ!!」

「!!」

アレンの瞳に映ったのは、とんでもない斬戟の網だった。

(結構、速い……っ！)

息を飲みながら、アレンは刀をふるう。鋭い斬戟音に散る火花。

(　なに!?!　今のを防いだ!?!)

シーティアも瞳を見開いて驚愕した。城の正規兵としてシーティアの剣を止められる者はいない。それをアレンは止める。一撃でなく連撃。合間にカウンターのような斬撃まで挟んでくる。

この事実、シーティアを初め、取り巻きの少年たちが歓声を上げた。

「すげえ……!!」

「シーティアちゃんの剣を……!!」

だがそんな遠巻きの声など、アレンの耳には入らない。静かに、彼は意識を集中する。

シーティアがにやりと笑った。

「面白い。父様以外に、私の剣を防げる奴がいるとはな」

「少しは、本気を出さないとダメってことか……!!」

互いに相手を認め合い、刀を正面に据える。両者、同時に駆ける。中央で激突。互いの攻撃を紙一重のところであらき、見切りながら一撃を繰り出し合う。

一際甲高い金属音が成り、広場の中央で二人の動きが止まった。鏝迫り合い。

腕力で、男のアレンが押し勝てない。

はらり……、

シーティアの肩まで流れる美しい髪が、一、三、散った。シーティアが朱唇を割る。

「やるじゃないか、お前」

「君も、な」

「だが、次で決める!!」

シーティアは刀を寝かせ、下段に構える。対するアレンは刀を正面に据えたままだ。

次の瞬間、

刀を繰り出そうとするシーティアに

「いい加減にしないで！ シーティア！！」

「ゲツ」

鋭い女性の声が広間に響き渡った。びっくりと肩を震わせたシーティアが、罰が悪そうに顔を歪めて、ゆっくりと後ろをふり返る。

アレンも刀の構えを解かぬままに声主を見ると、藍色の髪をポニテールにした、三十前後の落ち着いた女性が立っていた。女性は、まだ八歳くらいの小さな女の子の手を握っている。

「……………母さん」

シーティアは、ぐう、と唸りながら女性をそう呼んだ。

「まったく。街中で、堂々と大立ち周りをするなんて！ それも真剣で！！」

「あ、あの ……これは……………」

なんとか言い訳を試みるシーティアだが、彼女の取り巻きの少年たちは

「それじゃ！ さよなら、シーティアちゃん！！」

「またね〜！！」

さっさとその場から居なくなってしまった。

「お、おい……！ ちょっと」

「 自業自得だな」

寂しそうな姉に、冷静な弟の言葉が突き刺さった。

くっそ〜と唸りながらしょぼくれるシーティアを、彼女の母

サンドラは一喝し、それからアレンをふり返る。切れ長のサンドラの目は温かみがあり、アレンが見慣れている父の蒼とは、まったく雰囲気が違っていた。

「ごめんなさいね。お詫びと言ってはなんだけれど、服を直させてちょうだい」

「……………」

「大丈夫？ もしかして、怪我でも？」

心配そうに覗きこんでくるサンドラと目が合い、アレンはハッと我に返った。なんでもない、と首をふる一方で、自分の袖を見る。

（気付かなかった……）

一センチほどの切れ口を握りながら、アレンはうすら寒いものを覚える。サンドラを見上げた。

「お気持ちはありがたいのですが」

「子どもが遠慮することはありません。 さあ」

「え？ あの、……！」

笑顔のサンドラに手を引かれながら、アレンは戸惑いながらも王都ローランディアの広間から去って行く。

それを尻目に、シーティアは自分一人だけ怒られたことに頬を膨らませながら、刀を指輪に戻す。

「あいつ……」

「ん？ どうした、カーマイン」

普段はあまり口を開かない弟が、珍しく力のこもった声でつぶやいた。

「あいつ、凄いな……！！！」

「んなつ！？」

そう言ってカーマインは柄にもなく拳を握る。

瞳をキラキラと輝かせている弟に、シーティアはこれ以上ないほど目を見開き、口を台形に歪めた。

……

……

広場から、アレンはサンドラに連れられて大きなお屋敷に入った。洋館とは少し違う、楕円をいくつも重ねたような独特の造形をし

た屋敷だ。のっぺりとした薄桜色の壁に、鋭角の黄色みの強い赤褐色の屋根。

壁と屋根の色は、街全体で統一しているのか、どの家も同じである。

ただ、アレンが連れてこられた屋敷　フォルスマイヤー邸は、他の家々よりも一回り大きかった。

王城のすぐ目の前、という立地も印象的だ。

「君の家は、貴族かなにかなのか……？」

リビングに通され、シーティアに袖口を切られた上着をサンドラに預けたあと、アレンは思わずカーマインに問いかけた。

カーマインはアレンをふり返り、答える。

「違う。母さんが宮廷魔術師をやってるだけだ」

「宮廷魔術師……！」

アレンは上着を持って部屋に引っ込んで行ったサンドラの方を見据え、思わず息を飲んだ。

夕食。

いつもはレプリケーターで簡素な食事を摂っている。だが、このときばかりは違った。

この場所には、レプリケーターもなにもない。

袖口を修繕してくれたサンドラに礼を言ったあと、アレンは彼女の計らいで食事を一緒に摂ることとなった。

パンと具だくさんシチュー、それとローストビーフに似た大ぶりの肉料理、色彩豊かなサラダ……。

食卓に所狭しと並んだ料理を見て驚いているのはアレンだけだ。カーマインとシーティアはこれが普通とばかりに慣れた様子で、小皿にローストビーフやらサラダを取り分けている。

といっても、シーティアが8割、カーマインが2割といったところか。

大喰らいのシーティアに比べ、カーマインの食は普通だった。

アレンは自分の前に置かれたシチューに目を落とし、それを一つ掬って、口に運ぶ。

じわりと、体の奥に温もりが沈み込む様な感覚がした。

「……………」

アレンは思わず口端を緩める。少しだけ、寂しそうに。

「とても、温かい。懐かしい味がします。シチューが懐かしいというわけではないのですが」

「お前の家は、どれだけ貧乏なんだ？」

料理の感想を言うと、シーティアに呆れたように返され、アレンは思わず苦笑した。

「そういう意味で言ったんじゃねえと思うけどな」

カーマインは澄まし顔でシチューを口に運びながらぼつりと言つ。シーティアは首を傾げ、眉をひそめた。

「ん？ どういう意味だ？」

大きな瞳を瞬く少女に、アレンは首を横にふる。

「大したことじゃない。気にしないでくれ」

「……………そうだな。人の秘密を詮索するほど、下衆な趣味はない」

カーマインは一瞬だけシチューを飲む手を止め、そう言ってまた、スプーンに口を付ける。

その達観したようなカーマインの所作に、アレンは思わず苦笑した。

(ずいぶん、難しい言葉を使う子だな)

“詮索”や“下衆”など、アレンにはまだ、耳慣れていない言葉だ。

カーマインを見てアレンが瞬いていると、スプーンを置いたシートィアが、ふん、とあからさまに鼻を鳴らした。

彼女は不機嫌な顔でカーマインを見据え、半眼になって言う。

「そんなんだから、お前は友達が居ないんだ」

「……………」

どうやらカーマインが難しい言葉を使うのは、一度や二度ではならしい。

双子のやり取りを見ながら、アレンは心の中で頷いた。

「それぐらいにしておきなさい」

サンドラの声がぴしゃりと響き、カーマインとシーティアの動きが止まる。しかし、ふん、と同時にそっぽを向いた双子は、鬱憤を晴らすように食事を再開し始めた。

宮廷魔術師の子どもにしては、ずいぶん伸び伸びとした双子である。二人は作法を気にせず、自分が食べたいように夕食を食べている。

それは座る姿勢からスプーンの角度まで、念入りに教育されているアレンからすれば、少し珍しい光景だ。

「アレン君、だったわね。ちゃんと帰る宛はあるの？」

サンドラに問われ、アレンは顔を上げる。少しだけ、視線を下げた。

「今はまだ……。しかし、必ず探し出します。お気遣いありがとうございます」

カーマインたちからどれくらい事情を聞いたのか知らないが、アレンに言えることは、この街の中には、父や調査団の学者たちがいないだろうことだった。

もしかしたら、ロキシたちならば居るかもしれないが。

(……だが、ここは俺だけの被害じゃないとガード家に響く……)

アレンはスプーンを握る手に力を込めた。

失敗は、目標を着実に遠ざけてしまっただけだ。それが　一番怖い。

考え込んでいると、カーマインが言った。

「母さん、こいつが帰る手段を見つけるまで、俺の部屋に泊めてはいけないか？」

「……………え？」

アレンは瞬く。夕飯を呼ばれたのはサンドラに強く勧められたからだ。

伝手のないアレンは思わずその言葉に甘えてしまったが、これ以上の負担は出来ればかけたくない。

そう思ってサンドラを見ると、サンドラは穏やかな笑みを浮かべて、アレンを見つめ返した。

「いいでしょう」

「あの……………」

アレンはおろおろと視線を揺らす。なにをどう言えばいいのか分からない。

帰る方法が分からないのも不安だが、それ以上に未開惑星保護条約が怖くて、街に居たくない。

けれど

このシチューが温かいのも、アレンにとっては事実だった。

「……………」

俯いて、拳を握る。

アレンの沈黙を肯定と取ったのだろう。

サンドラは穏やかに笑って、頷いた。

「アレン君、よければカーマインに外の世界のことを教えてくれな
いかしら？ ワケあって、シーティアとカーマインはこの王都から
出られないの」

「……………王都から？」

葛藤を一度脇に置いて、アレンは顔を上げる。

シーティアがもぐもぐとパンを咀嚼しながら答えた。

「ま、事情があつてな。お前の事情を聞かない代わりに、こっちも
事情を説明してやる義理はないな」

「別に大したことじゃないけどな」

カーマインが肩をすくめて続ける。その双子を見てサンドラが苦
笑したのと、サンドラの隣に座っている八歳くらいの女の子。カ
ーマインたちの妹が、不安そうに母の袖を引っ張ったのを見て、ア
レンは視線を下げた。

「……………そうか。すまない」

「なぜ謝る？ むしろ、無礼な言い方をしたのはこっちだぞ？」

カーマインは不思議そうに首を傾げた。

アレンは答えない。

「……………」

沈黙していると、カーマインの隣にいるシーティアが、半眼で弟を睨んだ。

「なんだか知らんが、ずいぶんと気に入ったようだな？」

「ああ」

カーマインはアレンを見て頷き、ふと瞳をキラキラと輝かせた。

「カッコ良かったからな！」

「！」

アレンは思わず瞬いた。そんな風に自分の剣術を褒められたことは一度もない。どう反応すればいいのか分からず、言葉を探していると、カーマインは更に嬉しそうに言った。

「シーティア相手に、勝つなんて！！」

無表情だったカーマインの顔が、嬉しそうに輝いている。大きな瞳を瞬く彼に、アレンは苦笑しながら首を横にふった。

「いや、あの勝負は引き分けだった」

鏝迫り合いの段階で、シーティアの髪を二、三本さらったのはアレンだ。

だがシーティアは、いつの間にかアレンの袖口を切っていた。一センチほど。

シーティアが胸を張る。

「違うな。私が勝ったんだ！」

「おい、ちょっと待て。それは言い過ぎじゃないか？」

いくら袖口を切られたとはいえ、一応こちらは髪を切っているというよりは、有効打をどちらも決められていないのだ。アレンは眉を寄せた。シーティアが首をふり、言う。

「なにを言う！ 私が勝ったんだ！」

「違う、引き分けだ」

「違う、アレンの勝ちだ」

向かいに座るカーマインとシーティアの妹が、きよとんと瞬いている。末の妹はサンドラを見上げる。すると、いつもは穏やかな笑みを浮かべている母も、このときばかりは困った顔をしていた。

三人の年相応な主張合戦は、これより数刻、続くことになる……。

結局、カーマインの部屋に泊めてもらったアレンは、帰る方法を探すにもなにをすべきか考えあぐねていた。

自分が最初にいた、噴水広場に行ってみる。
規則的に揺れる水面を、じっと覗いた。
当然のことながら、変化はない。

「なあ、アレン」

「ん？」

背中から声をかけられ、アレンがふり返ると、そこにカーマインが居た。この国では木刀の代わりに青銅で出来た剣が練習用として使われている。カーマインはそれを、左手に握っていた。

「俺も、剣ならちょっとだけ使えるんだ。ちょっと見てくれ」

そう言われて、アレンはこの場で腕前を見せてもらおうのかと思いきや、カーマインに連れられて別の場所に移動した。

母の言いつけをきちんと守っているらしく、カーマインは街の外には出ない。

代わりに、街の南西にある巨大なマンホールに彼は潜り込むと、そこから下水道を通って、しばらく歩いたあとに地上に出た。

「どうしてこんな所、通ろうと思ったんだ」

苦笑するアレンをそのままに、カーマインが地上に出るためのマンホールを開けると、太陽の光が目蓋を焼いた。アレンは数秒目を細めて、改めて周りを見る。

空き地が広がっていた。

フェンスで柵をした、小さな空き地だ。この下水道を通って、マンホールから出てこない限り、絶対に子どもは近づけない、そんな隠れた小さな場所。

カーマインはアレンをふり返り、微笑った。

「俺の秘密の場所なんだ」

誇らしげに言う彼に、アレンも思わず笑った。大人びた静かな子だと思っていたが、こういう行動的な面もあるらしい。

カーマインは改めて青銅剣を握ると、言った。

「それじゃあ、ちょっと見てくれ」

「ああ」

アレンはクスクスと湧き出る笑いを抑えると、一つ頷いて、空気を囲むフェンスの傍に腰かけた。

カーマインは青銅剣を正面に据え、静かに一閃。途端、アレンの瞳が見開かれる。

「……っ！」

空間が、ハッキリと斬られたと分かるほどの斬戟。しっかりと体重移動した一閃。

カーマインはそのまま、剣を二閃、三閃し、高速で移動。高く跳躍し、剣をふり下ろし 岩の眼前で寸止める。

見事の一言である。

息を飲むアレンを置いて、カーマインは剣を納める。

「どついう風にすればいいと思う？ これじゃ、シーティアに勝てないんだ」

「……誰から教わったんだ？」

アレンは驚きをとまかく脇に置いて、尋ねた。

カーマインが不思議そうに首を捻る。

「見様見真似なんだ」

「……………我流、……………だと？」

ずん、と沈み込む様な痛みが、アレンの胸にのしかかった。聞いてはならないことを聞いてしまった。そんな感覚に、アレンは自分の手が震え始めるのを自覚する。

カーマインの見事な剣捌きは、すべて彼の才能。

それはアレンにしてみれば、まったく考えられないことだった。

「あいつ、私が剣術を教えてやると言うのに、全く聞かず！ そんな奴から学ぼうと言うのか！！」

シーティアはフェンス内にある空き地の木の上から、カーマインとアレンのやり取りを見下ろしていた。

弟は唯一人、自分だけが知っている秘密の場所だと思い込んでいるようだが、シーティアの溺愛ぶりからすれば、こんな秘密の場所を特定するなど容易いのである。

いつもここでのんびりしている弟を見る度、一体いつになったら自分を呼ぶのかとイライラしていた。

（それをまさか、あんな奴に先を越されるなんて　！）

シーティアは片手でクツキーをぼりぼりと頬張りながら、不機嫌に頬を膨らませた。

アレンがカーマインに教えたのは、ガード流ではなく、基本的な

体捌きだった。ガードの動きは特殊過ぎて、見る者が見ればすぐに分かる代物だ。

ゆえに、“自分が未開惑星に居た”という痕跡を残さないためにも、アレンはカーマインの自由な剣を極力生かせるよう体術を教えたのである。

次々と。

カーマインは一度言うだけでアレンの教えを吸収し、更に自分が動きやすいようにアレンジしてみせる。真新しいスポンジのような吸収力 というのが謙遜に聞こえるほど驚くべき早さだ。

まだ教えて半日も経たないのに、カーマインはアレンが使う体術の基礎を全て習得しつつある。

まさに剣を握るために生まれたような少年だった。恐らく、自分が六年かけて覚えたガード流を、真剣に教えたなら、カーマインは三日ほどで全て習得し切るだろう。

そう確信させるほどに、カーマインは優れた才能に満ち溢れていた。

アレンには、眩し過ぎるほどに。

「なあ、アレン。アレンは、なんのために強くなるんだ？ そんなに強いのに、まだ強くなろうとするなんてなんでだ？」

一日稽古してフォルスマイヤー邸に帰る道すがら、カーマインはふと、そんなことを尋ねてきた。

アレンは首を傾げる。カーマインの意図が読めなかったことと、自力でここまで強くなれた少年が、なにを思っているのか、アレンには分からなかったからだ。

なぜ、強くなるのか。

改めて自分に問いかけてみて、アレンは視線を下げる。腰に差し込んだ刀が、ずしりと重みを主張した。

「……父に認めてもらうためだ。そうしないと、母に会えない」

慎重に言葉を選びながらつぶやくと、今の状況が、鋭利な刃物のようにアレンの心を抉った。一日でも早く、母に会う。

それが、剣を取る道を選んだときに、母とかわした約束だ。

その約束を果たす自信が、この訳のわからない場所にきて大きく揺らいでいた。

カーマインはそんなアレンの背を見つめ、感心したように頷いた。

「母さんに会うためか……。なるほど。なんでアレンがそんなに強いのか。分かった気がするよ」

「……………」

アレンはカーマインをふり返らない。拳を固く握ったまま、沈黙するだけだ。

カーマインは一つ頷く。

(きつと、切実な目標があるから、アレンは強いんだな)

彼はそう理解する。大の大人が束になっても、シーティアには敵わない。年端もいかない少女だが、シーティアの強さは異常だった。カーマインがどれだけ真剣に姉に刃向かってても、最後の最後まで必ず競り負けてしまう。

そんな、カーマインにとっては“化物”のような姉を相手に、ア

レンは互角どころかシーティアの身体の一部　と、カーマインはシーティアの髪の毛の二、三本のことをそう思っている　を切り裂いた。

それも大人ではなく、自分と歳の違わない少年が、そこまで剣術を極めている。

カーマインにとってそのこと実は、なにを差し置いても尊敬すべき対象だった。

（俺にもそういう　ちゃんとした理由が出来るかな……。どんなに小さいことでもいいから、それでも譲れないってことを、俺は見つけたいな）

アレンの背を見据えて、カーマインは思う。顔を上げたアレンは、複雑な表情でこちらをふり返っていた。

「俺からすれば、見様見真似でそれだけ強くなれるお前の方が凄
「よ

そんなことをアレンに言われ、カーマインは首を横にふる。

「でもダメなんだ。まだ一回も、アイツに勝てない」

「……」

アレンは少しだけ蒼の瞳を細めて　微笑った。

カーマインには気付かれないように、少しだけ苦しそうに、辛そうに。

地球人は最強でなければならぬ。

そのためのガード流だ。

そう教え込まれた剣術は、この双子の前には一介の凡庸な剣に過ぎない、のかも知れない。

この眩いほどの、才能の前には。

アレンはサンドラに修繕してもらった袖口を掴み、思考に歯止めをかけた。

カーマインは言った。

「俺は、さ。強くなって、自分の大切な人を守りたい。でもシ
ーティアに負けるようじゃ、まだまだだな」

カーマインの中にある想いは、まだぼんやりとしたものだ。だがそれでも、アレンに出合って目標のようなものは見えたような気がしていた。

アレンが つぶやく。

「……………世界は、遠いな」

空は、どこまでも高く澄んでいて、東側が黄昏に染まりつつあった。

(俺は……………本当に、特務になれるんだろうか……………)

倍率は、八億分の一。

この場で出会った双子が、自分の目標の高さを教えてくれる。

宇宙は、広いのだ。

きっとカーマインのような才能を持つ者は、一人や二人ではない。

そんな彼らを相手に、アレンはどこまで行けるのか。

(俺は、母さんを)

本当に迎えに行けるのか。

途方もない不安と焦りに、アレンは拳を握りしめた。いくら心配した所で、自分の腕を上げる以外に道はないのだと知っている。それでもただ、がむしゃらに前を見て進むには、アレンは、色々なものを抱え込み過ぎていた。

銀河最強であるという証を、必ずガードの家名に据えねばならない。

門下二百人の上に立つことを、アレンは生まれたときから決められている。

いまはまだ小さな家。それが、どこよりも強力な軍人の家系に成長するようにと。

「そうだなあ……」

カーマインがしみじみと頷いた。

カーマインにとっては、シーティアと互角に戦えたアレンはスーパーマンのようなものだ。だが、そのスーパーマンはシーティアのように偉ぶることも、力をひけらかすこともなく、じつとなにかに耐えるように剣を握っている。

その姿はまさにカーマインの中の、理想の剣士だった。謙虚さと向上心を兼ね備えた、強い剣士。

だが、そんなアレンでも“世界は遠い”と思うほど、世界は遠い

んだなとカーマインは思う。

王都から一步も出たことのないカーマインにとっては、“世界”とは、本の中の言葉でしかない。

(だからいつかは、アレンのように)

カーマインはアレンがそうしているように、空を見上げる。

澄んだ空は黄昏が東から南にまで迫っていて、もうすぐ一日の終わりを告げようとしていた。

フォルスマイヤー邸に戻る前、アレンはもう一度、噴水広場に近づいて行く。

規則的に流れる水の中に、昇ったばかりの月が浮かんでいた。その月が、沈みつつある太陽の光を浴びて赤く染まる。
と、

「っ……っ！」

目が眩むような強い光を受けて、アレンは咄嗟に両手で目を庇った。

光が晴れる前、カーマインがなにか言っていた気がしたが、アレンの耳には届かなかった。

「っっ、は……っ」

ようやく光が止んだのを確認して、アレンは手を下ろす。と、風に巻き上げられた砂埃が顔に迫り、思わず目を瞑った。

今度はゆっくりと、周りを見渡す。

無人惑星、ストリーム。

荒野ばかりが広がるその場所は、白い巨大な造形物　タイムゲートのある惑星だ。

アレンは背中をふり返って、タイムゲートを確認する。

「帰って、こられたのか……？」

首を傾げた理由は、「X」状に開いていたハズのタイムゲートが、いつの間にか「一」に戻っていたためだ。

アレンが近づいても、ゲートは反応しない。

「一体どういう……」

要を得ずに立ち竦んだ。数日前にはあった、研究員用のテントも見当たらない。

ともかく少し歩き回らねば、状況を掴めそうにもなかった。

(まさか博士たちも、俺と同じようにタイムゲートで別の場所へ?)

冷汗が浮かぶのを感じながら、アレンはざくざくとストリームの土を踏む。

と、

しばらくして銀河連邦軍の科学探査艦が目に入った。

「おおーいー!」

反射的に諸手をふって、科学探査艦に駆けて行く。だがその途中

で、アレンはふと、首を傾げた。

(乗ってきた艦と違う……?)

そのことに違和感を覚えながらも、探査艦の傍まで行くと、連邦軍服を着た軍人が、アレンを見るなり目を丸くした。

「こ、これは……！ アレン様っ!?!」

連邦軍人はアレンを見るなり、几帳面に一礼する。アレンには馴染みのない顔だったが、軍人の男は、腰に刀を差していた。

科学万能の世界で、こんな旧時代の武器を持つのは、“ガード流”を使う者だけだ。

アレンは連邦軍人を見上げ、問いかけた。

「父からの迎えですか？」

「ハッ。貴方様のお帰りを、誰よりも深くお待ちしております」

「……」

アレンはわずかに視線を下げ、頷いた。軍人の背を追って、探査艦に乗る。

「あの、博士たちは無事ですか？」

促された座席のベルトシートをするなり、アレンは尋ねた。四十がらみの連邦軍人はアレンをふり返り、少し複雑そうな表情を浮かべて頷く。

「ええ。問題ありませんでしたよ」

「あれから、どれくらい経ちました？」

アレンは次にこう問いかけた。

カーマインたちの居た場所に、彼は二日滞在したのだ。
ならば今は

操縦席に座った連邦軍人は、アレンをふり返って、言った。

「今は宇宙暦七六四年。あれから、十二年が経ちました」

「……え？」

瞬いたアレンは、頭の中が白くなるのを感じた。

……

……

惑星ストリームにあった科学探査艦は、どうやらアレンを迎えるためだけに置かれたものだったらしい。四十絡みの連邦軍人はそうアレンに説明し、すぐに家に帰してくれた。

一週間ぶりに会った父は、驚くほど老けていて、アレンは思わず尻ごんだ。父は相変わらず、表立ってなにも言わないものの、それでも遠巻きにアレンの無事を歓待した。

いつもは質素な夕食が、ちょっとした立食パーティになるほどには。

それでもそれが、連邦政府を握る政治家との交渉の場となつては、有難みも半減である。アレンは密談を交わす大人たちを尻目に、深い溜息を吐く。

テーブルに並んだ食事は豪華だったが、少しも 温かみを感じなかった。

3 特務候補生 十（前書き）

あとがきに挿絵があります。ご注意ください。

3 特務候補生 十

十四歳になったアレンはある日、父の執務室に通された。道場と同じく板張りの部屋は、この時代にあつて酷く珍しいものである。父、リード・ガードはアレンをふり返ると、重厚な執務机から腰を上げて、言った。

「お前に、今日から母をくれてやる」

思いがけない言葉に、アレンは呼吸も出来ないほどに息が詰まった。

心臓が鳴る。

ドクドクと、これ以上ないほどに。

アレンは母のために剣の腕を磨き、母に会うために日々を懸命に生きてきた。

だから。

「母に、会えるのですか!？」

その言葉は、何物にも代え難い褒美だ。

アレンは胸に熱いモノが込み上げてくるのを感じながら、父を見据えた。

が。

「これがお前の新たな母、シャンディアと、弟のセイルだ」

「え?」

父に促されて、部屋に入ってきたのは、会いたかった母ではなく、

母に良く似た面影の 見慣れない女性と、自分よりも年下の少年
だった。

共にブラウンの髪が美しい、上品な物腰の二人。

シャンディアと紹介された女性は、アレンの母と同じシルバーグ
レイの瞳をしていた。髪型まで母に似ていて、アレンはごろりと固
唾を飲む。

女性の傍に付き添う少年は、大人しそうな子どもだ。シルバーグ
レイに、父のアイスブルーが少しかかった灰色の瞳。

父と シャンディアという女性の面影が半分ずつ見られる、十
歳前後の少年。

“新たな弟”。

アレンは言葉を失った。

「新しい……って……」

狼狽するアレンに、優しい笑みをかけたのはシャンディアだ。

「貴方の母、エレナのことば聞いています。貴方の気持を思えば、
こんな形で貴方と会うことになったのは非常に残念ですが、気をし
っかりとお持ちなさい」

なにを思って、シャンディアが残念と言ったのか。アレンはこの
とき分らなかつた。

まさか母が、死の病に侵されていたなどと。
剣術に明け暮れるアレンは、知らない。

「……母を、どうされたのですか」

拳が震えるのを感じながら、アレンは父に問いかけた。

氷のように冷徹な、父のアイスブルーの瞳。アレンにとって父は恐怖の対象だが、それと同時に、立ち向かっていくべき壁であり、目標だった。

母に会うために、父を超える。

声を落とし、怒りに震える息子に、父が返した答えは、至ってシンプルだった。

「今の貴様に、問う資格はない」

「……………」

アレンは唇を噛んだ。自分が今、どういう心理状態なのか、詳しくは分からない。

ただ、

父の返答が、悔しい。

彼に認められるほどの軍人でなければ、父はまともに、アレンと話もしない。だからアレンは、父に言い渡される任務を忠実にこなしてきた。ずっと、一人で。

ガード家の跡取りとして彼を補助してくれる者はいても、作戦実行を手伝う者は、一人もいない。

人を、斬ることさえも。

「……………つ……………!!」

アレンは拳を握りしめ、自室に戻った。

見上げた天井が、ただ白い。

かならずや、むかえにいきます。

そうアレンが告げたときの、母の笑顔が脳裡を過る。視界が滲んだ。

十二年。

アレンが失ったときの流れは、母を遠い場所にやるには、十分過ぎた。

陽の落ちた、暗い部屋の中で　アレンは一人、声を殺して泣いた。

倍率は、八億分の一。

特務候補生の通知がアレンの下に届いたのは、これより数時間後のことであつた。

時は少し、遡る。

宇宙暦七六四年。アレンがちょうど、タイムゲートの時間旅行から還つてきた年のことだ。

それは突然起きていた。

彼女の都合など構わず、彼女の希望など、紙切れ同然に吹き飛んでいった。

惑星、エクスペル。

街から程遠い、広大な森に囲まれた村は、銀河連邦加入を果たした今でも、青々とした自然を残していた。

そこに、一人の少女が暮らしている。陽に当たって天使の輪を作る黒髪を肩まで伸ばした　“ナツメ”という名の少女だ。

年は七歳。

健康的な血色の良い象牙色の肌をしており、わんぱくそうな笑みを口許に浮かべて、彼女は小柄な体をさらに小さく丸め、足音を潜めて、そーっと部屋の窓に手をかけた。

「コラッ！ ナツメ！！ 明日は村のお祭りがあるんだから、ちゃんと手伝いなさい！！」

ぴしゃりと後ろから声が降る。ナツメは肩を震わせた。

二階にある自分の部屋。そこから、昨日用意した靴を手に、外へ出ようとしたときのことだ。

しまった、と反射的に口を押さえて、彼女は満月のように丸く、黒い目を何度も瞬かせた。

ふり返ると、躑に敵しい母親が、両手を腰に据えてこちらを睨んでいる。その母にナツメは、へにゃ、と愛想笑を返すと、母はいつも通り、片眉をぴくりと震わせた。

「手・伝・い・な・さ・い！」

強い調子でもう一度念を押される。しかし、ナツメは手に持った靴を放さないまま、びくりと肩を震わせてつぶやいた。

「で、でも……、約束したのです。今日はおじいさんが、わたしに剣をおしえてくれるって……」

「ナ・ツ・メ！」

「うう……うう」

呻くと同時、込み上げる涙をどうにか押しとめるナツメ。その少女を、じ、と見下ろして、母は腰に手を据えたまま、いい？ と続けた。

「あなたには、剣術なんてものは必要ないの。女の子はそんなことをやらずに、立派に家事をこなしていれば、そのうち素敵なお婿さんが迎えにきてくれて、幸せになれるのよ」

もう何度も言い聞かされた、母の得意文句だ。それを半分聞き流すように手許の靴をいらいながら、ナツメは遠慮がちに口を開いた。じ、と母を見上げて。

「でも……、剣ジツは『そのうち』じゃなくて、今、しあわせになります。とつてもたのしい。わたし、だい好きです」

言って、得意げににんまりと笑う彼女を、母がびしやり、と遮った。

「いけません！！ あなた、昨日も痣を作って帰ってきたところでしょう？ もうこれ以上、そんな危険なマネをさせるわけにはいきません！ 母親として！！」

「……………ううっ」

眉根を寄せて、ナツメは困ったように首を傾げる。

確かに昨日の稽古で受けた腕の傷は、まだズキズキと痛むが、それでも祖父に剣を教えてもらい、褒めてもらう度に、ナツメの心はわくわくしている。その稽古での興奮と緊張に比べれば、こんな傷の痛みなど、彼女にはどうということのないものだった。

母には、分かってもらえないが。

だからそれをどう伝えればいいのか、ナツメは悩む。
痛くない、というのはダメだ。以前使って、凄く反発を受けてしまった。

(ううう……)

考える。なにか、この楽しさを知ってもらおう方法を。
と。

腰に手を当てて、仁王立ちしていた母が、す、と表情から厳しいものを消した。ナツメの目の前に膝をついて座り、絆創膏だらけの娘の頬に、つ、と触れる。

母の語調が、和らいだ。

「……ナツメ、あなたに剣の才能があるかも知れないことは、お爺様から聞いてるわ。でもね。母さんは、あなたが怪我をするのが辛い。お爺様に打ち込まれる度、折れそうになるあなたを見るのが、怖い。……分かって」

祈るように。

ぎゅ、とナツメを抱きしめて、つぶやく母に、ナツメはなにも言うことが出来ない。

父が生きていたころはまだ、これほど剣を習うことを嫌われていたわけではなかった。

だが、その父が半年前に他界してからは、ナツメが剣を持つことを、母は極端に嫌った。娘の剣が上達する度、軍に上がるのでは、と顔を蒼くし始めたのだ。

といっても、父は軍人ではなく、商人だった。その父が、アール

ディオオンと連邦の抗争に巻き込まれて、他界したのだ。それから母は『軍』という存在に極端な怯えと、憎悪を抱くようになった。

幼さゆえにこのころのナツメに、そんな母の心境は分からなかったが、それでもなんとなく、母が『軍』を嫌っているのは知っていたため、ナツメ自身も『剣』というイメージを払い切れなかった。

だが。

だからといって、母を慮って自分の好奇心を抑えるほど、自制心が育っていたわけではない。ゆえに結論として、ナツメは母にバレない様、こっそりと祖父に剣術の指南を受けようと部屋を出たのだ。上手くはいかなかったが。

(しっばい、です……)

残念そうに肩を落として、ナツメは森で待っている祖父に、心の中で謝る。

祖父は、母がこうして、ナツメが剣を習うことを嫌っていると知って尚、彼女に剣を覚えてくれる唯一の肉親だ。

母の 父にあたる人物。

その彼の存在が、ナツメの中の罪悪感を希薄にさせる原因でもあった。といっても、一番の原因はやはりナツメ自身の自制心の欠如であるが。

「ナツメ……。可愛い子。私の一番大事な、大切な子」

つぶやく母に、優しく撫でられる感触に、ナツメはくすぐったさを覚えて、嬉しそうに目を細める。

母が大好きだ。厳しいが、それでも優しい。ふんわりと笑う、彼女の笑顔が中でも一番、大好きだ。

そして剣を覚えてくれる、祖父も大好きだ。まだまだ剣の腕はついていけないが、ナツメが上手く踏み込む度、手を叩いて褒めてくれる、祖父が大好きだ。

稽古場の森も、ナツメは大好きだ。

特に朝陽が差した森は、木漏れ陽がまるで光のカーテンのように綺麗で、しいん、と静まり返る。その厳粛な雰囲気、大好きだった。

すべて、失ったが。

「お、かあ……さん？」

それは、突然起きた。

前触れもなく、突然に。

今日の稽古を諦めて、ナツメは大人しく、豊作を願う祭りの水を森まで汲みに行った。バケツ一杯、同じ年の子より三倍は大きいバケツを、得意げに提げて帰ったときのことだ。

「はあ……っ、はあ……っ！」

急いで走ったが、もう夕暮れも過ぎて、夜になろうとしていた。それでもナツメは危なげなく家に帰り、汲んできた水を、母に預けようと息を切らせた。

そんなときのことだ。

閑静な村が、炎に覆われていた。

「ごうごう、と。森に燃え移りそうなほど、激しく。」

最初、ナツメはそれを祭火だと思って歓声を洩らした。今年は例年よりも盛大な炎だと。村の広間を使って、いつもより高く木を積んだのだらうと。

だが。

「おかあ、さんっ！」

それと明らかに様子が違ったのは、村を徘徊するライフル銃を構えた男の群れだ。彼らは無作為に、いや、大声でなにか話していたが、火の勢いが強すぎて、ナツメの耳には届かなかった。

慌てて、母の安否を確かめようと飛び出す。

瞬間。

どどどどどっ！！

業火の中で、男のライフル銃が怒声を上げた。

たまたまナツメの目の前を通りかかった中年の女性が、背中を撃たれて崩れ落ちる。

「っー」

ナツメは目を見開いた。村の、パン屋のおばさんだ。

いつもナツメがパンを買いに行くと、育ち盛りだからと、小さなコッペパンをおまけしてくれる、気さくなおばさんだ。

その、おばさんの背から

どろどろと、血が流れる。

じわり、と広がる血溜まりの中で、ぽっかりと空いた口が、目が、恐怖で引きつっていた。

「っ、うっっ!!」

ぎゅ、と胸許をつかんで、ナツメは声を上げまいと息を呑んだ。バケツを足許に置く。目の前の自宅に駆け出そうとしたが、今出ては殺される。

(……ふ、う……っ！)

目から溢れる涙を、ぐ、とこらえた。

おばさんが、あのいつも笑顔のおばさんが、その死に顔が、瞼の裏に焼きつく。それでも、ナツメは意を決して踵を返した。自分の家に急ぐ。森を迂回すれば、男たちに気付かれず家に着けると知っていた。

自分が、こっそり剣術を習いに行くルートを通れば。

「お、かあさんっ!」

「ごしごしと涙を拭いながら、それでも溢れる涙に、ナツメは視界を滲ませながら、家に向かう。すると、

「ごうごうと燃える、自分の家が見えた。

最早一階は火に覆われている。外周を回っただけなのに、自宅の玄関はもう、見る影もなかった。

「おかあさんっ!」

涙目になって、駆け出す。

考える余裕などどこにもなかった。

一目散に、家へ。

「うっ！

燃え盛る炎が、そんな少女を正気に戻したのは、灼熱の片鱗を彼女に浴びせたためだ。頭上から降ってきた火の粉に、ナツメは、ひっ、と悲鳴を上げた。思わず手でふり払い、その火の粉の熱さに、息を呑む。

「っ、っっ！！」

肉を焼かれる痛みが、右腕に走る。痛いとも、痒いとも言えない、壮絶な感触が。

だが。

それよりも、

「おかあ、さんっっ！！　　おかあさっ、っ！！　　おかあさああああ
んっっっ！！！！！！」

燃える我が家に、流れる涙の感触が、胸を締め付ける。

どうすればいいのか、分からない。

ただ祭りの準備のために、母が中で料理を作っていたことを、ナツメは知っていた。

だから。

母を呼び、泣き叫ぶことしか出来なかった。

「ナツメー!!」

不意に、自分の名を呼ばれて、ナツメは動きを止めた。

じんわり、と別の涙が込み上げてくる。聞きなれた声。何度も自分を呼んだ、声。

母の声だった。

「おかあさあああんっつっ!!」

ナツメと同じく、母も森の中で騒ぎが収まるのを待っていたのだ。娘の姿を見つけて、慌てて駆け寄ってくる彼女に、ナツメも駆け出す。

否。

母は、この騒ぎの中、娘を探して村中を走り回っていた。

ゆえに、

ナツメは、気付くべきだったのだ。

母が、自分を見つけて喜んでいただけの表情ではないと。

「きゃあああああ……っつ!!」

急に叫んだ母の声に、ナツメは驚いて、びく、と動きを止めた。

母との距離は、約1メートル。

そこで、

どんっ!

銃声が響いた。すぐ、近くで。

母が前のめりに倒れる。

ナツメを抱いて、前のめりに。

どどどんっ!!

ナツメの耳に、また銃声が聞こえる。今度は三つ。密着した母の体が三回、銃声に合わせて揺れた。

「が、ふっ……っ……っ!!」

母が、吐血した。

「え？」

ナツメはつぶやく。

なにが起きたのか、理解できない。ただ母は、ナツメを掻き抱いたまま、地面に倒れた。覆いかぶさるように、前のめりに。

そして、

かしゅんっ、

本来なら、叩きつけられるように地面に倒れたナツメを、母の腕がクッションになった。母の腕と、肩の隙間から 母を撃ち殺した、ライフル銃を持った男が、エネルギーの切れたカートリッジを、地面に投げ捨てた。

そして、

どどどどどどどど……っ!!……!!……!!

補填し終えたライフルを、撃ちまくる。ナツメのよく知る村人を、友人を、家族を。

ただの一人も、生かさぬように。

母に抱かれて、ごうごうと燃える炎から。聞こえる銃声と悲鳴が、その一部始終を物語っていた。

「きゃああ……っ!!」

「助けてくれえ!!」

遠く聞こえる、見知った人の断末魔。それが目を見開いたまま、凍り付いたように固まった、少女の耳に届く。

目の前には、自宅を焼く地獄の業火。

連邦軍が、テロ鎮圧に成功したのは、発生から五時間後のことだった。

銀河連邦第六宇宙基地、総合医療センター。

特務候補生として、実家のある地球から第六宇宙基地へと居住を移したアレンは、宇宙基地の最高責任者であるヴィスコムに声をかけられ、足を止めた。

ヴィスコムは、褐色の肌をした壮年の軍人だ。

黒髪を短く刈り込み、同色の顎ひげを美しく整えている。男らしい武骨な細長い顔でありながらも、女のように曲線的な頬のラインや、両耳に付けた金色のイヤリングが印象的だ。温和な彼の性格を反映した眼差しは柔らかく、まだ四十代なのに銀河連邦の“英雄”

と呼ばれる器を感じさせる　　相手を包み込む様なカリスマ性を持った男である。

　　ヴィスコムは切れ長の目をアレンに向けて、温かな声で言った。

「　　アレン。少し私に、付き合ってくれるか？」

多忙なヴィスコムに珍しく声をかけられて、アレンは彼と共に基地内の施設に足を運んだ。

それが、　　総合医療センターだったのである。

アレンはなぜ自分が連れてこられたのか、理解できずにいた。

「……あの、提督？」

向かったのは、医療センター最奥の病室だ。

　　ナースステーションに寄って、慣れた様子で先行くヴィスコムを呼び止めると、廊下の突き当たりを右に曲がったところで、ヴィスコムがようやくふり返った。

「君に是非、会ってもらいたい子がいるのだ。アレン」

思わせぶりに言って、ヴィスコムは視線で病室を示す。

「？」

話の趣旨が読めないながらも、アレンはヴィスコムの視線に従った。指示された病室の、中を見る。

ここに来るまでに、いくつもの扉を越えてきた。病院の最奥、というより、地下のようなその場所に。

少女はいた。

「……？」

病室は四畳ほどの、ベッドとサイドテーブルが置いてあるだけの簡素な部屋だった。

そこに、少女が一人。

ベッドの上で、小さく丸まっている。眠っているのか、ぴくりとも動かない。

檻のような、この病室の住人は、まるで生気がなかった。部屋の照明が、部屋を明るく見せているハズなのに、どこか暗い。

アレンは、ヴィスコムをふり返った。

「……提督、彼女は？」

問うと、アレン同様、部屋の少女を見据えたヴィスコムは、少しだけ目を細めて、辛そうに息を吸い込んだ。

「アレン。君は三年前起きた、エクスペルでのテロを覚えているかね？」

病室を、じ、と見据えたまま、視線の動かないヴィスコムを見上げて、アレンは表情を改める。ヴィスコムの顔色が暗い。理由ありの少女であることは説明されなくとも分かる。

問題は、これからヴィスコムが言おうとしている、話の本題だ。

アレンは事実関係を把握するために、慎重に答えた。

「宇宙暦七六四年に起きた事件ですね。確か、アールディオンに内

通したゲリラ部隊によって、アリアという村が占拠された、
もしかや彼女はそのときの？」

問うアレンに、ヴィスコムが頷く。アレンは驚いたように、目を丸くした。

「ですが、あの事件は占拠された村人が全員殺害されるという、近年でも最悪のテロだと」

「そう。私も、当時はそう思っていた。……だが。事件発生から三日後、遺体処理を担当した部隊が偶然、瓦礫の中で母親に抱かれている彼女を発見したのだ」

つぶやくヴィスコムに、アレンは病室に視線を落とす。

その情報が公開されない理由は、なんとなく察しがついた。

ベッドの上でうずくまった少女。サイドテーブルには、冷めたスープと、一口もかじられていないパンがある。

「……………」

ぐ、と拳を握るアレンの姿に、ヴィスコムは頷くと、少女、ナツメを見やっつて、説明を続けた。

「察しの通り、彼女は今、完全に心を閉ざしてしまっている。唯一のテロの生存者。彼女から有益な情報が得られればと、連邦上層部がこの施設に彼女を預けたのだが。この三年間。出される食事には一切手をつけず、ベッドの上ですつとあやっただけだ。……実際に、私が彼女と知り合ったのは半年前だがね。少なくともその間に、彼女は、眠ることさえなかった」

「催眠薬の投与は？」

「勿論やっている。だがその度に幾許かの眠りについた彼女は、必ずショック状態に陥るのだ。大量の冷や汗と不整脈で体温が下がり、四肢が痙攣し始める。静脈が落ち込んで注射による鎮静剤投与もままならない。我々はただ、彼女が自然に落ち着くのを待つしかないのだ。医者も、生命維持装置がなければとつくに死んでいると言っていたよ。……そして、そのショック状態は、部屋を消灯した場合でも起きた。彼女は『闇』に、強い恐怖心を抱いている」

心が、壊れている。

そうつぶやくヴィスコムに、アレンは少女を見下ろした。病室の少女を。

アレンはヴィスコムを見上げ、問いかける。

「中に、入ってもよろしいですか？」

「ああ、勿論だ。私は実際、この半年間彼女を見てきて、自分の限界を思い知った。彼女になにかしてやりたい気持ちはあるのだが、私のスケジュールでは彼女にずっと会ってやることが出来なくてね。……出来れば、君が彼女の友達になってくれれば、と思ったのだが」

「光栄です、提督」

「……ありがとう」

頭を下げるヴィスコムに、アレンは一礼を返して戸を開ける。案の定、ベッド上の少女は動かなかった。

近くまで行って、注意深く少女を見なければ、彼女が呼吸していることすら忘れてしまいそうなほど。少女は、抜け殻だった。

ナツメ・D・アンカース。

ベッド脇に置かれた名札だ。ネムブレート

焼け焦げた彼女の自宅から見つかった、唯一の彼女の情報だとい
う。

「ナツメ、と呼んでもいいか？」

遠慮がちに、ナツメを見るアレンに返事はない。が、予想してい
たので、アレンは少女のベッド脇に、一言断ってから腰を下ろした。

「初めまして。俺は、アレン・ガードという者だ。提督から紹介を
頂いて、ここに来た」

つぶやいて、そ、と少女の顔を窺う。すると少女が、壁を見据え
たまま、瞬きもせずじ、じ、と固まっているのが見えた。

死んだような目で、じ、と。

その黒瞳は、意志のない、ただの闇だった。

「……ナツメ」

思わず、言葉を失うアレン。生気のない彼女の横顔が、完全栄養
剤を投与されているにも関わらず、痩せ細っている。落ち窪んだ眼
窩は、睡眠不足の所為だろう。弱った体が、ゆるゆると、少女が死
に近づいているのを予感させる。

(……母さんなら、こういつとき)

つぶやいて、アレンは五歳のとき生き別れた、母のことを思い出

す。

優しい、母。

彼女ならこんなとき、どうやって少女を元氣付けるだろうかと。遠い、遠い記憶を掘り起こして、アレンはそっとナツメの肩に触れた。

「……辛かったな。でも……、君を想う人は、いつも君の傍にいる」

小さく、言い聞かせるようにつぶやきながら、アレンはナツメの肩から腕を撫でる。

ゆっくり、ゆっくり。

勿論、そんなことで、少女が反応を返すわけではないが、アレンは声を落として、優しく語りかけた。

「一人じゃない。……君は、一人じゃないんだ。ナツメ」

触れた少女の、骨ばった感触に、アレンは哀しげに目を伏せる。

今まで彼女が失ったものが、こうしていると、伝わってくるような気がしたのだ。

この三年で彼女が失った、心と、繋がり。

重度の精神分裂症と診断された彼女は、最初の三ヶ月で、親戚から見放された。

彼女に剣術を教えていた祖父でさえ、あのテロ事件で命を落としたのだ。

そして、事件から半年。彼女は親戚だけではない、医療スタッフにすら見切りをつけられていた。回復の見込みのない彼女に、カウンセリングでいくら声をかけても反応のない彼女に、医師も、看護師も、手の施しようがなかったのだ。

それでも、ただ一日一度。食べ物を運んでくる。彼女の生命線である、点滴を打つ。

実験用のラットを育てるのと、なんら変わらない延命作業を繰り返して。まだ動き回るラットの方が、幾分か可愛らしいと、ため息を吐きながら。

テロという特殊な境遇で孤児になった彼女を、しかし、今は報道に悟らせないためだけに、軍上層部が預けているだけの、少女。

精神科医が彼女の元へ来たのは、二年前が最後だった。

「……アレン」

少女をあやすアレンの背を見つめて、ヴィスコムは深く、目を瞑る。

少女の存在を友人に聞いてから、半年間。ヴィスコムも何度か見舞いにはきた。が、多忙である彼にそう休みはなく、月に一度、足を運べれば良い方だったのだ。

彼女の病室を訪れる度に何度か、カウンセリング紛いのものをしてみたが、効果はなかった。当然だ。専門家さえ、彼女の心を開くことは出来なかったのだから。

ゆえに、ヴィスコムは気になるが、どうすることも出来ない少女として、多くの人間がそうしたように見切りをつけた。代わりにヴィスコムは意志を、次に継がせようと判断して。

そうして白羽の矢が立ったのが、アレンだった。まだ軍に上がっていない、彼にと。

アレンには、重荷を背負わせてしまっただろうと危惧しながら。そ

れでも、あまりに哀れなこの少女に、救いをと。

(……神よ)

宗教などヴィスコムは信じていなかったが、少女に会ったびに何
度も祈った。

彼女の目が、覚めるようにと。

彼女に夜が、訪れるようにと。

(闇はなにも、怖ろしいばかりのものではない。それを示してやっ
てくれ、アレン)

まだ十四歳の、しかしヴィスコムの知る、誰よりも聡い少年に願
いをかける。彼の優しさが、勇気が。少女に奇跡を起こすことを信
じて。

そうして、半年が過ぎた。

ヴィスコムにナツメを頼まれてから、半年。

アレンは一日も欠かさず、少女の下へ足を運んだ。自らの願いを
込めて、昔、母が教えてくれた、御伽噺を引用して、鶴を折り続け
た。

「これは地球の古代文明にあった、一枚の紙から出来る折鶴なんだ。
これが千羽になると、願いが叶うらしい」

いつも通り、ナツメの病室で。

ベッド脇に腰掛けたアレンは、言う間に鶴を折る。その鶴の羽を
広げて、とん、と病室の机の上に置くのが、今のアレンの日課だっ
た。

「今日でちょうど半分だな。が、資料と少し違うような？ ……まあ、君が元気になるなら、なんでも構わないんだが」

ベッドに丸まって、今日も、じ、と壁を見るナツメの様子は変わらない。今日も一人、あらぬ場所を見据えて、ナツメは微動だにしない。

その彼女と、一方的な握手を交わして。

「君を想う者は、いつも傍に。ナツメ」

今日もアレンは、祈りに似た言葉をかけた。

一人ではない。

彼女は闇の中に孤独を見ていると、そう思うから。

アレンは決して、ナツメの見舞いを欠かさなかった。軍の訓練施設から、一日の課題が終わって、皆が外に遊びに行く中で、アレンは一人、ナツメの元を訪れ続けた。

「それじゃあ、また明日」

ほんの五分でも、十分でも。

必ず会いにきて、アレンは一方的な握手のあと、ぽんぽん、と彼女の頭を撫でて、病室を後にする。

その少女に変化が現れたのは、それから、数日後のことだった。

「こんばんは、ナツメ」

いつものように訓練が終わったあと、病院に寄ったアレンは、ベ

ツド脇に腰掛けて紙を取り出した。そもそも、千羽鶴は同じ大きさの紙で作るものだが、古代文明の遊びと化した千羽鶴の存在は、そこまで詳細な資料がどこにも残されてはいなかった。

ゆえにアレンは、今日もてんでバラバラの大きさの鶴を折る。千羽になった鶴を繋げる、という発想もなかった。

「それにしても、さすがに慣れたな」

初めて挑戦したところは、二十枚ほど紙を無駄にしたが。

今では淀みなく、そして折り目正しく作る折鶴に、アレンは満足そうに一つ、頷く。ベッドのナツメは、相変わらず動かない。

折鶴を今日も一つ、作ったあと。

アレンはぽんぽん、と少女の頭を撫でた。

「今日は、いつもより遅れてすまなかったな」

訓練のあと、急いでここに来たため、今日のアレンは左手に刀を握っていた。

今朝方、父から譲り受けた刀、シャープネスだ。アレンが15の誕生日を迎えた証に、と珍しく父が渡した刀。

人を 相手を殺すために情を捨てると言う、父の。

「……………」

自然、アレンの視線が下がる。今日一日で一体、何度シャープネスを見たのかは知らない。

だが、この刀を見る度、アレンは思うのだ。

これは一体、どれほどの人の命を奪ったものなのか、と。

考える度に、もらった刀の重みが、ずしり、と腕に、胸に染みる

気がした。まるで父の言葉のように。

と。

「……けん、じつ……」

「!？」

ぼつ、と響いた声に、アレンは思わず目を見開いた。今、ベッドから確かに、ナツメの声が聞こえたのだ。

一度も声を聞いたことはないが、恐らく、彼女の。

驚いて、ば、とアレンが少女をふり返ると、壁を見据える彼女の頬に、つう、と一筋。涙がこぼれていた。

死魚を思わせる、闇ばかりを映した黒瞳に、涙。

「ナツメ……？」

初めて、表情を歪めた少女に、アレンは心配そうに彼女を覗き込んだ。

「お、じい……さん、も……いない……。おかあ、さん……も」

今にも消え入りそうな、息がこすれているだけに聞こえる、そんな声。だがアレンは、少女の言葉を聞き逃さなかった。

「っー」

彼女の抱えた、孤独。それが、直に触れた気がしたのだ。瞬間。アレンの頭を過ぎったのは、母の顔。痩せ細った少女の顔と、母の顔が重なる。

母の儂い笑顔と、泣いた横顔を。

アレンは気付けば、ベッドに横たわっている少女を、抱き寄せた。
いた。

「大丈夫！……君を想う人は、いつもっ、傍にっ！」

ちょうど、十年。

母と別れて、父に情を捨てると叱られながら剣をふって、今日で十年。

ぐ、と齒をかみ締めて、アレンは涙をこらえる。なぜ泣いているのか、自分にも分からない。
ただ。

「おかあ、さん……」

つぶやくナツメの声が、少しずつ力を帯び始めた。頬に流れた涙が、次第に量を増やしていく。とめどなく、堰を切ったように。

「ふ、ゆうゆうゆう……っ！！！！！！」

ほとほと涙を流すナツメを抱きしめて、アレンはただ、少女の背をさすった。

「大丈夫。もう、大丈夫だから」

言い聞かせるように声をかけて、少女をゆっくりあやすと、ナツメは四年ぶりの涙を搾り出すように盛大に泣き始めた。

「おかあ、さ……っ！ おかあさあ、っっ！！！！！！」

「今まで、良く耐えたな。……よく頑張った」

頭が白くなるほど、盛大に。

喉が割れるほどの大声で『傷』を訴えるナツメに、彼女がこの四
年間、ずっと身を浸していた暗闇で、唯一聞こえた少年の音が、ナ
ツメの傷を癒すように、哀しく、暖かく、ナツメの胸に響いた。

「……おかえり、ナツメ」

つぶやくアレンの音が、ナツメの耳に残った ……。

3 特務候補生 十（後書き）

この後、アレンは特務候補生として、銀河連邦軍の“英雄”とまで呼ばれる男、ヴィスコムの下で連邦最強の精鋭部隊に入るべく訓練を重ねていく。

その中で、仁徳あふれるヴィスコムは、言わば父とは正反対の男だった。

ヴィスコムは常に、銀河連邦軍を光に向けていく。そしてアレンに、こう教えた男でもあった。

銀河連邦軍人は、民間人を守る為にあるのだと。

銀河連邦を去った今でも、アレンに多大な影響を与えている壮年の軍人である。

補足

ナツメ・D・アンカース

> i16327—1500<

上図は、十六歳（現在）のもの。

惑星エクスペルにあるアーリア村出身の少女で、元は実祖父から二刀流剣術を学んでいた。

しかし、彼女が7歳の時にテロが遭い、銀河連邦軍に保護され、この話を切っ掛けとして、アレンから剣術を習う事になる。

後に、アレンの伝手で、テトラジェネシス宗主、オフィーリア・ベクトラと出会い、彼女に気に入られて側近となった。ナツメ自身は“側近”と言う使命感に燃えているが、周りからはマスコット扱いされ、あまり戦力としては期待されていない。

この話の後、三年間は銀河連邦軍 戦闘艦アクアエリーに世話になっており、アレンともう一人の連邦軍人、そしてナツメという三人で共同生活を送った。

現在は明るく自由奔放な、彼女本来の性格を取り戻している。

(あと、アシユトンとプリシスの子孫 という裏設定があったりします)

1 フレンスブルグ編 魔術学院

アルスイ・オーブ。

世界の真理を見通す至高の宝珠を手に、アレンは瞳を閉じた。瞼の向こうに、魔力が集うのが分かる。指輪に収まったアルスイ・オーブの宝玉に、己の魔力が集っていくのが。

閉じた視界の中で、シーティアが言った。

「このアルスイ・オーブは、前も言ったけど模造品よ。無限の魔力と知識を与える本物と違って、こちらが問いかけなければ答えないでも。裏を返せば、こちらが問いかけた内容には答えてくれる。あなたが本当に望むなら、この精霊石レギンレイユは真実を映し出す」

穏やかなシーティアの口調。こちらの精神統一を妨げないよう、気を配っている。

アレンは目を閉じたまま、頷いた。

「じゃ、指輪に語りかけてみて。頭の中のイメージが強ければ強いほど、アルスイ・オーブは具体的な真実を映し出すの」

俺の、望みは……

アルスイ・オーブに魔力が集う。自分の、大気の、精霊の魔力がゆらりと揺らめき、踊るように、水面を泳ぐように、そっと交わっていく。それを肌で感じながら、アレンは思い浮かべた。

ただ一つ。

この手に握むべき相棒を。

兼定……！

空になった手で兼定をつかむ様に、アレンは左手を握り締めた。思いの強さに比例して、アレンの瞼が微かに震える。閉じた視界の中に、アルスイ・オーブの光が見える。魔力の結晶だ。それを目を凝らしてじつと見つめっていると、

やがて、

結晶が、像を結んだ。

光に満ちたヴァルハラは、天上の華やかさを語るに相応しい場所だった。緑が深く生い茂り、白い鈴蘭が風になびいて揺れている。

水、花、光、空。

神々が住まう宮殿は白壁で、金銀の鮮やかな装飾に彩られていた。中でも一際大きい、白亜の宮殿に 彼の求める剛刀・兼定は存在していた。

玉座に座り、頬杖をついた神は、傍らの女神に言った。

「御苦労であった、フレイ」

渋みのある声だった。頭に冠を配している男神だ。恐らく、この男こそが主神だと、アレンは思った。堂々とした風格が、王の風格を醸し出している。

男神に労われた女神が、緑の帽子が乗った頭をついと下げた。その際に女神の長い髪が、はらりと流れる。白魚のような女神の手に浮かんでいるのは、見間違えようもない。

剛刀・兼定。

っ！

アレンは思わず息を呑んだ。

頬杖をついた男神が、にっと笑う。

「これで地上の憂いはすべて消えた。我らアース神族が栄華を極めるのもまた、必然なのだ。計画通り、ラグナロクの準備を推し進めねばな」

「すべては、オーデイン様の御意のままに」

兼定を手にした女神がやんわりと微笑う。それを横目に、銀髪の男神はふふ、と口の中で含み笑いを零した。

.....

「それで。オイラたちはどこに向かっているんですか？ おねいさまあゝ」

ロジャーはふさふさの尻尾を嬉しそうにふりながら、猫なで声でシーティアを見上げた。シーティアが金と銀の瞳で見下ろす。彼女の腕の中に納まった、小さな少年を。

「このフレンスブルグでも有名な、さる魔導師の所よ。一応、私そこで世話になってたの。少しの間だけどね」

こしよこしよとロジャーの耳の裏を撫でながら、シーティアは笑顔で言った。

「わあ、尻尾もいいけど耳もふさふさあ？」

「おねいさまあゝ？」

風が吹くのに合わせて、遠くから波の音が聞こえる。空は快晴で、なんとも和やかな陽気だ。上空に飛んだ白鳩が、鳴き声を上げながら翼をはためかせる。

魔術都市、フレンスブルグ。

世界でも随一の魔術研究に力を入れている国だ。四方を海に囲まれている巨大な島国のため、大陸の戦乱に巻き込まれることはあまりない。それでも、魔術師たちの楽園といわれるこの場所は、知識の都として名高く、交易を求める国は数多くいた。

総じて、アレンたちが今まで見てきたどの国よりも、活気に満ちた街だった。

「たく、バカダヌキめ……」

ロジャーとシーティアを尻目に、ルシオは心底呆れたようにつぶやいた。はあ、と溜息を吐いて腰に手を当てる。ディパンからここに着くまで、彼らはずっとイチャつき合っている。

「魔術研究に力を入れている国、か。……兼定に繋がる情報が、見つければいいが」

先ほどまで魔導書を読んでいたアレンが、顔を上げた。

街の中心にある魔術学院の尖塔が、ここからでも少し見える。巨大な時計になっている尖塔は、他の建物よりも数段高く、街のシンボルのようだった。

尖塔を見据えるアレンの瞳が深刻だったからか、彼を横目見たシーティアが溜息を吐く。

「そうねえ。規模としてはウチの魔法学院より凄いわよ。この街全体っていうより、国そのものが研究所だし」

「なら少しは詳しく、この惑星^{ほし}について学べるな」

「やっぱり、その本じゃダメなんですか？」

思案顔のまま視線を落とすアレンに、ルシオは不安そうに首を傾げた。その本、とルシオが言ったのは、アレンがここに来るまでに持っていた魔導書のことだ。

アレンは頷いた。

「ああ。これは簡単な基礎魔法の指導書だからな。クレルモンフェランでたまたま買ったんだが、神界に関する情報はない。と言つても、直接的な情報となる資料は、この街にも数えるほどだろうが……」

「じゃあ、どうすんだ？ 兄ちゃん」

「少なくとも、ここなら魔術体系、成立の歴史が学べる。古文書を当たっていけば、統括的に神界に行く方法が割り出せるハズだ」

「??? はあ……」

「あんな堅っ苦しい本をこれから読まなきゃなんないなんて、まさに拷問ねえ」

「そつでもない」

「そう？ だってああいう本って、実践的なこと一つも書いてない

でしょ？ 体系とか成立とか……知ったって魔法が打てるわけでもないし、面白みもないわ」

そう言う天才肌のシーティアは、実はあまり実践的な魔法指導書にも興味がない。なぜなら、魔法が実際に使われているのを見れば、その場で理解し構成出来るためだ。魔術背景も、骨組も理解する必要がない。それは“模写”とでも言うのか。彼女の才能は、アレンですら理解できなかった。

アレンは言う。

「歴史背景、魔術体系を知れば魔術の本質が掴める。媒介となるものが精霊か、大気か、他のものか。それがどういう仕組みで、どう魔術として働くか分かれば、そこから魔術を派生させたり、短縮させることも可能だ」

「オリジナルの魔法を作るってこと？」

「アスガルド 神々の住まう場所に、“肉体”を持つ人間は行けないという。そしてこの世界の魔法は、神の力を模写したものだ。アルスイ・オーブは言っていた。つまり、原理は俺たちの“紋章術”と同じだ」

「その原理って？」

「唯一、神の理を破壊できる力」

「……なるほどね」

合点するシーティアにアレンも頷いた。足許では、ロジャーとルシオがさっぱり意味のわからない様子で、最早死んだ魚のような目

をしている。

アレンは続けた。

「君の時空干渉能力なら、アスガルドに行くことは可能だろう。だが、そこに人間が存在できないのなら」

「“ディストラクション”だっけ？ あらゆる世界の物理法則を“破壊”する能力を、この世界の魔法で代行しようってのね」

「ああ。さすがにディストラクションそのものの再現は無理だろうが、な。俺が考えているのは、地上と天界を結ぶ虹の橋　ビフレストで生者と死者を分かつ判断を鈍らせる方法だ」

「……めんどくさ」

切って捨てるシーティアに、アレンは指に嵌ったアルスイ・オーブを見つめた。

「そうだな。本当にビフレストの判断を鈍らせる方法が魔法なのか、魔法をどう組み立てるのかによっても、アルスイ・オーブが導く答えは変わるだろう。　だが、兼定を取り戻すためなら、惜しくない」

「????? ……さ、つぱり分かんねえ……」

左手を握るアレンに、ロジャーが心底困った顔を向けてきた。その頭上には無数の？　マークが飛び交っている。

ロジャーを見つめて、アレンは拳をわずかに解いた。

シーティアが溜息を吐く。

「ま、あれだけのものを盗まれたとあっちゃ、黙ってられないのは確かよね〜」

「……………ああ」

頷いたアレンはもう一度、街の中央にある魔術学院と呼ばれる尖塔に視線をやった。

禁忌を犯しても悔いはない。

それだけの想いが確かにある。

焦がれるこの胸の想いを狂気と呼ぶのなら、

穏やかな恋しか知らぬ、己の不憫を嘆くがいい……………。

森は、いつになく騒がしい空気に乱されていた。エルフたちは剣を握り、弓をつがえ、後を追う。彼女らの仲間を強奪した、森の侵入者を。

「奴ラメ！……………ドウヤツテ、迷いの森を！！」

追跡の過程で、誰かが舌打ちした。
と、

キュイイイイ……………！

「ナンダ！？この、異常な波動ハ！？」

「魔力が、集ウ!?」

目を見張ったのも束の間。森に現れた侵入者は、悠然と腕を掲げて嗤っていた。

「我は悠久の刻の彼方に身を委ねし者。其は我が名を知るがよい。知らぬ者は己が痴れた者と知るべし!!」
そして刻め!! 我が名は、レザード・ヴァレス!!」

詩のようだった。まるで、悪魔の詩。

人間を象った悪魔は、眼鏡の奥にある、狂気の瞳で言った。

「其の名は冥王の烙印と化して其に裁可を下すだろう。魂の救いを与え賜うことを乞うならば、今一度此方へと集うべし!!」

森が放つ神気とは、真逆の禍々しい波動。それが放散すると同時

グオオオオオツツ!!!!!!

闇の中から、竜の不死者が現れた。

「ドラゴントウスウォーリア……!!」

「不死者メ……!!」

侵入者とエルフたちを断ち切るように、堂々と現れた竜の不死者。その巨体を見上げ、エルフたちが忌々しげにつぶやいた時、鳥人の不死者に飛び乗った侵入者は告げた。

「狂騒劇は終わりだ」

「待テ!!」

鋭い叱責がエルフたちに起こる。だがその間にも、侵入者は鳥人の不死者に乗って、空に羽ばたいていった。

……………

独特の構造で出来ている魔術学院の最上階に、シーティアの言う研究員の部屋があった。

石造の学院は、白を基調とした金縁の建造物だった。クレルモンフェランに雰囲気似ているが、学院の外面を這うように、あるいは、クリスマスツリーの白綿のように、続く長い階段が特徴的だ。

その長い階段を最後まで上って、シーティアは慣れた様子で部屋の前に立つと、ノックもせずにドアを開けた。

「ただいま、メル。お客さんよ」

「帰ってもらって」

返ってきたのは、にべもない拒否。

思わず顔を見合わせるアレンたちを置いて、シーティアは気にした風もなく中に入る。

「あ、作業中? ごめんごめん」

「っ、……………!!」

シーティアが開けたドアを、遠慮がちに覗きこむと、部屋の机にメルティーナと思しき女性が座っていた。魔導書やら資料やらを机

いっぱい広げて、右手にペン。左手で緑がかった長い金髪を引っ掴んでいる。なにかの理論を立てようとしているのか。ペンの乗った羊皮紙には、書き殴った文字がびっしりと並んでいた。

その一部は荒れているが、部屋自体は整然としたものだ。本棚にある魔導書は、隙間なくびっしりと並び、背の低いフリーラックには、魔術器具がセンス良く配されている。

総合的に見て、そこは研究室であるにも関わらず、小洒落た部屋といえた。部屋の壁一面にある、巨大な魔術装置さえなければ。

「で？ ピティどこ？ 預けてたでしょ」

ほん、とメルティーナの肩を叩くシーティア。パンツ、と机を叩いたメルティーナは苛立った様子でシーティアをふり仰いだ。

「ア・ン・タね!!」

「“この世界のホムンクルスとはちょっと違うみたいだから、見せて”って言ったのは、メルでしょ？ ピティが了承しなかったら、私だって預けなかったのに」

唇を尖らせて、拗ねた様に言うシーティア。

メルティーナは頭をがしと掻いて、部屋の隅にある魔術具を指差した。

「今、寝たトコよ。連れてくなら、さっさとして」

「は〜い！」

ニコニコ笑いながら、シーティアは鼻歌混じりに魔術具の所まで

行く。

卵型の、不思議な道具だ。その中に 妖精がいた。正確には、
妖精型の人造生命体。ホムンクルス シーティアの相棒だった。

「ん……？」

突然光が差し込んできたからか、妖精型の人造生命体 ホムンクルス ピティ
は目をこすった。

「あ、れ……？」

ゆっくりと身を起こすピティ。その彼女を、シーティアが優しく
に見つめている。

「お待ちせ、ピティ」

「シーティア様……！」

ぼんやりとしていたピティの目が、やがて焦点を結び、シーティア
を見上げて朗らかに笑う。灰褐色の髪を短く流した、活発な妖精
型の人造生命体だ。ホムンクルス

「ピティ。実はね、お客さんを連れてきたの。あとで紹介してあげ
るね」

シーティアはニコニコ笑いながらピティを肩に乗せると、メルテ
イーナの隣に立った。

「ん〜？」

覗き込むように、メルティーナが書き殴った羊皮紙を見る。そう言えば、彼女は翻訳機がなくとも、この世界の住人と話せるようだった。

(文字も、読めるんだろうか?)

なんとなくアレンが思った時、間髪を置かずにシーティアが肩をすくめた。

「また意味分かんないの読んでるね〜。メル」

「ああ〜！ もう、ホンットうっさいわねアンタは！で。今度はなに？」

ぐしゃぐしゃと紙を丸めながら、メルティーナが顔を上げる。するとシーティアは、不思議そうに瞬いた。

「お客さん」

そう言って、彼女は扉の前で様子を伺っているアレンたちを指す。

「は？」

メルティーナが、眉間に皺を寄せる。と、シーティアに手招きされて、アレンが改めて部屋に入った。

「失礼します。自分は、アレン・ガードという者です」

「……シーティア。なに？ これ」

アレンを指差しながら、メルティーナは怪訝な表情で問う。

「なにつて、だからお客さん。貴方の幽体離脱 ……じゃなくて、ビフレストの研究に興味があるんですつて」

「ビフレストに？」

つぶやいたメルティーナは、胡散臭そうにアレンを見た。

「このフレンスブルグにおいて、ビフレストに精通しているのは貴方だとお聞きしました。

出来れば、ご教授賜りたいと思っています」

「……ふうん……」

言葉を繋げるアレンに、メルティーナは持っていたペンを捨てて、両腕を組んだ。傍らでシーティアが、ピティに向かって言う。

「はい。この人たちがさっき言ってたお客さん。真ん中がアレンで、左がルシオ。右がロジャーよ。アレンには昔、カーマインたちが世話になったんですつて」

「では、この方があの“グレナディーア”の！」

驚く妖精に、アレンは会釈した。

「アレン・ガードだ。ティピとは姉妹らしいな。本当に、よく似ている」

「ティピをご存じなんですか？」

「ああ」

「オイラはロジャー！ よろしくな！！」

「ルシオだ」

アレンの両脇から自己紹介するロジャーとルシオに、ピティは礼儀正しく一礼した。

「ピティと申します。よろしくお願ひしますね、アレンさん、ロジャーさん、ルシオさん」

「ジャンよ！」

ぐつと親指を立てるロジャーに、ピティが笑みを返す。すると、両腕を組んで様子を見ていたメルティーナが、得心したように頷いた。

「……なるほどね。シーティアが連れ込む男にしては、えらく平凡だと思っただけど、そういうコト」

「どづいづコト？」

「黙ってなさい」

ぴしゃりと言って、メルティーナは顎に手をやった。少し思案顔になって、アレンを見上げる。

「アンタ。アレン、だっけ？」

「ええ」

「アタシは素人に一から物を教えてやるほど親切じゃない。だからこの理論。解けたら、考えてあげてもいいわ」

机の引き出しから、メルティーナは冊子を取り出した。厚さは1cmほどの、安っぽい冊子だ。

アレンは受け取り、中を開いた ……。

暗い場所だった。

正確には、？燭一本しか灯りのない、薄暗い場所。

「ぐ、う……っ！！」

きりきりと絞めつけられる首に、彼女は歯を噛んだ。後ろ手で錠をされ、足には鉄球のついた枷を嵌められている。響はない。叫んでも誰も来ないと、この部屋に入った瞬間、鬱蒼とした密封感ですぐに悟った。

首を絞めつけているのは、蠟燭の不確かな灯りに照らされた、不気味な巨漢だった。

(馬鹿ナ！？ 魅惑チャームの呪が通じナイ……！！)

視界が薄まっっていくのを感じながら、悔しさを吐露するよつに彼女は空気の塊を吐いた。

(こんな、ハズでは……!!)

意識が離れようとしていた。瞬間。彼女の細首を片手で吊下げていた男の脳天に、雷が走った。

バチインツ!!

「ギヤアアツ!!」

男が血管の浮き出た頭を押さえてうずくまる。彼女はその際、無造作に払い除けられた。

「、っ!」

どさ、と鈍い音を立てて、尻から地面に落ちる。

彼女が顔を上げると、鉄球のついたこの足では絶対に上がれない階段の上に、丸眼鏡をかけた魔導師が立っていた。精霊の森から彼女を連れ去った張本人 レザード・ヴァレスが。

「間に合ったか」

レザードは安堵したようにつぶやいた。彼女の瞳に陰が籠る。倒れた男を良く見ると、彼は確かに男に違いなかったが、人ではなかった。丸々とした巨躯は緑色の表皮に覆われ、出来の悪い人形のように無駄な肉が多い。

そして、なにより

(ホムンクルス……!)

彼女の魅惑チャームの呪を受けて、暴走した木偶人形を見据えて、彼女は

心の底から毒づいた。

ホムンクルス　人工疑似生命体のそれは、神が人を作ったように、人が人を作ろうとして出来た、命のある人形だ。その材料は、彼らの同胞である人自身と、エルフの肉体。
つまり、

(私ヲ、ホムンクルスの材料とスルためニ……!!)

唇を噛む彼女に、レザードは満足したように口端を緩めた。

「全く面白い悪戯をしてくれるものだ……。魅惑チャームの呪か。だが、ホムンクルスは人間とは精神構成が根本から異なるのだから、暴走してしまうのも頷ける話だ。フフ、残念だったな。それとも、ククク。淫らに襲われるのを望んでいたか？」

「ナ、なにを……!!」

レザードの瞳に狂気が走るのを見て、彼女は　エルフは怯えたように身じろいだ。その様をレザードは鼻で笑い、くいと眼鏡の位置を指先で直す。

「生意気に人間の言葉を話すか。まあいい。だがもつとも、人間がエルフ女を相手にしたとあっては、木偶を相手に情交するに等しいからな。……そうか。この場合、奴ヘリオンはホムンクルスだから、木偶は木偶同士でちょうどよかったのか。アツハツハツハ！」

「地獄二墮子口……!!」

「フツ。木偶と呼ばれるのは不満か？　ならばこう呼んでやるつ。

神の器、とな」

「っ！！　なぜ、それヲ!？」

「驚いたようだ。ならば聞いてくれ。私は“賢者の石”を手に入れたのだ。その程度のことは知っていて当然だろう?」

「ケンジャノ、イシ……」

「そうだ。石はお前たちエルフが、この世界を支える大樹・ユグドラシルを守護するだけの存在ではないこと私に告げた。

エルフは、神が地上でなにがしらの活動する時に、その魂を入れるための器。そして、神が戦いの中で傷を負った時、それを補填し消滅を免れるものでもある。

……つまり、だ。

このことは私に一つの結論を与えた。神という存在と、人間の“魂”は等価である!と。魂だけの存在である神は、それゆえに肉体という檻を必要とする地上では活動できない。　お前たちエルフを媒介としなければ。　そうだろう?」

「……っ、!？」

「だが。神の撰理を読み解くのも容易ではない。私を得た知識は、撰理の断片に過ぎない。賢者の石とはな。一瞬で世の全てを知ることができるような、便利な代物ではないのだよ」

「ナゼ、おまえノようナ悪魔ガ!！」

憎しみを込めて吐き捨てると、レザーダの腕が、容赦なくエルフの首に伸びた。

「ぐっ！」

首を絞められる。エルフは息を呑んだ。

「木偶が……。人間のフリをしてしゃべるのは、止める！」

「ク……。！」

唇を噛む。レザードはエルフが大人しくなったのを見ると、そつと彼女の首から手を離れた。それきり、彼は興味を失したように、エルフに背を向け、立ち上がった。まるで演者が舞台上上がるように。

彼は両手を広げ、天に向かって謳った。

「石は私に皮肉をこめて、最初にこう教えてくれたのだ。全てを全てと示すものは偽り以外にありえない、とな。だがそれでも、石を求めたのは無駄ではなかった。お前はこれから贄となるのだ。私の心を満たすために！」

「……………」

レザードを見上げるエルフの表情が、凍っている。

蝋燭に照らされた魔導師は、既に人と思えない不気味な影を牢に引いて、嗤っていた。まるで、悪魔のように。

「エルフを触媒とすれば、必ず理想の器を創り出せる……………」

愉悦に歪んだ男の暗い声が、妖しく響き渡った。

2 フレンスブルグ編 学園長ロレンタ

フレンスブルグで最大の規模を誇る研究所、魔術学院の学長たるロレンタは、36歳の誕生日を迎えた。

「学長、誕生日おめでとございます」

学院のホールは賑やかに飾り付けられ、管玄音楽に合わせて生徒たちが楽しそうに踊っている。和やかな中にも肅々と、ロレンタの顔を見るなり声をかけてくれる生徒たちに、ロレンタの表情も自然にほころんだ。

「ありがとう。こんなに祝ってもらえてとてもうれしいわ。ところで、さつきからメルティーナの姿が見当たらないけれど……」

ロレンタが送った招待状の中で、まだ誕生会に足を入れていない最後の生徒を思い出して、ロレンタは左右を見る。おめでと、と声をかけてくれていた生徒たちの顔が、瞬間的に凍りついた。

「はぁ……」

皆、顔を見合せて歯切れの悪い相槌を打つ。

メルティーナ。

学長ロレンタが、自ら魔術指導を手掛けた女魔導師。その実力は今や、フレンスブルグでも一、二を争うほどである。しかし、素行に難があり、厳格なロレンタとは根っから反りが合わない。

生徒たちの微妙な反応を受けて、ロレンタもまた、少し困ったような、寂しげな、複雑な表情を浮かべた。

(まったく、嫌われたものね)

.....

誕生会にはワインも振舞われた。ロレンタは嗜む程度に口を付け、ほろ酔い気分で会場をあとにした。もう少しいてくれとせがむ生徒たちをやりわりと制して、彼女は家路を急ぐ。

これから、夫とささやかな誕生パーティーを行う予定だ。

「あの人、まだ起きてるかしら？」

予定よりも遅い時間に、ロレンタは申し訳なく思いながらも、優しい主人の顔を思い出して、口許を緩めた。

夜になって、静まり返った小路は、家の明かりも消えて暗い。街灯がなければ、足許も見えないほどだ。ほんのりとは言え、アルコールの入った体で歩くには、少し苦勞のいる路。だが、主人がこの先で待っていると思うと、ロレンタにとっては楽しい路だった。

「やっと着いたわね」

鼻歌混じりに足を止めると、自宅の灯りが付いていないことに気付いた。

「あの人、もう寝ちゃったのかしら？」

首を傾げながら、家の中を窺う。人が居る気配もなかった。ロレンタは不思議に思っただアノブに触れた。そのとき、一匹の子猫が、ロレンタの前に現れた。

「じゃああ……、

まるでロレンタを誘うように、一声鳴いた猫をふり返って、ロレンタは微笑んだ。白の縞猫だ。

「どこから迷い込んだの？」

しゃがみ込んで、子猫を呼ぶ。だが猫は路の真ん中に座り込んだまま、動かなかった。代わりに、

ぼう、

と、猫の瞳が、紅く染まった。

「っ!？」

ロレンタの顔に驚愕が走る。魔力を感じた。この猫から。それも、強大な魔力を。

猫の口から、猫ではない声が零れた。

「今日ハ親愛ナル我が師ノ誕生日デシタネ。一度直接アナタト会イタイト思ッテイマス」

ロレンタは息を呑んだ。
使い魔。

脳裡をかすめた単語に不安を覚えたとき、猫は更に話を続けた。

「案内八子猫ニ行ワセマスノデ、一人デオ越シ戴クヨウ願イマス。
アナタノ夫ト、二人デオ待チシテオリマス。レザード・ヴァレス」

「レザード。……あの子が!？」

ロレンタは戦慄した。動揺のまま立ち上がる。すると、猫はそんなロレンタを追い込むように、走り出した。

アナタノ夫ト……

不吉な言い回しに、ロレンタの背筋が凍る。深く考える余裕など、なかった。

「待って!」

慌てて駆け出すと、街角からシーティアが現れた。

「っ!」

ロレンタが踏みとどまる。もう少しで、彼女と激突する所だった。

「あ、ロレンタさん。どうかしたの?」

彼女も帰宅する途中だったのか、不思議そうに首を傾げている。ロレンタは子猫を目で追いながら、微笑った。努めて、平静に。

「なんでもないの。少し急用があって。それじゃ、失礼するわね。シーティア」

「ええ」

シーティアは朗らかに微笑った。だが美しい彼女の笑みを見る余

裕もなく、ロレンタは子猫を追う。

(あなた……！)

祈るような気持ちだった。

小路に消えていくロレンタを見送って、シーティアはそれまで浮かべていた笑みを消した。凜とした金と蒼銀の瞳が、闇に消えた獣を見据える。

「あの猫……」

つぶやくと、彼女は左手に嵌めた銀色の指輪を、そっと握りしめた。

「どうするんです？ マスター」

肩に乗ったピティが問いかけてくる。シーティアは黙ったまま、ただ不敵に微笑った。

「あいつ、なんなワケ……？」

平凡だと思った。シーティアが連れてきた男にしては。だが。

流石はシーティアと連れる男というべきか。

(予想しなかったわけじゃないわ……)

顎に手をやったメルティーナは、眉間にしわを刻みながらつぶや

いた。

あのグレナディーアの。

ピティが言った。グレナディーアという意味は理解出来なかったが、只者でないことはあの瞬間に分かった。

要するに、こちらの予想を超えられたのだ。また。

アレンはまるで解説書を読む様に、スラスラとメルティーナが寄越した冊子を読み解いた。たった一日、調べる時間を与えてやっただけで。

メルティーナが提出した冊子は、このフランスブルグで天才の名を欲しいままにした、彼女の学友にして最悪の好敵手、レザード・ヴァレスの論文だった。

今やロレンタによって破門されている彼が、学院を去る前に提出した論文だ。

このフランスブルグにおいても、これを理解する者は一握りもない。魔術学院に在籍した経験もない者が読める代物とは、到底言えなかった。

「まさか、シーティア以外にこんなことする奴がいたなんてね……」

彼女と出会ったところを思い出して、メルティーナは苦い顔を浮かべた。自室にある木造りの椅子に背を預ける。不意に、夜闇に浮かぶ、研究室の窓を見た。

いつもは明かりの消えた、自分の研究室を。

あそこで今、アレンが本を読み漁っている。その勤勉さは、シーティアとはまったく別の人種だ。興味はなかったが、自分が今まで

手掛けた研究を、一日やそこらで理解されてしまうのは、腹立たしい。

だが彼女は知らない。

レザード・ヴァレスの論文を読み解く際、彼の指に嵌まった蒼穹の宝玉が、淡く輝いたことを。

「……けつたいな奴！」

手中におさめたワイングラスを、メルティーナは一気に呷った。くう、と喉をアルコールが通る感覚に目を細めて、メルティーナは空になったグラスをテーブルに置いた。

「ああ、もう！ 今日寝てやる！！！」

乱暴に椅子から立ち上がり、メルティーナは窓を閉めようと窓辺に寄った。

そのときだった。

「……あれ？」

人気のない通りを、彼女が駆けたのは。

「シーティア……？」

見知った顔に瞬きを落とす。彼女が向かう先には、ただの暗がりだ。メルティーナは、事態がよく分からず、小首を傾げた。

……
……

「なあ、アホネコ」

シーティアに案内された宿泊施設を抜けて、ロジャーはきよるきよると左右を見渡した。夜の深まった街路は、見通しが悪い。それでも、ロジャーが出てきたのは、自分の夜目が利く方だと自負していたからだ。

ロジャーは傍らのルシオを見た。

「あの猫、どこ行ったんだあ？　せつかくオイラがミルク持ってきたのに……」

「ああ？　その辺にいるだろ」

夕食に出されたパンとミルクを抱えたロジャーを一瞥して、ルシオは適当な返事と共に溜息を吐いた。

「ったく、なんで俺がこんなこと」

「こらあ！　アホネコ！！　もっとちゃんと探せ！！」

そう言いながら、ロジャーはアレンにもらった通信機を、得意げにいじっている。“くおっどすきやなー”というらしいが、ルシオには使い方が分からなかった。

「うっせ！　バカダヌキ！！　大体、それ使ったらすぐ探せるんじゃないかったのかよ？」

「街中は、信号が多すぎるじゃんよ……」

ふう、と溜息を吐いて空を見上げるロジャーに、ルシオが不満を

言おうとした。

そのときだ。

通りを、件の猫が走りぬけた。

「……あ!!」

ルシオは思わず猫を指し、叫んだ。

「どした？」

ロジャーがふり返る。と、猫のあとを、見知らぬ女性が続いた。臙脂色のロングドレスを着た女性が。

「……あ？」

猫の飼い主だろうか、とルシオが首を傾げたとき、ルシオの示す方角を見据えたロジャーが、声を荒げた。

「アホネコ!! これ見る!!」

「あん？」

ルシオは首を傾げ、ロジャーの手許を見やった。猫探索用に使っていた、彼の通信機を。

ロジャーは通信機を上空に向けて、驚いたように目を見張った。

「……なんで、上空ウチに巨大な反応が？」

ぱちぱちと瞬きながら、通信機に内蔵されている検索システムの結果に、首を傾げる。空を見上げるが、当然。そこには美しい星空

が広がっているだけだ。

なにか“モノ”があるわけではない。
首を捻るロジャーに、街並みに視線をやったルシオが尋ねた。

「それ。さっき女の人走ってった方向、だよな？」

「じゃんよ」

二人は顔を寄せ合い、そこに見えない　しかし、確かにそこに
ある物体を見上げた。

狂気と欲望に歪んだ次元。

レザード・ヴァレスの塔を。

雨音が聞こえた。

どっして、どっしてこんなことに……。

レザード……、あの子が!?

我は悠久の刻の彼方に身を委ねし者。

これは……、ルーン文字？　うそ……。

失われた4番目と14番目……、それに22番目の文字まで
ある……!

私は、私は一体どうなってしまっただ？

神に対してこれ以上の冒瀆はあるまい。

なにを、なにを言っているの？

其は我が名を知るがよい。

そして刻め！！ 我が名は、レザード・ヴ

アレス！！

レザアアード！！ 思い直して！！

ばつんっ！！

鈍い音だった。なにかが、殴り倒されるような音。

レナスは瞼を開ける。胸の前にかざした両手をそっと下した。強

い悲しみが、怒りが、痛みを伴ってレナスに伝わる。この下界
ミッドガルドから。

「……………」

まだ雨は降っていない。レナスが精神を集中させ見通したのは、

これから少し先の未来のことだ。

少し先の 人間の、死に様。

先日、フレイは言った。

人間がいかにして、あの刀を手に入れたのかは知らないけれど……………。

「あの刀……兼定と聞いたわね。あれは既に、人間が持つべき物ではないわ。レナス、あなたに任務を与えます。あの男を勇者の魂エインフエリアにし、神界に送りなさい。神界戦争も佳境に迫ろうとしているの。貴方の働きが、今後の戦を左右するのよ」

「……ええ」

「心配することはないわ。あの男が、もう刀を持つことはない」

「っ！ それじゃあ……！ デイパンで彼が刀を持っていなかったのは……」

「つつがなくことを進めるためよ。それじゃあ頑張つて。いい報告を期待しているわ」

「……………」

俯いたレナスは、ぐっと拳を握りしめた。

それが、少し前のこと。

ミッドガルドを見下ろして、レナスは溜息を吐いた。

ヴァルキリー、つかまれ！

お前は死神とどこが違う。

人の言葉が痛い。

それはずっと、

本当は

もつと昔から。

「久しぶりですね、師よ」

「あなたは、私が直接とつた弟子の中で一番頭の良い子だった。それが、なぜこんなになってしまったの!? 夫をさらってまでしたいことはなに? 私への復讐!? だったら夫は関係ないわ!!」

使い魔と化した猫を追って、ロレンタは見知らぬ塔を上った。
フレンスブルグのすぐ近くに、五十メートルを超える巨大な塔があった。それは、さっきまでロレンタの眼には見えなかった代物だ。これから起こる不吉な予感と、夫の無事を祈るロレンタは、彼の下まで辿り着いた。猫のあとを追って、塔の最上階 屋上になった、その場所まで。

レザード・ヴァレス。

数年前、フレンスブルグきつての天才といわれた、ロレンタの直弟子。

レザードの足もとには、夫が力なく座り込んでいた。レザードは学院生時代から愛着している丸眼鏡を、ついと押し上げた。

「復讐? あなたが私を学院から追放したことをそんなに恨んでいるとでも思っているのですか?」

「違うの? だったら、なぜ!」

「若い恋人同士というのも考えましたが、それでは積み上げたものが足りない。老夫婦では未来がない。あなたたちはさぞかし長く愛

し合っただけでしょう？　そしてこれからも」

くく、と笑声がレザードの喉から洩れる。不吉な笑みだった。

レザードを退学させようと決めた、そのときのような不吉な予感。

レザードの狂気。

「なにを、なにを言っているの？」

震える唇をなだめながら、ロレンタはそれだけつぶやいた。

胸が苦しい。いやな予感がする。とても、いやな予感が。

「私も愛したいんだ。だから……」

レザードの口角が、にい、とつり上がった。魔力が、彼の周りに集う。

キュイイイイ……！！

凄まじい魔力だった。

ロレンタは息を呑む。レザードは暗い笑みの中、はっきりと言った。

「死ね！！」

彼の足許に方陣が浮かぶ。紫色の魔術の光。それは、彼が最も得意としていた闇魔法の光だ。方陣が、五芒星を描く。

瞬間。

カアッ！！

「レザアアード！！ 思い直して！！」

ロレンタは声を限りに叫んだ。視界がかすむ。闇の光が、鮮やかに映える。曇天の夜闇に。

光が晴れたとき、レザードの姿は既になかった。

……………、

静寂が満ちる。

ロレンタは茫然としていたが、はっと我に戻ると、愛しい夫に駆け寄った。どうやら、攻撃魔法ではなかったらしい。ロレンタは考古学の魔術書に載っていた、失伝魔法の名を口にした。

「あれは、移送方陣……………！」

瞬きの間に、人が消える。

言わば、瞬間移動を可能とする魔法だ。

失伝魔法とは名の通り、今はどこにも資料のない、伝説のみが残った魔法のことだった。

ロレンタは駆け寄った夫を助け起こす。夫はびくりとも動かなかったが、まだ脈があった。安堵の息を吐く。すると、脳裡にレザードの狂った笑い声が聞こえた。

くっくくくく……………ふははははは……………！！

冷たい、笑い声。

「そこまでの力を身につけながら、なぜ道を誤ってしまったの？
レザード、レザード……………レザード……………」

夫を抱きしめながら、ロレンタは涙する。彼があれほど力を付けるまで、なぜ自分は止められなかったのだろう。

「……う」

と。

気絶していた夫が、瞼を震わせた。

「あなた!？」

夫が、ゆっくりと目を開ける。ロレンタは服の裾で涙を拭くと、精一杯夫に笑いかけた。

「ロレンタ……?」

「そうよ、私よ。もう大丈夫よ」

安心させるようにロレンタが言うと、夫は眉間に深い皺を刻みながら目をつむった。

夫の身体が、ずっしりとロレンタにもたれてくる。

「ロレンタ、私は体が変わんだ。あの男に変な薬を飲まされてから、体がまるで自分のものじゃなくなっていくような　ガアッ!」

「どうしたの!？」

夫は急に胸許を鷲掴むと、中空に向かって空気の塊を吐いた。ロレンタは目を見張る。

「これは……っ!」

レザードの得意魔術は、闇。
薬を飲まされ、身体の異常を訴える夫。
そしてなにより、

「私は、私は一体どうなってしまうんだ？」

夫から徐々に発せられてくる、邪悪な波動。

「これは……グール・パウダー!？」

つぶやくと同時に、ロレンタは泣き崩れた。

「どうして……！ 屍術師になつてまで……、レザード……！」

「ロ、ロレンタ……。私は」

「ごめんなさい……。もう私には、どうすることも出来ないの。学院で一番とは言っても、あなたを助けられないの……。ごめんなさい……！」

震える声をこらえながら、ロレンタは夫の胸に顔をうずめて泣いた。夫から発せられる波動が、だんだん強くなってくる。

世に在らざる者。

不死者の、波動が。

「あなた、あなた……!!」

「ロ、ロレンタ、私を殺してくれ。このままでは、私は……!!」

「できるわけないでしょう？ 例えどう変わってしまったおつと、あな
たは私が一番好きなひとなんですもの」

魔晶石でロレンタの様子を伺いながら、レザードは邪悪な笑みを
浮かべていた。

「感じるんだろう？ 不死者の波動を。聞こえるんだろう？ 女の、
気が狂わんばかり慟哭が。神に対してこれ以上の冒瀆はあるまい。
早く来てくれ……。私は焦がれて、焦がれて、胸が張り裂けそうだ
よ……」

詠うように、演じるように。

レザードは、そつと魔晶石の縁に手を触れる。細めた瞳から、狂
気の光が溢れ出した。

「ヴァルキュリア
愛しき者よ……」

まるで召喚術だ。

レザードは詠い終えると、狂った笑い声を上げた。

変化は劇的だった。不死者の波動が、膨らんでいく。
どくんっ、どくんっとな脈打つ度、夫の中にある歪んだ波動が、二
倍、三倍に膨れ上がっていくのが分かる。

「あなた……、あなた!!」

ロレンタは壊れゆく夫を抱いた。

「ロレンタ……」

それが、彼の最後の理性だったように思う。

どくんっ!!

強烈な拍動が、ロレンタにまで聞こえた。

そのとき、
変化は来た。

夫の肌が、どす黒く淀んでいく。血管が浮き出て、夫は上空に向かって、苦しそうに吼えた。

「ぐ、ぐあああああ!!」

「いやあああ!!」

ロレンタは絶叫する。

瞬間、

「ブリザード!!」

凜とした声が、ロレンタの慟哭を破った。

カシイインッ!!

咆哮を上げた夫の身体が凍結する。半ば、不死者へ変貌していた

彼の身体が、完全に氷に閉ざされた。

「あ、……あ……！」

氷漬けになった夫を見上げて、ロレンタは放心状態になりながらも後ろをふり返った。

立っていたのは、長い黒髪を腰までなびかせた、絶世の美女。金と蒼銀の不思議な瞳を持つ、少女だった。

「……シーティア！」

「どうも、ロレンタ先生。さっき会ったとき、凄い形相だったからなんだろうって思ってた、ついて来たんだけど……。こういうこと」

「シーティア様が来たからには、もう安心ですよ」

朗らかに微笑うシーティアの肩で、妖精型の人造生命体、ホームクルスピティも続ける。

ロレンタは目を剥いた。

「シーティア！ 貴方まさか、グイール不死者化を解除できるの！？」

彼女はメルティーナの客人。旅人だ。そうーティア本人から直接聞いていたが、彼女が絶大な魔力を秘めていることをロレンタは知っていた。

恐らく、魔力だけならばレザードにも匹敵する。

だからロレンタは、祈りにも似た気持ちで彼女にすがった。しかし、返ってきたのは否定の言葉だ。

シーティアは申し訳なさそうに、ロレンタを前に首を横にふった。

「ごめんなさい。私、不^{グール}死者^{グール}って言うのが良く分らないのよ。状態^フ異常回復魔法なら使えるけど、ロレンタさんがやらないってことは、普通の魔法じゃ解除できないんでしょ？」

「……ええ」

ロレンタは頂垂れた。どうやら、凍結は不^{グール}死者^{グール}への解除魔法を行うための時間稼ぎではなく、咄^フ嗟^フの機転^フだったらしい。

不^{グール}死者^{グール}化を解除し、夫を元に戻すには、司祭以上の高^フ位僧^フが必要だった。

そして、

そんな魔力と知識を持っている者を、ロレンタは一人として知らない。知っていたとしても、フレンスブルグには存在しないのだ。

「シーティア、お願い……」

夫はまだ不^{グール}死者^{グール}にはなっていない。だからこそ、凍結された夫が蘇生できる時間は、せいぜい一日だ。それ以上経てば彼は凍死する。

ロレンタは涙を零した。シーティアを見上げる。

「どうか、彼を」

「アルトリア以外で、またこれを見ることになるとは……」

ロレンタは、はたと瞬いた。視線を横にふる。そこに　黄金の光。

瞬間移動^{テレポート}で現れた、アレンだった。

「私の呼び出し、届いた？」

「ああ。この指輪、通信機能もあるようだな」

右手に嵌めた蒼穹の指輪を見下ろすアレンに、シーティアはこくりと頷いた。

「でも、まさか。こんな短時間で瞬間移動レポートまで真似てくると思わなかったわ。本物のアルスイ・オーブを持ってしても、それを使える人はごく一部なのに……。貴方、グローシアンなの？」

「さあな。それより」

「そうです。今はロレンタさんの旦那様を！」

ピティに促され、氷漬けになったロレンタの夫を一瞥し、アレンは頷いた。シーティアも表情を引き締める。

「で。どう？ アルスイ・オーブなら、彼を助けられる？」

「……………」

アレンは、すっと右手を伸ばた。蒼穹の指輪が輝く。

瞬間、

彼に内包された強大な魔力が、急速に集積されていた。

「……………！」

ロレンタが息を呑む。右手を伸ばたまま、アレンは言った。

「シーティア、解毒魔法ファイブを頼む」

「りよ〜かい」

気のない返事の割に、シーティアの表情は真剣だった。美しい顔に微笑を浮かべ、しかし、瞳だけは決して笑わず、そっと左手を伸べる。

彼女の蒼銀の瞳が、すう、と力を帯びた。
途端、

ばさっ……、

シーティアの背に、黄金の翼が浮かんだ。紋様のような、幾何学的な羽が。

(なに！？ この、二人の魔力は！？)

異常だった。

魔術学院すべての生徒を以てしても、この二人ほどの魔力を出せる者は存在しない。メルティーナでさえ、

「^{ディスベル}破呪！！」

蒼穹の指輪が光を放つ。と、シーティアの左手からも黄金の光が溢れた。

「フアイン！」

ぱああああ……っ！！

夫の身体が、蒼穹と黄金の光に包まれていく。
途端、

ばきいんつ、と甲高い音を立てて、夫を封じた氷が砕け散った。ロレンタは息を呑む。少しして、どっ、という鈍い音と共に、光の中から夫が倒れ伏した。

「あなた！」

ロレンタが駆け寄る。夫を助け起こすと、どす黒い肌は澄んだ赤みを取り戻し、夫は正常に呼吸していた。

「……………あ、ああー!!」

ロレンタの目に、別の涙が浮かんでくる。夫を掻き抱いて、ロレンタは大きな声を上げた。

「うまくいったみたいね」

「よかった……………!!」

ロレンタをホツとしたように見つめて、シーティアが微笑む。傍らでピティも嬉しそうに顔をほころばせた。

対して、アレンは淡泊だった。ああ、と二人に頷いて、彼は塔内部に続く階段へ足を向ける。

「待って」

シーティアが引きとめると、彼は足を止め、ふり返らずにシーティアを見た。

「私も行くわ」

「……………」

アレンは歩き出す。シーティアも、黙って彼のあとに続いた。

3 フレンスブルグ編 レザード・ヴァレスの塔

塔の研究室で、魔水晶を見ていたレザードは目を剥いた。彼の計画が、崩れ去ろうとしているのだ。

“彼女”をこの地へ呼び寄せるため、不死者を用意した。人の魂の叫びをより強く響かせるため、慟哭の深くなる人材を選んだ。そうして、女神がやってくるのだ。

ずっと待ち望んできた、彼女が。

なのに、

「まさか不死者化を、こんな連中に破られるとは!」

魔水晶を睨んで、レザードは吐き捨てた。金髪の男と、黒髪の不対の目を持つ美女。どちらも、魔術学院の人間ではない。

なのに。

彼らが放った解毒魔法は、完璧だった。

「…………おのれ!」

机に置いてあった書類を、床にぶちまけた。激しく机を叩く。だがそんなものでは、到底怒りが治まるはずもなかった。

ぎり、と奥歯を噛みしめる。もう少しだった。もう少しで、愛しい女神が。

「く、くく…………。いいだろう、すぐに殺してやる。ヴァルキュリアの眼前を穢すゴミ共が!」

魔水晶を睨み据えて、レザードは怨嗟のように吐き捨てた。

.....

「なんですって!？」

突如部屋に入ってきた少年たちに、メルティーナは目を見張った。まずアレンを呼べと言われたメルティーナだが、それには従わず、とりあえず窓を開けたときのことだ。

“ 上空に、巨大ななにかがある。 ”

ロジャーからそう聞いたときは、一体なんの話か見当も付かなかったが。

彼女は、気付いた。

そこに、塔が浮かんでいることに。

「なっ……!!」

思わず息を呑んだ。ついさっきまで、なにもなかった空に。今はいかにも禍々しい、不穏な塔がある。

ロジャーが言った。

「だ〜か〜ら〜! こいつを一刻も早く、兄ちゃんに知らせねえとやべえんだってば! どう見ても禍々しい塔だし、いかにも胡散臭えったらねえんだぜ!？」

「不死者がいるかもしれない一大事だ! アレンさんは、まだ研究室なのかよ!？」

切羽詰った様子で言ってくる二人にあとを押されながら、メルティーナは不服ながらも彼らを連れて研究室に来た。だが、そこにアレンの姿はなかった。

「嘘……。さつきまで、明かりがついてたのに」

メルティーナがつぶやくと、ルシオとロジャーは顔を見合わせた。

「くそ！ やっぱそういうことか！！」

「急ぐぞ！ アホネコ！！」

「つたりめえだ！！」

ばたばたと、慌ただしく二人が階段を下りていく。それを見降ろして、メルティーナはつい、と人差し指を立てた。円を描く。

「待ちなさい」

瞬間、二人の少年の足許に方陣が浮かんだ。

「うわっ！？」

「ふぎやつ！！」

階段を走っていた二人が、不意に足を滑らせて転倒した。メルティーナはそんな二人の下に優雅に近づくと、背後に聳える塔を指して言った。

「どついうことか、ちゃんと説明しなさい。あれはなんで、不死者

が一体どうしたっての!？」

腰に手を当てて、メルティーナが詰問する。鼻の頭を押さえた口
ジャーと、後頭部をさするルシオが、互いの顔を見合せた。

野太い雷束が、中空をのたうつように駆けた。

ズドオオツツ!!

獅子の頭を三つ持った合成獣キメラが、悲鳴を上げる間もなく絶命する。
ライトニングブラスト
雷撃の紋章術が、獅子の身体を真つ二つに両断したとき。ドツ、と
鈍い音を立てて、合成獣の死体が床に転がり 燃えた。

暗色のレンガで作られた塔の内装は、壁に刻まれた魔術文字の
所為もあって不気味だった。外見もかなり独特だが、ここまでくる
と魔術的というより禍々しい。塔内構造は緻密で複雑だったが、真
理を見通す指輪オーブの所為か、アレンの足取りに迷いはなかった。

「ずいぶん、気が立ってるわね」

合成獣キメラを焼く炎が、光となって消える。その様を見やりながら、
シーティアは問うた。

アレンが拳を握りしめる。怒りのにじんだ、乾いた声だった。

「アルスイ・オーブこいつが教えてくれた……。アルトリアでの、ゲール
パウダーの出所をな!!」

「さっきもそんなこと言ってたわね? 前も同じようなことがあつ

た、ってこと？」

「ああ」

ぎり、と奥歯を噛みしめて、アレンは足早に先に行く。抑えているが、抑えきれない彼の怒りが、空気を伝わってシーティアの肌に刺さる。

「そんな……」

シーティアの肩に乗ったピティが、悲しげに眉根を下げた。シーティアは溜息を吐いた。くしゃくしゃと頭を掻く。

「なんか、他人の怒りを見てたら自分が冷静になるって話。ホントなのね」

「……………」

アレンは答えない。ただ黙って、前方を睨んでいる。

彼は、レザードは、

罪もない王女を不死者に仕立て上げ、今度は無関係の民間人に手をかけた。

そして、

この合成獣キメラにしても。

(一体、どれだけ犠牲した……！)

この獅子を見て、すぐに分かった。否、分かってしまった。この

指に嵌った 真理を見通す宝珠によって。

この獅子は不死者ではない。まして、元からこうであった獣でもない。

作られたのだ。より強力な魔物を飼うために、野にいた獣を殺した。何十頭も、何百頭も。そのときの獣の断末魔が、親と引き離された子の慟哭までもが、指輪を通して聞こえた。

それは獣だけでなく、人間やエルフにまで及んでいて。

（レザード・ヴァレス。俺は、貴様を許さない！！）

アルスイ・オーブを握りこんで、アレンは心の底から吐き捨てた。

.....

「大丈夫？ あなた」

屋上に残された二人は、支え合いながら塔の階段を下りた。だが、階段を最後まで降りたところで、足が止まる。そこから、先がなかったのだ。

ロレンタは目を見張った。来たときは気付かなかった。塔が浮遊していることに。

「そんな……！！」

存在次元をズラし、猫を仲介させることでロレンタを瞬間移動させる。。

そんな、あまりにも人間離れたレザードの魔術に、彼女は絶望

した。

「これじゃあ、帰れない……」

「ロレンタ」

夫が気遣わしげに声をかけてくる。ロレンタはハッと顔を上げると、唇を噛んで頭をふった。

「そうね。私がいっしょにいなきゃ」

「それより、本当にいいのか？ 私を助けてくれたという、二人を追わなくて」

「……………」

夫に言われ、ロレンタは憂鬱に目を伏せた。

確かに、第三者が見ればその通りだった。フランスブルグ最高の魔術学院を束ねる学院長ロレンタを、あんな年端もいかない少年少女が超越しているなどと誰も想像しない。それに、今のレザードは、あまりにも得体の知れない不気味さがあつた。恐らく、ロレンタではどうしようもない、深淵の闇が。

だからこそ、シーティアたちに助勢するにしても、まずは夫を、安全な場所に送り届ける必要があるのだ。

せめて、彼女たちの足を引っ張らないように。

「ごめんなさい……。今の私じゃ……」

ロレンタがつばやいた、そのときだった。

「ラストディイイイツチ!!!!!!」

「きゃあああああ!!!!!!」

「バカダヌキイイイ!!!!!!」

ロケット弾のような凄まじい勢いで、彼らはロレンタの前に現れた。

正確には、塔に届く 二センチほど前に。

「……お?」

そこで、ぴたりと勢いを失ったロジャーは、彼の身体にしがみついたメルティーナとルシオに構わず、不思議そうに首を傾げた。

ひよいひよい、と手をばたつかせてみるロジャー。

だが、

二センチ足りない。

「あ」

しまった、と言わんばかりにロジャーがつぶやく。瞬間、彼にしがみついていたメルティーナとルシオの顔色が、白から青に変色した。

「や、や、……やめてええええ!!!!!!」

「アホオオオオ!!! だから、無理つつつたんだああああ!!!!!!」

絶叫。

二センチまで迫っていたロジャーの身体が、重力に従って落下していく。

「危ないっ!!」

ロレンタが咄嗟に手を伸ばした　　が、当然。ロジャーたちの落下スピードの方がはるかに速い。

差しのべられたロレンタの手にかすることもなく、彼らは落下した。

「ぎゃあああああ!!!!」

その声が遠のいていく　と、思った瞬間。

「ヒート・ウィップ!」

ロジャーの背中から、放電する電磁鞭ウィップが飛び出した。ヒュヒュンツ、と風を切って、それがどうにか、塔の突起に絡みつく。

「ぎゃあああ……!!」

がくんっ、っっ!!

鞭が伸びきった所で、三人はようやく落下を止めた。

「ふゝ、あぶね、あぶね　　なっ!　オイラの言ったとおり、うまくいったる」

ニツと笑って、ロジャーは二人を見る。が、ルシオとメルティーナは、魂が抜けたように放心していた。

.....

「ああ〜もう！ 死ぬトコだったわ！！」

ロレンタたちに引き上げてもらって、三人はどうにか塔に辿りついた。

少しくたびれているのは、ここまで来るのに、労力のほとんどを消費したからだろう。

「うう……、気持ち悪っ！」

特にメルティーナとルシオは、死を覚悟したからか、顔色が悪い。そんな中、ロジャーだけは元気に、人懐こい笑みを浮かべ、ロレンタと彼女の夫に礼を言った。

「あんがとな！ おっちゃんたちのおかげで助かったぜい」

「いえ……。気にしないで」

ロレンタが控えめに笑うと、ロジャーはぱたぱたと尻尾をふりながら、ルシオたちに向きなあった。

「んじゃ！ 改めて、兄ちゃんを追っぞ〜！！」

「お、おう！！」

くらくらする頭を押さえながら、気合で立ち上がるルシオ。それ

を横目に、メルティーナは気だるげな視線をロレンタに向けた。

「まったく、無駄に元気な奴らね……。で？ 天下の学院長が、こんなトコでなにしてんの？」

フツと人を小馬鹿にした笑みを浮かべるメルティーナに、ロレンタは息を呑んだ。

厳格なロレンタと自由奔放なメルティーナは、根本からそりが合わない。メルティーナが学院生のころから、何度も衝突を繰り返した仲だ。

だが、

「……………」

ロレンタはいつも通りに叱ろうとしたが、溜息を吐いた。夫やレザードのことで、もう気力が残っていなかったのだ。

「…………レザードに、ここに連れてこられたのよ。どうにか逃げられて、ここから脱出しようとしたのだけれど、この高さじゃ塔から降りられなくて」

「ハッ！ それで立ち往生ってわけ？ 相変わらず、口の割に大したことないわね」

ひらひらと手をふったメルティーナは、言うだけ言って満足したのか、踵を返した。

代わりに、メルティーナの傍らにいるロジャーが、目をキラキラさせた。

「心配ねえぜ！ アレン兄ちゃんなら、すぐこっから降ろしてくれ

るジャンよー!!」

「……………はあ!?!」

メルティーナが不服そうにふり返る。そのメルティーナを牽制するように、ルシオが彼女を見上げながら言った。

「ま、仕方ねえよな。先に助けてもらったのは、こっちだし」

メルティーナが舌打ちする。

「好きにすれば? ただし、あたしはその女がどうなるうが、知ったこつちゃないわよ」

「「おう!!」」

二人同時にうなづいて、ロジャーとルシオはロレンタと彼女の夫をふり返った。

「じゃ、行くうぜー!」

「俺たちから離れねえようにしてくれよな! その方が、守りやすいからよー!!」

ロレンタの腰にも満たない身長少年たちに言われ、ロレンタと彼女の夫は、不思議そうに互いの顔を見合わせた。

しばらくの間、アレンは無言だった。
レザードの塔を見渡して、シーティアは呟く。

「それにしても、たいそうな塔よね。これ造るのに、どれくらい
手間かけたのかしら？」

「……………」

「空に浮かんでるってコトは、時空制御塔に仕組みが似てるのかな
？ なんかは高い所が好きって言うけど、ホントよね。」

「……………」

「……………あんまり、焦ってもしょうがないと思うけど？」

「……………」

「ねえねえ、聞いてる？」

「……………」

「……………おゝい……………」

あまりの反応のなさに、シーティアが口をへの字に引き結んだと
きだった。シーティアの肩を浮遊していた妖精が、一閃した。

「ピティちゃん、キーンクー！！」

ヒュンッ、という風切り音。シーティアの髪が、ひらりとなびい
た。直後、

ドゴオツッ!!

アレンの後頭部に、ピティの蹴りが炸裂した。

「っ、っつ!!?」

がくんっ、とアレンは思わず片膝をついた。十六センチほどの小さな妖精が、成人の身体を傾ける。

パパッ、と目の前に火花が散る感覚。

久しぶりだった。

「……………?」

蹴られた頭部を押さえて、アレンが立ち上がる。ピティをふり返ると、シーティアを護るようにふわふわと浮かんだ妖精は、愛らしまなじりいまなじり眦をきゅっまなじりと引き締めて、アレンを睨んでいた。

「先ほどから、シーティア様を無視し過ぎです!!」

「……………え?」

ぴしゃりと叱られて、アレンは瞬いた。が、ピティは構わず、アレンの前に飛んでくると、腰に手を据え、言い聞かせるように人差し指を立てた。

「アレンさんが怒っていらっしやるのは分かりますけど、それでもシーティア様をないがしろにするのは、許せません!!」

「……………」

しばらくの、沈黙。

アレンは二、三瞬いたあと。状況をようやく理解したのか、小さく頷いた。

「すまない」

「わあ……、痛そ〜……」

気にしていない、と言う代わりに、シーティアが後頭部に手を当てる。

ピティが満足そうに笑った。

「分かって下さればいいんです」

「……ああ。少し、頭に血が上っていた」

「でしょうね。どうせ、アルスイ・オーブで余計なものまで見ちゃったんでしょ？」

シーティアに言われて、アレンは小さく首をふった。

「それは、君たちには関係のないことだ。すまなかった」

シーティアの気遣いを、やんわりと制す。すると、ペンツと今度はシーティアに、額を叩かれた。

「？」

不思議そうにアレンが顔を上げる。すると、腕を組んだピティと、

「めっ」と言いながら人差し指を立てるシーティアが、見上げてきた。

「それを“ないがしろ”って言うの。ね？ ピティ」

「そうです！」

「……そうか」

澄まし顔で言い切る二人が、なにか可笑しい。アレンは微笑のあと、語調を和らげた。

「すまない、心配してくれたんだっただな。……ありがとう」

「」

シーティアが、きよとんと瞬いた。

「……」

沈黙。

やがて、

ボンツと耳まで真っ赤にして、シーティアはそっぽを向いた。

「……別に、そんな大層なものじゃないけどね」

「ふふっ」

ピティが嬉しそうに笑う。その二人を見据えて、アレンもいくらかの平静を取り戻して、先を急いだ。

そのときだ。

アレンが視線を鋭くした。別段、敵の気配を感じたからではない。否、アレンにとっては、彼女も敵なのかもしれないが。

「どうかしたんですか？ アレンさん」

首を傾げるピティの隣で、シーティアも首を傾げた。中空を見やる。

と。

ぼん、と。シーティアがなにか思い出したように手を叩いた。

「あ、これって……もしかしてディパンで感じた？」

「ああ」

確認するシーティアに頷いて、アレンが背に視線を向ける。そのとき。

ばさっ……、

壮大な羽音と共に、蒼穹の鎧に身を包んだ、銀髪の戦乙女が現れた。

レナス・ヴァルキュリア。

彼女を見上げたシーティアが、呆けた様子でつぶやく。

「綺麗ねえ……。これが、女神様の輝きなのかしら？」

「美しさなら、シーティア様とて負けてはいません！」

「そう？」

「そうです!」

「そ、かなあ?」

「そうです!」

きゅっと口を引き締めて反論するピティに、シーティアは小首を傾げた。が、これ以上反論すると怒られそうなので、口には出さない。

レナスはシーティアを見据え、目を細めた。

「……お前は、」

つぶやくと同時に、彼女の指に嵌った黄金（ニールレンゲン）の指輪がキラリと光る。フレイの声が、レナスの脳裡を過った。

レナス、あの男を勇者（エインフエリア）の魂にし、神界に送りなさい。

神界戦争も佳境に迫ろうとしているの。貴方の働きが、今後の戦を左右するのよ。

「……………」

レナスは、すっと視線を上げると、蒼白の翼を広げた。羽音を立てる翼が、光の結晶を生む。

「我と共に生きるは冷厳なる勇者! 出でよ!」

光の結晶が、人を象る。

エインフェリア
勇者の魂が三人、召喚された。ただし、いつもとはメンバーが違う。ラウリイがいないのだ。代わりにいるのは、艶やかな黒髪を後ろで一つに束ねた、倭の侍。

象牙色の肌に、意志の強い切れ長の黒瞳。気の強そうな整った美貌が窺い知れるよう、後ろに撫でつけた黒髪。濃紺の着物と褐色の袴を穿いた彼は、その上に薄紫色の羽織を着ている。腰には刀が二本、腰刀と脇差し。名を、洵という侍だ。

「よお、アレン。自慢の剛刀はどうした？」

召喚されたアリュージェが、いつもの調子で問いかける。
アレンは答えず、視線をずっと鋭くした。

「悪いな、アリュージェ。今回の相手は、俺に任せてもらう」

アルスイ・オーブは告げている。
アリュージェたちは、『誰』が調合したグールパウダーによってあの悲劇が起ったのかわからない。

ジェラードを不死者にした薬を、ロンベルトに渡したのはレザードであると。
ならば、

(これ以上、あのことを思い出させることはない)

ジェラードを見据えて、アレンは拳を握りこんだ。

「ハッ！ なんだか知らねえが、ずいぶん乗り気じゃねえか！！」

ニツと笑うアリューゼが、肩に置いた大剣を構える。
と。

「……………」

後ろの二人が戦う態勢に入っていないことに気付いて、アリューゼは不意に、左右の勇者の魂をふり返った。
エインフエリア

「な、……………」

「……………美しい……………!!」

洵とジェラードが、呆けた様子で口を開けている。アリューゼは首を傾げた。

「あ?」

言いながら、もう一度アレンの方を見る。すると、彼の後ろに、一人の少女が立っていることに気付いた。“少女”というには、あまりにも凄艶な色香を持つ、絶世の美女が。アリューゼは瞬いた。

「……………」

「?」

視線の合ったシーティアが、不思議そうにアリューゼを見返す。

「……………」

「……アリュージェ？」

拳を握りしめ、対峙していたアレンが首を傾げた。瞬間。はっとアリュージェの瞳が、アレンに焦点を結ぶ。

「な、なんだ……？ 今のは？」

「どうかしたのか？」

容態を心配するように、アレンが問う。アリュージェは首を左右にふると、シーティアを見据えた。

（なんだか知らねえが、今までにない感覚だ。強敵と出会ったときのような、この胸の高鳴り……。こいつは、）

大剣を構え、アリュージェはニツと口端を歪めた。

「そっちのも、相当出来るらしいな？」

邪悪な笑み。やや擦れた思考が弾きだした答えに、対峙したアレンも勘違いしたのか、挑戦的な笑みを浮かべた。

「どうやら、人ではないようだな」

レナスがつぶやく。と、女神に視線をやった勇者の魂たちは、エインフェリアシーティアを見据えたまま、一様に頷いた。

「だろうな」

「当然じゃ。あのような美人、妾は他に見たことがない！！」

「ああ。常軌を逸している」

三者三様に相槌を打つ。彼らを視線の端に、レナスは言葉を続けた。

「魂の波動が人とは違う。相反する二つの魂を持ちながら、その二つを同時に存在させている」

「……女神様つて、秘密を人前でばらすのが趣味なの？」

シーティアが首を傾げる。怒っている様子はなく、ただ不思議そうだ。レナスは無表情のまま、問いかけた。

「お前は、その男に与^{くみ}する者か？その男は神の摂理に叛く咎人だ。行動を共にするならば、その火の粉を被ることもあるぞ」

「御忠告ごーも。でも、降りかかる火の粉は、払い除けるわ」

レナスが視線を鋭くする。アレンは言った。

「アンタなら分かるだろう。彼女は、屋上の夫婦を助けにきただけだ」

「……………」

「それに。そういう話はまず、俺を倒してからにしてもらおうか」

「抜かせ！」

アリュージェが豪快に大剣をふり回す。水平斬りだ。鉄片が風を切る。が、そのときにはもう、アレンは床を蹴っていた。

「なにっ!?!」

アリュージェが目を見開く。完全に捉えたと思った一撃が、アレンに届かない。数ミリ、斬線の外にいたのだ。

まるで“剣の軌道が分かっていたように”、彼は魔法の詠唱始めている。

「しまっ
」

「ライトニングブラスト!!」

アレンの掌に、紋章陣が浮かんだ。

……ズドオオオツ!!

「ぐおおおお!!」

シーティアに見惚れていたジェラードが我に返る。

「アリュージェ!!」

瞬間、洵が駆けた。

「ならば俺が!」

腰溜めに刀を構えて、抜刀術。紙一重で躲すアレンに、洵は迷わず二の太刀をふった。

「もらったっ!!」

刀を斬り上げる。後ろに下がったアレンを狙い打つ。洵の斬線が、アレンを捉える。
が。

……トン、

洵はそこで、言葉を失った。

「っ、!!」

刃の上に、アレンはいた。指先に魔力が宿っている。それで刃の上に逆立ちし、ふわりと回転するように着地する。

「そこまでだ」

レナスが切り込んだ。着地際を狙う、上段切り。が。キンツ、と甲高い音を立てて、剣が流された。

「なにっ!？」

指先に小さく凝縮された、魔力と気によって。レナスが目を見開く。
瞬間、

「破アッ!!」

アレンの掌が輝く。

ズドツ!!

至近距離で、気功掌。

「ぐあああつっ!!」

レナスが吹き飛ばす。

「「「ヴァルキリー!!」」」

三人の勇者の魂が、同時に叫んだ。

「っ、貴様!!」

洵が素早く、剣を斬り返した。否、切り返そうとした瞬間。

「終わりだ」

トンという足音が、洵の背後で聞こえた。
背筋が震える。

(俺の背後を、こつもあつさり?!?)

目を見開く。

杖を構えていたジェラードも、緊張に顔が引きつっていた。
アレンの掌に、紋章陣。

「おらあつ!!」

アリュージェが突きを放つ。
瞬間、

「サザンクロスー!!」

掌に凝縮された紋章陣が、広がった。アレンを中心に、円を描いて。それは、十字の紋章陣だった。

「バーンスト……きゃあっ!!」

最初に吹き飛んだのは、ジェラードだ。

アレンから一番遠い彼女は、足許をすくわれて尻もちをついた。
直後、

ズドオオ　　ツッ!!

紋章陣に描かれた十字が、光となって爆散した。

「ぐあああああ!!」

「うわあああ!!」

アレンの周囲にいる者、すべてを光の紋章陣が巻き込む。凄まじい勢いで弾かれたアリュージェと洵は、塔の壁に背中を打ちつけて、ようやく静止した。

シーティアが呆れたように言う。

「ちょっと差別しすぎじゃない?」

「死にはしない。これぐらいでは」

言つて、アレンは嬉しそうに微笑う。その視線の先にいるアリユ
ーゼと洵を見据えて、シーティアは肩をすくめた。

「そりゃそうでしょうけど……」

気功掌で吹き飛ばされたレナスが、アレンを睨む。

「く……！ なんだと!？」

魔術を使うことは知っていた。気功術も承知だ。なにより、今は
あの剛刀を手にしていない。
なのに。

「……とく、こつちの先を読んできやがる……!」

忌々しげにつぶやくアリユーゼに、シーティアもあきれた顔で言
った。

「ホント。アルスイ・オーブの初心者にしては、筋がいいわ。“起
こり得る可能性の中で、最善の選択肢を見せる”。あれはそういう
ものだから、当然と言えば当然の結果だけだ」

「しかし、それを差し引いても恐るべき体術と魔術ですね。シーテ
ィア様」

「そうね。魔法を構成している間に、気功術で戦うなんて。……め
んどくさー!」

眉根を寄せるシーティアに、ピティが得意げに胸を張った。

「当然です！ シーティア様のように中級魔法を詠唱なしで打てる者など、そうはいません！！」

「そう？ でも、アレンは“剣士”の割にカーマインより断然、魔術構成巧いわよ。一つの紋章陣で基礎を作って、それを何重にもすることで間髪置かずに次々と紋章術を打てるようにしてるの。

デュアル
二重魔法に似てるけど、基盤の紋章陣は独自ね。重ねて打つことも出来るけど、わざとやってないみたい。変化に富んだ戦い方って意味では、キールやラルフに近いかも」

「さすがの分析力です、シーティア様」

「えへへ。まあ、今は丸腰だから“そうせざるをえない”って言うのが本音でしょうけど」

加減が出来ない、魔法では。

その言葉を呑みこんで、のんびりと言ったシーティアは、ちらりとレナスを見やった。

ジェラードが苛立った様子で杖をふり上げる。

「やかましい！ 外野はちょっと黙っておれ！！」

「あ、怒られちゃった……」

驚いたように瞬いて、シーティアは口を嚙む。剣を手に立ち上がったレナスが、口惜しげにアレンを睨んだ。

「やはり、一筋縄ではいかないようだな」

つぶやく女神に、アレンは言った。右手に嵌った指輪が、蒼穹に輝く。

「退け、ヴァルキリー。この塔の持ち主は、アンタが目的だ」

「……なに？」

レナスが不審そうに眉をひそめる。

そのとき。

アレンの足許に、魔術方陣が浮かんだ。

4 フレンスブルグ編 賢者の石、知識の指輪

ロジャーを先頭とした一行は、塔の第三階層を歩いていた。壁に刻まれた魔術文字と、鎖の装飾を見上げて、メルティーナは興味深く顎に手をやる。

「塔全体から魔力が……。壁面に特殊な文字が刻まれているのね。でもこれは……。ルーン文字？ うそ……。失われた4番目と14番目、それに22番目の文字まである！ どういうこと？」

「レザードは……。あの子は移送方陣をも駆使していたわ」

「それって、失伝魔法ロストミスティックまでお手のものってこと？ こんな巨大な塔の存在次元をズラして隠すなんて、あいつ、一体どれほどの力をつけたのかしら」

小さく舌打つメルティーナに、ロレンタが悲しげに目を伏せる。ずんずん先を行くロジャーは、ふと、不思議そうに瞬いた。

「んあ？ なんだこれ？」

床に、五芒星がある。メルティーナは声を荒げた。

「これ……！！ 移送方陣……！！」

「いそつほつじん？」

首を傾げるロジャーに、ロレンタが答えた。

「一瞬で、対象を目的の場所まで移動させる魔術よ。この床にある方陣は、固定の術者を媒介とせず、塔自身に刻み込むことによつて方陣を機能させているんだわ。でも、こんなもの、今のあの子にとっては、塔内にいる人間を誘い込むための仕掛けとしか……」

レザード自身が移送方陣を使えることを、もはやメルティーナも否定する気はない。

本来ならば、彼が塔の床にこのような方陣を刻んでおく必要はないのだ。細部までルーン文字を刻んだ方陣は、ある程度の魔力を持った人間ならば誰でも動かせるように設定されている。

つまり、

「……畏？」

自問するようにメルティーナが首を傾げる。ロレンタも深刻な表情で押し黙った。

「ってことは、進軍あるのみじゃん！ 男として!!」

「アレンさんなら、通ってる可能性はあるよな」

ニツと笑い合う少年たちに、メルティーナは鬱陶しげに眉間の皺を深くした。

「アンタらね。畏って意味分かってんの？ レザードが仕組んだものだとしたら、この方陣の転移先だつてろくな場所じゃないわよ！」

「心配ねえぜ、メルティーナ姉ちゃん！ なにが来ても、オイラが護つてやるじゃんよ」

「罨を逆手に取る　ベリナスのおっさんトコでやった作戦だな」

「じゃん！！」

「油断は禁物よ」

釘を刺すロレンタに、少年たちはこくりと頷いた。恐らく、聞く耳はない。メルティーナは溜息を吐いた。

「……なんであたし、こいつらについて来ちゃったのかしら……」

頭を抱えたメルティーナは、しかし、別行動を取るわけにもいかない。少年たちが魔物を駆逐するのに十分な戦力を持っていることを、嫌というほど解ってしまったからだ。

ロジャーの言う通り、ロレンタもメルティーナも、魔術詠唱中は彼らに“護られている”のである。ここで、彼らと別れる方が危険だ。メルティーナの思考も、そこに回帰した。

「はあ……」

重いため息を吐いて、メルティーナは方陣の上に立つと、掌に魔力を集中させた。

……………

「ストーントウチ」

粘質な声だった。

アレンの足許に浮かんだ魔術方陣が爆ぜる。

ドオッ ……

「「「」」」

「アレンさん！！」

ピティが叫ぶ。と。レナスの前に、紫電の五芒星が描かれた。魔力が集約する。ジェラードは、思わず顔を歪めた。

「なんじゃ！？ この、禍々しいまでの魔力は！！」

「ようこそ、女神ヴァルキュリアよ。今、この一瞬をどれほど待ち焦がれたことか。思えば数か月前、初めてあなたを見たときの胸の高鳴りと同じように、私のこの胸は昂ぶっている。ヴァルキュリアよ、愛しき者よ！」

詩を紡ぐように、紫電の五芒星から現れたのは、一人の男だった。

屍術師 レザード・ヴァレス。

レナスは剣を強く握り、レザードを睨みつけた。

「貴様……、人間が、ロストミスティック失伝した呪をなぜ使える！？」

「私はあなたを見初めたときから考え続けてきました。人が死に、魂となって彷徨うのであれば、その魂と共に生きる神というのは一体なんなのか？」

「……」

まるで会話にならない。

狂ったレザードの瞳を見据えて、レナスが沈黙したとき。アレンの紋章が発動した。

「言いたいことはそれだけか？ ライトニングブラスト」

「ライトニングボルト」

レザードの掌からも、魔術方陣が発動する。

ズドオオンツツ！！！！

二つの雷が、宙をのたうちながら激突した。それは二人の中央で打ち当たると、眩い光と熱を放った。

おおっ！！

「うおっ！！」

雷の放つ反動に、アリュウゼが鬱陶しげに目を細める。空気が一瞬、激突点を中心に収縮した。

「……………」

レザードは丸眼鏡を押し上げると、瞳を細めてアレンを見やった。アレンの掌には紋章陣が帯電している。す、と研ぎ澄まされた眼光は、まるで刀のように鋭利だった。

「レザード・ヴァレス。貴様の相手は、俺だ」

「私とヴァルキュリアの逢瀬を阻むとは。ゴミクズ如きが、すぐに

冥府に送呈して差し上げますよ」

レザードの手のひらに魔術方陣が浮かぶ。同時。アレンの掌の紋章陣も輝いた。

「プリズミックミサイル!!」

「レイ!!」

レザードの魔術方陣から無数の魔法矢が。

アレンの掌からレザードに向かって、レザードを挟む様に黒い紋章陣が浮かぶ。レザードの頭上と、足許に。

瞬間、

ズドドドドドオッ!!!

浮かんだ紋章陣から、無数の光の矢が吹き荒れた。

「……げ」

アリュージェが思わず苦渋の顔を浮かべる。一方、レザードの放った六本の魔法矢に、アレンは目を細めた。

「なんじゃと!? 各属性魔法を、いつぺんに!?!」

炎、氷、闇、聖、雷、毒。

それぞれの属性を持った魔法矢に向かって、アレンは拳を叩きつけた。

「バーストナックル!!」

ズドオッ!!

集約された炎が、向かいくる矢を全て穿つ。
と。

「くっくくくく……ふはははっ!!」

レザードの笑い声が聞こえた。
レナスが叫ぶ。

「上だ!!」

アレンの頭上。

そこに、巨大な重力球が出来ている。黒い重力塊は、圧倒的な質量を持って降った。

大魔法、グラビティプレス。

「……なんで、こんなガチなの？」

シーティアのとぼけた声がした。アレンはわずかに手を開くと、重力球に向かって“矢”を放った。

光の矢を。

「ソウルフォース!!」

それは、違っていた。

この世界の魔術ではなく、アレンの使う紋章陣でもない。

それは シーティアの世界の『魔法』だ。彼女の世界に存在する魔法の中でも最強の、絶大な威力を持つ魔法。

アレンの手のひらが輝くと同時、一同は言葉を失った。その世界から訪れた、シーティアとピティを除いて。

ズドオオオ ツッ!!

光の矢は、あっさりと重力球を貫いた。そして、術者であるレザードを襲う。

「……! つつ!!」「」

その威力に、レザードまでもが言葉を失った。だが、立ち直りが早かったのもまた、レザードだ。

「リフレクトソーサリー!!」

詠唱の間もなく、レザードはリフレクサーサリー反射魔術を展開する。が、光の矢は鏡すらも一瞬で貫いた。

「馬鹿なっ!?!」

ジェラードが目を見張る。リフレクトソーサリーに返せない魔術など、存在しない。少なくとも

「予備魔法なしに大魔法を放ったというのか?!?!」

レザードが光に吞まれる。塔の壁ごと打ち抜く光の矢を見据えて、アレンは小さく舌打ちした。

「さすがは、“賢者の石”」

まるで外したような台詞だった。

「なに？」

洵が眉根を寄せる。彼の目にも、光の矢はレザードに直撃したように見えた。
ソウルフォース

リフレクトソーサリー
反射魔術をも破られた今、レザードが無事なわけがない。

普通ならば。

「ふん、なるほど。貴様もこの石が示すように、石に似た力を持っているのか。……さしずめそれは、その指輪……といったところですか？」

塔の壁を打ち抜きはしたが、レザードは移送方陣で躲していた。丸眼鏡に手を添え、彼は窺うような視線を向けて、言う。芝居がかった、詩のような語調で。

「だが綿密さが足りない。貴様も石を持つ身なら、分かるだろう？ この私に勝つことは、絶対に不可能だということが」

「……綿密さ、か。その割に、さっきのはソウルフォースはこたへえたようだな？」

レザードが感じた一瞬の恐怖を見透かすように、アレンは目を細めた。

少しの沈黙のあと、レザードがクスリと口許を緩める。

「下らない。実に下らない……。一度うまくいったとて、倒せねば

同じこと。分からぬではないだろうか。否、分からぬのだとすれば、所詮貴様はそれまで」

「……………」

アレンは沈黙する。剣を構えたまま、レナスが唸った。

「“賢者の石”だと？ それで失伝魔法を」
ロストミステイク

「そうです、ヴァルキュリアよ。私は貴方を手に入れるため、石より知識を授かった」

レナスの表情が厳しくなる。

「人が死に、魂となって彷徨うのであれば、その魂と共に生きる神というのとは一体なんなのか？ この問いに、私は神というのは魂と等価な存在だと考えるに至った。だから、私はこの“器”を造り出したのだ！！」

レザードが魔術方陣を展開した。集約される魔力。アレンとシィティアを除いて、レナスたちに緊張が走る。

移送方陣。

一同の足許に、それが浮かんだ。

パツ、

まるで、場面が切り換わるように。

気づいたとき、レナスたちが居たのは、巨大な魔術器具が軒を連ねる部屋だった。

中央にカプセルがある。それも巨大な、人一人が入るほどの巨大

なカプセルだ。液体を湛えたそれには、ホムンクルス人造生命体が収容されていた。

その人造生命体を見つめて、

「……なっ!?」「……」

アリユーゼたちが凍りついた。

人と見紛うほどに、精巧に作られたホムンクルス人造生命体の顔に、見覚えがあつたのだ。

銀色の髪を腰まで伸ばした、白魚のように滑らかな肌の、裸体の女性。

他ならぬ、レナスだった。

レザードは詠うように、話を続けた。

「神が神の器たるエルフを造り出したのと異なる方法で。エルフからこの器を。この器に入るべきは他でもない。……ヴァルキュリアよ! あなた自身だ」

そつと手を差し伸べるレザードを睨んで、アリユーゼは卑屈に口を歪めた。

「ヴァルキリーが目的つてのは、こういうわけか」

「っ、っこのん痴れ者!! 恥を知れ!!」

「……狂信者め!!」

エインフェリア悪態つく勇者の魂には目もくれない。レザードはただ、レナスを見つめていた。心底幸せそうに、絡みつくように。

レナスの表情は、険しかった。

「私を呼び寄せるために、屋上で夫婦にあんな酷い仕打ちをしたのか？」

「そうだ」

「ホムンクルスの器に魂を融合させて一人の人間を造り出すために、何人もの人や、エルフたちを犠牲にしたのか!？」

「その通りだ。神ではなく、人間としての存在であるヴァルキュリア。それが私が焦がれ、望むすべてなのだ!！」

「愚かな……。些末な思いの彼方に身を投じるか!! 人の領分を越えた行いが招くものは死ではない、滅と知れ!！」

タンツと床を蹴り、レナスが駆ける。剣戟をぶつけるレナスを見据え、アレンは嘆息した。

「やはり、退かないか」

「事情は知らないけど、貴方、あの女神様に狙われてるんでしょ？ ずいぶん親切ね」

思わせぶりに言ったシーティアは、そ、と語調を落とした。

「もしかして 惚れた？」

首を傾げるシーティアに、アレンはわずかに目を伏せ、ジェラードを見やった。

「それは、」

「ああ。あの子がって」

グールパウダーの。

その先を隠すシーティアに、アレンは苦笑した。

「……洞察力というより、まるで透視だな。君の眼は」

「そ？」

「ああ。俺の、最も信頼する同僚に似ている」

アレンは、指に嵌めた蒼穹アルスイ・オーブの宝玉を輝かせた。

「アレンさん、貴方は剣士とお聞きしました。……大丈夫なのか？」

レザードを見やるピティに、アレンは微笑った。

「ありがとう」

それで会話を打ち切るように、魔力を集約させるアレン。

剣を向けたレナスが、アリュージェが、洵が　レザードの魔術方陣の中にいた。

「ダークセイバー」

レザードが方陣を発動させた。中空から数多の剣が現れ、レナスたちを襲う。

カカカアンツッ!!

空を裂くように、剣が降る。同時、アレンも魔術を放った。

「プリズミックミサイル!!」

先ほど、レザードが放った術だ。

ズドドオンツッ!!

それがレザードの、闇の剣ダイクセイバーを穿った。アレンが鋭く叫ぶ。

「アリュウゼ!!」

「ハツ行くぜ!! 奥義、ファイナリティブラストオオ!!」

アレンの掛け声と同時、アリュウゼの大剣が唸った。

紅蓮の炎が大剣に宿る。

強烈な突きが、魔術を放った直後の、レザードを襲った。

ズドドドドオオツッ!!!!

レザードとアリュウゼが交錯する。

「なにっ!?!」

が、突きを放ったアリュウゼが、茫然と目を見開いた。
いない。

違う。レザードはファイナリティブラストの一步外で、悠然と笑

っていた。

「移送方陣か」

アレンのつぶやきと同時に、レザードの魔術が、アリュージェの足許から爆ぜる。

「バーストーム」

ズドオ　　！！

炎の魔術だ。何事かを詠唱していたジェラードだが、気が散ってそれどころではなかった。咄嗟に、アリュージェが大剣で身を庇う。

「アリュージェ！！」

「ちいっ！！」

直後、

来るハズのバーストームの衝撃が、アリュージェをすり抜けた。

「これは……、スベルガード魔法防御！？」

目を見開いたジェラードは、ハッとアレンを見やった。アレンは、アリュージェに向かって掌を突き出している。彼の腕には、紋章陣が発動の名残を示すように雷花が散っていた。

「すまぬ！ アレン！！」

ジェラードが嬉しそうに笑うと、その間に、レザードがレナスの前にいた。

「愛しき者よ、ヴァルキュリア……」

「なにっ!？」

応戦しようとしたレナスの体が、動かない。足許に、紫色の方陣が浮かんでいる。

「これは　っ!！」

J・D・ウォルスも使っていた、魅惑チャームの呪だ。ただしこれは、神の動きを止めるための。

レザードは、つい、とレナスの頬に手を伸べた。

……ぞ、

レナスの背に、悪寒が走った。

「戦いの最中に!！」

同時、洵が踏み込んだ。抜刀態勢からの横薙ぎ。我流ではあるが、洗練された洵の刀が、レザードを捉える。
が、

ドドオンッ!!

刀の間合いに踏み込んだ瞬間、魔術方陣が発動した。闇魔術
シャドウ・サーヴァントが。

「ぐおっ!？」

「洵!」

レナスが視線をふる。息を呑む洵。が、直撃するシャドウ・サーヴァントも、洵を包むような魔術防御スベルガードが受け流した。

否。

キーンツ……!

それは洵に触れると同時に、鏡面と化してレザードに向かった。

「あれは、リフレクトソーサリー反射魔術か!」

「……ちっ、どこまで先を読んでやがる。こいつら」

アリユーゼの言う通り、レザードには冷笑が浮かんでいた。

ドオ　ツ!!

レナスに触れようとした手とは逆の手で、シャドウ・サーヴァントを受け流すレザード。逆手に浮かんでいるのは魔術方陣。

魔術障壁と呼ばれる、一つの防御魔法だ。

レザードは、くい、と眼鏡を押し上げた。

「他の魔術を喰らうと魔術防御が反射魔術と化す仕掛け、ですか。小賢しい……。その程度の小細工で、我が賢者の石が欺けると本気で思ったのですか? 低俗な」

くく、と喉を鳴らすレザードに、アレンは無表情で言った。

「問いの内容が甘いな。レザード・ヴァレス」

「なに？」

レザードが首を傾げると同時。レナスを捉えていた方陣が、パキインツ、と音を立てて割れた。

「…………ちっ」

眉間に手を当て、レザードは忌々しげに舌打つ。アレンは言った。

「いかに賢者の石が長けていようと。いかに石の使い方をお前が熟知していようと。戦いに集中している俺と、レナスを構うことを前提としたお前。差が生じないのは、当然だ」

「おお！ なにか分からぬが、もっと言ってやれ！！ アレン！ 妾が許す！！」

「…………とは言え。攻め切れねえのは、その所為か」

「なんと歯痒い…………！！」

エインフェリア
勇者の魂が、解放されたレナスと、レザードの間に割り入って武器を構える。まるで彼女を護るように。

「なんのつもりだ？ エインフェリア 勇者の魂たちよ」

レナスが不思議そうに問うと、ジェラードがニツと笑った。

「退がっつておれヴァルキリー！ あのような変態、妾が成敗してくれる……！」

「……！」

レナスが目を見開く。アリュージェは大剣を構え、アレンを一瞥した。

「で？ どうする」

「不甲斐ない話だが、俺たちでは奴の動きを読むことは出来ない」

洵も刀の柄に手をやって、問いかける。アレンは少し、苦い顔を作った。

「兼定があれば、遅れを取ることはないんだが」

「それだ。刀はどうした？」

二度目のアリュージェの問いに、アレンが目を伏せる。アリュージェの傍らでジェラードも、うむ、と深く頷いた。

「遠慮せずに抜いてよいぞ！ あれは極悪なまでに強力な刀じゃが、今回だけは許してやる……！」

「……？」

洵が首を傾げている、ということとは、兼定について聞いていないのだらう。

アレンは苦笑した。少し自嘲気味に。

「すまない。今、搜索中だ」

「「なっ、つつ！！？？」」

アリユーズとジェラードが目を見開く。そのとき、レザードが動いた。

「相談は終わりましたか？ では御忠告通り。貴方々から先に、冥府に送呈して差し上げますよ」

レザードが魔術方陣を展開している。

アレンはレザードに向き直ると、肩越しにシーティアを見た。

「シーティア、彼女を頼む」

敢えて、“ジェラード”とは口にしない。シーティアは肩をすくめながら、はいはい、と気のない返事をした。

「ジェラード姫、ヴァルキリーを」

「うむ！」

力強く頷くジェラードにふっと微笑って、アレンは洵とアリユーズを促した。

「行くぞー！」

「「おうー！ー！」」

鏝鳴り音を立てて、アリュージェと洵が構える。

そのとき、

「退がるのはお前だ、人間よ」

自分を庇うように立ったジェラードを制して、レナスは言った。
アリュージェが眉根を上げる。

「本気で言ってるのか？ ヴアルキリー」

「あの先読み、俺たちだけでは厄介だぞ」

アリュージェに続いて、洵も進言する。だがレナスは、首を縦には
ふらなかつた。

「いかな理由があろうと、我々がその男に与するなどあり得ない。
神が、摂理を曲げる者に味方するなど」

断固言い切る。アレンは目を細めた。

「相変わらず、状況判断が甘いな。ヴァルキリー」

「貴様の知れたことではない」

にべもない。

アレンの片頬が、ぴくりと動いた。

「……方陣を解いたのは失敗だったか」

つぶやく。と。レナスの表情にも、険が籠った。

「私が人に劣ると？」

「なんならあの方陣、もう一度かけてやるっか？」

紫電の魔術方陣が、アレンの掌に浮かぶ。アリユーズが慌てて仲裁に入った。

「おいおい！ 三つ巴してる場合かー！」

「まったくだ。状況判断が甘いと言ったのは、貴殿だろう！」

「おお！ なんじゃ？ 面白いことになってきたの」

洵も助け船を出す。が、二人を置いて、ジェラードは？ 気だった。傍らのシーティアも、同じ顔で笑う。

「そうね〜。まったくまとまりないわねえ〜」

「おおっ！ わかるか小娘！ ヴアルキリーは、普段はあれでなかなか冷静クールなのじゃが、あやつを相手にすると、いっつも頑固なのじゃ。それが面白うての！」

「シーティア様は小娘などではありませんー！」

ピティが頬を膨らませる。

ジェラードはピティに視線を向けると、おお、と叫んで目を丸くした。

「なんじゃ！？ 妖精！？ しかし、妖精がなぜ、人についておるのじゃ？」

「えへへ、いいでしょ？ ピティって言うのよ。私の相棒」

「ピティです」

礼儀正しくお辞儀するピティに、ジェラードは更に驚嘆の声を上げた。

「あの妖精が、こつも人に懐くとは……！ 妾はジェラード！ アルトリア王国第一王女、ジェラードじゃ……！」

「なるほど。だから偉そうなのねえ」

「……なんじゃと？」

“偉そう”と言われて、ジェラードの眉間にしわが寄る。そのとき、シーティアが微笑った。

「私はシーティア。シーティア・フォルスマイヤーよ」

ふわり、と花が咲いたようだった。彼女が表情を崩しただけだというのに、その場に淡い陽光が射す。この薄暗い、そもそも存在次元の違うレザード・ヴァレスの塔に、存在しうるはずもない陽の光が、シーティアを照らし出したようだった。

「う、うむ……」

シーティアの無礼を叱りつけようとしたが、尻すぼみになる。

思わず息を呑み、頷いたジェラードは、視線をアリュージェたちに向けた。

5 フレンスブルグ編 vs レザード

「ともかく、奴は俺に任せてもらおう」

「私の邪魔をするな、咎人が」

「……………」

睨み合う。

瞬間、

「バーストーム」

レザードによって展開された、魔術方陣が吹き荒れた。

ドドオオオンツツ！！

灼熱と化した床が爆発する。ちょうど、レナスとアレンを説得しようとして、間に入ったアリユーゼを中心に。

「うおっ！？」

アリユーゼが、ひきつった声を呑んだ。

キイツッ！！

しかし、その溶岩もアリユーゼに触れる前に^{スベル}魔術防壁^{ガード}で消える。レナスが舌打った。

「言っておくが、今のが初めじゃないぞ」

釘を刺すように、びしりと指差すアレン。レザードは目を細めた。声が、低くなる。

「まったく……。とことん邪魔ですね、貴方と言う存在は。私とヴアルキュリアの逢瀬を阻むだけでなく、その間に割り入ってくるとは」

「逆だ、レザード・ヴァレス。俺にとって、お前が邪魔なんだ」

アレンは魔力を集中させる。瞬間。横からレナスが、割り入るように剣を構えた。

「出しゃばるな。奴の相手は私だと、何度言えば分かる？」

「……あまり言うと、本気で相手になるぞ」

アレンはレザードを見据えたまま、更に魔力を高める。レナスの瞳が、挑戦的に細められた。

瞬間、

「ラストディイイイッチー！！！！」

ズドオオオンツッ！！

部屋の壁を貫いて、ロジャーが現れた。

「あ」

シーティアがつぶやく。部屋に現れたロジャーは、壁を貫くだけでは納まらず、少しも失速せずに滑空した。アレンへと。

ドゴオツ!!

そのまま、アレンの腰を直撃する。

「っ　!?!」

アレンは眼を見開いた。全神経をレザードに集中したため、完全なる不意打ちである。一方のロジャーは、第二の衝撃に不思議そうな顔を、ヘルメットの下で浮かべていた。アレンの身体が、宙を舞う。

「んあ?」

ロジャーは首を傾げながらも、スタツ、と素早く着地した。

……どっ、

鈍い音を立てて、アレンは三メートル先の床に倒れ伏す。

「お?　おお?」

ロジャーは、床に倒れたアレンを見、首を傾げた。状況が分かっていないようだ。偶然の一撃だからこそ、アレンには対応出来ない一撃だった。

と、ロジャーが開けた壁の穴から、メルティーナたちが現れた。

「まったく、ホント常識ないわね。あのガキ狸。ルーン文字が書かれ

てる壁を、やたらめつたらに打ち壊すなんて……」

ぶつぶつ言いながら、メルティーナが壁の瓦礫を越える。途端、
シーティアが表情を明るくした。

「あ、メル〜！」

嬉しそうに手をふるシーティア。そんな彼女と目が合ったメルティーナは、あからさまに表情を歪めた。

「アンタ、なんでこんなトコにいんのよ？」

「なんでって？ ん〜……偶然、かなあ？」

「どんな偶然よ！！ 次元は歪んでるし、塔は浮かんでたでしょうが……！」

「ええ〜、だつてえ〜……」

唇を尖らせるシーティアに、メルティーナは眦まなこじりを吊り上げた。

「ア・ン・タ・はあ〜……！」

拳を震わせるメルティーナに、シーティアは不思議そうに首を傾げている。

どうしてこう、シーティアメルティーナメルティーナは自分が知りたいと思ったことをあっさりとやってみせ、その上自分が気づかなかったことまで、なんでもないように言い切ってしまうのか。

その理不尽が、メルティーナにはどうも許せなかった。

「そこに直りなさい！ シーティアー！！」

「ええ、なんで？ 私、悪いことしてないのにい〜！！」

口をへの字に引き結びながらも、楽しそうなシーティア。倒れたアレンを見て、うんうんと唸っていたロジャーは、ハッと目を瞠って表情を渋くした。

「お、おお……っつ！！！！？ もしかしてオイラ……！！ オイラ、アレン兄ちゃんに勝ったじゃああああんっつ！！！！？？ フェイト兄ちゃん！！ デカブツ！！ やったぜええええ！！！！」

いつになく動かないアレンに、ロジャーが歓喜して拳を突き上げる。瞬間、アレンに駆け寄ったルシオが険しい剣幕で怒鳴った。

「馬鹿野郎！！！！ アレンさんになんてことすんだ！ このバカダ又キ！！ アホ！！ ろくでなし！！！！」

「んだと！ このアホネコお！！！！」

ぴよんぴよん飛び跳ねていたロジャーが、唇を尖らせる。と。突然ロジャーのヘルメットに、重み加わった。ぽん、と。

「んあ？」

ロジャーが顔を上げる。
レナスだった。

「よくやった」

彼女はそれだけ言うと、剣を携えて勇者の魂たちに言い放った。

「行くぞ！
エインフェリア勇者の魂たちよー！！」

「……結局こうなるのか」

「仕方ねえだろ」

洵とアリユーズが言い合う。レザードから、笑みがこぼれた。

「歓迎いたしますよ、ヴァルキュリア」

恭しく一礼するレザード。レナスが鋭く切り込んだ。

「ハアッ！！」

上段切り。素早く弧を描く剣線に、レザードは半身切って逃れる。レザードの体術自体は、大したものではない。

だからこそ、余計に“賢者の石”の存在がチラついた。

「おやおや。惜しいですね」

さらに二閃、三閃。

神速の剣が、しかし一步届かない。

「もう少し頑張れば、私にかすめることぐらい、できるかもしれませんよ」

くすくすとレザードの忍び笑い。

レナスの剣速が増した。

「戯言を！！」

「手を貸すぜ、ヴァルキリー！！」

大剣を構えたアリューゼが、にやりと笑って地を蹴った。
瞬間、

キユイイイイ……！！

白い方陣が、アリューゼたちを囲む。

「な、なんじゃ！？」

ジェラードがいち早く異変に気づき、辺りを見渡した。
方陣が、光を放つ。

「チツ！！」

現れたのは、アリューゼたちを囲むように召喚された、不死者だ
った。

ドラゴンウォースウォリアー
竜屍戦士が、五体。

アリューゼは大剣を引き寄せた。

「面倒くせえ。とつとと失せな！！」

力強く踏み込む。繰り返されるのは、突き。

ズドンッ！！

鋭利な大剣の切っ先が、ドラムントウースウォリアー 竜屍戦士を胴を貫いた。

「やっってる場合じゃないみたいね」

メルティーナは、自分の周りに現れたドラムントウースウォリアー 竜屍戦士を見渡した。

勇者の魂に向けられた五体とは別に、四体。メルティーナたちの周りを隙なく囲っている。

「……あなた、下がっていて」

ロレンタが夫を退けて、杖を手取る。不死者と戦うのは初めてであるため、ロレンタの両手は、緊張に強張っていた。

そのロレンタの前に、シーティアが悠然と立つ。

「それじゃ、そろそろ派手に始めましょうか」

「派手さよりも、効率と的確さを求めます」

「はい」

ピティの言葉に、シーティアは素直に頷く。途端、レザードの目が細まった。

「ほう……。もうお出ましですか」

小さくつぶやく。その隙を、レナスが切り込んだ。

「そこだ!!」

左切り上げ。が、剣は レザードの一寸前を切る。
届かない。
歯痒さが増した。

「くっ!!」

レナスが舌打つ。

レザードは悠然と掌を向けた。

「ダークセイバー」

カカカアンツ!!

魔術で形取られた闇の剣が、レナスを貫く。

「ああっ!!」

躲し切れなかった左脚に、剣が突き刺さった。レザードが、に、と笑う。

「私が求めるのは、人間としてのヴァルキュリアであって、女神としての貴方ではない。……だから、」

掌に浮かんでいた方陣が、色を変えた。

「その器、壊して差し上げますよ。クールダンセル!!」

「調子に乗るな!!」

左右から切りかかる剣を持った水の精霊を、レナスは神速の剣で迎え撃つ。

キキキインッ!!

精霊の持つ、氷で強化された剣が、普通よりも堅い感触をレナスに与える。

「……くう!!」

たたらを踏む、レナスの左足から血が噴き出る。

「ヴァルキリー!!」

アリュージェたちに守られたジエラードが、叫んだ。

メルティーナたちとは別に、「フロントウースウオリアー」竜屍戦士三体を相手にしていたロジヤールとルシオが目を細める。

「兄ちゃん……!!」

「アレンさん!!」

「ああ、もう大丈夫だ。ロジヤール、肩を借りるぞ」

「おう! 男になってくるじゃんよ!! 兄ちゃん!!」

ぐっ、と親指を突き立てるロジヤールに、アレンはフツと笑った。

グオオオオツツ！！！！

ドラゴンタワースウォリアー
竜屍戦士が吼える。瞬間。アレンはロジャーの肩を蹴った。
タンツ、と飛び上がる。

その一寸後を、空寒い風切り音を立てて、ドラゴンタワースウォリアー
竜屍戦士の曲刀がふり
落ちる。
が、

ギインツ！！

そのとき、感情のないドラゴンタワースウォリアー
竜屍戦士は一瞬、目をひそめた。完全に捉
えたハズの、ロジャーの頭。その間に、一本のナイフを握りしめた
少年がいる。

ドラゴンタワースウォリアー
竜屍戦士の曲刀二本を見事に受け止めた、ルシオが。

「テメエら、ここまでだぜ！！」

キンツ、と短い音を立てて弾き返された曲刀。ドラゴンタワースウォリアー
竜屍戦士がたたら
を踏んだ次の瞬間、彼は風と共にナイフをふっていた。

「奥義！ リーフソードダンス！！」

タツと地面を蹴ったルシオの姿が消える。同時、木の葉が、ドラゴンタワー
竜屍
戦士の周りに散った。

……ぞぞぞ斬っ！！！！

散った木の葉から、まるで抜け出るようだった。高速に移動した
ルシオが、五方から一斉に切りつける。彼のナイフに、蒼白の雷が
宿った。

「くらえええ!!」

ズドオオオンツツ!!

野太い雷束が、のたうちながら^{下ラムントウースウオリアー}竜屍戦士を穿つ。傍にいた^{下ラムントウースウオリアー}竜屍戦士も、一緒に消し飛んだ。

「スターフォール!!」

一方ではロジャーが、斧を掲げ、炎を纏った隕石メテオを打ち当てている。

決着がついたのは、ルシオとロジャー。同時だ。ルシオはナイフを鞘に入れながらつぶやいた。

「ハッ。お前らなんか、あいつに比べたら屁でもねえぜ」

忌々しげにつぶやく。ロジャーが、にんまりと笑った。

「お! さつすが!! “レナスちゃん”のこととなると、言葉の重みが違うな! アホネコ」

ヒュンツ!!

ロジャーの目前を、ルシオのナイフがかすめた。

「うおっ!?!」

「チツ。外したか……」

真剣に舌打ちながら、もう一本のナイフの状態を確かめ始めるルシオ。ロジャーは何度も瞬きながら、言った。

「オイラが悪かったぜ、アホネコ……」

「分かりやいいんだよ」

投げたナイフを回収し、鞘におさめるルシオ。それを横目見つつ、ロジャーは、ふう、と吐息した。

「ああっ！！」

レナスの悲鳴が響く。紫電の方陣に絡められ、身体が動かない。もがくレナスの身体から、血が幾筋にも流れた。レザードがくすりと笑う。

「これで、貴方は私のものだ」

レザードは美しい銀髪を払いのけ、レナスに触れる。顔を近づける。

まるで、誓いの儀式のように。
レナスに口付けしようと。

「……っ！」

彼女は、思わず顔をこわばらせた。
瞬間。

「バーストナツクル!!」

ズドオツツ!!

炎を纏ったアレンの拳が、レザードの眼前をかすめた。

ちり……、

レザードの前髪が微かに燃える。彼は忌々しげに舌打った。

「またか……!!」

「俺からあの世に送るんだろう？ 遠慮するな」

賢者の石で軌道は分かってても、不意打ちだ。レザードが、レナスを確保したままではいることは不可能だった。

アレンはバーストナツクルを放った腕とは逆の手でレナスをつかむ。瞬間。紫電の拘束方陣が、パキインツ、と音を立てて割れた。

「プリズミックミサイル!!」

レザードが魔術方陣を放つ。瞬間、アレンの掌にも紋章陣が浮かんだ。

ギキインツ!!

アレンの紋章が、プリズミックミサイルを防ぐ。鈍くアレンの腕を伝う魔力の振動が、レナスにも感じられる。アレンは、すう、と目を細めた。

「ライトニングブラスト!!」

掌で編んだ紋章を、アレンが放つ。

ズドオオオンッ!!

雷束が、レザードを襲う。が。レザードがマントをたなびかせる
と、雷束は闇に吸い込まれる様にして消えた。

代わりに、アレンとレナスの足許に浮かぶ紋章陣。

(これは　!)

アレンが目を細めると、レザードが笑った。

「レイ!!」

先ほど、アレンが使った技だ。

ズドドドオオンッ!!!!

二人の頭上と足許から、無数の光の雨が降る。

「ヴァルキリー!!」

ドラム・トウ・スウォリアー

竜屍戦士の垣根の向こうから、ジェラードが叫んだ。
が、

「移送方陣……!!」

眼鏡に手をやり、レザードがやや驚いた顔で言う。瞬後、レザードの傍らに、アレンはいた。

「「ライトニングボルト!」」

詠唱のタイミングは、同じ。至近距離で放たれたレザードとアレンの間に、雷束が弾けた。

バチイイインッッ!!

雷が舞う。アレンは舌打つと、後ろに跳んで距離をとった。

「やはり、決められないか……」

つぶやく。と、ずっと掴んだままにされていたレナスが、アレンを睨んだ。

「貴様……、」

「ああ」

レナスが口を開くより先に、アレンはレナスを引き寄せた。よるけるようにレナスの身体が傾ぐ。不意だったのか、彼女は意外そうに目を丸くした。彼女の髪が、自分の胸板にかかる寸前。彼は横に半身切った。

ちょうど、レナスを隣に立たせる。

アレンは掌に紋章陣を浮かべた。

「ヒーリング」

黄金の光が、一瞬でレナスの傷を癒す。視線はレザードにやったまま、彼は言った。

「ここは、一時休戦といかないか？」

散々“共闘しない”と言ったレナスに、アレンは率直に言った。レナスの視線が険しくなる。今までのように、にべもなく断ろうとした。

が、

「出来れば、協力してほしい」

そう言う咎人は、恐ろしいまでの集中力をレザードに向けていた。凍るような、研ぎ澄まされた刃のような感覚が、レナスにも伝わってくる。蒼瞳は、一瞬もレザードを逃さない。レザードから離れない。その横顔を見据えて、レナスは目を伏せた。

「……先ほどのことは、礼を言っておく。……だが、」

「どうしても、ダメか？」

「……………」

沈黙した。迷う必要などないのに、言葉が出てこない。

（なぜだ）

戦乙女として、摂理に叛く者を味方するなどあり得ない。だが。

正直、気味が悪かった。

自分に似たホムンクルスも、動きを封じる方陣も、あの男に触れられることも。

それでも、彼女は、自分が潜在的に恐怖していると気付かない。

気づけない。

左人差し指に嵌った指輪が、二ヘルンゲン黄金に輝く限り。

レザードは眼鏡に手をやり、すう、と目を細めた。

「本当に……、まったくもって邪魔だ……。貴様と言う存在は！！」

レザードの魔力が極限に集中する。瞬間、空気が変わった。

アレンに緊張が走る。

「そうか……。だが俺も、どうしても許せない。貴様は、貴様のやったことだけは！！」

怒りを吐き捨てるアレンに、レナスはハッと目を見開いた。

アルスイ・オーブが蒼穹に輝く。

許せない。

ロレンタの夫にグールパウダーを吞ませ、自分を人間にするためだけに、何人も、何体も殺した。人間を、エルフを。

(そつだ。私は、この男を　　！)

視界が開けるようだった。レナスは剣を握り、言い放った。

「いいだろう。今だけは、力を貸してやる。アレン！！」

「感謝する！」

アレンの口許に笑みが浮かぶ。アルスイ・オーブの輝きが、増した。

レナスは地を蹴った。詠唱するレザードに、飛び込む。

同時。

アレンも、自分が展開させた『加速』の紋章陣を蹴った。

「^{ヘイスト}加速！！」

……ふっ、

「なに！？」

レザードが目を見開く。加速 軌道は分かるが、^{スピード}速度が予想以上に速い。眼前に、レナスの剣が迫った。

「ちっ！」

キインツ、と音を立ててレザードの魔術方陣が剣戟を流す。が一閃で終わらない。

キキキキキインツ！！

嵐のような連撃。だが、これは対応できる。問題は 神速の剣戟の裏で動く、アレンだった。

「行くぞ！ レナス！！」

「いいだろう！」

ハツと視線を背後にやる。そこにアレン。レザードは賢者の石をフル稼働させた。
と、同時。

カシインツ！！

「なにっ！？」

レザードは目を見開いた。足許に方陣。それは　レナスを散々封じた、拘束方陣だ。

「小賢しいツ！！」

弾き返す。

その一瞬、

アレンとレナスの間合いが詰まった。

(くっ！　速　っっ！！)

息を呑みつつも、レザードは魔術方陣を展開する。賢者の石が告げている。

“来る”、と。

直後、

「桜花連撃！！」

「その身に刻め！！」

レザードが防御方陣を描くより先に、彼らの連撃が始まった。

ズドドドドドオオンッッ！！

前後に接近したレナスとアレンが、苛烈に攻める。

最小の動きでレザードは攻撃の穴を縫う。躲し仕切れない場所に
防御方陣。その間、反撃の糸口を賢者の石に問う。

が。

隙が ない。

「っ！ ちいいー！！」

胆の冷える思いで攻撃を凌ぐ。

だが。

ついに蒼白に輝く剣が、炎を宿した拳が、レザードを捉えた。

「「おおっ！！！！」

左の切り上げと、右の正拳。

ズドオオオンッッ！！

「かはあっ！！」

舞い上げられたレザードが、たまらず息を吐いた。
途端、

カアンッ、カアンッ、カアアンッッ！！

三本の槍が、レザードを拘束する。飛び上がったレナスの背に、
蒼白の翼が広がった。

「神技！ ニーベルンヴァレスティ！！」

「ソウルフォース！！」

上空からレナスが、地上からアレンが、レザードに向かって光の矢を放った。

ズドオオ ツツ！！

「馬鹿なっ、このような結末は……ヴァル、キュリア！！ ……ぐわああ ……！！」

光が、レザードを呑みこむ。彼の断末魔を遮るように、轟音がかき消していく。

ルシオとロジャーが、拳を突き上げた。

「やったぜ！！」

「オイラたちの勝利だ！！」

「みたいね」

具現した槍を納め、シーティアは笑う。その前ではアリュウゼたちもただ、茫然とシーティアを眺めていた。

「……この女……！！」

「あの化物を、たった一撃で！？」

愕然とした気配が二人に起こる。アリーゼと海。シーティアはアリーゼたちを見返すと、フツと笑った。

「気にしないで。私たちが早く倒し過ぎちゃった所為で、貴方たち^{ドラゴン・トワー・スウォリアー}の竜屍戦士が普段の十倍ぐらい強くなつてたみたいだから」

「ま、勇者の魂^{エインフェリア}つてのも、思ったより大したことなかった。ってコトよね」

「……んだと？」

アリーゼの顔色に陰が籠る。メルティーナは挑戦的にハンツ、と鼻で笑い返した。

「なに？　なんか異論でもあんの？　一番手こずつてた癖に」

「……」

「くおんの……っ！！　妾に対し、なんたる暴言じゃ！　万死に値するぞー！！」

びしっ、とジェラードが杖先をメルティーナに突きつける。が、メルティーナは肩をすくめただけだった。

「ハッ、アホくさ。そんな正面から、アタシが相手になるわけないでしょ」

メルティーナが踵を返す。シーティアは呆れたように言った。

「だったら言わなきゃいいのに。メルは一言多いよね」

「アンタに言われたかないわ」

「そうかなあ？」

「そうよ！」

言って、メルティーナは腕を組む。

そのとき、スツとアレンが頭上を見上げた。

「逃げるのか！！」

アレンと視線を同じくして、レナスが恫喝する。

すると、レザードの声が応えた。

「どうやら、今回は不穩分子を甘く見過ぎたようなんです。ここは出直すとしましよう」

姿は見えない。移送方陣で逃げられたようだ。

齒痒い思いで、レナスは吐き捨てた。

「愚かな！ 神と人間の間、愛情が成立すると本気で考えているのか！？」

「これは面白いことを言う。神と人間の間？ あなたは自分が一体どのような存在なのか、まるでわかっていないようですね」

「私の存在？ 馬鹿な！！ 主神オーディンこそ我が父、創造主！」

「まあいいでしょう、そんなことは。私にとってより大切なのは、

ヴァルキュリアよ！！ 私があなただを愛しているという事実なのだから」

「世迷い言を……！！」

「それではまた、いつか」

相変わらず一方的に話を進めると、レザードの気配はもう、影も形もなくなった。

「……レザード・ヴァレス、か……」

少し前まで気配のあった上空を見据えて、アレンがつぶやく。

レナスは忌々しげに舌打つと、目の前にあるホムンクルスのカプセルを破壊した。

「このようなものを……！！」

レナスが切りつけた硝子の割れ目から、液体が流れ出る。液体のなくなったカプセルの中で、ホムンクルスは死体のように横たわっていた。

「……………」

ホムンクルスを見据え、レナスは、ぐ、と唇を噛む。

そして、

すう、と深い息を吐いた彼女は、アレンをふり返った。

「……今日の決着は後回しだ。せいぜい首を洗っておくことだ。咎人よ」

「礼を言う。ヴァルキリー」

アレンの言葉を聞くか聞かぬかの間に、レナスは勇者の魂と共に
その場から消え失せた。エインフェリア

「よし！ オイラたちも帰るか！！ 兄ちゃん！！」

「そのロレンタって人たち。散々連れ回しちゃったもんな」

二人に言われ、ロレンタ夫妻に視線を向けたアレンは、小さく頷いた。

「だが、その前に。……少し、寄り道してもいいか？」

「んあ？」

「寄り道？」

二人に答える代わりに、アレンは踵を返した。

6 フレンスブルグ編完結 欲望の産物、決意

レザードと対決した部屋から更に奥に進むと、ホムンクルスの入ったカプセルが並んでいた。

先ほどと同じ、レナスを模したホムンクルスだ。それらはまるで、眠っているように精巧に作られた人形だった。まるで、人のように。

「これ……さっきの部屋にもあったやつよね？ レザードの奴、こんな大量に」

「ひえええ！ こいつはちょっと……刺激が強すぎるぜえ……！！」

息を呑むメルティーナの隣で、ロジャーが両手で顔を覆った。その手の隙間から、少しだけ覗き込むように、ロジャーはホムンクルスを見上げている。

レナスを模ったホムンクルスは皆、裸だったのだ。

メルティーナが部屋に入った。

ホムンクルスの並んだカプセルは、レナスを模したホムンクルス以外のものもあった。陳列する女性ホムンクルスの裏側に、大きな目玉の魔物や、階下で見た獅子の合成獣^{キメラ}。まだ形を成していない生き物などが、カプセルの中で水泡を作っている。

「……っ！」

部屋の中に入る前に、アレンは思わず、顔をしかめた。前列にある物言わぬホムンクルスにはすべて、肩に短剣が刺さっている。

どれ一つ例外なく すべてに。

背の低いロジャーやルシオには、肩の短剣は見えていない。カプ

セルを仰ぐように見上げている彼らには、死角になっている。
アレンはロレンタ夫妻に言った。

「すみません。彼らを連れて、先に外で待って戴けませんか？」

ルシオとロジャーを視線で示す。ロレンタは口許を手で覆い、言葉を失った様子でホムンクルスを見ていたが、その言葉で我に返ると、ええ、と首を縦にふった。

「行きましょう」

ロレンタは言って、ルシオたちを促す。ルシオは無言のまま、素直に頷いた。なるべくホムンクルスを見ないように、顔をそむけているが、彼にも刺激が強かったらしい。顔は真っ赤だった。

大人しく部屋を出るルシオに反して、ロジャーは不思議そうにアレンを見上げた。

「兄ちゃん、どうかしたのか？」

アレンの表情が冴えないことに気付いたのかもしれない。アレンは目を伏せた。

「……弔ってやりたいと、思ったんだ」

「弔う？」

「ああ。だから、少し席を外してくれ」

ぼん、とロジャーの肩に手を置いて、アレンは微笑った。

「お？ …… 良くわかんねえけど、わかったじゃんよー!!」

「ああ」

自慢の尻尾をふりながら、ロジャーも部屋を出る。

それを見送って、アレンが部屋に向きなると、興味深そうにホムンクルスを観察するメルティーナとシーティアの会話が耳に入った。

「しつつかし、近くで見れば見るほど、良く出来てるわね……。これを完成させるのに、あいつ、どれだけの“素材”を使ったのかしら？」

「あの人、レザードさんだっけ？ レナスさんに対する執着がよく分かる一品よね」

シーティアが陳列するホムンクルスを見上げて、頷く。メルティーナは顔をしかめて吐き捨てた。

「つつたく、あの変態!!! こんなん見るために、わざわざここまで来たわけじゃないんだから!!」

「じゃ、なにしに来たの？」

「“賢者の石”ってあいつが言ってたでしょ! あれほどの魔力を一瞬で練るような代物、絶対に挿んどかなきゃ損じゃない!!」

「じゃ。もう挿めたね」

端的にシーティアが言う。メルティーナはくしゃくしゃに頭を掻

いた。

「あ・の・ね……！」

「気は済んだか」

二人の会話に割り入ると、シーティアが首を傾げた。

「どうするの？」

「バーストームで一気に片付ける。……土に還すのは、それからだ」

ふわりとアレンの掌に魔術方陣が浮かぶ。途端、メルティーナが目を剥いた。

「って、ちょっとアンタ……。これ全部破壊する気？」

「置いておくことに意味はない」

「……そりゃアンタにはないでしょうけど……。ちょっと待ちなさい」

メルティーナは掌に方陣を浮かび上がらせると、それを一番奥のホムンクルスに放った。まだあどけない、幼女のホムンクルスに。方陣がホムンクルスに当たり、小ぶりの結晶と化して、メルティーナの手中におさまる。

「まあ、解剖実験の材料くらいにはなりそうよね」

結晶を握って言うメルティーナに、シーティアは片眉をつり上げた。

アレンは無言のまま、目を細める。
そのとき。

……ゴゴゴゴゴ！

巨大な地震が、レザード・ヴァレスの塔で起こった。浮かんでい
る筈の塔で。

「な、なんだなんだなんだあ！！？」

隣の部屋に行ったロジャーが騒いだ。

当然だ。

立っているのも辛いほどの極度の揺れ。

シーティアは瞬いた。

「ん？ これって……。あ、そっか。塔にかけられた魔術方陣が、
綻んだのね。それで地震が起こってるんだ」

「魔術方陣の綻び、ですか。それって、あのレザードを倒したから
ですか？」

問うピティに、シーティアは首を横にふった。

「もっと直接的なもの。例えば」

「あ」

ふと、メルティーナが口許に手を当てた。

思い出したのだ。

ラストディッチ!!

無闇やたらに、ルーン文字の記された壁を破壊した、その所業を。

「まずっ!!」

つぶやくメルティーナを尻目に、シーティアは得意げに言った。

「そ。ラストディッチの所為、とかね」

「まあ……!!」

大きな目を、さらに丸くしたピティは、口許に手を当てた。
アレンが、シーティアとメルティーナを一瞥する。

「急いで出よう」

「そうね」

シーティアが頷く。瞬間。彼女の掌に魔法陣が浮かんだ。

……

あなたは自分が一体どのような存在なのか、まるでわかっていないのですね？

耳につく男の言葉を思い出して、レナスは顔をしかめた。

(今度はどこに向かうのじゃ？　ヴァルキリー)

レナスの内側から、ジェラードが尋ねてくる。レナスは前方を睨み、答えた。

「……奴を追う」

(追うって、どこに逃げたかわかってんのか？)

訝しがるアリユーゼに、レナスは頷いた。

「私の考えが正しければ、奴に人の領分を越えた魔法知識を与えた者がいる。そいつの居城へ赴く」

(……なんじゃ。見逃したのはそのためか)

どこか残念そうに、ジェラードが言った。だがレナスは構わない。ブラムス。

脳裡に浮かぶ不死者王の名を、面識もないのに、なぜか一番に思いついた。

賢者の石を見たとき、“人の持つ知識ではない”と確信したとき。レナスは、ブラムスこそがレザードに賢者の石を渡したと確信した。

不死者の王。

その肩書から、間違いはないと。

だがレナスは考えなかった。

なぜ自分が、一度も会ったことのない不死者王の姿までも、鮮明

に想像できるのかと。

崩れ落ちるレザード・ヴァレスの塔を、ロレンタたちはフランスブルグから見つめていた。

「そんな……！ これほどの人数を、いっぺんに転移させるなんて……！！」

シーティアの瞬間移動テレポートに、ロレンタが目を剥いたときだ。地響きを立てて、歪みに満ちた塔がゆっくりと倒れた。

ゴゴゴゴゴゴ

まるで狂気の夜の、終わりを告げるように。

その光景に一種の感慨を受けながら、一同は目を瞠った。塔がこちらに倒れてくる。

「お？ おお？ おおおおお！！？」

「ちよつ、……おいおい！！」

自分たちの立っている方へ迫りくるレザード・ヴァレスの塔を見上げて、ロジャーとルシオが目を剥いた。

アレンが、紋章陣を展開する。
が。

それを、シーティアが制した。

「ここは私に任せて。兼定がないと、流石に辛いでしょ？ あの大ききゅ」

言って、彼女は指輪を槍に具現化させる。アレンは小さく頷いた。

「頼む」

シーティアがフツと微笑う。途端、彼女は上着の内ポケットから髪紐を取り出し、それで豊かな黒髪を高めに結び上げた。

ポニーテールだ。

キユツ、と髪紐を結んだ瞬間に、彼女の瞳が凜と細まる。彼女は槍を携え、言った。

「任せる。私を誰だと思っている」

それまでの語調とはまるで違う、凜とした低いシーティアの声だった。

不敵に笑う彼女に、ロジャーとルシオが、不思議そうに顔を見合わせる。

瞬間、

具現化したグンニグルが壮絶に輝いた。

カアアアアア……ッ！！

気と魔力が、シーティアに集う。

メルティーナが目を見開いた。

「なっ………！」

「……さすがに、凄まじい魔力だ！」

言葉を失うメルティーナの隣で、アレンも目を細める。

同時、

シーティアのグンニグルに集った気と魔力が、倒れくる塔に向かって放たれた。

「インフィニティ・ソウルストライク!!」

蒼白の光が、視界の全てを呑む。

音が、遅れて耳に届いた。

ズドオ　　ツツ!!

「……………!!」

「……………!!」

「……………!!」

ロジャーとルシオが何事か会話をしていたが、まるで耳に入らなかった。ただロレンタは空を見上げ、茫然と口を開けた。

その、あまりの光景に。

……………カアツ!!

光が、塔を貫く。

が、塔を破壊しきれない。二つに分かれた塔が、別方向に向けて倒れ込む。

そう思った。

だが。

光の束が徐々に膨らみ、塔全体を呑みこんだ。
白い光の 中に。

「……………！！」

「……………！！」

光線が、レザード・ヴァレスの塔を食い破っていく。塔が消えてなくなるまで、光線の勢いは止まらない。

そして、

塔に覆われた視界が、曇り空を映した。インフィニティ・ソウル
ストライクの名残を見せつけるように、一つだけぼっかりと穴の空
いた、雲間が。

それを見上げて、ルシオはつぶやいた。

「あ、……………あり、えねえ……………！！」

「すつ、……………げえじゃん！ シーティアお姉様！！」

茫然と、ルシオとロジャーがシーティアを見る。途端、シーティ
アは髪紐を解いた。

凜とした面差しが、柔らかい感情の中に溶け込む。

「えへへ、そうかな？」

照れ笑い、頭を掻く彼女に、ロジャーは目をキラキラさせながら
何度も頷いた。

「すつげえ……………！！ すつげえぜ！！ お姉様！！」

「……う、嘘だ……。こんな天然ぼやぼやの、アホそうな姉ちゃん
が……」

ルシオは、ふるふると首を横にふる。シーティアがムツと唇を引き結んだ。

「なによあ〜！ 天然ぼやぼやって、私、世間ではしっかり者のお姉ちゃんなんだから！」

「アホそうなのは、否定しなくていいのか？」

「あ、……そっか」

アレンの指摘に、シーティアは、ぼん、と手を打った。ピティが得意げに笑う。

「普段は天然そうに見えても、“ファフニール火竜の戦姫”となったシーティア様は、凛々しくカッコいいのです」

「ふあふにーる？」

ロジャーが首を傾げる。隣のルシオも、良く分からない様子だった。ピティが人差し指を立てて、したり顔で言う。

「髪を結いあげたときのシーティア様のことです。己の内にある“能力”を開放したお姿に、周りがファフニールと、シーティア様を呼ぶようになったのです」

「へえ〜……！」

「……別人に見えたのは、その“能力”つてのを開放したからなのか？」

首を傾げるルシオに、ピティはそうです、と頷いた。

「……………」

「……どうしたの？ メル」

しげしげと、こちらを観察するメルティーナに、シーティアが首を傾げる。と、メルティーナは、ハッと瞬いた。

「……べつつになんでもないわよ。……アンタ、相変わらずホントに非常識ね」

「非常識って……、私。悪いことはしてないもん」

「それだけシーティア様のお力が凄かったということですよ」

「そっかなあ？」

「そうです」

ニコニコと笑うピティに、シーティアもにっこりと笑い返した。

「そっか」

「はー」

ピティとシーティアが笑い合う。
と、

アレンがルシオとロジャーを一瞥した。

「それじゃあ、俺たちはそろそろ行くぞ」

「もう発つのか？ 今日ぐらい泊まっていたら？」

首を傾げるシーティアに、アレンは空を見上げた。

「もうすぐ夜が明ける。旅立つには、ちょうどいい時間帯だ」

ルシオたちも空を見上げる。すると、東の空が白み始めているのが見えた。

「もちろん、ルシオとロジャーが休んでからの方がいいと言っなら、
出立は見送るが」

「俺はいつでも行けますよ！ アレンさん」

本当は少し眠りたかったが、ルシオは間髪を置かずに頷いた。
渋ったのはロジャーだ。

「兄ちゃん。おいら、昨日はあんま寝てねえんだぜ……。せめて、一眠りしてからにするじゃんよ」

ロジャーがごしごしと目をこする。緊張が解けた所為で、眠気が
押しているのだろう。

アレンは微笑った。

「分かった」

「じゃ。あたしたちもそろそろ帰ろっか。メル」

「……そうね。結晶化させたアレも、ちゃんと保管しないとイケないし」

くるりと踵を返すメルティーナ。
それを、ロレンタが制した。

「ちょっと待って」

それぞれが、宿に向かう足を止める。ふり返ると、ロレンタが穏やかな笑みを浮かべていた。

「今夜は、本当にありがとう」

ロレンタは深々と頭を下げる。シーティアが肩をすくめた。

「気にしないで。ロレンタ先生」

「そうだぜ！ お安い御用じゃんよ！！」

「人助けは重要だしな」

ルシオとロジャーも頷く。ロレンタは首をふって、胸許で両手を握った。

「もしなにかお困りのことがあったら、私に言ってもらえないかしら？ 大したことは出来ないかもしれないけれど、出来る限りのお

礼をさせてもらいたいの」

ロレンタは夫を一瞥する。彼女の夫も、異論ないと言わんばかりにうなづいた。

ロジャーの表情が、明るくなる。

「じゃあ！　じゃあオイラ！　飯が食いたいジャンよ！！　今日はあんま夕飯食ってねえから、腹が減って腹が減って……」

「それなりの量は用意したハズだが？」

「ぎくつ！…！」

首を傾げるアレンに、ロジャーはあからさまに顔をこわばらせた。口をへの字に引き結ぶ。ルシオも、せわしく視線を泳がせた。

「あ、えっと……それは……その。いろいろ、あつたじゃんよ……」

たらたらと汗をかきながら、ロジャーは折り合い悪く、人差し指をつつき合わせる。アレンは苦笑して、追及を止めた。

「仕方ないな」

「なら、ぜひウチにいらして。こんな時間に、食事を用意するのも大変でしょう？」

「すみません」

頭を下げるアレンに、ロレンタは首を横にふった。

「お安い御用よ。ね、あなた」

「ああ。たっぷりふるまってやってくれ。ロレンタ」

笑い合う二人に、アレンはもう一度、礼を言った。

.....

レザードの凶行から、更に一日が過ぎた。

助けてもらった礼に、とロレンタから強く勧められ、彼女の家に泊めてもらったアレンは、床に着く前にフレンスブルグを散歩した。街灯の明かりすら消えた深夜。月だけが、街の往来を照らしている。

アレンは川の畔で足を止めると、背の低い橋の手すりに腰かけた。黒い川面に、月が映り込んでいる。

彼は小さく息を吐き、自分の右手を見つめた。

しばらくの間、他になにをするでもなく、ジッと。

「ちょっといい？ アレン」

数十分か、一時間か 時間の感覚が麻痺するところに話しかけられて、アレンはアルスイ・オーブから視線を上げた。ふり返ると、月に照らされたシーティアの美貌が、こちらを向いている。真剣な彼女の眼差しを受け、アレンは首を傾げた。

「こんな夜更けにどうした？ いくら腕に覚えがあるとはいえ、女性の人歩きは感心しない」

「一人じゃありませんよ、アレンさん」

シーティアの肩に乗ったピティが、得意げに言う。
アレンは首をふって、苦笑した。

「……いや。そういう意味ではなく」

「そう？ これって、れっきとした保護者同伴でしょ？ ね、ピティ」

「はい！」

にこにこ笑い合う二人に、アレンは溜息を吐いた。

「それで。なにか用か？」

「ちょっとね。気になることがあって」

「気になること？」

「うん」

シーティアは一つ頷くと、アレンの隣に腰かけた。瞬間。甘い香りが、ふわりと広がる。反射的に、アレンは少し、彼女と距離を取った。

（無防備な……）

困ったように彼女を見ると、シーティアの表情は無垢だった。た

だ不思議そうに、アレンを見返してくる。

恐らく、自分の美貌を自覚していないのだろう。

常識をかなり逸脱した美しさを持っているがゆえに、彼女の行動は危なっかしく思えた。

「シーティア様は、いつもこうですよ」

ピティがアレンの意図を読んだように言い、含み笑う。アレンは苦笑した。

「君が傍にいるのは、正解だな」

「勿論です！」

ピティは声を高くして、得意げに胸を張る。シーティアが首を傾げたまま、言った。

「もしかして、レナスさんのこと考えてた？」

どう勘違いしたのか、そんなことを問うてくる。

アレンは溜息を吐いた。

「……レザードのことを、言っているのか？」

擦れた彼女の思考を、読み解くことはしない。

ただレナスと聞いて、アレンが最初に思いついたのが、あの言葉だった。

あなたは自分が一体どのような存在なのか、まるでわかっていないのですね？

問い返すアレンに、シーティアはこくりと頷いた。

「実はね、私も感じたの。あの女神様、もしかして記憶や力を封印されてるんじゃないかな？ 自分で意図的にやってるのかもしれないけど」

「記憶を？」

「うん。だって彼女、左手に指輪をつけてたでしょ？ あれ、記憶封印の魔法品よ。^{マジックアイテム}詳しい構成はこの世界のものだから分からないけど、出来る上がるものって言えば、魔術も魔法も変わらないから、すぐに分かったの」

「……そんなことをして、一体なんの得が？」

「さあ？ でも、ある程度の察しはついてるんじゃない？」

シーティアに言われて、アレンはアルスイ・オーブに視線を戻した。

「……さあな。それが、良く分からない」

「？」

シーティアが意外そうに目を丸くする。アレンは、そんな彼女に苦笑した。

「俺が、察しのいい人間だと思ったのか？」

「えっと……普通よりは、ね」

彼女が歯切れ悪く頷く。アレンは空を見上げた。

「逆だ。俺はよく間違う。相手の意思も、己の心も、見えなくなる
ときがある」

「アレンが？」

「ああ」

頷いて、アレンは指輪を見据える。蒼穹の指輪は輝いていない。
アレンは指輪に問いかけず、自分の考えを整理していた。

「だから、見失わないように注意するんだ。……それでも、自分の
判断が洞察によるものなのか、先入観によるものなのか。ヴァルキ
リーに関しては、よく分からない」

「……」

シーティアは沈黙した。川の心地良い水音が、聴覚を支配する。
微風が吹いた。

シーティアの黒髪が、ふわりとなびく。

「良ければ聞かせてもらえない？ 貴方とレナスさんのこと」

「……そう、大した話でもないんだが」

「それでも、シーティア様に話すことではなにか見えるかもしれませ
んよ」

諭すようにピティに言われて、アレンは頷いた。

「そうだな。客観的意見を聴くのは、悪くない」

「そういうこと」

シーティアにあっさりと言われる。アレンは苦笑した。

「俺が初めてヴァルキリーに会ったのは、ジェラード姫が不死者グールにされたときだ」

話し始めたアレンは、記憶を掘り起こすように遠い眼をしていた。

「アルトリアの王女だったジェラード姫は、家臣の策謀によって不死者グールにされた。」

当時の俺は、不死者がどういうものか知らず、姫だということにも気づかずに、姫を殺そうとした。そのときに、空からヴァルキリーが現れて、アリュウゼと共に姫を倒したんだ。俺が不死者を見たのも、戦乙女を見たのも、それが初めてだった」

「悪霊とか英霊って類は私たちの世界にもあるけど、人があんなくちゃうのはないものね。召喚されたのとも違うみたいだし」

「ああ」

アレンは思い出すように、わずかに目を細めた。

「ヴァルキリーが何者か分からないときは、寒気がした。彼女には気配がない。まるで空気のように透明で、すぐそこまで近づかれな

いと分からない。だから　少し怖かった」

「怖い、ですか？」

「私だつたらまず、あの美人ぶりにびっくりするけど？」

首を傾げる二人に、アレンは少し自嘲気味に笑って、首をふった。

「昔から、人に隙を見せないよう訓練されているからな。気配の読めない相手には、どうしても警戒してしまう。……自分でも、過剰だとは思うんだが」

「難儀ねえ」

「ああ。でも、それから“戦乙女”というものをある程度理解して、もう一度彼女に会ったとき、俺は安心したんだ」

シーティアが目を丸くする。視線でなぜ？　と問うてくる彼女に、アレンは川面に映る月を見据えて、答えた。

「死に向き合う彼女は、真摯だった。少なくとも俺の目には、彼女が慈悲深く見えた。彼女は魂を冒瀆する不死者に怒りを持ち、人の心を守った。だから俺の戦友が、彼女のような存在に連れて行かれたのならと　」

アレンは言葉を切り、拳を握り締めた。

軍人だったころの、戦友の最期を思い出しているのかもしれない。シーティアが寂しげに目を細める。ほんの少しだけ、憐れむように。

「……アレンさん……」

ピティも同情で口を嚙むと、水面を見据えていたアレンが嘆息した。

「だが、俺の認識は、ヴァルキリーと剣を交えることで変わった。彼女の剣には、あまりにも重みがない。あれほど慈悲深い目をしていたのに……変だと思った。

人の怒りも悲しみも、彼女ならすべて受け止めてくれる気がしたのに、彼女はなにも持っていなかったんだ。

そして、それが分かると、自分の先入観にも気づいた。戦乙女にこうあって欲しい、こうあるべきだと、俺は勝手な理想を彼女に重ねていた。だから、神と人の齟齬が納得出来ないんだと」

「でも、エインフェリアには、ずいぶん慕われてたわよね。彼女」

「私にもそう見えました」

「……そうだな」

シーティアたちの指摘に、アレンは素直に頷いた。彼は深い息を吐く。肩にかかった重みを、少しでも抜くように。

視線は相変わらず、遠い場所を向いていた。

「少なくとも、ヴァルキリーが、本当に人間の情が分からない神であつたなら、アリューゼやジェラード姫が、あんな晴れやかな表情をすることはないだろう。それに、……」

言いかけて、アレンは首を横にふった。

「俺も、ある程度理解すべきと感じていた。人には人の理屈があるように、神には神の理由がある。だから、ヴァルキリーが俺を“摂理の輪を乱す者”と言っても、なにも思わなかった。

納得出来ない点はただ一つ。まるで、俺に人を見殺しにしろというような、神の言い分だ。兼定をなぜ、俺から奪ったのか」

アレンはそこに収まっているべき愛刀を思い出すように、自分の左手を見た。

「兼定は、俺を人のまま……俺が本懐を遂げられるように、最後まで付き合ってくれた刀だ。兼定アイツがいたから俺は、俺のままでいられた」

「……………」

「兼定アレは強力無比な刀だ。一つふれば、斬れぬものなどない。……だが、持ち手が不適合であれば、その刃を抜くことは出来ない。俺にも、兼定を抜けない時期があった」

アレンはアルスイ・オーブから視線を外し、シーティアを見据えた。指輪の宝玉と同じ、蒼穹の瞳で。

「自分でも分かっている。感情的になっっていることは。でも……………」

言いかけて、彼は噤んだ。

客観的な意見を求めながら、過ぎた主観を述べるのは、ただの利己主義だ。自分は間違っていないと、他人に言わせたいに過ぎない。だから、シーティアたちの言葉を待った。まるで、判決を待つように。

シーティアは、ふうん、と頷いた。

「アレンは真面目ねえ。普通は自分のことに手一杯で、相手の都合なんて考えないのに。まして、相手は神様だし？」

「……」

「貴方が結論を出せないのは、“神様”って存在がどんなものなのか、その本質が分からないからでしょ？ だから、ありとあらゆる可能性を考えて、結論が出ない。アレンの状況を考えれば、さつき貴方が言ったことは偏ったものじゃないって私は思うけど？」

「……だが、それだとヴァルキリーは……」

最も高い可能性を思い浮かべたのか、アレンは表情を暗くした。

シーティアは言う。

「あのね。これは勘なんだけど、レナスさんの記憶を封じてるのは彼女よりも偉い神様じゃないかな？ それに、彼女は人間の怒りや悲しみが分からないんじゃないかと、分からないようになってるの。だから、アレンも戸惑ってるんじゃない？ あの女神様が、妙に人間臭く見えるのに、どうしてって」

「……」

「剣に感情が宿らないのは、その所為じゃないかな？ だから実力が出し切れない。いずれにしろ、今の彼女が本来の彼女でないのは、確かなことね」

そこまで言った彼女は、驚いた様子もないアレンを見て、頷いた。そっとアレンの顔を覗きこむ。不思議な光を放つ、金と蒼銀の瞳

で。

「アレン、“主神”って言葉が一番引つ掛かっているんじゃない？」

「！」

ハッと息を呑んだ。シーティアを凝視する。レナスのことを考えると、一番に疑問に思う、神のことを　彼女は、言い当てた。洞察、というより透視。

自分が言ったことを思い出し、彼は苦笑した。

「どうして、そう思った？」

「だって一番怪しいじゃない。兼定を奪ったのも、主神の差し金なんでしょ？　それにレナスさんに命令を出すのだって」

「……やはり、そう思うか？」

シーティアはにべもなく頷いた。どの道、いくら神の意志とはいえ、兼定を預けたままにするつもりはない。

アレンは息を吐いた。

「兼定は、ヴァルハラ神界にある」

「うん」

シーティアが頷く。

「ヴァルハラ神界は、肉体を持つ人間には行けない場所だ」

「そうね」

シーティアは軽く伸びをすると、靴を脱いで川に浸した。夜闇の中で、彼女の白い脚が淡く輝く。今日はいつもの革^{レザー}パンツを履いていないために余計だ。

彼女の素足は、理想的なバランスですらりと川面に伸びた。

アレンは空を見上げたまま、拳を握った。

「……それでも、必ず取り戻す。そのためなら……」

遠い地の刀に向かって、告げるようだった。シーティアは川に浸した足を動かして、ちゃぼん、と波紋を作ると、小さく笑った。

「でも“自分の考えが先入観によるものか、洞察によるものか分からない”って。そういうの、アルスイ・オーブに聞けばすぐに分かったでしょ？ どうしてやらなかったの？」

問われて、アレンはシーティアを見下ろした。

「なぜ、か……。そうだな。

確かに、この指輪は便利だが、反面、便利すぎるんだ……。

俺は、兼定を取り返すためにヴァルハラに行きたい。だが、それはヴァルキリーには直接関係のないことだ。指輪にヴァルキリーのことを尋ねれば、彼女の背負っているものまで、全て見てしまう。

だから、人の内側を覗き見るような真似は、するべきじゃないと思った」

それは見ることへの不安ではなく、相手への気遣いだった。

“神”と断言しておきながら、人間に接するようなアレンの考えに、シーティアは口許を緩めた。

「やっぱり……似てるわね。そういう、相手のことまで背負うト」
失笑だった。だが、今まで浮かべたどの表情よりも穏やかな、シ
ーティアの表情。
アレンは首を傾げた。

「なにか言ったか？」

「ううん、なんでもないわ。ただ、弟に似てるなって思っただけ」

「カーマインに？」

「……ちょっとだけね。ま、がんばってアレン。私も、できること
があれば協力するから」

笑うシーティアに、アレンは頷いた。

「君たちは、ここに残るんだっただな」

「ええ」

「なら、ロレンタさんとメルティーナさんによろしく伝えてくれ。
夜が明けたら、俺たちは出立する」

「もう行かれるんですか？」

「ああ。ロジャーたちの体力も、そろそろ回復するころだ」

「じゃあ、メルはたぶん聞かないと思うけど、伝えとくね」

アレンは苦笑した。

「頼む」

ぱしゃぱしゃと、シーティアが水面を揺らす。
その彼女に、アレンは最後に言った。

「シーティア」

「ん？」

「今夜はありがとう。君のおかげで、気が晴れた」

「……大袈裟ねえ。やること自体は、決まってたんでしょ？」

ふい、と顔を背ける彼女に、ピティがクスクスと笑う。アレンはアルスイ・オーブの嵌った右手を、握りこんだ。

「ああ。だが、これでもう、迷わない」

言った彼は、蒼穹の瞳を空へと向けた。主神オーディンが鎮座する、ヴァルハラを見上げるように……。

ブラムス城（前書き）

VPルシオの性格を変えています。

ブルムス城

大陸の西に、不気味な城があった。人の手を拒むように鎮座した、薄暗い島。

その中央部には、陽の当たらない夜にのみ姿を現す、白亜煉瓦を積み上げた独国調の城がある。壮健だが、頑強な城壁には、暗色の蔦が這うように伸びている。

一目で、禍々しいといえる城。

これが不死者王の城だ。

この城の存在を、知る者はそうない。人においては当然であり、神においては必然だ。だが、戦乙女に限っては、その両者でもなかった。彼女たちは、不死者王の居城を知る数少ない存在の一つだったのだ。

レナスは城を見上げ、眉をひそめた。

(なぜ、今まで気づかなかった……?)

これほどの狂気を。

レナスにとつて、下界は初めて訪れる世界だった。ミッドガルド明らかに城を取り巻く空気が、下界のそれとは違うが、場所が場所だけに来たこととはない。それなのになぜか、城を見上げた彼女は、既視感を覚えていた。

会ったこともない不死者王の姿が、なぜ脳裡に浮かぶのか、理由は分からない。だが、不思議にも思わなかった。

なぜなら、彼女には不死者の波動を感じ取る力がある。この、城から立ち込める凄まじい瘴気を感じ取る力が。

ゆえに、

レナスは城を睨みつけた。まだ中に入っていないが、それでも分かる。城内に蠢く、異様な数の不者たちの気配が。

あのディパン以来　否、数は廃墟の方が多かったが、一つ一つが凝縮されたような、この強力な気配は、総計すれば、断然こちらの方が濃厚な瘴気を放っている。

レナスは大きく息を吸い込み、城内に踏み入った。

.....

.....

彼は、剣を杖代わりに不死者王を睨みつけた。肩で大きく息をし、幾筋もの裂傷から、血がぼたぼたと滴り落ちる。

不死者王は、傷だらけの青年を見下した。

「人間が、私にかなうと思ったのか」

感情のない声だった。不死者王の唇が割ける度、鋭い犬歯が鈍く光る。不死者特有の土気の肌と、ざんばらに伸びた黒髪、炎のような紅い瞳、獅子のように獰猛な、彫りの深い面立ち。

それらを睨みながら、青年は言った。

「.....あいつの。ニブルヘイムに逝った、あいつの逝き先を、この目で見るまでは.....！」

「死に急ぐか、弱き者よ」

青年を見据え、不死者王・ブラムスは目を細めた。赤い鎧に身を

包んだ青年が、剣を握り込む。精悍な剣士だった。まだ幼さの残る面立ちだが、その碧瞳には迷いが一切ない。感情も、生への執着すらも。

ただブラムスを睨む、鬱々と刺すような視線だけが、青年の意識を保った。

と。

ブラムスはそこで、青年から目を反らした。部屋の入口を見やる。新たに現れた、侵入者を迎え撃つように。

「ヴァルキュリアか……」

独り言のように、不死者王はつぶやいた。

青年が顔を上げる。

そこに現れたのは、女神だった。

「……！」

蒼白の翼をはためかせ、レナスは玉座の間に降り立つ。と、彼女は腰の剣を抜き放ち、ブラムスを睨みつけた。

「覚悟は出来ている、ということか？」

彼女の銀髪が、薄暗い部屋の中でも淡く光る。それを見つめて、青年はただ、息を呑んだ。

「……ブラ、チナ……？」

それは青年の知る、少女の名前。

だがそれを口にした途端、青年は激しく顔をしかめ、レナスから視線を反らした。

ブルームスがレナスに向き直る。

「決着をつけにきた、というわけではないのだな……」

「決着……？」

思わせぶりな不死者王の科白に、レナスは目を細めた。不死者王が息を吐く。

「ヴァルキュリアよ。一体、お前の身になにが起こったのだ？ お前は私のことはおるか、妹のことすら覚えていないのだな」

「……なにが言いたい」

「オーデインは一体なにを考えている……。お前を人形にでも変えるつもりなのか」

憐憫にも見える、不死者王の変化。瞬間。不死者王の姿はフツ、と消えた。

「……」

レナスが剣を握る。が。不死者王はすでに、拳の間合いに入っていた。

「動けまい」

鋭く伸びた不死者王の爪が、レナスの首許に突き付けられている。身じろぎすら出来なかったレナスに、ブルームスは心底落胆したように溜息を吐いた。

「私の乾いた心を満たしてくれるのは、お前だけだと思っていたのに……」

「黙れ！ 不死者の戯言に、耳を傾けるとでも思ったか！」

「病状は深刻だな。あれを見てもなにも感じないのか？」

不死者王は言うと、炎のように紅い瞳を、そつと上に向けた。

レナスも視線のあとを追う。と。

玉座の天井に、巨大水晶があった。その中に、鎧に身を包んだ女神が眠っている。

戦乙女だ。

豊かな金髪を腰まで伸ばした、浅黄色の鎧を着た戦乙女。

……ずきんつ、

レナスは鈍痛を覚え、ブラムスを睨みつけた。右の人差し指に嵌ったニーベルングの指輪が、黄金に光る。

「黙れと言っているだろう！」

レナスは迷うことなく、剣をふり切った。

完全に不死者王を捉えた神速の剣が、不死者王の一寸前を通り過ぎる。

（なにッ！？）

驚くレナスにブラムスは瞳を細め、溜息を吐いた。

「レナス。我らの戦いは、このような形で決着すべきものではないはずだ」

ブラムスの言葉に呼応するように、頭が鈍く痛む。

レナスは剣を握り直し、踏み込んだ。上段から斬り下ろすが。

斬ったのは、ブラムスの影。

レナスは目を剥いた。

「っ！」

慌ててふり返ると、背後に迫ったブラムスの裏拳が、容赦なくレナスの頬を打ち据えた。

ズドンッ！！

「ああッ！！」

たまらず悲鳴を上げ、レナスの身体が宙を舞う。同時。ブラムスの拳に、紅い瘡気が宿った。

……ぞくり、

レナスの背に、怖気。

不死者王の紅の瞳が、殺気を放つ。

「おをつ！！」

鋼鉄のような拳が、レナスの顎を突き上げる。レナスの目の前に火花が散った。視界が、白く染まる。

「沈めっ!!」

ブラムスの呼気が響くと同時、レナスの身体が地面に叩きつけられた。

剣を間に挟むように、レナスは防御態勢を取ったが、その剣ごと

玉座の間の床が、圧倒的魔力によって碎け散る。

瓦礫となったその中央に、レナスはなにも出来ぬまま、沈み込んだ。

「ば、かな……!!」

立ち上がるうとするが、^{ダメージ}損傷が大きい。震える腕では、立ち上がることも出来なかった。

ブラムスは、レナスを無感動な紅瞳で見下ろした。

「これが、今のお前か……」

つぶやいたブラムスは、ゆっくりと拳を握り締めた。

そのとき、

「おをつ!!」

斬っ!!

玉座の間で血塗れになっていた青年が、不死者王に向かって剣をふり上げた。

「ぬ」

紙一重でブラムスが躲す。斬線を改めた青年は、即座にブラムスと対峙した。

ぴしゃっ、と青年の傷口から血が噴き出る。が、動きそのものは機敏だ。

ブラムスは青年に向き直り、目を細めた。

「……その傷で動くとは。貴様、命が惜しくないのか？」

「不死者に言われる筋合いはない」

即答する青年に、ブラムスは苦笑した。

「それもそうか」

ゆらり、とブラムスの背に炎が宿る。

レナスは目を見開いた。

「退け！ 人間が、適う相手ではない！！」

「アンタに言われる筋合いもない」

青年はぶっきらぼくに言い放つと、ブラムスに向かって切り込んだ。

「ハアッ！―！」

（ぬ？）

切りこんでくる、青年の姿勢が低い。ブラムスが小首を傾げると

同時、青年の剣が、下段から斬り上げられた。

ヒュンッ！！

なかなかの剣速だ。が、不死者であるブラムスに、対応できない速さではない。

ブラムスは言った。

「引き際を知らぬとは、愚かな」

不死者王が拳を握る。と。彼の土気色の腕がメキィッ、と音を立てて倍の太さに膨れ上がった。

ギィイインッッ！！！！

無造作にふり上げられた不死者王の腕が、そっ首を叩き切ろうとした刃をあっさりを受け止める。

「っ！」

青年が息を呑む。

剣をふった、青年の腕が痺れた。

「この、化け物が！」

つぶやく青年を睨んで、不死者王が剣を受け止めた腕をふった。瞬間。

ドオオオンッッ！！

衝撃波が、青年を襲った。

「があああっ!!!」

まるで紙切れ同然に、青年が吹き飛ばす。追い討ちをかけるように走った炎柱に、身が焦がされる。

「!」

レナスは目を見開き、剣を握った。

だが。

立てない。

「ばか、な……!!?」

損傷の激しい体が、まるで自分のものでないように感じられた。

激痛はない。

体の感覚が、ないのだから。

レナスは不意に沸いた焦燥にかられながら、不死者王と対峙する青年を見据えた。

「おをつ!!!」

壁に背を打ちつけたのも束の間、青年が即座に切り込んでいく。ブラムスが呆れたように言った。

「痛感覚がないのか？ 貴様」

「おおつ!!!」

青年が剣をふり下ろす。ブラムスはそれを軽く右に半身切つて躲した。

目標を失った剣が、床にふり落ちる。
直後、

ズドオンツ！！

がらあきになった青年の脇腹に、ブラムスが拳を突き刺した。

「ぬ？」

だがそこで、ブラムスは首を傾げた。

拳に当たった感触が、硬い。

見れば、青年の剣が、脇腹とブラムスの拳の間に挟まっていた。

「……ほう！」

ブラムスが笑う。

が、

その拮抗も、ほんの一瞬だ。青年は衝撃を緩和しきれず、呆気なく吹き飛んだ。

……ぞぞぞ！！

しかし、今度は無様に背中を打ちつけない。

青年は両足でしっかりと踏ん張り、床をこすると、青の瞳でブラムスを睨みつけた。

相変わらず、不死者王の体には傷一つ付かない。
だが。

青年には、明らかな“変化”があった。

ブラムスは、興味深そうに青年を観察した。

「おをつー!!」

青年が、再び踏み込んでくる。

今度は、先ほどより速い。

ブラムスは拳を握り、その剣に叩きつけた。

ギインツッ!!!

不死者王の腕が、青年の剣を受け止める。

変化は、わずかだ。

だがそれは確実に、先ほどの一撃よりも速く、重い。

(ほう………!)

ブラムスは思わず、口端をつり上げた。

ギインツッ! ギインツッ!……

青年が、縦横無尽に剣をふるう。右袈裟にふる剣を、ブラムスは片手で止めた。

(こやつ、血が流れれば流れるほどに、動きが洗練されている……)

止めた矢先、青年は次の動作に入ろうとしている。絶妙なタイミングで剣を引き、次の斬線へ、

その一つ一つに答えながら、戦乙女が訪れる前とは、明らかになにかが変わった青年の、“底力”とでも言うべき変化を、ブラムスはひしひしと感じていた。

青年の剣速が、更に上がる。
ブラムスは口端を緩めた。

「面白い！ たかが人間が、どこまで我の力に近づけるか、見届け
てくれようぞ！」

吼えたブラムスは、己の拳をぶつける。と、ルシオも吼えた。

「おおおおっ！！！！！」

両者、剣と拳が交差する。その様を見据えて、レナスは無意識の
中、息を呑む。

（徐々にだが、人間が不死者を……、それも不死王ブラムスの動き
についていくだど！？ これは、あのときの……。奴もアレン・ガ
ードと同じタイプの人間なのか……）

青年の剣が、一閃を交わす度に、青白く輝いていく。その輝きを、
じ、と見つめて、レナスは目を細めた。

ギキイイイッ……！！

あまりの追い上げに、不死者王がついに、青年の刃に拳を当てた
とき。

青年が不吉に笑った。

「……待ってたぜ。アンタの動きが、止まるときを！！」

「なに？」

青年はカツと目を見開くと、柄から離れた彼の右手に、蒼白の雷が迸った。

「シャイニングボルト!!!」

ズガアアアンツツ!!

雷が、爆ぜる。

その雷光は一瞬、不死者王を完全に呑み込んだ。

「っ!!」

レナスが息を呑む。

「やった、のか……?」

緊張ににじんだ声でレナスがつぶやいた。

青年の右手から放たれた魔力の余波が、白い煙をくゆらせる。

……、

静寂。

が、

不死者王は、変わらぬ姿でそこに立っていた。

「クククク……フハハハハッ!! たかが人間が、我が体に一撃を加えようとは!!」

上機嫌に笑う不死者王を、青年は静かに睨み据えた。

「この程度で騒ぐな」

己から滴る血を忘れさせるように、彼は何事もなく剣を構える。全身重傷だ。それでも彼の瞳は、一向に弱らない。彼はブラムスを見据え、言い切った。

「次は貴様の、首を刎ねる」

ざらり、と彼の剣が輝くと同時、ブラムスはニツと口端を歪めた。青年の気迫が、剣に集っていく。

「ハアアアアツ!!!!!!」

先ほど、彼が“シャイニングボルト”と称した雷だ。それが剣に、刃に、光のように迸る。

と、同時。

ブラムスもまた、体中から妖気をたぎらせた。

「おをおおおおお……っっ!!」

獣らしい外観を裏切らない、猛々しいブラムスの気迫。青白の光と、赤い闇が部屋の中で激突した瞬間、両者は互いに向かって駆け出し合い、剣と拳をぶつけ合った。

ぎきいいいんっっ!!!!!!

青年が二閃、三閃剣を薙ぎ、ブラムスが左拳のみで軽く受け流す。受け流しと同時に、カウンターの右ストレートが青年の頬を切る。

あと一瞬、青年が退かなければ、その首はねじ切れていた。

ぎりぎり回避した青年に、ブラムスはわずかに目を開く。

と。

青年は回避と同時に、ブラムスの腕をかいくぐって剣を斬り上げた。

「ハアッ!!!」

斬つ、と剣が空を切る。青年が意外そうに瞬くと、ブラムスは力ウンターを放った姿勢のまま、後ろに下がっていたが。

ブラムスが後ろに下がり切った所で、ルシオの突きが迫る。

ドンッ!!

(なにっ!?)

ブラムスは目を見開き、体勢を崩しながらも突きを避けた。青年に右拳をぶつける。と、青年が首をねじ切れた。が、彼はすぐに、顔を元の位置へ戻した。

「なに!?!」

今度は、驚嘆にブラムスが口を割る。

人間では受けようもないブラムスの拳。それを青年は受けながら、剣をふるってきた。青年の右袈裟と左袈裟が、ブラムスの胸板を裂く。

「ぐっ!!」

驚きに、ブラムスの身体がよろけた。だが、強靱な不死者王の身体に傷はない。

同時。

青年の柄が、たたらを踏んだ不死者王の眉間を打ち抜いた。

ゴッ！！

ブラムスの巨躯が玉座まで吹っ飛び、壁を打ち壊す。

「自分が壁に貼り付けられた気分はどうだ？」

屈むように地面に落ちたブラムスに、青年は剣を払いながら尋ねた。ゆらりと立ち上がるブラムスが、腹の底から、くっく、と忍び笑う。

「何百年ぶりであろうか……。この私にこれほどの一撃を、ヴァルキュリア以外で叩きこむ相手がいようとはな！ しかもそれが、たかが人間とは……！」

くく、とブラムスの笑い声が大きくなる。それを見据えて、青年はわずかに目を細めた。

「そろそろ答える気になったか？俺の問いに」

問うと、ブラムスはいやりと口端を歪めた。拳を握り、腰を落とす。

ブラムスが、構えた。

「人間よ、気が変わった。貴様は我が全力をもって葬ってやるう」

「フン、……加減してやってりゃ調子に乗りやがって」

吐き捨てるように言った青年は、剣を構え直す。そして、

「泣いて謝っても遅いぞ!!」

恫喝すると同時、地を蹴った。ブラムスも踏み込んでいる。

「ゆくぞ！ 傲然たる我が魔力の胎動！！ 奥義！ ブラッデ
イカリス!!」

ブラムスの拳から圧倒的な灼熱の気が、放たれる。人間どころか、
レナスさえもあっさりと押しつぶすかのような波動が。

「こ、これが！ 不死王の力だというのか……!?!」

ブラムスの本気を見せつけられて、レナスは恐怖のあまり、震え
て動けなくなっていた。

青年は冷静に不死者王を見据え、脇構えに入る。その剣の刃に“
シャイニングボルド”と名付けた光の力を、一点集中して。
ブラムスが、ハツ、と笑った。

「退かぬか！ 人間!!」

「俺には、守るものなんかからな。だが、死ぬ前に。是が非で
も聞かねばならないことがある!!」

言った青年は、脇構えの態勢のまま、ブラッディカリスの波動に
飲み込まれた。レナスは息を呑む。どう見ても直撃だ。人間に、
生きていられるハズがない。
が。

パァアアアア……ッッ!!

赤い闇を切り裂くように、青年の持つ剣が光り輝いた。“シャイニングボルド”を集約した、青白い青年の光が。

レナスの脳裏で、朱雀を纏う、剛刀の光と重なる。

(やはり、この男……!!)

思わず、彼女は固唾を呑みこんでいた。

青年が地を蹴る。返礼とばかりに、奥義を撃ち尽くした不死王に向かって、

「奥義！ ラウンドリップセイバー！！」

青白い光の斬撃が、赤の波動を押し返し、部屋中央で爆発した。

ゴアアアツツ！！！！

熱風に髪をあぶられながら、レナスは目を細めて両者を見やる。光と炎は、ともに霧散していた。

「相殺した！？」

驚くのも束の間。そのときには、ブラムスが動き出している。

「なにっ！？」

レナスは青年をふり返った。あれほどの技だ。人間がブラムスに対応するには、無理がある。

だが。

さらに驚いたことに、青年も、剣を手に地を蹴っていた。

（馬鹿なっ！！）

両者は同時に駆け、光が爆発した中央点で、斬撃と拳撃を繰り出し合う。

ギインッ！！

拳が奏でるとは思えない金属音を立てて、二人は剣と拳を繰り出した態勢のまま、交差した。

剣をふり切った青年が、床をこすり、勢いを殺して着地する。やはり力では不死王だ。だが青年の集中力は、不死王との不利を埋めるのに余りあった。

両者、同時に構え直す。

と、そのとき。

スウ、

ブラムスの胸板が、斬り裂かれた。正確には、彼の服が。青年の斬線を物語るように、袈裟状に一線。だが、肉体に傷はない。

「っ！！」

青年にも驚愕が走る。

ブラムスは、いたく機嫌が良かった。

「人間よ、名を聞いておこう」

ブラムスは言うと、重傷を負ってもなお、こちらを睨む青年を見下ろした。青年の魔力の余波で、ブラムスの全身からは白い煙が立ち込めている。だがダメージは、なかった。

青年は剣を握る力も、不死者王を睨む目も緩めず、答える。

「……ルシオ」

短く答える彼に、ブラムスは口端をつり上げた。

「覚えておこう」

ブラムスは言うと、立ち上がるうとするレナスを一瞥した。

「レナス、今のお前では決して私に勝つことは出来ない。ここはその男に免じ、決着は先に取っておくでしょう」

ブラムスは言い切ると、レナスに背を向けた。

瞬後。

独国調の城が、フツと消えた。

まるで霧が晴れるように。

レナスがはた、と瞬くと、そこにはなにもない、ただの緑が広がっていた。

「なんだ、あの圧倒的な力は……。主神オーディンにすら匹敵する……」

つぶやいたレナスは、ふう、と息を吐いた。全身の緊張が、ゆっくりと解けていくのが分かる。

……どっ！

鈍い音がしてふり返ると、ルシオ、と名乗った青年が気絶していた。

「！」

レナスは慌てて駆け寄る。青年を見下ろすと、失血の所為か、顔色が青くなっていた。

自分を庇うように不死者王と戦い抜いた、青年。

「……………」

レナスは青年の頬に触れると、血でにじんだ金髪をそつと払ってやった。

失血の所為で顔色が悪く、彼が目を覚ます気配はない。

(……………せめてもの礼だ。近くの町に届けるくらいは)

レナスは胸中でつぶやくと、青年を抱いてその場をあとにした。

1 ルシオ編 戦乙女

離れようと思えば、いつでも離れられた。

だが、実際は。

「ルシオを助けて頂いて、本当にありがとうございました」

ブラムス城に一番近い都市ジエラベルンで、レナスは青年ルシオの身内に出会った。

薄汚れた紫色のローブを被った、小ぶりな老婆　ドルチエ。この荒廃した貧民街で、多くの養子を持つ老婆だった。

「いえ」

レナスはこちらを気遣って頭を下げる老婆を、やんわりと制した。今、彼女がいる場所は、家というのはほかも憚られるほどのひなびたあばら家だ。天井には煤とクモの巣が好き放題に張り巡り、気絶しているルシオにかけられた毛布も、ところどころが破れている。

ルシオの大まかな治療は、この街に来るまでにレナスが行った。あとは、ルシオの気がつくのを待つだけだ。

レナスは眠るルシオを見つめ、つぶやいた。

「……そう。ルシオさん、と仰るんですか」

「ええ。ええ。メリルさんが見つけてくださらなければ、この子は行き倒れたまま、もう目を覚まさなかったかもしれない……」

目頭の涙を拭うドルチエの言葉を、レナスはあまり聞いていなか

った。

ルシオ。

どこかで聞いた名だ、となんとなく思った。

ドルチェに会った以上、レナスがここにいる必要はない。それでも、ルシオが目覚めるまでは、と義務のように思いこんだレナスは、その場を離れることが出来なくなっていた。

と。

ルシオの寝顔を見つめていたレナスは、はた、と瞬いた。

ドルチェが曲がった腰を騙し騙しに、桶に水を汲もうとしている。レナスは席を立った。

「代わります」

「しかし……、」

「ルシオさんが目覚めるまで、もう少しかかりそうですから」

言ったレナスは、街の傍に流れるという川まで、桶を手にかを出た。

道に行く一人の少女がいた。人目を惹く赤毛を肩まで揺らした、勝気そうな娘だ。

「ハハッ、そしたらよ」

「 ホントかよ!? その話、」

少女の前に、二人の男が近づいてくる。彼女はなに食わぬ顔で男たちとすれ違つと、その懐の財布をさつとかすめ取つた。一瞬だ。彼女の所作に危うげはない。慣れた手つきだった。

「で、どうなつたんだ?」

男たちは気づかない。変わらず会話し雑踏を抜ける彼らを尻目にして、彼女はしばらくの距離を歩くと、に、と口端を歪めた。

「今日はちよろい奴ばっかだね」

男たちをふり返りもせず、言う。背筋を伸ばした彼女は、5つ目の財布を手に入れた所で、空を見上げた。

「さ・て・と、帰るか」

先ほど掏^すつたばかりの財布を服の内にとりまわして、少女はほくそ笑んだ。今日の“稼ぎ”は昨日より少し多い。豪華な夕食になりそう。パンとスープ。それにウインナーの一本くらいはふるまえる。

これで、義弟たちにひもじい思いをさせずに済む。

少女はそんなことを考えながら帰路についた。

そんなときだった。

少女の前に、銀髪の 目の冴える様な美女が通りかかったのは。

少女は思わず、息を呑んだ。

「っ! あれは ……!!」

少女の脳裏を、ある記憶が巡る。　少し前のこと。意中の少年が、どこか寂しげに語ったある女の子の話が、少女の唇を動かした。

「……プラチナ……」

少女のつぶやく声が、夕暮れの街道に響いた。

……

「　ねえ、その子どんなだった？　美人？」

珍しく昔のことを話す彼に、赤毛の娘・クレアは、興味深そうに彼を見た。人の良さそうな均整の取れた相貌の、金髪碧眼の少年を。クレアが問うと、彼　ルシオはどこか呆れたように笑った。

「馬鹿言え。14だぞ？　どっちかって言うと可愛い、だろ。……まあ、美人にはなりそうだったけど」

つぶやいて、彼は視線を落とした。昔を思い出しているのか、彼は嬉しそうに、悲しそうに口許を緩めた。

見たことのない顔だ。

穏やかな、哀しいルシオの瞳。

「……ふうん」

自然、相槌を打つクレアの語調も落ちる。なぜか、こんな表情をするルシオを見ていたくなかった。

クレアの瞳が揺れる。

先を聞くのが、少し怖くなった。

「どこにでも居そうと言えばそうだけど」

「そうだけど？」

それでもルシオから話されれば、話をふった手前、問い返さねばならない。クレアはちくりとする胸の痛みが、次第に大きくなるのを感じながら、ルシオの顔を不安げに見上げた。
嬉しそうに微笑う、寂しそうなルシオを。

「でも、髪の毛が銀色だったんだ。それが光に当たるとキラキラと紫色に輝いて、凄く綺麗で……」

穏やかに、彼は言う。

遠くに投げられた視線は、この世のどこにも向いておらず。
皆まで聞かずとも分かった。クレアはため息を吐く。口の中で、溜息と共につばやいた。

そう、好きなんだ。
今でも。

はつきりと自覚した瞬間。彼女の心が、音を立ててひび割れた。

.....

「銀色の、髪……」

フラッシュバックした記憶の所為で、自分が道端に立っていることを忘れた。

ただ、目の前の銀髪の女性しか目に入らない。女性が道を歩く度、

ゆるやかに揺れる銀髪が、陽に透けて紫色に輝く様が……、

心臓が、どくと跳ねる。

クレアの思考は、そこで停止していた。

(あの女性は別人だ)

心の奥が蒸し返される感触に、冷静な理性じぶんが釘を刺してくる。だが、鼓動は一層強さを増し、激しく脈打つ。

どくん、どくん……っ

早鐘のように、一つ一つ心拍を刻みつけるように、強く、激しく脈打っている。

理性じぶんが、言った。

彼女は別人だ。ただ、髪の色が同じだけでしかない。

話の少女は、死んだのだから……。

「キャッ!」

ふと。

女性の悲鳴を聞いて、クレアは瞬いた。不思議に思って、自分の手を見やる。

すると、いつの間に拾ったのか。

道端の小石を握ったクレアは無意識の内に、石を女性に向かって投げつけていた。

「?」

茫然自失のまま、クレアは女性を見つめる。
突然のことに驚いた女性は、膝をついていた。クレアの良心が、
ちくりと痛む。

クレアは慌てて、その場から逃げ出した。

「っ、！」

なにやってんだろ、わたし！

赤の他人に嫉妬して……。馬鹿みたい！

胸で叫んだ理性が、また一つ、クレアの心に傷をつけた。

.....

走り去っていく赤毛の少女を見送って、レナスは首を傾げた。
そしてつい、と。手桶を見る。

「良かった。零れなかったみたい……」

フツと安堵の息を吐く。

そのとき、

「すみません」

不意に声をかけられ、レナスは顔を上げた。

やはり客人に水を汲ませるわけには、と気を使ったのかもしれない。
そこに立ったドルチェは、皺と日焼けでぼろぼろになった顔を、
申し訳なさそうにくしゃくしゃに歪めた。

ドルチェが頭を下げる。本当に、申し訳なさそうに。

「…………あの？」

事情が呑み込めず、レナスがさらに首を傾げたとき。ドルチエは眉を寄せながら言った。

「あの子も、私の娘なのです」

走り去った赤毛の少女を見つめるように、ドルチエは誰もいない通りを見やった。

……………

「今日の稼ぎはどれくらい？」

皆で落ち合う潰れた酒場にクレアが顔を出すと、紫色のローブを着た老婆・ドルチエの養子^{しんご}たちは、硬貨の入った布袋を、ずっしりとテーブルの上に置いた。

「220、221、226……。うん、ちょうど230オースになるな」

「へえ？ ……まだバレンの分が残ってるけど。今日は結構な額になりそうじゃない」

「ああ。みたいだ」

ラスティが布袋の中身を数えて、満足したように一つ頷いた。その彼を一瞥して、クレアは嬉しそうに、ニツと口端をつり上げる。いつもの調子。いつもの態度。

しかし、彼女の脳裏には、今日会った銀髪の女性が、ずっとちらついていた。

旅に出た、ルシオのことを思い出す。

クレアたちが飢えないよう、各国の不死者を倒して金を集める、危険な稼業に身を徹した彼を。

(…………ルシオ…………)

目を伏せてつぶやいた彼女の胸が、また、ずきんつ、と傷んだ。

そんな彼女に転機が訪れたのは、それから 数日後のことだ。

「よかった、お怪我をされてなくて…………どうか許してやってください。あの子のこと」

水桶を手に、家に戻ってきたレナスは、ドルチェから謝罪と、薄い茶をもらった。

レナスは控えめに、首を横にふる。

「いえ。お気になさらずに」

「それでも、お詫びさせて頂かない訳には参りません。ルシオを助けて頂いた上に、先ほどあなたに石をぶつけたのも私の娘なんです。もつとも、血は繋がっていないんですけれども」

「……………」

血がつながっていない、というのは、少女の面立ちと、老婆の雰
囲気を見ればすぐに分かる。

義理の娘。

そんなものを抱える余裕が、この家にあるとは思えない。だがこ
の老婆は、子供を見捨てる事が出来ず、覚悟の上で少女を招き入
れたのだろう。

子供が冷遇されていることは、この町を歩けばすぐに分かること
だ。

ドルチエは、薄い茶に視線を落としながら言った。

「私もこう衰えては一人で生活することもままなりません。こうし
て今、生きていられる

のは、ルシオがこうして定期的にお金を稼いできてくれるからです。

……でも、よくない噂も耳にします。他の息子や娘が、人様に言え
ないことをして、お金を得ているかもしれないと考えると……」

俯くドルチエに、レナスはつられる様にして目を伏せた。皆まで

聞かずとも分かる。少なくとも、あの少女は。

考えた所で首を横にふった。

些末なことだ。神である自分に、関係はない。

レナスは薄い茶を、一気にあおった。

「……ドルチエさん。私ももう、参ります」

「そんな。確かに、私は貧しい暮らしをしていますが、ルシオの恩
人を無下には……」

「ルシオさんの容態も落ち着いたようですし、私も先を急ぐ身です
ので。失礼します」

そそ、と頭を下げるレナスに、ドルチエは寂しそうな表情を浮かべたが、それ以上はなにも言わなかった。

代わりに、ドルチエは薄く 汚れた茶を、気さくに飲み干してくれたレナスに、日焼けした顔をくしゃくしゃにして笑った。自分でできる最高のもてなしを、彼女は大切にしてくれたのだから。

そうして、レナスがジェラベルンをあとにしたところで、ルシオが目覚めた。

亡失都市、ディパン。

もう一度、この地にやってきたアレンは、荒廃した城内に入り、地下の時間制御装置に辿り着いた。

「……………」

アレンは目をつむる。意識を、右手に集中した。

右手の、指輪に。

すう　　っ……………」

指輪が、蒼穹の光を放つ。それを見つめるルシオとロジャーの面持ちにも、若干の緊張がこもった。

意識を集中する。

ゆらりと、揺れる波紋に溶け込むように。

アレンは指輪に語りかけた。

（ディパンの、あの時間の続きを　　）

波紋が、像を描き始めた。
ディパンが崩壊した直後の、あの時間を映すために。

情景が、アレンの瞼の裏に浮かんだ。

「今じゃ」

しわがれた男の声が響くと同時、剣を交える二人のヴァルキリーの足許に、黄金の方陣が展開した。

「これは……、王呼の秘法か!!」

驚愕に顔を引きつらせた重戦士は、それまで組み合っていた男を投げ捨てて、戦乙女に向かった。重戦士が、躊躇もなく、方陣の中へ飛び込む。
が、

キーンッ!!

見えない壁が、方陣の内と外の境に出来ていた。

重戦士が舌打つ。途端、彼の身体が、炎に包まれた。

「シルメリア　!!」

戦士の叫び声と同時。炎の中から、赤い瞳と獣じみた巨躯が飛び出した。土気色の肌の、不死者と。
と。

そこで、ふわり、と波紋が揺れた。アレンの瞼が震える。
アルスイ・オーブは、言った。

この男こそ、不死者王・ブラムス。

(……不死者王、ブラムス?)

彼が首を傾げると、アルスイ・オーブは更に答えた。

不死者王・ブラムスは、この地より奪われし至宝ドラゴンオーブに代わり、

ミッドガルドを平定する者。

自ら冥界の門を閉じ、この地に留まりしはミッドガルドのため。オーデインが横政に異議を唱えし不死者は、この地ミッドガルドにおいて最強の力を持つ者。

ゆえに、

不死者王。

アレンは頷く。すると、映像が次へと流れた。

戦乙女を囲う方陣から、魔力が渦を巻き、噴き上がる光が強さを増していく。金縛りにあったように、二人の戦乙女は動かなかった。

否、

動けないのだ。

肉体から、彼女たちの魂が剥離しつつある。

(っ!)

アレンは息を呑む。すべてが光に吞まれていく中、不死者王・ブラムスは大きく咆哮し、長く伸びた鋭い爪を魔導師に向かって突き出した。

ズドオツ!!

掌から光弾が飛ぶ。

「がはあ、っ!!」

光弾に直撃した赤い法衣の魔導師が弾き飛ばされた。彼は中空で弧を描き、猛速度で飾り窓を破って下に落ちていく。

「じぼおっ、!!」

同じく青の法衣を着た魔導師も、別の飾窓から外に落ちた。だがブラムスは、そんなものに構わない。

「シルメリア!!」

彼は方陣の中に閉じこもった、ディパンの王女に手を伸ばす。

少女の中に眠っている、戦乙女に。

瞬間、

……すっすっすっ、

ブラムスの背後に、光が集った。

(これは……!!)

アレンは心の中で叫んだ。兼定が教えてくれた、何者かの侵入だ。瞬後。アレンが予想した通り、光球は音もなく不死者の背後に現れ、す、と手を伸ばした。

伸ばした手の平の中に、なにかの術式が顕現する。詠唱はない。魔

力の乱れも、なにも。

まるで初めて感じた、戦乙女の気配の如く透明で
アルスイ・オーブは言った。

この者こそ、第二級神・フレイ。

剛刀・兼定を神界に招いた、主神オーデインの右腕。

「なにっ!?!」

あまりのことに、アレンは目を開けた。瞼の裏に映っていた映像が、しかし、目を開けていても視える。

ルシオとロジャーが、不思議そうにアレンを見上げていた。

「っ!」

ずきんっ、

アレンの指輪が光った。映像が流れる。

眼前ではブラムスが、肉体と乖離しつつあるディパン王女に手を伸べている。アーリイとディパン王女の身体から、魂が抜け出始めていた。王女の身体の中から、あの金髪のヴァルキリーの魂が。

(アルスイ・オーブよ。彼女は?)

金髪のヴァルキリーを指し、アレンが問う。

この者こそ、ノルンの三女神が末妹・シルメリア。

この地よりドラゴンオーブを奪いしオーデインに反旗を翻す、
異端の戦乙女。

(なぜ、その戦乙女がディパンの王女の中に?)

ディパンは滅びより数代遡りしときに、神と袂を分けた地。
神に反感を抱くディパンに対し、

主神は戯れにて、王女の身にノルンの末妹を転生させたり。

しかし、理にそぐわぬ転生は未完に終わり、シルメリアは王女
の中で目覚めたり。

(理にそぐわぬ転生? どういう意味だ?)

ノルンの末妹・シルメリアは、神とディパンが因縁を抱くき
っかけとなった、

このときより数代前の名王ブラムスと縁を持つ者。

名王は、その優れた能力ゆえに主神の目に適い、ノルンの末妹
に殺されし者。

オーディンはこれによりブラムスをエインフェリアではなく、
ミッドガルドの安定を保つ、ドラゴン・オーブの代替品としてブラ
ムスの魂を使うこととした。

しかしノルンの末妹・シルメリアは、至宝の代わりを 人間の
魂で補うことに疑問を覚え、ブラムスをエインフェリアから解放し、
オーディンに異を唱えたり。

理にそぐわぬ転生は、このブラムスを逃がせし戦乙女の所業に、
主神が激怒して行ったもの。

ブラムスは、このときより不死者として目覚めたり。

(その、ミッドガルドの安定とはどういう意味なんだ? 人間の魂
を代わりに使うとは?)

この地は、世界樹と呼ばれる大木により、二層の世界に分かれしもの。

一つをアスガルド、一つをミッドガルド。

至宝・ドラゴン・オーブは、ミッドガルドの安寧を司りしもの。ドラゴン・オーブがミッドガルドより消えれば、ミッドガルドは瓦解する。

しかし、至宝にも匹敵する強き魂があれば、その魂を一柱として世界は平定される。

今のミッドガルド在りしは、不死王ブルムスがドラゴン・オーブに代わり、

この地に留まっているため。

しかし、不死王がいかに強大な力を持っていようと、

オーブ不在のミッドガルドは混乱が絶えず、戦禍が広がる。

オーディンはこれを利用し、より多くのエインフェリアを招集する。

「……………なんだと？」

兼定が奪われたのも、その一環なのか。

アレンは心の奥にある火が、ゆらりと揺れるのを感じた。

アルスイ・オーブは答える。

是。

剛刀兼定を携えし勇者の末裔は、運命を変える者。

オーディンの意に反し、ミッドガルドに平定をもたらす恐れがある。

(……………)

是。

ノルンの次女・レナスの記憶が封じられしも、戦乙女の役割を忠実に果たすため。

ドラゴン・オーブは今、ヴァルハラに有り。

(……そのために、あの指輪を)

レナスの右手に嵌った黄金の指輪を思い出して、アレンは拳を握った。

是。

ニーベルングンの指輪は、オーディンへの忠誠の証に戦乙女が身に着ける物。

オーディンに忠誠を誓う限り、ノルンの次女・レナスの封じられた記憶は戻らない。

「……」

気づけば、奥歯を噛みしめていた。

映像が、更に流れる。

「今度は、私が助けてやる!!」

ブラムスはシルメリアに呼びかけるように一声吼えた。ブラムスの両腕に深淵の炎が宿る。方陣を割り入るように、炎が結界を焼いていく。

そのとき、

ブラムスの背後に現れたフレイが、魔晶石を放った。

ドオッ!

弾速が速い。ブラムスは術を破るのに必死だった。
気付いていない。

「いけない!!」

咄嗟に、金髪のヴァルキリー・シルメリアがブラムスの前に飛び込んだ。

その、一瞬。

「なにつ!?!」

魔晶石を放ったフレイが息を呑んだ。魔晶石がブラムスではなく、シルメリアに直撃する。

彼女の魂に。

光は魂に触れた瞬間、噴き出すように輝き、視界のすべてを白く染めた。

この後、不死王はノルンの末妹を抱いてミッドガルドに逃れたり。

以降、神と不死王の睨み合いは、数百年にわたり続く……。

「……………」

アルスイ・オーブが見せたことの顛末に、アレンは目を細めた。
ルシオとロジャーが、今か今かと説明を待っている。

アレンは、二人に向き直った。

「ルシオ、ロジャー。今から、不死者王に会いに行くぞ」

「へ？」

「……ふししゃおう、ですか？」

首を傾げる二人に、アレンは頷く。顔を見合わせたルシオとロジャーは、しかし、事態が把握できずにアレンを見上げた。

アレンは続ける。

「そこにいるシルメリアに聞けば、ヴァルハラへの道が拓けるハズだ」

「……はあ……???」

「しるめりあつて誰だ？ おおい！ 兄ちゃん！！」

ぴよんぴよんとロジャーが跳ねるが、一人納得しているアレンは、あくまでマイペースだ。

アレンの掌に、魔法陣が浮かぶ。

「それじゃあ、行くぞ」

「えつと、……はい」

「だあくかあくらあく！！」

だんだんと地団駄を踏むロジャーの姿は、瞬間移動テレポートが生む光の中に消えていった……。

2 ルシオ編 焼き討ち

貧民街の薄汚れた階段に、ルシオは腰かけていた。剣を抱いて、じっと。

行き倒れていたお前を、メリルさんという方が連れてきてくれたんだよ。

それはもう、美しい娘さんでね。

お前が目を覚ますまでウチに居てくださっただけで、旅を急ぐからと

行っってしまったんだよ。

クレアたちには、まだお前が帰ってることは言っていないよ。

お前が怪我をしたなんて言ったら、大騒ぎだろうからね。

だから早く、会いに行っておあげ。

ルシオが目覚めたとき、ドルチェはコップ一杯の水を注ぎながら言った。

ルシオは階段に腰掛けたまま、自分の身体を見下ろす。不死者王・ブラムスと戦った自分を、ここまで運んだという女性を思い浮かべながら。

(……戦乙女が?)

フツとわいた銀髪の女神を、しかし、ルシオは強引にふり払った。そうとは限らない。

冒頭から、否定する。

(あれは……、プラチナじゃない)

言い聞かせるように、ルシオは胸中でつぶやいた。
と、

背後から、ぱたぱたと靴音を立てて、子供たちが集まってきた。

「あ、ルシオだー！」

「おばあちゃんの言ったとおりだね！」

「どうしたのー？」

子どもたちが、口々に言う。周りをあっという間に囲まれて、ルシオは苦笑した。

考えごとは、もう終わりだ。

「なんでもない。ちょっと考えごととしてただけだから」

「そうなんだ！」

「じゃあ、ルシオもいつしよにあそぼよー！」

「あそぼー！ あそぼー！」

ぐいぐいと腕を引っ張られる。

賞金稼ぎとして、各地の不死者を倒すことで金を稼いでいる彼が、街に留まっていられる期間は、長くない。

そのためか、彼が帰ってくる度に、子供たちは容赦なかった。

「……しょうがないな」

頭を掻きながら、ルシオは立ち上がる。

と、

通りから、クレアが肩で息を切らせて走ってきた。

「ルシオーー!!」

満面に笑みを浮かべて、クレアが腕をふる。ルシオはますます苦笑した。

「ったく、どいつもこいつも」

なにがそんなに嬉しいのか。

言いつつも、ルシオが彼らの要望を断ることはなかった。

子供たちよりも、クレアにぐいぐいと腕を引っ張られながら、ルシオは街の通りに溶け込んだ。

瞬間移動先は、テレポルトロジャーも見知った土地だった。

「……へ?」

四方を海に囲まれた、栄光と繁栄を手にした国・フランスブルグ。この前、出立したばかりの国だ。

「アレンさん。こんなところに、アレンさんの言う不死者が……?」

「いや」

首を傾げているルシオに、アレンは短く答えると、メルティーナ

の研究室近くにある、シーティアの部屋に向かった。

「「?????」」

ロジャーとルシオが、互いの顔を見合わせる。

さっぱり話が見えなかった。

相変わらず、独特な形を描く階段を上ってシーティアの部屋の戸を叩く。と。少しあつてシーティアとピティが顔を出した。

「これはアレンさん。旅に出られたのではなかったのですか？」

「そのつもりだったが、“ある人”と話すために、シーティアの力を借りたい」

「ある人？」

首を傾げるピティとロジャーたちに、アレンは頷いた。顎に手をやったシーティアが、ややあつてから問う。

「それって、この前アレンが話したことと、関係ある？」

「ああ。“ある人”というのは、蒼穹の戦乙女、レナス・ヴァルキユリアの妹　シルメリア・ヴァルキュリアのことだ。彼女と、話をしてみたい」

「んあ？　妹??？」

不思議そうに見上げるロジャーに、アレンは頷いた。

「ヴァルキリーというのは、運命の三女神が、交代で務めている役

職なんだ。

俺たちの知っているヴァルキリー……つまり、あの銀髪の戦乙女は、三姉妹のうち次女にあたる。

俺が話してみたいのは、末妹のシルメリア。

現在、戦乙女と人間の記憶を併せ持つ唯一の存在だ。彼女ならなにか、人間がヴァルハラに向かう手立てを知っているに違いない」

「戦乙女と、人間の記憶を？」

ルシオが顔をしかめる。

「ああ。彼女たちは、一柱の女神が戦乙女として活動している間、残りは人間として日々を暮らしているんだ。

そして、“主神”と呼ばれる一番位の高い神に呼ばれたとき、人の生を終えて、女神として目覚める。

だが、シルメリアは戦乙女の任期が終わる前に、主神との間に齟齬が生じて、強制的に人間に転生させられた。その際に、転生処置が不十分だったために、彼女は転生した人間の中で目覚めてしまったんだ。

そして、主神の強引なやり方に疑問を覚えたシルメリアは、“人”という器に、“人”と“神”という二つの魂を持った不安定な状態で、主神に反旗を翻した、唯一の神となった」

「そっか。それで戦乙女と人間の記憶が……」

得心がいったように頷くルシオ。ロジャーはまだ首を傾げたままだった。

「で？ そのことと、シーティアお姉様の力を借りることが、どう関係すんだ？ 兄ちゃん」

「シルメリア・ヴァルキュリアは今、深い眠りについている。その眠りを覚ますには、莫大な魔力が必要だ。方法はアルスイ・オーブで分かつて俺では実行できない」

シーティアが、くしゃくしゃと頭を搔いた。

「でも、そう言うのって。やっぱりお姉さんに任せるべきじゃない？ 姉妹問題でもあるんでしょ？」

「今のレナスに、それを認知する能力はない。説得に行くだけ無駄だ」

「わあ、気持ちいいくらいスツパリ断言するのねえ」

「そのための指輪だ。それに兼定を取り戻すには、どうしてもシルメリアと話す必要がある。協力してほしい」

まっすぐにこちらを見るアレンに、シーティアは溜息を吐いた。レナスとは何度か剣を交えただけに、彼の言葉には確信がこもっている。

シーティアの脳裡に、レナスの指に嵌った指輪が思い出された。

黄金の光を放つ封印の指輪。 “ニールベルンゲンの指輪”。

もっとも、シーティアは指輪の名を知らないが。

彼女はもう一度、溜息を吐いた。

「ん〜……。それにしても、一度くらい声かけとけば？ それからなら、付き合っただけから」

「……分かった。よろしく頼む」

颯爽と、アレンが踵を返す。ルシオがその背に問いかけた。

「あの、アレンさん。そのシルメリアってヴァルキリー……、もしかして不死者のところにいるんですか？」

「ああ」

ぱたぱたと駆けてくるルシオに、アレンは頷いた。

「話せば長くなる。詳しくは、不死者王の所についてからでいいか？」

「わかんねえけど、分かったじゃん！」

「はい！」

こちらを見上げてくる二人の少年に、アレンは微笑った。

「ありがとう」

子供たちとの戯れもそこそこに、ルシオとクレアは潰れた酒場に向かった。

この貧民街には職がない。貧民を援助する処置もなにもない。クレアたちが日々を生きるには、ルシオが稼ぐ金だけでは足りない。ルシオの賞金だけで賄うには、ドルチェの養子は数が多すぎた。

だから協力して、彼女たちは金を盗んでいる。それ以外、出来る

ことがないのだ。

「遅いね、二人」

「……ああ」

潰れた酒場の椅子に寄りかかって、ルシオたちは合流するハズの仲間を待った。

静寂が占める。
と。

バンツ！！　ぎしいっ、っっ！！！！

激しい勢いで開け放たれた酒場の扉が、勢いに負けて斜めに傾いだ。慌てて入ってきたのはクレアたちとはまた別グループの、しかし、同じ界隈の男だった。

「お前ら逃げる！　バレンがどうなったか知ってるか！？」

「え？」

クレアは状況を把握できずに聞き返す。

どうなったか、知っているか？

まるで取り返しのつかないことが起きたような、言葉だった。表情のこわばるクレアに、男は何度も唾を飲みながら、言った。

「あいつ、貴族の財布に手エ出したんだ。それがばれて……なぶり殺しに　」

「嘘……」

思わず、つぶやく。だが返ってきたのは、男の否定だった。

「悪いが本当だ。死体は樹に吊るされてる。ひでえことしやる」

悔しげに舌打った男は、そこで平静を取り戻したのか、語調を少し落とした。

「だがな、それよりもやばいのは貴族に手エだしたおかげで貧民街のスリグループの一掃にヤツラが乗り出したってことだ」

「「!!」」

「早く逃げる。スリグループの一掃だなんて言っちゃあいるが、本当のところは貧民街（ゴム）の掃除がしたいのさ。難癖つけて無差別に殺すつもりなんだよ」

「どうするの？ それに、出て行ったきりのラストイは？」

「生きていりゃ会える。俺はもう行くぞ。もうすぐそこまで来てるって話なんだ」

クレアの問いに簡潔に答えた男は、じゃあな、と言って酒場から姿を消した。ぎしぎしと軋む扉が、空しく揺れる。それを見つめて、クレアはまだ、現実感のない言葉を反芻した。

「バレンが、殺され……？」

放心していた。

どうしようもなく、事実として受け止められなかった。

隣では、事実を受け止めたルシオが、表情を鋭くして椅子から立ち上がった。

「俺たちも行くぞ！」

ルシオに強く言われ、クレアはようやく現実^{現実}に焦点を合わせた。目に涙が溜まってくる。力ない表情でルシオを見ると、彼は意を決したように、静かに頷いた。

「裏から出るんだ。クレア」

「……でも、子供たちは？」

ドルチェが養子として迎え入れている子供は、クレアやルシオだけではない。まだ十にも満たない弟たちが、ドルチェの家にいるはずだ。

クレアが問うと、ルシオは予想していたのか。迷いなく答えた。

「俺が預かる。クレアは先に行ってくれ」

「でも……！」

「街の外にある森で落ち合おう。一緒に居たら、それが一番危険だ。……わかってくれ」

諭^{さと}す様に言われ、しかし、クレアは首を横にふった。離れたくない。

ルシオとは、どんなときも。

本音は心の奥に閉まって、クレアは睨むようにルシオに言った。

「子どもたちが一番なついているのは、私なんだから!!」

そのクレアの言葉を、覚悟と取ったのだろう。ルシオは厳しく締めた表情をわずかに緩めると、困ったように眉根を寄せた。

「しょうがないな……」

言った彼は、クレアと共に、ドルチェの家へと走り出した。

馬が、高く嘶いた。

車輪が動きを止める。ベリナスは馬車から、不思議そうに顔を出した。

「どうした？ なにかあったのか」

腰の剣を握って、御者に問う。すると、手綱を握る御者も、不思議そうにベリナスをふり返った。

「分かりません。しかし、この先で騒ぎがあったようです。公爵様と会う約束の刻限も迫っておりますし、迂回なさいますか？」

「ふむ……」

整った口髭に手をやって、ベリナスは思案する。すると、傍らからジェラベルンの正装をまとった阿沙加が、尋ねてきた。

「どうかなさったのですか？ ベリナス様……」

相変わらず、控えめな物腰だ。阿沙加に、ベリナスは表情を和らげて首をふった。

「いや。……そうだな。今は阿沙加もいることだ。迂回する方向で頼む」

「かしこまりました」

一つ頷いた御者は、ベリナスが馬車の中に引っ込むのを確認するとピシヤリと馬の尻を鞭打った。

馬車がゆつくりと、走り始める。
それから少ししてのことだ。

貧民街から、黒煙が立ち込めたのは。

……

人目を避けるために、ジエラベルンより少し離れた森に瞬間移動テレポートしたアレンは、街から立ち込める黒煙に目を見開いた。

「アレンさん！！ あれ！！」

ルシオが息を呑む。アレンは即座に駆けた。

「行くぞ、二人とも！！」

「おうよ……」

ロジャーが手斧をふり上げる。

戦乙女が地上に降り立つ条件は、二つ。

不死者か。

人間の、死に際。

ここに来るまでに、何十人も兵に会った。その中、兵の目を盗んで、一刻も早くドルチェたちと合流しようと、クレアたちは走った。
が。

「くそっ!!」

半壊したドルチェの家を見つめて、ルシオは毒づいた。猛威をふるう炎が、もともとくたびれていたドルチェのあばら家を舐め尽くすように広がっている。

手遅れだった。

クレアが唇を噛んだ。

「たかがスリの一掃でしょ!? なんだって、こんな兵がたくさん!!」

言う間にも、火矢を手にした兵が、馬を走らせて貧民街になだれこんでいる。馬のひづめが文字通り、クレアたちの生活を踏みこむ。

ルシオは剣を抜いた。

「……なるべく、人は殺したくなかったがな」

低くつぶやいた彼は、底冷えする青瞳を、馬を駆る兵に向けた。

「ルシオ？」

クレアがふり返る。が、彼女に答えず、ルシオは剣を握り、兵の一団に向かって踏み込んだ。

「ん！？ 貴様、……」

ルシオの挙動に気付いた兵の一人が、何事かを言い終わる寸前。ルシオの剣が、兵の首を容赦なく刎ねた。

ドッ！！

馬が嘶きを上げて、立ち上がる。

首のなくなった兵の死体が、地面に転がった。

「……なっ！！？」

兵たちが色めき立った。ざわ、という声ともつかない音と共に、彼らの視線が、ルシオに集まう。

ルシオは彼らを睨み、剣を握る。兵の一人が言った。

「へへっ、こいつぁ丁度いい。ザコの焼き討ちだけじゃ、物足りなかつたんだ」

「ハハッ、確かに。ちつとは抵抗してもらわないと」

仲間の言葉に、他の兵が応えようとしたときだ。
ルシオの右手に、雷花が走った。

「シャイニングボルト!!」

ズドオっ!!

のたうつ蒼雷が、馬に乗った兵を丸ごと焼きつくす。
焼き討ちでは物足りないと言った、兵を。
瞬間。

兵たちが、目を見開いた。

「なっ!? 魔術だと!?!」

「たかが貧民のクスが!?!」

「馬鹿な!?!」

動揺する兵。が、それを待っているルシオではない。

一瞬、自分から目を離れた兵の懐に、彼はすでに踏み込んでいる。
ふりかえった兵が、息を呑む。

「ひっ!」

ようやく、彼の瞳に恐怖が浮かんだ。

それも、束の間。

斬っ!!

上段から走ったルシオの剣が、兵の身体を袈裟状に斬り裂く。見

事な剣線だ。兵は驚きに目を見開いたまま、悲鳴を上げることなく血をばらまいた。

ざわめきが、兵たちの中で大きくなった。

「なんだ！？ こいつ ！！」

「くそつ！！ 殺せ！！」

恐怖か、矜持か。

顔を赤くした兵たちが、手綱を引いて突っ込んでくる。

クレアは喉を割った。

「ルシオお！！」

声を限りに叫ぶ。

相手はジェラベルン軍、それも七人だ。勝てるハズがない。

クレアは、心臓が握られるような気持ちだった。
が。

勝てるハズもなかったのは、騎兵の方だった。

「おらああっ！！」

荒いが、訓練された剣さばきで、兵が馬上から剣をふり下ろす。

それを紙一重で躲し、ルシオは己の剣を兵の甲冑で庇われていない部分 脇腹に、深々と刃を突き立てる。

ドッ！！

そして、一気に剣を引き抜いた。

「があああつ！！！」

兵の悲鳴に合わせて、馬が高く嘶く。血が噴き出た。が、ルシオは構わない。視線を 背後へ。

同時、

ルシオの背後を取った兵が、勝利を確信して笑った。

「もらったああ！！」

それも、一人ではない。三人。完全に囲まれていた。

「ル ！！！」

クレアが息を呑む。

瞬間、

「シャイニングボルト！！」

ズドオオオツ！！

甲高い重音を上げて、ルシオの手のひらから蒼白の雷が走った。ルシオを囲んでいた兵の二人が一瞬で吹き飛ばされる。と、同時。ルシオの正面に斬り込んできた兵の兜を、ルシオが両断していた。

斬ツ！！

上体を地面すれすれにまで落として、そこから剣を斬り上げたのだ。

「ぎゃあああ！！！」

悲鳴を上げて倒れていく兵を見つめて、クレアは思わずつぶやいた。

「……嘘……」

蹂躪する者と、される者。

ジェラベルン軍と貧民の間にある、そんな力関係が、初めて瓦解した瞬間だった。

ベリナスが衛士長としてジェラベルンに向かうのは、実に久しぶりだった。

公爵の館に着くと、館内を侍従たちが慌ただしく駆け回っていた。出された紅茶に口を付けるもそこそこに、ベリナスは公爵を窺う。

「なにかあつたのですか？」

執務机を挟んで、椅子に腰掛けた公爵は、ベリナスの言葉に深い溜息を吐いた。

「なに。どうということはない。今日は大がかりなネズミ掃除をしていてな。それで家の者が慌ただしくなっているのだ」

気難しそうな細面に、ブロンドの鬚を蓄えた公爵は、豪奢な上着の袖を机の上に置いた。乗り出すように、ベリナスの顔を見る。

公爵は、一言置いた。

「それで、君の婚約の件だがな、ベリナス」

「……………」

「分かっているだろうが、やはり奴隷というのが良くない。我ら貴族の高潔さを貶める行ためを、君の父も決して許しはしないだろう」

「それが父の親友であった、公爵様のご意見ですか」

「無論だ」

にべもなく頷いた公爵は、自分の前に置かれたカップを持った。公爵の腰かけた椅子が、くるとベリナスに背を向ける。公爵は窓を見つめながら、カップの紅茶をすすった。

「やはり、体面というのも考えねばならん。それが貴族のたしなみだ。王の執政を支える我らには、常に人の上に立つという義務があるのだ」

「しかし、貴族には貴族の役目があるように、平民には平民の、奴隷には奴隷の権利も尊重されるべきではありませんか」

「それが、お前とあの奴隷が契を結ぶことにつながるか？」

冷やかに睨まれて、ベリナスは公爵の向かいの椅子で座り直した。膝の上に手を置き、表情を改めて、公爵を見る。

「……………私は、阿沙加を愛しています」

きっぱりと放たれたベリナスの言葉に、公爵は溜息を落とした。

「重症だな」

それが公爵と交わす、まともな会話の最後だった。

ベリナスに連れられた阿沙加は、ラッセン衛士長の新妻として、公爵家が用意した祝杯の席にいた。しかし、奴隷出身の阿沙加に声をかける者はなく、彼女は盛大に設けられた祝杯の場で、忙しなく視線を右往左往していた。

ひそひそひそ……、

ぽっかりと中央に穴のあいた祝杯場が、貴族たちの話声で埋まる。彼女たちは冷めた目で阿沙加を見やり、時折笑い声を洩らしては、自分たちの話に没頭する。

「……………」

今まで侍従服しか着てこなかっただけに、ジェラベルンの純白のドレスなど、阿沙加も緊張して気が気ではない。今でも、テーブルに置かれたワインをドレスにこぼさないかと、阿沙加はハラハラしながら、手許と周囲に視線を配る。

（ベリナス様……）

政治的な話があると、屋敷の主人に呼ばれ、ベリナスが祝杯場を出て五分が経つ。阿沙加は不安な気持ちで彼を待った。貴族たちの

話声には耳を貸さない。深く聞かずとも、彼女たちがなにを話しているのか。その、暗い片鱗は聞こえていたからだ。

促された祝杯場の席で小さくなって、阿沙加はドレスの裾をつまんだ自分の手を見つめていた。

と。

阿沙加を見かねてか、館の者が歩み寄ってきた。

「レディ。こんな処に手持無沙汰でいらっしゃるのもなんです。待合室に行かれてはいがですか？」

促され、阿沙加は顔を上げた。もともと、目立つことが苦手な阿沙加だ。こんな部屋のど真ん中に席を置かれているのも苦痛だった。阿沙加はにべもなく頷くと、華美な装飾を施された祝杯場をあとにした。

こつこつと、家で何度も練習した靴音ヒールを鳴らして、阿沙加は毛の長い絨毯を歩く。

「こちらです」

侯爵の侍従は、ある部屋に阿沙加を促した。そこは机と棚、窓があるだけの、簡素な部屋だった。阿沙加は頭を下げて、その部屋に入った。

そのときだ。

「!？」

不意に背中を押されて、阿沙加は前につんのめった。

「なにを……」

伯爵邸の侍従にしては、手荒な扱いだ。阿沙加が考えを巡らせる前に、部屋に連れてきた侍従は、腰の剣を抜いていた。

「え　！？」

驚く阿沙加に、侍従　騎士は言う。

「奴隷が貴族と仲良くされちゃ、困るんだよ！！」

言葉はそれきりだった。彼は抜き身の剣を阿沙加に向けると、容赦なくそれをふり下ろした。阿沙加が目をつむる。

ギイインツツ！！！！

火花を散らしたような、甲高い金属音が立ち、ドツと、床になにかが突き刺さる音がした。

「ひっ！」

騎士が息を呑む。阿沙加が恐る恐る目を開けると、そこに騎士の剣を寸断したアレンが、立っていた。正確には、剣ごと騎士を寸断したアレンが。

「……アレン様！？」

「この街の責任者に会わせてもらいたい。貧民街に放った軍を、今すぐ引き揚げると」

抑揚のなくつぶやかれた彼の言葉に、阿沙加は戸惑いながらも頷

き、ベリナスが招かれた執務室へと向かった。

3 ルシオ編 貧民達の逃走

「……やっぱり、そう簡単にチビたちは見つからないか」

つぶやいたルシオは、酷く冷静だった。屈強と名高いわけではないが、それでも正規軍を相手に、彼はまったく苦戦を強くない。

その数、ざっと三十。

彼の周りには累々と、ジエラベルン軍の死体が横たわっていた。

クレアは自分の震えを抑えるように、胸許に置いた手を、ぎゅっと握った。

「……ルシオ……!!」

頬が火照る。

まさか、ルシオがここまで凄いととは思わなかった。

殺されるしかない。逃げ回るしかない。

軍を見たとき、絶望していた自分が、今では嘘のように信じられない。しかし、剣を握るルシオの姿に、クレアは一抹の不満も感じていた。

彼は、敵を恐れない。

その刃も、狂気も。

まるで、“自分”を押し殺すように。

剣を手にしたルシオは、まるで、死に急いでいるようだった。

「クレア。ここからは、一人で行け」

「……え？」

「ドルチエばあさんの家はああってたんだ。この先、二人でチビ

たちを探すのは難しい」

「どうして……」

「貧民街は広いからな。まだ逃げ遅れた奴だっているハズだ。だから、先に行け」

「いやよー!」

反射的に叫ぶ。と、ルシオの手が、ぽんとクレアの頭に乗った。くしゃくしゃと髪を撫でられる。クレアが、ルシオの手越しに彼の顔を窺うと、一つ苦笑したルシオが、彼女から視線を外し、ジエラベルン軍の待つ、貧民街を睨み据えた。

うおおおおお……!!

ジエラベルン軍の怒号にも似た、叫声が響く。

そのときだ。

空から、騎兵に向かって巨石が降った。

「スターフォール!!」

場違いなほど、間延びした声。それが響いた瞬間、降り落ちる無数の巨石の中に、騎兵たちが沈んだ。

「ぎゃあああ……!!」

「うわあああ……!!」

めいめい悲鳴を上げて、自分の上半身はあろうかという石に、兵

たちが落馬させられていく。それを尻目に、カーキ色のヘルメットをぐいと押し上げたロジャーは、ふんっ、と鼻息を吐いた。

「安心するじゃんよ。今回は特別、スターフォール（弱）で留めてやったぜ」

「ったく。殺しても殺し足りねえような奴ばっかだけだな」

ルシオと同じ名を持つ　バンダナを巻いた吊り目の少年・ルシオが、肩をすくめながらぼやいた。

と。
剣を握り、臨戦態勢を取っていた青年ルシオが、不思議そうに少年たちを見下ろした。

「……お前らは？」

問う。

すると、ヘルメットをかぶったロジャーが、得意げに胸を張った。

「オイラ？　オイラはロジャー！　ロジャー様だ！！　兄ちゃんたち、オイラたちが来たからにはもう安心だぜ！！」

「事情は知らねえけど、今は敵と戦うよりも、その姉ちゃん連れて逃げた方がいいんじゃないの？」

ナイフの状態を確かめながら、横目に少年ルシオが問う。

その姉ちゃん、と呼ばれたクレアが、ハッと目を見開いた。

ふと、視界に影。

「危な　！！」

クレアが反射的に叫んだときには、物陰から、兵が弓を手にロジャーを狙っていた。

先の生き残りではない。

伏兵だ。

ドヒュッ！！

「んあ？」

ロジャーが間延びした声で、不思議そうにふり返る。 矢は、もうすぐそこだ。

少年ルシオも、息を呑んだ。

「おいつ！！ バカダヌキッ！！」

悲鳴に近い声。

瞬間、

ギインツッ！！

伏兵の放った矢が、青年ルシオの持つ剣に弾かれた。くるんつ、と中空で回転した矢が、青年の頬を搔いて地面に突き刺さる。

……どっ！！

瞬間。

少年ルシオが、伏兵の後ろにいた。

「ひっ！！」

「寝てる!!」

怒りの籠った声と共に、少年ルシオのナイフの柄が、伏兵の延髄に叩きつけられる。

伏兵は、ふぎゃっ、と踏まれた蛙のような声を上げて気絶した。

ロジャーが、青年ルシオを見上げる。

「おう！ わりいわりい、兄ちゃん!!」

言いながらも、ロジャーはひよいひよいと手斧をふる。どつちら、こちらも矢を叩き落す準備は出来ていたらしい。青年ルシオが苦笑した。

「……どうやら、余計な世話だったみたいだな」

「へっへえ〜ん あつたりめえじゃん!! オイラはロジャー様だぜ!!」

ドンツ、と胸を叩くロジャー。

そんな彼らに、クレアが茫然と瞬いた。

「……凄い……。正規兵を、十人も？」

「んなことより、さっさと避難しようぜ。向こうはアレンさんが行ってくれたから、そんなに心配ねえだろうけど」

少年ルシオの言葉に、ロジャーも頷いた。

「アレン？」

青年ルシオが首を傾げる。と、バンダナを巻いた吊り目の少年は、得意げにニツと口端を緩めた。

青年ルシオが、表情を改める。

「手を貸してくれるってんなら、こいつを連れて、森まで逃げてくれないか？」

「んあ？ 兄ちゃんはどうすんだ？」

「俺は奴らを引きつける」

一部的隙なく言ったルシオに、クレアが目を見開いた。

「ルシオっ!？」

クレアの顔に悲壮感が走る。彼女の揺れる瞳を見つめて、ルシオは小さく苦笑した。

「そう言っなよ。追いかける方が、俺の気が楽なんだ。また置いていかれたら、俺、どうしたらいいかわからないから……」

「ルシオを置いて逃げるわけないでしょ!？ なに言ってるのよ!！」

「違う。昔、俺を置いて先に死んじまった奴がいたんだ。……だから、また置いていかれたら、」

ルシオは自嘲気味に笑い、目を伏せた。だが、剣を握る手は、少しも緩めない。

クレアは首をふった。

「だからって、私を置いていかないでよ!!」

「……ごめんな」

微笑ったルシオは、それきりふり返らなかった。

そのとき。

「ラストデイイイツチ!!!!（弱）」

ロジャーの頭突きが、青年ルシオの背中に直撃した。

どむッ!!

「っ!!!!!!?」

くぐもった音と共に、青年ルシオが、目を剥きながら前のめりに倒れる。

タン、と軽快に着地したロジャーは、這いつくばったルシオを見下ろしながら、両腰に手を据えた。

「だからって、兄ちゃんが姉ちゃんを置いてって良いことにはなんねえじゃん!!」

少年ルシオが、ナイフの具合を確かめながら頷く。じ、とこちらを見据えた彼の瞳は、清々しいまでに真っ直ぐだった。

少年ルシオは、地面から起き上がる青年ルシオに向かって、叱るように鋭く言い放った。

「男だったら、女を泣かすんじゃないねえ!!」

「四の五の言わずに守り抜く! それが男じゃんよ!!」

ダンッ、と右足で地面を叩いて、ロジャーがしたり顔で両腕を組む。そのルシオとロジャーを見据えて、青年は瞬いた。

「お前ら……」

「兄ちゃん! ちゃんと帰ってこなきゃダメじゃんよ!!」

「男の約束だ!!」

見上げてくる少年たちに、ルシオは苦笑し 力強く、頷いた。

冷や汗が、ベリナスの頬を伝った。腰の剣に手をかけたのも束の間、ベリナスはあまりのことに目を見開き、呼吸も出来ないほどに狼狽した。

「……今、なんと仰られた!!?」

恫喝に近い、ベリナスの詰問。血の気を失ったベリナスに、ジェラベルン国政を担う上院議員の公爵は、神経質そうな糸目を更に細めた。豪華な肘掛椅子で、のっそりと頬杖をつく。彼は心底鬱陶しそくに、顔を歪めた。

「“新しい妻を迎えよ”と言ったのだ。相手はこちらで決めている」

「違う！ 私が聞きたいのは 阿沙加を！！ 彼女を……どうなされたかということだ！！」

幼少からベリナスを知っている公爵だが、彼がここまで取り乱すのを見たのは初めてだった。ベリナスは感情の起伏が乏しいわけではないが、昔から、落ち着いた然があつたのだ。

ゆえに、ベリナスの血の気の引いた顔が酷く目につく。公爵は面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「もう良い。貴様がその気ならば、私にはどうすることも出来ん」

単調に言うと、公爵はぱんぱんと手を叩いた。途端、部屋の警護に居た騎士たちがベリナスを取り押さえる。瞬間。剣に手をかけたベリナスに、公爵の冷やかな声がかかった。

「抵抗するな。奴隷を始末するぞ」

「っ、っっ！！」

剣から手を離す。と。ベリナスの剣が、剣帯ごと騎士たちに引きはがされた。

（阿沙加 ！）

絶望で、生きた心地がしなかった。

“ 奴隷”。

阿沙加をそう呼ぶ者が、彼女にどんな仕打ちをするのか、ベリナスは知っている。自分の父も、“ 貴族” だったからだ。人を人とも思わない、物のような扱い。彼女の泣き腫らした顔が、鮮明に思い

浮かぶ。

凍りついた顔のベリナスに、公爵は詰まらなさそうに鼻を鳴した。取り押さえたベリナスに歩み寄り、公爵は片膝についてベリナスを見下ろす。冷たい、侮蔑の表情だった。

「ベリナス。ラッセンで下民の人気を集め、国を転覆させようとする愚か者よ。案ずるな。お前はかつての親友の忘れ形見だ。せめてお前は貴族のまま、あの世に送ってやるう」

「……なに!？」

「殺されたのだよ、お前は。貧民街の一掃に逆上した、下民どもによってな」

「!?!」

ベリナスが息を呑む。取り押さえた騎士とは別の騎士が、ベリナスの剣をすらりと抜いた。

(……阿沙加!?!)

ふり上げられた刃を見据えて、ベリナスは凍りつく。

瞬間、

ドオオオオンツッ!!

爆発のような重音を上げて、執務室の扉が粉々に砕け散った。

「なに!?!」

公爵が目を見開き、戸口をふり向く。
瞬間。

「ぎゃっ!？」

ベリナスを押さえていた騎士が、悲鳴を上げた。

公爵がベリナスをふり返る。と、ベリナスは緩くなった拘束を破り、剣で斬りかかろうとした騎士を殴り倒していた。

「っ、ベリナス!!」

公爵の顔色が赤くなる。ベリナスの愚かな行為に、彼は心の底から激怒した。屋敷の騎士を、さらに呼ぼうと声を張り上げる。寸前。侯爵の顎にぴたりと、ジェラベルン軍の剣が押し当てられた。

「ひっ!」

思わず息を呑み、公爵が刃を見る。

剣を突き立てていたのは、金髪蒼眼の、若い男だった。

「貧民街に放った兵を、今すぐ引き揚げろ。でなければ……」

鈍く光る剣の刃越しに、持ち手の殺気に満ちた蒼瞳が、公爵を睨む。

公爵は息を呑んだまま、しばらく正常な呼吸を忘れた。首に貼り付いた刃が、血も凍らせるほどに、恐ろしい狂気を孕んでいる。

「ひっ、いい、っっ、いっ!……」

「……………」

ゆらり、と剣を握る男の気配が揺れる。瞬間。ベリナスは叫んだ。

「やめる！！」

反射的なベリナスの言葉に、青年 アレンが、ゆっくりとベリナスに視線を向ける。彼の後ろには、公爵の人質にされた阿沙加が、胸許で両手を握って、不安な面持ちで立っていた。

(阿沙加っ……………!!)

無事な姿だ。

彼女を見つめて、ベリナスは込み上げる喜びをぐっと抑え、アレンに向き直った。

「君のおかげで阿沙加が救われたことは分かる！……………だが、今その男をこの場で殺せば、君はジェラベルンの敵だ！！ そうなれば、私とてこの剣を抜かねばならなくなる！！」

「……………」

「貧民街は、私が責任を持って兵を引き揚げさせる！ だから、この場は退いてくれ！！」

「……………分かりました」

公爵の首許を離れた刃が、名残惜しげに空を切って、鞘に納まる。と、アレンはそれきり公爵を、ベリナスすらをもふり返らずに去っていった。

アレンに連れてこられたと思しき阿沙加が、粉碎された扉の前で、うろつくと視線を彷徨わせる。

ベリナスは深い溜息を吐くと、アレンの殺気に当てられた所為で気絶した公爵と、騎士たちを見下ろした。

「……阿沙加。私たちは貧民街に向かうことになった。共に行こう」
意を決したようにつぶやくベリナスに、阿沙加は不安げな表情のまま、小さく頷いた。
貧民街、と口にした途端、ぶるりつ、とベリナスの背が、反射的に震えた。

殺気に満ちた、蒼の瞳。

まるで、鋭利な刃物だ。鞘を忘れた、抜き身の刃物。
ベリナスは帯剣した剣の柄を握ると、自分を奮い立たせるように前を見据えた。

“貧民街の兵を引き揚げさせる”。
それが適わなければ、ジェラベルンが滅びる。そんな予感がしたのだ。

だが、ベリナスが貧民街から兵を引き揚げさせたときには、
街に生存者は一人もいなかった。

ロジャーたちは、ジェラベルン軍の包囲網を抜けて、貧民街の外れにある森で、一足先に脱出させていたドルチェたちと合流した。

「ルシオ、大丈夫だよね……？」

クレアたちを逃がすため、一人、足止め役を買って出たルシオに、クレアは不安そうに街をふり返る。

ロジャーがにべもなく頷いた。

「大丈夫じゃんよ！ 覚悟した男は、いつだって強いもんだぜ！
姉ちゃん」

「それに。あとはあの兄ちゃんが来れば、街にいた人の避難は終わりだ」

「ありがとうよ」

「気にすんな、ばあちゃん！」

「人助けは当たり前のことだぜ」

自満気に言う二人に、クレアも頷いた。

だが、そのあとにルシオが現れることはなかった。

ジェラベルン、貧民街。
焼け焦げた廃墟が並ぶ道の真ん中に、ルシオは剣を突き立てていた。

もはや、身体が動かない。

「……これで、よじやく」

つぶやいたルシオの視界が、ふっ、と陰った。
靴音が近づく。
ルシオは顔を上げた。

「ひとつ聞きたい。……君は、助かる気がないのか？」

静かに問われる。

かけられた言葉に、ルシオは苦笑混じりに肩を揺らした。

(こいつがアレ、か……)

本人が名乗ったわけではないが、なんとなく分かった。

アレンはただ、ルシオの身体から流れるおびただしい血の量と、彼の頬についた、矢の痕を見つめている。傷自体は、大したものではない。ただ、頬をかすった矢の毒が、全身に回っている。

“死にたくない”。

人なら誰もが思う場面だ。だが青年はアレンを見上げて、自嘲気味に笑った。

「未練はない。あいつらを、逃がせられたんだ……。これでようや
く……プラチナに……」

つぶやく青年を見据えて、アレンは無言で右手に魔力を集中した。
ルシオの身体に蔓延した、毒を中和する詠唱を始める。
と。

解毒魔法を放とうとしたアレンの手を、ルシオが止めた。

「……」

小さく微笑って、ルシオが首を横にふる。

アレンは目を見開いた。

「待て！ 君は助かる！ 生きようと思えば、まだ生きられるんだぞ！―！」

右手に嵌った、真理の宝玉・アルスイオーブをもつてすれば、この程度の毒の中和など造作もない。アレンは、ルシオの毒を消してやる事が出来るのだ。

彼が、“生きたい”とさえ願えば。

アレンはルシオを見つめ、訴えるように目を細めた。だが、視線が合わない。ルシオの身体を支える、突き立てた剣が、ぐらりと揺れた。

ルシオの体が前のめりに崩れる。アレンはルシオを受け止めた。

「礼、言っといってくれ……、あいつらに、……プラチナ以外で……初めて……俺に、……」

“生きる” 目的を与えてくれたことに。

口の中でつぶやく彼の、最期の言葉を聞いて、アレンは息を呑んだ。自分の腕の中で、ルシオの瞳が、光を失う。

「君は助かる！ 助かるんだぞ！」

まだ、ルシオは意識を失っていない。今なら、まだ間に合う。ルシオの身体を揺すって、声を掛けたが、彼は微笑うだけで、答えようとはしなかった。

ゆっくりと、ルシオの身体が熱を失い、重みを増していく。

アレンは、ルシオの身体を揺する手を止めた。

「……っ！」

死。

完全に熱を失い、ルシオの身体がだらりと弛緩する。アレンは無言のまま、青年の死に顔を見据えた。

穏やかな死に顔だ。

それでもどこか、やつれているように見える。

アレンは唇を噛んで、開いたままになった彼の瞼を、閉じた。

何度立ち会っても、死の瞬間というのは、気分のいいものではない。

アレンは、息を吐いた。

「……君の逝き先が、安息であることを祈る。せめて、最期ぐらいは」

つぶやいたアレンは、ルシオの遺体を横たえた。剣を握っていないルシオの遺体から、籠手を外す。アレンは冥福を祈るように目を閉じると、それきり後ろをふり返らずに、貧民街をあとにした。

空から降るように現れた、蒼穹の女神に背を向けるように。その場に降り立った女神は、静かにルシオの遺体から光球を招き集めると、自身の胸の中に、彼の魂を納めた。

……

暗い場所だった。

光も、なにもない。ただ闇が占める場所。

「これが……、あの世ってやつか……」

かつての想い人も通った場所なのだろうか、ルシオは何気なく

思った。
と。

パアツ！！

不意に眩い光を感じて、ルシオは目を細めた。

「誰だ！？」

光をふり返る。すると、そこに立っていたのは、蒼穹の鎧に身を包んだ、銀髪の女神だった。

恐ろしいほどに、彼の想い人に似た顔の。

「私は魂を選定する者」

女神は、静かに言った。ルシオがわずかに、目を見開く。

「戦乙女、ヴァルキリー……？ あの、城で合った？」

「私と共に逝く気はないか？ お前には、生きる権利がある」

「……興味ない。神界で、神のために働くことになんか」

「お前が気にかけていた少女の逝き先も、か？」

「っ！？」

ルシオの瞳が力を帯びる。まるで、触れるな、と言わんばかりに、剣呑な光だった。

レナスは構わず、話を続ける。

「私と共に来れば、ニブルヘイムに招かれた少女の逝く末を確認することも出来る。いずれ、な」

取引だった。

ルシオの視線が下がる。

プラチナの、逝き先。

それを確認するために、ブラムス城まで赴いたのだ。彼女がちやんとニブルヘイムから転生出来たのか、冥界の女王・ヘルに捕まっていないか。

冥界の女王に捕まった者は、永遠に死の苦しみを与えられると、そう聞いていたから。

ルシオは自嘲気味に笑うと、レナスの顔をじっと見据えた。

「……分かった。あんたと共に、俺も逝かせてもらおう」

彼の言葉に、レナスは小さく頷くと、彼女は新たな勇者の魂を、そっと迎え入れた。

.....

「バレン、ラスティ……、ルシオおっ!!」

手渡された血まみれの籠手を抱えて、クレアは膝をついた。傍らではドルチェが、帰らぬ人となったバレンとラスティの私物に、顔をうずめて泣いている。

共に、貧民街から逃れてきた、アレンから手渡された遺品だ。

「可哀想に。……この古いぼれが……代わってやれれば……！」

すすり泣くドルチェの声を遮るように、ロジャーが一際大きな声で叫んだ。アレンを見上げる。

「そんな……！ あの兄ちゃんが……？」

アレンは小さく頷いた。

「ああ。俺が会ったときには、もう……」

「……あの、馬鹿……！」

忌々しげに、ルシオが舌打つ。傍らで、ロジャーが拳を握り締めた。

「ぐ、ぐぬぬぬ……！！」

低く唸る。

その二人に、アレンは屈んで、そつと耳打ちした。

「ルシオ、ロジャー。少しの間、ドルチェさんたちを頼めるか？」

「アレンさんは、どうするんです？」

「話をつけてくる。ヴァルキリーと」

言って、アレンは鋭い表情で立ち上がる。ロジャーが見上げた。

「兄ちゃん！」

「ジエラベルン軍がどう動くか分からない。ここの人たちを頼んだぞ、二人とも」

じつと二人を見る。と。沈んでいた二人の表情に、ぐっ、と力が籠った。

「任せとけ！！」

「気を付けてください、アレンさん」

「ああ」

言ったアレンは、森の中に消えていった。

4 ルシオ編完結 第二級神フレイ

廃墟となった貧民街は、焦げ臭かった。

埃と灰に塗れた路を行くと、空が白く光る。

見上げると、蒼白に輝く光の翼を広げて、女神が舞い降りた。

蒼穹の鎧に身を包んだ、銀髪の女神が。

その女神を見据えて、アレンは言った。

「今日は、アンタに用がある」

つぶやく彼に、いつもと違う空気を感じ取ったのか。銀髪の女神、レナス・ヴァルキュリアは、怪訝そうに眉を寄せた。

「用だと？ ……貴様、賢者の石に似たものを手にしたと言っていたが」

「そうだ。俺はこのアルスイ・オーブを使い、戦乙女がどこに現れるのか知った。そして、この街に来たんだ」

「相変わらず、人の領分を超えたことを。 ……覚悟は出来ているか、咎人よ！」

スラリとレナスが剣を抜く。アレンは構わず、話を続けた。

「その前に、話を聞いてくれ。俺はこの宝珠を使って、運命の三女神の末妹・シルメリアの眠りを覚ます。そのためにレナス。アンタの力が必要だ」

「……………シルメリア？」

レナスは首を傾げる。と、つぶやいた拍子に、女性の顔が思い浮かんだ。金髪の、妙齡の女性の顔が。

「っ!!」

途端、レナスの顔が引きつった。

ずきんっ!!

頭が鈍く痛む。ニーベルングの指輪が、紫色に輝く。

レナスは歯を食いしばり、抜き身の剣をアレンに突きつけた。

「アンタの妹の名だ。知っているだろう? ……それとも、思い出せないか?」

「っ世迷いごとを!!」

頭痛をふり払うように、叫ぶ。

アレンは目を伏せた。

「……一度その指輪、外してみるといい」

「っ」

ふざけるな、と言いかけて、レナスは口を噤んだ。

無表情のアレン。だがその瞳には、哀しい感情が浮かんでいる。

大切なものを失った相手に、どう声をかけたものか、迷っているよ。うな。レナスに、懺悔するよ。うな。

レナスは戸惑った。

少しの間を置いて、アレンが、す、と顔を上げる。と、彼はジェラベルン兵から奪った剣を手に、踵を返した。

「俺の要件はそれだけだ。あとは、アンタが決めてくれ」

この話に耳を貸さないのか。それとも、一度指輪を外してみるのか。

戸惑ったレナスを見つめて、アレンは一瞬だけ、憐れむように目を細めた。出来れば、今すぐにでもその指輪を……そう思う自分をふり払い、彼は女神に背を向ける。

去っていくアレンを見据えて、レナスは、はた、と我に返ったように瞬いた。

「咎人が、ほざくな！！……死の、先を逝く者たちよ！」

蒼白の翼から零れた羽が、四つの光球となる。それは雨粒のように地上に降ると、そこで眩い光を放って人を象った。

戦乙女が連れる魂、エインフェリアとして。

アリュージェ、洵、ジェラード　そして、ルシオが召喚された。そのときだった。

……ふわり、

エインフェリアを司る光球などとは、比べ物にならぬほど高貴な光を放つ“それ”が、空間に波紋を描いて現れたのは。

レナスが目を見開いた。

「……フレイー！！」

思わぬ女神の乱入に、レナスの声が、廃墟となった街に響く。

光球から、美貌の女神が迫り出した。豊かな薄茶色の髪をなびかせて、第二級神・フレイが、その場に降り立つ。

途端、アレンの眼の色が変わった。レナスに背を向けていた蒼瞳が、殺気を浮かべてフレイをふり返る。

ぎり、と奥歯を噛んだアレンは、フレイを睨み据えた。

「よくも、俺の前に姿を現せたな……!!」

「下賤な人間が、この私を睨みつけるとはね。身の程知らずな」

フレイは小馬鹿にするように失笑すると、レナスをふり返った。

「レナス。今日は加勢に来たわ。さっさと咎人を始末しましょう」

「始末？」

尋ねるレナスに答えず、フレイは掌に光を生じさせる。

瞬間。

ギインツッ!!

アレンの斬撃が、フレイの掌に生じた光によって止められた。

「なぬっ!?!」

「^{アレン}奴の一撃を……ああもあっさり……」

ジェラードとアリュウゼが、驚きにフレイを見る。

剣を握るアレンは、迷いなくフレイを睨んでいた。

フレイが、呆れたようにフツと息を吐く。

「人間が、レナスと渡り合ったぐらいで私に勝てると思って？」

剣を受け止めた光を、そっと押すように、フレイは腕を伸べた。
途端、

ドンツ　　！！

見えない衝撃が、光球から放たれた。フレイと直線上にあった廃墟が、ドオツ、と鈍い音を立てて崩れ落ちる。その廃墟の壁には、明らかに光球の衝撃と思われる、十センチ大の小さな穴が開いていた。

だが、

肝心のアレンは　そこに、いない。

フレイは無感動な視線を、左にやった。アレンの右手に、魔術方陣が浮かぶ。

「プリズミックミサイル！！」

ズドドドオオツ！！

各属性を宿した魔法の矢が、フレイを直撃する。が、彼女は髪をかきあげただけで、傷を負った様子はなかった。

歯痒そうに、アレンが舌打つ。その彼を、フレイは嘲笑混じりに見据えた。

「……なるほど。確かに人間にしてはやるわね。レナスが手こずるのも頷けるわ」

「フレイ！　だからと言って、貴方がヴァルハラから赴いてくるな

んて……」

「ラグナロクを我らが勝利に終わらせるためには、当然のことよ。それよりレナス、力を貸して頂戴。あの咎人を、完膚なきまでに消滅させるわよ」

「！」

レナスが目を見開く。ジェラードが言った。

「どういうことじゃ！？……奴は……エインフェリアとするのではなかったのか！？」

ジェラードが動揺した眼差しをアレンに向ける。その彼女を見つめて、フレイは失笑した。

「神界に必要なし、と判断されたのよ。しかし、これほどの力を持つ魂を、冥界のヘルに渡すわけにはいかない。よって、消滅と結論付けられた」

「過去から学んだ、とでも言いたげだな。反吐が出る」

吐き捨てるアレンを、フレイは冷たく見据えた。

「人間風情が、神と対等に話ができると思って？」

「同族をも道具とする貴様らが、ぬけぬけと！！」

剣を握ったアレンは、空いた左手で魔術方陣を展開した。フレイが嘲笑する。

「無駄なことを」

彼女が手を掲げた瞬間、光が散った。光が刃となって、アレンに走る。

と、

寸前でアレンが躲した光刃が、貧民街の壁を難なく貫いた。

ドオオツツ！！！！

「なにっ！？」

アリュージェが目を見開く。フレイの手のひらから散った光刃が、更に加える。数本、数十、数百。籠のように、複雑な編み目を描きながら。獲物を絡み取るように。

「……………」

が、アレンの表情に焦りはない。アルスイ・オーブの指輪が、蒼く輝く。

と。

壮絶な轟音が立つ中、洵は息を呑んだ。

「なにっ！！」

籠のように、逃げ場のないフレイの刃檻。それを、針に糸を通すように、合間を縫って、アレンが最小限の動きで回避する。フレイが不満そうに顔を歪めた。

「小癩な！！」

トンっ、と薄茶色の髪をなびかせて、フレイは地を蹴った。
ふっ、と。

距離が縮まる。

眼前に、フレイ。

「ハッ！！」

強烈な彼女の蹴り上げ。

ドンッ！！

蹴りを叩き落したアレンの左腕に、鈍い衝撃が走る。同時、そこから始まるフレイの蹴打は、まさに芸術だった。幾層に走る蹴りがアレンを打ち、光と音を弾き出して豪快に散る。壮絶な魔力の奔流。それを間近に感じながら、アレンは正確に、的確にフレイの蹴打を紙一重で捌く。

が。

蹴りを放つスピードはフレイの方が上だ。ジェラードは冷や汗が流れるのを感じた。

「アレン……！！」

思わず、拳を握った。不安げに戦いを見つめる彼女の傍らには、アリュューゼも苦い表情で二人を見据えている。

「なんの冗談だ……！！」

途方もない様子でつぶやくアリュューゼの言葉と同時、フレイが目を見開いた。

「捌き切った!? フレイの、ヘブンリィパニッシュメントを!!」

レナスが息を呑む。

瞬間、

アレンの剣が煌いた。

ズガアアンツッ!!

鋭い轟音を立てて、蒼雷が走る。

「!!」

交差気味に走ったアレンの横薙ぎが、フレイの身体を退かせた。

「おおっ!!」

「やるじゃねえか!!」

にやりと笑うジェラードとアリユーズ。

しかし、

ズバババアッ!!

剣を握るアレンの両腕から、血が噴き出した。退いたフレイの前には、透明な障壁が張っている。損傷は、ダメージない。

「相変わらず、厄介だな」

障壁を見据えて、アレンはつぶやいた。雷の練度と剣速を上げることは可能だが、そうすると剣が保たない。手加減してられないだけに、ジレンマだ。

一方のフレイは、損傷なしとはいえ、自分が弾かれたことが予想外だった。

まじまじと、障壁を張る己の手を見つめる。

「私の攻撃を……捌いた？」

自分に問うように、首を傾げる。と、フレイはつつすらと細めた瞳をアレンに向けた。

「刀だけでなく、その持ち手までもがこつも穢れていたとはね」

「……なに？」

ゆらり、とフレイの気配が揺れる。と。右手に嵌めた蒼石アルスイ・オーブの指輪が輝き、アレンの脳裡に、情景が浮かんだ。

光に満ちた、白い鈴蘭の咲き誇る神界ヴァルハラで。

己に触れようとした主神を、逆に切りつけた刀。

兼定の姿が。

「オーデイン様。これが件の刀です」

フレイは、中空に浮かせた兼定を恭しくオーデインに差し出した。フレイの掌で浮遊する剛刀に、オーデインは口端を緩める。

「よくやった、フレイ。お前の働きには満足している」

「有難きお言葉」

フレイが肃々と頭を下げる。それを尻目にオーディンは兼定に手を伸ばした。これほどの強力な威力を持つ武器だ。至宝グンニグルに加え、これでアース神族の統治は、より確かなものになったといっつていい。

「これが、人が作りし至高の刀とはな……」

見た目は他の刀と大差がない。強いて言えば、刀の尺ぐらいのものだ。

そう思いながら、オーディンが兼定を手に取りろうとした、瞬間。

スラアアア……、

中空に浮かんでいた兼定が傾き、鞘から刃が滑り落ちた。兼定を手に取りろうとしたオーディンに向かって、刃がくるんつと反転し、落ちる。

「オーディン様っ!?!」

フレイが目を剥いた。咄嗟、オーディンが手を引くと、刃は名残惜しげに空を切って、主神の眼前に突き刺さった。

玉座の間に刺さった兼定を、オーディンが引き抜こうとしたが、微動だにしない。

まるで、“ここに待つ”と言わんばかりに。

鎮座した兼定を　アルスイ・オーブに映し出された映像を見据えて、アレンの蒼瞳が、力を帯びた。

「兼定っ!?!」

ここにはない、愛刀を握るように。アレンは拳を握りしめる。魔力が集う。

蒼白の光を放つ、壮絶な魔力が。

(俺は、お前を　っ!!！)

フレイは、アレンに集う魔力を見据え、目を細めた。

「惨めな存在だわ」

つぶやいた彼女は、両手を前に突き出した。ハンドボールをつかむように、両手をたわめる。

キュイイイイイ……ッッ!!!!

フレイの神気が増す。空気が、大気が一点に集中していく。アレンは中空に浮かぶフレイを睨んだ。

フレイの口許に、酷薄な笑みが浮かぶ。

「私に牙を剥いた報いよ。浄化してあげるわ!」

「待つて! フレイ、その技は　!!」

レナスの制止も利かず、フレイは両手を前に突き出した。

「神技! エーテルストライク!!!!」

ゴォ　　ッッ!!!!!!

巨大な“光”が、空一面を覆った。

正確には、ハンドボールほどの大きさだった光球が、高度を下げるたびに大きく膨れ上がり、

「っ！ いかん！！ 街がっっ！！」

ジェラードの絶叫。

アレンの瞳が、蒼くぎらついた。

極限に高めた魔力を、エーテルストライクに向かって放つ。この世界では“存在し得ない”強力無比な、究極の一撃を。

「ソウルフォース！」

ズドオオ　　っっ！！

光線が走った。視界を白く染めるような、蒼白の光線が。

巨大化したエーテルストライクを、蒼白の光線が一瞬、押し上げる。

だが、

第二級神の神気は凄まじく、最強魔法を以てしても、貫けない。

ぞ、ぞぞぞぞ……っ

ソウルフォースを放つ右腕に、アレンは左腕を添えた。だが、強大な質量はアレンを文字通り埋めていく。

大きく開いた両脚が、神技に押されて土を削った。エーテルス

トライクを放つフレイの表情にも、驚きが加わる。

「なんですって！？ ……人間如きが、私の技を！？」

押されているとはいえ、神技を止めている。その事実には、フレイがフツと表情を消した。

「汚らわしい……。お前が護ろうとしたこの街もろとも、塵となりなさい!!」

ズドオツ!!

エーテルストライクの光球が、巨大化する。ずず、と地面を掻いて、アレンの身体が後ろに下がる。

「アレン!!」

「ヴァルキリー!! あの女神を止めろっ!!」

「街が !!」

エインフェリア
勇者の魂たちの声に、レナスは絶句する。

“止める”。
分かっている。だが、エーテルストライクを前に、レナスには止めるだけの力がない。

「ジエラベルンが……!!」

息を呑むルシオ。

そのとき、

アレンの右腕に、“魔術方陣”が展開した。ソウルフォースを放つ、右掌の前に。

キイイイイイ……！！！！！！

聞こえる。

アレンの耳には、黄金の光を放つ、愛刀の音が^{こえ}。

「お、おおおッ！！！！」

アレンは、カッと目を見開いた。右掌に凝縮した、魔術方陣が光を放つ。

同時。

「兼定あああつっ！！！！！！」

掌に宿る蒼白の光が、一段と輝きを増した。そこに、黄金の光が魔術方陣を描く。アレンとソウルフォースの光の間に、黄金の魔術方陣が。

ぐ、とエーテルストライクの軌道が、わずかに浮いた。レナスは目を見開いた。

「まさか！ あの人間……！！！！」

「じよ、冗談じゃろ！？」

ジェラードが失笑するも束の間。強力無比の魔法に “最強魔術” が加わった。

「セレスティアル・ソウルフォース！！」

黄金の魔術方陣が蒼白の光と混じり合ったとき、まるで炎のようなセレスティアルスターの光羽が舞った。

瞬間。

ソウルフォースの光線が、五本に増殖した。

オオ …… つつ!!

轟音と突風を巻き起こして、五つの光線が、苦もなくエーテルストライクを突き破る。

「なっ!?!」

「フレイ!!」

フレイは目を見開くと、防御態勢に入るように体を丸めた。瞬間、美貌の第二級神が、光の彼方に吞まれていく。光は女神を一瞬で喰らうと、空を穿つように、天空に奔った。

オオツツ ……!!

雲が割れる。

空を見上げたレナスは、あまりの威力に寒気を覚えた。

「ぐ……っ!!」

アレンの膝が折れる。究極の『魔法』と『魔術』による大量の魔力消費。媒介もなしに放つには、あまりにも強力すぎる合成魔術だ。アレンの全身から力が抜ける。朦朧とした視界で、アレンは空を睨み上げた。そこに、波紋を浮かべてフレイが現れる。

「よもや人間如きに、我が神技を破られるとはね」

冷酷で、無情なフレイの顔。それを見据え、ルシオは剣を抜いた。

「っ！ ルシオー！！」

「止めるな、戦^{ヴァルキリー}乙女。俺がなんのために死んだか、アンタは知っているだろ」

視線だけをレナスにやり、ルシオは静かに言う。ぎらついたルシオの碧眼を見咎めたフレイは、僅かに目を細めた。

「どうやら、不適格者を選んでしまったようね。レナス」

「待つて、フレイ！！ さっきの行動には、貴方にも非があるわ。故郷を壊されかければ誰だって……！！」

フレイは少しだけ意外そうに、眉を上げた。

「……まあ、いいでしょう。ここは貴方に免じて退いてあげるわ。けれどレナス。貴方が期限までに使命を果たせなかったときは、分かってているわね？」

街ごとだろうと、国ごとだろうと、咎^{アレク}人を消す。

放たれたフレイの言葉に、レナスは小さく頷いた。ぐ、と拳を握る。

そして、

女神たちが、ジエラベルンの空から天空へと掻き消えた。

神界か、それともまた別の場所か。

ともかく。

彼女たちの気配がなくなった所で、アレンは力尽きたように座り込んだ。

ドサッ……、

「……っ！ さすがに、いきなり合成魔法は無茶だったか……！」

霞む視界をなくさめるように、頭に手をやる。と、眩暈が起きてアレンは地面に横になった。仰向けで空を見上げる。白く煙った視界は、意識がもうすぐ消えることを意味していた。

アレンは眠りに落ちる寸前、脳裡に浮かんだ少年たちにつぶやいた。

「すまない……。少し、休む……」

風が吹く。たった一人街に残った青年の髪が、さらりと揺れた。

ヴァルハラ

神界を、光の柱が駆け抜けた。

蒼白の光と、黄金の羽根をまとった、巨大なエネルギーが。

玉座から眺めていたオーデインは、面白くもなさそうに頬杖をつき、目を細めた。

変化は、一瞬だ。

玉座の前に刺さった剛刀が、キラリと輝いた。それが光の反射によるものか、それとも兼定の共鳴か。

オーデインは下界を見据えながら、ふん、と一つ。不機嫌そうに鼻を鳴らした。

……

.....

用語解説（前書き）

ここでは、グローランサー関連の用語を解説します。

用語解説

1・リングウェポン（出典：詩帆編、ディパン編、フレンスブルグ編他いろいろ）

“異形の男”もシーティアも、このリングウェポンと呼ばれるアイテムを武器にして戦います。

用途はレーザーウェポンに近く、普段は指輪型ですが、持ち手の意思に反応してその人物に適した武器 “異形の男”ならば二本の長刀、シーティアならば槍^{グンデル} といった風に変えます。

ディパン編で、アーリイが

「マテリアライズだと!？」

と、驚いていますが、これはシーティアの特殊能力ではなく、リングウェポンにそういう能力があるだけの話です。

ただ、アレンが持っていた特殊武器^{レーザーウェポン}と違い、リングウェポンはどんな武器にでもなれるわけではありません。

具体的に言うと、リングウェポンは【持ち手に適した武器に変わる】という性質を持っているので、たとえ剣士であっても、「この使い手は大鎌が適している」と、リングが判断すれば、その剣士は大鎌を振るって戦わなければならなくなるのです。

つまり、“自分が慣れ親しんだ武器に変わるとは限らない”という厄介な一面があります。

リングウェポンは具現化させるまでどんな武器になるかは不明であり、また、一度リングウェポンを嵌めると、『リング鑑定師』と呼ばれる専門の職人に依頼しない限り、自力では外せません。

グローランサーでは、リングウェポンを使える者は武芸者の中で

も一部の人間だけであり、彼等を『リングウエポンマスター』と呼んでいます。当小説では使わない単語でしょう（呼ぶ人がいないので）。

2・アルスイ・オーブ（出典：ディパン編以降）

「世の真理を見通す宝珠」とシーティアは説明していますが、原作のアルスイ・オーブには“先読み”や“持ち手の質問に何でも答える”という便利機能はありません。

原作GLでは【全魔法が使えるようになる】アイテム精霊石。それが、アルスイ・オーブです。

3・グンニグル（出典：ディパン編、フレンスブルグ編）

シーティアの武器の名前です。オーディン様の槍にあらず。

グローランサー中でも、グンニグルは「最強の槍」として存在するので、かぶってしまいました。

混乱された方、申し訳ないm（ー；）m

性能は、VPIで言うところ「剛槍ダイナソア」です。

4・グローシアン（出典：フレンスブルグ編）

「日食や月食の日に生まれた子供は、魔力が高い」

というのが、グローランサーの世界観です。

特に、月食の時に生まれた子供よりも、日食の時に生まれた子供

の方が。

部分日食の時に生まれた子供よりも、皆既日食の時に生まれた子供の方が、高い魔力を有しています。

グローランサーでは、日食でも月食でもない、普通の日に生まれた人が【人間】。

日食または月食の日に生まれた人が【グローシアン】。

と、言う風に区別されており、【皆既日食のときに生まれた子供】一番強力なグローシアン】と言うことになります。

5・グレナディーア（出典：フレンスブルグ編）

これは『救世の光、殲滅の紅』に（その内）出てくるオリジナル騎士団のこと。1000人規模の小騎士団です。

アレンはそこで、“ゲヴェル”と呼ばれる地球人以上の身体能力・魔力・知力・体力を持つ種族を相手に剣術を教えました（そのお礼にアルスイ・オーブを貰った）。

このゲヴェルと言う種族は、GL界でもごく稀な存在で、

「人間よりも素の運動能力が高い。（鍛えなくても、馬鹿力・優れた瞬発力を持つ）」

「どれだけ戦っても、体力が減らない。（たとえ傷を負っても数分経つと治る）」

「魔力は皆既日食のグローシアンと五分。（むしろヒロイン（魔術師）以上）」

「初めて見る技でも“見ると同時に反応できる”。（初見の技も

余裕でかわせる)」

という、基礎能力からしてずば抜けた連中です。

誰に教わらなくとも、ゲヴェルは戦い方を知っていますが、“人間”の中で最も効率的なアレンの戦い方(というか、“ガード流”)を学ぶために、彼の剣術指南を受けていました。

ゲヴェルは右目が金、左目が蒼銀の瞳を持ち、黒い髪に人間では考えられないほどの美貌を持っています(ただし、全員同じ顔)。

また、『時空干渉能力』という、あらゆる次元と時空を超える特殊能力を有している種族でもあり、グレナディーアは、そんなゲヴェル達で構成された騎士団です。

6・時空制御塔(出典:フレンスブルグ編)

本編とはまったく関係の無い代物(笑)。

この時空制御塔は、レザード・ヴァレスの塔のように空中に浮かんでいます。

グローランサーの世界は、「二つの世界を重ね合わせた世界」なので、その二つの世界が乖離しないよう制御しているのが、この時空制御塔の役割なのです。

オリジナルキャラ紹介 十（前書き）

挿絵があります。ご注意ください。

オリジナルキャラ紹介 十

1、異形の騎士

> i 1 6 9 6 6 — 1 5 0 0 <

年齢・不詳（見た目十八歳）

身長・172cm

武器・白柄の長刀、デユラントル黒柄の長刀

『惑星グローランド』で脅威の存在だった仮面騎士ゲウエルの一人。

現在はグローランドにあるローランディアと言う国の王立近衛騎士団・グレナディーアの剣士。

同族殺しのイレイザーとして最強クラスの剣術の使い手だったが、自身の分身であり、同じゲウエル兄弟の命を奪う自分の存在に疑問を抱きながら、創造主のゲウエルの命に従っていた。

この【創造主のゲウエル】とは、彼が全力を出した時に背後に出現する“白銀の鬼”のことで、全長十数メートルの殺戮に特化した生物。人間を殺傷する為に、フェザリアンによって創られた。

つまり、フェザリアンが白銀の鬼を創り、白銀の鬼が仮面騎士を創った、というわけである。

イレイザーとは、仮面騎士が担う役目の一つで、その任務は『人間抹殺の計画』を邪魔しようと、人間側についた仮面騎士イレギュラーを始末すること。その役目を淡々とこなす折、彼は一人のイレギュラーと出会った。そのイレギュラーは人間への復讐の為に世界を混乱へと招くために創り出され、人の世に送り込まれながら、人の命を守る為に闘う騎士であった。その騎士との出会いで、彼は生きる意味を探すように諭される。

以降、彼は自分の命と心を救ってくれた騎士に忠誠を誓うようになった。

当小説では、突然姿を消した主を探して異世界を旅している最中です。普段は物静かですが、外道相手に容赦はせず、自分に挑んで来る者には真剣勝負でこたえる性格^{サガ}。

持つ刀によって、闘い方が変わります。

2、シーティア・フォルスマイヤー

> i 1 6 9 6 4 — 1 5 0 0 < > i 1 6 9 6 3 — 1 5 0 0 <

左が通常、右が因子解放^{ファフニール}。

年齢・十八歳

身長・165cm

武器・槍か刀、いずれかに可変する。
グニケルギンレイジ

ローランディア王立騎士団ファフニールの正騎士にして、過去に弟の為に世界を敵に回した罪を持つ。

しかし、時の支配者との闘いにおいて貢献し、世界の為に闘い抜いた勇気をたたえられ、現在も騎士の位を持つ。

相棒のピティとは、辛い時も悲しい時も一緒に過ごしたかけがえの無いパートナー。

天然に見えるがその実は思慮深く、情も深い。しかし、敵対する者にはとことんまで容赦せず、冷徹なる殺戮者、殲滅の紅と恐れられる。

弟と同じ顔^{カーマイン}をしているが、血はつながっておらず、彼女の顔を基に仮面騎士の顔は作られている。

3、ピティ

> i 1 7 2 0 9 — 1 5 0 0 <

年齢：一歳

身長：16.4cm

シーティアが外の世界へと旅立つ際にお目付役として、シーティアの義母サンドラが作り出した妖精型魔導^{ホムンクルス}生命体。基本的にシーティア至上主義。

オリジナルキャラ紹介 十（後書き）

ついでに、異形の騎士の背に現れる『白銀の鬼ゲヴェル』はこんな感じ。

> i17052 | 1500 <

惑星グローランドで脅威の存在だった『仮面騎士』はこんな感じですよ。

> i17053 | 1500 <

1 アークダインの遺跡編 異形、再び（前書き）

グレイの話ではありません。

1 アークダインの遺跡編 異形、再び

数百年前に、自分の力の強大さを恐れ、自らの命を絶った魔女がいた。

予知能力を持っていたというその魔女は、

一説によるとヴァン神族の始祖、ユーミルの血を受け継ぐものらしいのだ。

名をリセリア。

死してなおその魂は消滅することを許されず、

巨大な魔晶石の結晶の中に今も封じ込められているという。

封印されている場所は、アークダインと人間に呼ばれている遺跡だ。

レナスよ。

お前にはその遺跡に赴き、魔女リセリアの魂を解放してきてもらいたい ……

堅牢な白大理石に囲まれたアークダインの遺跡は、誰も足を踏み入れない古城だった。分厚い埃こそ被っているが、人の干渉を受けないからこそ、遺跡は今だ、美しい姿を残している。

城の中から、不死の鼓動を感じた。

レナスは目を細めた。

「こんなトコロに遺跡があつたとはな」

自分の身の丈の倍はありそうな大剣を背に担ぎ、アリュージェは古城を見上げた。生前、傭兵として各地を渡り歩いたが、レナスと行

動をするようになってから、見知らぬ土地も多いことに気付く。
洵が感じ入ったように古城を見上げ、はぁ、と息を吐いた。

「これが『遺跡』というものか……。祠とは違うのだな」

「あ？ 祠？ なんだそりゃ？」

「知らんのか？」

首を傾げるアリユーゼに、洵が説明しようとしたとき。ジェラー
ドが二人を遮るように、杖をこれ見よがしにふった。

「ともあれ、我らの目的はここにおる魔女なのだろう？ ならばゆ
くぞ！ ヴアルキリーよ！」

「ええ」

召喚したエインフェリアに応え、レナスは遺跡に踏み出す。その
折、横目で四人目のエインフェア。ルシオを窺ったが、彼は相変わ
らず暗い瞳をしているだけで、なにも話そうとはしなかった。

遺跡の高低ある構造を、レナスは晶石を使って難なく進む。道中、
遭遇する不死者に、アリユーゼがにやりと口端を上げた。

「ハッ！ ようやく出てきやがったか！」

そう言って、背中の大剣に手をかけた瞬間。

「ハアッ！！」

既にルシオが、不死者に斬りかかっていた。

相手はリブフォーリジャー。剣術を得意とする、紫色のマントを被った骨格系騎士だ。
スケルトン ナイト
が。

ずしゅいんっ！

ルシオの剣が、一足早くリブフォーリジャーに直撃する。不死者が迎撃にふった斬り下ろしは、ルシオの髪、数センチを切っただけで床に落ちた。

深々と、リブフォーリジャーの腹にルシオの剣が突き刺さる。

ぐ、ぎああああ……！！

リブフォーリジャーは悲鳴を上げて浄化された。

「……ちっ」

大剣の柄に手をかけたアリューゼが、忌々しげに舌打ちする。ルシオは剣を納めると、何事もなかったかのように先に行く。その背に、ジェラードが呆れたように溜息を吐いた。

「なんじゃ、つまらんの。貴様一人で戦いおつて。ヴァルキリー、妾の助成が必要か？」

ルビーの豪華な杖をふりたくって、ジェラードは不満そうに唇を尖らせた。

刀を握った態勢で静止していた洵は、静かに納刀して息を吐いた。視線をルシオにやる。ルシオを見据える洵は、どこか憐憫の色を浮かべていた。

「腕前は大了なものだ。しかし、まるで団結力がないな。あれでは、いつか己の身も滅ぼすぞ」

洵も、『団結力』に秀でた人物ではない。が、ルシオのそれは、個人プレーというより孤独そのものだったのだ。何者も寄せ付けず、何者も必要としない。

それゆえに生じる『危うさ』。

エインフェリアとなった今の洵には、分かる。盲目的に剣をふるその者の末路が。

「アリュージェよ。お主からもなにか言ってやってはどうだ？」

ジェラードは一つ杖で肩を叩くと、不服そうに大剣をしまったアリュージェを見た。

「フンツ、俺は慣れ合いは好かねえ。第一、なんで俺がそんなことしなけりゃならねえんだ」

「それは、一番年長者だからに決まっておろう！　こつ人生の先輩としてじゃな。お主だって、あんな死にたがりなところがあるじゃろ？」

「一緒にされんのは、はなはだ迷惑だな。俺は確かに命知らずかもしれないが、死にたがりってわけじゃねえ」

言ったアリュージェはジツとルシオを見据え、興味を失したように肩をすくめた。

剣を納めたレナスが、労いの言葉をかける。

「よくやった、ルシオ」

ルシオは、レナスと視線を合わせようとしなかった。剣を納め、一方的に言い放つ。

「用が済んだらさっさと戻せ。戦いになったらまた呼べ」

「ヴァルキリー！　いつまでもそんな無愛想な男に構っておらんで、早くこの結晶の中にいる女子を助けてやるのではないのか？」

「ああ。その通りだ。っ、っつ　！」

ジェラードに言われ、レナスが踵を返したそのとき。

レナスの表情が鋭く変わった。

アリユージェが、にやりと笑う。

「おい、どうやらそういうわけにはいきそうにねえぞ」

「どうしたのじゃ？　アリユージェ」

ジェラードが不思議そうに首を傾げる。その隣で、洵が刀に手をかけながら尋ねた。

「……貴様。いつの間に見れた？」

洵の言葉に、ジェラードはもう一度、水晶の魔女に視線を向ける。と。

いつの間にか、水晶の魔女の前に、一人の男が立っていた。

中背の男だ。軍服のような紅のロングコートを羽織り、白柄の長刀と、黒柄の長刀を腰にさしている。

男は、己の素顔を隠すように、目下に仮面をかけていた。

「なんじゃこやつは？ けったいな仮面を付けておるの」

ジェラードは眉をひそめる。

服装と仮面のバランスがおかしい。

アリユーゼは、男の放つ強烈なプレッシャーに、血が湧くを感じた。

「さっきの、レイバーロードってやつ仲間か」

「じゃが、不死者とはどこか違うような感じがするぞ？」

レナスと旅をするようになって一カ月近く。

エインフェリアに時間の感覚はないが、その間に何人も不死者と戦ったのは事実だ。今まで見えた不死者たちの顔を思い出しながら、ジェラードは首をひねった。

不死者にしては、気配が澄んでいる。しかし、人にしては気配が薄すぎた。

「何者だ？」

洵が問う。

男はジツと立ったまま、水晶の魔女を見上げた。

「テメエらに名乗る名はねえ。俺はこの水晶の女に呼び寄せられただけだ」

「！」

レナスの顔が強張る。

男は水晶の魔女からレナスに視線を向けると、仮面の奥でうつすらと目を細めた。

アリュージェたちには見えないが、金と蒼銀の、不揃いな瞳を。

「神と人の狭間にある者……。テメエが。なるほどな」

男は一人、納得したようにつぶやく。

ジェラードが訝しがりながらも、レナスを窺った。

「なんじゃ？ こやつ、ヴァルキリーのことを知っておるのか？」

「どうも、普通の人間ではないようだ」

洵も一つ頷く。

男の気配は静かだ。気を配っていないければ、洵であっても、気付かず斬り伏せられそうな錯覚を覚える。

アリュージェは、背の大剣をふり抜いた。

「んなことどうだっていいじゃねえか。こいつは久しぶりに楽しめそうだぜ！」

「むう……」

納得のいつていない表情で、ジェラードが呻く。

水晶の前に立った男は、小さく首をふった。

「やめておけ。テメエらじゃ怪我するだけだ。俺は無駄な争いはしたくねえ」

言って、男は水晶の魔女に向き直る。

男の物言いに、ジェラードはぴくりと頬を引きつらせた。

「無駄かどうかは、やってみねば分からぬな」

「フンツ、いいこと言っじゃねえか。アンジェラ」

「我と共に生きるは冷徹なる勇者。行くぞ！」

「……容赦しねえぜ」

アリユーゼが大剣を握る。

瞬間。

傍らを、ルシオが駆けた。

「なにっ!？」

アリユーゼが目を剥く。

ジェラードは杖をふって抗議した。

「あやつ! また一人で行きおつて！」

「やれやれ。新人をフォローする身にもなってもらいたいものだ」

気を取り直して洵も、刀を抜く。

男に向かって、ルシオが剣を一閃するが、男はいつの間にも抜いたのか。

白柄の長刀で、ルシオの剣を受け流していた。

キン、……

予想以上に小さな音に、ルシオが目を見開く。
瞬間。

男が片手で握った白柄の柄頭が、ルシオの鳩尾を抉った。

ズドオオツッ！！

「カッ！」

ルシオの身体が、冗談ごとのように遺跡の壁に張り付けられる。

男は吹き飛んだルシオを見据えて、言った。

「そんなものか」

レナスに警戒の色が浮かぶ。

男の抜刀は、レナスの目をもつてしても見えなかった。

「なるほど。ただの不死者ではないようだな」

慎重に剣を構えるレナスに、男は白柄の長刀を納刀した。

「その程度の腕前なら、わざわざ出張るまでもなかったか……」

「フンッ、俺たちをそのガキと一緒にしてもらっちゃ困るぜ」

アリユーゼが踏み込む。同時。ジェラードが炎の魔術方陣の詠唱を終えた。

「行くぞっ！ ファイアランス！」

ドドドドオオソッ！！

炎の槍が、鋭く男に走る。が、男は炎槍を見据え、最小限の動きでそれらを躲した。軽快なステップ。男には、魔法を避けても、まだ余裕がある。

洵が斬りかかった。

「ハアツ!!」

銀の円弧を描いて、洵の鋭い連撃が走る。

ギギギギインツ!!

男は白柄の長刀を納刀した状態で、刀の柄頭で、すべて洵の剣撃を受け流す。

「っ、!?」

洵は我が目を疑った。

「おらあっ!!」

アリユージェが上段から斬り下す。

大剣が空を切る、空寒い音。男は軽く横にステップして避けた。

ひゅっ!

途端。カウンターというべきタイミングで、男の柄頭の一撃がアリユージェの脇腹を襲う。が。アリユージェはバックステップで躲した。鋭く。大きく。

巨体に似合わない敏捷さで、アリユージェは男と距離を取る。

大剣を背に担いだアリューゼは、にやりと笑った。

「なるほど。不死者とは違うと思ったが、ずいぶんと正統な剣術を使いやがる。こいつあ面白くなりそうだ。……フツ、アレン以外じゃ初めてだな。こんなに楽しいのは」

その言葉を聞いて、ジェラードが小さく頷いた。

「ふむ。つまり小技は通じぬということか……。ならば、コンビネーションで一気に片付けるまでよ！」

「まずは俺から行かせてもらう！ 無限の剣線、貴様に見切れるか？ 奥義、千光刃！」

刀の具合を確かめるように、洵が己に持てる最高最速の技を持って、男に斬りかかる。

抜刀から始まる洵の連撃に、アリューゼが口笛を吹いた。

「あのタイミングじゃ避けられねえ。決まったか？」

アリューゼが、挑戦的に男を見るが。

洵が放つ無数の斬線に、男の姿がフツと消えた。

その場から。

なんの前振りもなく。

「なっ！？ 消えた！？」

洵が目を見開く。

瞬間。

洵の背後に、男が迫っていた。

「後ろだ」

男の声で、洵がふり返る。同時。男が、洵を蹴り飛ばした。

ドッ！！

「ぐはっ！」

地面に叩きつけられ、洵が息を吐く。
ジェラードが忌々しげに杖をふった。

「ぬう！　ならば、カラミティブラスト！」

ルビー付きの宝杖に最大の魔力を込めて、ジェラードが炎の大魔法を放つ。

と。

男の手が、初めて白柄を握った。

同時。

「オラアッ！！」

男の荒々しい気魄と同時、白柄の長刀が蒼白に輝いた。

ズドオオオンツッ！！

強烈な爆発音を立てて、カラミティブラストの炎が、男の周囲に立ち上った蒼白の“気”によって？き消される。

「ぬなっ!?!」

ジェラードはあまりのことに目を見開いた。瞬間。
男の放った蒼白の“気”の中から、アリュージェが炎の大剣をま
つて突きを放つ。

「奥義! ファイナリティブラストおおっ!!!」

眼前に迫ったアリュージェの究極技を、男は白柄の長刀を両手で握
つて、右袈裟から斬り下した。

キーンッ!!!

白い閃光が走り、アリュージェと男。

両者が互いに背を向け合う体勢で静止する。
アリュージェがやりと笑った。

びし……

男の目下に付けられた仮面にひびが入り、するりと床に落ちる。
現れたのは、漆黒の髪と、金と蒼銀の瞳を持つ美丈夫。人間離れ
した男の美しさは、男の剣技も相まって、一層人とは程遠い存在に
思わせた。

「ほう……!!」

アリュージェがつぶやく。

面の皮一枚、届いたと思ったが浅かったようだ。

(俺の予測より速えってのか……)

くく、とアリユーゼが喉を鳴らすと同時、

ぴしっ、

……ぱらぱらぱら

アリユーゼの握る大剣が、砂のように崩れていった。
アリユーゼが忌々しげに舌打つ。

「……またこの展開かよ……」

思わずつぶやくと、男　金と蒼銀の瞳を持つ美丈夫は、白柄の
長刀を握って言った。

「使い手は良くても、武器には恵まれていないようだな。その程度
の得物じゃ、この白柄デュランダルの長刀の相手は荷が重い」

言い放たれた男の言葉に、ジェラードは息を呑んだ。

「なんじゃと!? ドラゴンゾンビを一撃で倒すドラゴンスレイヤ
ーを……!」

「所詮エーテルコーティングされていない武器ということか。アリ
ユーゼ、下がっている」

レナスは言っつて、剣を構える。

アリユーゼは握り手だけになった大剣と、レナスを見比べ、舌打
った。

「ちっ。そしてまた、この展開かよ……」

「アリューゼ！ なかなかお前の好きな様にはさせてもらえぬな！」
「嬉しそうに言ってるんじゃない」

杖をふりたくるおてんば姫にそう言っつて、アリューゼは機嫌を悪くしたようにそっぽを向いた。

同時。

踏み込んだレナスが、上空で光の翼を広げた。

「その身に刻め！ 神技！ ニーベルンヴァレ ……なにっ!？」
思わず目を剥いたレナスは、遙か眼下にいたはずの男の顔を、間近に見た。

(……なんだと!？ 空間のゆがみも、なにもなかった!)
寒気を背に感じながら、レナスは咄嗟に出現させた槍を横たえる。
同時。

ズドオオオオオンツツ!!

男の突きが、レナスを巨大な槍ごと後方へ突き飛ばした。

「かはっ!!」

レナスが息を吐く。

「ヴァルキリー!!」

ジェラードが思わず叫ぶが、レナスからの返事はなかった。
杖を握るジェラードの手に、汗が滲む。

アリュューゼに言われずとも『強敵』と、ジェラードは男の気配で感じられた。緊張で喉が渇く。ジェラードは乾いた唇を湿して、アリュューゼに問いかけた。

「あやつは、魔法使いかなにかなのか？ この間の、レザードとか言う奴が使っていた、移送方陣という奴か？」

首を傾げるジェラードに、答えたのは洵だった。

「違う。あれは 倭国に伝わる剣術の運足法。縮地法だ……！」
剣の達人のみが使えるという、究極至高の境地」

「フン。なんだかよくわからねえが、とんでもねえ技だっことは分かったぜ。厄介だな」

アリュューゼは男を睨んだまま、笑った。
ジェラードが杖をふり上げる。

「あんなもの、ほとんどテレポートと変わらぬではないか！ それに、……吹き飛ばされたヴァルキリーは大丈夫なのか？」

「あれぐらいでくたばる奴じゃねえ。それより、今は自分の身を心配した方がいいぜ。アンジェラ」

アリュューゼは折れた剣を担ぐと、男を見据えた。
空気が張り詰める。

勝負。

ジェラードは頬にかかった髪を払った。

「アレンのときにも言ったが……、これは強敵ではないのかっ!？」

「相手がなんであれ、俺は退く気はない」

「容赦する気もねえな」

つぶやくと同時。

三人は、男を睨み据えた。

「……ルシオ！」

ジェラードが目を見開く。

彼女の視線の先には、遺跡の壁に叩きつけられ、瓦礫と共に埋もれていたハズのルシオだった。

「俺はまだ、倒れてはいない」

2 アークダインの遺跡編完結 ルシオが抱える闇

ルシオは右手で剣をしつかりと握り、浅い呼吸を繰り返しながら、男を睨み据えた。

アリユーズが眉をしかめる。

「テメエ一人で、この相手が倒せると思うか？」

「俺一人で十分だ」

答えると同時、ルシオが斬りかかった。
瞬間。

ガインツツ！！

ルシオが水平に剣を握ると同時に、男の刀が垂直にふり落ちていた。

圧倒的な衝撃。

「っ!?!」

ルシオが息を呑む。同時。彼の身体は、背中から地面に叩きつけられた。

アリユーズが、ごとりと固唾を呑む。アリユーズらしからぬ冷や汗が、今の一合で流れた。

刀が、見えない。

「なんだこいつは？ 達人クラスの腕前と、とんでもねえ反応速度……。本物の化け物かつ!!」

目を見開くアリユーゼに、ジェラードは戸惑った。
焦り。

どんな危機に陥ろうとも、その危険を楽しむアリユーゼが焦っている。異常だ。

ジェラードは、嫌な予感を覚えた。

「ど、どうしたのじゃアリユーゼ!?!」

存外、口調が早くなる。

アリユーゼはジェラードを一瞥し、解説した。

「ルシオの剣は、普通じゃ止められねえほど鋭い。少なくとも、なんの予備動作もない状態で、剣をふって吹っ飛ばせるような生易しい代物じゃねえ。だが奴は、それを無拍子で打ち返しやがったんだ。いきなり剣の軌道を変えやがった。とんでもねえバケモンだぜ!

……チッ!

レイバーロードとかいう奴の剣でも残ってりゃ、挑んでやるんだがな」

ルシオが浄化し、跡形もなくなったレイバーロードの台座を睨んで、アリユーゼは舌打った。粉々に砕けた愛剣　ドラゴンスレイヤーを見やる。抜き身がなくなり、最早見る影もない剣を。

「ぐっ……」

ニーベルンヴァレスティの隙を突かれ、倒れていたレナスが、ゆっくりと立ち上がった。男の一撃が効いているのか。彼女は剣を杖代わりに立つと、眩暈をふり払うように一つ頭をふった。

レナスが男を睨み据え、剣を突きつける。

「なるほど。どうやら私が思っていたより、はるかに強敵なようだな。お前が、フレイの言っていた異形か」

男がレナスに向き直る。感情の乏しい顔。無拍子でルシオを沈めた男は、息一つ乱していない。

「だからなんだ」

レナスの問いに、男は端的な問いを返した。

金と蒼銀。

男の、静かな色違いの瞳がレナスを見据える。同時。レナスは男の放つ剣気に触れ、自身の持つ剣レイテルブラッシュを握りしめた。

寒気。

男は悠然と立っているだけだ。

だが、その手が少し白柄の長刀にかかった瞬間。レナス以上の神速剣が落ちてくる。

「……」

レナスの背に、冷や汗が伝った。

ギイインツツツ！！

火花を散らして、男と剣を交える者がいた。

ルシオだ。

ルシオの剣を受け止めた男が、鏢迫り合いの状態で見据える。

「テメエ一人じゃ勝てねえってことが、まだ分からねえか」

つぶやく男に、ルシオは荒い呼吸を繰り返しながら、絞り出すように言った。

「俺はもう、これ以上俺の目の前で誰一人傷つくのを見たくないんだ。……だから、俺は！俺は戦う！！」

ギイインツ！！

ルシオが息を吸うと同時、剣が払われる。
瞬間。

ギキイインツ！！

ルシオの剣が、男の刀と切り結んだ。

右袈裟、唐竹、横薙ぎ、右切り上げ。

一合も介せなかった男の剣線に、ルシオがついていく。
ジェラードは、思わず拳をふり上げた。

「おおっ！先ほどよりルシオの動きが良くなっておるではないか」

「なんて奴だ！さっきより、あの化け物の剣線に追いついている」

「死地を平気で潜り抜ける　死ぬかも知れないという危険を簡単に踏み越えやがるか。だが、迂闊だ」

苦虫を噛み潰したようにつぶやくアリユーゼに、ジェラードが顔をしかめた。

「なんじゃと？ よい雰囲気ではないか！ あの化け物と斬り合っ
ておるのだ！」

ジェラードが言った、

そのとき。

変化は起きた。

ドゴオオンッ、、！！

鈍い衝撃音を立てて、ルシオが背中から地面に叩き落ちる。

「か、ハッ！！」

空気の塊を吐いた。

アリユーゼは舌打ちし、男を睨んだ。

やはり、強い。

それも“非常識”なほどに。

「並の相手には通じたかも知れねえが、今度ばかりは相手が悪い。
いくら運動神経がついていけるようになったからって、あの剣技は
神域だ。勢いに乗りや勝てるってもんじゃねえ」

「むうっ！ それでも行くぞ！ あやつは！」

「だろうな」

目を細めるアリユーゼに続いて、ルシオが剣を握り締め、踏み込
んだ。

ドツ！！

鋭い踏み込み。

そこから剣をふる。

ギキキキキインツツ！！

徐々に、

徐々に。

切り合いの時間が長くなる。
が。

ドゴオオツ！！

男の刃が、やはり早い。

ルシオが吹き飛ばされる。

ドオオツ！！

が、彼は壁に張り付いても、一歩も下がらなかった。

再び飛び込む。

剣が混じり合う。

切り結び、

吹き飛ばされる。

それを、三合ほど繰り返した所で、立ち上がってくるルシオに、
男は目を細めた。

「テメエはなにがしたい？ 人が傷つくのが嫌だと言ったな……。
だがテメエの戦い方は、とても人を護る戦い方じゃあねえ。……そ

う、人どころか、自分さえも死なせちまう戦い方で、人が傷つくのを止められんのか？」

男の静かな問い。

ルシオは荒い呼吸を繰り返し、

すう、と息を吸い込んだ。

青の瞳が、男を睨み据える。

影と闇を背負う、ルシオの眼差しが。

「関係ない……。俺が死んだあとで、どこの誰が傷つこうと、俺の知ったことじゃない。

俺は……。ただ、俺の目の前で人が傷つくのが嫌だ。自分の無力さが、再び突きつけられるみたいでな！」

「ほう……。ずいぶんと半端な覚悟だな」

「お前に、なにがわかる……」

つぶやいたルシオは、地を蹴った。

ギキキキインうっ！！

男の刀と切り結ぶ。

ジェラードが叫んだ。

「さらに剣速が上がったああ！」

ルシオの唐竹。

今までで最高最速の一撃。

が、

ギインッ！！

男の横薙ぎが唐竹を軽く叩き落とす。同時。予備動作のない男の突きが、ルシオの腹に決まった。

ズドオオオオッ！！！！

「ルシオっつ！！？」

レナスとジェラードが、目を見開く。
アリュューゼが強張った顔で言った。

「防御しても、この威力か……！」

アリュューゼの指摘通り、男の突きが入る直前。ルシオは己の身と刃の間に、剣を挟んでいた。

咄嗟の受け太刀。

が、男の突きはそれごとルシオを吹き飛ばす。
洵が、乾いた声で言った。

「……強すぎる……」

男が刀を払う。

息一つ　　どころか、男は、服装一つ乱れていなかった。

「フン。この程度でもう終いか？　やっぱり半端だな」

納刀しながらつぶやく男に、ルシオが再び立ち上がる。
全身血に塗れた彼は、しかし、眼光だけが爛々と輝いていた。異

様なほどに。

「上等だ。……殺してやる！ 俺一人で!!！」

「無茶だ！ いくらお前でも、それ以上戦ったら死ぬぞ！」

洵が叫ぶ。が、ルシオの瞳は微塵も揺るがなかった。

「ええいつ！ 見ておれん！ 妾も助太刀するぞ！」

ルシオのただならぬ気配に、ジェラードが杖を握る。
瞬間、

「手を出すなあつ!!！」

びりいつ!!！」

ルシオの恫喝が、遺跡に響いた。

レナスが驚いた表情で、ルシオを見る。

今まで生気のなかった彼が、怒鳴ったのだ。

「なぜ……！」

つぶやいたレナスは、ルシオを見据える。

何事にも活力のなかったルシオが、レナスたちの参戦を拒む。

悲鳴のような、悲痛な叫びを発して。

ルシオは、孤独だった。

彼は男を睨み、剣を握る。

「こいつは、俺が倒すっ！」

断言するルシオに、レナスは顔を強張らせたまま、言った。

「なぜだ？ なぜお前は、そこまで一人にこだわる？ お前は、なぜそんなにも孤独であるうとする……？」

レナスの声は、しかし、ルシオ自身が放つ呼吸で耳に届かなかった。

「はあ、はあ、はあ……っ」

ルシオは、すう、と息を吸い込む。
同時、

「おをつー!!」

ルシオは地を蹴った。
更に加速。

ドッ!!

レナス以上の剣速が、男の刀と切り結ぶ。
再び打ち合い、吹き飛ばされる。そんな展開ではなかった。
男の目が、す、と細まる。
同時。

……トン、

ルシオと切り結んだ男が、いつの間にかルシオを遙かに通り越し、その背後に着地した。静かな足音を立てて。

無数の銀の斬線を、ルシオの身体に刻みこんで。

チン……、

鏗鳴り音を立てて、男の白柄デューランドの長刀が納刀される。
瞬間。

ズバババババアツツ！！

「カハツツ！！」

アリュージェが見た斬線以上の血煙が、ルシオの全身から噴いた。

「ルシオつつ！！」

レナスが手を伸ばす。

がつくりと倒れたルシオに、最早立ち上がる気配はない。

洵は、ぽかんと口を開けた。

「……………なんだ、今のは……………？」

「今までの剣術は、手を抜いてやがったのか……………！」

アリュージェが息を呑む。アリュージェと洵の視線が、男を向いた。
肩越しに、ルシオを見据える男は、動かぬルシオに、ゆっくりと
目を閉じた。

「終いか。存外、手こずったな。だが、所詮半端者よ。……………ん
？」

興味を失し、納刀して、男が踵を返した瞬間。
ぴくりとも動かなかったルシオが、ぐぐ、と拳を握り締めた。

「俺は……」

ぼつりと、ルシオの声。

男がふり返ると、ルシオは全身を震わせながら、ゆっくりと立ち上がった。剣を握り、影ある瞳で、男を睨んで。

「俺はプラチナを失ったあのときから……、俺に守る者なんてないんだよ！」

……守りたい者なんて、俺にはなに一つない。それだけだ。

俺は強くなった。自分が無力だなんてもう思わないくらい、強くなったんだ。だから、俺はお前を倒す！ プラチナに、プラチナに会うためにだ！ うおおおあああっ！！」

慟哭のようなルシオの叫びが、遺跡に響く。同時に広がる、奇妙な圧迫感。

ジェラードは目を見開いた。

「あれは……」

「ブラムスを相手にしたときの、力！」

レナスは息を呑んだ。

ルシオは、この状況でも一度もこちらを見ない。誰も、必要としない。

空気が張り詰める。

アリュウゼが目を細めた。

「あの野郎、まだこんな力を隠し持ってやがったのか。とんでもねえ底力だ……。が、それでも奴は」

つぶやくアリユーゼのあとを引き取るように、男はただ、静かにルシオを見据え、

「なるほど。この俺を、討つてののか？ フっ、フッフッフッフッフ……」

不意に、キレたように嗤った。

右手で額を覆い、くっくと笑う。

男は右手を離すと、蒼銀と、黄金の眼差しで、ルシオを睨み据えた。

鈍色に底光る、“鬼”の眼差しで。

「この俺もずいぶんと甘く見られたもんだ。そんなしみつたれた強さで、この俺を斬るだど？ 笑わしやがる」

低くつぶやく男に、ルシオは地を蹴った。

己が放てる、最高の一撃を。

光を、

剣に宿す。

キィィィィ……！！

ルシオの持つ剣が、蒼白に輝いた。

「生死を分かつ、一撃を……奥義、ラウンドリップセイバア
アー……」

ドンッ！！

圧倒的な光に包まれたルシオが、光の化身となって男に突っ込む瞬間、

ざわっ………！

男の気配が、変わった。

白銀の異形が “鬼” が、男の背に浮かび上がる。闇に塗りつぶされた黄金と蒼銀の眼差しが、カツと見開かれた。

「禍事の闇に光、一つ」

男がつぶやくと同時、

背の“異形”が、吼えた。

ウオヲヲヲオオツツ！！

“異形”の叫声が、男の口から発せられる。同時。

ギインツツ！！

青い残光を散らして、両者が、交差法に斬り合う。ザツ、と。

確かな足取りで、両者着地する。

……、

が。

「プラ、チナ……」

つぶやいたルシオの身体が揺れ、こと切れたように倒れた。

「ルシオ！」

レナスが駆け寄る。全身血塗れのルシオは、僅かに開いた瞳で、レナスを見上げた。

「ヴァル、キリー……」

それきり、ぴくりとも動かない。

レナスは彼を抱きしめた。

「……ルシオ……」

ぼろぼろになった、ルシオの姿。

レナスは胸が、ぐうう、と締め付けられるのを感じた。
と。

……すう、

張り詰めていた“異形”の気配が消えた。

アリュージェが眉をひそめる。

デュランダル 白柄の長刀を納めた男は、水晶の魔女 リセリアを見上げた。

「答えは出たか？ これがアンタの望み、アンタを連れ出す者たち
だ」

つぶやく男に連れられて、アリューゼは水晶の魔女を見据えた。
と。

水晶から、リセリアの霊体が乖離した。
水晶に封じられた肉体とは別に、半透明のリセリアの姿。
目の前に舞い降りる彼女に、レナスは顔を上げた。

「リセリア殿……」

レナスがつぶやくと、リセリアはフツと微笑んだ。
吹っ切れたように、優しげな眼差しで。

「魂の御使い、ヴァルキュリア様。
私は、自分自身で制御しきれない、己の力の強大さに絶望し、命を
絶ち、魂も封印しました……。私は、自分が世界に存在してはなら
ないと考えたのです。そして長い間、私は自分を止めてくれる者を
待ち望んでいました……」

光に包まれたリセリアは、異形の男を見据え、微笑んだ。

「そして、この方が貴方の人となり、貴方が選んだ人たちを見せて
下さいました。貴方ならば、私の望む答えに導いてくれるかもしれ
ません。貴方に、ついていきましよう」

言つてリセリアの霊体が、レナスの体に溶けていく。

エインフェリア
勇者の魂を迎え入れる感覚。

それにレナスが目を閉じたとき、男は踵を返した。レナスたちに
一瞥もくれずに。

金属靴が立てる微かな足音を残して、男はあっという間に消えた。

「「「「……」」」」

男が去って行った方角を見据えて。

皆、しばらくは誰も喋らない。

ただ、気絶したルシオの傷が、あまりに生々しい。

先の激闘を語るような、異様な空気が。

だが。

金と蒼銀の不揃いな瞳を持つ、白銀の異形。

その真の力を、レナスたちはまだ知らない

……。

1 精霊の森編 塞いだ心

美しい森だ。

この世のものと思えぬほどの荘厳な景色とは、多分このように
とを言う。

「……………！」

洵は、目の前に広がる光景に、ただ息を呑んだ。

巨大な樹木が地中深くに根を張り、広がる木の葉が、木漏れ陽を
優しく反射する。光に満ちた、幻想的な森。それが“エルフ”たち
の住む 精霊の森、と呼ばれる場所だ。

厳かな静寂と、安らかな光に満ちた草花を踏みわけ、アリュージェ
は大剣を片手に、首を傾げた。

「よお。ヴァルキリー。こんな森に来て、一体なにしようってんだ
？」

およそ、不死者など存在しそうにない森だ。

エインフエリア

勇者の魂として、戦ってきた今までの戦場とは、少し趣が違う。

ジェラードが森の景色に目を奪われながらも、レナスに向き直っ
た。

「まったくくじゃ。こんな美しい森で妾たちが浄化せねばならぬよう
な不死者などおるのか？」

問うと、先行くレナスの脚が止まる。

ふり返った女神は、無表情に似合わない、優しい声音で言った。

「気にするな。お前たちには、この間のアークダインで大分無理をさせてしまったからな。その分、魂が傷つけられている。この精霊の森ならば、ミッドガルドの他の土地よりも、魂の回復が早くなる」

「む？　ということは、休暇のようなものか？」

首を傾げるジェラードに、レナスは頷き返した。興が失せたように、アリュューゼが後頭部で両手を組む。

「ハツ。休みなんざ必要ねえっての」

「しかし、俺たちはそうでも、あいつはそうじゃないだろう」

洵の言葉に、アリュューゼはレナスよりも先に行く　、赤い甲冑に身を包んだ青年を見やった。

「ありゃ、ただの自業自得ってんだ」

「……その通りではあるが……、もう少し言い方というのがあろう？　アリュューゼ」

アリュューゼをたしなめたジェラードは、三メートルほど先に居る青年に向かって、声を張り上げた。

「おい、ルシオ！　お前もそんなところで一人で歩いておらぬで、妾たちと一緒に歩かぬか！」

ルシオはふり返らない。

代わりに、彼は森を睨み据えて、言った。　ひどく落ち着いた声で。

「不死者の気配がする」

「『なにっ!?!』」

洵、ジェラード、アリユーズが顔を見合わせる。

レナスに視線が集まるが、戦乙女はなにも語らなかつた。

ジェラードが、眉をひそめて問う。

「なんじゃと? この森でか?」

その問いに答えたのは、この森の住人たるエルフだつた。

「コレハ、戦乙女ヴァルクユリア様。なにか御用がおありのヨウデスネ」

「エルフっ!?!」

ジェラードが目を開く。地上界ミッドガルにおいて、一般的にエルフは『御伽噺』に出てくる種族と認知されている。尖った耳に、美しい緑髪をした女性だけの種族は、狩猟で生計を立て、特に剣や弓での戦闘が秀でている。だが、その美貌を除いては、人間と遜色ない外見だつた。

しげしげとエルフを観察するジェラードを置いて、レナスは一步、前に踏み出た。

「オーデイン様からの勅命だ。通してもらいたい」

エルフは恭しく、頭を垂れた。

「コノ先は侵入者を拒む迷いの森。シカシ、あなた様を惑わすコトもありませんマイ。ドウゾ、ご案内いたしまシヨウ」

.....

エルフに連れられた場所は、精霊の森の深部だった。百名にも満たないエルフの集落がそこにあり、集落の長たるエルフが、レナスたちを迎え入れる。

長のエルフは、服装が他のエルフとは違う。だが、それ以外に、外観的特徴はなかった。

顔も、髪型も。

エルフには『個性』が欠落している。

一人一人は卓越した美女でも、同じ貌がずらりと並ぶと、それは『生物』というより、人形のようなだった。

エルフの長が、レナスを見る。

「ホウ、これは珍客デスネ。戦乙女が一体なんの用デス？」

「オーティン様から勅命を拝し、破損したアーティファクトの修理を頼みたい」

「破損したアーティファクト？」

首を傾げるエルフに、レナスは右手のひらをソツと掲げた。

なにもない空間の中に、ポウ、と。紅の宝珠が浮かび上がる。

紅蓮の炎をまとった宝珠は、核の部分がひび割れていた。それゆえに輝きが、どこか覚束ない。

レナスはエルフを見た。

「この”炎呪の珠”を修復してもらいたい」

「これを……デスカ。ふむ。魔力の結晶が綻んでいるようデスネ」

エルフはそう言って、炎呪の珠を受け取った。

ひび割れた核に、触れてみる。

「……………」

エルフの眉間に、皺が刻まれた。

「修復できないのか？」

レナスが問う。顔を上げたエルフは、深刻な表情で頷いた。

「エエ。……今は、と言った方が適切かもしれませんが」

「どづいことだ？」

「修復に必要な道具がないのデス」

「？」

レナスが要を得ずに首を傾げる。

エルフは、炎呪の珠を手に、精霊の森を見渡した。

「“炎呪の珠”は、炎竜ファープニルの強大な力を特殊な魔導儀式を行い、結晶化したモノ。

今はただ、その結晶が綻んでいる状態デス。ゼロから作るのとは不可能ですが、それを修復するだけなら一度珠の魔力を解放し、それ

を再度結晶化すればいい。タダ今は、その結晶化の儀式に必要な道具がないということデス」

「それはなんだ？」

端的に問う。エルフはレナスをふり返り、言った。

「結晶化の儀式に必要な“金の燭台”。魔力を空間に定着させる“銀糸”。空間の清めに使う“涼陰の雫”。そして魔力を空間に定着させる“魅了の羽”。この四ツ」

「それはどこにある？」

「“涼陰の雫”は南方の森の泉に、あります。」

“銀糸”は、北東の崖に棲む大蜘蛛を倒せば、入手できるデシヨウ。

“金の燭台”は森の中央に棲む汚らわしい大猿たちに奪われてしまつてイマス。

これらを手に入れるのは、戦乙女たるアナタなら比較的容易デシヨウガ……」

言葉を濁すエルフに、レナスは眉根を寄せた。

「どうした？ なにか問題があるのか？」

問ってみる。

エルフはジッと、精霊の森の彼方を見据えて、スツと息を吸った。

「コツカトライス」

「石化の魔獣？」

問うレナスに、エルフが頷いた。

「ソウデス。最も必要な材料である“魅了の羽”とはコツカトライスの羽のことナノデス。つまり、それを入手するには当然ですが、コツカトライスを倒す必要がアル」

「……それらを集めてくればいいのだな」

踵を返すレナスに、エルフはわずかに目を丸くした。

「行かれるのデスカ？」

「ああ」

短く、頷く。

エルフも一つ頷き返すと、スツ、と森の北西を指差して、言った。
「コツカトライスの巢は、北西の方角にアリマス。どうか気をつけてください」

精霊の森の草花を踏みわけ、ジェラードはしたり顔で頷いた。

「ふむ。ルシオの言った通り、森に魔物がおるのじゃな。……この
ような美しい森であるというのに」

言つて、森を見渡す。

天上界に最も近いこの森は、森のどこに居ても、世界の根本を成す、ユグドラシル世界樹を見ることが出来る。

下界と神界。

その両者を繋ぐ大樹が、精霊の森で根を張っているというのは、人間たちの間では知られていない神々の常識だ。

そしてエルフは、世界樹の守護者として、森に居る。

ルシオは、はるか上空にあるユグドラシル世界樹の幹を見据えて、目を細めた。

「精霊の森……か。他の場所とは、なにか感覚が違う。アンタから送られてくる支配の念が、少し和らいでいる気がする」

言つてルシオは、レナスを見た。

『支配の念』。

彼がそう称したのは、戦乙女がエインフェリアをマテリアライズ実体化させる上で、エインフェリア側が受ける制約のことだ。霊体たるエインフェリアたちは、戦乙女がマテリアライズ実体化させなければ、下界で存在出来ない。そして、実体化させるための魂の核は、戦乙女が、己の魂と同化させている。

ゆえに、魂を共有する戦乙女と、一定の距離を保つて行動しなければ、エインフェリアは、消滅してしまうのである。

ルシオの指摘に、レナスは小さく頷いた。

「その通りだ。ここはミッドガルドでありながら、アスガルドでもある場所。世界の根幹を成す、世界樹が根を下ろすこの精霊の森では、エインフェリアたちよ。お前たちは不死者になったり、魂が消滅したりすることはない」

静かなレナスの言葉に、ジェラードが嬉しそうに声を弾ませた。

「おおっ！ ということは、久しぶりにヴァルキリーから離れても、この森の内部ならば大丈夫ということか」

「そうだ」

レナスが頷く。

と、

今まで足を止めていたルシオが、皆から踵を返した。森の奥へ、一人で行ってしまう。

その背に、洵が慌てて声をかけた。

「おい、待て！ 一人でどこへ行くつもりだ？」

ルシオは、ふり返らずに答えた。

「決まっている……。魔物がいるんだろ、この森。なら、俺の行くところは一つだ」

「ちょっと待て！ 戦乙女はお前のためを思って、この森に来たはずだ。ここで休めということだ。それに、あの異形から一番ダメージを受けたのはお前だろう！」

洵の指摘に、ジェラードが両腕を組んで頷いた。

「そうじゃ。お前のために休暇に来たようなものなのじゃから、少しは休むがよい」

ルシオは足を止めながらも、やはりふり返らない。

彼は皆に背を向けたまま、言い放った。

「余計な気づかいだ。俺は一人で戦える。誰の助けもいらないと。」

不意に、アリユーゼの失笑が零れた。

ジェラードが目を丸くする。アリユーゼは冷えた眼差しで、スツとルシオの背を睨み据えた。

「ほお？ ずいぶんと大きく出るじゃねえか。テメエ、何様だ？」

「アリユーゼ？ なにを怒っておるのじゃ？」

控え目に、ジェラードが問う。

アリユーゼはルシオを睨み据えたまま、フンと鼻を鳴らした。面白くもなさそうに。

「気に入らねえんだ。根本的に気に入らねえ。この俺が、なんでお前に助けられなきゃならねえ？ この死にたがりか」

ルシオが、肩越しにアリユーゼを見る。

「アンタには関係ない。傭兵が死ななていう言葉を使うのか？ 俺たちの存在意義はなんだ？ 不死者を殺すことだろ？ “同族、相憐れむ”みたいな感じだな」

「フン」

アリユーゼは鼻を鳴らすと、ゆっくりと大剣に手をかけた。

ジェラードが、慌てて止める。

「よさぬか二人とも！ こんな所でケンカしおって！ ともか

く。その炎呪の珠を直さねばならぬのであろう？ 皆で協力して、魔物を倒せば良いではないか」

おたおたと両者を見るジェラードに、援護したのは洵だった。

「その通りだな」

ジェラードを庇うように、洵が前に出る。

肩越しに、洵とジェラードを見やったルシオは、なにも言わずに踵を返した。また、一人で歩きだす。

その背を見据えて、ジェラードが溜息を吐いた。

「ふう。なんとも難しい奴じゃのう」

「まったくだ。……アリュューゼがケンカを売るから、危うくどうなるかと思った」

なにか言いたげに、洵がアリュューゼを見る。

ジェラードも、続いてアリュューゼを見上げた。説教でもするよう
に、スツと両手を腰に据えて。

「まったくじゃ。売ってどうするのじゃ、お前は？」

叱りつけるように、眉間に眉を寄せるジェラード。姫君を尻目に、アリュューゼは両腕を組んで、肩をすくめた。

「なんか問題でもあんのか？ そろそろハッキリさせた方がいいだ
る。アイツが本当に信用できる奴なのかどうか、ってことをよ」

言って、鋭い眼差しをルシオに向ける。

ジェラードが、つられてルシオの背を見るが、アリュージェの言いたいことは良く分からなかった。首を傾げる。

ジェラードが疑問を口にする前に、レナスが三人を制止した。

「お前たち、その辺にしておけ」

「む？」

ジェラードが、レナスをふり返る。

レナスは、自分の傍らを歩く魔女に、頭を垂れた。

「リセリア殿。申し訳ありません、とんだ醜態を晒しました」

恭しい態度を取るレナスに、アリュージェが肩をすくめる。

リセリアは胸の前で両手を組み、そつとルシオの背を見つめた。

「争いを好まない私ですが……、彼は自分から争いを呼んでいるように見えます。まるで、死に場所を求めている亡者のよう」

相変わらず、消え入りそうな声でつぶやくリセリアに、アリュージェは、ニツと笑った。

「分かっているじゃねえか……。その通りだ。アイツは死に場所を求めている。死ぬこと以外考えちゃいねえ。“自分が生きることなんてどうでもいい”って考えてやがる。そんな奴に、背中なんぞ預けられと思うか？ だから、そろそろハツキリさせようってんだ。アイツが信用に足る奴かどうかをな」

「じゃが、あの白銀の鬼を相手にしておったとき。不死の王を相手

にしたときも……、奴は妾たちを護ってくれたではないか」

不服そうに唇を尖らせるジェラードに、アリュューゼは首をふった。

「馬鹿野郎が。ありや護ったんじゃねえ。俺たちが傷つくのを見て、自分が傷つくのを恐れたんだ、アイツは。それこそ極度にな。」

エインフェリアになるんだから、誰にだってトラウマの一つや二つはあるだろう。だがそれにしても、奴の『命』へのこだわりは異常だ。ありや、執念と言ってもいい。このまま行けば、奴は必ずどこかで壊れる。

そんな奴をいつまで信用できる？ もうホントはぶっ壊れちまつてるかもしれねえ奴を」

「……」

アリュューゼの言葉に、どこか感じ入るところがあったのか。

洵が深刻な表情で、アリュューゼを見た。

「だがどうやって、奴が信用できるかどうか、試すんだ？」

「決まってる。口で言っても分からねえなら、この剣で聞いてやる」

にやりと笑って、アリュューゼは背の大剣に手をかけた。途端。ジェラードが薄眼で、アリュューゼを睨む。

「フン。ただお前が戦いたいただけではないのか？ アリュューゼ」

問うたが、アリュューゼは構わなかった。自分の後ろを歩くレナスを、ふり返る。

「ヴァルキリー。構わねえよな？」

「それを私が許可すると思うのか？ アリユーゼ」

逆に問い返す。すると、アリユーゼが眉間に皺を刻んだ。

「うむ。普通はせんであろうな！」

レナスを援護するように、ジェラードがしたり顔で頷く。アリユーゼの思い通りにならないのが、嬉しいのだろう。

アリユーゼは観念したように肩をすくめると、五メートル以上、間を空けて前を行くルシオを見て言った。

「なら、今から魔物退治をするんだっただよな？ 俺が言ったことをよく考えて、魔物とアイツの戦いを、見てみるといいぜ」

「……………」

アリユーゼの言葉を胸に、レナスはただ、厳しい面持ちで押し黙った。

2 精霊の森編 アリユーゼvsルシオ

南に進むと、巨大蜘蛛の巣がある崖デス。

森を哨戒するエルフから忠告を受けたレナスは、精霊の森南方に位置する大蜘蛛の巣を睨み据えた。崖の上に巣食っているだけに足場が悪い。

見上げれば、地上6メートルの所に白い蜘蛛糸に坐する大蜘蛛がいる。毒性を孕む蜘蛛だろう。体表は極彩色だ。

ジェラードが、ひっ、と息を呑んだ。

「こ、これが噂の大蜘蛛か……！」

つぶやくジェラードの顔色が、心なしか白い。

人よりも大きい体長2メートルの大蜘蛛となれば、ジェラードが顔色を失うのも無理はないことだ。

地上からでも蜘蛛の体表を覆う産毛まで見えそうな大蜘蛛を見据えて、アリユーゼは背中の大剣に手をかけた。

「ハッ。蜘蛛だかなんだか知らねえが、切り捨てるまでよ」

「お前は下がれ、アリユーゼ。あの鬼に剣を砕かれたハズだ」

言っつて、洵が納刀した柄に手をかける。アリユーゼが不服そうに鼻を鳴らしたそのとき。二人の横を、ルシオが駆けた。

ぎっしー！

一足飛びで、巣の上へ。

羽根でも生えているかのごとく、木々の枝を蹴って大蜘蛛に肉薄する。

「ハアツ！」

上段からのふり下ろし。大蜘蛛は何百を超える複眼でルシオを捕えると、牙の生えた口角から糸を吐いた。

白い塊が、矢のように駆ける。

ルシオはそれを半身切って躲した。構わず、剣をふり下ろす。が大蜘蛛の剣のような足が、キン、と甲高い音を立てて、ルシオの剣を弾き返した。

地上から、ジェラードが息を呑む。

「な、なんじゃ！？ あの蜘蛛糸、ただの糸ではないのか！？」

彼女の言葉にルシオが背後を見ると、蜘蛛の放った糸が、樹木を紫色の煙を上げて溶かしていた。

強烈な酸の臭い。硫酸も混じっている。

ルシオは爛れた樹木から、無感動な眼差しを毒蜘蛛に向けた。

「ちい！」

洵が舌打ちながら、刀を抜く。と。その彼の肩をアリュージェが叩いた。

洵がふり返る。

「まあ、見てろ。丁度、おあつらえ向きの相手だ。どうせあの程度の敵じゃ、奴の相手にはならねえ。ついでに、俺の言いたかったことが見えてくるだろうよ」

「……なに？」

アリユーゼの言葉に、洵は首を傾げた。レナスも厳しい表情でアリユーゼを見、毒蜘蛛と戦うルシオに視線を向ける。

と。

毒蜘蛛が更に糸を放った。三つ。矢のように走る蜘蛛糸を、ルシオは紙一重でくぐり抜け、毒蜘蛛の懐に飛び込む。蜘蛛と巣の間隙。大蜘蛛の腹を下から眺める隙間にもぐりこんだルシオは、そのまま剣を頭上に突き上げた。勢いよく引き抜く。

びしゃああつ!!

切り裂かれた蜘蛛の胴から、緑色の体液が雨のように降る。緑雨は蜘蛛の巣を煙を吐きながら溶かし、濃霧を起こす。

「ルシオッ！」

ジェラードが叫ぶと同時、霧の中から毒蜘蛛の悲鳴のような鳴き声が響き渡った。

むっとするような霧の中。剣を引き抜くと同時に後ろに下がったルシオは、毒蜘蛛の脚に襲われた。剣のように光沢を放つ銀の脚。それをバックステップで躲したルシオは、躲すと同時に蜘蛛の脚を切断した。今度は刃が弾かれぬよう、遠心力と“芯”を込めて。

ズシュインッ、!

ルシオの体重の乗った斬線が、蜘蛛の脚を2、3本切断した。中空を回転しながら舞う脚の破片が、地面近くにあった岩を豆腐のように切断する。

洵は目を睜った。

エインフェリアの中で、最も魂の損傷が激しいのが考えるまでもなくルシオだったからだ。

「なんて奴だ……！ 普通なら立っているのがやっとの傷で、もうあれだけ動けるのか!？」

毒蜘蛛がルシオを串刺そうと放った脚は、決して遅い攻撃ではなかった。常人にすれば一瞬きの間。その攻撃を躲すだけでなく、彼はカウンターを放って見せた。

アークダインの遺跡の激闘後と考えれば、常軌を逸した動きといえる。

アリュージェが面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「体さえ動けば、あとは心の問題だ。少なくとも、奴にとってはそうなんだろう」

その解説を肯定するように、毒蜘蛛が脚を斬られ、巣から落下して地面に接する瞬間。

ルシオは毒蜘蛛の胴を下から斬り上げ、その胴を縦に分断した。強酸を含む毒の体液が無尽に飛び散る。地面が酸で蒸発した。

ルシオは毒蜘蛛の体液が飛び散る間だというのに地を蹴り、上空から毒蜘蛛の頭に剣を突き刺す。

キ。シィ、ヤアアア。アアア!!

毒蜘蛛が最後の抵抗とばかりに顔を上げる。その体液が、ルシオにもわずかにかかり、鎧の肩の部分が溶けた。

が。

ひらりと地面に降り立つや、彼はなんの感慨もなく、剣についた

蜘蛛の血を払った。

細かく痙攣していた毒蜘蛛が、ぴたりと止まる。
絶命だ。

剣を納めたルシオは、己の勝利を誇るでもなく、次の戦場に向けて歩きだす。

その背を見つめ、ジェラードがどこか寂しげに目を細めた。

「死にたがりとは、こういうことか……」

つぶやいた彼女は、転がった毒蜘蛛の死骸　それが放つ強酸の
体液を見つめた。

木々や岩をも溶かす毒酸。

岩を豆腐のように切る鋭さを持つ脚。

どちらの脅威にも、ルシオは顔色一つ変えず飛び込んでいった。

“勇猛”、“果敢”……。

そう考えていた自分が恐ろしくなるほど、己を顧みないルシオ。

洵は暗い表情のまま、頷いた。

「なるほど。あんな無茶な戦い方をするのは、すべて自分が死ぬため。そう考えれば、辻褄が合う。……いや、そう考えた方がしっくりくる。あれは勇気なんかじゃない。無謀だ」

リセリアが胸許で手を重ね、儂げに首をふった。去っていくルシオを見つめ、彼女は哀しげに目を細める。

「なんと可哀想なお方なのでしょう。彼は、ただ死のうとして
いるではありません。ただ死にたいのであれば、彼は自ら死を選ぶ
でしょう。死ねないのは恐らく、かつて失ったモノへの、贖罪の表れ
なのではないでしょうか？」

「……………」

レナスは、ただ黙ってルシオを見据えた。ジェラードや洵、リセリアの言葉が聞こえなかった訳ではない。

その証拠に、彼女の眉間には深い皺が刻まれていた。

ルシオは、魔物の返り血を拭おうともしない。毒蜘蛛の乾いた血液は黒く変色し、ルシオの赤い鎧にまとわりついて不気味な光沢を放った。

「ル
」

そんなルシオに、レナスが声をかけようとした、そのとき。

傍らを、アリュューゼが駆けた。

上段からふり下ろす。

ギイインッ！

鈍い轟音を立てて、大剣が止まった。ルシオが剣で止めてい
る。

「なんのつもりだ？」

問うルシオに、アリュューゼはにやりと口端を歪めて嗤った。

「なに。死にたがりの寝ボスケ野郎に、目を覚まさせてやるつもり
思
つてよ」

「よ、よせッ！ アリュューゼ！」

洵が慌てて止める。

「そうじゃ！ 味方同士で剣を交えてどうする！ やるならば、敵と戦え！ 敵と！」

ジェラードも杖をふりたくって抗議したが。

アリュューゼは鏢迫り合いの刃越しに、ルシオを睨んで言った。

「敵さんじゃ教えられねえから、俺が教えてやらあ。戦いの『真の意味』つてのをな。……戦いは死ぬためにやるもんじゃねえんだ。テメエの戦い方は、気に入らねえ！」

牙を剥いたアリュューゼは、一息で大剣をふり抜いた。構えるアリュューゼに、ルシオが、不快気に目を細める。

「戦いになにか誇りでも持っているのか？ 俺には理解出来ないし、したくもない。戦いなんて、ただの手段だ……」

「だろうな。そんな考え方だから、お前は、そんな戦い方しか出来ねえんだよ」

アリュューゼが言い放つ。

ジェラードは視線を泳がせた。

「そ、そもそもお前、剣は折られたのではなかったのか！？ どこから持ってきたのじゃ！ そんな大剣モ！？」

「自前がなくなっただけの話だ。行くぜ」

つぶやいたアリュューゼは、エインフェリアに選定された折、レナ

スから受け取った大剣 エレメンタルエッジを構えた。
アリューゼの青瞳が、獣の獠猛さを備える。
ピン、と空気が張り詰めた。

「一瞬で片付けてやる」

言うアリューゼに、ルシオも剣を抜いた。

「待て、アリューゼ！」

「やめろアリューゼ！」

ジエラードとレナスが止める。が、アリューゼの瞳はルシオを睨んだまま、微動だにしない。

「生憎だが、この精霊の森じゃテメエの支配力も落ちるようだな。こりゃあいい。テメエに邪魔はさせねえぜ、ヴァルキリー！」

同時。

アリューゼが地を蹴る。上段から相手を叩き伏せるふり下ろし。

ギインツッ！！

ルシオは剣を水平にして止めた。びんツ、とアリューゼの剣の重さを物語るように、鈍い反響音が響く。

洵が目を剥いた。

「なんて奴だ！ 重戦士の一撃を、真っ向から受けて切り返すとは……！！」

「ルシオの奴、馬鹿力じゃの！」

ジェラードも驚いたように、声を弾ませた。

交り合ったルシオとアリユーゼの剣が、離れる。同時。ルシオが踏み込んだ。

ドツ、と。

深い踏み込み音を立てて、アリユーゼの懐へ。

アリユーゼの足もと　膝を狙う、袈裟切り。

ヒュンッ！

一瞬でも注意を反らしていれば、ルシオの剣筋すら見ることはない。

それほど、相手の死角を狙った一撃だ。が。アリユーゼは苦もなく、大剣で受け止めた。そこから、大剣をふり上げる。

「オラアッ！！」

ルシオごと弾き返す豪快なふり上げに、ルシオはバックステップで躲した。

アリユーゼの大剣が空を切る。

脇腹が、ガラ空き。

ルシオは迷わず剣をふり下ろした。

縦に、一閃。

ギンッ！！

が。

ルシオの一閃が、叩き落された。

アリユーゼの裏拳だ。

「っ！」

洵が息を呑む間に、ルシオが更に横薙ぐ。

（負けん気の強いっ！）

思わず失笑する洵を置いて、アリユーゼが片手で大剣をふるった。ルシオの横薙ぎを、正面から、ふり下ろしで迎え撃つ。

ガインツ！！

鈍い衝撃音。

完全な、鏝迫り合いだ。

カチカチと刃を鳴らしながら、両者、退かない。

アリユーゼが、フツと失笑した。

「オラアツ！！」

グツ、とアリユーゼの大剣が重くなる。

同時。

力任せなアリユーゼのふり下ろしが、ルシオの剣ごと後方へ吹き飛ばす。

「カツ！」

息を吐いたルシオの身体が、森の木々に当たって跳ね返ったところを、

ブンツ！

アリユーゼの、バックスピンナックルが迫る。

「っ！」

顔面に当たる寸前、ルシオは左手で、バックスピンナックルを受け止めた。が、衝撃を左に流す。アリユーゼのバックスピンナックルの軌道自体は変えないまま、アリユーゼの拳の上に、ルシオの左手が滑る。

同時。

ルシオは左手を軸に、地を蹴った。

交差気味に、ルシオのローリングソバットが走る。

「っ 曲芸師か!？」

ルシオの離れ業に、洵が目を張る。同時。アリユーゼが、ローリングソバットをミリ単位で避けた。

まるで、ルシオの尺が分かっていたように、軽く後ろに下がっただけで。

着地したルシオが、猛スピードで斬りかかる。

アリユーゼは静かだった。斬りかかってくるルシオの剣を打ち返しながら、鼻筋に皺を刻む。

「……面白え。ルシオ、確かにテメエは強え。だがな、最初から死ぬうとしてる奴と、生きようとしてる奴。その戦いの違いってヤツを教えてやる」

戦いながらも、アリユーゼはどこか不快そうだった。

ジェラードが声を張り上げた。

「なにを言っておるのじゃ! まったくの互角ではないか! この

ままでは両方共倒れになってしまっぞ！ お前がルシオに“生きるための戦い”を教えてやる前に、双方力尽きてはお終いではないか！」

杖をふりたくるジェラードに、洵が首を横にふった。

剣速は、互角。

俊敏さは、ルシオが上。

剛腕は、アリュウゼが上。

共に、能力的な差はない。

が。

洵は二人の剣戟を睨みながら、目を細めた。

「そうはならない。アリュウゼが言ったハズだ。“これは生きるための戦いだ”と。そしてルシオは言ったな。“戦いとは手段だ”と。死ぬために戦い続けているルシオに、おそらく勝機はない」

「そうは言うが……、なにがどう違うのじゃ？」

眉間にしわを寄せ、要を得ないジェラードに、レナスが答えた。

「手段といったハズだ。アレは信念とか、考え方を言っているのではない。戦い方、手段の問題だ。」

ルシオは最初から全力で飛ばしている。残りの体力やペース配分を考えず、剣をふり続けている。いかにエインフェリアとて、最初から全力で飛ばせば体力が消耗するのも早い。

対してアリュウゼ。自分の動きを最小限にして、相手の攻撃を避けている。ルシオとアリュウゼの運動量は数倍以上だ。このまま行けば、」

「いずれルシオの方が体力負けして、破られる？」

ジェラードの回答に、レナスは小さく頷いた。
リセリアが、不安そうに胸許で両手を重ねる。

「ですが。彼は、追い詰められればられるほどに、その力を発揮する方ではありませんか？ あの方と戦ったときもそうでした」

“あの方”。

リセリアが示す、アークダインに現れた“鬼”を思い出して、ジェラードは眉間のしわを濃くした。

「ぬう。そうであった！ ルシオの奴は、なにか得体の知れぬ力を持っているのじゃ」

言って、ジェラードは、ルシオ、アリュージェを見る。
戦線では、ルシオが肩で息をし始めていた。

「はあっ、はあっ、はあっ……！」

「どうした、それで終いか？」

アリュージェが静かに問う。

ルシオは眼光劣らぬ、青の瞳で、アリュージェを睨み据えた。剣を、強く握る。

「俺は……、俺は負けないっ！俺は二度と、負けるわけにはいかないっ！！ うおおあああ！！」

ルシオの握る、剣の刃が蒼白く光る。

ばああああ……っ、っ、！！

ジェラードは目を剥いた。

「いかん！ アリユーゼ！！」

悲鳴に近い、ジェラードの忠告。

アリユーゼは、ルシオの『光剣』を見据えて、ニツと口端をつり上げた。

「上等だ。テムエの剣、正面から受けてやる。……俺とテムエの違い、その目に焼き付ける。そろそろ、テムエとの戦いにも飽きたしな」

「俺は、俺の剣は二度と負けないっ！！」

鋭く言い放ったルシオは、地を蹴った。

蒼白に光る剣が、鋭くふり下ろされる。

雷を孕んで。

「奥義、ラウンドリップセイバー！！」

最高最強のルシオの斬撃に、アリユーゼも奥義をもって迎え撃った。

「ファイナリティブラストオ！」

アリユーゼの大剣が、炎を孕む。

同時。

両者、斬り合った。

蒼雷と紅炎が、精霊の森で激突する。

威力は互角、

ではなかった。

「……カツ！」

短く息を吐いたルシオの、胸が大きく割かれた。アリユーゼの切り上げの斬線が、深く刻み込まれている。同時。彼が膝をついた。対して、アリユーゼはわずかに腕を斬られただけだ。

レナスが目を細め、つぶやく。

「アリユーゼは、この一瞬を狙っていたのか……」

唸るように、彼女は表情を曇らせた。

ジェラードは事態が読めず、解説を求めるように洵を見る。

「どついうことじゃ？」

問うと、ルシオを一瞥してから洵が答えた。

「ルシオは、通常の剣術がアリユーゼに届かないと見るや気が焦り、全力の一撃を放った。だがそれは、裏をかけば“そうぜざるを得なかった”ということだ。

対するアリユーゼは、相手の大ぶりな一撃に対抗するため、最初から力を溜めていた。ルシオがラウンドリップセイバーを放つのを、アリユーゼはジッと待っていたのだ。

これが、アリユーゼの言う死んだ剣と生きた剣の違い……」

つぶやいた洵は、様子見るようにレナスを一瞥した。思案顔のレナスは、物憂げに目を伏せている。

片膝をつくるシオから、アリューゼはエレメンタルエッジを肩に担いで、背を向けた。

3 精霊の森編 仲間

この界隈がエイブマンの巢。奴らは知能はさほど高くありマセンが、非常に狂暴なのです。

我らもホトホト手を焼いているのデスヨ。

森の中央にあるエイブマンの巢。

エルフたちによれば、ここに“金の燭台”が隠されている。大猿の巢の、どこかに。

「こいつが、エルフたちが言っていた大暴れする猿……」

奇声を上げて、木々を行き来する大猿を見上げ、洵は圧倒されたようにつぶやいた。

頑強そうな野太い木々が、悠々と幹を広げる精霊の森。どの樹も、大人五人で両手を広げてやっと囲えるほどの幹の太さだ。その樹をぎしぎしと軋ませながら森を闊歩する猿は、全長二メートルを軽く越す、ゴリラのような大きさだった。

ジエラードは鼻の頭に皺を刻んだ。

「むう、光りモノが好みとは、まるで女子のようじゃな」

「ハッ。猿の分際でカラスみたいな習性でもあんのか？」

アリュージェが肩をすくめる。と、レナスが腰の剣に手をかけた。

「行くぞ、エインフェリアたち」

そう言った、次の瞬間。

レナスの脇を、ルシオが音もなく駆けた。

「ハッ！」

一早くエイブマンに駆け寄り、ルシオは抜剣した刃を上段からの斬り下ろす。

無駄のない剣捌き。が、斬りつけられたエイブマンは、紙一重のところでも後ろに跳躍した。巨体に似合わぬ敏捷さである。

ルシオは剣を引きよせ、追撃の構えを取る。同時。後ろに下がったエイブマンが、奇声を上げて野太い右腕を払った。

ルシオの胸ほどもあるエイブマンの右腕。その手の先には、20cmほどの爪が伸びている。

ヴォンッ！

空を切るエイブマンの爪が、空寒い音を立てた。エイブマンは急に獲物が消え、首を傾げる。と。ルシオは、エイブマンが払った横薙ぎの下にいた。

「グア？」

エイブマンがルシオを見下ろすと同時、ルシオはエイブマンの下から、剣を斬り上げた。

ギインッ！

一瞬、エイブマンの巨大な左腕がルシオの剣を遮る。魔物の肉厚な筋肉の前に、刃が弾かれる。

ジエラードが舌打った。

「ぬう！ 惜しい！ あと一步踏み込んでおつたら、切れておつたぞ！」

「やれやれ。だが、あの程度の相手なら、ルシオがいれば十分か……」

つぶやく洵に、アリューゼが腕を組んだまま言った。

「どうかな……」

「それはどういう意味だ？」

洵が問うと、アリューゼは無言のまま、エイブマンと剣を合わせるルシオを顎でしゃくった。

ルシオの剣撃が、容赦なくエイブマンを追い立てて行く。

「ぎい！？ ギイギイ！」

齒痒そうに奇声を洩らしながら、エイブマンは両腕を完全に防御に回している。ルシオの斬撃を躲すのが精一杯といった体だ。

剣撃を止める爪の音が悲鳴のように鳴り響く。その内の一撃を、エイブマンはぞんざいにあしらってしまった。エイブマンの身体がわずかに後ろにずった。瞬間。

狙い澄ましたように深く踏み込んだルシオが、上空からエイブマンを斬りつける。

目を瞞ったエイブマンはまったくの無防備。決定的だ。

そのルシオを、側面からもう一体のエイブマンがタツクルで吹っ飛ばした。

鈍い音を立ててルシオの身体が宙を舞う。が、叩きつけられるようなことはなく、ルシオは中空で軽業師のように体勢を整えると、たっ、と華麗に着地した。着地点を、紫の光弾が穿つ。

ルシオは寸前で地を蹴って躲した。上空を見る。もう一体、エイブマンだ。

「なんと奴らめ！ 三体おったのか！」

ジェラードが目を瞪る。洵は腰刀に手を賭けた。

「助太刀するか」

「まあ、待てよ。お前ら、迂闊に近づいたらアイツに斬られるぞ」

不意に二人を止めるアリユーゼに、洵とジェラードは不思議そうにアリユーゼをふり仰いだ。

「なんじゃと？」

ジェラードに続いて、洵も視線で問う。アリユーゼは肩をすくめると、三体のエイブマンに立ち向かうルシオを顎でしゃくった。

「良く見る。奴は敵のいない所で剣をふってる。どうやら奴は、幻覚かなにかを見てやがるようだ。今の奴は、五感が完全に麻痺している状態だ。そんな奴の所へ助太刀に行ってみる。魔物と間違われてぶった切られるのがオチだぜ」

「先ほどの蜘蛛の毒か」

一つ頷く洵を、アリユーズは肯定した。ジェラードが眉を吊り上げる。

「ではどうするのじゃ!? 妾が後ろから魔法で援護すべきかつ?」

「魔法を打ったところで、奴がそれに感づかなきゃ意味がねえ。下手すりゃお前の撃った魔法に打たれて終わるぞ」

「ならっ、どうするんじゃ〜!!」

じれったさを感じて地団駄を踏むと、アリユーズは呆れたように溜息を吐いて踵を返した。

「とりあえず、あいつがやられるまで待つんだな。さすがにぶっ倒れちまったら、剣もふれねえだろ」

「それは、つまり……ボコボコされるのを黙って見ている、ということか?」

「あ? なにか問題が?」

肩越しにふり返るアリユーズに、ジェラードは杖をふりたくって抗議した。

「その前にルシオが死んだらどうするんじゃ!」

「あゝ、ないない。それはない。アイツは不死の王や白銀の鬼と戦って生き残った奴だぜ? あの程度の魔物に殺されるタマかよ。い

くら毒の効果があるとはいえ、な」

「よろしいのですか？ ヴァルキュリア様」

アリユーゼたちのやり取りを聞いていたりセリアが、心配そうにレナスを窺う。

レナスは硬い表情のまま、じっとルシオを見据えた。

「……」

前方に、エイブマン二匹。

ルシオが視認すると同時、一体目のエイブマンが轟速で駆けてきた。駆る勢いをそのままに、右爪を交差気味に斬りつける。それを、ルシオは剣を盾にして止めた。ずん、と腕に衝撃が走る。が、すぐに斬り返そうと剣を寝かせたとき、二匹目がすでに迫っていた。

眼球だけを動かし、ルシオはターゲットを二匹目に移行して、横薙ぐ。しかし、剣は微妙に違う空間を斬りつけるだけで空振った。エイブマンが跳躍し、ルシオを飛び越える。その拍子、ルシオの肩を握ったエイブマンは着地と同時にルシオの瘦身を上投げつけた。

ぶおっ！

ルシオの視界が回る。

上空に飛ばされたルシオは態勢を整えようとしたが、待ち構えていた大猿が両手を組んでルシオを地面に叩き落した。落下点に二匹の猿。それぞれ右爪を構えて、交差気味に斬りつけて行く。

ズババツ！！

血飛沫が咲いた。

「ぐあっ！」

ルシオがきりもみ回転しながら、地面に叩き付けられる。
ジェラードが唸った。

「あやつら、ホントに頭悪いのか……？ 完璧なコンビネーションではないかっ！」

洵が溜息を吐く。

「倒れたか……。気絶していることを今は祈るのみだが」

そう言って、洵は刀を握ってエイブマンに向かっていく。アリユ
ーゼは大剣を肩に担いで、視線を動かさずに問いかけた。

「ヴァルキリー。手加減しなくていいんだろ？」

レナスは小さく頷いた。

「行くがいい。死の先に行く者たちよ」

「うむ。ではリセリア殿。ルシオの怪我を治してやっておくれ」

杖をくるくると回すジェラードに、リセリアは微笑混じりに頷いた。

「分かりました」

「待て……。俺は、まだ戦える……」

血溜まりの出来た地面から、ルシオがゆっくりと立ち上がってくる。が。アリュージェは小さく鼻を鳴らしたただけだった。

「黙って見てろ」

毒の所為か、ルシオの焦点は覚束ない。彼に構わずエイブマンと対峙したアリュージェ、洵、ジェラードは、それぞれの得物を握り、構えた。

同時。

まず、洵がエイブマンに斬り込む。

「なかなかのコンビネーションとスピードだが、その程度では俺にはついてこれん！」

エイブマンがわずかに目を瞪る。突き立てた爪をふるが、向かってきた洵は残像だった。

「キギッ!？」

「無限の剣線、貴様に見切れるか!？」

焦りのこもったエイブマンの眼差しが、数人に分身した洵の姿を映し出す。同時。

「奥義、千光刃!」

ズババババアアツツツ！！

洵の無数の斬線の檻に、エイブマンが三体まとめて囚われる。が、技の威力自体は大したものではない。一回り大柄のエイブマンが、紫の光弾を放とうと口を開いた。

瞬間。

にやりと笑ったジェラードが、ルビーの杖をふり上げた。

「奉^{ほう}霊の時来りて此へ集う、鳩^{じゆん}の眷属、幾千の放つ漆黒の炎！ カラミティブラストお！」

魔術方陣が円を描く。洵の分身が消え、彼は素早く飛びずさった。同時。狙い澄ましたタイミングで召喚された炎の波がエイブマンを飲み込む。が、光弾を放とうとしていた一匹のエイブマンだけが、大魔法を予測していたように爆発点から大きく跳躍した。

そこを、

「黙って消えろ！」

アリュウゼが、突く。

「ギイイイツツ！！？」

見開いたエイブマンの瞳に、大剣から迸る炎が焼きついた。

「ファイナリティブラスト！」

疾風の如き大剣の突きと、烈火の炎がエイブマンを跡形もなく焼き尽す。

たっ、と軽やかに着地したアリュウゼは、ジェラードと洵をふり

返って肩をすくめた。

「まあ、こんなもんだろ」

「悪くはない」

頷きながら、洵が刀を納める。

「フン。なかなかしぶとい奴らじゃったのう」

ジェラードは満足げに息を吐いた。

“瞬殺”。

そう形容してもいい呆気ない幕切れに、ルシオは黙する。アリユ
ーゼが酷薄な眼光を湛えて、ルシオを見下ろした。

「どうだ？　俺たちはテメエ如きに護られなきゃならねえほど弱え
か？」

「……………」

「へッ」

興味をなくしたように、アリユーゼはそれきり踵を返して去って
いく。それに代わり、洵がルシオの傍らに膝をついた。

ルシオがわずかに視線を向ける。洵は声を抑えて言った。

「俺も生きていたころ。この命に代えても守らなければならぬ、
そういう片割れがいた。

彼女が死んでしまえば、おそらく俺はお前と同じようになってい
たかもしれない。だから分かる。

少なくとも、俺が妹を護りたいと思った気持と、お前が失われたモノを護りたいと願う気持ち。それは似ていると思う。俺たちは同じものだ。ルシオ。形は違えど、あのアリュージェも。守るべきものがあるのだ。だから　俺たちはエインフェリアになった。そうだろう？」

諭すような洵の言葉に、ルシオは静かに立ち上がり、息を吐いた。

「アンタが俺のことを気にかけていた理由はそれか。……なるほど。俺は確かに、アンタを守るべきではないのかもしれない」

「そうだ。一方的に“護られる”というのは、仲間に対する侮辱だ」

「うむ！　今だって、お主がやられたときは妾たちがフォローできる！　仲間とは助け合うものじゃ！」

にやりと笑うジェラードに、ルシオは不思議そうに瞬いた。

「助け合う……」

まるで初めて聞いた言葉のように。
しばらくの沈黙を挟んだあと、

「フツ、フフフフ……！」

ルシオは顔を覆って笑い始めた。
ジェラードが眉をひそめる。

「む？　なにがおかしい？」

「悪い。そんな簡単なことも、俺は忘れてたんだ……。クリアが俺に言いたかったことは、これが……」

一人ごちるようにつばやいたルシオは、空を見つめて目を細めた。一つ、息を吐く。

顔を上げたルシオは、洵とジェラードに言った。

「ありがとう。皆」

ここで笑えるほど、ルシオは器用な人間ではない。だが、言葉に込められた確かな感情の変化に、洵は満足したように頷いた。

「あらためて、よろしく頼む。ルシオ」

「うむ！ これで万事解決じゃな！」

ジェラードが胸を張る。が、

「俺はまだ、テメエを認めたくわけじゃねえからな。まだ死にたがりだつてんなら、容赦しねえぞ」

釘を刺すようにアリュージェの眼光が、ルシオを射抜く。それに答えられずにいると、ジェラードが杖をふりたくった。

「せつかくまとまった所でなぜ蒸し返すか！ この愚か者がっ！」

たまたまふった杖がアリュージェの後頭部に直撃して、ゴンツ、と鈍い音が立つ。

「痛っ！？」

患部を押さえてジェラードをふり返るアリューゼに、ジェラードは悪戯が成功した子供のように、にんまりと笑った。

4 精霊の森編完結 vs コツカトライス

ココを南に進むと石化の魔獣の巣に出マス。お気ヲつけて。

森を奥に進むと、開けた場に出た。背の高い野草が増え、一帯に薄い霧がかかっている。水源でも近いのか、気温の低下した草原に立ち、ジェラードは眉をひそめながら周囲を見渡した。

心なしが、陽射しが弱い。彼女はごくりと唾を飲んだ。

「ここがコツカトライスとやらの巣か……！ 石化能力を持っておるとい話だから、気を付けねばならぬな」

言っで、ジェラードは目を凝らす。この先は洞窟になっているよ。うだ。杖を握る手に力が籠る。

レナスが、いつもと変わらぬ静かな声で言っだ。

「この森の中でも一番凶暴で危険なコツカトライス。今までのようには行かぬぞ」

「ヴァルキリー」

剣に左手をかけるレナスを、アリュージェが制した。レナスがふり返る。頭二つ分高いアリュージェを見上げると、アリュージェは洞窟を見据えたまま答えた。

「次は俺とコイツで行く。誰も手出しさせんな」

顎でルシオをしゃくる。レナスは目を細めた。

「どづいつつもりだ？」

「こいつの戦い方が変わったか、この俺が直に見てやる」

ルシオがアリュージェを見る。視線の合ったアリュージェは、にやりと口端をつり上げた。

「万が一にでも邪魔になるようだったら、俺は容赦なく切り捨てるぜ」

「その点は心配してない」

間髪を置かずに頷くルシオに、アリュージェは笑みを深くした。

「ならいい」

会話はそれきりだ。二人は洞窟を見据えると、どちらからともなくコツカトライスの巣へ入って行った。

「よろしかったのですか？ ヴァルキュリア様」

小さくなっていく二人の背を、リセリアが心配そうに見やる。レナスは答えず、じっとルシオを見据えていた。

「……………」

壊れているかも知れない

精神。

アリュージェの言葉が、妙に胸に刺さる。勇者と魂を共有できる存在のレナスにとって、取るに足りない問題だ。ルシオの心の波動は、いつでも感じ取れるのだから。

彼の心は、壊れていない。

(なのになぜ、……ルシオはああも危うい)

レナスが見極めたいのは、心の欠陥ではない。ルシオの心でわかまる、深い闇の断片だ。アリュージェならば、それを引き出せるのではないかと考えた。

洵の言葉に、ルシオの心がわずかに開かれたように。ジエラードの笑みに、ルシオの気分が少しだけ和らいだように。

レナスが感慨に耽っていると、待ち切れなくなったのかジエラードが眉根を寄せて言った。

「ふむ。妾たちが助成に行くのなら、今からでも遅くはないぞ。こつそりあとをいつて行ってはどうだ？」

「その心配はない。アリュージェたちがなにをしようと、危機が迫れば私には分かる」

「ふっ……。戦乙女というのは便利だな」

肩をすくめる洵に、レナスは視線を送った。

洞窟を進むと、目の前に巨大な鳥の巣が現れた。アリユーゼの巨
躯よりも大きい。全長にして、十数メートルはあろうかという巣だ。
アリユーゼは見上げて、鼻を鳴らした。

「ハツ。随分と馬鹿デケえ鳥の巣だ……。こいつを一匹で作ったっ
てんなら、大したもんだな。意外に魔物ってやつも、働き者なの
も知れねえな」

ルシオはなにも語らない。ただ、す、と目を開けた。

「……来たか」

つぶやく。

同時。

コオオオオツツ!!

奇声を上げて、コツカトライスが巣から出現した。
ルシオは剣を握り、コツカトライスを睨む。

「……いくぞ」

「手加減はしねえぜ」

にやりと笑うアリユーゼ。

コツカトライスは翼を広げ、激しく震動した。瞬間。魔獣を彩る
翼から羽毛が剥がれ、二人に襲いかかる。羽根は矢のように走り、
鋼鉄のナイフの如く地面に突き刺さった。

ルシオとアリユーゼは既に動いている。羽根を見切りながら、コ
ツカトライスに前進。

ダツ、と勢いよく地を蹴り、ルシオは剣を横に一閃した。狙うは、魔獣の胸。

ギインツッ!!

「なにっ!?!」

ルシオは目を瞪る。剣の刃を、コツカトライスは翼で止めていた。直後。コツカトライスの巨体が震え出す。

ルシオは舌打ちし、左へ飛んだ。

カカカツ!!

羽根が、地面に突き刺さる。標的を定めるが如く、コツカトライスはルシオに向かつて首をめぐらせた。瞬間。

ルシオとは逆側サイドから、アリュージェの大剣がコツカトライスを肉薄した。

ギインツッ!!

硬い羽毛が、アリュージェの大剣すらをも阻んだ。

「なに?」

アリュージェが面くらったように目を丸くする。同時。蛇のように長い尻尾が、鞭の如くアリュージェに迫った。間一髪で、アリュージェは避ける。直線状にあった、巨大な岩が豪快な音を立てて粉々に砕け散った。

「上等じゃねえか」

ちらりと岩だったものを見やって、アリュージェは口端を緩めた。

ぽこっ！ぽこっ！

「あん？」

奇妙な軽快音に眉をひそめると、コツカトライスの口がぽこっ！
と言う音に合わせて膨れ始めた。ルシオ、静かに剣を構え

「石化ガスか……。来てみる！」

「なにい！？」

顔を引きつらせるアリュージェを置いて、コツカトライスから石化
プレスが放たれた。

コオオオツツ！！

同時。

ルシオの剣先から、シャイニングボルトが走った。

「ハアアアアツ！！」

薄暗い洞窟の、広間の中央で、石化プレスとシャイニングボルト
が真っ向から激突した。

轟音。

二つの技が互いの縄張りを主張するように、中央で押し合う。
と。

ぽこっ！

さらに、コツカトライスの口が膨れ上がり、二段目の石化プレスが放たれた。

「っー！」

シャイニングボルトの光が押し負ける。石化ガスがルシオに迫る寸前。

「おらあっっー！」

アリユーゼの体当たりがコツカトライスの顔に直撃し、プレスの軌道を変えた。その間隙を縫って、ルシオが石化プレスを紙一重で躲す。ルシオは避けた勢いそのままに、アリユーゼの方に走った。コツカトライスがアリユーゼの方に向き直ろうとする。その目をじつと見据え、

「！」

アリユーゼは、ルシオのやろうとしていることに気付いて、にやりと嗤った。

「ハアアツツー！」

ルシオが鋭く踏み込み、斬りつけるタイミングに合わせ、アリユーゼもまた、大剣を水平にふった。

「おらあっー！」

斬！！

コツカトライスの羽根が数枚切れ、魔獣が鳴いた。

コオオオオツツ！！

巨躯がよるめく。

アリュージェがやりと嗤った。

「こいつは効いたみたいだな」

「中途半端な攻撃は効かないようだ」

剣を払い、ルシオが冷静に言う。アリュージェは、ハッ、と息を吐いた。

「こいつは、とんでもねえバケモンがいたもんだぜ！」

.....

アリュージェたちが洞窟に入ってから、数時間が過ぎた。

洞窟外で待機していたレナスたちだが、空に夕焼けが見えるころになっても、二人が出てくる気配はない。

ジェラードが落ち着かない面持ちでレナスを見た。

「奴ら、もう巢に入ってから数時間も経っておるぞ！？ 本当に大丈夫なのか！？」

「コツカトライスは今まで出遭ってきた魔物とは違い、伝説の魔獣

と呼ばれた存在です。たとえエインフェリアと言えども、たった二人で挑むのは無謀ではなかったでしょうか、ヴァルキュリア様」

「リセリア！ なぜそれを先に言わぬ！？」

血の気の失せた顔で叫ぶジェラードに、リセリアは、は、としたように瞬いた。

洵が慌てて刀を握る。

「た、助けに行かなければッ！」

駆け出そうとする侍を、レナスが制した。

「待て。不思議な奴らだ……。いい勝負をしている」

どこか遠くを見つめているレナスに、リセリアは目を見開いた。

「なっ！？ 伝説の魔獣、コツカトリスを相手に二人で！？ 勝負になっているのですか……。！？」

レナスの視線が、こちらに戻ってくる。彼女は、微かに笑った。

「リセリア殿。彼らは確かに人間です。ですが、彼らならば不思議とコツカトリスを倒せる気がするのです」

「ヴァルキュリア様……。貴方様がそれほどまで認める、あの二人は一体……。？」

息を呑むリセリアに、レナスは答えない。またどこか、遠くを見つめる戦乙女を見据え、ジェラードと洵は所在なさそうに唇を引き

結んだ。

「いい加減にしつこいな……」

ふっ、とため息とも取れぬ息を吐くルシオに、アリユーゼは揶揄するように左目だけを細めた。

「どうした？ もうバテたのか？」

問うと、ルシオは口端をつり上げた。

アリユーゼが眉を上げる。

「余裕じゃねえか。こんなときに笑えるとはな」

「不思議に思ったただけだ。俺は今まで、どんな強敵と戦うのにも一人で挑んできた。そんな俺が、今、アンタとこうして戦ってるのが」

「フン、そんなことか……」

呆れたように鼻を鳴らしたアリユーゼは、大剣を握り、鋭い視線をコツカトライスに向けたまま言った。

「一ついいこと教えてやる。テメエの生き方、考え方、確かに自分で決めるもんだ。だがな。過去にしがみついて、過去だけを守るあまり、今を生きている奴らを軽んじる。そんな生き方をしてるからテメエは、一人で戦うしかねえんだよ」

「ああ、そつだ。だから不思議だ。アンタが隣にいたことが。こんなにも素直に受け入れている自分が」

言いながら、ルシオは最高速度で地を駆けた。ルシオは左、アリユーゼは右。

コオエツ?????

コツカトライスはブレスをどちらに吐くか、首をめぐらせた。どちらも、速い。ブレスを吐けない。魔獣は代わりに、左右の翼で攻撃した。

カカカカカカカツ!!

雨のように降る羽を、アリユーゼはまともに受けながら走る。速度が緩まない。ルシオは羽根の全てを、剣で斬り落としながら駆ける。

同時。

二人は交差法気味に斬りつけて、後ろに下がった。

やむじっ!

着地点を狙い、コツカトライスは尻尾をルシオに向かってしなせさせた。が。剣で鮮やかに捌かれる。金属音を立てて宙に浮かんだ尻尾は、待機していたアリユーゼの大剣に叩き落された。

斬っ!!

大剣の重量、アリユーゼの体重、重力、そして剣技。すべてを兼ね備えた強烈な一撃に、コツカトライスの尻尾が切断された。

ゴアアアアアッ！！

初めて、コツカトライスが悲鳴を上げる。すぐさま後ろをふり返ったコツカトライスに、アリューゼとルシオが、また交差気味に斬りつけて下がった。素早いバックステップ。尻尾をなくし、羽根を飛ばす射程からも二人は逃れた。

アリューゼはルシオを横目見た。

「俺を受け入れたのはテメエの考え方が変わった証拠、かもしれねえな。オイ、手エ貸せ。そろそろあの化け物をぶっ潰すぞ」

「仲間を認めた瞬間に偉そうになるんだな。アンタ」

呆れたように言うルシオに、アリューゼは鼻を鳴らした。にやりと嗤う。

「この俺が仲間頼るなんざ滅多にねえんだよ。大人しく光栄に思っただけなんだな」

「それはいいが、あの化け物にどうやって止めをさす？ 正直、奴の羽根は異常だ。あの甲殻を破らない限り、どんな攻撃も無効化されるぞ」

「テメエ、あいつがブレスを放ったとき。奴が翼を広げんのを見てるな？」

鋭いアリューゼの視線を受けて、ルシオは得心が言ったように頷いた。

「そういつことか……。しかしそれは、一歩間違えれば石化される運命にあるぞ。それは、アンタが嫌っていた戦い方になるんじゃないのか？」

「勝算がねえ戦いは、俺はしねえ主義だ。いついかなるときでも勝つ！」

「それが俺とアンタの、根本的な違いか」

「そうだ。生きるための戦いってやつだ」

「分かった」

ゆっくりと腰を落とすルシオに、アリュージェは言った。

「頼んだぜ、相棒」

ダッ！！

アリュージェが斬り込む。コツカトライスはブレスを放つ姿勢だ。ふっ、と魔獣が息を呑む瞬間。ルシオはシャイニングボルトを放った。

「ハアアッ！！」

シャイニングボルトの雷花が、洞窟を眩く照らす。その、シャイニングボルトの数センチ脇を、アリュージェは駆けた。

ドオオッ！！

石化ブレスとシャイニングボルトがぶつかり合い、また押し合いを始める。ルシオはシャイニングボルトを放ちながら、剣の柄を握りこんだ。

「さつきはよくもやってくれたな。だが、今度はさつきのようにはならない。……これでも喰らええええ!!」

ルシオは全ての魔力を込め、右袈裟掛けに斬りつけた。シャイニングボルトの輝きが増す。同時。コツカトライスの石化ブレスが打ち負けた。

ゴオツ!?

魔獣が目を瞪る。コツカトライスの半身が、羽を広げた姿勢で石化する。その心臓に向かってアリュージェが剣を突き立てた。

「テムエの面も見飽きたぜ。奥義! ファイナリティブラストおお!!」

大剣に炎が宿る。瞬間。コツカトライスの心臓を、大剣が穿った。

ゴオオオオオオオオオ……ツツツ!!

断末魔の悲鳴を上げて、コツカトライスが炎に包まれる。その巨躯が、アリュージェの腕力によって切り上げられた。

「地獄の鬼どもに焼き鳥でも振舞いやがれ!!」

無造作に放り投げるように、アリュージェはコツカトリスを上空に上げる。そこに、ルシオが上段に剣を構えた態勢で跳んでいた。

「これが、生死を分かつ一撃だ!!」

ズドオオオオオオオオツツ!!

シャイニングボルトを遙かに凌ぐ雷花が走り、上段から縦に一閃したルシオの斬撃が、燃え盛るコツカトリスを見事に両断した。爆発。

塵も残さず消えたコツカトリスを背中に、ルシオは、タツ、と軽やかに着地した。アリュージェは魔獣の末路を見据え、大剣で肩を叩いた。

「まあ、こんなもんだろ」

言つて、ルシオに視線を向ける。

「おら。さつさとあの燭台を持ってこつぜ」

「ああ。分かった」

ルシオは剣を納め、コツカトリスの巣の中にある燭台を拾い上げた。

.....

「すべて揃つたのですか？」

エルフの集落に戻るなり、レナスはアリュージェたちが集めた四つの道具を中空に掲げた。

エルフが一つ頷く。

「あるようデスネ。デハ、暫しお待ちください」

.....

「お待たせしました」

ものの数分で、エルフは儀式用の部屋から出てきた。

「出来たのか？」

「イエ、無事修復出来ましたヨ。ドウゾ、こちらデス」

「礼を言う」

紅色に輝く宝玉を受け取る。核のヒビ割れが、見事に修繕されていた。

「イエ。森の厄介者たちを排除してもらったことデスシネ。シカシ、炎呪の珠まで持ち出してきたというコトは、神界の方もかなり重要な局面まで進んでいるヨウデスネ」

「.....」

レナスの表情が険しくなる。今だ、神界に送り出した勇者は一人。フレイも気にしている件だ。

レナスの微妙な空気を感じ取ったのか、エルフは話題を打ち切った。

「それとヴァルキュリア様。コレヲ」

「……これは！」

差し出された一振りの剣を握って、レナスは目を瞠った。

「オーディン様より贈り物デス。デハ、森の出口までお送りいたしまシヨウ」

「なかなか、興味深い所じゃったの」

森の入口まで来て、ジェラードは嬉しそうに一同をふり返った。洵が頷く。

「ああ。途中、いろいろありはしたが、久しぶりに美しいと思える場所だった」

「ま。不死者がもついなえんじゃ、用はねえがな」

言つて、肩をすくめるアリューゼ。エインフェリアたちの輪の中には今、ルシオもいた。

リセリアが気遣うようにルシオとアリューゼを見る。

「御二人とも。本当に、御身体のお加減はよろしいのですか？」

「どうもない。アンタに回復魔法を打ってもらったしな」

「俺もだ」

二人の解答を得、リセリアが胸を撫で下ろす。と、ジェラードが頬を膨らませた。

「なんじゃ貴様ら。妾たちに世話になったと言つのに、礼もなしか？」

「代わりに燭台はかつぱらってきただろっが」

「な・ん・じゃ・とお〜！」

「礼は言つとく」

拳を震わせるジェラードに、ルシオがさらりと言って距離を取る。アリユージェは面倒くさそうに頭を掻いた。

「へえへえ。助かった助かった」

「つつ！！ そなたら、そこに直れ！ 妾が成敗してくれるわあ〜！！」

「ジェ、ジェラード！ 落ち着いて下さい！」

杖をふりたくるジェラードを、リセリアが慌てて止める。洵は溜息を吐いた。

「……やれやれ」

ルシオが輪に入ったことは良いことだが、心なしか、アリユージェ

が二人に増えたような気分だった。
と。

「アリュューゼ」

レナスに呼び止められ、アリュューゼは背中をふり返った。

「あ？　なんだよ、ヴァルキリー」

「今回のお前の戦いぶり、見せてもらった」

「　だから？」

首を傾げるアリュューゼに、レナスは一本の剣を具現化させた。

「私からの返礼だ。受け取れ」

大剣だ。幅広の刃はエメラルド色に輝き、意匠をこらした様々な
宝石が、鏢の部分についている。

少々、装飾過多な剣だった。

アリュューゼは眉を寄せた。

「なんだ、こいつは？」

「精王剣アレクタリス。本来は神界戦争でのみ使用が許される宝具
だ」
アーティファクト

「へえ。そいつあスゲエ」

大剣を片手で持ちあげ、アリュューゼはしげしげと刀身を睨んだ。

試しに、一閃する。
と。

斬っ！！

刃で旋風が起き、遙か後方にあつた岩や木をあつさりとは断した。

「なっ！？」

改めて、アレクタリスを見つめる。軽くふっただけで、信じられない威力だ。

レナスが言った。

「それがアーティファクトの力だ。……その精王剣ならば、以前のように刃を斬られることもない」

「ほ、本当なのか？ ヴアルキリーよ。この前の鬼も凄まじいものであったが、アレンの刀はエーテルコーティングされた武器をも断つのだぞ？」

「刀？」

不思議そうにふり返るルシオの隣で、洵も眉をひそめた。

「そもそも、奴は刀を持っていないだろう？」

「あんだよ、それが。“兼定”って言う馬鹿長い刀がな」

「まあ失くしたとも言っておったがな……」

「で？ ヴァルキリー。こいつはあの“兼定”をも止められる剣なのか？」

レナスはにべもなく頷いた。

「当然だ。その精王剣は世界構成する精霊たちの王、アレクタリスの力が宿っている。それが折れると言うことは、世界を滅ぼすほどの力と言うことだ」

「なるほど。そりゃ御大層なこった」

肩をすくめるアリユーゼを、レナスの鋭い視線が押し止めた。
ルシオが言う。

「なにせよ、用が終わったならさっさと行こうぜ。暇はないんだろ？」

「……………」

レナスは息を吐くと、す、と両手を広げた。エインフエリア勇者の魂たちが輝き、光球となってレナスの身体の中に入って行く。

そのとき。

最後に残ったアリユーゼが、レナスを呼び止めた。

「ヴァルキリー」

アレクタリスを担いで、にやりと嗤う。レナスが問うた。

「ルシオは、変わったか？」

「さあな。だが、少なくとも信用できねえ野郎ってのは卒業したみてえだ。あのとき、奴に勝てたのは時の運。あと一瞬ルシオの剣が速ければ、奴は俺の胸を斬っていた。……生きるために戦う、奴と^{ルシオ}の決着が楽しみだぜ」

くく、と喉を鳴らすなり、アリューゼもまた光球となってレナスの中へと入って行った。

レナスは視線を上げる。風が穏やかに、木々を揺らした……。。

1 ジェラベルンの戦い（前編） 惨劇の後

数日前のジェラベルン。

“大がかりなネズミ掃除”と公爵が言わしめた貧民街の焼き討ちは、生存者を一人も残さずに終結した。街の貧民はさることながら、焼き討ちに向かった兵士に至るまで、誰一人生き残った者は居ない。主を失った廃墟は、焼け焦げた大地と、煤けた瓦礫に埋もれていた。

ベリナスは思わず口を覆った。

「……酷い……！」

傍らで、阿沙加がつぶやく。廃墟と化した貧民街は、公爵家に近づけば近づくほど、女子供、老人の死体が増えていった。

逃げ遅れた者。

後ろから矢を打たれた者。 斬殺された、兵士。

死屍累々とは良く言ったものである。ベリナスは、あまりの惨状に身震いした。公爵家から遠ざかるほど増えていく、兵士の死体。誰の仕業か、考えずとも分かる。ベリナスは、胸中で一人ごちた。

（人に、これほどのことが可能だということなのか？ 一人人を敵に回すとは、これほど恐ろしいことなのか……！）

阿沙加を助けるなど、“彼”にとっては容易いハズだ。これほどの兵を、正面から斬り伏せられるのだから。

兵士の死体を検めて、ベリナスは心の底から恐怖した。とても人間業とは思えない。

ジェラベルン軍の剣はレイピアほどではないものの、細身で両刃だ。引くよりも、叩きつけることで物を切る。頑強さはないが、鋭

利な刃物として、有名な代物だ。ジェラベルンの軍剣で、甲冑を貫くことはできない。ゆえに、兵の死体はすべて甲冑の鉄と鉄の合間を縫い、確実に相手の急所を捉えていた。

また、兵の数に対して、軍馬の死骸が見受けられない。そのことから、**“彼”**が兵士だけを狙い、軍剣の強度や用途を理解した上で、剣をふるっていたことが伺える。

俺は魔導師ですから。

かつて**“彼”**が言った言葉を思い出し、ベリナスは失笑した。

これが魔導師の仕業か。

これだけの斬殺死体は、最早**“虐殺”**の域だ。

胸中でつぶやき、ベリナスは息を呑んで、阿沙加に向き直った。

「阿沙加……。ラッセンに帰ろう」

平静を装ったハズが、ベリナスの声は乾いていた。阿沙加が、不安そうにベリナスを見る。そんな彼女の髪を梳いてやりながら、ベリナスは小さく頷いた。

これが、公爵家の横暴に対する報復だ。

貧民街の被害状況を見れば、**“彼”**がどの経路で公爵家にやってきたのか、死体数でよく分かる。

まさか、ジェラベルン正規軍が半分殺されるとは。

残りの半分は、貧民街を蹂躪しなかった兵、もしくは、運良く**“彼”**と遭遇しなかった兵に過ぎない。

ベリナスが公爵家で、**“彼”**と契約しなければ、兵の死体は更に増えていただろう。

(……………**“彼”**は一体……………)

そう考えると、あの殺気に満ちた蒼瞳を思い出し、一層恐ろしくなった。阿沙加を救ってもらった身としては、あまり考えたくはない。

恐らく、“彼”は貧民を助けるために兵を斬ったのだろう。

だが。

それにしても、

“彼”は、あまりにも手慣れ過ぎていた。

躊躇なく、人を殺すことに。

凄まじい殺気を、その身に宿すことに。

ベリナスは茫然と、ラッセンの途についた。

ジェラベルンを脱却した貧民街の住人は、軍の追手を逃れるべく森を歩いた。

目的地は衛星都市・ラッセン。

女子供の多い難民だが、幸いなことに、アレンの回復魔法によって、怪我人はいない。だが、貧民街を追われて三日。いかに貧しい暮らしを送っていた貧民と言えども、極度の緊張を強いられた所為か、その足取りは重い。特に体力の少ないドルチェなど高齢者は、獣道に行く森では一番の足手まといだった。

「ばあちゃん！ もうちよつとだ！ 頑張れ！」

「あ、あいよ……」

休憩を挟んでいるものの、腰の悪いドルチェはすぐに肩で息をして、へたり込む。比較的元気な若者でも、最近は塞ぎこんだような暗い目をした連中が増えていた。

鬱々と。

森の不気味さも相まって、二日目の夜にして、ロジャーたちの足は完全に止まった。ラッセンまで、あと三日の距離だ。

「……全つ然、進まねえじゃんよ……！」

歯痒い気持ちで、ロジャーが唸る。

と。

不意に、ある青年が立ち上がった。

「悪いが、俺は先にラッセンに行かせてもらう！ このままじゃ、いつ向こうに着くか分かったモンじゃねえ！」

片手に小さな布袋を抱えている。自分専用の“食糧”だろう。ロジャーは目を白黒させた。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ兄ちゃん！ 兄ちゃんたちが協力してくんなきゃ、ばあちゃんや皆の飯が……！」

「知るかよっ！ 俺たちだってさっさとラッセンに行かなきゃ、食うモノもねえ！ 生きていけねえんだ！ ここで寒きこんでなにもしねえ連中の面倒まで見切れるかよ！ なあ皆……！」

言って、青年は皆をふり仰ぐ。

「確かに……そうだ」

はた、と。思いついたように、同調する若者が出た。
瞬間。

それは、まるで凧の状態から風が吹いた帆の如く、集団に伝染し

た。

「そつだ……そつだ、そつだ！」

「ここでジツとしてたら、軍に殺されちまう！」

「早く！ 早く逃げなきゃ！」

「に、兄ちゃんたちい……！！！」

勢いよく立ち上がった若者たちが、早々に荷造りして一団を抜けて行く。そのあとを比較的元気な女性や、彼らの食料調達能力を当てにしている乳児の母親が必死についていった。

残ったのは年端もいかない少年少女と高齢者だけだ。

ドルチェの養子として、場にとどまったクレアは、忌々しげに唇を噛みしめた。

「あいつら……！」

恨めしく思うが、否定できない。貧民街で育っただけに“生きる”ことの難しさは、彼女たちも知っているのだ。それでも、齒痒さだけはどうにもならず、クレアは、口の中で毒づいた。

「んだよ、アイツら！ 今は協力しなきゃやってけねえってのに！」

率先して一団を止めに行つたルシオが、呆れ顔で帰ってきた。かなり粘つたようだが、焼け石に水だ。どう説得しても話は平行線。しかし、それを理解するには、ルシオは人生経験も、思慮深さも足りなかった。

「あゝくそっ！ アレンさんがいてくれりゃ、なんとかしてくれんのに！」

後頭部で両手を組み、ルシオは愚痴っぽくつぶやく。

近頃の彼の口癖だ。

貧民の子供も、彼を真似して、一度も会ったことのない“アレン”という青年を、待ち侘びるようになっていた。

「ねえねえルシオ。そのアレンって人、いつ来るの？」

「僕おなか空いたよ！それに、寒いよ！」

「アレンは、僕らの“ルシオ”も連れてきてくれるかなあ？」

クレアが、ぐつと息を呑んだ。精神病を患うまでは弱っていないものの、“ルシオ”の死は、彼女の柔らかい部分を、深く抉る。

“僕らのルシオ”を話題にした少年に、別の少年がニツと笑った。

「そっか！ “ルシオ”が帰ってきたら、こゝんな生活、おしまいだもんな！ だって、いつつも“ルシオ”が帰ってくるときは、飯が豪華だっ！」

「わあ！」

「“ルシオ”、早く帰ってこないかなあ〜！？」

「ルシオのことは黙ってな！！」

盛り上がる少年たちを、クレアの恫喝が遮った。

「「「つつ!?!?」「」」

ぴたり、少年たちが驚いたように息を呑む。彼らは顔を合わせるなり、気まずそうに口を噤んだ。輪の中にいた少女が、めそめそと泣き始める。

「……クレア姉ちゃん、怖い……」

「お、おい、泣くなよ……!」

「でも、ルシオ……」

「……」

「……」

「……」

少年たちに、悲しみが伝染した。一斉に、彼らの泣き声が森に響き渡る。

ルシオは、いつ、と口を歪めた。

「こんの、アホネコオ!」

ポカッと、ロジャーの拳がルシオの脳天に決まる。

「つて!」

両手で患部を覆いながら、ルシオは睨む様にロジャーをふり仰ぐ。するとロジャーは、両腕を組みながら、ふんっ、と鼻から息を吐い

た。子供たちに向かって、ジャンツ、と言い放つ。

「オメエら！ オイラの団員なら、街に着くまで泣いちゃダメじゃんよ！」

噉り泣きながら、子供たちが顔を上げる。偉そうに胸を張ったロジャーは、ぶかぶかの手袋で、クレアを指差した。

「姉ちゃんだつて、辛いの我慢してんだ！ オイラたちがしっかりしなきゃ、誰が姉ちゃんや婆ちゃんを護るジャンよ！」

「ロジャー……」

「“^{アニキ}団長”と呼ぶジャンよ！」

ふんつ、と鼻息荒く言い放ったロジャーに、ルシオは呆れ顔で溜息を吐いた。ロジャーが元気づけようとしているのは分かるが、ロジャーの『子分』という時点でテンションが萎える話だ。

「バカダヌキ、そんなんでコイツらが納得するわけ……」

そう言つて、ルシオが子供たちをふり返った瞬間。

まさかの事態が起こった。

皆が皆、憧れの目でロジャーを見ていたのだ。

「なにっ!?!」

ルシオが息を呑む。

子供たちは、じ、とロジャーを見据えた。常に庇護される側にあつた彼らにとって、守ってくれる対象のクレアを、自分たちが護る、

という発想は、かなり斬新なものだった。それを当たり前のように提言したロジャーに、子供たちは強く、心惹かれるものを感じたのだ。

子供たちの瞳に、力が戻る。ロジャーはこくりと頷くと、彼らから背を向けて、ルシオに向き直った。

「とはいえ、」

困ったように首を傾げたロジャーは、腕を組んだまま、アレンからもらった通信機を操作する。はた、とルシオは瞬いて、我に返った。

「兄ちゃんから連絡ないのは確かなんだよなあ。もう四日も経ってんのに、それらしい信号もねえ。……一体どうしたんだあ？」

「なにかあったに決まってるんだろ？ あのととき、アレンさんが向かってった方角に、でっかい光の柱が起きたんだ。今のアレンさんは素手だし、相手は、あの女ヴァルキリーだしよ……」

言ったルシオは、難しい表情で難民を見据えた。若い衆がいなくなっても、全体数はおよそ一三〇〇人もいる。このまま放置する訳にはいかない。

「……はあ。探しに行きたいけど、“頼む”って言われちゃったしなあ……。ラッセンに着くまでの辛抱、って分かつちやいるけど……」

「男は耐えることも必要だぜ。アホネコ」

「うっせうっせ！ オメエに言われるとムシヨーに腹立つんだよ！

この四日間、変な騒ぎばかり起こしやがって！ このバカダヌキ
！！！」

「んだとおっつー！！」

ぼかぼかと殴り合うロジャーとルシオは、難民の悲壮な空気の中
にあっても、相変わらずだった。

……………

ラッセンに戻って数日。

ベリナスは、どうにも集中力を欠いていた。努めて執務に取り掛
かっても、身が入らない。憂うべきことが、多過ぎるのだ。

（私は、貧民街に放たれた正規軍を、引き揚げさせるコトが出来な
かった…………）

ベリナスが命じたときには既に、貧民街の焼き討ちが終っていた
のだから。

右手に顔を埋める。溜息が零れた。

約束を果たせなかったことに対する、負い目を感じているのか。

それとも、貧民街で見た光景が印象的だったのか。

ベリナスは、片時もアレンのことを忘れられずにいた。

（ “彼” は、必ず報復にくる ）

既視感めいた恐怖が、心を縛りつける。そして“彼”が来たから
には、ベリナスは抵抗することもできずに、その刃に倒れるであ
らう。

自分は、ラッセンの“衛士長”なのだから。

刃を合わせずに、いられるハズがない。

「ベリナス様……」

「ん？ ああ。すまない、阿沙加」

阿沙加が紅茶をカップに注いでくれたことにも、気付かなかった。そそくさと手に取り、阿沙加に愛想笑いを向ける。ハーブティの香りが鼻腔をくすぐり、ベリナスの緊張が少しだけ解けた。

阿沙加が、心配そうにベリナスを見る。最近、明るい表情を見せ始めた阿沙加だったが、貧民街の一件からまた暗い表情に戻ってしまった。

ベリナスは彼女を見上げ、苦笑した。

（この娘を幸せにすると、私は決めたハズなのに……）

政務上、ラッセンと繋がりのある公爵家とは、縁を切るわけにはいかない。そんなベリナスにとって、阿沙加を公爵に認めてもらうことは必要不可欠だった。

公爵の機嫌を損なえば、ジェラベルンと直接取引をしている貴族や商人たちの暮らしに影響が出る。そう思っただけの遠征だったが、とんだ藪蛇だ。これからの進退を考えねば、ベリナスに 否、ラッセン全体に未来はない。

ベリナスは紅茶に口をつけながら、執務机に置いた辞表を手にとった。

「……………」

早いうちに衛士長を辞めなければ、他の人間にも危害が及ぶ。それは分かっているが、位をなくせば自分はともかく、阿沙加にまで

権力の矛先が及んでしまうことが心苦しい。貴族の嫌がらせに堪える覚悟はある。だが、嫌がらせがエスカレートし、最悪の状況になった場合は、国を出ることも視野に入れるべきだろう。

貧民街のことを考え、さらに憂鬱になるベリナスは、阿沙加を見据えた。 寂しげに。

「阿沙加。どうかこれからも、不甲斐ない私の傍にいてくれ」

つぶやくベリナスに、阿沙加は不思議そうに目を丸めながらも、小さく頷いた。

.....

森の終端に着き、ラッセンの街並みが見え始めた所で、クレアたちは足を止めた。先導していたロジャーとルシオが、異常を感じ取ったのだ。

正確には“異常”と言ってしまったほどの異常でもない、小さな“異変”が。

ロジャーとルシオは、互いの顔を見合わせた。ラッセンの衛士長・ベリナスに会えば、どうにかなると思っていたが、実はそうでもないかも知れない。

商業盛んなラッセンの門戸が、まだ昼過ぎだと言うのに閉まっているのだ。

首を傾げながら、二人はクレアを見上げた。

「姉ちゃん。悪いけど、オイラたちが帰ってくるまでちょっと待っててくれ。街の様子を見てくるジャンよ」

「こんな時間に門が閉まってるなんて……。前はそんなことなかったもんな」

「おう！」

気難しげに腕を組むルシオに、ロジャーが頷く。クレアは目を細めた。

「とか言って、ホントは逃げるんじゃないの？これだけの人数、しかも、貧民だ。貴族なんかが助けしてくれると思えないわ」

「ベリナスのおっちゃんは、あんな連中とは違っぜ！」

クレアの言葉に怒ったように、ロジャーは拳をふり上げた。傍らでルシオが、腕を組んで唇を尖らせる。

「っか。ここまで来といて、んなこと言っなよな！」

「っ……っ！」

クレアは割合、ジエラベルン難民の中でも体力のある方だ。

しかし、ドルチエなどの高齢者や子供を連れての獣道は、確実に彼女の体力を奪っていたのである。思わず出た悪態を反省するように、彼女はルシオたちからそっぽを向いた。

「なら、いいんだけど。街の様子を見に行くなら、私も行かせてもらっから」

街に行けば、わざわざ森を駆けずり回らずとも食料が手に入る。

クレアの言葉に、ロジャーが、いいぜ、と白い歯を見せた。

2 ジェラベルンの戦い（前編） ベリナス処刑の報

ベルナスの“衛士長”という役職は、商業都市ラッセンの執政と駐屯している独立部隊の指揮を生業としている。つまりは軍部と政治を兼ね備えた特権階級だ。

ベリナスがラッセン独立部隊駐屯地に赴くと、剣の稽古に明け暮れていた下流貴族たちが、晴れやかな表情を見せた。

「これはベリナス様。おはようございます」

ラッセンが持つ独立部隊に入れるのは、貴族だけに限られている。だが、豪商と呼ばれる人間に比べれば貧しい生活を送っている下流貴族は、身分差の激しいジェラベルンで、ベリナスと阿沙加の結婚に前向きな姿勢を示す数少ない味方だ。中には、中流階級への昇進が約束されているのに、ベリナスに共感して残る者もいる。

皆、心強い仲間だ。

だが。

国王軍は、そんな信頼関係をあっさりと踏み躪るほど、乱暴で強力なものだった。

「そん、な………！」

貧民街の焼き討ちの件で、正規兵が千人ほど殉職した。犯人は“不明”とされているが、ジェラベルン王国軍は“貧民の仕業である”と見なしている。報復のために、ラッセンにけしかけてきたジェラベルン王国軍は二千人にも及んだ。その指揮を執る“男”を見て、ベリナスは背筋が凍るのを感じた。

黒刃のアドニス。
全身を漆黒の鎧で覆った、戦争屋だ。アドニスの出自は、長く衛士長を務めるベリナスも知らない。

アドニスは特定の国家に属さず、戦ごとに自分を高く買ってくれる陣営と契約し、戦場を渡り歩く『傭兵』だ。アリユーゼと肩を並べるほどの戦士と謳われ、アリユーゼと並んで、大陸最強の戦士と呼び声が高い。

ただし、アドニスは相手がどんなだろうと、高い金を払った側に与するため、恩義や人情、モラル、良心などを持ち合わせていないといわれている。

元・ヴィルノア兵士。現・ジエラベルン軍の將軍。
そんな彼の経歴が、彼自身を物語っているのだ。

.....

アドニスは衛星都市ラツセンに入ると、早々に部下を引き連れて兵舎に向かった。

「ここが、反逆者ベリナスの街か……。ジエラベルン同様、面白くもねえ街だぜ」

奴隷市の開かれる広間を通り抜けて、アドニスは失笑する。ラツセン独立部隊の兵舎に着くや、彼はこう言った。

「おい。さつさとベリナスを捕えろ。俺は、逃亡した貧民クヌどもの相手をしなけりゃならねえんだ」

事前連絡もなしに現れた、王国軍の將軍を目にして、休憩で談話

し合っていた兵たちが立ち上がった。

「……こ、これはっ！ 東方將軍っ！」

慌てて敬礼を取る。その内の一人を、アドニスは無造作に殴り飛ばした。

ゴツ！

「っ！？」

予想もしない一撃に、頬に拳を食らった兵が無様に倒れ伏す。目の前で、火花が散った。

「な、なにをッ！？」

殴られた兵を庇うように、他の兵がアドニスと対峙する。そんな独立部隊の兵たちを睨みおろして、アドニスは面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「聞こえなかったのか？ 俺は反逆者ベリナスを捕えろと言った。無駄なことくっちゃべってねえで、とったと行けっ！」

「反逆、者……？」

「ベリナス様が？」

独立部隊の兵たちは顔を見合わせるも、アドニスが再び拳をふり上げる前に宿舎を飛び出した。それを尻目に見据え、アドニスは邪悪に笑む。宿舎を取り仕切る女将の下に、彼は宿帳を見せるように

言った。

「宿帳……ですか？」

戸惑う女将に、アドニスは頷く。王国軍將軍の申し出とあつては、女将に拒否権はない。一抹の不安を覚えながらも、彼女は宿帳をアドニスに渡した。手にした宿帳のページ目をめくり、アドニスは邪悪に笑む。と、ろくに目も通さずに、宿帳を王国軍兵に押し付けた。

「さて。ゴミに用はねえ。しくじるんじゃねえぞ……」

漆黒の鎧の奥で、アドニスの赤瞳が鈍く光る。びくり、と背筋を震わせた王国軍兵は、皆が皆。背に板を入れたように直立すると、アドニスに一礼して、早々に場を去った。

「申し訳……ごさいません……！ ベリナス様……」

ラッセン独立部隊の中隊長を務める部下の言葉に、ベリナスは目頭が熱くなるのをこらえながら、頷いた。

（分かっていた……！ 分かっていた、ハズだ……！）

東方將軍アドニスに、宿舎で真つ先に行ったことは、ベリナスを擁護する人間を掃き捨てるため、独立部隊に属する兵の 家族の身柄を押さえることだった。

アドニスから『捕えろ』と指示を受けた中隊長は、ベリナス家に

着くなり、裏手からベリナスを逃がそうとした。だが、そこで彼は見てしまったのだ。ラッセンで最も見晴らしのいい場所　奴隷市場に、縄をかけられ並べられている自分の妻を、子供を。

「心配するな、アンカー。私は逃げぬ」

ベリナスは、家族を人質に取られた仲間のために、自ら王国軍に出頭することを決めた。

「行ってはいけません！　ベリナス様っ！　ベリナス様……、つつ！」

泣き崩れる阿沙加の制止も聞かず、少しでも阿沙加が逃げる時間を稼ぐために。ベリナスが阿沙加の髪を撫でると、小さく微笑った。しかし。。

このベリナスの見立ては、完全に間違っていた。アドニス予想以上に狡猾だったのだ。ベリナスの顔を見るなり、彼はベリナスを牢獄へ放り込んだ。衛士長としてベリナスが培ってきた、執務の引き継ぎ作業などをまったく無視して。

「ラッセンは……、一体どうなってしまうのだ……」

獄中で手枷を嵌められ、ベリナスは三日後に自分の処刑が決定したと告げられた。

数日後。

ジェラベルンで皆殺しにされたハズの、貧民街の若者たちが、自分と同じく処刑されるといふ報を聞いた。

その数、七百人余り。

ベリナスはあまりのことに言葉を失った。

貴族というのは、上流階級というのは、こうも人を人も思っていないのか。

貧民街の焼き討ちで犠牲になった兵の数はそれ以上だったが、ベリナスはまざまざと叩きつけられた数字が重く感じられた。

七百人もの人間を公然と殺す。そんなことが、許されるのかと。

(ここまで、非情になれるものなのか……人という魔物は！)

自国の貧民にさえこの仕打ちだ。ベリナスが投獄された今、阿沙加が無事だと思える方が不思議だった。絶望が、ベリナスを侵食していく。ベリナスの脳裏に、アレンの冷たい瞳が脳裡を過る。

あの、不吉な鋭い眼光が。

ベリナスは誰もいない獄中で、つぶやいた。

「壊れてもいい……たとえ、この身が朽ちようとも！ だから、どうか……どうか阿沙加だけは……。……アレン……！」

手枷を嵌められたやつれた手に、涙がぼたりと滴った……。

ロジャーたちがラッセンに入ると、申し訳ばかりに敷かれた石畳の小路が、街の中央に続いていた。雨風によって磨り減った路は、貧民街ほどではないものの、砂ぼこりにまみれている。

商業都市・ラッセン。

表向きはそうなっているものの、実際は人身売買の盛んな土地だ。クレアはあまり好きではない。大陸最大の奴隷市場を、ロジャーたちと共に過ぎる。すると人だけが見え、彼女はスリのチャンスとばかりに足を止めた。

「んあ？」

「どうかしたのか？ 姉ちゃん」

ロジャーとルシオが、不思議そうにクレアをふり返る。クレアは腰にも満たない少年たちを見下ろすと、冷めた様子で肩をすくめた。

「なんでもないよ。あつちの人だから気がなって、足を止めただけ。あれってなんなの？ 奴隷市じゃないんでしょ？」

問うと、クレアが指した方角を見やって、ルシオとロジャーが顔を見合わせた。

「前来たときは、あんなのなかったよな？」

「……行ってみるジャンよ！」

ぐぐと拳を作ってふり上げるロジャーに、ルシオが頷く。そのあとをクレアが追って行くと、人だけが、処刑場を囲んでいたのだと分かった。

並べられているのは、クレアたちから離反した、若い男たちだ。

「っ、！？」

思わず口を押さえる彼女に、ラッセン市民のひそひそと話す声が、洩れ聞こえた。

「ジエラベルンから逃げてきた盗賊なんだって？」

「あんな小さな子供まで……！ まだ赤ん坊じゃないか」

「家族ぐるみで盗賊で生計を立ててたんだよ。それで国策に引っかけ、こんなことに……」

「自業自得と言ってしまえば、それまでだけどねえ」

手近な市民に駆け寄ったロジャーが、くい、と男の裾を引っ張る。

「なあ、おっちゃん。一体ここでなにが起ころうとしてんだ？」

「聞いてないのかい、坊や？ なんでもジエラベルンで悪事を働いた窃盗団が、このラッセンに逃げてきたらしくてさ。それで、王国軍の将軍様が捕まえて、これから処刑しようとしてるわけだ。……奴らさえ大人しくしてりゃ、ベリナス様だって……！」

「ベリナスのおっちゃんがどうかしたのか？」

ロジャーが問うと、男は驚いたように目を丸めた。

「おいおい！ ウチの衛士長に向かって、“おっちゃん”はないだろ？ ベリナス様は、お優しい方だからな。国は結構な兵を割いて盗賊団を殲滅させようとしたが、あの方は盗賊を庇ったらしい。それが貴族たちの逆鱗に触れて、今、国家反逆の罪に問われてるんだ」

「アイツら……！」

なにをぬけぬけと。
クレアが悔しげに奥歯を噛むと、ルシオが、きゅっ、と表情を引き締めた。

「おい、バカダヌキ！ 阿沙加姉ちゃんトコに行こうぜ！ あの姉ちゃんなら、なにか知ってるハズだ！」

「おう！」

頷き合った二人は、クレアを連れて、衛士長ベリナスの屋敷へと向かった。

久しぶりに訪れたベリナス家は、うらびれたものだった。家中に埃が溜まり、一度も窓を開けていないため、空気が鬱滞している。ロジャーたちが屋敷の門戸から中に入ると、二階に続く大階段の前で、阿沙加が悲嘆に暮れていた。

「阿沙加姉ちゃん！？」

泣き崩れている彼女に、ロジャーが慌てて駆け寄る。顔を上げた阿沙加は、ロジャーにすがりついた。

「お願いします！ どうか、どうかベリナス様をお助け下さい！
お願いします……！」

「……奴隷？」

泣き腫らした阿沙加を見据えて、クレアが物珍しそうに眉をひそめた。倭人のようだが、身なりはクレアよりもずっと小奇麗だ。こちらの話も聞かず懇願する阿沙加の必死な訴えに、ロジャーは思わず尻ごんだ。

明らかに様子がおかしい。

傍らのルシオが、気の毒そうに眉を歪めながら尋ねた。

「なあ、阿沙加姉ちゃん。さっき奴隷市場の傍を通ってきたんだけど……、あのおっちゃんに罪に問われてるって、ホントなのか？」

阿沙加は髪をふり乱して首をふった。

「違うんです！ ベリナス様は、公爵様に私との結婚を説得に行っただけで……。国に翻意などありません！ アレン様をお止めしてまで、あの方は公爵様を庇われたのです！」

「???? え、つと……、悪い。よく、わかんねえ……」

困惑した顔で、ルシオが鼻の頭を掻く。動揺している阿沙加は、要領のいい会話が出来なくなっている。途切れ途切れに彼女が発したことの経緯は、次のようだった。

ロジャーたちが貧民街の人間を避難させていたとき、ベリナスは阿沙加と共に国の高官 ノーウェル公爵に結婚の報告するため、ジェラベルンの屋敷を訪れた。

しかし、公爵は奴隷との婚約で、自分たちの立場が危うくなるのを恐れ、ベリナスを別の婚約者と結婚させようとした。

ベリナスはその要求を真つ向から退け、屋敷を去ろうとしたが、公爵は、それならばと民衆や奴隷の支持を集めつつあるベリナスを、阿沙加ともども殺そうとしたのだ。

そこを、アレンが救ってくれた。彼は、貧民街に放たれた兵を引き揚げるよう、公爵に刃を向けた。しかし、その行為は、衛士長としてベリナスが見過ごすわけにはいかず、兵を引き揚げることを条件に、アレンに公爵から手を退いてくれと頼んだ。

要求を呑んだアレンはその場を去り、ベリナスは早急に、兵を引き揚げる準備に取り掛かったが、時既に遅く、貧民街は壊滅状態になっていた。

呆然と、ベリナスは無力さを噛みしめて、ラッセンに帰った。

しばらく、仕事にも手がつかず、彼は貧民街を思い出しては気に病んでいたが、そこを襲ったのが、公爵の報復だ。

公爵は、自分にベリナスが剣を向けたことと、貧民街の“スリグループの一掃”を妨害したのを理由に、ベリナスに国家反逆の罪を着せ、先日。処刑を決定した。

「ベリナス様が公爵様に剣を向けたのは、私を救おうとしたためです！ それなのに、誰も話を聞いて下さらず、ベリナス様の処刑が決まってしまうて……！」

「んだよ、それ！」

「ぐぬぬぬ……！！ チックショウめ……！」

憤懣ふんまんやるかたないと拳を握ったルシオとロジャーが、忌々しげに

地団駄を踏む。二人の後ろでは、クレアが、冷めた表情で息を吐いた。

「やっぱり、そういうことだと思ったよ……。これがあいつらのやり方だ。自分の気に入らない奴は、たとえ無実の相手だろうと殺す！ ホント、最低のクズ野郎共！」

「くっそお〜！ オイラ、男として許せねえぜ！ 阿沙加姉ちゃん！ 心配すんな！ オイラがベリナスのおっちゃんを助けてやるジャンよ！！」

「……ロジャー君……」

惚けたように、阿沙加が目丸める。一縷の光を見つけて、ようやく顔を上げた彼女に、ルシオも両腕を組んだまま、深く頷いた。

「バカダヌキの言う通りだ！ 黙ってられっかよ！！ ……で。処刑って、いつなんだ？」

「ついでに、さっき並んでた兄ちゃんたちも助けてやるうぜ！ アホネコ！」

「ちよつと“しゃく”だけど、しゃあねえな」

ルシオが肩をすくめて頷くと、ロジャーが嬉しそうに、ジャン、と笑った。クレアが慌てて押し止める。

「なっ、待ちなよ！？ そりゃアンタたちは強いかも知れないけど、今度は前より兵が多いかも知れないんだよ！？ 勝てるわけないじゃない！！」

言つと、クレアをふり返つた二人は、チツチツと指先をふつた。

「勝てる勝負をやる奴なんて、男じゃねえぜ。クレア姉ちゃん」

「多少の危険なりとも正義を貫く。これぞ、まさに男道！」

言い張る彼らに、阿沙加の表情が明るくなる一方で、クレアはぽかんと、口を開けた。

3 ジェラベルンの戦い(前編) 東方將軍アドニス(前書き)

VP2エインフェリアは、「現世に転生している」という設定です。

3 ジェラベルンの戦い（前編） 東方將軍アドニス

山野に咲く花は、風が吹き抜ける度に白い花片をたなびかせた。緑が茂る草原に、星のように輝く一面の鈴蘭。人里から離れたこの場所は、人の手を知らず、粛々と、自然の美しさを体現している。この光景はなぜか、懐かしさを感じさせた。既視感とも言うべき、懐かしさを。

レナスは目を閉じ、風を感じる。頬を撫でる柔らかな風が、彼女の銀髪をなびかせ、星を散りばめたような光を、陽光を浴びて放つ。

「……………」

時間を、浪費している場合ではないのに。 。
ゆつくりと瞼を開けたレナスは、戸惑ったように胸許に両手を合わせた。そしてふと、瞬く。この鈴蘭の草原は、光の地ヴァルハラに似ているのだ。かの神界に比べれば、雲泥の美しさではあるものの。

無意識に指が、左手の指輪に触れた。主神への忠誠を誓う、ニーベルンゲンの指輪に。

一度、外してみるといい。

青年の言葉が、ふいに脳裡を過る。ニーベルンゲンの指輪を逆の手で挟んで、彼女は自嘲気味にフツと笑った。

（この私が、一体なにを…………）

邪念をふり払うように、首をふる。すると、胸の内から反応の少ないルシオが、目の前の光景に、心を動かされているのが分かった。

すう、とルシオの魂が、レナスの胸から解放される。彼女は首を傾げた。

「どうしたのだ？ ルシオ？」

問うてみる。すると、険しい表情をしたルシオが、少し先の、小ぶりな岩を睨んでいた。

不死者だ。

岩にまとわりつくように、ゴースト系の不死者が三体。

「っ！」

レナスは目を瞠った。下界にしては美しい風を運ぶこの場所で、不死者を見つけたとは。

そう思うと同時に、腰の剣を抜く。上段から“悪霊”というべき不死者に斬りつけると、一太刀で三体。“それ”らは一瞬で、岩の周りから浄化された。

「なぜこんな処に、不死者が？」

どこからでも現れるとはいえ、不死者は邪念の多い場所や、陰気な場所を好んで出現する。鈴蘭は人間にとつて毒のある花だが、それゆえに清めの花としても知られていた。不死者には居難いハズだ。剣を納め、レナスが疑問を口にしたのも束の間、レナスは岩の前に立つルシオを見て、はた、と瞬いた。

哀しげな、どこか遠くを見つめるルシオの横顔。
レナスは目を細め、顔を上げた。

「ルシオ。これは、お前の？」

ルシオが見つめる岩を見やって、レナスが問うと、ルシオは小さく頷いた。

「プラチナの墓だ。賞金稼ぎをやっているときも、よく墓参りに来てたんだ。けど、なんで今頃になってまで、不死者どもが……」

忌々しげにルシオは歯を噛む。彼の口ぶりでは、この墓を不死者が汚すのは初めてではないようだ。ブラムスと戦ってまで青年が、“プラチナの逝く先”を知ろうとしていた理由が、今更ながらに伺えた。

「……そうか」

つぶやいたレナスは、光の翼を広げた。羽根が風に乗って舞い、雪のように降る。羽根が光に変わった。光は積もるように墓に集うと、一本の剣と化し、剣は雪が溶けるように、墓の中に沈んでいった。

ルシオは、墓に不死者が集っているのを見たから、プラチナがちゃんと転生出来ているのか知ろうとした。

ならば。

レナスの青瞳が、ルシオを見る。

「戦乙女として、私からの餞だ。はなむけこれでこの墓場を、不死者が荒らすことはもうない」

「……ヴァルキリー……」

呆けたような、ルシオの顔。それは初めて見る、陰りのない彼の

瞳だった。哀しみの少し晴れた彼を見つめて、レナスは小さく頷く。
“墓”にしては、ありふれた石ころが、当時のルシオの限界を物語るようで、眠りにつく少女の儂さを思わせた。

「そろそろ、行きましょう」

何気なく下界に来たのだが、思わぬ収穫を得た。レナスはルシオから背を向け、左手に嵌めた、ニーベルンゲンの指輪に触れた。

(……そうだ。これこそが、我が使命……)

不死者を討滅し、出来る限り勇者の魂エインフエリアの憂いを払って、神界に送り出す。

彼の地ヴァルハラで勇者の魂が死んでしまえば、脆い人間など消滅してしまうのだから。

生きている人間の世迷い言など、彼女が気にしている時間はない。レナスが結論を下すのと同じ、ルシオは、颯爽と歩き出す戦乙女の背を見つめて、わずかに目を細めた。まるで、昔を懐かしむように。

プラチナと戦乙女を重ねる自分をふり払うように、彼は忌々しげに拳を握り締めた。

相変わらず、出鱈目な少年たちだった。

ラッセン、処刑場。

奴隷市場の中央に設けられた、広場に、鉄の支柱が円を描くように立てられていた。そこに、罪人と称したジエラベルン貧民の若者が括りつけられている。

ベリナスは、円の外に居た。処刑場を一望できる場所　高台の支柱に、縛り付けられているのだ。

物見遊山でやってきた市民は、鉄柵から不安そうにベリナスを見つめた。だが誰一人、今まで信頼を寄せていた衛士長に、声をかけることはない。

ベリナスを縛る支柱の隣、木製の大椅子に、漆黒の鎧をまとう將軍が座っているのだ。

東方將軍・『黒刃のアドニス』。

身の丈ほどもある黒剣を地面に突き刺した、漆黒の男は、数か月前に東方將軍として招かれた精強の傭兵だ。彼にはジェラベルンの身分制度がまったく通用しない。ラッセン独立部隊の兵士たちも、自らの家族を人質に取られ、アドニスにはなにも意見できなかった。

「…………ベリナス様…………」

時折。民衆の中から、ベリナスを心配する声上がる。

処刑の刻限まであと小一時間。

アドニスは高台から群衆と、広間に並べた貧民街の青年たちを見やり、口角を上げた。

「…………さあ。殺戮の始まりだ」

頬づえをついた口の中で、アドニスがうそぶく。と。不意に、空が陰った。

ふっ、

「な、なんだっ!？」

「空が……!!」

群衆がざわめく。

「なんだあれ!？」

ふとした拍子に、皆が顔を上げた。同時。隕石　のような謎の物体が、処刑場を破壊しつくした。

ドゴオオオンッ!!

「う、うわああああ……!!」

兵士を始め、見物人や受刑者までもが阿鼻叫喚の渦に吞まれる。もうもうと立ち込める土煙の中、アドニスだけは眼光を底光らせて立ち上がった。

「来やがったか!」

ハッと壮絶に唾つて、床に突き刺していた黒剣を引き抜く。と。

群衆の騒ぎに紛れ、処刑場に躍り出てくる影が見えた。

ルシオとクレアだ。

アドニスは騒ぎの只中にあっても、二人の影を完全に捉えていた。煙の中で、クレアは鉄柱に括られた青年たちに駆け寄る。

「クレアっ!？」

自分たちが見捨てたにも関わらず、クレアが助けにきたことが意外だったのだらう。息を呑む彼らに、クレアは取り合わず、次々と

受刑者を解放していく。

ルシオは処刑場の脱出口に一番遠い鉄柱から救出を行い、そして、ベリナスを縛る鉄柱がある高台へと駆け上った。そ

「君はっ！？」

「助けにきたぜ、おっちゃん！ さ、早く！」

驚くベリナスを余所に、ルシオが自慢のナイフで縄を切ろうとした。そのとき。

「チツ！ うぜえ……。ジエラベルンの憲兵どもを皆殺しにした男が、どんな奴かと思って来てみれば……。こんなガキが相手とはな！」

自分の身の丈ほどある黒剣を肩に担ぎ、漆黒の鎧で全身を固めた東方將軍アドニス、心の底から詰まらなさそうに吐き捨てた。

「っ！」

ルシオの背に、悪寒が走る。素早くふり返ると、アドニスの大剣がルシオに向かってふり落ちていた。

ギイイインッッ！！

すぐ眼前まで差し迫った黒刃を、ギリギリのところまでナイフで止める。が。

「うわっ！？」

ルシオが息を呑むと同時に、彼の身体は、後方に吹き飛ばされていた。

ザザザッ！！

空中で態勢を立て直し、見事に着地するルシオ。アドニスは無造作にふった黒剣を片手に、意外そうに目を丸めた。

「ほう……。意外と出来るじゃねえか」

冷酷で知られる東方將軍の口角に、邪悪な笑みが刻まれる。ルシオはナイフを握り直すと、アドニスが放つプレッシャーを感じながら、小さく笑った。

「……こいつは、ちょっと……ヤバイかもな……」

こと俊敏さにおいては、ロジャーよりもルシオの方が上だ。しかし、先ほどアドニスの剣を止められたのは、半ば偶然だった。

アドニスが、にやりと笑う。

「ツイてなかったな坊主。死神とのご対面だ」

「っ！」

ドゴオッ！！

アドニスの拳が無造作にふり落ちた。頬を抉られたような、強烈な衝撃がルシオを襲う。ルシオの軽い身体は地面でバウンドし、空中に浮いた所で、アドニスの黒剣が上段からふり下ろされていた。

「ちっ！」

素早く横に跳び、ルシオは黒剣を躲すが、

フォンツッ！

ふり落ちたハズの黒剣が、次の瞬間、ルシオに向かって切り上げられる。

(速えっ！)

二の太刀が速い。脚力だけで、ルシオは横跳ぶ。が、ルシオの髪を、アドニス黒剣がさらっていった。冷や汗が背を伝う。ルシオは頬が引きつるのを感じながら、アドニスを見据えた。

(双破斬!? アレンさんのっ!?)

動揺する自分を極力抑えるため、アドニスの握る黒剣の切っ先を睨む。斬り下しと斬り上げの二連攻撃。その完成度まで、この男はアレンに近い。

「アホネコオ！」

スターフォールを放っていたロジャーが、異変に気付いて駆け寄ってくる。ルシオは舌打った。

「っバカダヌキ! まだ皆、逃げ終わってねえんだ! 俺に構うんじゃねえっ!!」

「殊勝なこつた」

アドニス黒剣を右に避け、ルシオは地を蹴った。

受けに回れば、殺られる　！

三度、立ち合って、ルシオが考えた結論だ。ナイフのグリップを強く握りしめる。ルシオは、呼吸を整えた。

「ソードダンスっ！」

地を蹴る。一瞬でアドニスの懐にかいくぐり、ナイフを

「見えてるぜ、坊主」

「っ!?!」

アドニスの赤瞳と目が合った瞬間、ルシオはふり切ろうとしたナイフを止めた。

ズドオオオッ!!

アドニスの黒剣が目の前を通り過ぎる。深々と高台を貫いた黒剣が、陽光に照らされて、ぎらりと妖しく輝いた。

「おらあっ!!」

床に刺さった黒剣が、アドニスの力任せな横薙ぎでふり切られる。

ズオツ!!

すぐ傍を通り過ぎる黒剣に、ルシオは肝の冷える思いだった。

「くつつつそ!!」

バック転でアドニスから間合いを取る。アドニスは巨漢だが、動きの素早い戦士だ。

(ど、どうしろってんだ! こんにゃろ……っ!!)

ナイフを握るルシオの目に、悔し涙が溜まる。 そのとき。

「奥義! ボイドエクストリーム!!」

「なにっ!?!」

突然の攻撃に、アドニスは目を剥いた。己の身を縛る、四輪の方阵。

そして、

ズドオオンツッ!!

「があっ!?!」

地面から生えた巨大な地霊刀が、アドニスの身を貫いた。
ルシオが目を剥く。

「これで、終わりだあっ!!」

小さく地を蹴ったルシオは、縦横無尽にナイフをふるった。

「リーフソードダンス！」

ズババババアアツ！！

ベリナスの地霊刀を食らって動けないアドニスの身体に、五方向から斬りつけるルシオの連撃が直撃する。アレンからもらった特製のナイフは、アドニスの漆黒の鎧をも、苦もなく切り裂いた。

「が、あつ！！！」

天を仰いだアドニスの口から、悲鳴が零れる。鎧の切れ目から、血が飛沫いた。

タンツ、

軽やかに着地したルシオが、両手でナイフを握る。同時。彼のナイフに、蒼白の雷が宿った。

「くらえええ！」

ズドオオオンツツ！

野太い雷束が、のたうちながらアドニスを穿つ。不死者の中でも高い防御力を持つ、ドラゴントウースウォリアー竜屍戦士をも、一瞬で消し飛ばしたルシオの必殺技だ。

「はあ、っ、……はあっ……、！」

ルシオは肩で息を切らしながら、ナイフを納めた。ロジャー、アレンと旅をするようになって、数か月。その中で、恐らく一番の強敵だ。ルシオは安堵に息を整えながら、ベリナスをふり返った。

「サンキュ、おっちゃん」

軍剣を納めたベリナスも、小さく笑んだ。

「うむ」

「間に合って良かったよ」

咄嗟の機転で、クレアがベリナスを解放してくれたらしい。ルシオが礼を言おうとした、そのとき。

「……よお、終わりか？なら、次は俺の番だな……」

地底から響く低い声に、三人は制止する。ふり返ると、アドニスだった。

「……つつ、つつ！！？」

ルシオとベリナスが目を見開く。共に、自分が持つ最高の技を叩きこんだのだ。絶対に、アドニスが動けるはずなどない。が。

黒剣を肩に担いだアドニスは、ぼろぼろになった漆黒の鎧から、赤い瞳をぎらつかせた。

「やってくれるぜ……。ホントによー！」

「うつそだ〜……!!」

ルシオの口が、思わず歪む。にやりと笑ったアドニスは、しかし、次の瞬間。倒れ伏した。

「ラスト・デイイッチ!!」

ズドオオオンツッ!!

不意打ち気味のロジャーの頭突きを、腰に食らって。

「が、あつ……」

頭からくず折れるように、アドニスは倒れる。ルシオが、思わず飛び上がった。

「よ、よくやった！ バカダヌキッ!!」

「ジャンツ!!」

腕を組むロジャーが、己の偉業を誇るように胸を張る。

そうして、

どうにかベリナス奪還に成功したロジャーたちは、早々に処刑場をあとにし、受刑者たちを連れて阿沙加の下に帰った。

「阿沙加姉ちゃん！」

得意げにロジャーが扉を開けると、待ち焦がれていた阿沙加が顔を上げ、涙に濡れた目を細めて、ベリナスに飛び込んだ。

「ベリナス様……っ、ベリナス様！」

咽び泣く阿沙加を抱き止め、ベリナスは目を閉じる。彼女のぬくもりを噛みしめるのも束の間。ベリナスは、ロジャーたちに向き直った。

「君たちは、どうしてここに？」

「オイラたちは正義のヒーローだぜっ！ おっちゃんピンチの危機に駆けつけるのは当然じゃんか」

にんまりと笑うロジャーに、ルシオが腕を組みながら言った。

「ジェラベルンの人たちをなんとかしてもらおうと思ったんだけどさ。おっちゃんが王国軍に捕まってるって聞いたから、一悶着起こしたわけだ。ともかく、さっさとずらかろうぜ。ここも無事じゃねえだろ？」

「あ、ああ！ ……すまないっ！」

頭を下げるベリナスに、ルシオは照れ隠しでもするように、鼻の下を人差し指で擦った。

ベリナス家の倉を開け、申し訳程度だが日用品やら食料やらを手に入れたロジャーたちは、阿沙加を連れて街を出ようとした。そのときだ。

「居たぞ!!」

国の憲兵が、ベリナスを発見して声を荒げた。ロジャーが手斧をぎゅっと握る。

「よしっ！ オイラが片づけてやるぜ！」

「待てっ！ 今は堕ちた我が身でも、私はラッセンの衛士長だ！
彼らに危害は……！」

「んあ？ ん……よくわかんねえけど、わかったじゃんよ！ お
っちゃんがそう言うならここは退いてやるじゃん」

にんまりと笑ったロジャーは、袋を抱えて走り出した。その背に、
ベリナスは礼を言う。ひよこひよここと愛らしい尻尾をふって走る姿
に似合わず、ロジャーの足は速い。

憲兵による猛追が予想されたが、意外にも、ロジャーたちはあっ
さりとラッセンを抜けることに成功した。

それがベリナスを慕っていた下級貴族たちの、王国に対する
最後の抵抗だった。

……
……

4 ジェラベルンの戦い(前編) 絶望と希望 十(前書き)

あとがきに挿絵があります。ご注意ください。

4 ジェラベルンの戦い（前編） 絶望と希望 十

二人が倭を去るのに、時間はかからなかった。故郷では敵なしといわれた百鬼衆が、壊滅してもう一月になる。

「船酔いはないか？ 詩帆」

百鬼衆唯一の生き残り 蘇芳は、紅の鎧と刀を捨てた。“呪歌”を操る少女・詩帆と、第二の人生を歩むために。

視力に代わり、声を失った詩帆は、蘇芳の言葉に微笑んだ。“大丈夫”といえない代わりに、小さく頷く。蘇芳もまた、笑みを返した。

「大陸は私も初めてだ。ゆえに苦勞をかけるだろうが、来てくれるか？」

蘇芳が手を差し出すと、詩帆はその手を取って船を降りた。異国の地。

看板には大陸文字で『ジェラベルン』と書かれているが、二人には分からない。風の匂いも、故郷・海藍とは違う。

見慣れない景色に茫然として、詩帆は周りを見渡した。行き交う街の貴婦人たちは、華やかなドレスに身を包み、艶やかな金髪や赤茶髪を、宝石の嵌まったバレッタで留めている。

詩帆や蘇芳のように、黒髪の人間はあまり見られなかった。いたとしても、顔の作りが違う。どれもこれもが目新しく、詩帆は驚きを隠せなかった。

倭国では木を中心に造られている家も、こちらは石のブロック煉瓦を梁に合わせて組んだ家がほとんどだ。地面に敷き詰められ

た石畳も珍しい。倭国には“道の舗装”という概念がないのだ。

(綺麗……)

ジエラベルン 高級住宅街を見つめて、詩帆は口許を綻ばせた。
そんなときだ。

「freeze! Where have you run away!?”

何事かを叫びながら、一人の兵士がこちらに駆け寄って来た。腰のサーベルを抜く。剣先が、詩帆に突きつけられた。

「Return early!”

「なんの真似だっ!?”

蘇芳が慌てて詩帆の前に割り入り、牙を剥く。だが、兵士は訳の分からない言葉を叫び仲間を呼ぶや、二人を縄に掛けて強制的に別の場所へと移動させた。

刀を持たぬ蘇芳では、詩帆を護りながら憲兵と戦うことは不可能だったのである。

二人が入られたのは、奴隷市の牢だった。啜り泣く娘や、子供、生気を失った青年に、詩帆と蘇芳は目を剥いた。

「なんだ、これは……っ!!”

一様に皆、手錠と足枷、首輪を嵌められている。首輪には大陸の

数字が刻まれていたが、蘇芳たちにはそれが“商品番号”だとは分からなかった。

「知らないのかい？ 奴隷市だよ……」

いかにもみずばらしい、鼠色の檻褌衣を纏った男が言った。この牢で 否、“檻”の中で一番生きた目をした男だ。蘇芳は眉をひそめた。

「奴隷市？」

「そうさ。俺たちはあの悪魔どもに金で買われ、好き放題に労働させられる。死ぬまでな」

「！」

詩帆がひゅつと息を呑み、口許を押さえる。蘇芳の背に、冷や汗が滲んだ。

男は檻の中で比較的正常な目をしていたが、 暗い、沼のような瞳だった。不気味な言葉を、男が続ける。

「重労働の報酬は、犬よりも質素で不味い“餌”だ。こつちが病に臥せてもお構いなし。使えなくなれば新しい倭国の人間を補充する。ここはもう地獄だよ。俺の友たちも……三日前に死んだ」

「……お前。名は？」

問うと、男は無精鬚の伸びきった顔を上げた。

「周」

「私は蘇芳だ」

男は笑おうとしたのかも知れない。醜く引きつった口をくちやくちやくと鳴らして、彼は詩帆に視線を向けた。

「女は特に気をつけた方がいい。それも、アンタみたいな美人はな。悪魔どもに犯されるだろうからよ」

「っ！ 貴様っ！」

「おっと。取り乱すのは早い。……いいかい？ 奴らに穢されても、決して逆らっちゃいけないよ。奴らは女が暴行に抵抗して、引つ掻いた傷だけであっさり殺すんだ。でも、犯されることを除けば、アンタはラッキーな方だ。連中も美人には弱い。飯もちゃんと食わせてくれる。だから我慢するんだ。死んだら、なんにもなんないからね」

「……………」

詩帆が不安げに蘇芳を見る。蘇芳は檻の外を睨み、眉をしかめた。

「そこまで分かっているなら、なぜ皆で決起しないのだ？」

男 周と名乗った彼は、ひひっ、と引きつった失笑を零した。

「言っただろう？ 俺の友たちも殺されたって。奴らは最初、見せしめに俺たちの中から数人選んで殺すんだ。倭の弓とは違う、洒落た小さな弓でね。それは指を引くだけで放てる弓なんだ。速射性にも優れてる。抵抗したって、なんにもならないよ」

「周……、貴様……」

「ひっ、いひひひっ！ ……そうさ。俺も奴らに抵抗してこ
うなっちまった」

周はそつと、薄汚れた襦袢を払いのけた。ケロイド状になって
溶けた、彼の左足が、ぬつと姿を見せる。

「っ、！？」

詩帆が息を呑んだ。蘇芳も目を見張る。正常だと思われた周の暗
い瞳は、片方が焼き潰れていた。左の目だ。

「足はね。友たちを殺されて、逆上したときに毒矢を刺されてこ
うなったんだ。左目は他の奴への見せしめに焼かれた。……でも、生
きてたのは運が良かったんだろうね。倭国では“侍”なんて言われ
ていい気になってたけど、奴らには勝てる気がしないよ」

周は襦袢で左足を隠した。浅黒い肌の男だと思っていたが、良
く見れば肌が腐って来ているのが分かる。間違いなく、左脚の病原
菌が体に蔓延しているのだ。

気づくと、襦袢の中の異様な空気が、異臭を放っているように思え
た。臭いが鼻につく。

蘇芳は顔をしかめた。

「御二人さん。気を付けなよ。奴らは悪魔なんだ……同情も憐れみ
も、奴らには期待しちゃいけないよ……」

周はヒヒツと口をひくつかせると、それきりこと切れたように力

クンツと頭を垂れて黙り込んだ。
びたりと。

一言もしゃべらない。

ここは大陸。

国家ジェラベルン。

ここに、“人権”は存在しない。

国境を越えると、カミールという村がある。人口はそれほど多くなく、慢性的に国力の弱いアルトリアでは、よくある閑散とした村だ。

「は……、腹減った……！」

王国軍から逃れるため、徹夜で歩き通したロジャーたちは、満足に食事も摂っていない。難民の疲労は、ピークに達していた。

「うう……、俺も腹減り過ぎて、気分悪いぜ……！」

腹をさすりながら、ルシオが言う。ベリナスもまた、疲れた顔をしていた。

「すまない……。私に、もう少し力があれば……」

「……ベリナス様……」

二千人の難民が困窮に喘ぐのを、ベリナスは齒痒い思いで見守る

しかなかった。難民を含め、阿沙加にまでも辛い生活を強いなくてはならない。ベリナスが倉から持ってきた日用品や食料は、王国軍から逃走を始めた一日目でほとんど底をついてしまったのだ。

そして、
ようやくの思いで辿り着いたカミール村にも、二千人を擁護するほどの財力はなかった。

「もうこんな生活、嫌……。嫌よ……！」

歩き通しの日々に疲れ、地面に座り込んで泣き出す女性がいた。クレアの場合は、体力、精神力共に消耗して、なにも喋れなかった。ロジャーと元気に遊びまわっていた子供たちでさえ、大人しくなっている。

ドルチエや他の高齢者たちに関しては、息も絶え絶えだ。

一言で言えば、嫌な空気。

ルシオとロジャーは弱った顔で空を見上げ、口を歪めた。

「……………兄ちゃん……………！」

「アレンさん……………！！！」

半ば、愚痴っぽく。そのときだった。

キュピイイイイイ……………、

妙な『音』が、遠くから聞こえた。

『音』というより、『鳴き声』というよつな。不思議な音が。

「んあ？」

「へ？」

ロジャーとルシオは、互いの顔を見合わせた。
と。

ぶあつ！

風が吹く。クレアやベリナス、カミール村の前で蹲ひづっている難民の頬を撫でるように、優しい風が。

その、風の中から

「待たせたな。二人とも」

淡い金髪をなびかせて、アレンが現れた。蒼穹のように澄んだ瞳。もう無理だ、と誰もが思う空気を払拭させる、自信に満ちた表情。彼は、奇妙な動物に乗っていた。

「兄ちゃん！？」

「アレンさんっ！！」

ロジャーとルシオが発作的に立ち上がる。奇妙な動物から降りたアレンは、二人に笑顔を向けた。

「遅くなって申し訳ない。ここまで、皆を護ってくれてありがとう」

「お安い御用ですよ！」

「オイラを誰だと思ってんじゃん？ 兄ちゃんっ！」

得意げに胸を反らせる二人。先ほどまでの疲れも吹っ飛んだ様子で、彼らはにんまりと笑い返した。

「そうか。そうだな」

静かに頷くアレンに、ロジャーとルシオは首を傾げながら、アレンが乗ってきた緑色の動物を見上げた。

「兄ちゃん、それなんだ？」

ロジャーが問うと、“緑の動物”はつぶらな瞳をぱちぱちと瞬かせて、ロジャーを真似るように首を傾げた。

「キュピ？」

愛らしい仕草だ。

“動物”は、草原の緑に似た肌をしている。ロジャーが棘だらけの尻尾を触ってみると、プニプニして、実に感触が良かった。

「この子は、シルムという風の精霊だ」

「シルム？」

ロジャーは首を傾げる。

シルムと呼ばれた精霊は、ニメートル近い巨体の、ずんぐりむっくりな一角獣だった。二本脚で立ち、短い手足とピンと立った長い耳を持っている。鼻の頭に角があるが、先端は丸く、殺傷力はない。尻尾の先にある釘バットのような棘も同様で、ゴムボール以上の弾力をもって、触るとプニプニと棘が曲がった。

ルシオは要を得ない顔で、アレンを見上げた。

「なあ、アレンさん。アレンさんは今までどこに？」

「少し、待ってくれ」

ルシオを制すと、アレンは視線をベリナス、クレアに向けた。

「貴方々に、話があります」

「……アレン君……」

ベリナスはアレンを見上げ、低く呻いた。不思議とその目に、力が宿る。

クレアは惚けた様子でつぶやいた。

「アンタ……逃げたんじゃなかったんだ……」

ルシオと、バレンと、ラスティと。

三人の遺品を授けたきり、どこかに行った男。切迫した状況の中で、クレアは彼と出会ったことさえ忘れていた。

ルシオを喪った悲しみで。

アレンはなにも言わず、ただ頷くと、クレアとベリナス、そしてジエラベルンの貧民たちに問いかけた。

「自由のために、戦う覚悟はありますか？」

それは唐突な話だった。困窮に喘ぐ貧民たちが、思わず互いの顔を見合わせる。

「自由？」

「戦う、覚悟？」

不思議そうな声が湧く。クレアも首を傾げた。

「どづいつ意味……？」

「このまま難民として他の場所に移っても、貴方々を受け入れる国は恐らくない。ならば自らの手で、自らの場所を作るしかない。自らの“国”を変えるしか」

アレンの言葉に、ベリナスが息を呑んだ。

「っ！ それは……！ ……我々に、革命を起こせというのだった？」

「革命？」

クレアは茫然と、アレンとベリナスを見た。人々の視線がアレンに集まる。アレンは、確かに頷いた。

「ええ。貴方々にその気があるなら、俺は貴方々の力になる」

「アイツらに勝つために……？」

アレンは頷く。クレアは俯いた。

（アイツらに勝つために……）

慣れ親しんだ街を、バレンを、ラスティを　そして、ルシオを

奪った王国軍。そして、逃げ延びた自分たちの命までもを奪おうとした、ジェラベルンという“国”。

(それを、変えるために……)

ゆらりと、クレアの瞳が動いた。アレンを見上げる。

「絶対に、勝てるって言うの……?」

「いえ。この世に絶対といえるものは多くない。だが、貴方々が革命を望み、覚悟を決めるならやり遂げる自信はある。それだけの話です」

「王国軍に……勝てるだって?」

「私たちが、本当に……?」

人々が見開いた眼をアレンに向ける。アレンは彼らの目を一つ一つ、見返した。

「勿論、そのために背負う危険リスクもあります。革命で命を落とす者もいる。人を、国王軍とはいえ人間を手にかける。それで悪夢にうなされる者もいるでしょう。それでも、国王軍と戦えますか? 自由を得るために」

「アイツらに……!」

クレアはつぶやいて、握った拳に視線を落とした。

憎くて、齒痒はくて、悔しくて。

この想いの捌け口が、ようやく見つけたような気がした。一も

「二もない。ルシオの、バレンやラスティの仇が討てる。クレアは頷いた。」

「やる！ 私、絶対にアイツらを許せないから！」

「そのために、失う覚悟もありますか？」

問うアレンを、クレアは鼻で笑った。

「笑わせないですよ！ …… もう失ってる。ルシオも、バレンやラスティも。住んでた家も。大体、どこへ逃げたって同じなんでしょ？ だったら、迷う必要なんかないじゃない！」

「人を傷つけることになっても？」

「当たり前。もう傷つけられてる。それとも、私たちは堪えなきやダメだって？ 散々アイツらに踏みにじられて、傷つけられて。それでも堪えろってアンタは言うの！？」

「いや。ただ、自分の我を通すためには、貴方も、国王軍と同じように相手を踏みつけなければならぬ。相手の血で、自分の居場所を作る。それが戦争だ。」

貴方は国王軍に自分が味わった苦しみを与えて満足するかも知れない。だがそれは、自分も国王軍と同じ存在になるということだ。自分を貶める。それが“失う”ということ。そして、それを承知の上で戦う。これが覚悟。

戦えますか？ 自分のために」

アレンの瞳を見据えて、クレアは黙った。

この男は『戦え』という。自分たちの居場所を手に入れるために。

だが、一方では『戦えるか』と問う。国王軍と同じ存在になつてまでと。

「なにが、言いたいのか……。矛盾してるじゃない、アンタの話……！」

悔しいのだ。自分の生活を、生き死にを、勝手に決められたことが。街ごと焼き払うと、そんな決断を下した王国軍ジェラベルンが。クレアは、目に涙が溜まってくるのを感じた。

「戦つて、やるわよっ！……どうせ失うモノなんか無いっ！もう、ルシオだつていないんだから……！」

熱い涙が、頬を滑り落ちる。アレンは哀しげに目を細めてベリナスに視線を向けた。洗面のベリナスは、苦しげな眼差しをアレンに向けている。

ベリナスは頭をふった。

「私は、革命には賛同できない。……陛下に、剣を向けるなど……！」

「ベリナス様……」

阿沙加が心配そうにベリナスを見つめる。不安な彼女の瞳は、訴えかけるようにアレンに向けられた。

「貴方は、そう仰ると思っていました」

アレンは微笑う。ベリナスを、じっと見据えて。

「……………」

「だが、だからこそ、貴方にも来ていただきたい。ジェラベルンのために」

「どういう意味だね…………？」

問うベリナスに、アレンは逆に問い返した。

「ベリナスさん。貴方はどうして阿沙加を 奴隷身分の女性を、妻にしようとしたのですか？」

「！」

クレアは目を丸くした。それは、自分もベリナスを見て思ったことだ。貴族が それも衛士長ほどの身分を持った男が、なぜ奴隷などを妻に迎えようとしたのかと。

しかもそれを、アレンのような上流階級の人間が聞くとは思わなかった。服装はみずばらしいが、彼の立ち居振る舞いは貴族のものだ。

クレアは意外そうに、アレンとベリナスを見た。ベリナスの眉間のしわが、更に深くなる。

「私は………… 阿沙加を、彼女を愛している。奴隷ではなく、一人の女性として」

「！！！？」

ざわっ！

難民の間で、ざわめきが起こった。ジェラベルンの身分制度は、他国と比肩しても類を見ない厳しい隔たりを作っている。貴族は貴族、平民は平民と。自分より少しでも身分の高い者と結ばれることが、ジェラベルンでのステイタスだ。

奴隷を囲う貴族もいるが、ほとんど全てが、良くて小姓扱いをする。

貧民も貧民なりに、奴隷よりは身分の高い者としての自覚があった。その奴隷と、貴族が『愛し合う』など 『妻を迎える』など、彼らでさえ考えもしなかつたことだ。

貧民の視線がベリナスに集う。アレンは小さく頷いた。

「だからこそ、貴方は必要だ。ここにいる人たちが革命に成功しても、貴族と貧民の立場が逆転するだけでは意味がない。貴方のように、人を身分ではなく、『一人の人間』として見られる存在がいなければ、国は変わらない。そんな人を容認できる そんな人たちが剣を取る、集団でなければ」

アレンの視線が、クレアと、難民たちを見る。クレアの顔が歪んだ。

「ちょっと待ちなよ……！ それじゃ、アンタはアイツらを許せつての？ さんざん好き放題にされた揚句に、革命が成功したら全て水に流せって？ 平等に人を見るって、そう言うことよね！？」

「そうだ。現実的には難しいだろうが、その努力はしてもらおう。そうでなければ、なにも変わらない。俺が言った自由は、『人を虐げてもいい自由』じゃない。『人として生きる自由』だ」

「……人として、いきる“じゆう”？」

ロジャーの傍にいた子供が、不思議そうに首を傾げる。アレンは頷いた。

「戦いには理由が必要だ。やられたことをやり返すだけでは、ただの噛み合いであり、『戦い』とは呼ばない。自分の中に、国王軍と同じ様に相手を傷つけることになっても、曲がらない誇りが、確固たる信念が必要なんだ。俺たちは、『明日』を迎えるために戦っているのだと」

「……………」

アレンの視線が、ベリナスを向いた。

「ベリナスさん。確かに、現時点で貴方は阿沙加と共にいる。ならばジェラベルンを離れ、二人で隠遁生活を送ることは可能でしょう。けれど、それは本当に貴方の目指したものですか？ 阿沙加と結ばれる決意を、ジェラベルンの人たちに認めてもらいたいから、貴方は公爵家に取り込んだんじゃないんですか？」

「……………」

「それに。なにも知らずにこの国を訪れた倭人は、阿沙加以上に過酷な人生を強いられているハズだ。この2000人が無事に逃げさせたとして、また別の人間が貧民に貶められ、貴族の良い様に使われる。俺はそれを『運命』として受け入れられない。阿沙加は『一人の女性』で奴隷は『花』だと、割り切るつもりもない」

阿沙加の顔が上がった。彼女は唇を引き結ぶ。胸許で組んだ指が、固く握りしめられた。

「どうして……」

つばやく阿沙加に視線が集まる。引つ込み思案な彼女は、いつもなら尻ごむところだが、周囲の目も気にせず、アレンを見上げた。

「どうして倭人のことまで、気にかけてくださるのですか？ ……
貴方は、大陸の方なのに」

以前とは、少し違う問いだ。前は、こう訊いた。

どうして、奴隷の身分の自分に良くしてくれるのかと。

彼はこう答えた。

ベリナスも阿沙加も、一生懸命だから疲れているように見え
たと。

だから、手を貸さずにはいらなかったのだと。

この理由では、奴隷である倭人全体を助けようとする説明にはな
らない。阿沙加はそう思ったのだ。

アレンはただ小さく、寂しそうに笑った。

「自分の意志を、生活を踏みにじられれば、誰だって傷つく。 ……
その悔しさを、憎しみを、俺も知っている。だから」

倭人や貧民を、捨て置くことは出来ない。

言外に語る蒼^{アレン}の瞳を見つめて、阿沙加は涙が溜まるのを感じた。

(……………ありがとう……………！)

嗚咽が洩れる。誰かに　それも大陸の人間に、そんなことを言ってももらえる日がくるとは、夢にも思わなかった。

倭を　故郷を、ここまで思ってくれる人に出会えるなど。

（ありがとうございます……アレン様……！）

ラッセンで同郷の人間とすれ違った際に、阿沙加は顔を俯けていた。

片や襷褌切れ一枚の寒々しい奴隷。片や小間使いとはいえ、メイド服に身を包んだ阿沙加。

申し訳ない気持ちで、彼女は倭人を見ることが出来なかったのだ。まして、そんな自分が、新たな奴隷を選ぶなど。

誰にも　ベリナスでさえ、理解してくれないと思っていた。それを、仕方がないとも思っていた。

それが『ジエラベルン』なのだから。

「意志を……、生活を踏みにじられてる……。奴隷も……」

クレアは何気なく阿沙加を見た。突如として泣きだした、頼りがいのない少女を。

そして一つ。妙に納得してしまった。

（そっか……。^{アタシら}貧民^{アタシら}であの扱いなんだから、奴隷なんて……）

そう思うと、焦げた街の臭いが鼻を突いた気がして、クレアは顔をしかめた。

「……………」

クレアはアレンを見上げる。不思議と、今は彼を、貴族の男とは思えなかった。

(アイツらとは、違う……)

確信できた。今は、断固としてそう言える。

クレアはキュツと唇を引き締めた。

変えるのだと。

この男は言う。

変えるために、『決意』と『覚悟』を持つのだと。

クレアは拳を握った。

「いいよ。アンタの話、乗ってあげる。……アンタについてく。ルシオの仇を取るって、その想いは拭えないけど……婆ちゃんたちのために剣を取るって、そう誓う」

ざわっ！

難民たちの間にざわめきが起こる。だがクレアは、他人の動向など歯牙にもかけなかった。アレンが頷く。穏やかに。

「お、俺だつてやるぞ！」

そのときだった。

難民の中から、青年が立ち上がる。それも一人ではなく数人。友人同士で相談したのか、皆、同じ年頃の青年たちだった。

「俺も！」

「俺も！」

「私も……！」

その声に同調するように、難民たちが立ち上がっていく。

「少なくともさ。そのチビっこいのは、俺たちを助けてくれたしな
！」

「国王軍に、目にももの見せてやろうぜ！」

「革命、か。考えもしなかったよな……俺たちが、なんて」

「ロジャーお兄ちゃんたちも行くんでしょ？じゃあ、僕も！」

「あたしも！」

「僕も僕も！」

「待てよ！ 皆……！」

化学反応を起こしたように、急激に賛同する人たちの中で、ある男が『待った』をかけた。バレンとラスティの訃報を持ってきた、クレアと同じ界隈の男だ。

クレアが腰に手を据える。

「なによ？」

「革命って……、要は国王軍と戦うってことだろ！？　つまり正規の軍隊と！　どこにそんな余裕があるってんだよ！？　俺たちには今、食う飯すらないんだぞっ！」

「っ！」

ピンっと思い出したように、クレアがアレンを見る。と、難民たちの何干という視線が、アレンに集まった。皆、不安そうだ。

アレンは小さく笑った。

「その点については問題ない。貴方々が戦うというのなら、アルトリアと話がついている」

そう言って、アレンはポンッと乗ってきた精霊の背を叩いた。風の精霊『シルム』が、キュピッ、と鳴きながら首を縦にふってみせる。

「んあ？　どうすんだ？　兄ちゃん？？」

「まあ、見ている」

シルムが天を仰ぐ。と。

キュピイイイイ……！！

シルムが大きく鳴いた。天に響くように、高く、愛らしい声音で。

その、瞬間。

……ドドドドドドドドドド！

「お？ お？ おおおおっ！？」

ロジャーは目を丸くして、何度も瞬いた。
風が吹く。

シルムが鳴いた天の彼方から、数十体 数百体近いシルムの群れが駆けてくる。一体一体は愛らしい外観とはいえ、熊ほどの大きさのある精霊だ。

バッファローの群れの如く、圧巻だった。

ドドドドドドド……ッ！！

「おおおおお！！？！？」

ロジャーが目丸くする。シルムの群れは眼前まで駆けてくると、隊列を成すように、ぴたりと止まった。

「キュピピッ！」

アレンの傍にいるシルムが鳴く。その頭を撫でてやりながら、アレンは頷いた。難民を見やる。

「皆、これに乗ってくれ。アルトリアまで行こう」

言ったアレンは、颯爽とシルムに跨った。

クレアたちは不安げに顔を見合わせる。緑色の生物を見ると、シルムも不思議そうに首を傾げた。

「キュピ？」

乗らないの？ とでも言いたげに、シルムが鳴く。

クレアはごくりと固唾を呑むと、意を決してシルムに跨った。

瞬間。

しゅるんっ！！

一つ、風が吹いた直後。

そこは、小高い丘の上にある白い居城、アルトリア城の前だった。

「なっ！？」

クレアたちが目を見開く。

今まで、地道にジェラベルンからラッセン、カミールと難民生活を送ってきた人々は、一瞬で起きた奇跡に、狐にでもつままれたように、互いの顔を見合わせた。

4 ジェラベルンの戦い（前編） 絶望と希望 十（後書き）

> i 1 6 6 6 7 — 1 5 0 0 <

【シルム】

惑星グローランドに生息する風の精霊。

あらゆる回復魔法&テレポートを始めとした移動魔法の祖となっている存在で、その癒し効果は絶大。

シルムに抱きしめられて、安眠しない者はいないとまで言われている。

争いが嫌い。

1 ジェラベルンの戦い（間章） 貧民達の耕作

貧民の居ないジェラベルンは、普段と変わりなかった。少なくとも、貴族や平民たちにとつて。貧民とは、蔑む以外に価値はないのだ。

郊外の高級住宅街は、ジェラベルン領主、ラウラ・ノーウェル侯爵を始めとして、『ノーウェル』と名のつく貴族が一同に会す施政者の街だ。

上院議員、アーノルド・ノーウェルもその内の一人だった。身分としてはノーウェル当主、ラウラよりも位が高い『公爵』が、地方領主にならなかつたのには理由がある。

政治とは、ただ表に出ればいいというわけではない。最も安全にかつ己の地位を高めるのであれば、“傀儡”を用意することが重要なのだ。石橋を叩いて渡るように、様々な方面に手を回して。

アーノルド・ノーウェルという男は、人間を信じない。用心深く“敵”に目を光らせる。

高級住宅街の自宅で、彼は不満げに“その男”を睨み据えた。東方將軍、『黒刃のアドニス』を。

「報告は聞いている。……なんでもラッセンに逃げ込んだ貧民を、ベリナス同様取り逃したそうだな？ 追撃は行ったが、それもふり切られたとか」

公爵は糸目を更に細め、アドニスを見据える。給仕がもてなし用に持ってきた紅茶を、アドニスは遠慮なく飲み干した。酒でも一杯やるように、一気に中身を空にする。アドニスは、公爵の向かいに

あるソファに横柄に腰かけたまま、失笑した。

「さすが。“番犬”のノーウェル公は、噂どりの地獄耳だな。……だが、邪魔者がいなくなつて、せいせいしてるのはアンタの方だろ？」

不遜にもそんなことを言ってくるアドニスに、アーノルド・ノーウェルは鼻筋に深い皺を刻んだ。

「フンツ、口の減らぬ奴め！ ……だが、まあ良い。異端者がいなくなつたとあれば、このジエラベルンにも平和が訪れるというもの。しかし、この失態は高くつくぞ。アドニスよ」

粘着的な皮肉を交えて、公爵は会話を打ち切った。

ベリナスが招かれたパーティ会場とは別の場所。

ここは、ジエラベルン市民の血税で作り上げた、傲慢と強欲の牙城……。

「アンタ、アルトリア王と知り合いなの？」

クレアに問われ、アレンは後ろをふり返った。

アルトリア城で食事を振舞われたクレアたちは、当面の日用品と食糧を王から授かったのだ。数時間前では考えられない荷車を引きながら、街の外で待っている仲間の所に向かっている。

アレンは荷車を引きながら、頷いた。

「ああ。以前一騒動あったときに、な」

「一騒動？」

アレンは答えなかった。足早な彼に続いていると、ものの数分で街を出た。待機していた風の妖精・シルムに跨り、アレンは皆をアルトリア北東部に導いていく。

目的地は、アルトリアの背を抱くようにして聳える、アルトリア山岳遺跡だった。この土地周辺の権利を、アルトリア王が譲ってくれたのだ。物珍しそうに遺跡を眺める皆を尻目に、アレンは言った。

「それじゃ、始めよう」

「始める？」

「ああ」

要を得ないクレアを置いて、アレンは山岳遺跡に向き直ると、右手を掲げた。前人未到の山岳遺跡に、入口はない。

そこで。

アレンは意識を集中する。

彼が思い描くのは、レザード・ヴァレスの塔。

その床に刻まれた『移送方陣』。

アレンの右手に嵌った、アルスイーパー蒼穹の指輪が輝く。

「……………」

スツと目を開けたアレンは、足許近くに落ちた小石を拾った。茂みに行き、魔術方陣を書き込む。

レザードの塔にあったものと同じ、『移送方陣』を。
アレンは一つ頷くと、クレアたちに少し待て、と言った。

「先に、ロジャーたちと遺跡なかを見てくる。今夜は雨が降りそうだ。
出来るだけ、急いで戻る」

言うアレンに、クレアは頷いた。

同刻、アルトリア城。

先ほどまで賑わっていた食卓に座り込んで、アルトリア国王は特徴的なちよび髭を最大限に尖らせた。

「ああ〜ああ〜！ 水臭いのう………！！」

食卓の椅子に身体を預けて、アルトリア王は憤然とぼやく。

今夜はせつかく、久しぶりに話が出来ると思った。せつかく、自アル分の改革状況を披露する場だったというのに。

豪華な服から、一転して質素な礼服をまとったアルトリア王は、数分前まである男が座っていた席を不満そうに見据えた。近頃の王は、より多くの人間と言葉を交わすため、騎士団と一緒に食事を摂ることも多い。

そんな彼が、今日は城の皆と食べる時間を惜しんでやってきたというのに。。。

「あのように水ばらしい連中に飯を食わせたなら、さつさと出て行きおつて！ しかも、じゃ。あ奴らの面倒を見る場所が、あの山岳遺跡でいいじゃとあゝ？ 遺跡発掘人トレジャーハンターでも近づかぬわ！ あのたわけ者がっ！！」

「陛下、ここに居られたのですか」

誰もいない食卓で、国王が頬を膨らませていると、新アルトリア騎士団の団長に任命された若き騎士、ロウファが苦笑と共にやってきた。

アルトリア国王　ユクスキュル5世が、顔を上げる。憤然と、両腕を組んだ。

「ふんっ、当たり前じゃ！ しばらくこの場で怒りを吐かねば、余の納まりがつかぬわっ！ そなたもそうであろう、ロウファ？ 以前は断りなく出て行って、今度は城下の民より質素な食事えまで良いと言ったのじゃぞ！？ ジェラベルンの『難民』では、アルトリアが受け入れ難いだろうから、あの者たちは『傭兵』だと奴自身が言うた癖に！ 余の厚意を、最小限にしようというのじゃ！ あ奴は！！」

「陛下を思つてのことですよ。治安こそ良くなったものの、アルトリアの国勢が安定するには、まだまだ時間がかかりますし……。傭兵とはいえ、二千人もの人をいきなり城に招いたりしたら、兵や文官が驚くでしょう？ 実際、今はアレンさん知らない人も 少なくありません」

「奴がここに居たのは、たった二月前じゃぞ？ それを知らぬ者など、余に関係ないわ！」

むむ、と唸るユクスキュル5世に、ロウファは思案顔を作った。

「……陛下の仰りたいことも分かります。ですが、今は慎重が要される時期かと」

「ぐぬぬっ……！」

「それよりも。先ほどアレンさんに言われて手配した衣類や食器は、到底二千分人に達しない量でしたが……。一体、どうするつもりなんでしょうね？」

「奴のことじゃ。無策と言うことはあるまい。しかし、もう少し余を頼ってもよからう！ このユクスキュル5世を！」

少しばかり国策がうまく行って上機嫌な国王に、ロウファは思わず苦笑した。

「それにしても……我が国の次は、ジエラベルンの難民とは。彼は一体……、何者なのでしょうね？」

「……………うむ……………」

神妙に頷いたきり、ユクスキュル5世は口を閉ざした。愛娘がよく身に着けていた、赤いリボンを見据えて。

人を拒んでしばらく。厚い埃を被った遺跡は、不死者で溢れていた。

「おう！ 相変わらずゴロゴロしてんなあ」

笑いながら後頭部で指を組むロジャーに、ルシオは肩をすくめた。

「いくら倒してもこいつら、ずっと湧いてくるんだもんなあ……。
キリがねえよ」

「……なるほど」

溜息混じりのルシオの台詞に、アレンが頷く。と、彼はわずかに
掌を開き

パッ、

フラッシュカメラのように、右手が瞬いた。
瞬間。

ぎいいや。ああああ……！！

光が弾け、不死者が悲鳴を上げて消し飛ぶ。

「……おおー！」

「すっげえ……！！！」

ロジャーとルシオが、アレンを見上げる。アレンは、遺跡の奥を
見据えた。

「ルシオ、ロジャー。この遺跡は縦に長い 地下に深い構造にな

っているんだよな？」

「おう！ 以前は迷いまくったから、定かじゃねえけどな」

にんまりと笑うロジャーに、アレンは頷いた。目を閉じ、蒼穹の指輪・アルスイオーブに意識を集中する……。

スウ、

やがてイメージが像を結び、山岳遺跡の構造が浮き彫りになった。六階だ。

地上に二階、地下に三階の、五階層。

今日の寝床を確保するだけなれば、地上二階だけで十分事足りるが。

(窓がないな……。閉鎖的な環境は人を孤独にする。適当にあとで作るか)

遺跡の状態を確かめて、アレンは一つ頷いた。ともかく、まずは『掃除』が必要である。アレンは、ルシオとロジャーをふり返った。

「遺跡の外に移送方陣を書いた。レザードの塔にあったものと同じだ。そこから、中に入るよう皆に言ってくれ」

「おう！」

「了解、アレンさんっ！」

ルシオとロジャーが駆けていく。その背を見送って、アレンは遺跡を見据えた。一団は、

全員で二千人いる。アレンは一つ頷くと、遺跡の奥へ足を進めた。

.....

（私は、間違っていたのか……？）

アルトリア山岳遺跡に構えた自室のベッドに腰掛け、ベリナスは懊悩していた。

どうして倭人のことまで、気にかけてくださるのですか？

貴方は、大陸の方なのに。

震えながらつぶやいた阿沙加の言葉が胸に刺さる。ベリナスとて倭人や奴隷について、なにも思わなかった訳ではない。

だが。

三十七年の歳月をジェラベルンで過ごしたベリナスにとっては、理解し難い側面だった。ラッセン市民を認めさせれば、阿沙加との婚約は難しくはない。或いは、正式には無理でも、どのような中傷を受けようとも、二人一緒ならば苦ではないと思っていた。

恐らく、阿沙加も同じ気持ちであろうと。

だが。

自分の意志を、生活を踏みにじられれば、誰だって傷つく。

……その悔しさを、憎しみを、俺も知っている。だから

そう彼が口にしたときの、彼女の表情。阿沙加は感極まって泣いていた。まるで一番聞きかかった言葉を、聞いたかのように。

彼女にも故郷があるのだ。倭国を懐かしむことが。倭人を憂うことが。

（私はなぜ、それに気付いてやれなかったのだ……。あの食事のときも、阿沙加は泣いていたのに……）

ラッセン料理を、倭国風にアレンジした晚餐。それを食したときに、阿沙加は感動していた。思えば、あのときの彼女の心境を、自分は理解していなかったのかも知れない。誰よりも愛する女性であるというのに。

（……なぜ、彼にはそんなことが分かる？）

たった数刻を、ベリナスに比べれば寸陰にも満たないときを阿沙加と過ごしたただけだというのに。

気づけば、ベリナスは唇を噛みしめていた。胸の称号に手を当てる。今では全く無意味の、ラッセン衛士長の勲章。

「……陛下……」

数度しか会ったことのない、崇拜の象徴を思い浮かべる。経済が破綻したジェラベルンでは力を失いかけている国王を。それでも、貴族にとっては象徴である、王を。

（阿沙加か、ジェラベルン国王……。どちらかを選ぶときが来たと言っことなのか……。しかし、それはあまりにも……！）

懊悩に目を細める。と。野太い掛け声がして、ベリナスは遺跡の窓から外を窺った。

「^{くわ}鍬と剣では、使う筋肉が似ているため体の基礎を作るのに効果的だ。なるべく体の正中を通るよう意識して鍬をふってくれ。あまり

深く考えなくていい。ともかく、畑を耕すときは注意して欲しい」

「「「おう！」「」」

難民になったジェラベルン人たちが、さっそく鋤を手に畑を耕している。革命軍を作るための訓練のようだが、正規軍と渡り合うには何ヶ月もの時間が必要になるだろう。こうして遺跡に仮の住まいを造ったが最後、“軍”になるころには この遺跡で暮らそうと言い出す輩も出てくるハズだ。

一心不乱に鋤をふる男たちを見据えて、ベリナスは目を細めた。

(私も……なにも持たずに生まれたなら……)

この葛藤を、懊悩を送ることなく、人生を終えられただろうか。

せめて阿沙加が、ジェラベルンの人間であったなら。 。
そこまで考えて、ベリナスはハツと目を見開いた。ひげの整った口許に手をやる。考えてはいけないことを口走ったようで、気分が暗澹とした。

「なあなあ！ 兄ちゃん！！ 一番でっかい畑を耕した奴が、晩飯、一番食えるようにしようぜ」

「ん？ ……そうだな。いい考えだ」

ぼん、と手を叩くアレンを、貧民の青年が尋ねた。

「分配つつたつて、しょぼい飯だろ？ アルトリアの王様は、畑耕す道具しかくれなかったんだから」

「食器と服ももらったが？」

「『『食えねえだろ!!』』」

「まあ待て。心配することはない」

声を揃える男たちに、アレンは勝ち誇ったように笑った。ポケットから袋を取り出し、全員で一列ずつ耕した小さな畑に、袋の中身植物の種子を撒く。

「種……?」

アレンが撒いている物を確認して、青年は首を傾げた。

「そんなもの、どこで手に入れたんだ?」

「遺跡の中だ。ここに住んでるモンスターを倒したときに拾った。人に襲いかかってくるタイプだから、あのモンスターは草食じゃないと思うんだが……。シルム」

「キュピッ」

アレンが呼ぶと、風の精霊・シルムがどこからともなく現れ、嬉しそうに頷いた。愛らしい円らかな瞳をぱちぱちと瞬かせながら、シルムは小さな畑の前に立つ。と、

「キュ〜ピピッ」

キュ〜ピピッ

キュ〜ピ」

歌いながら畑の周りをぐるりと踊った。すると、ポンポンポンッ、とポップコーンが弾けるような音を立てて、畑にまいた種が、芽を出した。

「おお！ スゲエー！！」

「やるじえねえか！ シルム！」

ロジャーとルシオが目を輝かせる。シルムは得意げに、きゅぴつと鳴き、更に踊る。いつの間にか、シルムの踊りの中にロジャーやルシオ、そしてジェラベルンの子供たちが加わっていた。

「きゅ〜ぴぴっ！ きゅ〜ぴぴっ！ きゅ〜ぴっ！」

シルムを真似て、うんとしゃがみこんだ体勢から、バツと立ち上がる。すると力んだ分に呼応して、芽がポポポポンツと更に成長した。

「おお〜！！」

子供たちの目が輝く。我先にと呪文のように唱える子供たちの後ろで、シルムが子供とタイミングに合わせられるよう、子供たちをじっと見つめている。植物の成長を促進しているのが自分たちだと思い込んだ子供たちが、また必死でシルムの踊りを披露する。それを見つめる大人たちが、和んだ笑い声をあげた。

「ハハハッ！ こりや凄えや！！」

「よっしゃ！ じゃ、俺もいっちょ張り切って耕すかっ！」

「うう〜し！ 競争だ！！ こいつあ、晩飯！ 超期待できるぜえ〜！！」

嬉々として作業に励む男たちに微笑い、アレンはふと、窓からこちらを見つめているベリナスをふり返った。

「晩飯。下手をすると、ベリナスさんの分もなくなるかもしれませんよ」

血相を変えた男たちを一瞥して、アレンが微笑う。ベリナスは苦笑した。

「分かった……。私も手伝おう」

今を悶々と過ごすよりは。そんな思いが胸を駆け抜けて、ベリナスは自嘲するように嘆息した。

耕作。

これが、思った以上に重労働だった。

「はぁ……！ はぁ……！ ……ふう……」

日没も間近に迫ったころ。いつしか難民の男たちと一体になってベリナスは作業に勤しんでいた。額に浮いた汗を拭って、鍬を端に置く。すると、難民たちがニツと笑った。

「貴族だから大したことねえだろうって思ってたけど、結構やるじやねえか！ 衛士長さん！」

「ハハッ！ 私はもう、“元”衛士長に過ぎないさ……。貴族です

らない」

自嘲気味につぶやいて、力尽きたように草原の上にぺたりと寝そべるベリナス。男たちも体力尽きて、同じように草原の上にへばりついていた。

「ハハツ！ そりやそうだ！ 俺たちだって……とつ！ 俺たちや元々、ジエラベルン人扱いだったかどうかも微妙だけどな！」

「そんなことを、よくもまあ簡単に……」

ベリナスが苦笑すると、別の男がニヤリと笑って話に割り込んできた。

「そりやそうだよ！ 衛士長さんっ！！ 俺たちやどっかで職を探そうにも、服装だけで貧民ってバレて門前払い！ 出来ることといや、スリやら汚物処理やら裏仕事やら、犯罪紛いのことばっかで日銭を稼ぐぐらいさ！」

「それも一食食えるかどうかの金でなあ〜！」

「おつおつー！」

頷きながら、男たちは晴れやかな表情で自分たちが耕した畑を見る。子供とシルムたちによって、色とりどりの野菜を実らせた畑を。男の一人が、感極まったように鼻をすすった。

「へへっ！ それがまさか、な……。俺……こんな充実した日って、初めてだよ……」

「ハハッ！ そりゃ貧相な毎日だったんだな〜！」

別の男が腹から笑う。鼻をすすった男が尋ねた。

「てことは、お前はそうでもないってことかい？」

「ヒヒヒッ……残念ながら。俺もだ」

「俺も。恥ずかしくことに」

「すつげえ疲れたけどな……。なんかこう、形に残るのが良いって言うか……」

「お！ 分かる！ ここ俺のっ！ みたいな、な！！！」

言い合っているうちに、男たちの腹の中から自然と笑い声が洩れる。と同時に、

ぎゅるるるる……

腹の虫が、空腹を訴えて一斉に鳴き始めた。

「~~~~腹減った~~~~……！！」「~~~~」

草原にへばりついたまま、微動だに出来ない男たちが間の抜けた声を発する。ベリナスは思わず笑った。

「ハハハッ！ 正直なものだ」

「衛士長さんは腹減らねえのかよ？」

「まさか。……腹ぺこで一步も動けんよ」

「だよな!？」

ニツと男たちが笑う。そうしていると、畑で採れた野菜を洗いに行っていたアレンが、トマトを籠一杯に積んで帰ってきた。

「皆。夕飯、出来たそうぞ」

言われて、注意深く匂いを嗅いでみると、遺跡の中から確かに食事の香りがする。男たちの目が輝いた。

「……………よっしゃあ〜!」「……」

死力を尽くして立ち上がる。なぜかベリナスも、一步も動けないハズが立ち上がった。いた。

「それと。今日頑張った分だ」

トマトを投げ渡され、男たちは必死で齧り付いた。

「うっめえええええええ!！」

「なんじゃこりゃあ!?!?!?!?!?!」

「おいおい! こんなもんが夕飯で出てくのかよ!?!?!」

「アルトリアで食ったモンより、断然うめえじゃん!！」

目を輝かせる男たちに、アレンは誇らしげに言った。

「当然だ。皆で作った飯なんだからな」

遺跡の入口近くに据えられた食堂にも匹敵する大テーブルに、所狭しと並んだ食事の数々。それを貪り食うルシオ、ロジャーを始め子供たちに、ベリナスが男たちと共に混じったころ。

阿沙加が貧民の女性たちと楽しそうに談笑しながら、忙しそうにテーブルと厨房を歩き来していた。

今にして思えば、ベリナス自身がこうして心置きなく腹から笑えたのは、実に数年ぶりのことだった。

2 ジェラベルンの戦い（間章） シルメリアを迎えに

「ハアッ！」

クレアのロングソードが、レッサーヴァンパイアの胸を切り裂く。ほとんど筋力を持たないレッサーヴァンパイアは、斬られた衝撃で大きくのけ反り、奇声を上げて光の中に消えていった。びっ、と剣をふる。

不死者に血などないが、レッサーヴァンパイアを構成していた黒い霧が、ロングソードの剣先から滴るように飛び散った。

「ふう……。これで、粗方片付いたね？」

地下にもぐって数時間が経つ。クレアは、ともに行動している仲間をふり返った。

アルトリア山岳遺跡で暮らし始めて二週間。ベリナスやアレンから学んだ剣術で、クレアたちは山岳遺跡のモンスターを撃退することが出来るようになった。今、握っているロングソードも、戦いの中でモンスターから得た戦利品だ。最初は敬遠した中級モンスターのガストやドラゴンサーヴァントとも、今では互角以上に戦うことが出来る。

弦を確かめながら、金髪碧眼の大人しそうな女性 ミリティアが小さく笑った。

「ええ。近くに敵はいないようです。地上に戻りましょう」

「そうね」

頷いたクレアは、剣を鞘に納めて踵を返した。

外に出ると、川沿いに人集りが出来ていた。クレアは夕食の主材料となる獲物を肩に担いで、川の方に顔を出す。すると、ベリナスを始めとした他の面々が川にイカダを浮かべて、水上での実践稽古をしていた。水流のうねりに合わせて、イカダが上下する。が、練習を始めて一週間。今では、バランスを崩す者はほとんどいない。

「へえ。ロジャーたちも派手にやってるじゃない！」

イカダの上で一際威勢よく斧をふる少年を、クレアはからかうように笑った。アレンが連れている少年、ロジャーとルシオの実力は、ラッセンで嫌というほど知ったはずだが、実際に手を合わせてみると、そのでたらめさに舌を巻いた。

小さな体躯から繰り出される圧倒的攻撃の数々は、今日もクレアの同志たちをイカダから川にふり落としている。その様を見て、クレアは笑う。すると、身体の動きに合わせて、腰の剣が小さく鳴った。この重みにも随分と慣れたものだ。誰も剣帯を持ち合わせていないので、皆、木の皮で作ったベルトを代用して腰に巻いていた。

「あ、クレア！」

作業所で編み物をしていたサラが、クレアの顔を見つめるなり微笑んだ。亜麻色の髪を左右でおさげにした柔らかい雰囲気少女だ。傷の手当てや食事など、生活面でクレアたちのサポートくれる、重要な補助要員である。

「地下はもういいの？」

尋ねるサラに、クレアは頷いた。

「ドラゴンサーヴァント三体と、ギボン二体。肉料理には充分だろ？」

「うそ……！ たった五人で、そんなに倒せたの！？」

「まあね。私たちがその気になれば、ちよろいもんよ。ね、ミリティア？」

「ふふ。そうね」

頷くミリティアを背に、クレアは胸を張る。周囲を見渡して、クレアは首を傾げた。

「……あれ？ ルシオが見当たらないわね？」

「ああ。ルシオなら、子供たちを連れて山菜を取りに行ってくれたわ。 って、あの子も子どもだけだね」

「ハハッ、違うない」

談笑していると、三頭の騎馬が駆けてきた。先頭の白い騎馬に乗った金髪の青年が、クレアを目にするなり、馬から降りる。

「失礼。こちらにアレンさんはいらっしやいますか？」

銀の甲冑に身を包んだ、美しい青年だった。クレアは目を丸くした。

「アンタ……確か……」

「アルトリア王国騎士団のロウファと申します。此度の件でアレンさんにお話があり、お取次ぎ願いたいのですが」

「残念だけど、アレンならいないよ。夕方出てって、明日の朝には戻るって言ってたけど……」

「外出ですか？」

問うロウファに、クレアは頷いた。

「あいつ、近々騒ぎを起こすって言ってたから、その準備じゃない？ 剣術の稽古だって、最近はベリナスやロジャーたちに任せっきりだしね」

「食事の面は、風の精霊様のおかげでもう心配ないものね」

クスリと笑うサラに、クレアは頭を掻いた。ロウファに向き直る。

「そういう訳で、あいつに用があるなら出直した方がいいよ」

「……そう、ですか……」

つぶやいたロウファは、じっと空の彼方を見やった。

ブラムス城。

夜にしか存在しない魔力の檻は、今、異様な熱気に包まれていた。

不死者の王を迎える玉座の間に、魔力の明かりに照らされた影が二つ。互いを牽制するように向かい合う。アレンの口許には、好戦的な笑み。口端からは、相手の凄まじさを物語るように、血が零れている。右手に嵌めた蒼石アルスネー・オープンの指輪が、主の歡喜に答えるように煌々と輝いた。

「行くぞっ！ ブラムスっっ！！」

「人間風情がっ！ 足掻いてみせよおお！！」

両者の拳に爆炎が宿る。共に炎の色は紅蓮。練度は同じだが、炎の大きさは不死者王が二回り大きい。圧倒的魔力。これが、“不死者王”たる器の所以だ。

限界まで高められた両者の“気”が、謁見の間の中央で激突する。

オオツツ！！

質量を持った熱が、部屋に爆風を巻き起こした。音と風がすべてを薙ぎ倒すように荒れ吹く。それを魔力障壁の中から見つめて、シーティアは困ったように頬を掻いた。

「ねえ、シルメリアさんはあゝ？」

買い物を待つ子供のように首を傾げて、シーティアは激戦を繰り広げる不死者王と青年に問いかける。答えたのは両者ではなく、彼女の肩にとまった妖精型の人工生命体ホームクルスだった。

「シルメリアさんを連れていくかどうかの力試しが、ただの殴り合いに成り果てて早半日。……まったく、これだから殿方は無作法でいけません」

「ん〜、やっぱりアレンにアルスイ・オーブって拙ますかったかなあ？
兼定ほどじゃないけど、自分の実力を出し切る方法を身に着け始
めちゃってるや」

「なにより、喧嘩っ早いのがいけませんね」

「丸半日だもんねえ〜……。あんな楽しそうな顔。弟アイツじゃ、まず考
えられない」

「シユワルゼ様との戦いを除いて、ですか？」

「……む」

途端に頬を膨らませるシーティアに、ピティはクスクスと笑った。

「しかし。さすがに飽きてきましたね。ここは一つ、私が收拾つけ
ちやいましょう」

「あれ？ “邪魔するな” って感じのアレンの結界、もう壊しちゃ
うの？」

「はい」

「ん。分かった」

そう言っつて、シーティアが魔力障壁に手をついた瞬間だった。立
ち込める煙の中で、そびえる影のうち一つが、がくりと片膝をつく。
アレンだった。

「ガハアツ!!」

同時、不死者王が血反吐を吐く。ブラムスの胸を深々と焼いた炎は、しかし、彼の膝を屈するには至らなかった。肩で息をしながら、ブラムスが笑う。

「見事」

膝をついた体勢で見上げるアレンも、笑った。

「流石は、不死者王!」

共に見つめ合い、高々と笑い声をあげる二人に、シーティアは首を傾げた。

「ありや。仲良くなっちゃった?」

「典型的な男臭です……むさ苦しい」

ピティが顔をしかめる。シーティアは不思議そうにブラムスとアレンを見、問いかけた。

「とりあえず、決着ってことでいい?」

「すまない。長らく待たせな。つい楽しくて」

ふり返ったアレンが、傷口を押さえながら立ちあがる。

「ふん。何百年と己が生に渴きを感じていたが、貴様との戦いこのように相手の生死を気にせず戦ったのは初めてだ。悪くない…

…。ヴァルキユリア以外で私と戦える者と、こつも立て続けに出会うことが出来るとは。地上も捨てたものではないようだな」

「俺と、シーティア以外にも誰かに合つたのですか？」

問うアレンに、ブラムスは失笑した。

「貴様に比べれば、ずいぶんと暗い目をした男だ。確か、ルシオという名の人間だった」

「！」

目を瞠るアレンに、ブラムスは片眉を上げた。

「知り合いか？」

「ええ。なるほど、彼が」

頷いたアレンは、口許に笑みが浮かべた。シーティアが問う。

「どうかした？」

「そう言えば、エインフェリアに選ばれていたな、と思つてな」

「そのルシオって人が？」

「ああ。そのときは戦わなかったが、この先、彼とアリュウゼが組むとなると厄介だ」

「ふん？ で、本音はその顔？」

「っと、すまない」

咳払いをしたアレンは、すつ、と好戦的な笑みを収めた。シート
イアが呆れたように溜息を吐き、アレンの肩に、ぽん、と上着を乗
せる。

「はい、コレ」

「？」

戦いに没頭するあまり、途中でアレンが脱ぎ捨てた上着だ。それ
をやっと思ひ出し、アレンは瞬いた。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

シートイアは踵を返すと、頭上の水晶を仰いだ。続くように、一
同も水晶を見上げる。深い眠りについた、シルメリアを。

アレンは上着に袖を通すと、居住まいを正した。

「始めよう」

アレンの切り出しに、シートイアが頷く。視線を横にやり、ブラ
ムスを見ると、両腕を組んだブラムスが無言で頷き返した。

アレンは目を閉じた。右手に嵌った蒼石アルスイ・オーブの指輪が淡く輝き、アレ
ンとシートイアの足許に巨大な魔術方陣が浮かび上がる。二人の魔
力に応えるように、水晶が淡く輝き始めた。

白い光球が、不死者王の謁見の間に浮かぶ。それは雪のように宙で舞い、パツと弾けた。羽毛と化した光が、ふわり、ふわりと魔術方陣に舞い落ちる。白と黒、双方の色を併せ持つ梟たかの羽根。かつてシルメリア・ヴァルキュリアの兜に刺さっていた、未来を象徴する羽根だ。

羽根は魔術方陣に触れると、水面に落ちたように波紋を広げ、

ちゃぼん

静かに水音を立てた。水晶が壮絶に光る。視界が白い光で埋め尽くされた。光の中から、ゆっくりと迫り出すシルメリア・ヴァルキュリアを隠すように。

半透明の 霊体として姿を見せたシルメリアに、ブラムスは息を呑んだ。

「……シルメリア……！」

シルメリアは一度だけ、ブラムスを見つめた。微笑みや、労いにかかる洒落た女神ではない。ただ不器用に、一瞥だけくれたシルメリアは、無表情の中にも慈愛を抱いた瞳をしていた。

シルメリアがアレンを見る。僅かに見えた慈愛の色は、消えていた。

アレンはシルメリアを見上げた。

「貴方が、ノルンの末妹。シルメリア……」

凜とした眼差しのシルメリアは、戦乙女だけあってレナスと雰囲気似ていた。シルメリアはアレンを見据え、頷く。

いかにも。私がシルメリア・ヴァルキュリア。……咎人よ、己

が欲のためにオーデインに弓引かんとする 愚か者よ

シルメリアの冷たい言葉に、アレンは瞬いた。ジツとこちらを見つめる人間に、シルメリアは続ける。

ヴァルハラはの道程は、お前が考えているより遙かに険しい。矮小なる我欲では、到底踏破出来ぬものと知りなさい

「……それでも。俺には行かねばならない理由がある。あの刀には俺の命を、全てを賭ける価値がある。だから、」

アレンは腕を下げたまま、拳を握り締めた。

「教えてくれ。ヴァルハラへの道を」

シルメリアは目を細めた。対峙する蒼の瞳は微塵も揺るがない。それは固い意志のようでもあり、他に耳を傾けない盲信のようでもあった。

「迷いを知らぬ蒼の瞳……。魂は高潔でも、お前の器は決して大きくない。けれど、仮の住まいとしてなら、受け入れましょう」

「どづい意味だ？」

アレンが瞬く。同時。シルメリアが眩く輝いた。光に視界を遮られる。目を開けると、シルメリアの姿は消えていた。

「……？」

アレンは首を傾げる。シーティアが眼を丸くして、こちらを見つ

めていた。

「どうした？」

（悪くないわね）

「!？」

不意に声が聞こえ、アレンは周囲を見渡した。シルメリアの声でしたのに、姿がない。

「?、???？」

アレンは要を得なかった。不思議そうに瞬くアレンを、ブラムスは一瞬、複雑そうに眉間にしわを寄せて見据えたあと。

「彼女を頼んだぞ」

そう言い残して、夜城とともに消えて行った。

「一体、なにが起こって」

「……女神様が、アレンの中に入っちゃった」

「は??」

ふり返るアレンに、シーティアが目を丸くして何度も瞬いていると。

（まだ状況を理解出来ないの？ ヴァルハラへの案内は、私が直接

行つといつことよ)

頭に直接響くシルメリアの声。アレンは自分自身を見下ろした。なんとなく、胸に手を当ててみる。

「まさか、俺（こゝろ）の中に？」

(そういうこと。しばらくの間、厄介になるわ)

言つと、シルメリアは意識の底へと沈んだ。

「お、おい！」

呼びかけるが、シルメリアは答えない。代わりに、アルスイ・オーブ蒼穹の指輪が答えた。

封印より目覚めし女神、今だ“魂”の力が安定せず。

(しばらく、休む必要があるってことか……?)

是。

よく分からないが、アレンは一つ頷いた。

「まあいい。急ぐか」

アレンは踵を返した。シーティアが問う。

「急ぐつて、まだなにかあるの？」

「ああ。野暮用がな」

「？」

首を傾げるシーティアに答える代り、アレンは瞬間移動テレポートの魔法陣を展開した。

神の玉座に坐したオーディンは、水鏡が映す地上ミッドガルドの光景に目を細めた。

「ほう。シルメリアを目覚めさせるとは、手間が省けたな」

酷薄に笑う。と、フレイが険しい表情で眉をひそめた。

「しかし、こつも立て続けに同じ人間が？」

言葉を切ったフレイは、オーディンを斬らんとした剛刀を忌々しげに睨んだ。刃をオーディンに向け、今なお玉座の前に突き刺さっている刀 兼定を。

オーディンは頬杖をつき、鼻を鳴らした。

「確かに、勇者エインフェリアの魂を集める上で、レナスを手こずらせてはいるよ
うだな。だが、神の前では人間など所詮瑣末な存在に過ぎぬ。案ず
るな、フレイ」

「なにか、手を打っているのをごさいますか？ オーディン様」

瞬くフレイに、オーディンは笑みで答えた。
ドラゴンオーブの不在を埋める者が地上に現れたというなら、さ
らなる混乱を呼べばいい。

人間の欲に、終わりはないのだから。

水鏡を見て嗤うオーディンに、フレイは頬を緩め、そ、と一礼し
た。

アレンが転移した先は、森の中だった。懐から、彼は“ある装置”
を取り出す。

シーティアが顔を上げた。

「あ、それって……」

「君の惑星にあるものだ」

肯定するアレンに、シーティアは物珍しそうに瞬いた。

「よく作れたわね」

「興味深い代物だったからな。試運転も済ませてある」

「ふん。……で、使ってみた感想は？」

こちらを窺うシーティアに、アレンはしばらく固まった。そ
して、困ったように眉をひそめる。

「怒られた」

「うぁ……。人がいる所で使っちゃったんだ……」

シーティアは眉をひそめると、アレンが仕込んだ装置を一瞥してから踵を返した。

「それじゃ、行きましょ」

「あぁ」

……

……

「やつほぐ。ロジャー、ルシオ」

「あ！……シ、シ、シ……シーティアおねいさまあゝ！！」

「げっ！？ 天然ばやばやの姉ちゃんっ！！」

「なにか言いました？ ルシオさん？」

シーティアの肩で浮いている妖精が、やたらニコニコしながら問いかけた。瞬間。アレンがその間に割って入る。ルシオを庇うように身構えたアレンは、半ばピティを睨みながら首をふった。

「待て。話せば分かる」

珍しく、弱気な交渉だ。ピティが不気味なほど可愛らしい笑みを

浮かべている隣で、ロジャーが身体をくねくねとよじらせながら問いかけた。

「それで。どうしてシーティアお姉様がここに？ オイラたちと冒険する気になっただじゃんか！？」

「ううん。……実はね。私、弟を探してるんだけど、なかなか見つからないの。だから“いつそ、こっちから暴れてやるう！”って思ってた」

「あ、暴れる？」

にこにここと笑うシーティアに、ルシオは顔色を失って後ずさった。脳裡を過る、いつぞやのフレンスブルグ。街に倒れてくるレザード・ヴァレスの塔を、跡形もなく消し去ったシーティアの絶技。“インフィニティ・ソウルストライク”という名の、野太い光線技。その威力を思い出して、ルシオは顔を引きつらせた。

ふり返ったシーティアが、にこりと笑う。悩殺的なまでに、可愛らしく。

「そ。私、その筋では火竜ファフニールの戦姫と呼ばれてたの。結構役に立つわよ」

力こぶを作るように細腕を叩くシーティアを、アレンは警戒した表情で制した。

「シーティア。今回は“人間同士”の戦いだ。くれぐれもやりすぎるな」

「それ、アレンには言われたくないわ」

ぷい、とそつぽを向くシーティアに、アレンは微妙な顔で押し黙った。

と。
ロジャーが忽然と震え出した。兼定によるアレンとの実践訓練仲間内では“地獄”と呼んでいる。の日々を思い出して、身体が勝手に反応したのである。

「どした？ バカダヌキ？」

ルシオは要をつかめず、不思議そうにロジャーを見た。

「フエ、イト……にい、ちゃんっ……デ、カ……ブツう……！」

かつての戦友を思い出しながら、壊れたように首をふるロジャー。そんな楽しそうな一行の様子に、クレアは取り残されたように微妙な顔をしていた。ふり返ったシーティアと、視線が合う。

「っ」

クレアは咄嗟にシーティアから視線を外すと、アレンを一瞥して、その場を去った。

「……クレア？」

アレンが異変に気付いて首を傾げる。と、不意にシーティアが、ぼん、と手を叩いた。

「どつした？」

問うと、シーティアは数秒、アレンを見据えて

「そういうことかな？ って」

「？」

一人納得したように頷くシーティアは、クレアが去っていった方角を見つめた。

.....

「アホネコオオオオ！！」

ロジャーは声を限りに叫んだ。

アルトリア山岳遺跡近傍の沢にて。

今日の昼食を調達すべく、ロジャーが川に釣り糸を垂らしていたときのことだ。川の岩壁に腰掛けたロジャーは、すぐ隣で、膝まで川に浸かっている少年を睨み据えた。いつもより影の濃い、彫深い面持ちで。

「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤツ！！」

ルシオは構わず、川面に向かって右手をふるっている。鋭いスナップだ。水中の魚が、次々と川べりに打ちあげられていく。水面に、激しい飛沫が上がった。

おかげで、ロジャーが釣り糸を垂らしている近辺に、魚の姿はな

い。
ルシオは五十匹ほど魚を陸に打ち上げた所で、ふう、と溜息を吐いた。額の汗を拭う。

「んだよ、バカダヌキ？ 騒ぐと魚が逃げちまうだろ」

ルシオは濡れた手をふって、水を払った。ロジャーと同じく釣り針を垂らしていた少年たちが、一斉にルシオに駆け寄る。

「ルシオ、スゴイ！！」

「これだけあれば、みんなでご飯食べられるよ！！」

「お手柄だ〜！」

「スゴイスゴイ！！」

「ハンツ！ あつたり前だろ。バカダヌキと一緒にすんなよ」

得意げに胸を張るルシオに、ロジャーは、くわっ、と目を見開いた。拳を握り締め、ロジャーは震える唇で唸る。

「……………な、なんか……………すつげえムカツクじゃんよ……………！！」

少し前までは、自分の方が多くの“子分”たちを引きつけていたはずだ。だが、子供の心は移ろいやすく、今ではルシオとロジャー。二つの派閥が日々男勝負を繰り広げる様になっていた。

……………

いつまで人間の相手をしているつもりなの、アレン。
貴方には、オーデインからオーブを取り返し、ミッドガルドを平定に導く使命があるはずよ。
そのためにも我々は一刻も早く、動かねばならない。

「……………」

アレンは顔を上げた。胸の奥から聞こえる、不思議な『声』。
その『声』の主に向かって、アレンは苦笑する。

「なるほど。分かっているつもりだったが、こういう感じか……………」

つぶやくと、内から聞こえる『声』が、更に大きくなった。意識の表層に近くなった、とても言うべきか。『声』は、少し声を荒げた。

『真剣に私の言うことを聞きなさい！ ミッドガルドは今、微妙な立場にある。神界が黄昏を迎える前に決着を着けなければ、ここだって無事では済まないのよ』

「ああ。分かっている。…………ただ、クレアたちの方が急を要している。アスガルドへ侵入する方法は明日でも探せるが、ジェラベルンは一日の遅れが命取りとなるからな」

『……………そう』

つぶやく『声』に、アレンも頷いた。

「分かって、っ！」

くれたか、と言いかけて、アレンは視界が暗くなるのを感じた。意識が、闇に落とされる。野菜を洗っていた自分の手が、まったく動かない。

同時。

身体に変化が起きた。

ばあああ……！

金の光が、アレンを包む。光は一層強い輝きを放つと、淡紫色の鎧を纏った戦乙女へと転身した。運命の三女神が末妹、シルメリア・ヴアルキュリアの姿へと。

金色の髪を腰まで伸ばした戦乙女は、鋭く周囲に視線を配ると、言った。

「貴方がやらないというのであれば、私がやる」

『待て、シルメリア』

シルメリアの胸の奥から、アレンの『声』が響く。が、シルメリアは構わなかった。

「ミッドガルドの国がどうなるうと、また新たな人間が新たな国が造るだけ。私たちが干渉する必要はない」

『だが。俺たちの一生は、今この瞬間にしか存在しない』

「貴方は自分のエゴのために、次の世代の“このとき”まで奪うつもり？ オーディンと戦うということは、世界の命運が私たちにかかっているということ。いい加減理解して」

シルメリアがつぶやいた、そのときだった。

スウ、

シルメリアが目を見開く。

「っ！」

魂が引つ張られる。戦乙女の身体感覚が、遠ざかる。

「これ、は……っ！」

シルメリアは、思わず膝を折った。腹を抱え込むようにその場に座ると、彼女の身体が蒼白の光に包まれた。

シルメリアの意識が、沈んでいく。

光が晴れたあと、

シルメリアだった肉体は、アレンを象っていた。

「ふう」

アレンは溜息を吐き、自分の感触を確かめるように、手を握った。開いたりした。問題なく動く。アレンは頷いた。

「心配するな。俺も、なにも考えずに君と話しているわけじゃない。ただ、世界の命運も大事だが、どうせなら俺たちが帰ってくる世界も大事だろ？ 戦ったあと、なにも残っていない世界なんて虚しいだけだ。……俺は、俺たちは『今』を生きているんだから」

『そんなことより答えなさいっアレン！ 貴方、今、私のマテリア

ライズを再構成したの!？」

息を呑むシルメリアに、アレンは首を傾げた。

「再構成? “体は俺のものだ”と主張しただけだが?’

『……………』

「どうした?’

問うが、シルメリアは答えなかった。アレンは首を傾げながらも、手許に視線を落とす。川の清流で土を落とした野菜は、旨そうに陽を照り返していた。水を切って、野菜をザルに入れ、アレンは腰を上げる。

「とりあえず、飯にしよう。ロジャーヤルシオも、腹を空かせているだろうしな」

目には見えないシルメリアに向かって、言う。シルメリアはアレンの“意識の底”から、観察するようにジッと彼を見据えた。

『……………彼の素養量キャパシティなら、私が意識表在で活動することは容易。けれど彼の意志は、私の意識を凌駕しているというの?』

人の意識と、神の意識。一つの肉体に、二つの魂を併せ持つ特殊な状況を、シルメリアは水晶から目覚めたあとも体験するとは思わなかった。

数百年前の肉体、ディパン公国王女・アリーシャ。

自分と同じ顔、シルメリアの転生体だというのに、一々おどおどしていた少女を思い出して、運命の末妹は静かに目を閉じた。

『……アリーシャ……』

今はどこにもいない、シルメリアの“半身”。
シルメリアは苦笑するように、言った。

『戦乙女わたしの力を存分に発揮できる身体であっても、ままならないものね……』

数百年前のあのときは、身体がシルメリアの自由には動かなかったが、宿主であるアリーシャとは精神が近い位置にあった。
しかし、今は。

「お！ アレン兄ちゃんっ！ やっと帰ってきたなッ！？」

「アレンさん！ 今日は珍しい人が来たんですよ！」

野菜を手にしたアレンを、ロジャーとルシオが満面の笑みで出迎える。アレンは首を傾げた。

「珍しい人？」

「私だ」

そう言って、一団から出てきたのは長髪隻眼の男
　　ジェイクリ
　　ナスだった。

アレンは目を見開く。

「これはっ！ お久しぶりです！」

慌てて頭を下げると、ジェイクリーナスは柔らかく微笑った。

「ああ。一月ぶりだな」

「はい。今日は どうしてこちらに？」

問うアレンに、答えたのは青年騎士だった。

「ようやく会えましたね。アレンさん」

「ロウファア！」

「ジェイクリーナスさんには今、我がアルトリア騎士団の副団長を務めて頂いているんです」

「オイラたちは今朝聞いたぜ！ 兄ちゃん、朝帰ってくるつつたのに、なかなか来ねえんだもんよ。ロウファ兄ちゃんたちと待ちくたびれちまったよ」

「あ……、」

ブルームスとの戦いに明け暮れていた、とは言えず。アレンは咳払いした。

「……なるほど。ジェイクリーナスさんがいるなら、アルトリアは安泰だな」

「……兄ちゃん」

キリツと眉を引き締めて話題を逸らすアレンを、ロジャーが白い

目で見てくる。

アレンは黙した。

「ふっ……、相変わらずだな。お前たちは」

ジェイクリーナスが苦笑する。ロウファは一面に広がる農場に、溜息を吐いた。

「本当ですよ……。まさか、一週間会わないだけで、この場所がこんなになっているとは」

「そいつあ、兄ちゃんの仕業じゃなくて、シルムのおかげだぜ
ロウファ兄ちゃん」

「しるむ?」

首を傾げるロウファに、アレンが答えた。

「この世界を構成する、五大精霊の一つだ。本来は特定の人間に力を貸すことなどないんだが、アルスイ・オーブこいつの御蔭でなんとか彼らとコンタクトが取れた」

「……よくは分かりませんが、その指輪がなんらかの凄い力を持っている。ということですか?」

「ああ。それでロウファ。ジェイクリーナスさんまで連れて、今日はどうしたんだ?」

「なにを呑気なことを。貴方々は、ジェラベルン国王を失脚させて革命を狙っているんでしょう?」

「ああ」

「戦闘経験のない市民たちばかりで、そんなことが本当に可能だと思っっているんですか？」

「不可能なら、やろうとは思わない」

きっぱりと言い放つアレンに、ロウファは閉口した。代わりに、ジェイクリーナスが前に出る。

「勝算があるとは言え、苦戦は避けられまい。そこで、一つ提案がある」

「提案？」

ジェイクリーナスは一つ頷くと、ロウファを一瞥した。

「はっ、はっ、はっ……！」

クレアは駆けだした。理由はない。思い当たる節はあったが、駆けだしたのはあくまで反射的だ。不死者と戦えるまでに鍛えた身体が、酸素を求めて息を切らす。クレアは一階の自室に着くなり、足を止めた。肩で息をし、唾を飲む。数秒で、息切れが治まった。

「、なにやってるの……私……？」

後ろ手に扉を閉めたクレアは、戸にもたれかかるようにして天井を見上げた。アルトリア山岳遺跡の天井はうず高く、大理石の壁が魔晶石の光を反射して、美しく輝いていた。ここに来たばかりのころは、慣れない剣をふるい、泥のように眠る毎日が続いて気付きもしなかったが。

「は〜あっ！」

クレアは溜息を吐くと、壁からつり下げただけのベッドに転がった。自室といっても、2000人を収容する遺跡だ。一部屋を五、六人が共用している。今は、同室の少女たちが外にいるため、ここにはクレアしかいなかった。

天井を見つめ、クレアはつぶやいた。

「……………アレンと話してた女……………誰……………？」

クレアは天井を見つめ、唇を尖らせた。目をつむる。軽い睡魔と共に、脳裡に浮かんだのは、誰とも判別の付かない青年の顔だった。この一週間。

山岳遺跡で、なにも知らない自分に戦い方を教えてくれた青年を、クレアはいつの間にか探すようになっていた。自分でも、気付かない内に。気付いてからは、敢えて意識の外に追いやるように。

彼は仲間。

自分とともに戦ってくれる、ただの仲間と。

だが。

「あたしは……………」

つぶやきかけて、クレアはきゅっと唇を噛んだ。

前も、そつだ。

以前も確か、
クレアは目を閉じて、つぶやいた。

「……どうして、なんだろうね……」

ルシオに問いかけるように。あるいは、自分の過去と向き合うように。

クレアは目を開けて、自嘲気味に微笑った。

「どうしてこう……、こんな相手ばかりなのかしら」

ただ、幻影を追っていただけなのに。

アレンに対するそれは、恋心と称することも出来ない。小さな感情だ。それでも、ルシオを失ってすぐに湧いた感情だけに、彼女は後ろめたさを感じていた。だから、この想いを育てないようにしたのだ。

少なくとも、クレアにとっては大切にすべきものではない。

そう自分に言い聞かせた。

しかし。

どちらにせよ、相手が悪すぎる。レナスやシーティア、その二人の名を、どちらもクレアは知らなかったが、どちらも常軌を逸した美人であることに違いはない。

そんな偶然の一致が、クレアの苦笑を誘った。

そして、

あのとき、あの女性に石を投げた自分を思い出して

ぴしっっ！

心の割れる音が、クレアの耳に響いた。彼女は身体をくの字に折る。

「あたし……、あたしは……！」

目を見開いた。自分自身を掻き抱くように小さくなると、クレアはゆっくりとベッドから起き上がった。壁際の棚に、赤い籠手が置いてある。クレアが唯一持っている、ルシオの私物だ。それを手にとって、彼女は顔を歪めた。

「っ、」

はつきりと気付いたことがもう一つある。シーティアと一緒にいる彼を見て。

クレアがアレンを見つけると、一番最初に目が行くのはアレンの髪なのだ。

ルシオと同じ、“金髪”に。

自分は、ただ“代わり”を作ろうとしていたのだと、確信を得てしまった。

クレアは顔を歪めた。目頭が熱くなる。

「いや……」

己の考えをふり払うように、クレアは首をふった。

どうして“代わり”を作ろうとしたのか、考えずとも分かる。それが、死んだ人への侮辱と分かっている。最愛の人だったからこそ止められず。

クレアは 寂しかった。

「いや……っ」

ルシオがいなくなつて、

いくら剣の腕が上達しても、ルシオはそこにいなくて。

頬を伝う涙の感触に、クレアは嫌々するように首をふつた。

「違う……。……ルシオとアレンは、違うの……！ 全然、違うんだからっ、っっ！」

くず折れるようにその場に屈みこんだクレアは、もう戻らない“彼”を想つて、泣いた。赤い籠手を、ぎゅっと抱きしめて。

「……逢いたい……。逢いたいよ、……。ルシオ……。！」

声を殺して、彼女は泣いた。

2 ジェラベルンの戦い（間章） シルメリアを迎えに（後書き）

アレンが不死者王と拳で語り合えたのは、ブラムスがわざわざアレンに合わせて戦ってくれたからです。

3 ジェラベルンの戦い（間章） ミリティアのちシーティア

虫の音が響く宵の刻。アルトリア山岳遺跡に設けたアレンの部屋
物置部屋に、一人の女性が現れた。難民として、クレアたちと
共にジェラベルンから逃れてきた女性だ。彼女はジェラベルン独立
を賭けた戦いに同調し、弓を片手に山岳遺跡での訓練に精を出して
いた。

名を、ミリティア。

戦いの経験は皆無だったが、彼女は弓の才能に秀で、今では山岳
遺跡の訓練で頭角を現している。明日のジェラベルン奪還作戦では、
部隊指揮を任されているのだ。

腰まで波打つ金髪を、紫色のリボンで一つにまとめたミリティア
は、灰色の瞳をわずかに伏せ、不安げな眼差しをアレンに向けた。

「どっした？」

明日の奪還作戦に向けて、戦準備を進めていたアレンは、途中ま
で編んだ竹籠をその場に置いた。ミリティアが顔を上げる。しかし、
視線はすぐに彼女によって外された。

「……夜分に申し訳ありません。貴方に、お話ししておきたいこと
が……」

ミリティアは逡巡するように胸許に置いた手を握った。口を何度
か開くが躊躇い、声にならない言葉が空しく宙に散って行く。

「明日のことか」

「っ！」

アレンが問うと、ミリティアが弾かれたように顔を上げた。顔色を失った彼女。揺れる灰色の瞳を見つめて、アレンは目を細めた。

どうも、彼女は戦前で神経質になっているだけではないらしい。

数瞬の思考後、アレンは考えられる可能性を指摘した。

「……君に、近しい人がいるのか？ ジェラベルン軍の中に」

「っ、っっ！??」

完全に、ミリティアの顔から血の気が引く。どうやら当たりだ。

アレンは一つ頷くと、部屋の椅子に座るよう、彼女を促した。

動揺しながらも、ミリティアは椅子に座る。彼女は微かに震えていた。アレンは彼女から背を向け、部屋の棚からポットを取り出した。沈静効果のある紅茶を注ぎ、ミリティアに出す。ミリティアは力ない視線でカップを受け取ったあと、ぽつりと言った。

「姉、なんです……。ジェラベルンの、領主の妻は」

「……」

ミリティアと向かいのベッドに腰かけて、アレンは小さく頷いた。カップに視線を落とし、ミリティアは項垂れる。

沈黙が、流れた。

「……………」

「辛いかな？」

アレンが問うと、ミリティアはわずかに下唇を噛んで、頷いた。

「私も、姉も。元は貧民街の出身です。でも姉さまは貧民でありながらジェラベルン領主に見初められて、領主夫人になりました。私も、その煽りで上流階級の一員となったのですが……」

つぶやいたミリティアはカップの水面を見つめて、思い立ったように紅茶を飲み干した。ふう、と一息吐いて、彼女は目をつむったまま、顔を天井に向ける。ゆっくりと目を開けた彼女は、もしかしたら泣いているのかも知れなかった。

「けれど、私はどうも貴族の暮らしに慣れなくて……義兄さまから町の一角に家を貰って、ずっとそこに住んでいました。他の誰とも関わりたくなくて。姉さまとの会話がなくなったのも、ちょうどそのころから。……まさか姉さまが、貧民街の焼き討ちを赦すなんて

……」

「私の知る姉さまは、とても優しい人なんです。だから、真実を確かめたくて、私は貴方たちに同調しました。でも、いざ時が来ると……私、どうしたらいいか……」

ミリティアは膝の上に置いたカップを、ぎゅっと握った。

姉の 姉夫婦の凶行を見過ごすわけにはいかない。

その想いに変わりはないが、いざ姉との対面が迫ると、決意が揺らいでしまう。

姉は、今も自分の知る姉なのかと。

肉親を信じられない弱い自分を恥じるように、ミリティアは揺れる瞳をアレンに向けた。視線の合った蒼の瞳が静かに伏せられる。アレンは首をふった。

「姉との戦いが辛いようなら、明日は控えると良い。君の穴は、他の者で埋める」

「でも！」

「気持ちは分かる。が、明日やるのは戦争だ。半端な覚悟や迷いは、君だけでなく部隊全体を死に追いやる。……そういう世界だ」

「っ」

ミリティアは唇を噛んだ。今更ながらに、姉のことを他人に話す失態に気付く。その悲しみと恥ずかしさで、彼女の白い頬が真っ赤に染まった。

ミリティアはカップをサイドテーブルに置くと、そそくさと立ちあがった。

「つまらないことを言いました……私はこれで、失礼します」

今にも泣きだしそうなのをぐっと堪えて、ミリティアはアレンから背を向け、扉に向かう。その背をじっと見送って、アレンは言った。

「ああ。善処する」

「！」

ミリティアが立ち止まり、耳を疑うようにアレンをふり返った。アレンと視線が合う。ぴたりと止まって動かない蒼の瞳が、じつとミリティアを見返していた。

「っ」

ミリティアの頬を涙が伝った。アレンは誓うように一つ頷くと、編みかけの竹籠に手を伸ばして、作業を再開する。その彼を見つめて、ミリティアは小さく、ありがとう、とだけ口にして部屋を出た。一人残ったアレンは、竹籠を編み上げながら、じつと。右手に嵌ったアルスライ・オーブ蒼穹の指輪に思考を巡らせた。

(………………。一応、クレアとベリナスさんにも会っておくか…………)

ジエラベルンへの宣戦布告は、先日済ませた。決戦前夜ということもあって、ミリティアのように、あの二人もいると考えるとまうだろう。

明日は、彼らの想いを聞く余裕はないから。

そう思ってアレンが部屋を出ると、ズラリと、明日出陣予定の面々が廊下に並んでいた。

「え、っど…………？」

アレンが瞬く。十人隊長を務めるケインが真面目な顔で言った。

「なんか眠れなくてよ…………。アンタの顔見てから寝ようと思ったたら、他の奴らも同じような考えだったらしくて…………。この有様さ」

「……なるほど。そうか、明日は初陣だからな」

「おう。それに、もう一つ聞きたいこともあった」

「なんだ？」

問うアレンに答えず、ケインは廊下に並んだ面々を見渡した。若い男ばかりだ。彼らはケインの視線を受け、ごくりと固唾を飲みながら頷いた。ケインがくるりとアレンに向き直る。

「まあ、中に入ろうぜ」

言われて、アレンは机を挟んでケインと対面し座った。狭い物置だけに人が入り切らず、入口から爛々とした目を、男たちが向けてくる。そして、

「今日、アンタが連れてきた嬢ちゃん。アンタの“これ”かい？」

真剣な表情で、声をひそめるケインの質問を、アレンは一瞬、理解出来なかった。

「……は？」

目の前で、ケインが人差し指だけをピンと伸ばしている。ケインは頭をふりもう一度だけ、この理解の悪い若者に尋ねた。

「誤魔化しは、なしだぜ。アレン。あんなだけの美人、ただの知り合いなわけねえだろうが!!」

途中で興奮したケインは目を見開き、パンツ、と机を叩く。尋問

するかのような口調に、アレンは瞬き　そのあと、長い溜息を吐いた。

(そう言えば……確かに)

初見ならまず衝撃を受ける美貌。常軌を逸した美人がシーティアだ。入口に詰めかけた男たちは必死な形相と、興味本位でやってきた者が半々といったところか。必死な形相の中には、女性の姿もあった。恐るべき魅力といえるだろう。

アレンは言葉に気をつけながら、答えた。

「俺は彼女と、彼女の弟の友人なんだ。久しぶりに会って、彼女が弟を探すついでに手伝ってくれと言うから、ついて来てもらった」

「ホントにそれだけ？」

ケインは目を見開き、顔を覗き込みながら尋ねてくる。アレンは頷いた。

「俺と彼女じゃ、釣り合わないだろ？」

「それは……でも」

入口に詰めかけた女性陣が顔を見合わせる。男たちはカッと目を見開くと、一瞬の間を置いて拳をふり上げた。

「ひゃっほ〜いっつ〜!!」

「フリーだ!!!　フリーだあああ!!!」

そう叫びながら、早々に部屋を去って行く。その彼らを見送って、アレンは小さく苦笑した。

(まあ、シーティアには他に相手がいるんだが……)

言わぬが花だろう。そう結論付けて、去って行く彼らを見やる。脳天気を装っていても、やはり独特の緊張感は消せない。彼らの肩の荷が、少しは軽くなることを祈りながら、アレンは窓から月を見上げた。

開戦まであと一夜。

山岳遺跡は、緊張に包まれていた。

ある一人を除いて。

「〜？ ……どしたの、アレン〜……」

眠たげな目をこすりながら、シーティアが外にいた。気配までも無駄に消した彼女に、アレンはびくりと視線を向ける。

「いたのか、シー……」

言いかけて、アレンは言葉を呑んだ。

彼女が眠たげなのは良い。そろそろ二十一時。明朝発つことを考えれば、就寝して差障りない時間帯だ。
が。

問題は 彼女の服装だった。

前開きのパジャマのボタンを、残念ながら胸許で一つずつ掛け間違えて着ている。そのために彼女の白い谷間とへそが、服の隙間から零れていた。普通にしても凄艶な色香を放つ少女が、月光に照らされて更に映える。背徳的な絵画のように。

『変態』

「違っつー!!」

突如内から聞こえた“声”を全否定し、アレンはシーティアから背を向けた。

そう。

シーティアの格好など、本来どうでもいい。問題は、さきほどの人だかりを、男の視線というものを、この女がまったく自覚しないことだ。

アレンはふつつつと湧く怒りをこらえるように、拳を握り締めた。

「シーティア……」

「〜?」

不思議そうにシーティアが首を傾げた。ピティは珍しく、彼女の肩に止まっていない。

つまり

「寝惚けてないで、さっさと戻れ！」

「ねぼけ……? ……ん〜……、はい……」

気持ち良さそうに踵を返して、シーティアは千鳥足で歩き出す。直後。どさっ、という物音がして、アレンは訝しげにふり返った。数歩先の草原で、シーティアが気持ち良さそうに眠っている。豪奢に広がった彼女の黒髪が、星の瞬きのように透けた。

「お、おい……！」

窓から飛び出し、シーティアに駆け寄った。抱き起すと、シーティアが寝息を立てながら、もごもごと唇を動かした。

「……はやく……カー、マイン……こい……」

途切れ途切れに聞き取った言葉以外は、全て唸り声だった。緊張感のない寝顔だ。

『呑気なものね』

「……まあな。それより、どうして急に話しかけてきたんだ？」

アレンは溜息を吐きながら、眉間にしわを寄せているシーティアの前髪を、払った。

「むう……」

シーティアが唸る。幸いなことに、顔色は悪くない。

『別に。……ただ。あのミリティアという人間のことで、どうするつもり？』

「ん？」

アレンは首を傾げた。人間の現状など、オーディンを相手取ることに比べれば取るに足らないと言っていたのに、シルメリアが心配しているように見えたのだ。

「彼女のこと、なにか気がかりでも？」

肉体を共有している女神の考えは、少なからずアレンの思考にも影響を与える。確認の意味で問いかけるアレンに、シルメリアは黙した。

数秒、間を置く。

『気がかりなんてないわ。ただ……人間の世界に干渉すると言うのなら、あの娘の願いもきちんと聞き届けなさい。そう思っただけ』

「そうか」

今言ったことが、彼女の心すべてではないが、アレンは素直に頷いた。その内、話す気になれば話してくれるだろう。

そう思ったのだ。

少なくとも、人を気にかける一面が、この女神にもちゃんとある。それは人の感性から少し逸脱しているが、アレンには嬉しく思えた。

視線をシーティアに戻す。溜息を吐いた。

「……こいつはこいつで、精神的に弟カマインに会えないことがキてるんだらうな……」

『……………』

パジャマのボタンを掛け間違えたのは、一睡もせずに弟を探し回る所為だ。

アレンは再び溜息を吐き、シーティアを抱え上げた。そこで、遺跡の窓からピティが降りてきた。

「シーティア様！」

「今、眠った所だ」

ピティを仰ぎながら答える。すると、ピティは安心したようにホツと息を吐いた。シーティアの肩に止まり、彼女の顔を心配そうに覗き込む。

「シーティア様……」

「いつもこうなのか？」

ピティは首を横にふった。

「いいえ。今日が初めてです……。こんな、」

「最近、シーティアは寝てないのか？」

「ええ。カーマインさんの生死が分からなくなってから、行方を捜している間はほとんど」

答えるピティに、アレンは頷いた。

（つまり“ゲヴェル”ゆえ体が持っているものの、数ヶ月はろくに寝てないってことか……）

『ゲヴェルって？』

（俺も詳しいことは知らないが、地球人を超える身体能力と反射神経を兼ね備えた種族らしい。クラウドストロ人と違って、魔力にも長

けているしな)

『それが“相反する二つの魂”となんの結びつきが?』

(さあ?)

『……使えない』

(……おい)

首をふったようなシルメリアの気配に、アレンは拳を握り締めた。目に見えないから余計に歯痒い。

視線をシーティアに戻す。彼女と出会ったころ 少なくともあのフレンスブルグにいた時期から逆算すると、もう一月だ。

「……簡単に死ぬような男じゃないのは、一番分かっているだろうに。それだけ、カーマインに会いたいということか……」

ただ純粹に。

と、

鋭い視線を感じて、アレンは視線をピティに向けた。妖精がキュッと眦をつり上げている。

「シーティア様が必要としているのは、カーマインさんじゃなくて私ですっ!!!」

ピティは頬を膨らませた。真剣というより、必死に抗議する彼女は、どこことなく愛らしい。小動物を見るような感覚で、アレンは微笑った。

「そうだな。それに、圧倒的に自覚が足りない“姉弟”だ……。母^{サント}親も、さぞかし頭を痛めたことだろう」

シーティアの弟も、シーティアと同じように異性の視線をまったく気にしない。常軌を逸した、美貌の持ち主でありながら。

アレンが溜息を吐くと、ピティは視線をシーティアの身体に移し

「ピティちゃんっんっキーイクー!!」

アレンの顎を、妖精が放つとは思えない轟音で蹴り上げた。

ドゴオオオンッ!!

仰け反ったアレンの目に、火花が散る。たたらを踏んで体勢を立て直すと、アレンは少し、涙目になってピティを見た。

「い、きなり……なにを……!!」

ピティはシーティアの胸許を直しながら、憤然と言った。

「シーティア様をいやらしい目で見るのは禁止ですっ!! 絶対禁止っ!!」

「……せめて、下ろしてからにしないか? 普通」

アレンは死力をふり絞って二階へ行き、シーティアをベッドに寝かせた。ピティがアレンの前でホバリングしながら、腰に手を据えて答える。

「だから気絶しない程度に蹴らせていただきました！」

「……………どうも」

『……………ちょっと』

不服そうに言うのと同時、シルメリアの低い声が聞こえた。痛覚もアレンと共有しているのかも知れない。

(すまん)

心の底から素直に謝りながら、アレンは顎を手で押さえ、すごすごと部屋を出る。

後ろ手で戸を閉めようとした時、ピティが傍まで飛んできた。

「？」

「……………。一応、シーティア様を運んで頂いたことに、お礼くらい言っておきます」

『なら蹴るのはやめなさい。この男はともかく、私を』

(まあまあ)

シルメリアをなだめながら、アレンは小さく苦笑した。当の妖精は、そっぽを向いている。

「あまり無茶をするな」と、伝えておいてくれ。……………聞かないだろっが」

アレンの言葉に、ピティは少しだけ、苦笑するように破顔した。

「伝えておきます。必ず」

アレンは一つ頷くと、部屋をあとにした。

1 ジェラベルンの戦い（後編） ラッセン開戦

「今日はやけに外が騒がしいな……」

蘇芳が大陸に着いてから、一週間が過ぎた。

ラッセンに送られる奴隷を積んだ荷馬車は、王都ジェラベルンを出て、かれこれ三日間走り続けている。蘇芳は暗い瞳で、御者の声に顔を上げた。

御者の言葉は分からない。ただ、

この馬車に、詩帆は乗せられていなかった。

ジェラベルンの奴隷市で死んだ、周という男の言葉が蘇る。

奴隷が行う重労働の報酬は、犬よりも質素で不味い“餌”だ。こつちが病に臥せてもお構いなし。使えなくなれば新しい倭国の人間を補充する。

ここはもう地獄だよ。奴らは……悪魔なんだ。

女は特に気をつけた方がいい。

それも、アンタみたいな美人はな。悪魔どもに犯されるオチだからね。

でも、抵抗しちゃいけないよ。奴らは些細なことで奴隷を殺すんだ。

ひゅう、ひゅう、と空寒いかすれた音が、蘇芳の首から洩れる。

血で濡れた首許は、詩帆を別の場所へ連れて行く連中に、蘇芳が反抗したために喉を潰された証である。普通なら致死量の出血だった。だが蘇芳は、覚束ない視界の中。どうにか息を続けていた。

（詩……帆……）

鈍くなった頭の中で、少女のことだけを想う。自由を求めて大陸にきたハズが、絶望を詩帆に与えるだけだった。そのことに蘇芳はもう、目から涙が零れる感触さえ、分かんずりにいた……。

明朝。

四方を水で囲まれた商業都市・ラツセンは天候に恵まれた。反乱軍として、クレアたちが起用した兵は384人。8人を一グループとして扱う少数精鋭だ。

快晴の空を見上げて、シーティアは大きく伸びをした。

「ん〜！ いい天気」

アルトリア山岳遺跡で得たロングソードとレザーアーマーを纏って、クレアは毅然と朝陽をふり仰いだ。

「クレア。これ、私たちで作ったの。良ければ使って」

幼馴染のサラに言われて、クレアは手渡された布を広げた。布の端に棒が付いている。布には、貧民街で信仰されていた戦乙女の刺繍があしらわれていた。

「これ……！」

「ジェラベルンの奴らから独立するならさ。旗が必要だろうって、以前アレンが言っていたから」

炊事だけでなく、こんなものまで作っていたのかと感嘆を洩らすクレアに、サラははにかんだ笑顔を作った。

クレアたちが携える弁当も、無論サラたちの作品である。

「私たちは戦いに出られないから。せめて出来ることをやるつもりです」

言いながら、サラは遺跡で取れた植物の種子から、アレンに教わってセージやエリクサーを調合出来るまでになっていた。

このあとは戦場で、傷ついたクレアたちの救護班として活躍する予定だ。

薬箱を掲げるサラに、クレアは力強く笑った。

「任せて。絶対あたしたち、勝って見せるわ！」

「うん！」

頷いたサラが、整列した隊の後ろに駆けて行った。それを見送ってから、ジェイクリーナスはアレンに向き直った。

「今回は独立を賭けた戦いとはいえ、言わば前哨戦のようなものだ。アルトリアから過剰な助力をすれば、ただの侵略戦争とも取られかねない」

「ええ。分かっています。……それに。以前も話しましたが、彼らだけで勝てないようなら、こんなことを始めようとは思いません」

「……流石だな。だが、戦力が多いに越したことはない。アルトリアから正式に兵を出すことは出来ないが、この二人なら、お前につ

けてやれる」

そう言ったジェイクリーナスは、遺跡の方に視線を向けた。遺跡の陰に二人。背の高い影と低い影がある。

一人は筋骨隆々の胸板から二の腕にかけて、刺青をした長身の男だ。青みがかった黒髪を肩にかかるか、かからないかの辺りまで伸ばし、人懐こそうな笑みを口許に浮かべている。彼の左肩にはアリューズと同じく、銀製の肩当てが嵌められており、右手には身の丈と同じくらいの長さの幅広の長剣。腹筋を革ベルトで固め、青のズボンの上から銀の金属製の靴グリーブを履いている。

もう一人は兜付きサレットの鎧を着こんだ女だ。こちらは、男とは対照的に重装備で、肉切り包丁を思わせる反りは浅いが、刃の湾曲が深い黒剣を右手に、紫がかかった鉄製の盾を左手に持っている。鎧の合間から見える肌は白で、瞳は翡翠色だ。兜の頂点からは、彼女の長いピンク色の髪が流れていた。

幅広の剣を担いだ女は、不満そうに唇を尖らせた。

「つけてやれる」って、人をモノみたいに扱わないでもらいたいわね。ジェイクリーナス」

「まったくだぜツ。確かに俺は、アンタに負けてアルトリアに来たけど、なんでもアンタの言いなりってわけじゃないんだぜツ！」

巨体に似合わず、男は飄々と肩をすくめた。ジェイクリーナスが言う。

「申し訳ありません、セレス様。しかし、盟友の初陣とあっては、それを必勝にするために 最大限のことをしたかったです。ゆえ

に、信頼出来る者にしか頼めませなんだ」

「ここで“様”付けはなしよ」

「ハッ」

「……やれやれ」

セレスと呼ばれた女性は肩をすくめた。

「そう言われちまうと……くっ、うおおお！！ 仕方ねえ！ やつてやるぜえっ！！」

男は拳を固く握りしめると、大剣をぶんぶんとふりまわし始めた。それを尻目に、セレスは兜の頂サレットから垂らしたピンクの髪をわしゃわしゃと掻く。と、観念したように溜息を吐いた。

「分かったわ……。他ならぬ、ジェイクの頼みですものね」

セレスはアレンに向きなおると、そつと右手を差し出した。

「私の名はセレス。その筋では“鉄斬姫”なんて呼ばれてる女よ」

「「なっ!?!」」

居並ぶ皆が目を剥いた。

「“鉄斬姫”って、まさかあのっ!?!」

「伝説の傭兵じゃないか!?!」

「嘘……、ホントにつ！？」

騒がしくなる一同を尻目に、アレンは評判を確かめるようにセレスに視線を向けた。

評判などなくても、分かる。

（この人は、強い……）

まっすぐ見据えてくるセレスの瞳を見返して、アレンはニツと笑う。と、彼の内にある女神が、意識の表層に上がってきた。

『……………』

（どうした？ シルメリア？）

『……………なんでもないわ』

相変わらず、この女神は質問に答えない。アレンは不思議に思いながらも、セレスの手を取って握手した。

「アレン・ガードです。旗を持った彼女がクレア。よろしくお願ひします、御二人とも」

「ええ」

「俺はザンデってんだ！ よろしくな！ アレン！ クレア！」

大剣を軽く肩に担いで、ザンデと名乗った男がニツと笑う。差し出されるザンデの手はクレアに伸びており、クレアは窺うようにア

レンを見た。

アレンが頷く。クレアも小さく頷き返すと、恐る恐るザンデの手を取った。

そのときだ。

『アレン。今回の敵に、東方將軍とやらいるそうね？』

(ああ、それがなにか?)

突然問いかけてくるシルメリアに、アレンは首を傾げた。昨日、あらゆる状況を想定して、アルスイ・オーブで策を練っていたのを彼女も見ただろう。ラッセンに駐屯している東方將軍を、アレンは頭に思い描いた。

(直接戦ったことはないが、歴戦の兵と聞いている。ルシオの話によると、相当強かったようだな)

『……そう』

視線の合ったセレスが、不思議そうに首を傾げた。急に考えごとを始めたのを不審に思ったのだろう。アレンは笑って誤魔化した。

『なら。この戦いは一人も死者を出さずに終わらせなさい。勿論、敵もよ』

「なにっ?!?!?」

思わず声が洩れ出た。その場にいた ジェイクリーナスやロウファまで、不思議そうにこちらを見る。アレンは無理と分かっているながら、なんでもないと、と言って首を横にふる。

(ど、どうした？ 急に。……やはり、なにか気になることでもあるのか？)

『……………考えてもみなさい。この戦いで優秀な兵士が死ねば、レナスが勇者の魂を集めにやってくるわ。大勢死ねば死ぬほどね。そして、レナスが来る前に私が勇者の魂を確保できるかどうかは、数に比例して怪しくなるわ』

(俺は、別に被害を広げたいわけじゃない。だが革命戦争となると、さすがに死者すら出さず決着というわけには)

『聞こえなかったの？ 出来ないのであれば、貴方が神界に挑むなんて夢の話だわ。まして、自分の刀を取り返すなんてね』

(っ、……………！)

アレンが絶句している間に、セレスが皆に言った。

「やるからには、必ず勝ちましょう」

艶やかに笑うセレスにクレアは頷くと、幼馴染のサラが作った旗をこれみよがしに掲げた。

「皆！ 行くよー！」

「」「おうつつ！」「」

息の合った恫喝が響く。

アレンは喝声する皆をふり返って、ぐ、と拳を握り締めた。

（ シルメリア ）

『 なに？ 』

問い返してくる女神に、アレンは答えるように拳を突き上げた。

「その挑戦、受け立つっ！！」

“兼定”と聞いて俄然やる気を出し始めたアレンに、シルメリアは意識下で頷いた。

ラッセン奪還作戦、開始である。

「いかなさいますか？ 東方將軍」

アドニスの副官 まだ少女といっても差し支えない弓闘士が、神妙な面持ちで問うてきた。アドニスは視線だけを動かし、顔をかめる。

「なにがだ」

「貧民街の者が、我がジェラベルン王国に送りつけてきた宣戦布告状です。今日が決戦となっていますが……」

「集まったのはどれだけだ？」

問うアドニスに、少女は小麦色の細面を、残念そうに横にふった。

そうすると、高めに結った銀色のツインテールが弾む。砂漠に面したカルスタッド地方の人間らしく、彼女の眼は赤だ。顔にあどけなさが残るのは、今年で十九歳になるからだ。褐色の肌に、銀色の長い髪と白い戦闘服が良く映える。彼女の名は、アルカナといった。

「私と……、東方軍千五百名です。ジェラベルンに要請した援軍は、まだ着いていません」

「ラッセン独立軍の数は？」

「六百名います」

「……フン。タヌキが」

アドニスとは詰まらなさそうに鼻を鳴らすと、執務室の豪華な椅子から腰を上げた。

「あの、東方将軍？」

部屋を出て行きそうなアドニスを、アルカナが呼び止める。

“貧民がなにをしようと取るに足らない”。

それがジェラベルン本国貴族会の決定だ。そもそも、どうせ誰かの嫌がらせだろうと貴族たちは“貧民”の話が出るだけで鼻で笑い出す。迎撃しろというアドニスの忠告は、誰も耳を貸さなかった。

アドニスはドアノブに手をかけ、彼女をふり返った。

「出陣の準備をしておけ。鼻の悪い貴族どもには分かんたろうが恐らく、奴らは来る。ただし、独立軍は使わない。あいつらは俺

「が使う」

「ハッ！」

敬礼するアルカナを視界の端に、アドニスは何部屋を出た。

商業都市ラッセンは、街の四方を川に囲まれており、南北を街道、東西を川が貫いている。そのために、考えられる行軍ルートは二通りだ。一つはカミール丘陵から街道伝いにラッセンに入る方法。もう一つは川を伝ってラッセンを包囲する方法。

今日は快晴だった。天候を熟知しているアルカナには、この日和が一日中続くものと分かっている。

（だから。もし反乱軍がやってきても、迎撃はやりやすいわ）

ラッセンの南北にある門周辺は、アルカナ率いる東方軍が固めている。川からの進軍は、船を用意せねばならないため、後ろ盾のない反乱軍には難しいだろう。ヴィルノアの息でも、かかっている限り。

アドニスが他将軍の意見を無視してラッセンに千名以上の自軍を配したのは、これが理由だろう。アルカナはそう見ている。

とはいえ、あのヴィルノアが、貧民たちを“戦力”と考えているとは思えない。やはり、攻めてくるなら陸路。川に囲まれたラッセンを攻めるには、北門か南門以外にない。そう思案していたときだ。

ドドオーンッ……！

不意に、花火のような破裂音が聞こえた。

「え？」

アルカナは眉をひそめながら街に出る。すると、

「!!!」

ラッセンを囲うように、河川にイカダを浮かべた反乱軍が矢を射っていた。北門を哨戒していた兵が打たれ、逆上した兵が騎馬で川に飛び込む。

おおおおお……っ!!!

地響きのような兵士たちの叫び声。アルカナは目を剥いて自軍を見やった。

「待って!!!」

叫ぶと同時。彼女は慌てて飛び出した。

「テエエツツ!!!」

セレスの掛け声と同時、ラッセンの河に浮かんだイカダから、一斉に矢が放たれた。ラッセンを囲う川の流れは遅く、相手を射るのは比較的容易だ。

ゆえに

「陸から打ち返してっ！ 川に行ってはダメっっ!!!」

アルカナの鋭い叱責で、東方軍が剣から弓に持ち替えるのは早かった。敵がせいぜいイカダ五十基と、侮ってくれば良かったのだが。

セレスはチツと舌打った。

「流石に勘がいいわね」

「気にするな。戦いはこれからだ」

ベリナスは言うつと、ゆつくりと腰の剣を抜いた。

東方軍が反撃の弓をつがえる。それを見据え、セレスも笑って剣を構えた。

「それもそう、ねっ！」

ギギギギイインッ！！

ベリナスとセレス、二人の卓越した剣技が、東方軍の矢をいとも簡単に叩き落す。

同時。

「上陸せよっ！！」

セレスの鋭い怒号で、反乱軍のイカダが一気に陸に押し寄せた。全てのイカダではない。二十基ほどのイカダはそのまま川を更に流れ、場所を 浮かんでいいる拠点を変える。

アルカナは目を剥いた。

「なぜ！？ 流れのないテムズ川で自由に動けるのっ！？」

イカダに乗っている者は誰ひとり權かいを手にしていない。まるでイカダ自身が意志を持っていているように、凄まじいスピードで東方軍の矢をすり抜け、進軍してくる。あるいは、ラッセンを囲う川を下って

「皆！ 陣形を取るわっ！ 私の指示に従って！！」

アルカナは表情を引き締めると、東方軍に言った。
そのときだ。

ドドドドオーンッ！！

花火の炸裂音が、今度は東から聞こえてくる。

「そんな馬鹿なっ！？」

アルカナは目を疑った。反乱軍が攻め始めたのは、つい今しがたに間違いない。街道も川も、地形の高低関係でラッセンの北から南に抜けているのだ。橋のないラッセンで、東から攻め込むのは多少の無理がある。アルカナが門前に兵士を配したのは、相手の動向をいち早く知るためでもあった。

イカダから街に上陸したセレスが、酷薄な笑みを浮かべている。

「知恵を巡らせてこそ勝利は訪れる。そういうものよ」

“斬鉄姫”の一閃で、東方軍の騎兵が切り払われた。その凄まじい剣技を前に、アルカナは息を呑む。

（ アドニス様っ！ ）

弓を構えながら、横目に炸裂音のした東方面を見る。遠目に、街から火の手が上がっているのが見えた。

(ガキじゃねえ……)

東から進軍してきた反乱軍は、川を魔術で凍らせ、ラッセンに攻めてきた。

その手際。

相手の意表を突く戦法。

「やっと来たか……！」

アドニスにはやりと笑うと、大剣を担ぎ上げた。

反乱軍が、町の方々にファイアランスを打っている。家に、ではなく、道にだ。正規軍が数で押し寄せてくるのを防ぐつもりでいる。

「させるかよっ！」

疾風の如く街を駆け、アドニスは魔術師に向かって大剣をふるった。

その、手前で。

ヒュヒュンッー！

鋭い弓矢。

アドニスが顔を上げると、そこに弓をつがえるミリティアの姿があった。

（姉さま……。姉さまに会うまでは、私……）

大人しそうな面立ちの割に、アドニスを狙う矢は正確無比だ。矢を剣で払いのけながら、アドニスは好戦的な笑みを浮かべた。

アレンは阿沙加と共に町の東側から進軍し、奴隸市に向かって駆けた。水際から攻めたのが功を奏したのか、ジェラベルン東方軍は早くも歩調が乱れ始めている。

「行軍した分だけ、旗を軒並み立てていけっ！ 視覚で相手を圧倒すれば、自ずと敵の士気が下がるっ！」

「……おうつ！」「」

ラッセン攻略にあてられた反乱軍の総数は、170名。まともにやり合えば、正規軍に勝てるはずもない。ゆえに。アレンたちはいかに自分たちを大きく見せ、敵を混乱させるかに重点を置いていた。そのためには、スピードだ。敵に実情を知られてはならない。

「ファイアランスっ！！」

貧民たちに魔術を教えたのもその一環だった。彼らは、ファイアランス以外の魔術を一切覚えていない。魔術の素養がある者に、ア

レンは徹底してファイアランスのみを教えたのだ。回復は全て薬で行う。戦闘経験のない魔導師が、回復に気を取られないように、戦いに集中するために取った手段だった。

剣士にしても、弓兵にしても。

アレンはその者の持つ、適した才能だけを伸ばす。他の戦術は教えない。

「アレン様っ！ あれです！！」

救護係として薬箱を抱えた阿沙加が、奴隷市の鉄柵を指して言った。こちらに気付いた奴隷商人が目を瞠る。今しがた、商品たる奴隷を移動させようとしていたところだ。

「させるかっ！！」

アレンがファイアランスを放つ。火矢は正確に鉄柵のみを穿ち、奴隷を押し込めていた檻を破壊した。

「なっ！？」

奴隷商人が顔色を変える。と、間髪を置かずにアレンはもう一つ、魔術を打ち込んだ。

「プリズミックミサイル！」

五つの属性を持つ魔法矢が、地面を抉る。非武装の奴隷商人たちはそれを受けて蜘蛛の子を散らすように逃げて行った。

阿沙加が檻に向かって“倭国語”で叫ぶ。

「皆さん、もう大丈夫です！ さあ、ここから早く！」

そのときだ。空から 光が降った。

「フェアリーライト」

アレンの声。

阿沙加を始めとした倭人たちはあまりの眩さに目をつむった。

「これ、は……？」

首を傾げた蘇芳が、顔を上げた。 苦痛が、消えていく。

蘇芳の頭上にいたのは、女神だった。白い衣を着た、亜麻色の髪
の女神。女神は愛でるような優しい瞳で蘇芳を一瞥する。と。強く
光を放った。全身から、己の姿を光の粒子に換えるように。
女神の身体が、徐々に透けていく。

ばああああ……っ！！

光が強くなる。

瞬後。

ひゅーひゅーと鳴る喉の異音が、消えた。全身に力が湧き、蘇芳
は立ち上がる。

「なっ！？」

驚きで我が身を見下ろすと、阿沙加が嬉しそうにアレンを見た。

「ありがとうございます、アレン様っ！」

「阿沙加。俺はこれよりミリティアとセレスさんの援護に向かう。」

彼らを頼んだ」

「はいつ!?!」

金色の髪をなびかせて、アレンがその場を去って行く。

その背を見送り、蘇芳は目を見開いた。

「今、」

大陸の男が、なにを話しているのか分かった。

蘇芳の耳には流暢な“倭国語”に聞こえたのだ。それが、アレンの持つ翻訳機の仕業だと知らない倭人たちは、互いの顔を見合わせた。

阿沙加がふり返る。

「騒ぎが収まるまでの間、皆さん街の南に避難致しましょう。この奴隷市は、ラッセンの中枢ですから」

大陸の服をまとった倭人に言われ、蘇芳は怪訝に思いながらも頷いた。

2 ジェラベルンの戦い（後編） 東方軍 vs 反乱軍

「アレンたち、うまくやってるかな……」

ラッセンよりさらに南に下った所で、部隊の先頭に立つクレアは後ろをふり返った。彼女たちは今、イカダの上にいる。宇宙歴七七三年の未来人は、流れの少ないテムズ川を自由に行くため、イカダの底に“フォースフィールド”と呼ばれる人工力場を生じさせ、リニアモーターエンジンをイカダに取り付けた。

（要するに、すごく便利ってことでいいんだよね？）

クレアにとっては馴染みない理論ゆえ、理解はその程度だが、明らかに惑星外の技術、オーバーテクノロジーである。

足許でロジャーが、ぴよんっと跳ねた。

「心配すんなってクレア姉ちゃんっ！ 兄ちゃんの戦術にかかれば、アーリグリフだってイチコロだったんだぜ」

「あーり……？」

「うあ……、ロジャーのトコでも大暴れしたんだ。アレン……」

首を傾げるクレアを脇に、シーティアが顔を歪める。と。不意に、ロジャーの動きが止まった。

「大、暴れ……？」

「どした？ バカダヌキ？」

ルシオが不思議そうにふり返る。途端。

ガタタタタタッ！！

ロジャーが震え始めた。まるで電動歯ブラシのように小刻みな揺れ。そのあまりの怯え様に、ルシオが目丸くする。ロジャーの目の焦点が合っていない。ルシオは慌てて、悪友の肩を揺すった。

「お、おい！ バカダヌキっ！ しつかりしろっ！！」

「修行は……！ 修業はもうやじゃんよあ……っ！！ デカブツウ
ッ！ フェイト兄ちゃんああああんっ！！」

「おい！ どこ見て言っただ！？ バカダヌキっ！ バカダヌキ
イッ！！」

少年たちの賑やかな声がラッセン下流の川に響き渡る。
シーティアが首を傾げた。

「あれ？ 私たちって、これから戦争するんだよね？」

「……一応ね」

旗を握るクレアも、微妙な顔で押し黙る。シーティアの肩に乗った妖精、ピティがにっこりと笑った。

「良いではありませんか、シーティア様。これがロジャーさんたちのクオリティです！」

「ちびっ!」コンビ、おそるべしっ!」

言って、きゅっと口をへの字にするシーティア。絶世の美女でありながら、コロコロと気さくに表情を変える少女に、クレアは思わず笑った。

「ハハッ! なに言ってんのさ。アンタだって、緊張感全然ないじゃないッ!」

「むう〜。だって、ジェラベルンまで行くのに、わざわざ川下って海に出て、そこから北に向かって歩くんでしょ? テレポート瞬間移動でパツて飛んじやえば早いのにい〜」

「そいつは……、シーティアおねいさま以外、誰も出来ねえじゃんよ……」

ルシオの御蔭でどうにか戻ってきたロジャーが、ぽつりと言う。
シーティアはパツと表情を輝かせた。

「出来るよ。だって、ここにいるのは、せいぜい二百人くらいでしょ? 余裕余裕」

「マジでっ!?!?」

ロジャーとルシオが食いつく。シーティアは、マジ、と言いながら頷いた。ルシオが、我に返ったように両腕を組む。

「でも……アレンさんがこう行けって言ってるんだから、俺たちがこうやって行くのには理由があるんじゃないかねえのか?」

顎に手をやりながら彼は小首を傾げた。クレアが眉をひそめる。

「理由って？」

「そりゃ……作戦の一部、じゃねえかな……？」

シーティアが頬を膨らませた。

「ぶうぶう〜！ 面倒臭〜い！」

「むくれているシーティア様、可愛らしいです」

肩に止まったピティがクスクス笑う。ロジャーはうんうんと頷きながら、川の下流 海の方角を見据えた。

「オイラたちの出番はまだ先だぜ、姉ちゃん」

……
……

「敵襲です！ ラッセンが、敵の攻撃を受けていますっ！！」

玉座の間に、兵士の慌てた声が響いた。転がりこむようにして、東方軍の兵士が飛び込んできたのだ。

現在、玉座の間では貴族院にとる朝礼が行われていた所だ。アーノルド・ノーウェルは紅の絨毯にかしずいた兵士を見据え、鼻にしわを刻んだ。

「御前であるぞっ！ 控えよっ！！」

びくり、と兵士の身体が震える。

「伯父上、そのように叱りつけなくとも」

アーノルドの後ろから、甥 ジェラベルン当主、ラウラ・ノー
ウエルが眉根を寄せて言った。気弱そうな、見るからに温和な青年
だ。色素の薄い茶髪を、肩のあたりまで伸ばしている。彼は肌も白
い。目は灰色だ。全体的に色素を感じさせないためか、どこか病弱
そだった。上等な絹の外套を羽織る姿は、彼自身が『侯爵』の身
分であることを証明している。

アーノルドはふり向きざまに盛大な溜息を吐いた。

「お前は黙っている、ラウラ。件の貧民も、ベリナスも。私が引き
受ける」

「お言葉ですが、公爵様」

と、

凜とした声が、アーノルド・ノーウエルを制した。

「先日の矢文が届いたのも、元はと言えば我々の許可なく貧民街を
焼き払った貴殿の失策では？」

ジェラベルン当主の隣に控えていた女性が、毅然とアーノルドを
見据える。元貧民の小娘。アーノルドがもつとも疎ましいと感
じる、当主夫人だ。名を、ソファアラ。反乱軍に参加しているミリテ
ィアの、実の姉だ。凜々しい切れ長の瞳は灰色で、ミリティアと違
い髪の色は霞がかかった金髪だ。見る者によっては褐色 または茶
髪と称しそうな髪。肩まで流れるそれを、ソファアラは一つにまとめ
て雀の尻尾のように結わえている。

ソファアは、少しも臆さず恐れず“番犬”と呼ばれるジエラベルンの実質的権力者、アーノルドを睨んだ。

アーノルドは鼻を鳴らすと、会話すらも拒むように踵を返す。貧民と交わす口など持ち合わせていない。

パンパンッ！

と。

玉座の間に、拍手かしわでが響いた。皆がそちらに視線を向けると　ラッセン出身の北方將軍・ファールアントという名の青年魔導師が、気さくに肩をすくめていた。長身瘦躯。白いローブに身を包んだ北方將軍は、褐色に近い茶色の髪と翡翠色の瞳をした青年だ。女顔ではないが、精悍という訳でもない。下手をすればどこにでも居そうな、迫力に欠ける男だったが、彼は魔導師にも関わらず、自らも機敏に動くために、ローブ丈を短めにして、同色のズボンを履いていた。ジエラベルンが誇る“智将”としても有名な將軍である。しかし彼は、そんな鬼才など微塵も感じさせない気さくさで、玉座の間に並ぶ大臣たちを見回した。

「それより皆さん。早いところ、ラッセンに救援を送りませんか？

彼も、対応に困っていると思いますが」

横目でちらりと伝令兵を見やる。

アーノルドとソファアが、決まり悪く視線を逸らした。

ファールアントが伝令兵に問う。

「で？ 敵の勢力はどんなもんなんだ？」

「それが……把握しきれませんっ！！

突如街に現れたと思っ

たら、いつの間にか、街の国旗が、奴らの旗に差し替えられていて……！！」

「……なにっ！！??」「……」

場にいた皆が目を向いた。ファールントは顎に手をやる。アドニスがジエラベルン最強の“武将”であるとするならば、この北方將軍は“智将”で知られている。彼はいかなる時でも冷静に、明確な実情を分析する能力を持っている。

「アドニス將軍は？」

「現在、交戦中です！　しかし……敵軍勢に“斬鉄姫”が！！」

ざわっ！！

一斉に、血の気が引いたようだった。ファールントの表情が歪む。

「マジ?」

思わず平民言葉が洩れ出て、彼は咳払いでごまかした。

「斬鉄姫だと……！？　では、あのセレスが!？」

「馬鹿な、彼女が貧民に手を貸すなど……!!」

ざわざわと大臣の間でざわめきが起こる。ファールントはそそくさと踵を返した。

「とすれば、こうしちゃいられない……」

「ファールアント將軍」

ファールアントを、ソファアラが呼び止めた。ふり返った先にある、
チロルハット 緑の帽子をかぶった女性はもはや弓闘士スナイパーの顔だ。彼女にかかれば、三十メートル先のリングすらも、正確に射止められるという噂がある。

だが、

ファールアントはそれをやんわりと制した。

「ソファアラ夫人は、陛下とラウラ殿の傍にいてください。ああ見えて、彼は小心者ですから。ジェラベルン最後の防衛線は確保しておかないとね！」

ニツと笑って、ファールアントは颯爽とロープを翻した。

「それでは陛下。北方將軍ファールアント、行って参りますっ！」

ファールアントはそれだけ言うと、足早に伝令兵を連れて玉座の間を去って行った。

ラッセンを襲撃してからわずか二時間足らずで、戦いは山場を迎えようとしていた。

あまりに目まぐるしい状況の変化に、東方軍でさえ対応し切れな
いほどに。

アドニスはずいぶん舌打った。個人戦ならばともかく、集団戦で圧倒的に圧されている。

「ちいいいっ!!」

「これで貴方を討てば終わりよ、アドニス」

ちゃき、と剣の鏢を鳴らして、斬鉄姫・セレスが厳肅に言い放つ。
アドニスは鼻を鳴らすと、大剣を構えた。

「そうそう、テメエらの思い通りに行くと思うなよ……」

ゆらり、と彼の身体が揺れる。

瞬間。

セレスが目を瞪る。

ギインツッ!!

剣線が、火花と散る。

(速いっ!!)

寸前でアドニスのふり下ろしを受け止めたセレスは、巨漢に似合
わぬ斬線に舌を巻いた。力比べでは 負ける。刃を寝かせ、即座
にセレスは反撃に打って出る。アドニスの大剣の上を、シャアアア
アッという奇声を立てて走るセレスの幅広剣。

アドニスは鼻で笑い、軽くバックステップで躲した。ちらりと、
甲冑の奥にある赤い瞳で、後ろに倒れている副官の少女 アルカ
ナを見やる。ツインタールの銀髪が、少女の浅い呼吸に合わせて揺
れていた。小麦色の肌からは 正確には腹から、とめどなく血が
流れている。出血がひどい。血溜まりがもう、結構な大きさに広が

っている。

助かりそうになかった。

「チッ！」

アドニスとは舌打ちながら、セレスを睨む。救護兵は、早い段階で反乱軍に抑えられている。大勢は己が倒れば決する段階だ。斬鉄姫の言う通りに。

「ここが、独立軍の中枢部　つまり本陣だ」

ベリナスは後ろに率いている仲間を見やりながら言った。かつて己が毎日足しげく通っていた軍部。街一番の高さを誇る塔を見上げると、わずかな郷愁と決意が現れてくる。

十人隊長のケインが、ロングソードを見やりながら笑った。

「ついに決着だな。衛士長さん」

「ああ！」

ベリナスは大きく頷き、反乱軍が装備しているロングソードを抜き払った。

「にしても、魔導師つてのは凄えよな！俺たちの剣をこんな風にカスタマイズしちまえるなんて」

そう言うケインやベリナスのロングソードには今、刃に雷が宿っ

ている。

あ のとき、クレアが開戦の号令をかけた直後。

「総員抜剣！」

アレンの鋭い声がかかった。皆は不思議に思いながらも、しかし高揚した気分で剣を空に向けて抜き放つ。と、アレンを中心に巨大な紋章陣が地面に走った。四百人規模のクレアたちを全員押し包むように、紋章が一面に広がる。

「これは？」

クレアが問うよりも先に、アレンが詠唱を終える方が早かった。
アルスイ・オーブ蒼穹の指輪が燦然と輝く。

「エンゼルフェザー！」

地面に広がった紋章陣が白い光を放った。それは神々しいまでに皆を照らすと、白い羽根となって散っていく。その羽根がクレアたちの身体に触れた瞬間、

ぽう……、

暖かな感触が全身に走り、身体の内側から力が湧いてきた。

「お、お、おお？」

ロジャーは自分自身を見下ろして目を丸くする。クレアも皆と顔を見合わせていると、シーティアが解説した。

「私たちの身体能力を底上げする補助魔法よ。本来は一人にしか適応出来ないものだけど、アルスイ・オーブを使って全体魔法に改良してみた」

「兄ちゃん……、そういう優しい魔法も出来たのか……」

感慨深げにロジャーがつぶやく。普段は兼定を使った無茶な特訓ばかりさせられていたため、アレンの紋章術の全容はロジャーも知らないのだ。ルシオが、すげえ、と目を輝かせている隣で、シーテアが、ん？ と首を傾げた。

空を舞い、散ったハズの羽根の残滓が、また新たな紋章陣を形作っている。今度は青白い 攻撃的な紋章陣に。

「ライトニング・バインド！」

アレンが唱えると、クレアの目の前が、ばちいんっ、という雷撃音とともに白くなった。

「っ！」

思わず目を瞑り 瞼を開けたとき、

バリバリバリバリッ、、！！

クレアたちの持つロングソードに、雷がまとわりついた。刃の部分に雷花が走っている。

「これは……！」

クレアが目を丸める。アレンは皆に向かって、よく通る声で言った。

「これで敵兵に刃を当てられれば、相手の意識を一撃で断つことが出来る。だが、たかが一撃と侮るな。こちらが攻撃の機を外せば、向こうが襲いかかってくるということだ！ 常に状況を見渡し、慎重に、まずは自分が生き延びることを考えろっ！！」

雷を帯びた剣　ありていに言えば、“魔法剣”を見据えて、反乱軍として名乗りを上げた皆は高揚した気分のまま叫んだ。

「「「「「おおおおおおおっっ！！」「」「」

実際には、“敵に刃を当てる”ことなく、敵と刃を合わせるだけで反乱軍は正規兵に勝つことが可能だった。なぜなら、ジエラベルン軍が装備している軍剣は、刃から柄まで全て鉄製だ。おまけに全身を甲冑で覆っている。帯電した刃を受け止めるには、彼らの装備はあまりにも劣悪だった。これを利用して、反乱軍は短時間で今の優勢を勝ち取ったのである。剣の形をしたスタンガン、というべき武器を使って。

ただし、まだ決着はついていない。

アドニス我倒していないこともあるが、ベリナス自身がこのラッセンを　ラッセン独立軍を取り戻す。それが、この奪還作戦での一番の大きな目標だ。

独立軍本陣に押し入り、ベリナスは厳しい面持ちで左右を見渡した。

「ベリナスさま……」

すると、屯所に甲冑を着込んだ兵士がいた。驚いた様子でこちらを見ている。ラッセン独立軍に所属する 下流階級の貴族だ。彼は剣を手に、この刃をどうすればいいのか悩んでいる。

ベリナスは下流貴族を見据え、言った。

「アンカー。私は皆を、街を取り返すために戻ってきた」

「！」

アンカー、と呼ばれた下流貴族が目を見開く。今回のラッセン防衛はアドニスに家族を取られたために参加したわけではない。だが、逆らえばまた同じことが繰り返されると思うと、独立軍の兵士たちは暗澹たる気持ちになる。

ベリナスはそれを察し、頷いた。

「私と共に来い、アンカー。ラッセンを 皆を取り戻そう！」

「ベリナス様……」

アンカーは剣を握り締めると、表情を険しくした。

「一つだけ、お聞かせ下さい」

硬い面持ちで問いかけるアンカーに、ベリナスが頷く。アンカーは深呼吸のあと、窓からラッセン市街を一瞥した。

「この襲撃は、すべてベリナス様が企てられたのですか？」

「……そうだ。私は、ラッセンを　より自由で、安全な街にした
い。そのためには、この街にアドニスを置いておくわけにはいかぬ
のだ」

アンカーは強く剣を握ると、それを正眼に構えた。臨戦態勢だ。

「私は、ジェラベルンの兵士です」

震える声でアンカーが言う。素早く戦闘態勢を取るケインをベリ
ナスは押し止めた。

「戦いは、避けられぬということか……」

ベリナスはそれだけ言うと、自らも剣を構えた。反乱軍の標準装
備はロングソードとブロードソードだ。ベリナスは二振りの内、扱
いやすいロングソードを手にしていた。シーティアやセレス、ザン
テのように自分の実力だけで戦うという人間以外には、すべて刃に
雷が帯電している。

無論、この剣にも。

ベリナスは静かに瞳を閉じた。

(アレン……、すまないが、私は彼の気持ちに答えねばならぬ)

心の中でつぶやいたのは、このラッセン奪還作戦が始まってから
ずっと、脳に直接、アレンの指示が舞い込んできたためだ。念じれ
ば、アレンに届くような気がした。そしてベリナスの意思を反映す
るように、ロングソードから雷が消える。それを見据え、ベリナス
は小さく微笑った。

「すまん」

つばやくと同時、正眼に構えたアンカーの剣と剣先を交わす。
ジエラベルン決闘法だ。

キン、

金属音が鳴ると同時、アンカーは鋭く踏み込んだ。

「ハアアツツ!!」

上段から　ふる剣線。アンカーは二十代後半の有望な騎士だ。
剣術指南をしたことも幾度もある。アンカーの鋭い剣線をベリナスは水平に構えた剣で受け止め、勢いをわずかに左に流して、甲冑に覆われたアンカーの胸板を剣の柄で穿った。

ドゴオツツ!

「かつ!」

鉄片越しに鋭い衝撃がアンカーの鳩尾に走る。思わず空気の塊を吐いた彼は、胸を押さえて地面にうずくまった。握力を失った手が、ジエラベルンの軍剣を取り落とす。

戦いは、その一瞬だった。

「す、っげえ……」

とても四十近い男の体裁きではない。否、三十七の歳月を経る今の今まで、剣術を怠ったことのないベリナスだからその洗練された動き。瞬間的に間合いを詰める様子、敵の攻撃を最小限の動きで捌く様子、最早芸術の域に達している。

剣術指南をしてもらっていた反乱軍・十人隊長のケインでさえ息を呑んだ。ベリナスは剣を納めると、アンカーに向かって言った。

「お前の想い。しかと受け取ったぞ。アンカー」

「っ！ ベリナス様」

トドメを と、言いかけるアンカーをベリナスは首をふって拒絶した。ここに来るまでに倒したジェラベルン兵たちをふり返る。

「心配するな。我々は、誰ひとり殺してはいない」

「え……？」

目を丸めるアンカーに、ベリナスは穏やかに笑んだ。

「革命に、血など必要ない。 そう学んだのだ」

殺されたかに思われたジェラベルン兵。だが実際は、反乱軍の攻撃を喰らって気絶しているだけだ。その事実アンカーが気付いたのは、これからもう少しあとのことだった。

ギインツ！！

合わさった刃から火花が散る。かちかちと。もう何度目になるかも分からない鏝迫り合い。兜の奥からセレスを見据え、アドニスは思考する。

今から、数十分前。

ラッセンの東側に陣取っていたアドニスとは、独立軍を率いてミリティアの部隊・反乱軍を返り討ちにした。このラッセン特有の独立軍はベリナスを慕う者が多い。ゆえに、この兵士たちを連れていれば、自ずと反乱軍から寄ってくると思っただけだ。

(なかなか敵も考えやがる)

北門と東の二方向から攻めてきた反乱軍を、アドニスはある程度評価していた。馬を駆り、北へ。東はミリティアが指揮していた部隊は、こちらに動揺を与えるための誘導だ。恐らく、本陣は北に居る。そのアドニスの読みは半分ほどの的を射ており、彼が向かった先には、伝説とまで言われた戦姫・斬鉄姫セレスの姿があった。

「ほう……！ ジェラベルンで兵士どもを派手に斬り殺したのはテメエか……！」

にやりと口端をつり上げるアドニスに、セレスは鋭くこちらをふり返った。彼女の足下には、東方軍の副官・アルカナが倒れている。年若いが優秀な彼女を、ものの十数分で黙らせるとは、斬鉄姫の噂も伊達ではなかったらしい。ピンク色の長い髪が、彼女の動きに合わせて鋭く舞う。アドニスは独立軍の兵たちに待ったをかけた。

「貴方がこのラッセンの総大将　アドニス將軍ね」

「そうだ、斬鉄姫。テメエの実力……見せてもらおう！」

言つて、アドニスは馬から降り、抜剣する。自分の身の丈と同じくらいの大剣。それを向けるにはいささか小柄な相手だが、少女のようなセレスの外見にアドニスは騙されなかった。紫がかった甲冑

の下で、この女は強かに戦いの機を見ている。

「皆、下がって」

セレスの掛け声と同時に、反乱軍の兵士　とも言えない、貧民に相応しい軽装の若者たちが動きを止めた。どこから調達してきたのか、彼らは皆、レザーアーマーとロングソード、もしくはブロードソードを握っている。行商の動きには目を光らせていたハズだが、とアドニスが首を傾げている間も、剣を納める貧民は誰一人いない。目の前にいる男　漆黒の甲冑を着た『黒刃のアドニス』の風体を、誰もが一度は目にしたからだ。

以前自分たちを捕らえた張本人を。

若者たちは警戒の入り混じった表情でアドニスを睨んだ。

「それなりに様になってるじゃねえか、貧民ども！」

「、っ！！」

アドニスの挑発に若者たちが色めき立った。が、

「下がれと言っている！」

セレスの恫喝。瞬時、彼らはぴたりと動きを止めた。まるでよく訓練された兵士のように、セレスに刃向かう者は誰一人いない。アドニスは口端をつり上げた。

「やはり　テメエを殺ればこの戦い、終わるようだな」

「それはお互い様ね」

酷薄な笑みを浮かべる斬鉄姫に、アドニス目は目を細めた。

「……ほう？ この俺が一騎打ちで答えてやるうってのに、軍勢勝負を挑む気か？ たった二十人規模それだけの部隊でこの俺に！」

「吼えるだけなら野良犬でも出来るわ。私を倒せると言つのなら、その実力 見せてみなさい」

「ほざけっ！！」

鋭く吼えると同時に、独立軍に進軍の号令がかかる。反乱軍の背は流れの遅いテムズ川だ。今は奇襲に使っていたイカダもどこかに流れてしまっている。彼らに逃げ場はない。アドニスが追い打ちをかけるよう命じた瞬間。セレスは貧民たちに後退の号令をかけた。

（あん？）

足場のない川に向かって反乱軍が動く。アドニスが不審に思うのも束の間、貧民たちはあるうことか、アドニスたち正規軍に背を向けて走り出した。独立軍の中には騎兵もいる。人の足しか持ち合わせていない貧民の行動に、アドニスは辟易した。

「斬鉄姫っ！ どういうつもりだ！！」

先ほどのセレスの言葉は、ただの強がりか。
そう思いかけて、アドニスはあることに気づいた。

騎兵が駆ける　その地面は、凍った川だ。

セレスが立っていたのは、粉塵を敷いて地面に見せた偽の大地

凍った水面。
嫌な予感がした。

「止まれえええっつっ!!」

アドニスが鋭く叫ぶと同時に、騎兵たちは驚いたように後ろをふり返った。その間に、

「今よ」

セレスの号令。同時、ファイヤランスが凍ったテムズ川に炸裂した。

ドゴゴゴオオオンツツ!!

馬が悲鳴を上げて、溶けた氷の川の中に沈んでいく。それを目にした瞬間。帯電した貧民たちのロングソードが水面に突き刺された。

バリイイイインツツ!!

白い雷が、一瞬川を。その場の景色すらをも鋭く輝かせた。馬の悲鳴に混じって、独立軍の兵士たちの悲鳴が上がる。それに気取られているのも束の間、アドニスの目の前には、いつの間にかセレスが踏み込んでいた。

「ちいいいつつ!!」

まるで“消えた”かのようなセレスの動き。

セレスだけではない。川面にいたハズの反乱軍までもが、なぜか

ラッセンこちらに上陸している。テムズ川の川幅は広い。いくら地面に偽装していても、否、むしろ対岸まで走っていたのだとすれば、水流と化した川をどう渡ったというのか。

「どづいう、ことだっ！！」

剣を払いのけながら、アドニス目は剥いた。一体、なにが起きているのか分からない。

退がって行った反乱軍の足下に凍ったテムズ川の水面に、あらかじめ移送方陣が描かれていたことなど、アドニスを知る由もない。

酷薄に笑んだ斬鉄姫は、アドニスの動揺すらをも見切っていたようだった……。

「ミリティア、無事か？」

奴隸市から更に東に行った所で、道端にミリティアが倒れていた。回復魔法で傷口を塞ぎ、彼女を助け起こす。としばらくして、ミリティアが目を開ける。

「……………アレン、さん……………」

ゆっくりと焦点がアレンに結びつき、彼女がつぶやく。アレンは小さく頷いた。

「すまなかつたな。ラッセンの東方將軍を、一人で相手させてしま

って」

「……っ、いえ……」

ミリティアはアレンの腕を掴み、ゆっくりと立ち上がった。

「それより、貴方はどうしてこちらに？」

「これからジェラベルンに向かおうと思ってな」

「え……？」

アレンの右手に嵌った蒼穹の指輪が輝きを放っている。彼は視線を上げた。

「ラッセンの雌雄は、ほぼ決したようだ。あとはベリナスさんとセレスさんの二人に任せておけばいい。あの二人なら、敵が呼ぶ援軍の数も増えるだろうしな」

「……？」

「ラッセン衛士長と斬鉄姫・セレスの異名は、それだけ伊達じゃないってことだ」

アレンはそこで言葉を切ると、街の南西　ジェラベルンのある方角を見据えた。伝令兵をわざと取り逃がして小一時間。早馬ならもうジェラベルンに着いているだろう。

向こうジェラベルンの戦局を決める上でも、ちょうどいい頃合いだ。アレンはそう判断した。

『……アレン』

不意に、シルメリアが声を掛けてきた。アレンは首を傾げる。

(なんだ?)

『戦死者を一人も出さずと言ったはずよ』

(今のところ、一人も出てないはずだが?)

『使えない男ね……』

溜息のような気配が起こる。アレンは出陣してからこちら、ずっと輝き通しのアルスイ・オーブに視線を向けた。

(東方軍の副官のことか?)

全体の戦況は、この蒼穹アルスイ・オーブの指輪を通してアレンの頭に常時叩き込まれている。アドニスの後ろで、血溜まりを作って倒れている少女をアレンが連想すると、シルメリアは急に黙り込んだ。

どうやら、当たりらしい。

(心配するな。彼女には回復魔法をかけてある。今は気付かれないようスリープで、細工させてもらったがな)

東方軍の副官・アルカナが沈んでいる血だまりは、確かに彼女自身の血によるものだ。だが、致死量に達する前に、アレンはヒーリングを打っていた。誰にも気付かれぬよう、アドニスがセレスに気を取られている隙に。

(とはいえ、しばらく放置していたのは否定しない)

『……………』

シルメリアの意識が下層に降りて行く。納得したのか、彼女はなにも言わなかった。

斬鉄姫・セレスの腕をもってすれば、戦死者などそれこそ溢れかえるほどの勢いで発生する恐れがある。シーティアにしても、ザンテにしてもそうだ。己のふる刃に覚悟と信念を宿した戦士が、敵の命を仕留め損ねるなど、アレンは端から微塵も考えていない。

此処は戦場。

敵を討ちとれなければ、己の死が待っているのだ。だからこそ、“戦死者を一人も出さない”という条件を満たすためにはアルスイ・オーブを常時発動し続けなければならない。出来る限り、彼らがジエラベルン軍と戦わずに済むように。もし斬り殺してしまつたとしても、そのフォローを即座に自分が行えるように。

(不死者王と戦ったのが、こんなところで役立つとはな)

初めはものの数分で堪え切れない頭痛を起こしたが、今はまだ、アルスイ・オーブによる副作用、頭痛が起きていない。とはいえ、広範囲に神経をとがらせ、魔術を局所的に顕現させることは、確実にこちらの精神力を削っているが。

アレンの早期決着へのこだわりは、そういう事情も絡んでいた。

「ミリティア、俺はこれよりジエラベルンに向かう。……君はどうする?」

問われて、ミリティアは目を見開いた。

「今から……向かうのですか？」

「ああ。瞬間移動テレポートならすぐだ」

「行きます……。行かせて……。ください……。！」

力を帯びた瞳で言う彼女に、アレンは静かに頷いた。

「待て」

凜とよく通る声のアレンを制した。ふり返る。すると、そこに襦袢をまとった男が立っていた。剛毛といてもよさそうな、短い黒髪の精悍な男。歳はまだ二十代。奴隷に落された倭人だった。

「貴方は？」

アレンが問うと、男は意志の強い黒瞳を、す、と向けてきた。武人だ。直感的に、アレンは思う。

「俺も連れて行ってはくれまいか」

「貴方を？」

問いながらも、アレンは一つの確信を得ていた。この男は、なにか覚悟を決めている。自分の命を賭して戦おうとしている。

「俺を待っている者がいる。この街ではなく、恐らく貴殿らが向かう街に」

アレンに解放されたあと、阿沙加の誘導に従って避難した蘇芳だったが、集められた倭人の中には詩帆の姿がなかった。同じ苦境を乗り越えた仲間として、他の倭人たちも一緒になって探してくれたが、やはりいない。

となれば、蘇芳が馬車で連れてこられる前の街に取り残されたとしてしか考えられない。

確信すると、身体が勝手に動いていた。倭国語を操る、青年の下に。

「自分は、アレン・ガードと申します。貴方のお名前は？」

「蘇芳だ」

答えた男の目を見据え、アレンは一つ頷いた。腰から剣を抜く。反乱軍が標準装備として取り揃えた、ロングソードを。

「では、これを」

「良いのか？」

自分の剣を惜しげもなく渡すアレンに、蘇芳が問う。アレンは頷くと、右手に魔法陣を展開した。

「では、行きます。ジェラベルンへ」

「応ッ！」

雄々しく答える蘇芳の隣で、ミリティアが力強く頷いた。

3 ジェラベルンの戦い（後編） ロジャーとザンデ、ソファアラとシーティア

抜けない。

「う、そだろ……？」

北方將軍ファールントは、手勢三百人を連れて街道で馬を駆っていた。これから向かうラツセンは商業盛んな街だ。ゆえに、ラツセンに続く北の街道は大陸中を見回しても整備の行き届いた歩きやすい道になっている。まして、乗っているのが馬ならば、一時間足らずで救援に駆け付けられる。

なのに、抜けない。

「將軍。やっぱり、この道……異常だよ」

ファールントの隣をついていた副官のラシーカが、不安げに問うてきた。カルスタッド地方らしい、褐色の肌と銀髪。ラシーカは肩で髪を切りそろえ、乱れないよう茶色のヘアバンドで留めている。今年で二十歳を迎えた彼女は、騎士としても、女性としても、立派な大人の仲間入りを果たしたところだ。片手に湾刀のような肉切り包丁 幅広の剣を持っている。もう一方の腕には、肘から手首にかけて五角盾を装着し、前線を駆る騎士だというのに、彼女は鎧を一切身に着けない。ジェラベルンでも稀有な人物だった。

副官ラシーカの言葉に、ファールントの表情が引き攣る。それはそうだ。舗装された街道を走るだけの道程が、なぜか自分たちはいつの間にか“森の中”にいるのだから。

「ラシーカ……言いたいことはわかってるよ。だが……、こいつは
いったい……どうなってやがる？」

フアーラントは鬱蒼と茂る森を見回した。木々の背はそれほど高くない。だが、どれも似たような背丈の木で、同じような景色が広がる森だ。フアーラント同様、周囲を見渡していたラシーカが、目を細めた。

「ここ……、ジェラベルンの北東の森に間違いない」

「分かるのか！ ラシーカ！」

北方將軍フアーラントの副官・ラシーカは地形に造詣が深い。かつて、ヴィルノア軍五千を相手にフアーラントが百の軍勢で戦局を切り抜けられたのも、彼の機転はさることながら、このラシーカの知識によるところも大きい。

フアーラントは現在地が分かってホツとしたが、対するラシーカは曇った表情のままだった。

「分かるよ。でも、さっきから同じ道をぐるぐるしてるんだ。あの森だったとしたら、私たちはとっくに抜けられてる」

「……なん、だと？」

つぶやくフアーラントに、ラシーカが頷いた。

「つまり、私たちはここに誘い込まれたんだ。足止めのつもりか、どこかから敵が襲いかかってくるのかは、まだ分からないけどね」

油断なく周囲を見回すラシーカを尻目に、フアーラントは額をば

しりと叩いた。

「なんてこった！ 策士策に溺れる とはな」

「將軍……」

「分かってる！ こいつはアドニス將軍だけじゃなく、ジェラベルンもヤバイ」

顔を上げたファールラントは、キツと表情を引き締めた。“智将”の顔だ。ラシーカは安堵したように、フツ、と微笑った。

「頼りにしてるよ」

「よっしゃ、行くぜ！」

ジェラベルンは高低差のない平地な都市である。街道のある方角は、北、東、西南の三通り。主に人の行き交うのはラッセンに続く北の街道だ。東の街道は海に、西南の街道はトゥルゲン鉱山にそれぞれ続いている。

リニアモーターエンジンを積んだイカダは、海をぐるりと回って、反乱軍を東の街道から攻めることを可能にした。西南街道の先にあるトゥルゲン鉱山は、地下資源溢れる金脈だ。ジェラベルンはこれをヴィルノアに輸出することで、なんとか財政破綻した経済の中でも貴族たちの暮らしを保持している。

西南方向 どうしても、陸路を通らなければならぬ部隊は、

クレアとシーティアの担当だった。東側から攻める部隊と同様に、海からなるべくトゥルゲン鉱山へと近づき、そこから山には上らず森を通る算段だ。王都・ジェラベルンの街並みが見えてくるや、シーティアはふと顔をあげた。

「なるほど、この感じ……。これを待ってたのね……」

「どうかした？」

シーティアのつぶやきに、クレアが不思議そうにふり返る。シーティアは、彼女の世界で最も魔力の祝福を受けた種族　グローシアンでもある。ゆえに、判った。ブラムス城から帰ってくる道すがら、アレンが森に設置した装置アレが動き始めたコトが。

「“迷いの森”に、ジェラベルンの軍隊が誘い込まれたみたいなの」「迷いの森？」

「ジェラベルンの北東に、あんまり大きくない森があるでしょ？そこにアレンは私たちの世界にある装置を取り付けたの。その装置を地面に埋め込むと、一生出口にたどり着けない迷いの森が完成する。私はあまり機械に興味ないから、詳しい原理とか聞かれても分からないけど、アレンは知識アルスイ・オーブの指輪で、フェザリアンの技術を再現したみたいね」

イメージとしては、フランスブルグ上空に浮かんでいたレザード・ヴァレスの塔、もしくは精霊の森に似ている。

存在次元をズラすことで目標に同じ道を歩かせ、ある一定範囲から対象を外に出させない。それが、シーティアの世界にある“科学技術”の一つだ。彼女は昔、このシステムをセキュリティとし

て作動させている遺跡に足を踏み入れ、難儀させられたのである。制御装置を抑えてしまえば、なんとということのない仕掛けだが、なにも知らないジェラベルン軍が、対策を打てるハズもない。

そして、この迷いの森を発動させるために、反乱軍は北側の街道から攻める部隊を編成しなかったのである。

「よしっ！ それじゃあ、派手に暴れましょうか」

郷愁を捨て、シーティアは右手をふる。と、人差し指に嵌った銀の指輪が輝き、槍を形取った。クレアは小さく頷き、軍旗を掲げる。

「行くっ！ 皆！！ あたしたちの故郷に！」

目に映るのは、貴族たちの豪華な屋敷。それでもクレアの心の中にあるのは、あの焼け焦げた 廃墟とも呼べない貧民街だった。

「よしっじゃあ！ 出番来た来たああっ！」

威勢よく声を張り上げたのは、ザンデという名の傭兵だ。長身で肉付きのいい体格。引き締まった上半身を守るものは、左の肩当てと両の籠手のみ。自分の身の丈ほどもある大剣を握った彼は、人懐こそうな笑みをニッと浮かべた。

目の前に広がる、ジェラベルン正規軍。

東側から攻め入ってきたザンデに、兵士たちは意気揚々と弓をつがえている。

「おい！ 兄ちゃんっ！！ 団体戦なんだから、あんまり前に出んなよっ！！！」

「心配すんなってっ！ いくぞ、悪の親玉っ！！！」

ザンデは剣を上段に構えると、並み入る弓矢を刃で叩き落とし、うおおおおお、と叫びながら敵陣に突っ込んでいく。ルシオは思わず、い、と息を呑んだが

ギキイインツウ！！

言動からは予想もつかない緻密さで、弓を正確に処理していく。ザンデは弓兵の懐に飛び込み、大剣を一閃した。

「おおおりゃっ！！！」

ぶうんっ、と重い音を立ててザンデが大剣を薙ぐ。その馬鹿力たるや、五、六人の弓兵がいつぺんに三メートル程後方に吹き飛ばされたあと、地面に落下した。

「う、そだろ……？」

ルシオはちらりと若き長身の傭兵を見やった。大剣の重み、そして兵士五、六人をいつぺんに吹き飛ばす威力。ザンデは詰めた間合いで、剣を抜いて応戦する兵士の攻撃を紙一重で躲し、大剣をふる。

「ハッ！」

その楽しそうな顔たるや、自分がまるで斬られることを心配していない。ブルドーザーの如く、ザンデが剣をふる度に兵士が悲鳴を

上げて空を飛んでいく。

傍らにいたロジャーが、手斧をふり上げた。

「やるじゃねえか！ ザンデ兄ちゃんっ！ オイラも負けてられねえっ！！ いくゼツ！ エクスアーム！！」

ズゴオオオオツッ！！

突如ロジャーの右腕に装着されたカギ爪が、ジエラベルン兵を巻き込んで回転する。カギ爪の長さは一メートル強。瞬きの間に現れた鋭い爪を前に、兵士たちは目を見開いている間に吹き飛ばされている。回転するカギ爪は、竜巻のように風を巻いて兵士たちに襲いかかる。装着してから風が起こるまで、この間わずか一秒。

「おおっ！ やるなあ！ チビッこいのっ！」

ニツと笑いながらザンデがふり返る。無防備な彼に隙あり、と見たジエラベルン兵は、剣をふり下ろした。刃がザンデの脳天を割る寸前、ゴツ、という鈍い音が響く。視界が黒くなった。ふり返りもせず、兵士の鼻先に裏拳を叩きこんだザンデは、再び大剣を掲げる。鼻に直撃を食らって、兵士は白眼を剥いて倒れて行った。

「まだまだっ！ ジークビームっ！！」

ロジャーはヘルメットを外すと、それを上空に向かって投げた。げ、とルシオが息を呑む、瞬間。

ズドドドドドドオオツッ！！

規則性のないビームが、雨のようにヘルメットから放射状に降り

注ぎ、地面を、建物を抉っていく。ルシオは思わず地に伏せ、叫んだ。

「バカダヌキイイイイイッ！！ 無差別ビームをこんなトコでブツぱなすなああああ！！」

敵、味方を問わないロジャーの豪快な攻撃に、ザンデが高揚して口笛を鳴らした。

「んじゃ、俺も派手にぶちまけるか！」

ザンデは剣を握る手に、気を込めた。緑がかった黄金の闘気が、ザンデの掌に集っていく。

「ひっ！」

及び腰になったジエラベルン兵に一足で近づき、ザンデはニッと兵士に向かって笑った。

「いくぜっ！ ソニックエッジ！！」

ズオオオツッ！！

轟音を立てて、大剣の横薙ぎから強烈な気を孕んだ一撃がジエラベルン兵を吹き飛ばす。先ほどの、なにも気を込めていない一撃とは違う。ジエラベルン兵は文字通り身体をくの字に折り、高速で後方へと吹き飛ばされていった。

ガアンツツッ！！

建物に激突して、兵士がようやく止まる。その威力たるや、傍にいたルシオにまで剣圧が押し寄せるほどだ。

「ひえ〜〜!! スツゲエ、ザンデ兄ちゃんっ!! よしっ! オイラも!!」

「ハツハ〜ツ! 俺も負けねえゼツ!」

「ヒートウィップ!!」

「ザンデ流ジャステイスソオドツツ!!」

戦場に、色とりどりの火花が散る。作戦もなにもあったものではない。轟音がそこかしこが鳴り響き、ジェラベルン兵のものか、こちらの仲間の悲鳴が分からない阿鼻叫喚がわき上がる。ルシオはそんな二人をじっと見据えて

「馬鹿と馬鹿が化学反応起こしやがった……」

ナイフを握り締めながら、溜息を吐く。被害が大きすぎて、最早なにをどうすればいいのか見当もつかない。

「ルシオオオオオツツ!! 言ってねえで、止めるおお
おおおおっ!!」「」

仲間の悲鳴は、轟音にかき消されていった。

貧民街。

それは遡れば数百年前からジェラベルンに存在する、国を象徴するスラム街だ。ジェラベルン領主夫人・ソファアラはせいぜい、二十四年しか生きていないが、この焼け焦げた景色は、彼女に特殊な感慨を抱かせる。

「……反乱軍、か……」

玉座に矢文が投げ込まれてから一週間。ソファアラはいろいろなことを思い起こした。この貧民街は、ソファアラの故郷でもある。

微風が吹くと、路地を覆う砂埃が盛大に待った。緑の帽子チロルハットを押さえる。凜とした灰色の瞳を閉じて、風をやり過すと、彼女の褐色に近い金髪がなびき、彼女の頬を弱く打った。雀の尻尾のように一つにまとめた後ろ髪は対照的にあまり風になびかない。微風であっても、凄まじい砂塵だ。この場所はまるであのころから変わらない。幼いソファアラを、妹のミリティアと共に生き永らえさせてくれた、想い出の場所。

ソファアラにとっては、辛い想い出の方が多い場所。

彼女は、す、と切れ長の双眸を開くと、手にした弓をつがえた。

びゅっ!!

容赦なく、矢が貧民街の物陰を射る。鋭く走った矢は、どつ、と重い音を立てて瓦礫に突き刺さった。ソファアラの桜色の唇が、そ、と開く。

「それで、隠れているつもり？」

人の気配を探る術は、幼いころより叩き込まれている。まだ貧民だったころ。日銭を稼ぐために身をやつした“奴ら”から。

物陰から現れたのは、レーザーアーマーを丁寧に着こなした少女・クレアだった。気の強そうな藍の瞳がこちらを睨んでいる。ロングソードを手にした少女は、敵意をむき出しにしていた。

「アタシたちの街、返してもらおうよ」

肩まで真っ直ぐ流れる赤い髪を、クレアはさっと払った。上体をかがめ、踏み込む。

「ハアツー!!」

下段から斬り上げる。ソファラは紙一重で躲すと、弓をつがえた。

ヒュヒュンツッ!!

「っ!!」

正確な射撃。ほぼ同時に放たれた二本の矢が、クレアの赤髪をさらう。屈んで躲したのは良いが、ドツ、という鈍い衝撃のあと、肩をソファラに踏みつけられた。無表情に三本目の矢をつがえ、切っ先をクレアの鼻先に突きつける。ソファラの動きに無駄はない。ただのジエラベルン領主夫人と、嘲笑う暇もなかった。

「……………!!」

「お別れね」

冷たい瞳。クレアの凍った顔も、彼女にとっては見慣れたものだ。

(……………こんな戦いを、いつまで繰り返せばいいのかしら)

無表情の仮面の下で、ソファラは思う。そのときだった。

グオウツツ!!

咄嗟に屈めたソファラの髪を、鋭い切っ先がさらっていく。視界の端に見える凶悪な刃。ニメートル強の長大な槍をふるう少女は、嫣然とソファラを見つめていた。腰まで流れる黒い髪と、金と蒼銀の瞳。

「くつ！」

ソファラは一足で後方に飛ぶと、敵と距離を取った。やや不意打ち気味に放った横薙ぎをかわされ、少女が、へえ、とつぶやきながら、ぽんぽんと肩を槍の柄で叩いている。無防備でありながら、瞳だけは冷静にこちらを見据えて。

「シ、シーティア……！」

「大丈夫？ クレア」

「う、うん。助かった……」

「ん」

シーティアは微笑うと、静かに腰を落とす。斜に構えたシーティアの槍を見据え、ソファラもまた、弓をつがえる。

(強い)

直感的に、ソファラは思う。先ほどの横薙ぎを躲せたのは奇跡に近かった。しかし、彼女も死ぬわけにはいかない。

(奴らを、皆殺しにするまで)

ぎゅっと唇を引き結び、構えた。

それを見つめ、シーティアは眼を細める。感心したように息を吐いた。

「貴族にも、あなたのような人がいるのね。でも。それならどうして、大切なモノを奪われる痛みが分からない？」

「敵と交わす言葉はないわ」

ソファラはにべもない。

「ふうん？ あなたはなにを支えに戦っているの？ そうやって、自分の大切なものだけを守ればそれでいい”って。そんな考えじゃ、いつか奪われるわよ。かけがえのないものを」

ソファラの瞳は一ミリも動かなかった。矢をつがえ、放つ。

ひゅんっ！

シーティアは首を軽くひねっただけでかわす。一見無防備だが、隙のないシーティアの動き。同時。二矢。蛇行する二本の矢が、シーティアに迫った。彼女は半身を切っただけでかわす。

「敵と交わす言葉はない”？ あなたの敵は、なに？」

「剣を取っておきながら、ぬけぬけとよく言えたものね」

「あなたは、大切な者を奪われたことがないの？」

「この世には、必ずしも互いの意見が一致するとは限らないのよ」

「そうね。だから人は、お互いに譲り合うのよ。自分のことしか考えない人間は、あなたたちの言う不死者となんら変わらないわ」

「だから？ あなたたちは私の夫のために兵を退いてくれるの？」

ソファアラは氷のように冷たい瞳で、静かに笑んだ。シーティアは無言で思考をめぐらせる。

少なくとも、ソファアラの矢は他のジェラベルン兵とは違う。

“貧民”だからと、蔑む刃を向けてくる兵士たちとは。

シーティアは、スツと瞳を閉じた。今一度瞳を開けたとき、その金と蒼銀の双眸は一切の容赦を捨てた、氷の刃となる。

「クレア。下がってなさい」

「！」

聞いたことのない落ち着いたシーティアの声。クレアは思わず息をのみ、彼女をうかがった。

「シーティア様！」

彼女の肩に留まった妖精型のホムンクルス・ピティが、赤い髪紐を手にふわりと舞った。絹のように艶やかなシーティアの髪を、ピ

ティはキュツと髪紐でポニテールに結び上げる。

途端、凜々しく形取られたシーティアの瞳が、ゆらりと揺れた。

右手をふる。いつもは槍を形取るリングウエポンが 刀と化した。

シーティアの真の武器・レギンレイジに。

それは、両手剣の柄の長さを持った刀だった。一般的な日本刀よりも柄が長く、薙刀よりも短い。そんな代物。

シーティアはそれを革ベルトに差すと、ざつ、と刃を引き抜いた。

「私にも、退けない理由がある。 だから」

金と蒼銀の瞳が、じつとソファラを見据える。こちらの様子を窺う色は、もう残っていなかった。

「詫びるつもりはない」

シーティアがつぶやく瞬間。ソファラは後ろに下がって矢を三本放った。

が。

ザンツー！

「っ！？」

二メートルはあつたハズの距離が、一瞬でゼロに。

縮地法で接近されたソファラは目を見開くと同時、レギンレイジの刃で一閃。胸を裂かれた。

血飛沫が舞う。

それを目で確認する前に、ソファラの意識は、ぐるんつ、と暗転した。

……どう、

前のめりに倒れたソファラを冷たく見下ろし、

「さ。先に進もう」

「う、うん……！」

シーティアはクレアに言う。気押されながらも頷いたクレアは、きゅっ、と表情を引き締めた。

風が、貧民街に吹く。

ジエラベルン東部へ向かう直前、シーティアは横たわったソファラを一瞥した。

「あなたの夫も、きっとこの戦いが終われば……。だからそれまでは、休んでいなさい」

誰にも聞こえないように、そっと。

彼女はつぶやくと、あとはふり返らずにクレアたちの後を追った。

4 ジェラベルンの戦い（後編） 蘇芳の目覚め

「アーノルド様っ！！ 敵軍、西南方向と東方向より進軍してまいりましたっ！！」

執務室の扉が乱暴に開かれた。ジェラベルン正規兵の青年がまるぶよに転がり込んでくる。兜の下で、彼はブロンドの髪をへばりつかせ、肩で息をしている。見るからに汗だくだ。ジェラベルンを実質統べる公爵、アーノルド・ノーウエルは眉間にしわを寄せた。

「敵軍……だと？」

不穏なことを言う。

と、鼻を鳴らす。すると、ジェラベルン正規兵の青年はハッと畏かしこまって頷いた。

アーノルドは顎に手をやる。生来の糸目を、さらに細めた。

「フアーラントめ、使えぬ男よ！ 所詮は平民かつ！！」

ラッセンで抑えきれなかったと見るや、アーノルドは、フンっ、と鼻を鳴らして持っていたペンを投げ捨てた。しかし、そのあとで、彼は目を丸めた。

「……西南？」

ラッセン襲撃の報告は、先ほど玉座の間で聞いた。しかし西南とは。アーノルドは執務机に広げた書類を適当にたたむと、給仕に大きめのサイドテーブルを持ってくるよう言い、その上に地図を拡げるよう、命じた。

のつそりと華美な装飾が施された椅子から立ち上がり、公爵はサイドテーブルに歩み寄る。西南西南……とつぶやきながら、地図の上にあるジェラベルン都市を指でなぞった。やはり、西南はトウルゲン鉱山のある方角だ。海からも遠く、軍事国家ヴィルノアとは対極にある位置。

それを確認するや、アーノルドは大仰にフンツ、と鼻を鳴らした。口端には余裕の笑みすら浮かぶ。

「そんなもの、貴様らでなんとかするがよい。ヴィルノアの息がかかっておらぬとあらば、このアーノルド・ノーウェルが手を下すまでもないわ！」

「し、しかしアーノルド様……！」

「下がれと言っているっ……！」

びくり、と正規兵は身体を震わせた。この男　街の執政者、アーノルド・ノーウェルの機嫌を損ねれば、たとえ奴隷でなくとも簡単に命を落とすことになる。大陸的に見れば、ジェラベルンは決して強国ではないが、国内における公爵の権威はジェラベルン国王よりも上だとされているのだ。

「し、失礼いたしましたっ！」

九十度腰を折って、正規兵が部屋を去っていく。それを見据え、アーノルドはネズミでも追い払ったように鼻を鳴らした。不機嫌そうに刻まれた皺。そもそも軍は政治的な問題で、このアーノルドが書類に判を押さねば出陣できないことになっている。それをアドニスもフアーラントも、まったく事務的なことを差し置いて出陣してしまった。自己顕示欲の強いアーノルドには、それが気に入らない。

ラッセンで失態を犯してくれたのは、二人を追放するいい機会になるだろう。

大国ヴィルノアと緊張状態にありながら、アーノルド・ノーウェルは軍事に疎く、そのような悠長なことを考えていた。

執務机に戻り、書類を整理する。

先日の矢文が届いたのも、元はといえば我々の許可なく貧民街を焼き払った貴殿の失策では？

不意に、あの気に入らない女の顔が脳裡に浮かんだ。どうやって甥に取り入ったのかは知らないが、貧民風情の小汚い女。

(そう言えば、ラウラが言っていたな……。最近、ジェラベルンに盗賊ギルドが出没しているとかなんとか……。)

焼き討ちにこそ反発したものの、ジェラベルン当主、ラウラ・ノーウェルは、貧民街の弾圧には協力的だった。温和なあのが、なぜそのような結論に至ったのかはアーノルドにも分からないが。

(まあよい。所詮貧民よ)

アーノルドは思考をふり払うと、書類に目を落とし、ペンを手に取った。

人探しもずいぶん上手くなったものである。そう実感するのは、主にこの指輪の御蔭だが。

「詩帆さんは、この先の遊郭に捕らわれているようですね」

「本当かッ!?!」

蘇芳が鬼の形相でふり返る。アレンは頷いた。

「あの、姉様はどちらに……!?!」

「貧民街の辺りだ……。ただしこちらは　、おい！　ミリティア
!?!」

話が終わる前にミリティアは駆け出していた。呼び止めるが彼女は止まらない。アレンは溜息を吐くと、蘇芳に向き直った。

「蘇芳さん」

「すまないが俺も、詩帆を遊郭などに置いておくわけには行かぬっ
!」

「……分かりました」

アレンはミリティアが去って行った方角を見据えると、反対方向
ジェラベルンの遊郭のある方角に鋭い視線を向けた。

「行きましよう」

「すまんっ!」

駆け出す。と、意識下にいるシルメリアが不服そうにしている気

配が浮かんで来た。

『アレン』

(心配するな。あつちには、ロジャーとルシオがいる)

ミリティアが去って行った方角　貴族の高級住宅街を一瞥し、アレンは心の中で答えた。シルメリアが声をひそめる。

『なぜ？　彼女は姉シファラの所に向かうのではないの？』

(……………)

『黙ってないで答えなさい』

(それはお互い様だな)

アレンは言つと、遊郭の尖塔を見上げた。

「詩帆おおおおおっつ！！」

哨戒するジエラベルン兵を、蘇芳は容赦なく斬り伏せて行く。戦鬼の如く地を駆る姿は　まさに鬼。しかし、蘇芳の躍進も、“それ”を認めるまでの間だった。

美しい栗色の髪。腰まで流れる栗色の髪は、風にそよいでサラサラと光を放っている。かつて歌姫と呼ばれていた少女の前には、

忘れもしない、百鬼衆を皆殺しにした　白銀の鬼が立っていた。

返り血一つ浴びず、ジェラベルン正規兵の槍を持った白銀の異形は、そこにいた。

「き、貴様……!!」

蘇芳は思わず足を止めた。異形がいる場所まで数メートル。ジェラベルンでは障害物が多くて、正規兵と相對している者の姿は窺い知れない。しかし、この威圧感　　気配を忘れるハズもない。

「ええい！　怯えるなっ！　敵は一人だっ！！　なにをやっておるか！！」

遊廓に布陣した指揮官が声を荒げた。ざつと五十人はいる。彼らは弓を手に、白銀の異形を取り囲んでいた。

「馬鹿な奴め！　こんな逃げ場のない所で弓兵を相手にせねばならんとはな！！」

「避ければ、貴様の後ろにいる女は死ぬっ！　受けざるを得まい！　死ねえええ！！」

兵士の言う通り、異形の後ろには詩帆の姿があった。白銀の異形金と蒼銀の瞳を持つ黒髪の青年の後ろで、小さくなっている詩帆が。

「詩帆っ！！」

「よせ……!!」

蘇芳とアレンは同時に叫んだ。

ヒュパパパパアアンツツ！！

風を切って、五十を超える矢が白銀の異形と詩帆に向かって降り注ぐ。蘇芳が息を呑んだのも束の間、白銀の異形　青年は迫りくる弓を見据え、一閃した。

斬っ！！

槍の穂先から一瞬、白い光のようなものが走った。いわゆる“音速の壁”だ。五十を超える矢が、槍から放たれた衝撃波で止まり、方角を変えて地面に叩き落ちる。

ジェラベルン兵たちに動揺が広がった。

「な、なに……！！？」

「奴は剣風だけで、すべての矢を落としたというのか……！！？」

「あの長槍をあも容易くふり回してやがる……！！！」

「う、うああああっっ！！！」

そこで、怯んだのが悪かった。弓をつがえる手を止めた兵に向かって、青年は小さく鼻を鳴らす。

「雑魚が。話にならん」

トン、という静かな踏み込み音。

それで十メートルの間合いを一気に詰めた異形の青年は、槍を一閃した。傍目には、“消えた”としか認識しようのない体裁き。ザツ、と彼が姿を現したのは、正規兵の背後だった。

静寂。

「
」

直後。糸の切れた人形のように次々と倒れる人、人、人……。抵抗する間もなく沈黙したジェラベルン兵をふり返って、異形の青年は槍を納めた。

「心配すんな。テメエら下種の命でも、詩帆殿は涙を流されるだろう。殺さずに置いてやる」

「
」

青年の言葉に、蘇芳は目を見開いた。百鬼衆を皆殺しにした異形の青年が、情けを？ そんな疑問が脳裡をかすめたとき、こちらに視線を向けた青年が、アレンに向かって言った。

「
で、よろしいか？ アレン殿」

「
……………心臓に悪いな、デュラン」

深い溜息を吐いたあと、アレンが胸を撫で下ろす。デュランと呼ばれた異形の青年は、そこで視線をアレンから蘇芳に向けた。

「ほう。そこの朴念仁を連れてきてくれるとはありがたい」

言いながら、かつかつと軍靴を鳴らして、アレンに近づいてくる。

「お前もこの世界に来ていたのか」

「アレン殿。少し失礼」

「？」

彼はアレンの脇を通り過ぎると、蘇芳の下でぴたりと足を止めた。そして

ゴツ！！

裏拳一発。蘇芳の右頬を鋭く穿った一撃は、彼を軽く宙に浮かび上がらせて　一メートル先に落下させた。

「……………！」

詩帆が驚いて、慌てて駆け寄る。彼女に助け起こされるまでもなく、蘇芳は頬を押さえて異形の青年を仰いだ。

「な、なにを……………！」

「テメエの惚れた女ぐらい、命に代えても守り抜けっ！！……………情けねえ。こんな男を見込んだとはな」

「っ！！」

吐き捨てるように放たれたデュランの言葉に、蘇芳は返す言葉が見つからなかった。詩帆が、蘇芳の前で両手を広げる。まるで庇うように、デュランを見上げる。ふるふるすると首を横にふる詩帆を見て、

異形の青年は眉間に刻んだしわをそのままに、語気だけをわずかに和らげた。

「……なるほど。詩帆殿には、その朴念仁が必要か」

「……。状況はよく分からないが、納得したようだな」

あまり理解していないが頷くアレン。ふり返ったデュランが、改めて一礼してきた。

「ゲヴェルの波動を感じてきてみれば、アレン殿がいるとは。ということは、当たりか？」

「……まさか、お前も？」

シーティアの弟　カーマインを探しているのか。と、問おうとして、それを口にする前に、デュランが溜息を吐いた。

「お前も、ということとは……あの方ではないか」

「……………」

ありありとしたデュランの落胆に、アレンは閉口した。デュランが空を見上げる。

「大方アステアか、シーティア殿か……。だが、あの人間嫌いのアステアがアレン殿の頼みとはいえ、人間の軍を率いはすまい。となると、考えられるのは一人」

「ローランディアは大丈夫なのか？」

シーティアたちの故郷を思い出しながら問うと、デュランはにべもなく頷いた。

「御安心を。貴方が育てたグレナディア。俺たちがいなくともなんとかするでしょう。アレも俺たちと同じ、ゲヴェルの端くれなのですから」

「……そうか」

この分だとシーティアの妹まで“彼”を探していそうな気がしたので、アレンは強制的にそれ以上考えるのをやめた。

「ともかく。今はジエラベルンだな」

「この国のことはあまり知りませんが、革命でもなさるのですか？」

「ああ」

「なるほど。相変わらず厄介事に絡まれる方だ。まあ、そんな所が、我が主のお気に入りなのかも知れませんが」

相変わらず、と指摘されるほどデュランと同じ時を経たわけではないが、彼の洞察力は侮れない。

デュランの視線が、ふと蘇芳を向く。蒼銀と金の瞳が。

「テメエ、得物はどうした？」

蘇芳の手には、ロングソードが握られていた。侍の彼らには、まったく馴染みのない得物。

「……俺は多くの仲間を失い、剣を握る意味を探していた。真に守るべき者が傍に居ながら」

懺悔のようにつぶやく蘇芳に、デュランの眉間のしわが深くなつた。

「つくづく朴念仁だな。テメエはそうやって、一度大切な物を失くしていながら、同じ過ちをもう一度繰り返すつもりか？」

「俺は剣を握ることで道を過あやまった。そして 今度は剣を握らずにいたからこそ過つてしまったのだ！ ……笑いたくば笑え。異形の者よ」

「阿呆が。笑いも止まるわ！」

「……」

「剣を握る意味だと？ それほどの腕がありながらテメエ、戦いのなんたるかをまったく理解していねえようだな！ それで殺されて行った奴らは浮かばれまいよ！！」

ぐ、と蘇芳の拳に力が入る。胸の内側が抉られるような感覚。だが蘇芳は、この叱責を受けねばならない業がある。デュランの鋭い言葉は正確に、的確に、蘇芳の弱い部分を貫いていく。

「テメエが戦つた奴にも護りたい者がいたはずだ。百鬼衆などという外道の集まりから、勝てぬと分かっても必死で剣を向けようとした者がいたはずだ！！ テメエはそいつらを斬つただぞ……！！ そのテメエが、剣を握る意味？ どの面下げて吼えてやがる！

！ 甘ったれるのもいい加減にしゃがれ！」

「っ、！」

「デュラン。俺は彼と剣を合わせたことがない。だから、正確ではないかも知れないが。……彼の眼は、少なくとも武人の目だ。その彼が道を誤ったと言うなら、それは彼が目指した道が、彼の通ってきた道と違っていたからだ。それに戸惑い、剣が鈍るのは、剣を持つ者ならば誰もが通る道。それでその子を失うことを責めているのだとすれば、それは、お前にその子を守るだけの力があるからだ」

「道の異常には、こやつも最初から気付いていたはずです。少なくとも詩帆殿に会う前に。だから、テムエは詩帆殿を斬れなかった」

アレンは自嘲的に笑った。

「かもな。……だが、だからこそ認められなかったはずだ。自分が護りたい者　ふるってきた刃の矛先が、違っていたんだからな。そして、それゆえに仲間を失った。誤りに気付いた。彼はそこで、初めて考える余裕を得たんだ」

アレンの肩を、蘇芳が制した。

「貴殿の心遣い、俺には過ぎたものだ。……彼はなににも間違っていない。俺は、俺が今までさんざん切り捨てていった者たちこそ、守りたかったのだ！」

血反吐のように言い捨てる蘇芳を、デュランはただ静かに見据えた。完全な静謐。ジエラベルンで起きている反乱軍と正規軍の戦いすらも忘れさせる　静かな世界。

「今テメエは、その守るべき者のために戦える。この戦いと今までの戦いの違いを　少なくとも俺に諭される前に、テメエには気付いて欲しかった」

「……………」

蘇芳は拳を握りしめる。そう、蘇芳は気付くべきだったのだ。少なくとも刀を手離していなければ、こんな遊郭に詩帆が連れてこられることはなかった。

(俺は、一体なんのために　)

詩帆を連れてきたことが裏目。

海藍を出たことが裏目。

刀を捨てたことが、すべて裏目。

無意識に歯を食いしばっていた。ざりりと歯軋りの音が、耳の奥で聞こえる。

静謐な静寂。

その中で、デュランはさらに言葉を続けた。

「道に迷うことは誰にだってある。だが、俺たち剣士は剣をふるこ
としか出来やしねえ。なら、せめて剣をふる理由くらいテメエで決
めろ！　自分のふる剣に誇りを持ってなくなったら、剣士は終えだ」

「なぜ……………貴殿はそこまで俺に？」

「……………俺も偉そうに吼えているが、あの方に会うまでは剣をふるう
意味など考えたことはなかった。剣をふるうことが、苦痛で仕方な

かった。テメエは……、そのころの俺によく似てやがる」

「……俺が？」

問う蘇芳にデュランは頷いた。
と。

「悪いが、話はそこまでだ。 敵がきた」

アレンが場を打ち壊す。と。彼の視線の先には、迷いの森と化したジェラベルン東方の森から脱出を果たした、ファールントの部隊がいた。

デュランは腰に差している一本の長刀 デュランダール 白柄の長刀を鞘ごと引き抜いた。

「アレン殿。この場は俺に任せて頂きたい」

ふり返ったアレンが、目を細める。デュランの視線の先 そこに、蘇芳がいた。

「この刀は我が主の背を守り抜くために俺が得た刃。この刀はなにかを、誰かを護るためにふるわれてきた。その刀、この場だけテメエに預ける」

「！」

蘇芳が目を見開く。デュランは静謐な視線のまま、鋭く言い放った。

「守り抜いて見せる！ テメエの、守るべきものを！」

自分の同僚を殺した男を、認めるわけにはいかない。そんな
想いも、蘇芳の中になかったわけではない。だが。蘇芳は横たえら
れた白柄デュランダールの長刀を見据え、詩帆を一瞥した。

護りたい者。

今まで切り捨てた者たちこそを護りたいと告げた蘇芳に、最早こ
の場で迷う道理はない。

蘇芳は、白柄デュランダールの長刀を握り締めた。

「……天意に従い、この蘇芳、敵を討つ!!」

黒瞳に力が宿る。それを、アレンは引きとめた。

「待て、いくら白柄デュランダールの長刀とはいえ彼は普通の人間だ！ 軍勢を相
手取れと言うのか!？」

別段、蘇芳を侮ったのではない。ただ、アルスイ・オーブを常時
発動させているアレンには 敵将・ファールアントの危険性があり
ありと実感できた。北方將軍ファールアントは、一見して分かる強敵
ではないが、この智将を相手に一対多勢を申し込むのは無謀過ぎる。

「心配すんな。俺がテメエに力をくれてやる……。テメエの力をな」

デュランは言うと、掌に集った青白い光球を蘇芳に向かって放つ
た。

「ヒーリング!」

蘇芳の身体が光に包まれる。と、

「ぐ、おおおおおお……！！！」

蘇芳はうずくまった。

「なんだ……これは！？ 力が……、漲ってくる……！！！」

どくんつ、と心臓が高鳴る音。以前、呪歌で強制的に身体機能引き上げられたが、それとは違う。力強い波動。蘇芳は刀の柄を握り締めた。

これなら、“いける”。

そう思わせるなにかが、力が、気持ち、湧きあがってくる。

「俺の波動でテメエの中に眠る力を目覚めさせた。その状態ならば人間はおろか、不死者相手にすら遅れは取るまい」

「……………」

まるで、アルトリアで戦乙女が見せたような力。とアレンが突っ込む間もなく、彼は頭を抱えた。この場面で、敵を殺すな、とは言えない。

だが兼定に劣らぬ切味を誇る白柄の長刀デュランダルをもってすれば

『アレン』

「分かっている……が、……どうしたものか……」

苦しげに表情を歪めた。妙案が思い浮かばない。

剣を合わせ

ないことが、こちらにとっても敵軍にとっても利点メリットなのだが。

「アレン殿。一つ頼みがある」

「なんだ？」

「あんな貧相な格好ナリでは侍とは呼べぬ。その指輪ならば、作ることが出来るでしょう。せめて死に装束ぐらい、着せてやってはもらえまいか？」

縁起でもないことをさらりと言うデュランは、ズボンのポケットから面を取り出した。かつて、百鬼衆と呼ばれた侍たちの面を。

(……防具を作れと？ そんなことが、アルスイこれ・オーブでできるのか……?)

『私の力 戦乙女のマテリアライズ能力を使えば、なんと言うこととはないわ。けれど、“一人も殺さない”という条件を満たせるとは思えないわね』

(……………。シルメリア、俺に力を貸して欲しい)

『なにか考えがあるの?』

(いや。……ただ、純粹に見てみたい。彼の決断を)

アレンは言って、蘇芳を見た。意識下で、シルメリアの溜息が聞こえる。

『相変わらず話にならないわね』

(分かっている。……死なない程度の加減は、俺の方で行ってみせる。このアルスイ・オーブにかけて)

それに蘇芳がまだ、勝利すると確定したわけでもない。アレンは神経を更に尖らせた。

『……………いいでしょう。貴方がそこまで言うなら、少しだけ力を貸してあげる』

(すまない)

アレンの掌に魔力が集う。否、“魔力”というには語弊のある白く澄んだ力。“神力”が。

アレンの背に、一瞬金髪 of 戦乙女が浮かび上がった。
瞬間。

ぱああああああ……っ！！

凄まじい光が蘇芳の身体を包み、みすばらしい奴隷の服装が見る者の目を惹く、雄々しい紅鎧へと変わった。

「これ、は……！」

蘇芳が目を見開く。だが、彼はふり返りはしなかった。

5 ジェラベルンの戦い（後編） 北方將軍ファールラント

「ゼエゼエ……ッ！ ようやく、帰って……来れたぜっ！！」

肩で息を切らしながら、ファールラントは両膝に手をついた。ジェラベルン北東の森に捕縛結界が敷かれていると気付いたのが、かれこれ数十分前。そこから、自力で結界を破るために魔力を乱用した。ジェラベルン北方軍には魔術師がファールラント一人がいるのみなので、他の者は皆、結界を破ろうとがんばるファールラントを応援するだけだった。ゆえに、このとき疲労しているのはファールラントだけである。

「將軍っ！ 言ってる場合じゃないよ！ 敵襲だ！」

「お、おうー！」

元気よくラシーカに言われ、ファールラントは額の汗をぬぐった。
と。

「おお！ これはファールラント將軍！」

聞き慣れたダミ声に、ファールラントは眉をしかめた。遊郭近くにあるジェラベルン中央軍駐屯地の指揮官だ。彼の脂っぽい顔を見ると同時に、北方軍の兵士たちは小さく舌打った。

ファールラントは膝から手を離し、さわやかに笑う。

「これは中央軍の。戦況が荒れているようですが、手をお貸しいたしましょうか？」

遊郭近くにある駐屯地を一瞥し、申し出ると、指揮官は不満の色を顔に浮かべた。

「結構。我らジエラベルン中央軍に、北方の手助けなど無用。今にこの騒ぎを収めてしんぜよう。歩兵前へっ！弓兵は矢をつがえ、指示があるまで待機っ！！歩兵部隊、あのバケモノを足止めよっ！！！」

おおおおおっつ！！

中央軍の兵士たちが声を揃える。

剣を手に蘇芳へとなだれ込んでいく中央軍兵。それを見据え、フアーラントは、あちゃ、と額を叩いた。

「重装歩兵でもないのに、そんな戦い方したら……」
フアランクス

「肉体、魂、精神のすべてを討つっ！！奥義、氷葬方陣！」

轟音と同時、巨大な氷塊が天に向かって吼え、中央軍兵を軽々と吹き飛ばす。鋭い氷柱に串刺される兵士たちの悲鳴が、遊郭のある大通りに響いた。

デュランはジエラベルン兵を斬り伏せながら息を吐く。

「手加減しろ、とまでは言わねえが……」

ちらりとアレンを見る。右手の指輪　アルスイ・オーブに意識を集中している青年は、デュランの言葉になにも返してこなかった。デュランとアレン、二人の後ろには、遊郭に捕えられていた奴隷たちがいる。ジエラベルン兵を斬り捨てる二人は、その場から一步も動かない。

倭人たちに、手は出させないと言うように。

「マジかよ。まだこの期に及んで援軍があんのかよ」

フアーラントは冷静に戦況を見渡し、顔を歪めた。ラシーカが額に右親指をつけて、きよろきよろと首をふる。

「でもさ。これで中央軍全滅しちゃったね。今ので

「助けてくれえええ！」

「死にたくねえええ！」

「あゝあ、奴ら逃げちまいましたよ。將軍」

北方軍兵士が、呆れたようにつぶやく。

「待て！ お前たち、俺を置いて行くなあつ！！」

「あの指揮官も逃げちまいましたね」

更に、呆れた様子の北方軍兵士。

フアーラントはパシツと額を叩いた。逃げまどう中央軍兵たちは、いつも自分たちを平民ユの寄せ集めと称していた連中だ。

「うっは！ なあ、ラシーカ。中央軍も逃げちまったんだから、俺たちも……」

「ジェラベルンが落とされても構わないなら、逃げてもいいけど？」

「……だよな〜！　かくも世は厳しい……！」

よよよ、と涙し、ファールラントは袖で目許をぬぐった。
鬼の面を被った蘇芳が、ゆっくりとふり返る。　北方軍に。

「これ以上の戦は好まん。早々に立ち去るが良いっ！」

鋭く、雄々しい蘇芳からの忠告。
ファールラントは首をひねった。

「なあ、ラシーカ。アイツなんて言ったんだ？」

「“命乞いをしても無駄だ。お前たちは今から俺が斬り殺す”って」

「マジかよっ!?　アイツ、あんな落ち着いた声音でそんなこと言
ったのかっ!？」

「そもそも倭人の言葉が、私に分かるわけないじゃない」

「だよな〜」

ファールラントは溜息を吐く。
と。

「もう一度だけ言おう。立ち去れ」

今度は、理解できる言語が蘇芳の口から零れた。
ファールラントは目を見開く。アレンが翻訳機「ミニニケータ」の効果範囲を広げた
のだ。

「彼はこう言ってる。“立ち去れ。”」

「なんか今のセリフ、俺にもそう聞こえたよ」

「あの倭人、もしかして私たちの言葉分かるのかなあ？」

「うそ………！ 超インテリじゃんっ………！」

ラシーカの言葉に、ファールラントは感動したようにぱちぱちと瞬くと、蘇芳を仰いだ。

「お主ら、戦う意志がないなら去れっ！！」

紅の鎧武者は、鋭く言い放った。その鬼気、剣気に触れ、ファールラントの表情が引き締まる。彼は、こほんと咳払うと、仕切り直した。

「おっと、こいつは失礼。なかなかの武人とお見受けする。……え、俺の名はファールラント。一応、この国の將軍をやってる身でね。ここで逃げたとあっちゃあ祖国に会わず顔がない」

飄々とした男だ。だが、動きに無駄はなく、蘇芳は目を細める。

厄介な男だと、蘇芳は思った。

「立ち塞がるというのであれば、斬り伏せるのみっ！」

刀を、突きを放つように寝かせ、上段に構える。

「おっと、こいつは堅物だ。ま。最初っから話し合いなんてのは……

…無理だよな」

「いいのか？ お前たちに勝ち目はないぞ」

ファールラントに忠告を發したのは、アレンだった。

片眉をつり上げ、ファールラントは蘇芳を警戒しながら、アレンを見やる。

「勝負つてのは、強い方が必ず勝つとは限らない」

アレンは笑うだけだ。その瞳に、油断ならないものを見つけ、ファールラントが身構えた。

その、瞬間。

「そうか。だが、様子見に時間をかけすぎたな」

アレンがつぶやくと、北方軍を囲うように反乱軍が現れた。全員雷の走る剣を手に、布陣している。

ラシーカがひきつった顔で、真面目に言い放った。

「將軍……こいつはヤバい状況だよ。なんかあいつ、將軍より賢そうだもん」

「しまったあッ！ 果たしても、裏の裏の裏の裏をかかれたあっつー！」

「つまり、裏」

「だから裏の裏の裏の裏の……！」

「もういいですよ、將軍。副将。仲良いの分かりましたから、まず

はこの状況、どうにかしましょうよ」

北方軍兵士に言われ、ファールントは渋々蘇芳たちに向き直った。

「まあ、しょうがねえな」

「無駄な抵抗はよせ」

アレンが言い放つ。その容赦ない瞳を前に、ファールントは笑ってみせた。灰色の瞳は、敵軍に包囲された今でも動かない。

「無駄かどうかはやってみないと分からない」

「あれを見てもか？」

アレンは言うど、ジェラベルン中央に位置する王城　ジェラベルン城を指差した。

そこに今、火の手が上がっている。

「デメエら……！」

ファールントの頬に冷や汗が伝う。ぎり、と奥歯を噛みしめたファールントは、怒りの瞳をアレンに向けた。

「將軍、こいつらに構ってる暇はないよ」

「分かってる」

ラシーカに頷くなり、ファールントは神経を尖らせる。魔力を集
中。

一方、アレンは舌打った。

(再起を図るか……。ならば、相手の意志ごと断つ必要があるな)

アルスイ・オーブが燐光を放つ。と、体の内に眠る女神が問いかけてきた。

『ちょっと。今ので、あの北方軍と戦わずに済む計算じゃなかったの?』

(予定外なこともある!)

『使えない……』

「じゃ。ちょっと抵抗してみようかね」

思案顔をやめたファールアントは吹っ切れたように言った。

「当然。このまま降伏したとあっちゃあ、北方軍の名折れよ!」

ラシーカが湾刀に似た剣を抜く。と、ファールアントは笑った。前を見据えまま。

「ま、マジでヤバくなったら……逃げろよ」

「もう囲まれてるんだけど?」

珍しく声を押さえて言うファールラントに、ラシーカは片眉をつり上げて見せる。

「だったら降伏しろ。俺と一緒に死ぬことはない」

「ふう〜ん。將軍も死ぬと思うとき、あるんだ」

「冗談。俺は不死身な男だぜ」

「だって。今、負けを認めたトコじゃん」

「状況はなっ！」

「うわ、苦しい言い訳だ……」

「俺の心は折れんっ！ 絶対にだ」

「いいね。行くよっ！ 皆っ！！」

「「「「「おおおおお！」「」「」「」

北方軍の怒号が天を揺るがす。その心地良い氣勢を肌で感じながら、ファールラントは周囲を見渡した。

（一角をぶち壊せば、とりあえず包囲網は破れる。こういう場合の包囲網は、地の利を計算すれば 南！）

トウルゲン鉦山のあるジェラベルン南方は、山や木が密集し、伏兵を隠しやすい。ゆえに、一番手薄に見えておきながら、敵の陣形が固い場所。つまり敵の本命だ。

だが、本命であるからこそ、ファールアントは潰け込む要素がある
と考えた。

「行くぜっ！ プリシードグラビティ！！」

稲妻による重力場が、漆黒を形成する。それは北方軍を包囲する
反乱軍の南方へと放たれた。

ズドオオ ツツ！！

「悪いな、大魔法の詠唱はさつき済ませておいたんだよ！！」

「なんとっ！ 退路を作られたか」

蘇芳は目を見開き、舌打つ。
が。

驚いたのはなにも、蘇芳だけではなかった。

「なにっ！？ 貴様、さつきまでそっちにいなかったはず！？
…あれ？ そこ、いました？」

思わず瞬くファールアントに、笑って答えたのはアレンだった。北
方軍を西側から包囲していた青年が、そこにいる。プリシードグラ
ビティを、完全^{マジックシエル}防御魔法で掻き消して。

「敵に教えるタネはない」

アルスイ・オーブを輝かせながら、アレンは言う。
ファールアントは顔を歪めた。

「チツ！ しかし、あんたがそっちに来るってことは、やっぱりそっちが本命かつ！」

アレンは笑うだけだ。

そのとき、

「アレン！ 加勢に来たよっ！！！」

「こちらのカタは着いたぞ」

ファールアントが今、向かおうとした方角 北から、クレアとシューティアの部隊が到着した。

まるでタイミングまでもを見計らったようなアレンの表情に、ファールアントは頬をひきつらせた。

「北から援軍……。ああ、そう。じゃ、東……」

そこに、蘇芳。

「なら、西……」

デュラン。

「……っ……！」

「どうするの？ 將軍」

押し黙るファールアントに、ラシーカが問う。
まるで悪夢だ。

口の中でつぶやきながら、ファールアントは首をふった。顔を平手

打ち、雑念を追い払う。

「ってことは、だ。いずれかの方角の一人を倒せばいい。ただし問題は、あのムカつくぐらい綺麗な顔した金銀の目の男と、あの金髪の男の戦い方が、いまいちよく分からないことだな」

「つまり大ピンチ！」

「言つなああああ！！　たく。面倒くさいコトこの上ないが、あの鎧を相手にするしかないかつ！？」

「唯一、戦い方が分かってるもんね」

「でも、あまり時間はかけていられませんよ」

炎上するジエラベルン城を見据え、北方軍兵士が慎重につぶやく。フアーラントは頷いた。

「一分。……いや、三十秒。それでダメなら諦める」

「将軍がマジだ」

「副将っ！　遊びは終わりですっ！！」

「そういうことだ、マジで行くぞ！　テメエらっ！！　北方軍の力、見せてやるっぜっ！！」

おおっ、という号礼の下、北方軍は手にした剣をふり上げた。フアーラントの鋭い指示が飛ぶ。

「第一分隊、分隊長指揮の下、先行つ！ 第二分隊はその援護つ！
三分は周りを取り囲み、ラシーカが一気に駆け抜けるつ！！
いつも通りの合図で行くぞお！！」

「了解つ！！」

デュランは目を細めた。

「この期に及んでなにをするつもりか知らねえが、今のそいつとまともにやり合おうと考えるのは、自殺行為だな」

蒼い陽炎をまとった蘇芳は、まさに今、剣鬼の如き強さだ。

「……デュラン。悪いが、しばらく任せて構わないか？」

「そいつは構いませんが……？」

「すまない。さすがに北方將軍を相手に、敵の生死まで考える余裕はない」

それから

炎上するジエラベルン王城を一瞥し、アレンは目を細めた。

6 ジェラベルンの戦い（後編） 北方軍 vs 反乱軍

「ライトおー！！」

「なぜこの真昼間に、光の魔法？」

シーティアは首を傾げた。肩に乗ったピティが、ハッと顔を上げる。

「もしや　！」

「しまった！！」

ピティの声とデュランの舌打ちが重なる。
瞬間。

閃光が辺りを支配し、反乱軍は、完全に相手を見失った。
白い世界の中へ　視界が奪われる。
そして、

「今だっ！！　一気に走り抜けるおお！！」

「「「うおらああああ！！」「」「」

ファールントの号令と同時、北方軍の進軍する音が耳に届く。他の中央軍や東方軍とは違い、軽装の北方軍は、鎧が打ち鳴らす音さえ最小だ。

ファールントの頬に冷や汗が伝う。

（このまま走り抜けることが出来るかどうか　、逃げ足にかけち

や定評のある俺の部隊だが、さすがに目を潰されて戦えるような奴相手じゃ話にならねえっ！ 頼む！ 気付かないでくれよおお！（

しかし、

脇を抜けようとする兵士の一人に、

「小賢しいっ！！」

蘇芳の刀がふり切られる。

「うおっと！！」

北方軍兵士はギリギリの所でたたらを踏み、バックステップで回避した。

「あ、あ、あぶねえっ！ ……軽鎧を、軽々と切り裂きやがるっ！」

剣先が触れていないというのに、彼の肩当ては既に防御の用を成さない。表情を引きつらせる北方軍兵士に対し、蘇芳は奪われた視界の中で、敵のいる位置を睨み据えた。

「無駄なこと。たとえ目を潰されたとして、この蘇芳！ 体が動く限り戦い抜いてみせようっ！ 守るべき者のために！」

「ええいつ！ クソクソクソクソツッ！！ 完全に裏目だ……！！」

予想以上に敵の勘が良い。若武者の相手などしたことのないファラントには、“氣”を読む侍の戦い方は相性が悪かった。

「將軍っ！ まだ二十秒ある！ その間に將軍だったら逃げれるで

「しよ！」

ラシーカが蘇芳とファールアントの間に割り入るように剣を構える。そのラシーカと蘇芳の間に割り入るように、更に、ジェラベルン北方軍兵士たちが並んだ。

「あとは俺たちに任せてください、將軍っ！ 二十秒ぐらい、稼いでみせますよ！」

「ば、バカヤロっ！ お前らを置いて行けるかっ！！ 部下が一人もない指揮官なんて、シャレにもならないぜ！！ お前らこそさっさと行けっ！！！」

「生憎、俺たちが行ってもジェラベルンを再興出来そうにはねえ。けどよ、將軍ならきつとなにかしでかしてくれるんでしょ？」

「お前ら……！！！」

「ぬっ！ そうか、それほどまでにそなたは思われておるか……！ ならば、 否。だからこそ！ そなたをここで逃がすわけにはいかぬっ！！！」

蘇芳の目の色が変わる。

ラシーカは勇猛にも踏み込んだ。

「將軍は、やらせない！」

「『行くぜ！』『』」

北方軍一の剣士たるラシーカは、俊足の女兵士だ。確実に敵の“

氣”を見て刀をふるう蘇芳の斬撃を、紙一重でかわして蘇芳を攪乱する。その隙を、北方軍が援護するように、四方から蘇芳に向かって剣をふり下ろす。

「！」

ギーンッ！

それを的確に捌きながら、蘇芳は舌打った。

これは、あくまで時間稼ぎ。

北方將軍を逃がすためだけの。

「っ！」

蘇芳が無視をしてファールアントの下へ向かおうとすれば、北方軍の容赦ない刃が立ち塞がってくる。だが、だからといった的を絞るうにも、常に動きまわるラシーカと、堅実な剣術を基礎に、防衛に徹した北方軍の布陣は切り崩せなかった。

デュランは、それを見て目を丸くした。

「ほう……！こいつは大した部隊だ。その部隊にそこまで思われる將軍も、また良し。腐った国にもいるもんだ。このような猛者が」

同調するように、刃をふるう蘇芳の口許にも笑みが浮かぶ。武士^{もののふ}として、感じる。

刃越しに、北方軍兵士たちの“国を護りたい”という熱い思いが。

「そなたらの思い、しかと受け取った！ならばっ！一武人として、この一撃を放つっ！」

蘇芳の背に蒼い陽炎が立ち上る。同時。鮮やかに輝く白柄デユランダの長刀が、蘇芳の気に呼応した。

「奥義、氷葬方陣！！」

「っ！ ヤバイよ皆っ！ 下がって下がって！！」

ドゴオオオッ！！

北方軍が引き下がるよりも速く、地面から氷柱が迫立つ。鮮血をばら撒いて吹き飛ばされる部下の姿に、ラシーカは目を見開いた。

「なっ！ ……ありえない……！！」

「副将！ まだ一分隊やられたただけだっ！！ もう一度！」

言われ、ハッとラシーカの顔に生気が戻る。鋭く生き残った北方軍を見やったラシーカは、湾刀に似た剣を正眼に構えた。

「分かった！ 私に続けっ！！」

地を蹴る。蘇芳を攪乱するため、奴の懐へ。

（将軍　ちゃんと逃げてるよね？）

“氣”を読む若武者は、正確な太刀筋を打ち込み、ラシーカの剣戟を跳ね返す。彼女は奥歯を噛み、刃を返した。

（もう十秒もない。十秒経てば、この鎧の男は、視力が復活する。そうすれば　さっきの技も確実に私たちに叩きこまれるっ！）

蘇芳がふり下ろす斬撃は正確だ。だが、こちらの態勢までは、失われた視力では確認できない。だからラシーカはまだ、彼の剣戟を流し、攪乱することが出来ている。

剣士としては、圧倒的に蘇芳が上にも関わらず、だ。そのラシーカの意図を察したのか、デュランが目を細めた。

「相手が並ならぬ。だがそいつは今、俺の波動を受けている」

つぶやく彼に呼応するように、蘇芳はそれまで閉じていた目を、ザツ、と押し開けた。

ラシーカを、見る。

「視力なら疾うに回復しておるっ！！ 見事であったぞ！ 北方軍よ！！」

氷葬方陣。

地面から迫立つ巨大な氷柱が、今一度、蘇芳を足止める北方軍兵を吹き飛ばした。

今度は、確実に。

「っ！！」

ラシーカは受け太刀態勢を取る。

回避は 間に合わない。

「副将っ！！」

「ダメだ！ 私をかばうなっ！！」

「なに言っつてやがる。女を庇うのは、いつだって男だろ」

「っ！……その声……」

「プリシードグラビティ！！」

上空から降る漆黒の重力球が、氷葬方陣にぶち当たり、剣山のよ
うに伸びた氷柱を打ち砕いた。

「なにっ！？」

蘇芳は目を瞪る。戻った視力で敵を睨むと、そこには逃げたハズ
の北方將軍がいた。

「フツ……やっぱ俺がいないとダメだな。お前ら」

「こいつ……」

「ダメエ……！！」

ラシーカをはじめ、北方軍が吐き捨てる。
と、

「なに考えてんすか將軍っっ！！？」

「俺たちの努力無駄ですか！？」

「ずっと詠唱してるなんてどういっつことですか！ 逃げもしねえで
っ……！！」

「男には逃げて良いときと、逃げちゃいけないときがある。今がそのときだ。ここは戦うときなんだよ」

ファールラントは静かに言い放つと、キュアプラムスを唱えた。北方軍に活力が戻る。ファールラントは、ニツとラシーカに笑いかけた。

「そついうわけだ。俺も腹アくくつたぜ。ラシーカ」

「……大馬鹿野郎！」

鋭くラシーカが吼える。それと、シーティアが口を開くのはほぼ同時だった。

「まったくだ。それを、黙って見ている私たちだと思つか？」

反乱軍の包囲距離が狭まっている。北の包囲を指揮するシーティアが片眉をつり上げた。

ファールラントは不敵に笑う。

「一つ、アンタらは俺の魔法を侮っている。この魔法は、現代には存在しない古代魔法。ゆえにどういう術式かは俺にしか分からないっ！　そして、一つ。アンタは俺の部下たちを舐め過ぎだ。最後の一つ！　これが一番重要！　俺はジェラベルナーの智将なんだよっ！　！」

言い放つと同時、掌をたわめる。魔力が、ファールラントの右手に集う。

「光華なき混沌、上下なき漆黒。無の牢獄に捕らわれし隻眼の巨神に我は問う！　プリシードグラビティ！！」

「馬鹿の一つ覚えだな」

シーティアは無情にもつぶやくと、刀と化した己が武器
ンレイジを地面に突き刺した。 レギ

「たとえば、こういうのはどうだ？」

さくつ、

シーティアの足下にも浮かび上がる、炎の魔術方陣。それは、反
乱軍を呑みこむように強大に広がっていたが

キンツ、

と、小さな音を立てて、鎖が零れていくように、魔術方陣に走っ
た炎が？き消えた。

「さすがだな！　だが、術式はまだ終わっちゃいない！」

(これは　まさか！　……術式を防がれることを予測していた？)

シーティアは目を細める。方陣を崩したというのに、魔力の流れ
が変わっていない。

どこだ。

嫌な予感の元凶を探ろうと、周囲を見る。

代わりに、ファールアントが笑った。

「一度、防がれてるんでね。てつきり、その金髪がなんとかする
と思っただが……一体、どんなバケモノどもだ。今回の革命軍は」

最後は愚痴のような言葉だ。
デュランも眉間にしわを寄せた。

「あらかじめ防がれることを分かってて撃ったってことは　この魔法陣は本命じゃねえ。本命は……！」

（この感じ、　まさか！　包囲網全体にっ！！）

シーティアが合点するのと同じ、

（魔法陣が引かれてやがるっ！！）

デュランが目を見開いた。

「これが俺のとびつきりの、プリシードグラビティだああああっ
っ！！」

「させぬっ！！」

蘇芳が駆る。魔術方陣は遊郭　デュランの後ろにいる奴隷や詩
帆にまで広がっている。
発動させるわけにはいかない。

「させないのはこっち！　奥義・ウィーリンググリップー！！」

ラシーカが俊足で駆り、連続斬を放った。と、無数の剣から生じ
る旋風が、蘇芳の脚を一瞬だけ止める。

「ぐぬうっ！！」

受け立ちする蘇芳。
突風が吹き荒れ、竜巻が起こる。それに三メートルほど吹き飛ばされると、着地した蘇芳に、北方軍が五人がかりで斬りかかった。

(間に合わないっ!!)

クレアが絶叫する。

ファールアントの魔術方陣が、完成した。

漆黒の闇が集う。

瞬間。

聞け！ 命高鳴る神韻の旋律！

黄金の光が、反乱軍全員に向けて走った。

「っ!?!」

ファールアントは我が目を疑う。

雷を伴って現れた漆黒の重力球が、黄金の光によって跳ね返され、
中空で霧散する。

ファールアントが集めた魔力が散っていくのだ。

「馬鹿なっ!?!」

「詩帆……!!」

ファールアントと蘇芳は目を見開いた。

声を失った少女が、戦場で歌っている。

今度は 自らの意思で。

「私は決めました。自分のためにも、戦おうと」

詩帆は黒瞳を開くと、スツとファールアントたち、北方軍を見据えた。

「アンタ……！」

クレアは息を呑む。

清廉と前を見る詩帆の姿が、戦乙女のようにだった。戦場で勝利をもたらす、英霊の導き手に。

北方軍から悲鳴がわき上がる。

「こ、この期に及んで！！ あの倭人も術者かつ！！」

「フン、うるたえんじゃねえよ」

「將軍っ！？」

「あの女に潰された時点で、あの金髪が動いてなかったってのが、そもそもおかしい話だ。だがな、俺のプリシードグラビティは更にその上を行くっ！」

「裏の裏の裏の裏だねっ！！」

「そういうことだあっ！ 喰らええええええええええ！！」

ファールアントに魔力が集う。デュランは目を細めた。

「今更地面をどうこうしたって無駄だぞ」

「考えられるとすれば、あと一つ」

シーティアは言って、人差し指を天に向ける。
そして、

「空に魔法陣を書いていることぐらい、気付かないと思ったか!」

「シーティア様っ!」

「行っけええええええ! シーティア!」

クレアが言い放つ。同時。シーティアは地を蹴った。上空に浮かんだ魔法方陣に向かって、柄の長い刀 レギンレイジをふりかざす。

その瞬間。

フアーラントは笑った。

「だから言ったる? テメエらは、プリシードグラビティで倒すってなああ!」

「上に浮かんでるのは、ただの囷か?」

術に疎いデュランは首をかしげた。

シーティアは魔法方陣を睨む。

(違う。だが)

上空に浮かんだ魔法方陣。この魔力の流れ。シーティアが見紛うハズもない。

だが。

ならば、

この地面から感じる魔力はいつたいなんだというのか。

(どちらが困だ!?)

「正直、この技だけは使いたくなかった……。あまりにも威力が強すぎて加減できねえからな。街に与える被害は、尋常じゃ済まねえだろう。だが、それでも！」

フアーラントは詠唱を終える。

三度目の、プリシードグラビティ。

雷を纏った漆黒の重力球を見据え、シーティアは鼻を鳴らした。

「その程度、切り払って」

レギンレイジをふるう。瞬間。地面から現れた重力球から、白い光が走った。

「シーティア様っ!!」

ピティの鋭い叱責。シーティアは咄嗟にバックステップで躲した。

ズドオッ!!

鈍い爆裂音が、シーティアの耳朵をくすぐる。黒い重力球から現れたのは、蒼白に光る野太い氷柱。

先程蘇芳が放った、氷葬方陣だった。

(やはり、地面から来るのかっ? だが、上の魔法陣は……)

地面から生える幾本もの氷柱が、三メートルほど上にある上空の魔術方陣に当たる。
瞬間。

キーンッ……！

硝子に金属を当てたときのような甲高い音を立てて、氷柱が地面へと反射した。

「シーティア様っ！ 空に浮かんだ魔法陣は、この氷を反射していきますっ！」

「上にする氷を、反射させて下に？」

天に向けてシーティアを穿たんと伸びる氷柱と、上空の魔術方陣に触れ、地面へと降る氷柱。

「っ！」

まさに氷の檻と言っていい氷柱を、シーティアはレギンレイジで切り払い、躲す。

瞬間。

四散した氷柱の破片が、地面に触れた。

カアアアッ！！

まるで光が弾けたようだった。

刃の如き鋭さを持った氷片が、無数に迫る。その様、まさに氷刃の檻。

「破あつ!!」

黄金の剣気を刃に走らせ、シーティアは氷刃の檻を一閃するが。

「俺は、俺の大切な部下たちを守るために!」

ファールアントの詠唱はまだ終わっていない。

「っ!!!?」

「十界の呼号、貴使の招来。善導の聖別がもたらせしは、魂滅による安息と知るがいい! ファントムディストラクション!!」

コオ ツツ!!

清廉な白い光が、雷の如くふる。それは氷の檻に触れると、シーティア 否、反乱軍を捕えるほどの巨大な全体魔法へと広がった。

(光を氷で、反射して っ!!)

音が消える。

白い光がクレアの視界を覆い、全てを呑みこんだ。その威力たるや、地形を一瞬で変えてしまう。まさに禁呪である。

「許せよ……! 人を人とも思わねえようなこの技は、使わねえことになっていたんだがな……!」

光の檻の中に向かって、ファールアントはつぶやいた。

「將軍！　こんな大技を残してたんですね！」

「でもこの技。將軍の体にかかる負担も大きいんじゃないの？」

嬉々とする北方軍兵士に対し、ラシーカが眉間にしわを寄せてファールントを見る。

ファールントは顔面筋だけで笑った。

「そこは企業秘密だな。とりあえず、この場を離れよう。一旦体勢を立て直すためにも、身を隠さないと……！」

ズゴオオオツツ！！

光と氷の檻の中に。

蒼雷が降った。

「
」

嫌な予感を覚え、ファールントは目を剥いたまま後ろをふり変える。

次の瞬間に、目に映ったのは“白銀の異形”の影。

一閃。

リーヴェイグと呼ばれし黒柄の刀から、蒼銀の炎が生じ、ファールントの術から反乱軍を守るように噴きあがったのだ。

爆発。

一瞬後、ファントムディストラクションの光は無数の斬線となつて、宙に散った。

斬線はそこで止まるに飽き足らず、周囲にあるものすべてを吹き

飛ばし、ファールアントたちの目前で止まる。

「なっ!?!」

「この俺に、この刃を使わせるとは。上出来だ」

圧倒的な剣気と魔力の激突によって、煙が立ち込めていた。その中央に立った男は、ニツ、と口端を緩める。男の右目 蒼銀の瞳が、興奮に底光る。

「嘘だろ……。この禁呪を……。こつもあっさりと、破るなんて……」

ファールアントは奥歯を噛みしめた。白銀の異形は鬼気をその身にまとい、告げる。

「恥じることはない。敗北を糧に立ち上がれば良いのだ。その命、散らすにあまりに惜しき男よ」

白銀の異形 デュランは言い放つと、黒柄リーウエイグの長刀を鞘に納めた。代わりにクレアが、帯電したロングソードをファールアントたちに構える。

「投降してもらおうよっ！ 私たち、“革命軍”に」

“反乱”ではなく。

そつ言外に告げるクレアの強い眼差しを見、ラシーカは横目でちらりとファールアントを窺った。

「將軍……」

「ああ。俺たちの、完敗だ……」

両手を挙げたファールラントには、ライトニングボルト最早初級魔法を撃つだけの魔力も残されてはいなかった……。

7 ジェラベルンの戦い（後編）完結 ジェラベルン決着

ジェラベルン王城。

炎上する城に取り残されたアーノルド・ノーウェルは、目の前の女を睨んで、忌々しげに歯噛みした。上等な絹のマントを汚す、己の血。側近の兵士たちは、無残にも切り捨てられている。

「ぐ、……うう……っ!!」

アーノルドは唸った。短刀を手にした女。黒いフードを目深に被った女は、まだ年若い。病的に白い肌と、褐色の金髪が、フードの端から垂れている。人間の温かみを一切感じさせない青瞳は、静かにアーノルドを見据えていた。

「貴方はやり過ぎたのよ、ノーウェル公爵」

三日月状に女が笑う。抑揚のない声だった。

不気味な女の、冷たい瞳。

彼女が握っているのは、ヴィルノア製のナイフだった。『ギルド』と呼ばれる犯罪組織で流通している、ボウイナイフ。

アーノルドは腹から流れる血を握り締める。額には脂汗が浮いていた。

「貴様ら……、貴様ら如きにつ！ この私が……っ!!」

「教主・カノンより伝言よ。“今までのジェラベルンでの働きは評価に値します。しかし、我らギルドに牙を剥いたその罪は、死をもって償われねばならない”とね」

女は無造作にナイフをふり上げると、公爵の眉間を貫いた。
血飛沫が舞う。

轟々と燃える炎が、ことのすべてを覆い隠すようにアーノルド・ノーウエルの部屋を舐めて行った。

「貴方さえ……、貴方さえいなければっ……！」

ミリティアは弓を構え、ジェラベルン領主、ラウラ・ノーウエルに矢を向けた。

「ひ、っ……！」

気弱な領主は息を呑む。ミリティアの傍らには男がいた。中肉中背。黒装束をまとった、暗い目をした男が。

「さあ、ミリティア様。我ら貧民を、貴族たちから御救いください」

男はしわがれた声で呟く。腰は曲がっており、見る者が見れば還暦を超えた老人のようにも見えただろう。その割に、彼の動きに隙はない。

ミリティアは目を見開き、頷いた。
つがえた弓を 領主の眉間に当て、矢を放つ。

ヒュンッ……！！

空を切る。

わずか十センチ先に、ラウラ・ノーウエルの眉間。 だが、矢

先は、領主の眉間を貫く前に止まった。

「っ！？ ミリティア様っ！？」

男が目を見開く。それも束の間、

斬っ！！

銀色の斬線が弧を描くと、男の身体は、どぶつ、と水音を立てて崩れ落ちた。人の形を成していたモノが、黒い霧となって散っていく。

それを見据え、ルシオは目を細めた。

「アレンさんの言った通り、俺たちの仲間には不死者がいたのか……」

「ルシオ君！」

ミリティアが息を呑む。彼女の矢を押さえていたのは、ロジャーだった。

「そこまでだぜ。ミリティア姉ちゃん」

ミリティアの弓を取り上げて、ロジャーはニツと笑う。
同時。

パンツと派手な物音を立てて、巨軀の男が駆け込んできた。青みがかかった黒髪を肩まで伸ばし、人懐こそうな笑みを浮かべた妙齢の男。彼の左肩にはアリュージェと同じく、銀製の肩当てが嵌められており、右手には身の丈と同じくらいの長さの幅広の長剣。腹筋を革ベルトで固め、青のズボンの上から銀の金属製の靴ケリーブを履いている。

ジェイクリーナスが助つ人に呼んだ、ザンデというアルトリアに滞在中の傭兵　正確には冒険者だ。

「待たせたなっ！　俺が来たからには、もう安心だぜっ！」

「ミリティア姉ちゃん。城の連中はもうオイラたちに投降してきたんだっ！　早くオイラたちもここから逃げるジャンよっ！」

「っ！　蛮族めっ！！」

ラウラ・ノーウェルは青い顔で吐き捨てると、腰に差した飾り用の剣を抜き払った。

慣れない剣の感触。カチカチと、領主の恐怖で刃先が揺れている。見ている方が気の毒なほどに怯えた男はしかし、ロジャーたちを前に、退こうとはしなかった。

「き、貴様らギルドの好きにさせない……！！　ソファラは……、彼女は僕が護るんだっ！！」

己を奮い立たせるように、ラウラ・ノーウェルが叫ぶ。

「ぎるど……？」

「護る……？」

ロジャーとルシオが首を傾げた。顎に手をやったザンデも、要を得ない顔でラウラを見る。ミリティアの表情に怒りが浮かんだ。

「戯言を！　ギルドの方々は、貧民たる私たちを育ててくださったのです。貴方々が贅沢な暮らしをしている間、今日のパンを求めて走

り回る私たちを、育てて下さったのです！」

「その代りに人殺しを、彼女に強要させてかつ……！」

「……え……？」

ミリティアが瞬く。あまりにも予想外なことを言われ、戸惑うように。

そんな彼女を見据えて、ラウラ・ノーウェルは忌々しげに顔を歪めた。

「君は知らないだろうけど、彼女はすべて、僕に話してくれた。小さいころから暗殺者になるための訓練をギルドに受けさせられて、一日のパン一切れのために人殺しを強要されたって……。でも、彼女は僕と結ばれて、幸せになるはずだったんだ！なのに、^{アイ}ギルドが……！」

言葉を切ったラウラは、口惜しそうに眼を伏せた。

誰も彼も、死んでしまえ……！！

怨嗟のように吐き捨てた言葉は、血臭満ちるその場所に相應しく思えた。

誰もかれもが、彼女の前で朽ち果てる。この弓を喰らって、あるいは、この短剣で。

さっさと立てっ！この貧民がッ……！！

貴様らに生きる価値などない……。

教主様が拾われなければ、貴様らは既にのたれ死んでいるのだッ！
殺せッ！　パンが欲しくば、速やかに敵を殺せッ！！

独房のような白く狭い部屋で、ソファラは延々と弓を取った。夜が明けてから日が暮れるまで、暗殺者としての技術を磨き上げる日々。

接近戦　取り分け、ナイフの扱いはソファラの専門外だった。だから何度も蹴られ、何度も泣いた。

十六年。

ずっと、あの独房が、ソファラの生活スペースだった。帰るのは夜だけ。

“奴ら”が眠りに就く、ほんのわずかな夜の間だけ。

その間だけソファラは、“人間”に戻れた。妹に会う、十日ぶりの夜の間だけは。

あれが、ターゲット標的……。

そんな彼女に転機が訪れたのは、ジェラベルン領主暗殺の任務を受けた、あの日だった。

“奴ら”がソファラの弓の才能に気づき、近接訓練を止めたあのころ。給仕係として屋敷に潜入したソファラは、皆が寝静まったころ、ターゲット標的の青年の部屋を訪れた。

音もなく、気配すらも消して。

だが。

ソファラは目を睜った。

誰もが眠りに就く深夜。音もなく現れた暗殺者ソファラを前に、領主は無邪気に瞬またたいてふり返ったのだ。

部屋の照明は点いていない。

領主は、見るからに気弱そうな、温和な青年だった。色素の薄い

茶髪が肩まで流れ、白い肌が月明かりを反射している。目は灰色だ。全体的に色素を感じさせないためか、どこか病弱そうだった。上等な絹の外套を羽織る姿は、彼自身が『侯爵』の身分であることを証明している。

自分とは、雲泥の 安穩とした生活を送る男。間抜けな顔の青年だったが、それでも声を立てられると厄介だ。

ソファラは瞬刻で領主に接近すると、自刃用の剣を抜いた。それを領主の首へ

「君は……どこから来たの？」

そう考えたが、領主、ラウラ・ノーウェルが穏やかな笑みを浮かべて問う方が早かった。

ソファラは舌打ち、抜いた短剣を領主には気付かれないように納める。彼女は、微笑を浮かべた。目だけは決して笑わない、笑顔という名の仮面。

彼女は穏やかな声で言った。

「申し訳ございません、領主さま。部屋の戸が開いていたようでしたので、戸締まりに」

「ああ。明かりは消してあるから、もう寝たと思ったんだね」

今思い出したように、ラウラが頷く。

ソファラは、はい、と慎ましやかに答えた。

「寝付けないようでしたら、紅茶などお淹れ致しましょうか？」

毒を仕込むために。

そのあとの逃走経路は、町さえ出ればギルドが適当になんとかし

てくれる。殺しを強要される代わり、“奴ら”はソファラたちのよ
うな実行犯に足がつくことを極度に嫌ったのだ。だから、最低限の
ラインを越えれば、逃走は難しくくない。

微笑むソファラをじっと見据えて、ラウラ・ノーウェルは、ふふ、
と声を立てた。

「どうか？」

「ねえ、君の名は？」

間延びした男だ、とソファラは思う。

やはりここで、問答無用に殺した方が良いのかもしれない。この
男のペースに付き合おうと、領主と二人きりでいた、という印象を屋
敷の者に与えてしまうことにも成りかねないからだ。

容姿に恵まれた彼女は、他の者よりも注意して日陰者になる必要
があった。

ともかく、今は部屋を出たい。

「レイラと申します、領主様。紅茶の準備を致しますので、しばし
お待ちを」

一礼して部屋を出ようとしたソファラの手を、領主はぎゅっと握
った。反射的に、ソファラはふり払おうとする。が。穏やかな灰色
の瞳と目が合った。

自分と同じ、灰色。

「お戯れは」

「レイラか……。いい名前だね」

領主はソファラの頬に触れた。顔にかかった髪を払う。ソファラはそんな彼を、あの、と小さな声で抗議したが、彼は止まらない。ぐっと背が押されると同時に、唇が触れ合う。

「！」

ソファラは目を見開き、彼を払いのけようとした。が、領主の腕がソファラの背に伸びていて、拒みきれない。

「っ！」

苦しげに目を細めるソファラに、唇を合わせたままの領主が微笑う。

ソファラは顔をしかめ、今度こそ全力で彼を払いのけた。

「……お止し下さいっ！」

肩で息を切らしながら、領主を睨む。

領主は首を横にふった。

「僕も……初めてなんだ。こんなに胸が高鳴るのは。だから　君を離したくない」

「っ、っっっ！」

最初は領主、ラウラ・ノーウエルの突然の行動に驚いたものの、惹かれていたのはソファラも同じだった。自分を慈しむような、途方もない愛情を宿した灰色の瞳。それを向けられて、自然と涙が溢れたのだ。零れることのない、涙が。

自分を、欲してくれる者に初めて出会って。

それも損得ではなく、純粋な愛情で。

妹以外で。

そうして、ラウラの寵愛を受けたソファアラは、次第に暗殺任務から遠ざかって行った。なぜなら、ギルドの仕事を受けずともミリティアの面倒を見れるようになったからだ。

一年。

ラウラの屋敷の使用人として務めた彼女は、ついに彼からプロポーズの言葉を受け取った。

「でも、私はギルドの……！」

「僕は、君が好きだよ。ソファアラ。これからも、ずっと一緒にいたい」

ラウラ・ノーウエルは、ソファアラの素性を知っても、ぎゅっと彼女を抱きしめた。

温かい。

不意に、しゃくり上げるような音が聞こえた。視界が揺れる。

それが自分の嗚咽であると気付いたのは、自分を抱きしめるラウラが、ソファアラの髪を優しく撫でてくれたからだった。

ソファアラは初めて、ラウラを抱きしめ返す。

頬を彼の胸板に当てると、とめどなく溢れる涙が、温かく感じた。

“人”として、泣く。

もう何年も忘れていた大事な感情を、ソファアラはようやく思い出した。

なのに……、

なぜ、この世はこうもソファアラに厳しいのか。

「僕たちは結婚した。けど、奴らはソファアラを許さなかった！ あいつらは彼女を脅し続けたんだ！ これ以上、ジェラベルンを食い物にするわけにはいかない。 なにより、僕の愛する人を、これ以上悲しませるわけにはいかないっ！ 貧民街に奴らが潜伏しているというのなら、そいつらをあぶり出すしかないんだよ！ だから僕は」

「だから奪っていいって道理にはなんねえじゃんよ」

ロジャーが静かに告げる。

へっぴり腰のまま剣を握るラウラが、ぐ、と眉間に皺を寄せて少年を睨んだ。

ルシオが代わりに、言葉を紡ぐ。

「なあ、領主さんよ。アンタが守りたい者は分かるさ。男は惚れた女のために命を懸けるもんだからな。けどよ、貧民街からあぶり出す その所為でどれだけの人が犠牲になったのか、いや、なるのか考えなかったのかよ！？ アンタは！」

「なんでもっと別の方法を考えられなかったジャンか！ おっちゃん……、ミリティア姉ちゃんの姉ちゃんを守りてえって気持ちは分かるジャンよ！ でも、だからって！ クレア姉ちゃんたちの幸せを奪っていいことにはなんねえジャンよ！」

「でも、ギルドを倒すにはこれしか……っ！」

深刻な経済破綻を起こしたジェラベルン貴族の収入は、領民から吸い上げる重税が主だ。しかし、それで賄いきれない場合はギルドの闇市に手を出す。 貴族

中には貴族としての品を保つために、領民にギルドから買い付けた薬を流す者までいた。

ラッセンに巨大な奴隷市が出来たのは、こうした貴族とギルドによる癒着が原因だったのである。

彼の伯父、アーノルド・ノーウェルはギルドの恩恵を受けた最たるものだ。屋敷に飾る調度類をギルドから安く買い付け、自分の邪魔になる者をギルドを通して排除してきた。そうして、彼はジェラベルンの中で絶大な権力を手にすることに成功したのである。

そして、ギルドが邪魔になった。

それがこの貧民街の焼き討ち騒動の真相だ。

ソファアラを護りたいと思うラウラの気持と、ギルドが邪魔となったアーノルドの思惑。それが見事に噛み合ってしまった結果である。ロジャーは、ぎり、と奥歯を噛みしめた。

「それを誰かに相談したのか!? ホントにその方法しかなかったのかよっ!? オイラ、ガキだから良く分かんねえけど、でも……! おっちゃんの行動は間違ってるジャンよ!」

「そうだ。俺も今回だけはバカダヌキと同じだっ! アンタ結局、ソファアラさんを守るとか言って、妹のミリティアさんを戦わせたり、ソファアラさんが戦場に出たりしてるじゃないかっ! 拳句の果てに、なんの罪もないドルチェばあさんや、あのばあさんが養ってた子どもたちまで、アンタらの都合で殺されそうになったんだぞ!？」

「だが、それは仕方のないことなんだ! ギルドを倒すには!」

フアーラントの力を借りることは出来なかった。平民として、立場の弱い北方將軍に、ラウラは相談を持ちかけることが出来なかったのである。そして下手に彼を巻き込めば、貴族たちの謀略によって彼までもが殺される危険性があつた。

だから、

「仕方ねえってなんだ……！ 人の命は、仕方ねえで済まされていいもんじゃねえジャンよ！」

ロジャーは、地団駄を踏む。言っている内に感情が昂ってきたのか、彼の瞳には、うるうるすると涙が溜まっていた。

そして

それは純粹な心をもつ、もう一人の少年。ルシオも同じだ。

「俺たちはこのジェラベルンで、“みぶんせい”とかってわけのわかんねえ奴を知った。アンタもなんだかんだ言っつて、“きぞく”と変わんねえ……！ なんて分かんねえんだよ！ アンタ……、他人の都合で自分の最愛の人、殺されて 必要なことだから仕方ないつてことで済まされるかよっ！」

ルシオの脳裏を過ぎるのは、泣いたクレアの顔だった。

貧民街を焼き討ちされたとき 赤い籠手を握りしめて、咽び泣いていた彼女の姿。

それが今でも、ルシオの頭から離れない。

「貧民とかそういうの関係ねえ……！ ここにいる奴ら、皆、ジェラベルンっていう国の住人じゃねえかッ！ なんて同じ仲間にそんなことが出来るんだっ！？ おいちゃんたち、頭おかしいぞ……っ！」

ロジャーは必死で頭をふる。

彼らの故郷　サーフェリオという村は、色々な“亜人”と呼ばれる獣や魚類、昆虫類を祖にした様々な人種が住んでいた。中には狂暴な性格の亜人もいたものの、サーフェリオには身分の一切が存在しない。

皆が平等で、皆が穏やかに暮らしている。

それが、ロジャーたちの故郷だ。

ラウラは茫然と、ミリティアを一瞥する。

「ジェラベルンの民……、貧民も……。……同じ、仲間……？」

貧民。

自分は、“貧民”という言葉について、どこまで考えたのだろうか？少年たちの涙を見て、ラウラはふと思った。

ソファラは貧民。そう聞いていたのに、今までラウラは、特になにも感じなかった。考えなかった。

それは　自分の口添えさえあれば、彼女の身分がどうとでもなると分かっていたからだ。

ラウラは“貧民”を助けたかったのではない。

ソファラだから、助けたかった。

だから、貧民弾圧を強行したアーノルドを止められなかった。

否、恐らく自分は、事前に聞かされていても、止めなかっただろう。

その決断が　ミリティアに弓を取らせた。ソファラと同じ道を、彼女の妹に歩ませてしまった。

先ほど向けられた殺意から、先ほど感じた敵意から、分かる。

「僕は……」

頂垂れるラウラ。

ザンデはそつとミリティアの肩を叩くと、強張った彼女の手から、護身の短剣を押し下げた。

ミリティアが顔を上げる。

ザンデは無言で首をふった。

「っ、……！」

ミリティアの顔がゆがむ。灰色の瞳から零れたのは 涙だ。

ロジャーとルシオの涙が、貧民のためを思つて泣く彼らの姿が、ミリティアの目頭を熱くさせる。

貴族となつても、息苦しいだけだったミリティア。

それゆえに周りから目を背け、なにも知らずにひきこもったからこそ止められなかった姉夫婦の凶行。

貧民を考えていなかったのは、自分も同じだ。

その事実が、ただ苦しい。

「降伏、してくれるよな……？ おいちゃん……」

静かに尋ねるロジャーに、ラウラは手にした剣を離すと、自嘲気味に笑った。

「一つだけ、条件がある」

「？」

「ソファアラだけは……見逃してくれ」

つぶやいた彼は、す、と自分の肩にかかった髪を両手でまとめ上げた。首筋がよく見えるよう、己の首を持って行けと言わんばかりに。

静かに目を閉じる彼に、ロジャーはニツと笑った。

「そんなコトじゃなか。心配すんなよ、おいちゃんっ！ オイラたちは、人殺しにきたワケじゃねえんだぜっ！」

「え……？」

瞬いて、大剣を担いだザンデを見る。すると、ロジャーと同じ表情をしたザンデが、こくりと頷いた。

「特に俺は、ある人に頼まれてここにいただけだからなっ！」

ニツと人懐こい笑みを浮かべるザンデの隣で、ルシオが、ただし、と言いながら人差し指を立てた。

「前みたく贅沢出来るなんて思うなよッ！ アレンさんが、この国はお金に困ってるって言ってたんだから……！」

「節約っ！」

ロジャーが斧をふり上げる。

「美人！」

ザンデが自慢の二の腕を叩いた。

ハツとしてロジャーがザンデをふり仰ぐ。

「ザンデ兄ちゃん……!!」

「ちびっ子……!!」

眉間にしわを寄せて、神妙な面持ちで頷くザンデ。

二人が熱い握手を交わすのを、心底どうでもよさそうに見て、ルシオはミリティアに向き直った。

「とりあえず行くうぜ、ミリティアさん。馬鹿はほっといて。

おい！ 馬鹿二人！ ちゃんと領主さん連れてこいよ！」

「ごしごしと涙を拭ったルシオは、へんっ、と言い残してラウラから背を向けた。

「……ありがとう」

ミリティアがつぶやく。己の過ちを、愚かさを噛みしめながら。

「んあ？」

不思議そうに見上げる少年二人に、ミリティアは穏やかに微笑んだ。

「決着はついたみたいね」

「セレスの姉御〜！」

ラッセンから駆けつけた斬鉄姫を見て、ザンデは嬉しい二の腕をふり上げた。部隊を率いていたセレスが、フツと微笑む。

「ザンデ、無事だったようね」

「姉御もなっ！」

ガンツと背中に大剣をしまいながら、ザンデが笑う。セレスは一つ頷くと、遊郭から中央広場に集まってきた蘇芳たちの団体に向きなおった。

「先に、アレンに謝っておかないとね」

「ん？　なんで？」

ザンデが首を傾げる。

名指しされて、アレンは一団からセレスの前に駆け寄った。

「どうかしましたか？」

若干の緊張が、アレンの表情に浮かぶ。セレスは申し訳なさそうに目を伏せながら言った。

「アレン。黒刃のアドニスを取り逃がしてしまった。詫びておくわ」

ああ、と頷いたアレンは、安堵したように笑った。

「問題ありません。今回は、敵殲滅が目的ではありませんから」

「だが、副将たちはひっ捕らえてある」

答えたのは、ベリナスだった。セレスだけでなくベリナスまでもが首都しゅとに来たと言うことは、ラッセン独立軍が正式に、ベリナスの傘下に下ったということだ。

「そうですか……」

アレンはその意味でも安堵した。

蘇芳たちが捕らえた北方軍から、副将のラシーカが目を睜る。

「アルカナっ！」

ベリナスが連れてきた東方軍の副将、アルカナに彼女は駆け寄ると、今だ目を閉じたままである彼女を、慌てて助け起こした。

冷や汗が、ラシーカの背を伝う。
が。

「……息、してる……！」

ラシーカから微笑みが零れる。彼女は感極まったように目をつむると、ぎゅっ、とアルカナを抱きしめた。

それを溜息混じりに見やって、ファールアントがベリナスとセレスを見やる。

「あのアドニス將軍を退けるとは……！ しかも、貴方までもが敵になつてるとは思いませんでしたよ。ベリナス衛士長」

苦笑するファールントに、ベリナスは肩をすくめた。

「君たちに任せておくと、私は生きていなかったからな」

「……その節は申し訳ない」

表情を暗くするファールントに、ベリナスは高らかに笑った。

「心配するな。君の立場は理解しているとも。だから、我々は立ち上がったのだ」

ファールントはきよとん、と瞬く。

そして、
失笑した。ぱし、と額を叩く。

「ああ……、こいつはやられた……。さすがは斬鉄姫、と言いたい所だったのに……。斬鉄姫だけじゃない。完全に国王軍は“革命軍”に負けたってコトか……」

「これから、忙しくなる」

穏やかに微笑うべリナスに、ファールントは違いない、と苦笑した。

蘇芳がその二人に言い放つ。

「最早、我ら“倭人”を、貴公らの好きにはさせぬ」

「こりゃ手厳しい日が続きそうだぜ……」

「フツッ！ もとより、覚悟の上だとも。蘇芳殿」

力強い眼差しを返してくるベリナスに、蘇芳は嬉しそうに頷いた。

「俺たちの勝利だああああ！！」

「やったよ！ 皆っっ！！」

クレアが手にした旗を大きく掲げる。

同時。

「「「「「おおおおおお！！」「」「」「」

地面を揺るがすほどの 数千人の鳴り響いた。

革命に参加したクレアたち反乱軍、遊郭や奴隷市に閉じ込められた倭人、そしてジェラベルンに住む平民の皆が、革命軍を歓迎するように手を叩き始めたのだ。

その思わぬ歓迎に、クレアが瞬く。

アレンが答えた。

「貴族制を不満に思っていたものは、貧民や奴隷だけじゃなかったと言っことだ」

「それじゃあ……！！」

「皆の期待が寄せられている。それに答えられれば、ジェラベルンを平定するのに、さほどの時間はかからないだろう」

「やったな！ アレン兄ちゃんっ！！」

「さすがアレンさんだぜっ！」

『特にこの男、なにもしてなかったと思うけど』

ロジャーとルシオの賛辞に、シルメリアが冷めた言葉を返す。

アレンはぴたりと動きを止めた。

「……ちょっと待て、シルメリア。他の人間にとかく言われるのは覚悟しているが、お前は知ってるだろう!? 俺には俺なりの闘いがあったと」

『駄民』

「だ、だっ……!?!?」

思わず、絶句した。

「ソファアラ!!」

北方軍の中に妻の姿を見つけ、ラウラ・ノーウェルは人目を気にせず駆けだした。シーティアに斬られた傷が癒してもらったソファラは、力尽きたように、自嘲気味に笑う。

「……ごめんなさい。私たち、負けてしまったのね……」

絶望的な語調でつぶやく彼女を、ラウラは抱き寄せた。
彼女の頭に、頬を寄せる。

「もういいんだ。ソファラ……。彼らには、教えられた。なによりも守らねばならぬモノを。僕たち貴族の　過ちを」

夫が泣いていることに気付いて、ソファラは瞬いた。ささやかれる言葉は、相変わらずソファラに優しい。

彼女は目を細めて、穏やかに微笑うと、夫を抱きしめ返した。

「ごめんなさい……」

ふと。

聞き慣れた声がして、ソファラは夫から一時離れ、そちらを見た。そこに立っていたのは、しばらく顔も合わせなかった妹　ミリティアだ。

見慣れたヴィルノア製の弓手に、妹は肩を落として泣いている。彼女の装備を見れば、妹が革命軍に参加していたのは、すぐに分かるのに。

勝利したのは　妹の方であると言うのに。

「バカな子……。なにを泣いているの？」

「……ごめんなさい、姉様……」

泣きじゃくる妹を、ソファラは慈愛に満ちた眼差しで見つめると妹を、そつと抱きしめた。

数ヶ月間会わずにいた、その空白を埋めるように。

『……………』

シルメリアはそんな姉妹の姿を、ラシーカとアルカナの無事を、セレスとザンデのやりとりを、ファールアントの元気な様子を　眩

しそつに見つめていた。

どこか安堵したように。

女神の気配が微笑む。それを感じてアレンが視線を下ろすと彼は不意に、視線を鋭くした。

シルメリアが息を呑む。

『アレンっ！』

「分かっている。……よくも、俺の前に姿を見せられたものだな。一度ならず、二度までも！アース神族、第二級神・フレイっ！」

鋭く言ったアレンは、空を見上げた。そこに浮かぶ美貌の女神を。

女神は、薄茶色の長い髪を風になびかせて、白い陶器のような肌をしている。完璧な肢体を包むのは、密着性の高い緑色の衣装だ。丈の短いスカートから、女神の美脚がすらりと伸びている。

人間の芸術対象たるその女神は、完璧な美貌を冷徹に歪めて、アレンを見下していた。

第二級神、フレイ。

その彼女の後ろには、四人のアース神族がいる。

ロキ、フレイア、ヘイムダル、ウル。

ヴァルハラ
神界からフレイが呼び寄せた、アレン討伐部隊だ。

フレイは権高に言った。

「光栄に思うのね。エインフェリアだけではお前を殺せないとして、アース神族自らが出向いたのだから。だが人間を殺しにね」

わざわざ“たかが”を強調するあたり、女神も相変わらずである。

フレイの言葉に、アレンの蒼瞳が冷える。半眼になった彼は、殺気をまとってフレイを睨み上げた。

「彼がレナスを何度も退けたという人間か……」

だがそのアレンよりも先に、褐色の肌を持つ少年神が口を開く。短い黒髪を持つ少年神は、長い指で口を覆うと、薄く微笑った。

赤を基調としたスタイリッシュな衣装。瞳はアレンに近い藍色で、表情は微笑っているのに、少しも温かみを感じさせない妙な雰囲気を持っている。

少年神　ロキの言葉に、傍らにいた少女神が頷いた。

こちらはフレイと同じ薄茶髪を、三つ編みにして背中に流している。透き通るような白い肌と、緑がかった青の瞳。顔は幼いが、フレイと同じように身体のラインがくつきりと見える赤い衣装をまとっており、立派な女性の色香が放たれていた。

少女神フレイアの肢体は、フレイほどの凹凸はないものの、男の目を釘付けてやまない。

フレイアは甘ったるい声で言った。

「そんなに強そうには見えないけどなあ。まあ、いいや。アイツを倒して、レナス姉様にほめてもらおうと！」

幼い顔に相応しい無邪気な笑みを落として、フレイアはアレンを見下ろした。あどけなさに反して、彼女の笑顔は壮絶な色香を放つ。並の人間ならば、理性を剥ぎ取られてしまう魔性だ。

アレンは神々を睨み据えて、口端をつり上げた。

「いいだろう。全員まとめてかかってこい……!!」

「兄ちゃああああああん!!」

身の程をわきまえていない　というより、自分の装備を省みないアレンの発言に、ロジャーの怒りの咆哮が響いた。

その後ろでは、ジェラベルンに居る人間たちが例外なく、突如現れた神々を見上げていた　……。

1 神々との戦い フレイ率いる討伐隊

「デュラン、シーティア。皆を頼む」

アレンは言い放つと、アルスイ・オーブを握り締めた。

「奴は俺が倒す。この拳で、必ず！」

「フン、汚らわしい。人間ごときが神に勝てると思つて？」

薄茶色の長い髪を風にそよがせ、第二級神フレイはにこりともせずアレンを見下ろす。均整の取れた理想的な肢体を、若葉色のボデイスーツに包みこみ、天空に座するように浮かび彼女は、人であればだれもが息を呑むほど美しい。

その冷たい美貌を睨みながら、アレンは殺気を裡に湛え、口端をつり上げた。

「フレイ姉さんにあんな啖呵を切れるなんて、身の程知らずもいいところだね」

のんきにつぶやいたのは、フレイの妹神フレイア。

あどけなさや妖艶さを兼ね合わせた、美と愛の少女神が、感心したように頷くと、金髪碧眼の少年神ウルが、シルヴァンボウ神弓を腕に引っかけ、後頭部で両手を組んで微笑んだ。

「フフ、すぐに分かるさ。それにしても、久しぶりのミッドガルドか……。相変わらず空気が悪いな。さっさと狩ってヴァルハラに帰る？」

ウル的美貌が、下界を見下ろした途端に歪んだ。線の細い、この中性的な少年神は、子供らしい可憐さと、それゆえの残忍性、冷酷さを匂わせる。フレイアに向けた微笑はなりを潜め、ただ侮蔑と嘲笑が、下界全体に向けられるのである。

虹の橋、ビフレストの番人たる壮年神はウルヘイムダルの言葉に頷くと、眉間に皺を刻んでアレンを見下ろした。

「たかが人間風情が。神に挑んでどうなるか、思い知るがいい……！」

ヘイムダルが持っている得物は剣。古代の青銅剣を鉄で作ったよ
うな、四角い剣だ。反りはなく、肉厚幅広の刃は、斬るよりも叩く
ことで威力を発揮する代物である。また、剣士ヘイムダルの周り
には、剣と同じ鈍色の、長方形の鉄片が八つ。彼を囲うように浮か
んでいる。

『なんとということ……！ フレイだけでも最悪の相手だということに、
この上アース神族が他にも……！』

「それだけ、俺たちを恐れたということだ」

シルメリアが絶望する中で、アレンは笑う。
握り締めた拳には、既に闘気が宿っていた。

『勝ち誇っている場合じゃないわ！ この駄目男っ！』

「黙ってる、駄女神！」

『だ、……っつ！？』

すかさず言い返され、シルメリアは言葉に詰まった。

「兄ちゃん！シルメリア姉ちゃんとケンカしてる場合じゃねえじゃんよオ……！」

「そうだな」

ロジャーの言葉に頷くと、アレンはアルスイ・オーブを展開する。フレイが飛んでいる位置は、上空20メートル。気で倍加させた脚なら、どうにか届く。

ただ、チャンスは一度きりだ。相手の反応速度、攻撃スピードは前回で把握している。直線的に行っても、まず当たらない。ならば

上空に浮かんだフレイが、わずかに目を細めた。薄茶色の長い髪が、陽に照らされて金色に輝く。

「この感覚……、まさか表層意識にまで出られるようになっていたとはね。シルメリア」

「シルメリアだって！？ どう見てもアレ、男じゃん……！？」

アレンの思考など読み取ることなく、フレイはまっすぐシルメリアを見下ろすように、アレンの胸の辺りを見据えた。

ウルが目を見開く。まじまじとアレンを見るが、彼はまったく神気を感じ取れない。それでも、フレイが“居る”というのだから、それは事実には違いないのだ。

ヘイムダルの眉間に刻まれた皺が、更に深くなった。

「人間よ、不死者王にどのような入れ知恵をされたかは知らぬが、シルメリアを人質にとったぐらいで調子に乗るな」

怒気を孕んだ声だ。

第二級神フレイはともかく、他の神たちはそれなりに仲間意識を持っていそうだった。

シルメリアをアレンが捕えたのだと勘違いしたウルとヘイムダルは、惜しげもなく憎悪と怒りの眼差しを向けてくる。

それだけならばまだしも、相手にはこちらを蔑む色があった。

所詮人間、と。

彼らはどこまでも、真っ向からアレンと対峙する意思がない。思わず、鼻を鳴らした。

「そう言えば、こういう連中だったな……」

「兄ちゃん……？」

実に気に入らない連中だった。

アレンはゆっくり息を吸い込むと、瞬後、気を炎に、炎を朱雀に顕現させ、空に向かって吼えた。

「いいだろう。貴様ら全員、俺の拳で叩き潰すっ！」

踏みしめた大地が、アレンの気に圧されて大きくへこみ、割れ、砕け散って空に巻き上がる。まるで陽の光を凝縮したような強大な朱雀の炎。それは人にしては強すぎる気功であり、研鑽され尽くした錬気だ。

しかし、神と戦うには力不足だった。

少なくとも、神族最強レベルのフレイと比べられるレベルではない。

ロジャーは目を細めながら、兼定を持たないがゆえに、この更なる高みにある神の獣、黄金色の朱雀にならない炎の化身を見つめて、首を横に振った。

「兄ちゃん……。朱い……。圧倒的に朱いジャンよ……。！」

「だまれえええっ！ バカダヌキイイイツツ！！」

語るロジャーの背中には、哀愁すら漂っている。

ルシオは涙声で叫んだ。二人の亜人の少年は、兼定によって引き起こされる「凶悪な朱雀」を知っている。それはレナスのニーベルン・ヴァレスティをあっさりと消し飛ばし、すべてを斬り伏せるほどの、絶対的な力。

いま、アレンの背に現れている朱いものは、レナスのニーベルン・ヴァレスティをぎりぎり相殺こそするものの、相殺によって巻き起こる衝撃波がすべてアレン側に返ってくる程度の力だ。

ゆえに、人の身にしては凄まじい力を誇る朱の朱雀を見ても、ロジャーの感想は「なんだ、その程度か」くらいのものなのだ。

フレイと戦うには、非力なのである。さらに、ウルやヘイムダル、フレイア、ロキと続く面々を相手取るなど、夢のまた夢の話だ。

シーティアが言った。

「おいアレン。別にお前一人がアレを相手にすることもあるまい」

「馬鹿を言うな。奴らの攻撃は、基本的に範囲攻撃だ」

アレンは思うのだ。戦って、勝てずとも負けるはしない。

だが、「ジエラベルン」という街を護る力は、どうあってもいまのアレンにはない。相手に勝つ以上に、神から街を護るのは難しいのだ。

シーティアが肩をすくめた。

「そのようだな」

「いや、そのようだな……じゃなく」

「ここに居た人間たちならば、アルトリア遺跡に送らせてもらったぞ。あの程度の人数、テレポート出来んと思っただか？」

「!?!」

アレンは目を睜った。思わず絶句する。

シーティアやデュラン　つまり「ゲヴェル」と呼ばれる種族は、人間では考えられない身体能力、魔力を持っている。その力があれば、あるいは神とさえ互角に戦えるかもしれない。アレンのように気功による倍加や、魔術による強化といったものは、彼らにとって小細工なのだ。

そう、頭で解っていて、大魔法を連発するよりも過酷な大人数を瞬間転送させる魔法を、シーティアはまるで呼吸するかのように行っていたのだ。

アレンは、その術式がいつ発動したのかさえ気づかなかった。

ロジャーが半眼で見上げてくる。

「出来ると、思わなかったじゃんね？」

大人数瞬間転送　と、言われて、アレンはぐうの音も出ない。

『使えない』

シルメリアの溜息が脳裡に響いた。

さらに畳み掛けるように、ピティが得意げに胸を張る。

「シーティア様の能力を凶ろうなんていうのが、無謀なんです。決

してアレンさんが、使えない訳じゃありませんよ。シーティア様がアレンさんを遙かに凌駕する存在なだけです」

「んだとおっ、アレンさんを馬鹿にすんな！」

「ピティ殿。その台詞、頼むからカーマイン様の前では言わんでくれ」

そろそろ膝でも折りそうな精神攻撃を喰らったアレンを置いて、ルシオとデュランがピティのぞんざいな言葉に待ったをかける。

アレンは気分を一新させるように、ふっ、と鋭く息を吐くと、改めて神々に向き直った。

背中、シーティアが落ち着いた、穏やかな微笑をロジャーとルシオに向ける。

「ロジャー、ルシオ。お前たちも一緒にアルトリアに行ってくれ。

クレアたちには恐らく説明が必要だ。混乱させないためにも、お前たちが説明してやってくれ。“天然ぽやぽやの姉ちゃん”が頼む。

な？ ルシオ君」

「……………アンタ、ホントに？」

いつもと雰囲気が違うシーティアを見て、ルシオがキツネにつままれたような表情で見上げている。シーティアは右目だけ細めて、いたずらな笑みを浮かべた。表情は凜々しいまま、ああ、と小さく頷く。

アレンが、肩越しにロジャーとルシオを見下ろした。

「二人とも。皆を頼む」

「へへッ！ 任せるジャンよ！ 兄ちゃんたち、負けるんじゃないぞっ！」

「アレンさん！ アルトリア遺跡で、一足先に待ってます！」

「ああ。よろしく頼む！ ルシオ、ロジャー！」

少年たちは力強く応えたと、シーティアのレポートでその場から去って行った。

光の中に消えていくルシオとロジャーを確認した途端に、黒柄の長刀を手にした異形は、地に響く声で言った。

「これで、ここいらの人間が一人もいなくなったわけだ」

「ピティ。離れている」

シーティアも静かに告げる。

明らかに、場の空気が変わった。

まるで空間そのものが凍りついたように、殺気がぴりぴりと押し寄せてくる。二人の異形が仮面を剥ぎ取り、鬼の顔を見せつつあるのだ。

アレンは、頬をひきつらせた。

「……………嫌な予感がする」

“街と皆を護る”という大義名分は、たしかにアレンの中にある。だが、“兼定を奪った礼に、ともかくフレイをぶん殴る”というのもアレンの意志であり、目的だった。

だが、二人の異形は、それぞれ神々を睨み据えている。

いかに“先読み”が得意なアルスイ・オーブとはいえ、アレンは

神からすれば『人に少し毛が生えた程度』の実力だ。

異形の身体能力について行けるはずもなく、二人に本気を出されれば、戦いに参加することすらできずに終わるだろう。

そんな不安や焦りを加速させるように、シーティアが、ふんと鼻を鳴らした。

「これで思い切りやれるな」

「珍しく、アンタと意見が合ったな」

デュランが二つ返事を返す。

アレンは右手に嵌ったアルスイ・オーブに意識を集中させた。

この際、異形が神と戦うのは仕方がない。

それでも、兼定を奪ったあの第二級神だけは、この手できつちりと礼をせねば気が済まないのだ。

（オーブよ。多くは望まない。……俺に、フレイやっを殴る方法を教えてくれ）

精神を統一し、異形よりも早く動くためのシミュレーションを展開する。

すると気配を感じ取ったデュランが、ふり返って溜息を吐いた。

「アレン殿、どうしても自分が倒したいという相手を選んでください」

「あの緑の帽子には手を出すな」

即答した。

「了解」

デュランは指示された通り、視線を他の神々に向ける。相変わらず、こちらには話が分かるようだ。

問題は、と視線をわずかに左に流した。シーティアだ。こちらには予想通り、いま一つの感想を返してきた。

「とは言うが。見た感じ、あの女神が一番強そうだな……」

「なにが言いたい？」

「素手で敵うと思うのか？」

「……勝つ！」

シーティアの問いに、断言した。根拠はない。それでも、一度殴っておかねば気がすまないのだ。

シーティアが肩をすくめて、自分の刀を差し出した。レギンレイジ

「ほお？ では、これは要らんか？」

予想外の申し出に、アレンは一瞬、言葉の意味を理解できなかった。「熱でもあるのでは？」と、相手の顔を窺ったのは幸い気づか
れていない。

「いいのか、本当に？」

シーティアの愛刀・レギンレイジ。

この刃は兼定に勝るとも劣らぬ切味を秘めている。あくまで
“切味”だけであるが。

それでも剣士ならば垂涎の的を、アレンは感動しながらしっかりと握りしめた。

『アレン。代わりなさい』

「却下だ！ フレイ^{ヤッ}だけは、俺が倒す！」

深刻な声音で言うシルメリアを制し、アレンはフレイを睨み据える。素手から剣を得たことで戦略を変更。戦いに幅が出来る。アールスイ・オーブで練っているところに、シルメリアの叱責が飛んだ。

『なにを考えているの！ 戦ったところで勝てないと、分からないのっ！？』

「レギンレイジを持って、早々後れは取らない」

『馬鹿な！ 人間如きが、神に適うと思っ！？』

「お前は、人間の俺を信用して、ついて来てくれたんじゃないのっ？」

『いくら人間の中で強い力を持っていようと、神には勝てないっ！
そっ！うものなのよ！』

「なら、アンタはアリーシャを導くべきじゃなかったな」

『っ！』

断定するアレンに、シルメリアは絶句した。

アリーシャ。

アルスイ・オーブが言うには、数年前、シルメリアが肉体を共有した王女の名前だ。

シルメリアの意識が凍るのを感じ取ると、アレンは刀を構えた。

「話がそれだけなら、俺は行く」

「フレイ、見てよ。あの人間だけじゃなくて、異形二人もやる気だ。これはオーデイン様にいい土産話が出るね」

ウルが無邪気に笑った。人間を殺すことなど、神は毛ほども気にしない。所詮は輪廻転生する有象無象なのだ。

残酷な光を湛えた瞳で下界を見下ろすウルに、フレイは満足げに頷いた。

「目障りな三匹が一気に片付けられる……。これ以上ない、好都合な状況だわ」

「それで。どうするんだい？ フレイ」

二人の会話を聞きながら、この場で唯一、闘う力を持たない口キが、他人事のように問いかける。

彼の傍らからフレイアが、ぎゅっ、と両手を握って頬を膨らませた。

「フレイ姉さんが出たら、一瞬で終わっちゃうから面白くないよ！
せっかくついて来たんだから、あたしたちに戦わせてっ」

にこりとフレイアが笑う。それだけで花が咲いたように、清廉な

空気が下界に流れた。

少女の無邪気と女性の妖艶さを兼ね備えた妹神を見やり、フレイは口許を緩めた。

「いいでしょう。ラグナロクを我らが勝利に収めるために、皆の働きを期待しているわ」

フレイアの実戦演習を兼ねて。

その言葉は胸にしまい、フレイは下界を見下ろした。

「シーティア様たちを侮ると、神様だって痛い目に遭いますよ!」

「妖精……? いや、ホムンクルスね……。フツ、異形と揃ってホムンクルスとは。底辺で這いつくばる者を見るのも、たまには……ね」

ピティの姿を目に止め、冷笑するフレイ。

「能書きはいい。さっさとかかって来い」

デュランは淡々と言い放った。

「普通に戦っても面白くないよね。　そうだ。勝ち抜き戦にしないか?」

「フン、くだらん。俺一人でカタが着く」

ウルという言葉に取り合おうともせず、ハイムダルが前に出る。

「それはどうかな？」

待ったをかけたのは、神界戦争の敵族・ヴァン神族と、ヘイムダルたちアース神族の血を引く忌まわしき混血の神、ロキだ。彼の冷やかしとも取れる言葉に、ヘイムダルの表情が露骨に歪む。嫌悪感を露にしたヘイムダルは、はん、と鼻を鳴らした。

「なにが言いたい。剣の一つも握れぬ腰抜けが」

「ああ、気を悪くされたのなら、これは失礼。ただ……彼はあのレナスをも退けるといふ。油断すると、ヘイムダル様といえど無事で済むとは思えませぬゆえ」

「この俺が人間如きに負けると言うかつ！ あいのこがつ！」

激昂するヘイムダルを、ウルが隣から制した。

「そんな奴ほつとけよ。どうせ戦力にもなりやしないんだ。話すだけ無駄だ」

ズドオオオつつ！！

！！？

途端、神々の脇を、強烈な蒼い光槍が通り過ぎた。

まったく注意していなかったウルたちは、あまりの質量に小さく息を呑んだ。まるで落雷が、すぐそばに落ちたかのような強烈な光。見ると、デュランが刀をふり切っていた。

「さっさとかかってこい、そう言ったはずだぞ」

彼は相変わらず、淡々とした口調でそう告げる。

「ほお！ あの異形。我らに挑むつもりようだ」

「身の程知らずもほどほどにしるって言いたいよね」

ヘイムダルは失笑し、ウルは鬱陶しげに肩をすくめた。
デュランは刀を静かに構える。

「テメエらが、本当に神と呼ばれるに値する存在か、このデュランが見極めてやるう！」

「フン、面白い。剣士ならばこの俺が相手をしてやるう。手を
出すなよ！」

ヘイムダルが前に出る。それを見ながら、シーティアが底冷えの
する目で言った。

「デュラン。雑魚はくれてやる」

ふり返りもせずと言う火竜ファフニールの戦姫を一瞥し、デュランは無表情の
まま、上空に浮かぶ女神 第二級神フレイを見やった。

「……竜の逆鱗に触れるとは。知らぬが仏とはよく言ったモノよ」

それは独り言に近いばやきだった。

シーティアの黒い殺気に気づき、アレンがハッと目を瞪る。

どんなときもシーティアの傍らに控える妖精型ホムンクルス、ピ
ティ。シーティア至上主義である彼女は、一見、主人に依存してい

る小さな妖精だ。しかし信頼関係は一方通行ではなく、実はシーティアこそがピティに依存していると思うほどに、ピティを好いている。

それをフレイは見下し、嘲笑した。底辺に這いつくばる者と。

この事実を、シーティアは見過ごすわけにいかない。

「ま、待てっ！ 緑は俺の獲物だっ！」

アレンが制止せねば、シーティアは今にも駆けだし、フレイを斬り伏せる。そんな気がした。

シーティアがこちらをふり返る。

「だからなんだ？」

「……やらんぞ。そんな目で睨んでも」

蒼銀と金の瞳が放つ冷光に、若干気圧されながら、アレンは目をそらさず言い放った。

怒っているのはアレンも同じだ。というより、状況はこちらの方が数段ひどい。

だが、

「ほお？ それで？」

火竜ファフニールの戦姫に退く気はないらしい。瞳がそう言っている。

アレンは泣きたい気分だった。だが、人間は過度の緊張を強いられると笑つらしい。アレンは失笑し、肚はらを決めて刀レギンレイシを正眼に構えた。

「……まさか、先にお前と決着をつけねばならないとはな！」

きりりと表情を引き締める。そんな彼に、ピティが言った。

「強烈な死亡フラグが見えます……。アレンさんは良いとして、シルメリアさんが可哀想です」

「必要な犠牲だ。悪いな、シルメリア！」

痛感覚を共有している女神に、詫びとは思えない口調で謝ってアレンは地を蹴った。

対して、デュランとヘイムダルによる戦闘も始まっていた。

ヘイムダルの肩に浮いている鉄板が次々と飛び散り、デュランに襲いかかる。鉄板は意志を持つかのごとく鋭く、複雑に動くが、体に触れる手前でデュランは摺り足でそれらを巧みに、紙一重で躲す。同時斬り込んできたヘイムダルの剣を長刀を鞘に入れた状態で、柄の部分で捌いていく。

「なるほど。そこそこは使えるようだな。だが、どこまでこの俺の剣についてこれるかな!？」

鋭い剣線。それらをまるで危なげなく、かわ躲すデュランに、ヘイムダル勝ち誇るかのような笑みを浮かべる。

『ふざけている場合ではないわっ!』

アレンがシーティアに斬りかかる寸前、シルメリアが一喝した。肉体を共有しているからか、それと同時にアレンの胸の奥に波紋

が広がる。最高の斬撃を放つためには、精神統一が必須だ。
アレンはぴたりと動きを止め、真剣な面持ちで言った。

「失敬な。俺は真剣だ！」

『なにをしているのっ！ あの異形を犠牲にしても、ここは逃げるべきよっ！』

「分かっている。この異形を犠牲にしても、あいつを倒すべきなん
だろ」

二人の会話が、まるで噛み合わない。
それを視界の端に、シーティアから最後の忠告が放たれた。

「アレン。私の理性が残っている内に、 下がれ」

「悪いが、俺も遊びで言っているわけじゃない」

刀を構え直すアレンに、冷たい一瞥を送ったシーティアは、縮地法であっさりと間合いを詰めるとアレンの首をガツと片手でつかみ上げ、有無を言わず握りつぶした。

ゴキユッ………！

鈍い関節音。

悲鳴を上げる間もない。せめて活人剣を使っていれば防ぐくらいできたものを、完全な不意をつかれた青年は力なく気絶していた。
というか、若干死相がでている。

それをシーティアはあくまで冷然と見据え、パツと手を離れた。

「済まないな。しばらく貴方が表に出てくれ。この戦いが終わるまで」

重力に従って落下するアレンの体が光に包まれ、浅葱の甲冑を着た戦乙女シルメリアに変わった。

ばああああ………！

燦然とした女神の光を見つめて、フレイが口端をつり上げる。

「シルメリア！ ついに出てきたわね。貴方の魂、ヴァルハラに連れて帰ってあげるわ」

対するシルメリアは、凜とした眼差しでフレイを見上げ、手にしたレギンレイジの剣先を突きつけた。

「下がりなさい、フレイっ！ 地上は、貴方たちがみだりに踏み入れている場所ではないわっ！」

「世迷い言を」

フレイは冷笑と侮蔑に満ちた目で吐き捨てた。

説得は 不可能だろう。

判断したシルメリアはこの場から去る方法について、それが出来る異形の美女に声をかける。

「シーティアと言ったわね。貴方の転移魔法で、ここから逃げましょっ」

「逃げる？ 逃げるとは、なにから？ まさか、あの矮小な存

在からではあるまいな?」

だが、シーティアの答えはシルメリアの期待するモノと違っていた。

人間如き 否、異形如きが放つには、あまりにも不遜な物言い。シルメリアの眉間に皺が寄った。

「……たかが人を少し超えた程度で、神に挑めるなんて本気で思っているの?」

「馬鹿一辺倒の台詞だな。お前の眼は、^神節穴か?」

にべもなく告げ、シーティアは顎をしゃくってデュランを示した。

「ぬあああああ!! つえあつ!!」

ヘイムダルの攻撃。すさまじい剛剣だ。しかし、それらすべてが空を切り、ヘイムダルは忌々しげにデュランを睨み据える。

擦り足だけで抜刀すらせず、異形は静かにこちらを見ている。

「……神の剣とは、このように稚拙なモノか?」

「おのれえっ!」

激昂するヘイムダルに、観戦していたウルが野次を飛ばした。

「なにやってるんだよ、ヘイムダル。そんな雑魚、さっさと片付けちやえよ」

「フン、分かっただけだ！ 逃げ脚は速いようだな。だが、次の一撃はどうあっても躲せんぞー！！ 神技！」

ふふん、と鼻歌でも歌いだしそんなウルの軽い野次に、ヘイムダルは鋭く答えると、剣を握り技をしかけようとした 瞬間。デュランが動いた。

「……隙だらけだぞ、カミサマ」

拔刀、

一閃。

交差法にすれ違い、次の瞬間、袈裟掛けにヘイムダルの胸は切り捨てられていた。

「ぐはッ！」

「ほう……、さすがは神。手応えは十分だったが、死には至らぬか」
肩越しにヘイムダルを見やり、黒柄リーヴェイグの長刀を鞘に納めるデュラン。

「ぐ、……なんだとっ！？」

驚くのはヘイムダルだけではない。それを見ていたアース神族も然り、だ。

「なんだ！？ なにが起こった！？ ヘイムダルの方が、スピードもパワーも完全に上だった！なのに、なぜ……！！」

ウル言葉に、フレリアは眉を上げ、呆れたように言う。

「へえ、どういうこと？　ヘイムダルったら油断しすぎっ。」

「まったく褒められたものではないわね」

フレイは容赦なく吐き捨てた。

そんな神族に、淡々とデュランは告げる。

「これで分かったら。テメエらと俺との実力差が。　この刃。完全
に抜く前に、とつとと消える。これが最後の忠告だ」

「ふっ、……ふざけるなああああああ！」

ヘイムダルの神気が増す。

白い光がヘイムダルの全身から吹き荒れ、ヘイムダルの周りにあるものすべてが、片端から吹き飛んで行く。

その様を見て、ロキは思わず失笑した。

「ミッドガルドで思いつきり神気を発動するとは。……フフ、ヘイムダル様はよほど腹に据えかねているようだな」

「ロキィ〜！　笑ってる場合じゃないよ？　意外とあの異形、強いのかも」

フレイアは可憐な眉根をキュツと寄せて、考え込むように異形を見下ろした。ウルが鼻で笑う。だが、余裕に見える彼の口許は、引きつっていた。

「なにを言ってるんだ、フレイア！　あの程度の気で、神の相手など務まるわけがないっ！　……ヘイムダルが油断さえしなければ、叩き潰せるさ」

フレイが告げた。

「ウル。ヘイムダルに手を貸しなさい」

「フレイ……」

意外そうに、ウルが目を見開く。

「無用な世話だ！ フレイ！」

「私は時間の無駄が嫌いなの。さっさと片付けなさい。その薄汚い異形を」

激昂するヘイムダルに、フレイは冷たく言い放つ。第二級神の瞳はこれ以上ないほどに冴え渡り、まるで研鑽された刃のようだった。明らかに、苛立っている。

「仕方ない……。片付けようか」

「たかが異形如きに、神が二人掛かりとはっ！ 頭に来るぞっ！」

溜息を吐くウルと、舌打ちするヘイムダルが、それぞれ得物を構える。

ウルは弓神。

ヘイムダルは剣神だ。

その二柱の神を見据え、デュランは静かに告げた。

「帰らねえか……。なら、念仏を済ませろ。この刃に斬られても、魂が消えねえようにな」

つぶやく異形の声は、静謐で 容赦がなかった。

2 神々との戦い 異形 vs アース神族

「あ、アレンさんの意識が戻ったようですね！」

ピティは、シルメリアの右手に嵌った青い宝石が、アルスイ・オーブチカチカと点滅するのを見て、つぶやいた。

シーティアが殊更に舌打ちする。

「チツ！ だが、姿はシルメリアさんのままといいことは……主導権は彼女に移っているようだな。いい格好だぞ、アレン」

くく、と喉を鳴らしたシーティアは、勝ち誇った笑みを浮かべた。意識下層に追いやられたアレンが、ぐ、と拳を握る つもりでつぶやく。

『やる気がないなら、さっさと代われ。この女ども』

「馬鹿な……！ いくら異形とはいえ、ミッドガルド地上に存在する生物が、アース神界の神族を脅かしている！？」

当の同居人は、宿主が目覚めたことにすら気付いていないようだった。

デュランの戦いぶりを見て驚いている彼女に、アレンが意識下で小首を傾げる。

『シルメリア。アイツらは正確に言つと、この世界の住人では
そう言っている間にも、目の前の状況は著しく変わっていた。』

「ちょっと痛いかもよっ!? 我こそはウル! アース神族一の弓の使い手! さあ、このシルヴァンボウの前にひざまづけっ!」

ウルは素早く神弓を構えると、強烈に光る矢を、真っ直ぐに放った。

パシューインッ!!

空を裂く矢の音が、レーザーの如く走る。

だが、

デュランは苦もなく、剣の柄で叩き落とした。

落された矢が地面に激突する。

と。

巨大なクレーターを作りだすほどの、大爆発を起こした。

ズドオアアアアア ツッ!!

光に包まれていく街をシルメリアの視界から見つめて、アレンは息を呑んだ。

『お、おい……!』

ジェラベルンが、とつぶやこうとしたアレンの言葉を、シーティアが軽く鼻を鳴らして止めた。

煙が晴れたとき、地面には、黄金の魔法障壁が張られていたのだ。シーティアが右手を前に突き出した姿勢で、神と戦うデュランに告げる。

「なにをしている。私が魔法障壁を張っていなければ、辺り一面消し炭だ」

「ほう……。これが神の使う武器、か。あの程度のスピード、あの規模の矢でこれほどの破壊力とは。……どうもやりづらい」

とんでもない弓の威力を見ても、やはりデュランは表情を変えない。
「い。」

シーティアはそんなデュランに対し、忠告した。

「やたらと性能の高い玩具おもちゃだと考える。あいつらの戯れ一つで、島一つ消し飛ぶぞ」

「なるほど。そいつは厄介だ。要するに 斬ればいってことか」

「そついうことだ。しのごの言わず、な」

彼の答えに満足したシーティアは静かにだが、力強くうなずいた。

『ところで。なぜお前は攻めない？』

シーティアの怒気は、表層意識下に追いやられても感じられるものだった。

シーティアは殺気で凍るような双眸を、惜しまず向けてきた。顎で、デュランの手にしている黒柄の長刀 リーヴェイグを指す。

「フツ……。あのリーヴェイグという刀は、まだアイツには扱い切れていないものでな。カーマインのレギンレイブ同様、持ち主の意志で如何なるものをも斬る、強力な武器ではあるが。斬る必要のないものまで斬ってしまう。 下手な巻き添えを食わんためにここにいるだけだ」

『……………』

アレンはただ、押し黙った。

「ねえ、フレイ姉さん。私も参加していい？ あの女の方と戦ってみたい」

フレイアは、猫が舌舐めずりするように、シーティアを見る。フレイは満足げに頷くと、美しいが冷酷な笑みを浮かべた。

「いいわ、今回は私も力を貸しましょう。神の力を見せてあげなさい」

「わーい、思いっきり行くよー！」

姉妹神の会話に、シーティアは嫣然と笑った。

「いいだろう、私も神とやらの力……見てみたくなった」

『ちよつと待て、シーティア！』

「聞こえんな。いくぞ」

戦う相手にフレイが混じっている。

そのことに抗議するアレンを一切無視して、シーティアは指に嵌めたもう一つの刃 至宝と同じ名を冠した名槍・グニングルを手取る。

「フレイア、私に続きなさい！」

「うん、フレイ姉さん！」

フレイ、フレイアが同時に消える。フツ、と波紋が彼女たちの足許で起きると同時、フレイとフレイアはまったく同じ構えで、宙を駆けてシーティアに襲いかかる。

対するシーティアは槍で迎え撃つ。

フレイの連続蹴り、上段中段下段と蹴り分け、更に鳩尾を突いてくる。しかも、見た目よりもはるかにリーチが長い。

鋭い蹴りと、光の刃の連続攻撃を捌きながら、シーティアは目を細める。

『あの女神、闘い慣れしている……？』

「当たり前よ、フレイは主神オーディンの側近。第二級神の名は伊達ではない……」

アレンの問いに答えながら、シルメリアは深刻な面持ちで視線を前に向けた。

フレイの鋭い蹴りを捌きながら、シーティアも刃を返す。フレイのハイキックを槍で受けると左へ流し、逆の刃で切り上げたのだ。

ビュンッ！

響く空を切る音。そこに居たはずの女神は、宙に波紋を浮かべて消えた。

「ヤアッ！」

女神の左手から、アンダースロー気味に光の刃が打ちおろされる。ズドオツという轟音と共に、地面をフレイの一撃が射抜いた。

縮地法　驚異の俊足法を使って、光を避けたシーティアの前に、
フレリアが光を両の手に溜めて待ち構えていた。

「　シーティア様！」

「さようなら。異形さん」

ピティとフレリアの言葉が重なる。少女神の無垢で残酷な笑み。
サンダーソードと呼ばれる雷の野太い光線が、一瞬でシーティアを
飲み込む。

が。

間一髪で、シーティアは槍を右手で回転させ、光を捌くとそのま
ま一閃し、光線をフレリアにそのまま返した。

「　へえ？」

フレリアは意外そうに目を丸めると、返された光線をあっさりと
受け止めた。

バシィッ！！

雷の質量を物語るように、轟音が響く。フレリアはあどけない笑
みを浮かべて右手で止めた光線をにぎりつぶした。フレリアの横に
フレィが現れ、二人同時にサンダーソードの構えを取る。

「これに耐えられる？」

対して、シーティアは静かに右手のグンニグルを回転させ、遠心
力をたっぷりと穂先に加えて行き、左の手にソウルフォースを練り
上げる。

すう ……っ!!

圧倒的な魔力。

最強魔法がわずか一秒も経たぬ間にシーティアの左手に集う。と。シーティアは右手のグングルを横薙ぎに一閃した。

左手に溜めたソウルフォースの魔力球に、渾身の横薙ぎを加えたのだ。

最強魔法と、槍術の粋を極めた一閃の融合。異形のみに許された奇跡の一撃 ソウルストライク。

コオオオオオオ ツツ!!

螺旋を描いてくる姉妹の光と、鮮烈な魂の光が激突する。

シルメリアはあまりの質量と光に目を庇った。

「っ、っっ!!」

力は 互角。

だが次の瞬間。シーティアの背に黄金の光で作られた。一見すれば、翼。だが女神たちが背に負うような、鳥類の如き翼ではない。

まるで刃のように鋭い黄金色を放つそれは、黄金の曲刀を幾重にも絡めた紋章の刃だった。

『グローシアンのか、か』

それも、グローシアン先天性魔力保持者の王族にのみ許された、超高魔力の黄金の“翼”。

「インフィニティソウルストライク」

美しき異形は、蒼銀と金の瞳を静かに、苛烈に、鮮烈に底光らせながらつぶやいた。
瞬間。

.....、

音が消えた。

「なんですって!?!」

「ふ、フレイ姉さん!!」

光に覆われた世界の中で、姉妹の悲鳴にも似た叫びはかき消される。

パシユオン　　ッ!!

シーティアの放った光が、姉妹の光を吹き飛ばすのは一瞬だった。姉妹神が目を瞠る。

『待て、緑は俺の獲物だ!』

「まさか、フレイたちを相手に勝った!?!」

抗議も驚きの声も全て、シーティアの光に飲まれていく。

一瞬で、最強魔法と最高の一閃。そして先天性魔力グロシアン保持者の翼を融合させた究極のソウルストライクは、空の彼方まで貫いた。

「.....」

シーティアは静かに、自分の魔法剣を避けた姉妹を見据える。

（あのスピードを避けるとは、な）

半ば感心にも似た息を静かに吐く。

火竜ファフニールの戦姫と称される女性は、奇跡の粹を込めたような美貌をびくりとも動かさない。冷たく、鋭く。金と蒼銀の瞳で虚空を見やつた彼女は、自身の槍の真中から二つに分ける。次の瞬間、槍は光の粒子となり、二振りの抜き身の刀となった。

「生意気な」

フレイが吐き捨てる。

光の速度で走るインフィニティソウルストライクをかわ躲す反射神経は、さすがは神といったところか。

ドオツ！！

フレイが忌々しげにシーティアを見下ろす同時、鈍い音と共に、弓神・ウルがフレイアの傍らに吹き飛ばされてきた。

姉妹が下界を見下ろす。と、片膝を突いているヘイムダルが剣を支えに、異形の男を睨み据えている。

（なんだというのだ、コイツら……！！ 本当にミッドガルドの住人なのか……！！）

ようやく、ヘイムダルはこの異形の強さに、違和感を覚え始めていた。全身から流れる血が、途切れる呼吸が、ヘイムダルに事実を訴えかけているのだ。

フレイは苦戦しているウルとヘイムダルを一瞥し、眉間にしわを寄せた。

「おのれ……！ 異形風情がこつも神に逆らうなんて……！！」

彼女は薄茶色の長い髪を、バツと右手でかきあげた。

瞬間。

鋭く前を見据え、彼女は神気を高める。

「いいわ、全てを浄化してあげる……！」

フレイは波紋を宙に描きながら消えた。次に現れたのは、ジェラベルンの上空

「この高さでは手出しできないでしょう？ 神技、エーテルストライク……！」

ハンドボール状に凝縮されたフレイの神気が、壮絶な白い光となつて放たれる。

視界全てを白く染めるほどのフレイの神気は、地上が近づくにつれて凄まじい速さで増大していった。

ばさっ……！！

シーティアは白銀の炎を身に纏い、背に黄金の翼を生じさせる。

黄金の翼の異形は、見るモノに恐怖を与えながらも、見とれてしまふ程に美しかった。

その異形を相手に、圧倒的な光が すべてを呑みこむ光が、襲いかかる。

この地の全てを消し飛ばして余り有る神の一撃が

これは、この圧倒的な神気は!?

精霊の森に居た戦乙女は、ジェラベルンでの神と異形の気を感じた。視線を鋭くすると同時、己が内に眠る勇者たちに話しかける。

「アリュージェ、ルシオ」

「あん？」

「なんだ？」

間髪を置かずに答える二人に、レナスは深刻な面持ちで言い放った。

「今一度、あの異形と剣を交えることになりそうだ。心しておけ」

途端、女神の中に眠る傭兵 アリュージェが嬉しそうに笑う気配が起きた。

「ほう？ さっそく、世界の剣の力が見れそうだな」

「次は、勝つ」

ルシオも力強く断言した。

『これは、面白くなりそうじゃの!』

『 フン、俺もやられたままというのは性に合わないな』

『 あの方が、次の相手なのですね……』

皆が息まくその中で、リセリアだけは不安そうだ。

ヴァルキリーはそんなエインフェリアたちの心を支えるように一つ頷くと、虚空 激闘が行われているジェラベルン方面を見据えて、言い放った。

「 我と共に生きるは冷徹なる勇者、行くぞ!！」

3 神々との戦い デュランvsアリュージェ

シーティアの前にデュランが立ち、己の中にある異形『ゲヴェル』を解放する。

ウオオオオオオオツツ！！

人とは思えぬ異形の咆哮。それがデュランの背負った白銀の陽炎
“鬼”と、美しい青年の口から同時に放たれる。

それによつて生じる破壊と殺戮の衝動を、彼は狂戦士『リーヴェイグ』の名を冠する刀で増幅させる。金と蒼銀の瞳は、圧倒的なまでの闇に彩られ、見るモノを問答無用で凍らせる。“死”という暗い闇に叩き落すように。

“輪廻の輪”からも外れた魔神さえも恐れさせる異形の闇は、その邪悪さに反して、自身の体を圧倒的な白銀の光で覆った。

青白く輝く長刀を脇に構えると、異形は最強の魔法剣を放つ。一閃。

「失せる！！」

それは圧倒的な力だった。

最強魔法『ソウルフォース』、魔法を二重に重ねる術式『デュアル魔法』、そして 魔法に剣閃の威力を掛け合わせる『魔法剣』を組み合わせた一撃。

剣術の達人・デュランでさえ、完全に使いこなせていない、魔法剣の奥義。

彼らの世界でも、この技を放てる者はデュランの他に二人しかない。但し、その二人はデュランと違い、この技を使いこなしてい

るが

「なんですって!?!」

オオオオオオ……ッッ!!

フレイの放った光弾は、デュランの放った強烈な青白い光線に消し飛ばされ、その事実を認識する前に、圧倒的な力がフレイの脇の空間を通り過ぎて行った。

「きゃあああ!!」

光が通り過ぎると同時、その衝撃波によってフレイは地面へ叩き落とされた。

アース神族は、思わず目を睜り呆然とする。その場に居た誰もが圧倒的な光と力の塊を、ソレを放った白銀の異形を見据える。

「……っ、つつっ!!?!?!?!」

誰もが、この鬼の強さに目を見張る。

シルメリアは喉が渴くのを感じながら首を横にふった。

「まさか……フレイの、エーテルストライクを破るなんて……!!」

『驚くことじゃない。フレイのあの技は、強大な力をただ放つだけの技。言わば、力の塊みたいなものだ。そこには積み重ねた修練も、研鑽もない。デュランなら破って当然だ』

開いた口の塞がらないシルメリアに対し、アレンは冷静に言うて見せた。

「……そんな、馬鹿な。この私の一撃を、ミッドガルドの異形如きが破ると言うの!?!?」

驚愕と絶望　、およそ神には似つかわしくない感情が、生まれて初めてフレイたちを包み込む。

デュランは詰まらなさそうに鼻を鳴らした。

「この程度で、戦意を失うのか？　神とは名ばかり、失望以前だな」

低く、地の底から響いてくるかのような声。目を合わせただけで自分が斬られたかのような錯覚を覚える双眸。

いるハズがない　、アスガルドにもミッドガルドにも、これほど純粋な殺意の塊を放つ者など、あつてはならない。

神が恐怖するなど、有り得ない

神々が絶望を覚える中、ロキだけは冷静に周りを見回していた。シーティアと目が合うとニコリと微笑んでくる。その目に、決して油断できない光を宿して。

そのとき、一筋の光と共に、蒼銀の戦乙女レナス・ヴァルキュリアが降り立った。

「レナス!?!」

「レナスお姉さま!?!」

フレイとフレイアの顔に、驚きと喜びが現れる。

対するレナスの表情は厳しかった。

「フレイ、これはどういうこと？ なぜ、貴方が いえ、貴方たちが地上に？」

レナスはデュランから全く目をそらさず、問いかける。

「分かっているでしょう？ 神界から脅威とされる異形二人と、咎人が揃ったのよ。ここで一気に駆逐するべきではなくて？」

「そのために、また人の国を滅ぼそうというの？」

「……レナス？」

（ 封印が、綻んでいる？ なぜ？）

レナスの指で輝く指輪を一瞥しながら、フレイは眉をしかめた。

「レナスお姉さま、気をつけて！ ソイツ、本当に強いの！」

「知ってるわ」

驚くほど、落ち着いた声音で、レナスはフレイアに伝える。力強い笑みと共に。

「でも、私には 彼らがいる！ 出でよ、我と共に生きるは冷徹なる勇者！！」

蒼い光の翼が空から舞い降り、エインフェリアがマテリアライズされた。5人の勇者が召喚される。

その中でアリュージェ、ルシオが前に出た。

「テムエか……。少しはマシな面になったな」

デュランは静かに、ルシオを見て言う。

「……俺は、二度と負けない」

「この剣の切れ味、テムエで試してやるぜ。バケモノ!!」

ルシオが宣言し、アリュージェは挑戦的な笑みと共に宣戦布告した。その二人を鬼気を放つ瞳で、デュランは順に観察する。

「……ほう?」

「それが、お前の本性か。成程……確かに人間じゃないな」

ルシオは力を放つデュランに、冷や汗一つ流すことなく、淡々と告げる。アリュージェに至っては、嬉しそうな好戦的な笑みを隠そうともしていなかった。

「……なるほど。まだテムエの方が楽しめそうだな」

口調こそ静かだが、その声はどこか、聞く者の恐怖を呼び起こす。異形は、鬼気をその目に溢れさせながら、口の端を歪めた。

「行くぞ、エインフェリアたちよ」

ヴァルキリーが抜剣する。ついで、エインフェリアたちもそれぞれの武器を構える。

「レナス!!!」

「？」

そのときだった。

剣を手に彼らがデュランへ斬りかかる前に、シルメリアが声を上げた。

「あやつ、ヴァルキリーと同じ鎧を着ておるぞ……！」

「不死王の所にいた、結晶に閉じ込められていた女神だな」

ジェラードの言葉に、洵が頷く。

「戦乙女が二人？ どうしてこのようなことが……！」

リセリアが驚きに目を丸くする。

「どうした？ ヴァルキリー」

「……ぐッ！ あ、ああ……頭が……!!」

突然、指輪が黄金に光り始め、レナスはうずくまった。ルシオがそれを支えてやる。

「あのヴァルキリーの所為か？」

「だが、奴がなにかをしたように見えねえ。どうなってんだ」

アリユーゼが鼻の頭に皺を寄せながら、忌々しそうに金髪のヴァルキリー　シルメリアを見据える。

苦しむヴァルキリーを、シルメリアは悲しそうに見つめると静かに瞳を閉じた。

次の瞬間、女神の体は光に包まれ、それが晴れると金髪の青年に戻っていた。

「　　あん？　新しい手品か、アレン」

「こちらも色々あってな」

呆れた顔で問いかけてくるアリユーゼに、アレンは苦笑にも似た微妙な表情を浮かべた。

そして視線を落とす。

（　　意外に、姉思いなんだな）

身体の中に眠る女神に話しかけてみたが、深層意識に潜りこんだ女神からの返事はなかった。

「ヴァルキリー、アンタは休んでろ」

「大丈夫だ、頭痛が治まった」

ルシオを押しつけようとするが、意外に強い力で押しとめられた。

「　　ルシオ？」

顔を上げると、ルシオは自分の目を覗きこんできた。力強い輝き

を宿したその瞳を前に、レナスはなぜか、動けなくなってしまう。

(……なぜ?)

自分の中に生まれた奇妙な感覚に戸惑う。その感覚の原因を探ろうとするが、その前にルシオは告げてきた。

「俺を、俺たちを信じてくれ。必ず、奴を倒して見せる!」

「そう言うことだ。洵、ワリイがおてんば姫たちを見てやってくれ。アリュューゼの言葉に、洵が苦笑しながら、抜いた刀を納める。

「なんじゃ、妾にも手を出すなど言うか、アリュューゼ!」

「ジェラード」

リセリアにやんわりと制され、ジェラードは、ぬうう、と唸りながらも渋々了承した。

「永らく待たせたな。さあ、この間の続きと行こうぜ!」

「今度は、前のようにには行かない……」

アリュューゼが精王剣を、ルシオが愛用の剣をソレゾレ構える。その二人の剣士の気迫、実力をシューティアは実感した。

(できる。それも相当に)

デュランの負けなど想像もしていないが、楽には勝てそうもない。

それがシーティアの見解だ。なのに、対峙するデュランはとても機嫌がいいようだった。

「アンタらとは、いい勝負ができそうだな」

リーヴェイグ
黒柄の狂刀を初めてデュランは脇に構えた、そして告げる。

「このデュラン、全力で相手をする。いざ 勝負！」

「上等だ！」

「いくぞ！」

誰も人のいないジエラベルンの街中で、神々の見守る中、二人の勇者と一匹の異形の戦いが始まった。

不意に、アリューゼがふり返る。

「おい、ルシオ」

名指しされたルシオが顔を上げた。

「まずは俺からだ」

呟くと同時、アリューゼの上段からの一閃。

ギキイツ！！

火花が散り、精王剣と狂刀リーヴェイグがぶつかり合う。力比べをし、数秒つばぜり合うもすぐに、互いに切り返し、刃を二度、三度と互いに袈裟がけに斬り合う。

ギイツ!

強烈な斬り合いに火花が散る。アリュージェは静かに自身の剣を見る。刃こぼれ一つしていない剣の有りように、一つ、満足げに頷いた。

「うおらあ!!」

気合いを入れ直し、再度異形に斬りかかる。渾身の一撃

キン

(なに!?)

アリュージェの強烈な一閃をデュランは軽く刀を触れさせるだけで流す。<ruby><rb>闘牛士</rb><rp>(</rp ><rt>マ

タドル</rt><rp>)</rp></ruby>の如く。

「の野郎!!」

「……」

上段、中段、下段の三箇所へ次々と放たれる斬閃。どれも、並の剣士では受けた太刀ごとへし折られる必殺の威力だ。

が、そのすべてを苦もなく捌き、刀の向こうで鬼の眼が、静かにこちらを覗き見ている。

(剣術じゃ、勝負にならねえ)

「だが！」

一閃、ソレを流されたと悟ると、アリユーゼは力任せのバックスピンナツクルを放った。精王剣が流されたとみるや、その勢いのまま、体重を乗せた一撃。

ガキイイイ　　ッ！！

だがその一撃は刀の柄で止められてしまう。

「こつというのは、どうだ!？」

アツサリと止められたと見るや、アリユーゼは直ぐに大上段からの一撃に繋ぐ。半歩左に身を切らし、躲される。だが、力任せの斬戟と打撃の組み合わせは、デュランの完成された剣技を突き崩した。

「一見、無駄な動きが多いように見える戦法だが、迂闊に攻めてきた相手を切り捨てる態勢が整っている。実戦的だな」

戦闘の専門家であるアレ^{スベシヤリスト}ンすらも認める、アリユーゼの戦闘法。荒削りだが、全て理に適った動きだ。このまま行けば、いかにデュランといえど、体勢を崩すのは必至。

拳を繰り出し、柄で止められ、返ってきた凄まじい斬閃を後方へ退いて、避ける。鮮やかな斬線がアリユーゼの目の前を走る。二人の間合いが一旦開く。

「フン。流石に簡単には崩せねえ、か」

「どうでもいいが、テメエの剣はいつまで鞘に入れておくつも

りだ？」

「なにを言っただやがる？」

デュランの言葉に、アリュージェは首をかしげた。精王剣の装飾華美な柄と、エメラルドの抜き身の刀身を見据えて、デュランは目を細める。

「分からねえ、か。ならば　！」

「　！！！」

縮地法。それは一瞬で相手の懐に入り込む恐ろしい運足術である。そして、初めてデュランが自分から仕掛けた瞬間だった。

（　しまった。コイツにはコレが有ったんだ！）

胸中で壮絶な舌打ち。

余りにも見事な体捌きと受け太刀、流れるような斬閃と摺り足の所為で、アリュージェほどの剣士が失念してしまっていた。この異形は決して、待ち続けるような男ではない。

完全に攻める姿勢になっていたアリュージェは、いきなり目の前に現れたデュランにその斬戟に受け太刀をするしかなかった。

ガオオンッ！！

およそ剣による一撃とは思えない、例えるなら落雷　そんな音が異形の剣撃から発せられる。

「ぬぐウッ！！！」

アリュージェをして思わず唸るほどの強烈な一撃。先までの完成された美しい剣閃と違い、明らかに力任せの豪の剣。

(コイツ、まさか……!?)

傭兵をしてきた彼の勘が警鐘を鳴らしている。美しい剣術はあくまで仮の姿。こちらの豪剣こそが、この男の本性である、と。

「上等じゃねえか!」

震える両手に喝を入れ、斬り合う。一閃、一閃ぶつかり合うことに、ガオンツという刀と剣による怒号が響き渡る。

(腕が痺れてきやがる、だと!?)

異形の体格はアリュージェよりも一回り小さく、華奢な腕をしている。なのに、その腕力はアリュージェを押し始めている。つまり、アリュージェ以上の剛剣ということだ。

「とんでもねえ、バケモノだ。だが!」

体格の差で、突き崩すとばかりに、打ち込みから体当たりを喰らわす。いやその姿勢に入った刹那。異形の上段からの両手ふりおろし。唐竹が放たれた。

「ままよ!」

ふり下ろされる刀に自らの剣をぶつける。

ズドオオツ！！

雷が奔ったかのような斬閃。力、スピード、技の全てが完璧な一閃。正に一撃必殺。アリュューゼは後方へ足を引きずらせながら、吹き飛ばされた。

「…………マジかよ。精王剣とやらがなかったら、危なかったぜ」

目の前の異形を見据え、アリュューゼはフーツと息を吐いた。感謝の意を込めて剣を見る。

「なんだと！？」

エメラルドの刀身のあちこちにヒビが入っていた。

ぱらぱらぱら……、

異形やアレンの兼定と戦ったときと同じく、精王剣のエメラルドが剥がれていく。

それをアリュューゼは歯噛みする想いで見据え、舌打ちした。

「ばかな、世界を支える精霊王の剣を壊す、だと！？」

レナスも、神々も、その深刻さに思わず息を飲む。だが、こちらの驚きなどお構いなしに異形が斬り込んできた。

「クッ！」

今一度、アリュューゼは斬線を止めたとき　精王剣アレクタリスは、パラインツと呆気ないほどに砕け散った。

ギインツ！！

「!？」

アリユーゼは息を呑んだ。デュランの刀が止められている。エメラドの刀身が砕け散り、その中から新たな刀身が現れたのだ。装飾過多な柄もその表面だけが砕け散り、剥がれ落ちる。

「コイツは……！」

一部始終を見守っていたジェラードが、アリユーゼのあとを引き継いだ。

「アレは、アリユーゼが持っていた剣……？」

「まさか、人間の使い手を精王剣が認めたというの！？ あの人間に自らを合わせた!？」

フレイが驚きの声を上げる。

「……でも、その所為で折角の神通力がなくなってる。あんなので勝てるの？」

フレイアが呆れたように、アレクタリスを見る。

アリユーゼは静かに刀身を見やった。

「コイツは、手に馴染む……。そうか、テメエも暴れてえのか」

ニヤリと牙をむき出し、異形を睨みつける。
視線の合った異形は、笑いこそしないものの満足そうだった。

「やっと剣を抜いたか……！　これで遠慮なく叩きつぶせる」

「上等だ！」

ギィンツ！！

鏢迫り合いの状態からアリュューゼが斬り払い、渾身の一撃を放つ。

ガキィツ　　！！

上段からの一撃は、刀を横にして止められる。だが、刃を止められて尚、その剣風は異形の後方にあつた岩を切り裂いた。

「精王剣の斬閃が見切られている？　初めて受ける剣の切れ味を、奴はなぜわかる……？」

ルシオの言葉に、洵が答えた。

「……信じられないことだが、あの鬼は戦ったことがあるようだ。アリュューゼの剣と同等か、それ以上の刃と」

「……人間離れた身体能力と圧倒的な鬼気、歴戦の経験、そして鬼の如き意志……か」

ルシオが、アリュューゼと戦う異形を見据え、自分のときを思い返す。

アリユーゼと刃を交わす、デュランはその鬼気を一気にあふれさせ、異形の　ゲヴェルの咆哮をその口から放った。

ウオオオオオオオ……ッッ!!

(とんでもねえな……。鬼気に当てられるだけで、体が痺れやがる
ー!)

アリユーゼは忌々しげに呻く。
と。

「そろそろ、俺も暴れるとするか」

低く、恐ろしく、落ち着いた声音でデュランは告げた。
消える。

ゴッ!

「……ガッ!？」

アリユーゼの首が後方へ仰け反る。喰らったのは裏拳だった。常人ならこれで卒倒する威力。だが、アリユーゼは歯を食いしばると、と首の力だけで態勢を立て直した。

「ヘッ! …… テメエも、顔に似合わず荒っぱいことが得意みてえだな!」

アリユーゼは笑いながら剣を握る。デュランの剣閃が走る。

ガアオンッ!!

例によって、受けた刀ごとへし折るような鬼の剛剣。

「いい加減、見あきたぜ!!」

受け切って反撃を取ろうとするが、スーッとアリユーゼの剣の腹を滑るように、デュランの刀が流れる。摺り足で剣を合わせたまま、デュランはアリユーゼの右脇側に移動する。

「なんだと!？」

目を瞠ると同時。剣の上から、デュランの斬閃が奔る。いつの間にか合わせていた剣が巻き込まれ、押さえていたはずの自分の剣が、下に抑えられる形になっていたのだ。

「クッ」

間一髪、後方へバックステップして躲し切る。剣を構えたアリユーゼの眼には、驕ることも見下すこともなく、ただ鬼気を纏い、放ち続ける剣士が映っていた。

「縮地法で相手にスピードを、受け太刀をも震わせる剛剣で力を警戒させておいて、刃を合わせたままの摺り足での移動……。そして、剣を合わせたアリユーゼほどの者が気付かない巻き技。……芸術だ」

「な、なにを見とれておる、洵!」

洵の言葉に、ハラハラしながら成り行きを見ているジェラードは、拳を握りながら抗議した。だがルシオが洵に同意する。

「見とれるのも無理はない。今アリュウゼが闘っている相手は、間違いない俺たち剣士の理想形の一つだ。付け入る隙がまるでない」

「これ程の力を、強さを持ちながら……あの方は一体、誰を探しているのでしょうか……？」

リセリアの言葉を受け、ジェラードが叫ぶ。

「あの異形がなにを考えているかなど、どうでもよい！ そんなことより、アリュウゼの助太刀を……」

「……フ」

その言葉に、洵とルシオが笑う。

「な、なにがおかしいのじゃ！ 無礼者どもが！！ 万死に値するぞ！！」

「そうじゃない。……なんて奴だ。アリュウゼの奴、笑ってやがる」

「な、なんじゃとお！？」

ルシオの言葉に、ジェラードは目を瞠った。

ルシオは満足げに笑っている。隣の洵も全く目を逸らさない。

そう、アリュウゼは笑っていた。

自分の剣が最強であると信じてきた彼の前に現れた、このとんでもない異形の強さに。

自分を相手に人間驕ることなく、全力で叩きつぶそうとしてくる異形の強さを、アリュウゼは心の底から楽しんでいたのだ。

(俺は、幸せ者かもしれねえな。これほどの剣士と心行くまで斬り合えるのだから)

その目はいつもの、相手に挑みかかる者の眼ではない。静かに、だが確かに燃える者の瞳だった。

「どうした、もう終いか？」

「……吐かせ！！」

アリューゼは、最後の賭けに出た。これほどの達人を相手には小細工は通用しない。だからと言っていきなり大技を狙うのは論外だ。

(受けに回るのは不利、だからと言って半端に攻めれば、あの剣技の前には無意味。ならば……！)

洵が静かに、その拳を握りしめる。

「やはり 攻めるか、アリューゼ……！」

「……ああ。だからこそそのアリューゼ、だろう？」

ルシオも、アリューゼの全てを見ようと眼を見開く。

「うおらああああ……！」

怒号と共に放たれる剣撃。アリューゼはその巨体に似合わない俊敏さで、一気に相手との距離を詰めると、一撃を放つ。

キーンッ、

呆気ないほど、アツサリと流される一撃。だが、アリュューゼは笑っていた。直に返しの一撃を放つ、否、捌かれるのが、あらかじめ分かっていたからこそ、アリュューゼは笑った。受けに回っても、あの剛剣と鬼の如き攻めが、中途半端に攻めれば、凄まじい剣技による返し技が待っている。

（残りの体力なんぞ、気にしている暇はねえ！！ 全力でぶちかます！！）

「あのアリュューゼが、連撃だと!?!」

「一撃へのこだわりを捨て、勝負に出た、か」

洵、レナスがその意味を悟り、唾を飲み込む。

「アリュューゼ、こんなことが出来たのじゃな!! 出来るのなら、初めからせぬか!!」

「ところが、そうは行かない。アリュューゼの持つアレクタリスは大剣。一振りするには並の剣の2倍以上の体力が必要と成る。だからこそ、一撃勝負に挑んでいたのだ。大剣での連撃はつまり、それ以外に方法がなくなったことを示している」

レナスの言葉に、ジェラードが喜びの顔から一転青ざめる。

「少しでも、剣の勢いや異形との距離を詰める足が鈍ろうモノなら……」

「 だからこそ、アリュージェは勝負に出た。火中の栗を拾わなければ、勝機はない！」

レナスの言葉に、洵が強く頷く。

「 剣士とは、かくありたいものだ」

「 ……」

洵の言葉に、ルシオはなにも言わず、ただ黙ってアリュージェとデュランを見据えていた。

斬線が奔り、大剣使いでありながら、次々と剣を繰り出すアリュージェの膂力は素晴らしいモノだった。剣によるラッシュは、次第にデュランをして、後方へ下がらせる程に。

（ ち、まだ見てやがる、か ）

アリュージェはなにかを待っているかのように、連撃を放つ最中、異形を見据える。デュランは、凄まじい連撃を捌きながら、その鬼眼をジッとアリュージェの眼に向けていた。

「 違う………こだわりを捨てちゃいない」

「 ……え？」

ルシオだけが、アリュージェの狙いに気付いた。

連撃の勢いが落ちないうちに反撃の姿勢を取るなど、普通は不可能。なぜなら、下手な反撃はそのまま自分の命を絶つことになるからだ。

この異形をして油断は有り得ない。ならば、自分を見限ったと言
うのか？

（ ふざけるな！！ ）

憤りをそのままに、剣を放つ、連撃を更に速める

そのとき、アリュージェの眼に映ったのは網の眼のように疾る蒼い
斬閃だった。

（これは、遺跡でルシオ相手に見せた ）

「うおおおお！！」

悟ると同時、剣を繰り出す。剣と刀がぶつかり、火花が散る。次の瞬間、アリュージェが放った斬戟の全てが打ち返され、蒼の斬閃が迫る。

「アリュージェ！！」

ジェラードが思わず叫び、杖を構えるよりも早く、風が横切って
行った。

「え ？」

（防ぎきれねえ！！）

身構えるアリュウゼの前に、赤い鎧と、金髪をなびかせる青年の
背が、飛び込んできた。

4 神々との戦い デュランvsルシオ、アリュージェ

「ルシオ……!!」

「……テメエ」

驚くアリュージェと、静かに青年を見据えるデュラン。

「奥義、ラウンドリップセイバー!!」

ルシオの構える剣に蒼い雷光が宿り、一閃する。

……ガキイツ!!

剣と刀が激しくぶつかり合う。割り込まれたと悟ったデュランは、連撃から一撃のリズムに無拍子で変え、ルシオの奥義を止めた。

「ほう、この前に出会ったときより、気合いの入ったいい剣だ。面構えもマシになってるじゃねえか」

「……アリュージェ、この勝負俺が預かる。俺もコイツにはカリがあるからな!!」

アリュージェは静かにルシオを見ると、なにも言わず剣を下げた。それを確認したデュランは、目の前の青年に鬼気を向ける。

「……なるほど、こうしてみるとお前の異常さが良く分かる」

「なに？」

圧倒的な鬼気、狂気すら孕む闇の鬼眼。前に遭ったときはその片鱗しか分からなかったがこうして対峙してみれば良く分かる。

この異形の強さが

「怖気づくか？」

鬼の声、誰もが恐怖するであろうその声を間近に聞いて、ルシオは黙ってその鬼眼を見据える。遺跡のときに何度も目を交わした、鬼の眼を。

遺跡のときとは、明らかに違う輝きのある翡翠の瞳で

「……仲間のために剣をふるう。その意味を理解したようだな」

「ああ……。コイツらが俺に教えてくれた。だからこそ、俺はお前に勝つ！！」

「上等！！！」

お互いに言葉は不要。

そう言わんばかりの剣撃の応酬が始まった。デュランの唐竹を左に避け、返す刀で胴を薙ぐ。バックステップして避けるデュランに更に斬りかかる。

デュランは脇に刀を構えている。一刹那、縮地法にて姿をかき消し、宙に無数の斬閃が描かれる。

「うおおお！！！」

先のアリューゼと同様、デュランに腹の底から吠えながらルシオも剣をふるう。死ぬためではない、生きるための剣を

その全身から、凄まじい光があふれ出る。

(これは、“気”だな。これほど強力な気を我流で練るとは……！
おまけにあの剣、切れ味こそ平凡だが　　！！)

アレンが眼を細め、ルシオを見やる。その力を

デュランの剣撃を、受ける、切り返す、捌く、斬り合う。あの圧倒的な剣を、受けて返す。その頬から、血が流れ、鎧に傷を負おうとも、決してひかない。急所を避け、かすり傷に眼もくれず、剣を返していく。

ブウン……ッ！！

大きく空を斬るデュランの刀。ルシオはその背後に回っていた。

「……あれは、俺の……！！」

洵が千光刃を放つときに使う運足術『裏周り』、倭の国に伝わる剣術の極意、ルシオはソレを再現して見せた。

「ほう、それがテメエの生きるための工夫か……ルシオ！」

アリュウゼがニツと笑って見せる。

「　　もらったあ！！」

ギイイイッ！！

思い切り打ちつけた剣は、あっさりと身をひるがえした異形の刀

に止められた。

「……くッ！」

背後を取つてなお、鬼には隙がない。いつの間にか、自分の正面にある鬼眼を、ルシオは睨み据える。

(シャイニングボルトは駄目だ。コイツの動きならかわ躲される)

剣で斬り合うしかない。そう感じたルシオは先のアリュージェ、いや、それ以上のスピードでラッシュを放つ。

剣のスピード、キレはアリュージェよりも上だ。惜しむらくは、それにパワーがないこと。ルシオとて非力ではない。だが、重戦士のアリュージェに比べれば、ラッシュにおけるパワーが負けるのは仕方のないことだった。

剣と刀がぶつかった瞬間、デュランはルシオの腕をつかむと頭突きを顔面に喰らわせた。

「ゴフッ！」

仰け反ったルシオに力任せの裏拳が飛び、強烈な蹴りが顔面に入る。武術とは全く無縁な、不作法な、しかし強烈な打撃。

剣を縦にして受けるも、その荒々しい攻撃はまるで止むことを知らない。たまらず、バックステップしたとき、強烈な斬閃が目の前で飛ぶ。受けた太刀ごと後方へ吹き飛ばされるルシオ。

「 これでも喰らえ！」

飛ばされながらも、右手に雷を生じさせ、追撃を防ぐためシャイニングボルトを放つ。

「フン」

それを右手でつかみ取り、握りつぶす異形。
その様を見て、ルシオが吐き捨てた。

「化け物がっ！」

「伝説の魔獣とやらをも退けた雷撃を握り潰しやがるか……。やは
り本物だな」

「……どうすれば、この鬼を倒せる!？」

アリュージェは静かにアレクタリスを見つめ、洵は拳を握りしめた。
剣士たちには、この鬼の恐ろしさが、誰よりも良く分かる。

1292

「レナス、あの鬼の力は異常だわ。ここは全員で……」

フレイの言葉をロキが遮った。

「かかっても、あの鬼を倒せるとは限らないでしょう？ おまけに、
あっちにはあの鬼以外に二人もいるわけですし……」

「じゃあ、どうするのよ!？」

フレイアが挑みかかるようにロキに言い放った。混血の少年神は、
どこか悠々とした含み笑いを浮かべて応える。

「一番賢いのは、エインフェリアが時間を稼いでいる間に逃げてしまふことなんだけど」

「神が、人間や異形を相手におめおめと逃げ帰ると言うのか!?!
オーデイン様になんと申し開くつもりだ!?!」

ヘイムダルが論外だとばかりに怒鳴りつける。それにロキは肩をすくめて見せるだけだった。

「レナス?」

「……フレイ、私はもう少し信じてみるわ。ルシオを」

ヴァルキリーは静かに言い放ち、その瞳を自身のエインフェリアへと向けた。

スピード、剣撃の威力はほぼ互角。だが

(あの強烈な剣閃はどうあっても防げない。……どうするっ!?!?)

連撃を最速で放つても、奴には真正面から返される。剣速は互角でも、あの喧嘩殺法を絡められたら、一気に分が悪い。だからといってカウンターを狙えば、自分以上の技量の連撃がくる。

シャイニングボルトは破られ、ラウンドリップセイバーに至っては通常の剣撃で止められている。

(それでも、退けない。ここで退けば、俺はあのときからなにも変わってないことになる。せめて一太刀、この鬼の顔色を変えてやる!?!?)

ルシオの瞳に力強い光が宿る。

「技を止められても、眼はひるまず……か。面白い、テメエの意地でこのデュランを斬ってみろ!!」

「行くぞ!!」

更に、ルシオの剣速が上がる。遺跡のときと同じように、ルシオは己の限界を高めて、剣を交えて行く。

「あのエインフェリア」

フレイが眼を丸くするほどに、ルシオは力を撥ね上げて行く。

「凄い凄い！ レナスお姉さまが認めるだけあって、人間なのに凄い力!!」

フレイアがはしゃぎ立てる。手を叩く少女神の隣で、ヘイムダルたちも、ニヤリと笑っている。しかし、レナスだけは神妙に、ルシオを見つめ続けた。

「ルシオ」

「いいぞ、ルシオ！」

「野郎、また強くなってやがる……!!」

白銀の異形。確かにその強さは別格だ。だが、いつだって諦めない心が、勝利への鍵であることを勇者たちは知っている。

「ルシオ……!!」

「……ルシオさん」

仲間が彼を見守っている。それを感じ続ける限り、ルシオは剣をふるうだろう、自分にとってかけがえのない存在を、今度こそ守り抜くために。

「……なぜ、兼定がないときに出会ってしまったんだ」

心底、無念そうに嘆くアレンにシーティアは一瞬だけ、優しく笑うと表情を引き締め、デュランたちを見据える。

『 フレイたちが勝てない存在を相手に、勝負になるなんて。あの2人のエインフェリアは、ブラムスにも匹敵する器だというの?』

シルメリアがその事実気付いたとき、凄まじい気と気のぶつかり合いが起こった。

剣と刀が幾度目になるか分からないぶつかり合いをする。

「いい気迫だ。……だが!」

「っ、!!」

デュランの強烈な強打撃がまたしてもルシオを後方へ吹き飛ばす。

咄嗟に宙で雷撃を放つルシオだが、デュランはまるで気にも止めずに、脇構えの姿勢を取ると、一気に突きを放ってきた。

バリイイツー!!

雷撃がはじかれ、刃が未だ宙で後方に吹き飛んでいる、ルシオに迫る。

「これで、終いだ!」

(避けきれないっ!!)

剣を縦に構え、直撃だけは避けようとするルシオ。その刀はしかし、横から飛んできた大剣に阻まれる。

「アリユーズー!!」

「悪いが、ソイツはやらせねえ!!」

ギインッ……!!

下から大剣をふり上げ、突きの軌道を変えようとする。そのとき、デュランの刀が青白く輝いた。

「まがごと禍事の闇に光 一つ!」

っ!?

ソレは、圧倒的な斬閃だった。

光としかいい表わしようがない、無慈悲なる断裂。その光が網の

目のように、アリュージェとルシオの二人の眼に映る。エインフェリア二人をして反応できないとんでもない斬戟。

デュランの連続攻撃だ。

アリュージェにもルシオにも、ソレを交わす術はない。

「奥義　千光刃！！」

そのとき、脇から俊足で二振りの刀を抜き放ち、洵が斬り込んできた。無数に描かれる斬閃の空間に、無限の剣閃が3人に分身した侍から放たれる。

その間、僅か1秒にも満たない時間に、数十回を超える剣撃がぶつかり合う。

ドゴオ　　ツッ！！

炸裂音が辺りに響き渡り、地面が網の目のように斬り裂かれ、土煙が巻き起こる中で

ズザアッ！！

洵が足を滑らせながら、ルシオとアリュージェの二人をかばうように立っていた。

彼の刀は刃の付け根部分から無残に斬り裂かれ、その全身からは、血が吹き出ている。

「洵っ！！」

ルシオが倒れかける洵を抱きとめる。

「……………てめえ！！」

アリュージェが牙をむき出しにしながら、ルシオと洵をかばうようにデュランの前に出る。その全身から赤い炎の“気”を吹きあがらせて。

「洵!! なんといい無茶をするのじゃっ!!」

「……酷い怪我。急いで回復魔法を……っ!!」

後方で待機しているジェラード、リセリアがキュアプラムスの魔法を唱える。だが、それよりも早く、洵は光の粒子と成って行く。

「洵っ!!」

「洵さん……っ!!」

回復魔法を唱える時間さえ、侍の体は持たなかった。

「……そんな顔をするな。戦乙女の中で少し休むだけだ」

深刻な顔でこちらを覗きこむルシオに、洵は笑って言うてやる。

この青年が以前ののように、自分は無力だと打ちひしがれないように。

「……アリュージェ、ルシオ。やはり、お前らは大した奴らだ。こんな奴とここまで剣を交え続けることが出来るなんて、な……。お前たちなら、勝てる……! 俺はお前たちならやれると信じている」

「もうしゃべるな、洵……!!」

「……皆を守ってくれ。妹を助けてくれた戦乙女を……。そして、共に闘ったかけがえのない仲間を……頼んだぞ、ルシオ」

洵の体は光と化し、レナスの胸の中へと吸い込まれていった。

ルシオの剣を握る拳が、力強く握りしめられる。その全身から青白い雷の“気”を迸らせて、ゆっくりと立ち上がる。

二人は、白銀の炎を纏う鬼を同時に睨みつける。

「……ルシオ、手を貸せ」

「奇遇だな。俺もそう言おうと思っていた所だ……」

剣を構えるのも、同時

(雰囲気明らかに変わった……!?)

シーティアは敏感に二人の剣士の気の変化を察した。注意深く、彼らを観察する。

対して、アレンは口の中で微笑うと、目を閉じてウンウンと2回頷いていた。

『この期に及んで、闘志を失わないなんて……!! なんとという精神力なの……』

「仲間が自分を信じて、道を開いてくれたんだ。文字通りその身を犠牲にして……。これで燃えない奴がどこにいる!？」

英雄たちの熱い友情を前に、アレンは蒼瞳をぎらつかせて拳を握

りしめた。

デュランは静かに長刀を脇に構え、二人の剣士を睨み据える。

「……ほう、2人か。相手にとって不足なし」

次の瞬間、ルシオ、アリュューゼの二人が同時に斬りかかった。

「謝るなら今のうちじゃ！ その二人は伝説の魔獣をも倒したのじやからなー!!」

ジェラードが拳を握り、叫ぶ。剣士たちはその誇りを、剣に宿して放つ。

「……これが、闘い……？ 人を傷つける行為がなぜ、こうも人の心に訴えるのでしょうか？」

争いごとを嫌う自分の心にさえ、この闘いは訴えかけてくる。

ルシオ、アリュューゼともに、ほとんど体は限界に近い。お互いにそれを悟っているからこそ、二人は連撃を放った。

ルシオの速攻とアリュューゼの剛剣。この二つを兼ね合わせたラッシュ。ルシオが踏み込み、がむしゃらに打ち込みまくることで動きを止め、アリュューゼが渾身の一撃でデュランを捉える。

対するデュランはこれまでのように流すのではなく、その全てに己の剣撃をぶつけて行く。一秒間に数十回という刀と剣の打ち合い。

ズザアッ！！

やがて、ルシオが打ち負け僅かに後方へ下がる。その瞬間、鬼の容赦のない強打撃が放たれる。そこへアリュューゼの一撃がぶつつけられる。

ガオオンッ！！

炸裂音と共に、アリュューゼの動きが止まる。渾身の一撃すら、この鬼には及ばない。追撃がくる。しかし、そのころにはルシオが鬼に斬りかかっている。

二人は、真正面から鬼に挑んでいる。もう策を弄する程の余裕も、闘いを長引かせるだけの体力もない。

アリュューゼもルシオも、狙いはただ一つ。

ただ、一撃のみ。

「……………なぜじゃ、なぜ勝てぬ！！　ここまでやって、なぜ!?!」

ジェラードが涙を流しながら、異形に挑む二人の剣士を見る。

「ヴァルキリー、お願いじゃ！！　アリュューゼたちを助けてやってくれ！！」

これ以上は見えてられない。

懇願するジェラードに感化されるように、リセリアが不安げな眼差しをレナスに向けてきた。

「……………ヴァルキュリア様」

胸許で両手を握り、リセリアが見守る中、レナスは一つ頷いて腰の剣に手をかける。　だが。

「やめておけ、中途半端な武器では足手まといにしかならない」

それをにべもなく止めたのは、アレンだった。彼は蒼の瞳を戦士たちに向け、笑う。どこか嬉しそうに。楽しそうに。

「……信じてやれ、アリュージェたちを。少なくとも俺には、アレンが勝負を捨てた者の眼には見えない」

「あの異形はお前の仲間ではないのか……？」

「……………」

レナスの指摘に、アレンは好戦的な笑みを浮かべるだけだった。デュランと同じ顔の女性が、冷たい目でアレンを見据える。妖精の形をしたホムンクルスは心底呆れていた。だがアレンは、そんな二人の視線など気にも留めない。

何度も、何度も、気の遠くなるほど剣を交え続けた。

その間に一度も、この鬼は傷を負っていない。自分たちの剣は、全くカスリ傷一つ、この鬼に付けることが出来ていない。

このままでは終われない。剣士としても、そしてなにより自分たちを信じその身を呈した仲間のためにも

ルシオと鬼が連撃で剣を交える最中、アリュージェは横薙ぎを放った。

「ルシオ……！」

「……!!」

アリュージェの掛け声と共にバックステップ。当然、鬼は強打撃を放ってくる。だが、ルシオも同時にアリュージェの剣に合わせ、思い切り剣をぶつける。

「……ぬう!?!」

初めて、この異形が表情を変えた。異形をしても、二人の剣士の渾身の一撃は止められなかったのだ。体勢が崩れる。二人は、同時に仕掛けた。

「ファイナリティブラストっっ!!」

「ラウンドリップセイバあっ!!」

炎と雷の剣が鬼に奔る。流石に防ぎ切れない。この場に居る誰もがはつきりと分かる程、完璧なタイミングだった。

「いけ、いっつけえええ!! アリュージェ!!」

ジェラードが涙をそのままに、恥も体裁もなく大声を張り上げる。

「……アリュージェさんっ、ルシオさんっ!!」

「ルシオ!!」

リセリアが祈るように両手を組み、レナスが険しい表情でエインフェリアの名を呼ぶ。

シーティアは静かに追いつめられたデュランを見据える。

「これで決まる、長い戦いだったな」

「決めろっ！」

アレンはどちらに向けるとも知れない言葉を戦士にかける。剣を交える彼らが、一片の悔いも残さぬよう切り結ぶように。

ここでデュランが取った行動は思いもよらないモノだった。躲せないと見るや、彼は防御を捨て、剣を一閃したのだ。

彼ほどの剣士なら、防ごうとするのが定石。それだけの技を、力をこの鬼は持っている。なのに、確実に勝つ方法ではなく、鬼は挑んできた

アリュージェとルシオ、二人の剣に。

デュランの刀は蒼く光る刃と化し、横薙ぎの斬線は青白い炎を吹きあがらせ、爆発 無数の斬戟へと変化する。

デュランの全周囲攻撃である

交差法で互いの剣がぶつかり合い、すれ違い合う3つの影。

ズバア……ッ！

血を吹き上がらせながら、デュランは静かに己の体を見据える。急所だけはギリギリで外したが、それでも深い傷が二つ、体に刻まれている。

「見事な剣だ。流石はエインフェリア」

確かな足取りでふり返る。その瞳は傷を負ったにもかかわらず、まるで衰えない。その溢れる鬼気も。動きそのものが変わっていない。

彼の足下を見れば、その傷が決して浅くはないことがはっきりと分かる。なのに、鬼は息一つ乱していなかった。

「……なぜ、避けなかった？ ガードさえしていれば、防ぎきれなくても、それほどの傷を負うことはなかったはずだ」

片膝を突いたまま、まるで動けないアリューゼの横で、同じ姿勢のルシオが鬼に問いかけた。二人とも、先の攻防で全身をズタズタに切り裂かれている。

意識があるだけでも僥倖といえた。だから、問いかける。

この鬼には見抜かれていたはずだ。決め技を放てば、自分たちは動けないことに……。防御でやり過ぎし、動けなくなった自分たちに止めを刺せばよかった。なのに、なぜコイツは

「 テメエら程の剣士を前に、無傷で勝とうと思っちゃいねえ。これ位の傷、安いもんだ……」

鬼気を纏いながら、美しい異形はそう言った。

「……へッ、テメエも馬鹿の一人ってわけか」

「……ああ。俺も剣士だからな」

アリューゼの言葉に、異形の青年デュランは初めて瞳を閉じ、優しい微笑を見せた。

「　っ！」

フレイが静かに神々を見渡すと、彼らも既に準備は整っているようだった。

（あれほどの傷を負ったのならば、今しか仕掛けるチャンスはない！！）

そう判断した神たちの瞳に、血まみれの異形がその鬼気を宿した瞳を向けてきた。まるで衰えるどころか、鬼気を益々強くして。

神たちは、結局誰もその場を動けなかった。ただ一人。

混血の少年神を除いては。

「　ッ！」

白銀の鬼。その姿こそ、彼らゲヴェルの真の姿。

今のデュランは一切の鞘を脱ぎ捨て、己の中にある鬼気を全開にしていた。彼は言葉を紡ぐ。およそ、人とは思えない、低く全てを支配するかのような　しかし、どこか人を惹き付ける声で。

「無益な殺生をする気はねえ……。負けを認め、大人しくアレン殿に刀を返すんだな……！」

誰もが鬼気に飲み込まれ、言葉を発せられない。気の弱い人間がいれば、彼の眼を見ただけで、恐怖のあまりショック死してしまうだろう。

その鬼眼を真正面から見据え、腰ぬけと評されていた少年神は笑いかける。

「見逃してもらえるのは有り難いのだけれど、刀はオーディン様が持っていてね。僕らなんかじゃ持ってこれないんだよ」

「
なら、そのオーディンとやらが持ってこい。それが筋だろう
が」

にべもなく告げるデュランに、首を横にふるロキ。

「残念ながら、オーディン様はアスガルドからは出てこなくてね…
…」

「この俺が、今から引きずり出してやってもいいんだぞ……!!」

「フフ、そんなに怖い顔しないでよ。その人間が探しているピフレ
ストの場所を教えてあげる。それでどうかな？」

アレンに問いかけるロキ。フレイの表情があからさまに歪んだ。

「ロキ、貴方……!! 自分がなにを言っているのか分かって!?
神が人間と取引など……!!」

「フレイ、分かっているのは貴方だ……。僕らの命は今、完全に
この目の前の男に握られている。いちいち説明しないと、分からな
いか？」

言いながら、ロキはデュランから一度たりとて目を離さない。飄
々とした笑顔の中で、彼の瞳だけは静かに 冷たくデュランを見
据えている。

『そんな取引きに応じると思ってた？ 私がいるのに、ビフレストもなにもないでしょう、気が焦った？』

「確かに、シルメリアならビフレストを通れるだろう。問題は生身の人間が通れるか、ということにあるのさ」

『……残念ね。この人間は、そう言うことに関しては凄まじい才能がある。貴方の助言は無意味よ。どうしても言うなら、ミッドガルドにオーブを戻しなさい』

ロキはフフと笑うと、にべもなく告げる。

「ムリだ」

『交渉決裂、ね』

「なら、さっさと退散させてもらうよ。正直、シルメリアより怖い鬼さんがこちらを睨んできているしね」

そんなロキに、シーティアが声をかけた。

「このまま、すんなりと逃げられると思っているのか？」

と同時、デュランの剣がロキの首筋に添えられている。

「ロキッ！…！」

フレイアが思わず叫ぶ。だがロキはそれでも笑うのを辞めない。

「……………」

「僕を斬れば、この街を火矢で焼き尽くすことになるよ。アールヴたちにさっき命令をしておいたんだ。僕の首を撥ねれば、すぐにも街は火の海と化す」

数瞬、睨み合う。

が。

「フン」

意外にも、デュランはあっさりと剣を退いた。

『なっ!?!』

シルメリアが思わず、声を上げるほどあっさりと。

デュランは静かにリーヴェイグと自身の体に溢れる力を納めた。

そんなデュランにシーティアが問いかける。

「魔力や妖精の気配はない……。ハツタリに剣を退くとは、お前らしくないな」

「……確かに、奴のいうような方法ではこの街は焼かれんでしょう。だが」

静かに、輝きの戻った双眸でロキを見据える。

「奴の首を撥ねれば、確実にこの街は滅びる……。なぜか、そう感じる」

「……お前と違い、カーマインといい、もう少し論理的に説明しろ。」

だが……おまえがそう感じたのなら、悔れんな」

「分かってもらえてうれしいよ……。僕の名は、ロキ……。また会えるといいね」

それだけを告げると、ロキは全てのアース神族を引き連れ、去って行った。

5 神々との戦い完結 二柱の戦乙女

「ロキ……。容量が計り知れない男だな」

アース神族が去っていくのを見届けて、アレンはロキをそう評した。結局シーティアに借りた刀は振るう事の無いまま、彼女に返す。

シーティアはそれを鼻で笑った。

「フレイに挑むのでは無かったのか？」

「街に影響を出すなど言ったのは、お前達だろ？ それに決着ならどうせつける」

ヴァルハラ
神界で、な。

言外に語ったアレンは空を見上げる。シーティアは肩をすくめた。「では、あれはお前の敵では無いのか？」

シーティアはそう言って、アレンが見据える先とは逆方向を顎でしゃくった。アース神族が撤退しても、レナスはまだ空に残っていたのだ。

シーティアに倣ってレナスを見上げる。アレンは息を吐いた。

「ルシオもアリュューゼも洵も重傷だ。その上で、俺達を相手取る気は無いだろう」

「……………」

レナスは神妙な表情をしていた。アレンが意外そうに目を丸める。「……………どうした？」

問うてみるが、レナスは答えない。彼女は腰の剣を引き抜いた。

デュランがスツと黒柄リーヴェイグの長刀を構える。アレンはそれを制した。

(どう思う？ シルメリア)

『封印が綻んでいるのよ。ここであの指輪を外せば、一気に元のレナスになるかも知れないわ』

答えては来るが、シルメリアの声に覇気は無い。アレンは無言のまま、レナスを見据えた。剣を手にした女神が、ゆっくりと地上に降りて来る。

「お前は一体、何を知っている」

「指輪を外す気は無い、と言う事か？」

緊張した面持ちのレナスに、質問を返した。すると、彼女の表情カオが明らかに歪む。ギョッと右手を握り、左手で指輪に触る。

「フレイヤオーディン様が、私を……？」

問う彼女に、アレンは黙した。力無いレナスの顔。不安げに揺れる瞳は初めて見るもので儚げだった。アレンは息をゆっくりと吐き、レナスを見据えた。正確には、彼女の右人差し指に嵌った、ニールンゲンの指輪を。

「……まあ、正解かも知れないな。あの女神の性格を考えると、封印が解けたら解けたで何かありそうだ」

「……………」

シルメリアが神妙に押し黙る。レナスはギョッと唇を引き締めると、アレンの胸の辺りに視線を向けた。

「彼女は誰？　彼女と、話をさせて欲しい」

真摯なレナスの視線に頷うなづいて、アレンも視線を下げる。自分の胸の中に居る訳では無いが、不思議と心臓の辺りにシルメリアの存在を強く感じるのだ。

（この状態で話すか？）

問いかけてみたが、シルメリアは答えない。表層意識にいる事だけは確かだが、反応する気配が無い。

アレンは首を傾げた。

「……………おい？」

続けて呼びかけてみたが、女神は無言で事の成り行きを見守るだけだ。思うところが、彼女にもあるのかも知れない。アレンは溜息を吐いて、悪いな、と言いかけた。それを止めるように、レナスが首を横に振る。

「そうか。……………いいだろう。答えは自分で見つけて見せる。そう言う事なのだろうな」

つぶやいた彼女は、どこか寂しげだった。彼女の青の瞳が悲哀に

揺れる。だが口元は穏やかに微笑っていて、それが一層、レナスの悲壮感を際立たせた。アレンが思わず手を伸ばした所で、彼の内に眠る女神が、言葉を紡いだ。

「一つだけ。 フレイに気をつけて、レナス」
「！」

レナスは顔を上げた。頭に直接 否、レナスの魂に直接語りかけてくる声に、レナスは目を丸める。

そして、苦笑した。ギョッと胸元で拳を握る。

「ヴァルキリーの私に語りかける。……不思議だな。それは私には出来ない技だが、彼女だけが出来る技だと知っていた。それが答えなのだろうな」

「……、」

寂しげに笑うレナスに何と答えればいいのか。考えている内に、スツとレナスの表情に凜としたものが混じった。剣を鞘に納め、彼女はアレンを見据える。正面から、わずかに揺れる瞳で。

「だが、私はヴァルキリー。主神オーデインこそがわが父と信じて疑えない」

「……なら、エインフェリアを大事にする事だな。言う必要も無いだろうが」

つぶやきながら、アレンは視線を横に向ける。

レナスの周りを囲うように浮かぶ光は、人を象り、女神の中に吸い込まれていった洵となる。彼の左右には回復魔術キュア・ブラムスで復活したアリエーゼとルシオがいた。既に全快しているようで、彼等の“気”の回復量にアレンは目を瞠る。その間に、ルシオがレナスをジッと見た。

「ヴァルキリー。アンタはアンタの信じる道を行け。俺達はアンタについて行く」

「ま、そういうことだ」

精王剣を肩に担ぎながら、視線も寄越さず頷くアリエーゼ。ルシオは小さく苦笑すると、揺れるレナスの瞳を見据えて、頷いた。

「アンタが間違っているんなら、俺達が正してやるさ」

「うむ！ ヴアルキリーにもしもの事があるのなら、妾達が守ってやるぞ！」

「そういうわけだ。貴殿の心遣いは無用」

洵は言って、視線をアレンに向けた。その真っ直ぐな視線を受けて、アレンは頷いた。

「そのようだ。……まあ、お前達が挑んで来る事には、こちらは何も異論は無いが」

アリユーゼ、ルシオ、洵を見ながら、アレンは笑う。すると、視線の合ったアリユーゼが好戦的な笑みを浮かべながら、肩をすくめた。

「やめとけ。今の俺には相棒もいるしな。そっちの鬼と組んで来るってんならいい勝負になりそうだが」

「、っ！」

アレンが絶句する。アリユーゼの後頭部を、ポカッとジェラードが杖で叩いた。

「いい加減にせんかつ！ この戦闘バカどもが！」

「心配しなくとも、今の。結構重傷だったみたいよ？」

シーティアは言って、視線でアレンを示す。ジェラードが顔を向けると、地面にうずくまる彼が居た。

アリユーゼが溜息を吐く。

「……ま、次に会う時までには刀をどうにかしとくんだな。せつかく楽しめるようになったってのに、テメエが丸腰^{ソレ}じゃ拍子抜けだ。分かったな？」

「善処する……」

ぐう、と唸りながらアレンは小さく頷いた。

「アンタには感謝している。クレアをありがとう。それから、

クレアとジェラベルンをよろしく頼む」

心からの笑みを浮かべて、ルシオは言った。最期に見た諦めの瞳では無く、希望と充実感に満ちた、ルシオの瞳。その力強い瞳は、

まるであの時とは別人だった。

アレンは思わず目を丸める。

ルシオは穏やかに笑んだまま、言った。

「ありがとう。俺の故郷を救ってくれて。アンタはヴァルキリーにとっては何者か知らないが、俺にとっては恩人だ」

「……礼を言うのは、まだ早い段階だけだな」

はた、と瞬くと同時に、アレンは頭を掻きながら苦笑した。

ルシオは首を振る。

「信じてるよ。俺に生きる目的を与えてくれたあの二人の少年と、俺の故郷を救ってくれたアンタを、俺は信じる」

「責任重大だな？ アレン」

「元より覚悟の上だ」

にやりと嗤うアリユーゼに、アレンは溜息を吐きながら頷いた。

彼の口許には笑みが浮かんでいる。ルシオに答えるように、彼は力強い蒼瞳をルシオに返した。

ルシオは頷く。

「それと デュラン、……だったか？」

突如名を呼ばれ、デュランは視線だけをルシオにやった。

「アンタの剣で目が覚めた。ありがとう」

初めてデュランの顔を正面から見て、ルシオはハッと目を見開いた。

「ア、アンタ……!？」

息を呑む。だが、驚きで小さくなったルシオの声はデュランには届かなかった。アレンやシーティアの後ろに控えるように佇んだ騎士は、小さく頭かぶりを振る。相変わらず、微塵も隙の無い所作で。

「礼を言われる筋合いはねえ。テメエを目覚めさせたのは、テメエの仲間だ。そして、それに気付いたのはテメエ自身。俺はただ、テメエをぶった斬っただけだ」

「コイツの顔に心当たりがあるのか？」

そんなデュランを置いて、アレンはルシオの変化に気付くや問い

かけた。ルシオが頷く。

「何で気付かなかったんだ……！ アンタは……、あの時プラチナと一緒にいた……！」

「……！」

シーティアとデュランの顔色が変わる。

ザツと駆け寄ったデュランは、目を見開いた。

「どこで見たんだ！？ あの方をどこでっ！？ ……いや、あの方は今、いずこに居られる！？」

「アンタとあいつは……、違うのか？ アンタ、……アンタ達はアイツの何なんだ？」

「そんなことはどうでもいいっ！！ 教えてくれっ！ 頼むっ！！」
必死なデュランの剣幕に気圧されながらも、ルシオはすまなさそうに首を振った。

「俺も、直接話した事は無い。顔を知ってるだけなんだ。ただ、プラチナの話ではプラチナが唯一、俺の次に出来た友達だって言っていた。小さい妖精も一緒にいて、その妖精の方と友達になったって……、アンタの事じゃないのか？」

「妖精ってこんな感じか？」

ピティを指して問うアレンに、ルシオは首を横に振った。顔を俯ける。

「悪いが、妖精の方は俺は知らないんだ。そいつらは、俺が見た時には光の中に吸い込まれて行ったから」

「入れ違い、か……」

アレンがつぶやく。ルシオは神妙な面持ちで、視線をデュランに返した。

「ただプラチナの話では、とても優しい妖精だった、と」

「……礼を言う。我が主の無事を知らせてくれたこと、心より感謝する」

「アンタ……」

深々と一礼するなり踵を返すデュランに、ルシオは目を丸めた。

今の彼に“鬼”を思わせる部分は一片も無い。首を傾げていると、デュランと同じ顔の美貌の女性が、フン、と鼻を鳴らした。

「どこに行くつもりだ？」

「知れたこと。この世界にあの方がいないのならば、あの方を追っただけだ」

「単純馬鹿が。そう簡単に行くと思うか？」

シーティアはあからさまに眉間にしわを寄せた。表情の深刻さで言えば、デュランといい勝負だ。彼女を肩越しに振り返って、デュランは答えた。

「俺達は必ず巡り合う。あの方が旅を続ける限り。そして俺が諦めぬ限りな。……すまぬアレン殿。本当ならば、貴方の革命を手伝ってやりたいのだが」

「いや。気をつけて行って来い」

アレンが微笑うと、デュランは深々と一礼した。

「忝いかたじけな」

それだけ残して、デュランは足早に去って行く。

「デュラン！」

その背に、ルシオは声をかけた。デュランが足を止め、振り返る。「アンタの探している男と会ったのは、コリアンドルという村だ！もしアンタがそこに立ち寄るんなら……、こいつを」

ルシオは言いながらデュランに駆け寄ると、鎧の内側からイヤリングを取り出した。それを、デュランに渡す。

「コイツを鈴蘭の草原にある石の下に埋めてやってくれないか？」

きつと……アンタならアイツも喜ぶ」

「っ、！」

アレンは目を丸めた。ならばそのプラチナと言う少女は、と、と言いかけて、言葉を呑みこむ。

イヤリングを受け取ったデュランが、神妙な面持ちでルシオを見た。

「これはデメエにとって、何よりも大切な物じゃ無いのか？」

「だから……アンタに頼む」

デュランは二、三、瞬いて　ぐつと表情を引き締めるなり、頷いた。姿勢を正し、几帳面に一礼する。

「このデュラン、謹んでお受けする。　ルシオ殿。数々の非礼、お詫び申し上げます」

古い騎士を思わせるその所作を苦笑混じりに見やっつて、アレンは視線をアリユーゼに向けた。

「残念だったな。もうあの暴力的なデュランとは、戦えないようだ。お前らも」

「なんだとっ!?!」

アリユーゼがカツと目を見開いた。ルシオは居心地悪そうに顔を歪める。

「やめてくれ!　アンタにそう言う事されると、何て言うか、背中がかゆい……!」

鎧をこそごと掻きながら言うルシオに、デュランは小さく微笑った。

「また会おうぜ」

人外の美貌に、男臭い笑みを浮かべて、デュランはそう言うなり、その場を去って行った。

ジェラードが見送りながら、ほう、と溜息を吐く。

「何とも良く分かん奴等じゃのう……。さっきまで殺し合っていたくせに、もう仲良くなっておる。　アレン、お主にはあやつ等の感性が分かるか?」

「剣士ならば当然だろう。な?」

アレンが答える前に頷いた洵が、視線をこちらに向けて来る。アレンは頷いて、ジェラードに微笑った。

「というか……思いのほか、単純だぞ?」

「ハハッ!　まったくだ。表も裏もなく。それが剣士と言うモノだからな」

「ああ」

洵とアレンが笑い合う。

デュランの背を見送りながら、ルシオはグツと腰に差した剣に手をかけた。

「俺は、もっと強くなろう。次にデュランと会った時、打ち負かせるぐらい」

「ヘッ！ お前一人にやらすかよ！」

アリューゼが肩をすくめる。アレンは勝ち誇ったように鼻を鳴らした。

「まあ、その前に俺の方が早いだろうがな」

「なにいつ！？ お前、相手にされてないんじゃないのかよ！？」

去っていったデュランとアレンを見比べて、アリューゼが目を丸める。すると、ふふん、と口端をつり上げたアレンは、両腕を組みながら答えた。

「こことは違う場所で、毎日世話になっていたんだ。こう見えて一度も暴力と剣術を合わせたあの究極の戦闘術スタイルを見せた事は無かったが。

という言葉は呑み込んで、アレンは頷く。アリューゼがチツと舌打ちした。

「あの方たちは、神にとつての敵。なのに 彼等をどうしても咎人とは呼べません。ヴァルキュリア様」

「、っ……………そうですね、リセリア殿」

胸に手をやりながらつぶやくリセリアに、レナスは顔をしかめながら頷いた。だが、視線を上げた時には戦士の顔だ。

レナスはアレンに向き直るなり、言い放った。

「だがそれでも、アレン。咎人と呼ぶのはやめだ。……………だが、私の邪魔をするのなら、正面からお前を倒す。戦乙女でも神でも無い。一剣士としてだ」

アレンは視線をアリューゼからレナスに移すと、力強く頷いた。「いつでも来い。受けて立つ」

「また会おう。アレン・ガード」

「刀、調達しとけよ」

「分かっている!!」

殴りかからんばかりの勢いで即答するアレンに、アリューゼは苦笑した。

「またな〜！ アレン〜！」

ジェラードが杖を振る。レナスはそんな勇者の魂達エインフェリアに向き直ると、穏やかに微笑んだ。

「一緒に、行きましょう」

「友達よね、最早完全に」

肩をすくめるシーティアを置いて、天空に消えて行ったレナス達を見据えながら、アレンは首を傾げた。

ふと、疑問に思っていた事を口にする。

「……なあ、シーティア。エインフェリアは……幽霊に入るのか？」

「そりゃ、英霊の魂だからね」

シーティアは間髪を置かずに頷いた。質問の意図が読めないながらも、視線をアレンにやる。すると、コクツと首を大きく動かして、アレンは満足そうに頷いた。

「どうしたの？」

問うと、フツと鼻を鳴らしたアレンが、勝ち誇った笑みを浮かべて答えた。拳を握りしめている。

「俺は昔から靈感が無いと馬鹿にされていてな……。これで好きには言わせない！」

「でも、みんなにも見えてるわけだから、あれ、靈感もクソも無いよね？ まあ、霊魂ではあるけど。……おっと！ そんなことより、そろそろジェラベルンの皆を呼び戻さない」と

「ちよっと待て。ロジャーから通信だ」

シーティアの言葉を途中で制したアレンは、内ポケットから通信器を取り出した。ピツという電子音を立てて、回線を開くと。

画面いっぱい、ロジャーの顔が写っていた。

「兄ちゃんあああんつつつ！！ ナツメ姉ちゃんがああつつ！ ナツメ姉ちゃんがあああああつつ！！」

絶叫するロジャーに瞬きながら、シーティアは首を傾げる。

「ナツメがどうしたって？」

アレンの内弟子がどうしたというのか。と聞こうとして、不意に空が陰った。

ん？ と首を傾げながら振り返ったアレンが、空を見上げて目を見開く。

「お、おい……シーティア……。あれ……！！」

「へ？」

シーティアも做って顔を上げると、そこには雲にも達する巨大なシルムが居た。

ぎゅ〜び〜！！

視界を覆う、ずんぐりむっくりな一角獣のフォルム。体表の色は緑で、モチ肌の精霊は、陽の光を浴びてキラリと光沢を放つ。愛くるしい円らかな瞳は、巨大シルムからすれば米粒ほどのアレン達に向けられており、狭い額にはチョココンと王冠が載っていた。

「……………」
アレンもシーティアも、空を見上げて口を開けたまま、言葉を失う。

ぽかーん、と巨大シルムを見ていると、精霊はフツと小さく唇を丸めて吐息した。

瞬間。

……フツ、！！

焼け焦げた貧民街に、巨大な緑が広がる。その緑の中央にそびえ立つ遺跡は 見紛う筈も無い、アレン達がしばらく世話になっていたアルトリア山岳遺跡。

「な……、なっ!？」

状況が見えず目を丸めていると、畑の周りでくつろいでいたクレア達が、不思議そうにアレン達を見返してきた。

「あ、あれ……？ アレン？」

問いかける彼女には答えず、アレンは空を見上げる。天まで届く、巨大シルムを。

精霊は一つ頷くと、のしっのしつと巨体に相応しい重い音 しかし、どこか可愛らしい音を立てて、すう……、と風の中に消えていった。

アレンはもう一度、突然貧民街に現れた、山岳遺跡と畑を見る。

「……場所ごと、転移させたのか……？」

「……みたいね……」

シーティアですら目を見開く。そのぐらい、とんでもない魔力だった。

あんぐりと口を開けて巨大シルムがいた空を見上げるアレンを置いて、シーティアはふと、畑でくつろいでいる面々の中で、一人ガタガタと震えている少年を発見する。

ネコ耳少年 ルシオだ。

「どうした？ ルシオ君？」

問いかけるが、彼は震えているだけで答えない。

シーティアは首を傾げて、その隣に座っているロジャーに問いかけた。

「ロジャー君、ルシオ君どうしたの？」

すると、シーティアに視線を返したロジャーが、ふるふると首を横に振った。哀愁すら感じさせる、弱々しい尻尾の振り方だ。

「今はそつととしてやって欲しいジャンよ、シーティア姉ちゃん……。さすがのオイラも、かける言葉が無えぜ……。」

「はわわわわわわ……っ!!」

頭にかぶったバンダナを握り締めて、ルシオはガタガタと震えている。焦点の合わない少年を見下ろしながら、アレンは深刻な表情で頷いた。

「レナスちゃんか……。」

「レナス……?」

得心がいったように頷くアレンに、シルメリアは首を傾げた。ん、と視線を落としたアレンが、首を横に振る。

「いや。あっちじゃなく……もう少し小さい方だ」

「?」

言いながら、神妙な顔で顎に手をやるアレンに、シルメリアは不思議そうに首を傾げた。

アレンは、す、と視線を上げる。アルトリア山岳遺跡に集まった面々を順に見据えると、彼は気を取り直して言い放った。

「さて。それじゃあ、始めようか!」

彼の視線の先は、焼けこけたジエラベルン城。

その意を汲んだ革命軍は、自分達が作った旗を掲げて、おおつ、と勢い良く歓声を上げた。

新興国家、ジエラベルン。

身分制を廃した大陸西南の国は、クレアと言う若き指導者を中心として、元貴族のベリナス、平民のファールント、そして奴隷身分

でしか無かった倭人の蘇芳を国の中核人物に置いて、改革を進めていった。

貴族達は身分を残す代わりに国に隷属するか、身分を捨て己の財力を維持するかの選択を迫られた。新興政治家達は、身分を“飾り”と位置付けたのである。

国に隷属する態勢を取った代表貴族が、ベリナス。そしてジェラベルン王族だ。

国の最高権威者として君臨した王族は、国の象徴として残った。元々、ノーウエル家によって傀儡政治をするに過ぎなかった部分が、正式に形骸化されたのである。反発する貴族も相次いだが、ノーウエル当主、ラウラ・ノーウエルの鶴の一声で次第に勢力を減衰させていった。

国から支給される賃金は、完全出来高制。役所仕事に詳しい役人達は、アルスイ・オーブの管理の下、体力が続く限り書類整理を強いられたと言う。

また、突如貧民街に出現した大規模農場は、ジェラベルン市民の舌を唸らせ、国民から飢えを遠のかせた。

産声を上げた新たな国は、こうして 次第に力を取り戻した。隣国アルトリアと、和平調停を無事に取り付けて。

倭人を正式に認めたジェラベルンは、倭国との貿易も盛んになっていったと言う。

そして、かつて奴隷市として開けた広場は、いつの間にか多くの商人が露店を並べる 商店街へと生まれ変わった。

ただしこれは、今より数年後の話である。

番外 幼女破壊神 レナスちゃん 十（前書き）

今回のお話は、ヴァルキリープロフィールとは一切関係がありません。

すみません、ノリだけで書きましたm（| | ;）m

しかし、これが本来のアレンさんだったりします。

次話からいつも通りに戻しますので、どうぞご安心ください。

調子に乗って、申し訳ないです！ 大変失礼いたしました！！

m（| | ;）m

（ ） さらに、あとがきに挿絵があります。苦手な方は回避よろしく
お願いします（ ）

番外 幼女破壊神 レナスちゃん 十

「さて。それじゃあ、始めようか！」

戦いを終え、廃墟だったジェラベルンにはアルトリア山岳遺跡と、耕した畑が広がった。

革命軍は、自らが作り上げた旗を掲げて、威勢の良い歓声を上げる。

ようやくジェラベルンに平和が戻った。

そう誰もが確信したときのこと。

『彼女』は、突然現れた。

ルシオとロジャーの絶叫が響き渡る中、悠然と。

風に揺られてなびく、銀の髪。

陽に透けると紫色に光る、銀の髪。

少女はあどけない顔をこちらに向ける。

見た目、七、八歳の幼い少女だ。切り揃えた前髪から、利発そうな青い瞳が覗いている。彼女は長く伸びる銀髪を肩から三つ編みにし、蒼穹の鎧を身にまとった レナス・ヴァルキュリアに良く似た 白い猫耳としっぽを持った亜人だった。

「っ、っっ!？」

アレンが眼を見開く。

これ以上ないほど、見開く。緊張で喉が渴いた。

少女はゆっくりと地上に降り立つ。

緑色のずんぐりむっくりな一角獣 『シルム』の着ぐるみをかぶった人物の背に乗って。

「キュピッ」

空から着地するや、着ぐるみは緊張感のない声で甲高く、鳴いた。アレンはゆっくりと、視線をロジャーとルシオに向ける。少年二人は白くなって固まっていた。そう、恐怖で固まっているのである。

アレンはおもむろに銀髪の少女 否、『幼女』をふり返り、目を見開いたまま、言った。

「なんだ……と……！」

背中を冷汗が伝う。全身が震えた。

未開惑星（しんたろく）で会うハズがない。

アレンは自分の手を握りしめる。震えていた。だが、彼はこ

の震えを武者震いと断言する。

間違っても、この幼女を恐れた訳ではない。

恐れた訳では、ない。

自己暗示し、アレンは幼女に向かって問いかけた。

「な……なな、……なぜ……君が、ここに……？ レナスちゃん」

冷静に言ったつもりが、声が震えていた。幼女 『破壊神 レナスちゃん』の通り名を持つ彼女は、アレンの後ろで白くなっている猫耳少年を見るや、満足そうに頷いた。

「ルシオ、見つけた」

わずか七文字の状況説明。

レナス？ の声を聞いて、猫耳少年 ルシオがカツと目を見開く。

「見つかったああああっ！」

まるでこの世の終わりの様な顔だ。彼は力の限り叫んだ。　　そう、力の限り、である。

アレンは咄嗟にルシオの前に割り入り、左手をかざしてレナス？を睨んだ。

「そこまでだっ！　レナスちゃんっ！！　　ルシオに危害を加えると言うのなら、この俺が相手になるっ！」

「……お前、元凶。ルシオ連れてった」

レナス？ はアレンを見るなり、不機嫌に眉をしかめた。左手を開く。すると、手中に三メートルはありそうな巨槍が現れ、彼女はそれを握った。その巨槍は見間違えようもない。

レナス・ヴァルキュリアが手にする『ニーベルン・ヴァレスティ』の槍、そのものだ。

アレンの中にいるシルメリアが、ざわついた。

『な……っ！？』

レナス？ は唇を尖らせたまま、ふわりと空に舞い上がると、

「やあっ！」

槍を一闪した。

「くっ！！」

アレンは咄嗟に、思いつく限りの防御魔法を重ねがける。
だが、

頑強に練り上げた盾は、容易くレナス？ の槍に打ち砕かれた。

……ドゴオオオツツ！！

音という音を呑みこんで、槍の白い斬線が、溢れんばかりに街を覆う。

アレンは眼を見開いた。

歯を食いしばったが、耐えられない。人間の身体は紙切れのように吹き飛ばされ、ジェラベルンという空間を挟るように、レナス？ の矛先から生まれた衝撃波がうねる。

街路の石畳が呆気なく消し飛んだ。

「ぐお、お……おおっ、つつ！？」

防御態勢のまま数十メートルは吹き飛ばされ、アレンは地面に手をついて血痰を吐いた。

深い。

ざっくりと割れた胸に手をやる。

（よかった。繋がってる）

素手でレナス？ の攻撃など受けたことがなかったため、アレン

は不覚にも安堵した。

目の前には

クレーター

という言葉が生ぬるいほど、深く巨大な溝が、ジエラベルンの景観をぶち壊している。

一撃で、廃墟寸前だ。

「ア、アレン……！」

クレアが蒼い顔で、縋るような視線を向けてくる。戸惑う革命軍の声を聞き、アレンはハッと目を見開いた。

「……しまった……！ このままだと、街が、死ぬ……！」

「……！」

ルシオとロジャーがぱちりと目を見開く。

アレンは拳を握りしめ、幼女破壊神 レナスちゃんを睨み据えた。

「……くっ……！」

彼の頬に、冷汗が伝う。蒼瞳に力が宿った。右手に嵌まった蒼石の指輪 アルスイ・オーブが輝く。

（これは、……シャレになってないっ！）

アレンは胸中で叫ぶや、転移魔法を展開した。無論、彼の魔力はシーティアや神々には及ばない。それゆえ、対象は自分とレナ

ス？ だけだ。

「……続きは、平原で勝負だあつっ！！」

アレンは力の限り宣言すると、レナス？ と共に、ジエラベルン近くにある巨大な平野 カミールの丘に転移した。

移送方陣で消えた二人を見送って、ロジャーとルシオは目を見開く。慌てて、シーティアに縋りついた。

「シ、シシシ、シーティア姉ちゃんっ！ 早くっ、早くアレン兄ちゃんを追ってくれっ！」

「頼むよっ！ このままじゃアレンさんが殺されちまうっ！！」

「……な、なんだかよくわかんないけど……やばそうね。あの子……」

つぶやくシーティアに、ロジャーとルシオは頭が擦じ切れそうなほど、激しく頷いた。

シーティアはその二人に気圧されながらも了承すると、カミールの丘にテレポートした。

『あれはなんなのっ！？ 説明しなさい、アレンっ！！』

シルメリアの訴えは、もっともだった。

アレンはざっくりと刻まれた胸の傷をヒーリングで癒すと、呼吸を整えて前を見る。

「一年前……俺と俺の仲間を悉くいたづらと葬り去った 幼女破壊神、

「レナスちゃん」だ」

『……要を得ないわね』

シルメリアがぴくりと眉を動かす。

アレンは首を横にふった。

「簡単なことだ。見ての通りの超破壊力、兼定すら耐える防御力、そしてあの短身。すべてがデタラメ過ぎて、俺たちに圧倒的な絶望を植え付けた張本人……！」

アレンは力強く言い放ち、拳を握る。力説し過ぎて、拳が震えていた。

シルメリアが冷めた声で問う。

『それで、勝てるの？』

「Gutsだ！ 人間、Gutsがあればなんとかなるっ……！」

断言するアレンに、今し方シーティアとテレポートしてきたロジヤールが、力一杯に首を横にふった。

「アレン兄ちゃん……！ 普段、フェイト兄ちゃんの言うコト絶対聞かねえくせに、こういふときだけちゃんと聞くじゃんねっ！？ つーか、兄ちゃんが兼定持っても唯一勝てなかった相手に、どうやって戦う気なんだよおおお……！」

「つまり兼定のないアレンだと、100%負けるってことね」

ロジヤールの魂の咆哮に、シーティアがふむふむと頷く。

アレンは二人を視界の端に、悟り切った表情で笑った。

「見ての通りだああああっっ!!」

ザツと肩幅に足を開くや、アレンの背に、赤い朱雀が浮かび上がる。

朱雀は甲高く鳴き

そして、

幼女破壊神レナス？ の『ニーベルン・ヴァレスティ』によって
呆気なく葬り去られた。

広大なカミールの丘そのものを消し飛ばすような、巨大な範囲攻撃に、シーティアは顔を歪めながらも咄嗟にテレポートで回避し、戻ってきたときには

丘全体が、荒野と化していた。

緑の平野は、見る影もない。

シーティアはその中で、ボロ雑巾のような姿で倒れているアレンを発見した。

「……アレン？」

数秒。

「くそおおおあああっ!!」

ダンツと凹んだ地面を殴りつけて、アレンが勢い良く立ち上がる。大量に血が飛んでいるが、本人は気にしていない。

レナス？ が唇を尖らせた。

「お前、しつこい」

(……くそっ！ セレスティアルの詠唱中に殺られるとは……っ！
さすが破壊神っ！ 一筋縄ではいかないな！！)

アレンは肩で息を切らしながら、考える。

シーティアが痛々しい眼差しを向けていた。

「ていうか、あんな攻撃を喰らってよく立てるわね……」

「あれがGutsジャンよ！ お姉様っ！」

「箸にも棒にもかからんような根性だな……」

呆れ顔で本音をつぶやくシーティアだが、この場にいるルシオもロジャーも、そんなことが気にならないほど目の前の少女破壊神に恐怖していた。

ロジャーはガタタツと震えながら、かつての仲間全員を葬り去った銀髪の少女を見る。

「た、頼むよ……アンタ……！ アレンさんを助けてくれええ！！」

ルシオはシーティアの服の裾を掴んで、震えながらも懇願した。
レナス？ の前では、丸腰のアレンなど、動くサンドバックに過ぎない。

シーティアは眉をひそめ、グンニグルを具現化させる。

そして、

「生意気」

アレンに向けて放たれたレナス？ の一閃を、シーティアはグンニグルで受け止めた。
瞬間。

ドゴオオオツツ！！

「ちょ、……つと……待てえ……えええつつ！！！！？」

シーティアは眼を見開きながら、ロケット弾のように吹き飛ぶ自分の身体を見据えている。攻撃を受けた両腕が、確実に折れたような気がした。

「シーティアお姉様あああ！！」

シーティアの驚きと、ロジャーの叫び声が重なる。

数十メートル後方で、ようやく地面を搔いて着地したシーティアは、レナス？ の攻撃が受け切れず、吐血したあとに呻いた。

「私はカーマインと違って、身体は頑丈じゃないんだぞ……！！」

「No Gutsだな、シーティア」

アレンはゆっくりと首を横にふる。 どうやら、幼女破壊神と戦うには、Gutsの有無が大前提であるらしい。

シーティアはコホコホと咳き込みながら、呻いた。

「こつこつパワー馬鹿は、デュランにでもやらせておけ……！！」

そう言って、シーティアはレナス？ を見る。レナス？ は、一

撃で沈黙するハズの相手が、なかなか倒れず不満なようだ。ムツと唇を引き結んでいる。

「お前たち、邪魔」

槍をふり被る幼女を見上げ、シーティアは毒づいた。

「あの役立たずが！ この状況でいなくなるとは！！」

「むしろ正しい判断であったと思う」

去って行ったデュランに対して毒吐くシーティアに反し、アレンはなぜかしたり顔で頷いた。

シーティアは、はた、と瞬いて横目にアレンを見る。

「そういうことなら、私も退かせてもらっていいか？」

「よかるうー！」

アレンは拳を握り、再び朱雀を具現化させる。アルスイ・オーブでの先読み。

結果は

100%敗北だった。

「兄ちゃあああああん！！」

ロジャーの叫びが響く。だが、

「分かった！」

シーティアはキリツと表情を引き締め、さっそうと踵を返した。

「行くぞ、ピティ！ アイツが馬鹿で助かった！」

『無理でしょう！』

潔く去ろうとするシーティアを、シルメリアが思わず止める。が、彼女の宿り主である青年は、なぜか悠然と構えていた。

シルメリアの背に、悪寒が走る。

この男、予想以上の 大馬鹿野郎である。

『今度こそ挑んだところでダメだと、なぜ分からない！ このダメ男！』

「……………フツ……………、心配するなシルメリア。味方なんてただの飾りだ。居た所で、大した役にも立たない」

アレンは遠い記憶を掘り起こすように、遠い目をした。

初めてこの幼女破壊神と戦ったとき、自分と同じ実力を持つ同僚が、真っ先に倒れて動かなくなったのを、アレンは今でも覚えてい

る。
あれは非常にNo G u t sな出来事だった。

「お姉様、お願いジャンよおお！！ 見捨てないで欲しいジャンよ
おお！！」

「頼むよおお！ アレンさんを助けてよおお！！ 殺されちゃうよ
おおっっ！！」

ルシオとロジャーは、涙混じりにシーティアにしがみつき、懇願する。諦めの境地にいるアレンとは対称的に、彼らは必死だった。

「私と一緒に死ねと言うのか!? 正直、冗談じゃないぞアイツ。あんなものにケンカを売ろうなんて、本物の馬鹿だ!!!」

「Gutsがあれば、どうにかなるっ!」

多分　　という言葉は飲み込むアレン。

ロジャーがカツと目を見開いた。

「そんなこと出来るのは、フェイト兄ちゃんぐらいじゃんよおお!」
「!」

「アイツに出来て、俺に出来ないことはないっ!」

「アレンさん、逃げようよおお!」

「邪魔」

無慈悲な少女の一閃が、半径二十メートル以内の物体を全て切断する。

ドゴオオオツツ!!!

アレンの身体は紙切れのように吹き飛んでいた。
が。

彼は、だんっ、と拳を地面に叩きつけると、すぐに立ち上がる。

目の前にいる少女　　レナス?　　は眉根をひそめた。

「あるべきばしょにかえれっ！」

ズドオオオツツ！！

槍から生じる衝撃波が全てを呑みこみ、青年を紙のように吹き飛ばす。

ピンポン玉のように勢い良く跳ね 地面を削って巨大クレータの中に埋まった青年は、今度こそ、動かなくなった。

「兄ちゃん、笑ってるじゃんよ……」

「あれが死ぬ笑みって奴か……！」

ロジャーとルシオが顔を蒼くしながら、ぽつりとつぶやく。背中に悪感でも走ったのか、彼らはブルツと震え、自分自身を抱きしめた。

シーティアが遠い目で言う。

「人間、極限までくると泣くか笑うかしか出来ないって聞くけどホントみたいね」

「これで、 終わり」

空に浮かんでいるレナス？ は、つぶやくと槍の穂先に青白い光を集束させ始めた。

シーティアの顔が思わず引きつる。

「うそでしょ……！？ ！？」
「ここから、さらに気が上がるなんて……！」

「これが、レナスちゃんの本気ジャンよ」

ロジャーがフツと笑う。ついに、彼が諦めた瞬間でもあった。

レナスが穂先に集中させた力は、軽くシーティア最強の技『インフィニティ・ソウルストライク』を上回る。

第二級神フレイの『エーテルストライク』でさえ。

シーティアが目を見開いて、ロジャーをふり返る。

「どう考えても、あのチビの方が強くないかつつ!？」

悲鳴に近いシーティアの叫びは意味をなさず、シーティアはゲウエル因子を解放して、レナス? に向けて横薙ぎを放った。

撃たれたら終わりだ。

シーティアはそう判断し、全力の薙ぎを放ったのだ。

第二級神フレイをも下からせる強烈な斬撃。

だが。

それを、レナス? は平然と受け切る。横薙ぎを受けた肩が、わずかに揺れただけだった。

「なっ……ん、だと……つつ!?!？」

「ニーベルン……」

「ピティチャーーンっ、キーーック!！」

ドゴオオオツツ! ! ! ! !

およそ、二十センチにも満たない妖精が奏でるとは思えない轟音が、レナス? の頬を直撃した。

「……痛い」

レナス？ は少しばかり腫れた頬をさする。シーティアがカッと目を見開いた。

「少しは効いたようなふりくらいしろよっ！」

思わず拳を握って力説する。何事も柳のように流すシーティアとは思えない、珍しい姿である。

頬をさすってレナス？ が不思議そうにピティを見る。ピティは腰に手を据え、レナス？ の目線でホバリングした。

「シーティア様に怪我させてはいけませんっ！ アレンさんは別にいいですけど」

「……アイツ倒さないと、ルシオ帰ってこない」

レナス？ はそう言って、クレーターの中に沈むアレンを指す。彼女にとってルシオを連れて行く存在は全て“敵”だ。

一番目に、ロジャー。二番目に、いちいち立ちはだかるアレンがくる。

ピティは言った。

「シーティア様に危害を加えないのなら、お好きにどうぞ」

「ん」

レナス？ は頷いて、巨槍を持ち上げる。
と、

ルシオが全力で叫んだ。

「ちょっと待てええええ！ それだけはっ！ それだけはやめろおおー！！」

明確な嘆願だった。力の限り主張するルシオに、レナス？ は不意にふり向き、目に涙を溜めた。

「ルシオ……」

うるうる、レナス？ の瞳が揺れる。

「いつ！！？」

思わぬ反応をされて顔を歪めたルシオが、慌てて身振り手振りでフォローする。

「だ、だあ〜っもう！！ わ、わわ……分かったよっっ！ とりあえず、サーフェリオで待つとけ！！」

「……一緒に来ないの？」

じわり、とレナス？ の目に涙がたまる。ルシオは更に慌てた。

「だ、だだだっ！ だから、すぐ帰るってばー！！」

「……………」

レナス？ は黙すと、地蔵のように固まって一言も喋らないロジヤーと、ようやく意識が回復して立ち上がりそうになっているアレンを一瞥して

頷いた。

「ルシオ来ないなら、世界滅ぼす」

「認められるかああああ！！！！」

全力でアレンは立ち上がり、ルシオが声を限りに叫んだ。

そう。恐るべきことに、この幼女破壊神には、世界を滅ぼすだけの力がある。

ガタガタと震えながらも、自分を奮起するルシオの頭を、アレンは、ぼん、と叩いた。

「アレンさん……！！」

ルシオが涙混じりにアレンを見上げる。アレンは力強く笑った。

「任せる。なにがあっても……たとえ兼定がなくなるとも、お前は俺が守るっ！」

「きゅぴっ」

「……へ？」

意気込んだところで、アレンとルシオは思わず瞬いた。

目の前に突如、ずんぐりむっくりな緑色の肌をした一角獣『シルム』の着ぐるみを着た人物が現れたのだ。

彼女は挨拶をするように、しゅたつと丸々とした手を挙げると、その手でレナス？ を抱える。

着ぐるみの腕の中で、穏やかな“風”が吹いた。

ざああああ……！

波音にも似た、木々が揺れる音だ。
風が辺り一面に吹く。

すると、一連の騒ぎで散々破壊された丘が元に戻り、レナス？ は、こくんと首を曲げて眠りについてしまった。

彼女は目を閉じる寸前、ルシオ……とつぶやく。

これが風の精霊だけが使える究極の精霊魔法 “癒しの風” だ。

シルムもどきは、レナス？ が寝入ったのを確認すると、満足そうに頷いた。

「きゅぴっ」

一声鳴いて、シルムもどきは踵を返す。

そのシルムもどきを、アレンは訝しげに見据えた。

「お前は……」

「きゅぴっ！」

シルムもどきは右手を挙げて、スチャツとアレンにあいさつをすると、レナス？ を抱えて風と一体化し 消えた。

直後、

一陣の風が舞い、上空からひらひらと、白い紙が降ってくる。そこには達筆な字で、以下のように書かれていた。

レナスちゃんが壊した街の方も、直しておきました。

V I V A シルムさん！ です。 《ナツメ》

アレンは呆然と、ナツメ 否、シルムもどきが去った方角を見やる。体中ボロボロで、傷は治っても、服はもはや使い物にならない。
そんな惨状だ。

「……………なぜ、もっと早く連れて帰らない……………？」

つぶやいたアレンは、がくりとその膝をついた。

傍らではロジャーが、ガタガタと震えているルシオに優しく声をかけている。

「……………安心するじゃんよ、アホネコ。サンマイト共和国には、オイラも一緒に帰ってやるから」

「バカダヌキ……………バカダヌキ！」

「お前も大変じゃんな、アホネコ」

「初めてお前が良い奴に見えたよ、バカダヌキ……………！」

「そりゃオイラ、ロジャー様だからな」

感動して涙目になっているルシオに、ロジャーはニツと明るい笑みを浮かべてみせる。

アレンは呆然と空から降ってきた紙と、遙か彼方を見比べてつぶやいた。

「それで、なんでアイツは着ぐるみなんだ？」

シルムもどき　アレンのかつての愛弟子に向けて、彼は疑問を口にした。

ロジャーも首を捻って両腕を組む。

「さあ？　オイラもよく分かんねえジャンよ」

「しかも、どうやってレナスちゃんは未開惑星こんなトコロに來られたんだ？」

「その辺は、オイラも聞きたいジャンよ……」

アレンの問いにロジャーは空を見上げて　良い笑顔で、言った。

この世には、不思議なことも起きるものである。

番外 幼女破壊神 レナスちゃん 十（後書き）

SO3の裏ボス それが幼女破壊神 レナスちゃん。

彼女の戦闘力については、流石トライエースと言わざるを得ない
.....。

ちなみに、レナスちゃんを超える超凶悪破壊神 フレイちゃん（
こちらもやはり幼女）もロジャー&ルシオの故郷、サーフェリオに
います。

どうも失礼致しましたm（）（）m

> i 3 7 1 3 2 | 1 5 0 0 <

レナスちゃん

- - - - -

> i 3 7 1 3 4 | 1 5 0 0 <

ナツシルム。

惑星グローランドにある少女が訪れ、『シルム』という精霊を見
た瞬間に製作決定されたシルムもどき。

調子に乗ると、もうどうにも止まらない。

番外 コリアンドル村編 1 出会い（前書き）

これはグローランサー×ヴァルキリープロフィールのお話です。以前、「蒼銀の乙女と救世の騎士」という題名で、シーティア・デュランの生みの親である『もう一つの物語』が書いてくれたものです。

今回、改めてこちらに載せさせて頂きました。

番外 コリアンドル村編1 出会い

デュランが大陸北方に位置する寒村　コリアンドル村に着いたのは、ジェラベルンを出てすぐのことだった。

活気のないこの村は人通りさえなく、ほんの数分で村全体をぐるりと一周できる。

「辛気臭い場所だねえ……。宿すらないなんて」

巨槍を抱いた女が、溜息混じりに背中であげた。デュランがふり向く。

そこにいたのは、二十代半ばの勝ち気そうな女だった。凹凸の深い美しい身体を丈の短い緑鎧で覆い、その下に鎖帷子を装着している。女はデュランに気付くと、お？　と首を傾げた。

「アಂತも旅人かい？」

「……ああ」

デュランは淡白に頷く。男のように気骨のある女だ、と思った。彼はルシオから預かったイヤリングを握ると、女に尋ねた。

「この辺りに鈴蘭の草原があると聞いている。……どこかご存じないか？」

「鈴蘭？　そんなものを見るためにわざわざ？」

首を傾げる女にデュランは答えず、ジッと女を見据えた。人にしては壮麗な貌、他者を惹きつけてやまない金と銀の瞳で。

「……」

女は人を魅了する異形の美貌に、きよとんと瞬く。が、すぐに肩をすくめて、村の入口を指差した。

「あそこから西に出て、山沿いを歩いた先に広い草原があったよ。

アンタがお探しの場所かどうかは知らないが」

そう付け足す女に、デュランは頭を下げる。

「忝かたじけない」

几帳面に一礼した彼は、女の言う通り村の西側　その先にある、鈴蘭の草原へと向かった。

.....

白い花弁が舞う。

麓から吹く風に揺られて　群青した鈴蘭が、舞う。

デュランは咲き乱れる鈴蘭を出来る限り踏み荒らさぬよう気を付
けながら、周囲を見渡す。

主に足許を。

搜索し始めてから小一時間。ようやく小ぶりな岩を見つけた。三
十センチほどの岩だ。

草原は余すところなくびっしりと鈴蘭が生えており、岩はその花
の中に埋もれている。

デュランは静かに歩み寄り、片膝をついた。

「貴方が、ルシオ殿の」

金と銀の瞳が静かに細められる。小ぶりな岩は、当時の少年の限界を物語るように素朴で プラチナという少女の、命の儚さを思い起こさせるようだった。

デュランは岩近くにある土くれを一掴みすると、ルシオから預かったイヤリングを一瞥する。

（なるだけ、深い場所に埋めた方が良かった）

風雨にさらされないようにと、デュランは改めて、がりがりと素手で土を掘り起こす。

と、

しばらくして 指先に固い“なにか”が触れた。

（骨……？）

疑問に思いながら、それまでより優しく土を払いのける。

出てきたのは、蒼色の宝石をあしらった片方だけのイヤリングだ。ちよつど、デュランが手に持っている物と合わせて、一対となる。

「……………」

デュランは土に埋まっていた片方のイヤリングの隣に、ルシオから預かったもう片方のイヤリングを添えた。丁寧にそれを土に還して 黙祷。

（お騒がせした。申し訳ない）

そう、土の下にいる少女に詫げる。

顔を上げると、なぜか、引きつった表情のシーティアが、そこにいた。

「こ……んの、猪武者が……!!」

白い顔に青筋を立てて、シーティアが拳を震わせている。デュランは何事か要を得ず立ち上がると、わずかばかり眉をひそめた。

「墓前です、シーティア様。ご自重を」

「……………っっ!! ……まあ、言いたいことはまああるけど……、いいわ」

シーティアはぶるぶると震えながら、首を横にふる。そして、視線を落とした。デュランの足許にある、小ぶりな岩を見る。

「もしかして、それが？」

ルシオのイヤリングを渡す人？ と、視線で問われて、デュランは小さく頷く。シーティアは、そう、と返し、哀しげな目を一瞬だけ落とした。

顔を上げ、彼女は問う。

「それで、弟の^{カーマイン}こと、なにか分かった？」

「いえ。なにも」

デュランは真顔で即答する。

剣術以外に素養はない　それが、デュランなのである。

シーティアは呆れたように溜息を吐くと、ちよつと待って、と言つて魔法陣を展開した。

鈴蘭の草原に、黄金の翼が生む温かな光が零れる。

しばらくして、その光の中に、一つ、像が結ばれた。

間違いなく、シーティアの弟　デュランの主　カーマイン・フォルスマイヤーの姿だ。

息を詰めて像を見据える二人の前で、一人の少女と、一人の騎士の邂逅が映し出された。

コリアンドル村近くにある、川のせせらぎの音が響く。

少女は冷たい水を汲みながら、自分自身の手には、はあ、と息を吐いて手を温めた。手の平から零れた息が、宙に散って白く濁る。冬の寒さを主張するように、真っ赤に染まった手を見つめ、少女はぽつりとつぶやいた。

「冷たい」

もう一度、息を吐く。ほんの数秒だけの温もりを味わって、少女は肩にかけて浅黄色のマフラーを抱きしめた。

太ももまで伸びる長い銀髪が、風にさらされて冷え切っている。彼女は今年で、十四歳になる少女だった。

豊かとは言い難い寒村で生まれ育ち、やせ衰えた村人の多いコリアンドルにあつては珍しい　美しく整った少女の貌。

長く伸びる銀髪は、肩から緩い三つ編みにされ、陽光を浴びると紫色に輝いた。

コリアンドル村　　。

ここは今、祖国ヴィルノアが大陸戦争を繰り広げる煽りを受けて、急速に寂れて行った小さな村だ。

作物を耕す間もなく年ごろの青年は戦場に駆り出され、犯罪者紛いのゴロツキが村を闊歩している。それは彼女　プラチナが生まれたときから続く状況であり、村人たちは皆、他人をまるで信じられない疑心暗鬼に陥っている。

プラチナは空を見上げて、目を細める。

思い起こせば、物心ついたころはまだ優しかった。一体いつから自分はこんなにも疎まれるようになったのか。

彼女は　プラチナは、実の親にすら冷たくあしらわれていた。それでも、彼女は愛していた。

村を、人を、そして　自分の両親を。

親の愛情を決して疑いたくはない。どれほど冷たく当たられようと、それしか自分は頼れる者がないことを、幼い少女は気付いていたのかもしれない。

自分の娘が普通でないことを知ったのは、あの子が十を数えるころだった。

「お母様、どうしてあのオジサンは私を見ているの？」

「なにを言ってるんだい、誰もいやしないじゃないか」

娘の指差す方向には誰もいない。なのに、この子はなにかをジッと見ている。この子には私たちが見えないモノが見える。それだけでも十分、気味が悪く私は二度とそんなことを言わないよう、釘をさしておく。

村の子供たちが遊んでいて、怪我をした。

「なにがあつたんだい!？」

顔に怪我を負った娘の友達の一人に問いかける。ルシオという娘のお気に入り男子の子が答えた。

「プラチナを苛める奴が、天罰を喰らったのさ」

聞けば、娘に石ころをぶつけようとした男子の顔に、突然木の枝が折れ、降ってきたというのだ。

娘に危害を加えようとする者は例外なく、蛇にかまれたり、川に落ちたりして、傷を負っていた。偶然と笑い飛ばすには、無理がある。

そんなある日だった。私の家事を手伝っていたプラチナが牧がなくなつたからと倉庫へ向かったとき、倉庫の荷台から木箱が落ちてきたのだ。

「プラチナ!!」

「え？」

娘の名を呼ぶ。

だが、

娘の頭に落ちるハズだった木箱は娘の頭の上で木端微塵に砕けた。

「……なんだってんだい」

「お母様？」

プラチナが得体の知れないモノに見えた私は、このときのこと
が決定打となって娘を愛せなくなっていた。

「久しぶり。今日はルシオも風邪だし、遊んでくれる子がないの
……」

プラチナは不意に視線を落とし、川で泳ぐ小魚に話しかける。同
じ年ごろの子たちは皆彼女を怖がり、一緒には遊んでくれない。い
や、村人全てが 彼女を気味悪がっている。

人にあらざるモノと話す、この少女を。

そんな中、ルシオだけが、少女に話しかけてくれる男の子だった。
川面を見ながら、プラチナは顔を上げる。首を傾げた。川の向こ
う岸に、なにか 見た。

「なんだろう？ なにか光って……」

つぶやいた言葉はそこで止まり、彼女は目を見開いた。
光

それは、白い手に嵌められた指輪の光だった。

「人!？」

プラチナは慌てて向こう岸に架かる折れた巨木を渡って行く。

「ちょっと、アンタしっかりしなさいよ!!　こんなところで寝るなああ!!」

なんとか岸を渡り切ったとき、活発な声が聞こえてきた。そおつと近づいていく。

「!!」

艶やかな黒髪、透き通るような白い肌を持つ、美しい青年が、山の地肌に横になっている。

「あの、大丈夫ですか？」

「人が来た!?　よかつた〜!!」

恐る恐るプラチナが声をかけると、どこからともなく声が聞こえた。プラチナは首を捻って、周囲を見渡す。

「あのどちらにいらっしゃるのですか？」

声の主は女性のようだ。だが、プラチナにはまるで見えない。

プラチナは思った。

(見えないのに声がする。でも、皆が見えない“人たち”とは違う……)。だって、声ははっきりと聞こえるもの)

プラチナは円らな青瞳をぱちぱちと瞬いた。

少しして、声の主が目の前に現れる。その小さな体を、自分の目線に合わすように飛んでいる。

「え？ 妖精さん？」

プラチナはつぶやいて、目を大きく見開きながら、なん度も瞬いた。プラチナの目の前に浮かんでいる妖精　ピンク色の髪をショートヘアにした、活発そうな少女だ。手に乗るほど小さく、彼女の背ではたたと羽ばたく翅が、魔力の粉　光の粒になってプラチナの前に零れる。

「どうしたの、妖精さん。この人は？」

「アタシ、ティピ。ローザリアの宮廷魔術師サンドラのホムンクルスなの。ねえ、ここはどこなの？　ローランドディア、バーンシュタイン、それともランザック？」

ティピと名乗る妖精が、矢継ぎ早に尋ねる。彼女は半袖の黒いシヤツと丈の短い白のスポンを着ており、寒村にあるコリアンドルの人々の服装よりも、ずっと薄着だった。

プラチナは首を捻る。妖精の言葉を反復して見るが、さっぱり分からなかった。

「ごめんなさい。妖精さんの国のことはよく分からないの」

眉根を下げて、プラチナは素直にぺこりと頭を下げる。すると妖精　ティピが、キョトンと瞬いた。

「え？　もしかして、ここって……」

「ここはコリアンドル村の近くを流れる川なの。この丘の坂を昇ると村が有るんだよ」

ティピが笑顔のまま固まる。それをプラチナは不思議そうに見つめた。

「？」

首を傾げるプラチナを置いて、ティピは辺りを見渡す。

豊かな自然が生い茂るこの場所は、空を隠すように背の高い木々が並んでいた。プラチナが渡ってきた川は幅広で、流れは遅い。川面に顔を出している丸石が、村人たちの交通手段のようだった。だが、川岸は切り立っていて、子供が近づくには危ない場所だ。プラチナが指差す坂を見やると、遠目に風車が見えた。

恐らく、あれが村の位置だろう。ここから三十メートルくらい離れている。

ティピは視線をプラチナに戻す。彼女を出来る限り刺激しないよう、言葉を選んで問いかけた。

「ねえ、プラチナちゃん。この世界で有名な国ってどこかな？」

「ヴィルノアかな。軍事大国として有名だよ。　どうして？」

「……いや、本気で知らない国の名だなんて……！」

ティピの顔色が、笑顔のまま 次第に白くなっていく。不安に顔を歪めたティピは、考え込むように顎に手をやった。

「どうしたの、妖精さん？」

「ティピでいいよ。……そっか、コイツの体を作りかえるときに使ったパワーストーンの反動で、異世界に飛んじやったんだ。……むう」

「ティピちゃん？ ……その人は？」

考え込むティピに、プラチナは遠慮がちに草むらで眠っている青年のことを問いかける。ティピが顔を上げた。

「ん？ ああ、コイツってば寝てるだけだから、気にしないで。ところで、プラチナちゃんはこんな冷たい川にどうしたの？」

ティピが、川の水温に気付いたのは、川から上がってくる水蒸気が、沢の温度を冷やしていたためだ。

プラチナが嬉しそうに微笑む。

「……実はね！」

一人でいることの多いプラチナにとって、自分に興味を抱いてくれるこの明るい妖精には、素直に好感が持てた。プラチナは、自分の身の上の話や、友達のルシオのことを嬉々として話す。

少女にとって、久しぶりの楽しい時間が過ぎる。

ティピも久しぶりに話す人との会話を楽しんでいた。

「そうなんだ」

「今度は、ティピちゃんの話も聞きたいな」

プラチナは、笑顔のままおねだりをしてみる。ティピは、むう、と唸りながら顎に手をやった。

「私の話かぁ。そうね……いいわよ！ こっちの世界のこと教えてくれたんだし！」

どこから話そうかと考え込みながらも、ティピはお返しに身の上の冒険譚を話し始めた。

自分の世界に起こった異変。生み出された意味、ティピの相棒・カーマインが背負った宿命、ソレに立ち向かった双子の姉弟の話を。

「それでね……」

上機嫌に話していると、プラチナが空を見上げた。

「そろそろ帰らなきゃ」

「わぁ、ホントだ。ここって太陽が沈むのが早いんだ……？ でも、さっきの太陽の位置からだど、まだ日が沈む時間じゃ……」

ティピが空を見上げながら、眉をひそめた。
霧が出てくる。

「……霧？ ねえ、プラチナ。ここって霧とかよく発生するの？」

「ううん。そんなことないハズだけど……。どうして？　こんなの初めて」

プラチナも首を傾げながら、辺りを見渡す。遠目に見えた風車は、濃い霧に覆われて見えなくなった。

(……なんか、ヤな感じだな……)

ティピは周囲を窺いながら、思う。カーマインと共に色々な場所を巡ってきたティピには、なんとなくこの霧の異常性が分かる。なにが“異常”かは、分からないが、違和感があった。

そのとき、
ティピたちの正面、霧の向こうに人影が現れた。

「ん？　もしかして、プラチナを探しにきたのかな？」

「え？　村の人かな？」

プラチナとティピが話している内に、人影はどんどん増えて行く。駆け出そうとするプラチナをティピが止める。その瞳に、緊張が走った。

「ちょっと待って、プラチナ。村って……。あつちなんですよ？　でも、あの人影は今、川下から歩いてきたよね……。？　なにか様子がおかしいわ」

うううううううう……！！

霧の向こうから聞こえてくる、風の音とも、獣の鳴き声とも、人の呻き声ともつかない“音”。

「ナンドロ〜？ この声……」

ティピはニコニコと笑いながら、霧の奥に目を凝らす。頬に、冷や汗が流れた。

「ティ、ティピちゃん……！」

プラチナが不安げに息を呑む。ティピは静かに頷いた。

「うん……。私の世界でもこんな現象、見たことないけどなあ……」

ティピがつぶやく間に霧から現れたのは、不死者。その中でも下位のレッサーヴァンパイアと呼ばれる種族だった。ボロボロのシャツに、青のズボンを着ているが、顔は土気色で腐敗し、両目には眼球がなかった。レッサーヴァンパイアの落ち窪んだ空洞の奥に、赤い光の球が浮かんでいる。

「……………なによ、これ!？」

「っ、あ、ああ……っ!！」

ティピは息を呑む。この群れ ざっと三十人はある。プラチナは余りの恐怖と衝撃に、ドツと物音を立てて、地面に倒れた。気絶してしまったのだ。

「プラチナっ!？」

呼びかけるが、目を覚まさない。ティピは涙目になって中空を飛び跳ねた。

「あああ〜！ もう！ どうすんのよ！？ どうすんのよ！？ どうすんのようっ！！！？」

こんな肝心なときに居眠りこいてコイツっ！ さっさと起きて、私とプラチナを護りなさいよ！！」

ティピは倒れている青年に呼びかける。だが、彼は全く反応しない。

しばらくの、間。

ティピはごくりと息を呑むと、ギョっつと眉をつり上げて、不気味な死者の群れに向き直った。

「くっそあ〜！ 来るなら来なさいっ！ このティピちゃんが相手してあげるわっ！！」

「ついに見つけたぞ……」

不意に。

霧の向こうから、男の声がした。ティピは眉根を寄せる。

「ん！？ 今度はちゃんとした人でしょうね！！？」

声がすると同時に現れた人影に向かい、ティピは吠えつける。男の声は低いが、良く通る声質だった。

霧の中から、人影が徐々に濃く 静かに浮かび上がる。

それは“人”にしては、黒かった。服が黒いとか、肌が黒いとか、そういうことではない。

霧の中に立っている男は、黒い瘴気の中にいた。闇に溶ける銀髪は腰まで流れ、それを二房、無造作に結っている。長い前髪から覗く瞳の色は蒼。象牙の肌は、藍の安っぽい鎧に覆われ、長い両腕に銀の籠手を嵌めている。中肉中背のその男は、目が合っただけで相手を絶望の闇に引きずり落とすような　そんな不気味な雰囲気を持っていた。

男の背には二振りの剣。一本を肩から対角状に、もう一本を抜き放ちやすいよう腰の位置で横たえて差している。

どちらも西洋剣だった。

藍の鎧から、赤のマントが風にたなびいて揺れる。男の年齢は二十前後。彼の後ろには、付き従うように若い女がいた。

ティピの顔が、嫌そうに歪む。

「唯一話の分かりそうな奴が来たけど……最低。絶対こいつら敵だよ……。アタシの勘がそう言ってる」

男　　不死者は、自分に付き従う若い女を見据えた。

「お前の言った通りだな、ネーリス」

「お褒めに預り光栄でございます、　ウィルフレド様」

ネーリスと呼ばれた美女は、血のように紅い唇を歪ませ　静かに笑った。

ネーリスは紫がかった黒髪を腰下まで伸ばし、肩の辺りで二つに結わえている。フリル付きの白いドレスシャツの上に、濃紺のワンピース。女の足首に届くほどスカート丈の長いそれは、青い花卉と金の蔓を、それぞれ大ぶりに描いている。

簡単に言えば、ネーリスの姿は、エプロンドレスだった。

彼女はロングスカートと袖をつまみ、小さく一礼する。頭に乗ったフリル付きの白いカチューシャは、本来愛らしさを誇張させるアイテムであるにも関わらず、女の妖艶さを引き立たせた。

不死者の男　　ウィルフレドという名の“それ”は、嫌悪の色を顔に浮かべる。人の不安や絶望を駆り立てる暗い蒼の瞳が、ティピの後ろで倒れている少女　　プラチナに向けられた。

「戦乙女……まさか人間になっているとはな。汚らわしいものだ。死神が、人間の姿を気取るか……っ!!」

腰の剣を剣くと、ウィルフレドは生者の魂を喰らわんとするレッサー種に指示を出す。

「……八つ裂きにしてやる。亡者どもよ！　その爪で、その小娘の身体を引き裂いてやれ！」

ウ、オオオオオオオ!!

不死者たちは歓喜の声を上げながら、その爪を牙を、こちらに向けて近づいてくる。

「ちょっと！　そうはさせないって言ってるでしょ!?!」

ティピが必死の形相で、不死者たちを睨みつける。それを冷たく一瞥し、ウィルフレドは言い放った。

「羽虫が」

「虫いいいつ!!? 上等じゃない! 私を虫呼ばわりした奴は、例外なく蹴り飛ばしてやるんだからねえっつ!!!!!!」

こいつは蹴り飛ばす。

ティピはその額に四角い血管を浮き上がらせ、眼を三角に吊りあげさせる。その様を見ていたネリスが口許に手を当て、上品に微笑んだ。

「フフツ、ウィルフレド様。……どうやら、そう簡単には参りません」

その言葉に不愉快そうに眼を吊りあげさせ、ウィルフレドは問いかける。

「フン、あんな羽虫に、俺の邪魔が出来ると思うのか?」

「いいえ。ただ そちらの方は、私たちを止めるおつもりでしょう?」

ネーリスの視線はティピの後ろ。

ティピはその視線の意味を悟り、喜びの顔でふり返る。そこには、彼女が誰よりも信頼し、なによりも大切な青年が立っていた。

「カーマイン!!」

「ティピ、下がっている」

黒髪の青年はいつものように、冷たく冴えわたる黄金と蒼銀の瞳

を不死者に向けている。ウィルフレドは静かにカーマインを見据える。

「そういうことか。……フン。人間如きが、我ら不死者の邪魔が出来るとも思っているのか？」

「ふししゃ……？」

初めて聞く単語に小首を傾げるティピ。

「やれ」

ウィルフレドの号令のもと、亡者たちが一斉に襲いかかる。

カーマインは静かに右拳を前に突き出し、その黄金の指輪を輝かせる。指輪は光となり、それが一振りの刀を象る。

光が晴れたとき、

絶刀・レギンレイヴが彼の右手に具現化した。

「ほお？ おかしな術を使うようですね」

ネリスは愉快そうに美しい青年を見据える。

カーマインはベルトに鞘を通すと、腰を落とし、右手を柄にかけたまま、地面を蹴った。

「なにっ!？」

次の瞬間、カーマインはウィルフレドにすら見えないスピードで移動し、亡者たちの背後に現れる。同時、網の目のような斬線を放った。

（不死者となったこの俺にも、見えなかった、だと？）

ウィルフレドが雷に打たれたように硬直したあと、目の前で、亡者たちが光の塊となって散って行く。

「不死者を浄化する？ この力、戦乙女……？」

「浄化の光だと？ 戦乙女が創り出したエインフェリアだともいっのか？」

カーマインの刃に斬られ、この場にとどまることの出来なくなっただけの亡者たち。

その残光を見据え、不死者の男女は目を睜った。ティピが気味悪そうに顔を歪め、カーマインを一瞥する。

「な、なんなのよ？ こいつら一体……なんなわけ？ 斬られれば光の塊になって消えちゃうなんてさ。変だよ」

「生きてはいない……。だが、死んでもいないようだ」

この場を覆う霧の瘴気がティピを不安にさせる。訳も分からずうつろたえるティピに、カーマインは静かにそう言った。

「死んでも、いない……？ な、なによそれ……？」

ティピは眉根を寄せた。疑問を口にするも、不死者が放つ闇の波動が、言葉以上にカーマインの見解を証明している。ティピの瞳が不安げに揺れた。

「死んでもなお、生者に対する恨みが彼らを苛み、この地へと留め

ている」

カーマインは静かに眼を伏せ　だが、冷たい瞳に激情の炎を宿す。

怒りの炎を。

「　なぜこんな真似が平然と出来るっ!？」

彼は真正面から、不死者の女　ネ　リスを睨む。対するネーリスは柳のように嗤うだけだ。上品な白皙をゆったりと緩めて、彼女は妖艶な青の瞳を細める。差し出された白く長い織手が、霧の中に咲く花のように、凜と映えた。

「あら。ずいぶん言い草ですわね。私たちはただ、願いを叶えているだけですよ。“生きたい”という願いを。未練のまま死んだのでは、その心も浮かばれないでしょう」

カーマインの表情は変わらない。感情を浮かべない美貌が、ただ怒りの炎を瞳に宿してネーリスを睨んでいる。彼は静かに言った。

「浮かばれないだと？」

生きているときの記憶はほとんどなく、ただ　誰かを憎むためだけに生きて苦しみ続ける。そんな存在に造り変えられて、誰かを恨み続けねばならない彼らの状態が、それが正しいなどと言つつもりか」

「フツ……フフ。まさかまさか。不死者を前にそのような綺麗事を吐けるとは。なかなかの度胸ですわ」

カーマインの言葉を心底、愉快そうに　まるで幼稚な劇でも見

たかのように嘲り、ネーリスはクスクスと忍び笑う。その所作さえも穏やかに、上品に演じながら。

ティピの柳眉がキュツとつり上がった。

「ムツカア〜！ なんなのよ、コイツう〜！！」

口をへの字に引き結んだティピは、憤懣やるかたなく手足をばたつかせた。そんなネーリスたちの会話を、ウィルフレドはばっさりと切り捨てる。

「邪魔だネーリス。下がっている」

「はい。ウィルフレド様」

ネーリスはスカートの裾をつまんで一礼すると、楚々と後ろに下がった。ウィルフレドはカーマインを睨み、右手に持った剣を構える。

「なんであれ、俺の復讐の邪魔はさせん」

低く言い放つ不死者ウィルフレドに対し、ティピが気色ばんだ。

「復讐？ なんのことよ！ こんな娘があんたになにしたってのよ！！」

プラチナを庇うように中空を飛びながら、ティピは大声を張り上げてウィルフレドを睨む。返ってきたのは冷笑だった。心の底から相手を侮蔑する、ウィルフレドの憎悪に満ちた眼差しだ。

彼の声が、微かに震える。

憎しみと、深い怒りで。

剣を握っていない左手で、彼はニブルヘイムの闇となったこの場の霧を握り締めた。

「そいつは俺の父親を、俺の母の心を壊した。俺から全てを奪った者。

……だから、今度は俺がこいつから全て奪う。

その魂をズタズタに引き裂いて、“死なぬ”というのなら冥界の女王、ヘルにその魂を喰らわすまで。 それでも尚、死なずに済むのか楽しみだ……。なあ、戦乙女？」

にやりと嗤ったウィルフレドは、狂気と憎悪に満ちた目をプラチナに向ける。

気絶した少女は、霧の中でも輝く銀髪を広げたまま、ぴくりとも動かない。彼女が絶望に泣き、苦しむ様を思い浮かべるだけで、ウィルフレドの心は満たされる。

ほんの少しだけ、わずかな一時だけ。

要領を得ないウィルフレドの言葉に、ティピは思わず絶句した。

「コイツ……！ なに言ってるのよ！？ プラチナがなんだっての……！？」

問うが、どう答えられてもティピは理解することは出来ないし、頭の隅では分かっていた。

この霧の気配が、ウィルフレドの狂気が物語る。

感性の違いを、彼らの思考の異常さを。

背中に氷塊を押しつけられたように、ティピは身を強張らせたが、キユツと唇を引き締めて気丈にふる舞った。

対してカーマインは静かなものだ。物怖じすらせずに銀髪の少女を一瞥し、狂気と憎悪に歪むウィルフレドを見据える。

ネーリスを睨んだときの怒りはなく、相手を諭すような、静かな瞳で彼は言った。

「この娘がどんな存在であれ、今のこの娘にお前のその話は関係ないだろう。　　剣を退け」

帰ってきたのは、ウィルフレドの失笑だ。

「関係がないだと？　横からしゃしゃり出た剣士風情が、偉そうに吠えるなっ！」

カーマインの言葉に、ウィルフレドは聞く耳を持たない。

カーマインは右手の刀を左手に持ち替え、腰を落として斜に構える。

「どうしてもやるのか？」

「邪魔立てするなら貴様から殺す。この俺の前に立ったこと、後悔しながら死んでいけ」

切りかかってくるウィルフレドの剣に、カーマインは愛刀レギンレイヴで切り返す。

ギインッ！！

剣と刀が激しくぶつかり合う。常人ならば反応することも、受けることもできない不死者の剣と、カーマインは真っ向から切り合う。その身体能力と刀を見据え、口許を残虐に歪ませ、ウィルフレドは

笑う。

「不死者であるこの俺の動きについてくるとは。……貴様、ただの人間ではないな？」

「別に。普通だ」

相手を威圧するような狂気の間を見開き、ウィルフレドは笑う。カーマインは冷静な瞳を その奥で燃える黄金と蒼銀の眼を向ける。

ギンツッ！

鏝迫り合いの状態をカーマインが切り払う。ウィルフレドは静かに後方へ下がった。

「まあいい。貴様もこの剣の糧とするまで」

ウィルフレドは懐から禍々しい力を放つ“赤黒い光の羽根”を取り出した。

「血塗られた神の羽よ……。その力、我に示せ！！」

その羽根を自身の剣の刀身に押しつける。すると、

羽根が剣の刀身に吸い込まれていった。

ちやぽん……、

刃に波紋が広がる。

と、

変化が起きた。

刀身が紅い血で濡れる。まるで出血したように一気に、白い刃が真っ赤に染まった。一見、血のように思えたその正体は 炎だ。粘り気のある水のように禍々しい炎は、剣を片刃の刃へと変化させた。

それだけではない。

ウィルフレドの瞳が、真っ赤に染まり、肌が土気色に衰えていく。正しく、死人の色へと。ウィルフレドの口許に、人ではありえない牙が生える。

ビキッ！

鈍い音を立て変化した不死者の刃を、カーマインは剣で止める。しかしその剣風は、後方の地面を縦に斬り裂いた。ティピが仰天する。

「なによっ！ それえ！？ シュワルゼみたいなこと、しちゃってさあっつー！！」

「今さら命乞いをしても遅いぞっ！」

吐き捨てるようにウィルフレドは笑うと、次々と斬りかかってくる。

だが、

(コイツ……っ!?)

袈裟がけの一撃、斬り上げ、唐竹、胴薙ぎ、垂面斬り。全ての剣

が、紙一重の所で捌かれて行く。冷静にこちらを見据える不揃いな瞳。

迷いなき剣閃、早く鋭く、宙を切り裂いていく。空間が斬られたことがハッキリと分かる。それほどの剣閃を、避けると同時に放ってくる。およそ、反撃が不可能なタイミングと姿勢で。

ウィルフレドをして、警戒せざるを得ないほどの斬戟。

「だが、ここまでだ!!」

ウィルフレドは高速で突きを放ちながら突進。苦もなく左に見切るカーマイン。だが、避けた瞬間。ウィルフレドが残像を残しながら、高速で斬りかかった。

「カーマイン!!」

「……復讐者、か」

全ての残像に対し、カーマインは左手の刀の柄に右手を添え両手持ちにする。全ての残像にカーマインは剣を放った。宙を網の眼の如く疾る青白い斬閃。

ギギギギイイン……ッ!!

ウィルフレドの全ての斬戟を跳ね返し、静かに刀を一闪。構え直すカーマイン。ズザアツと地面を掻きながら、後方へ退けられるウィルフレド。

「ほう?」

感心したかのように、嘲るように　ウィルフレドは笑みを作ると、左手を天に掲げ、光の矢を放った。

光の矢は空から、三本の矢に分かれ、カーマインに迫る。一の矢を右に避け、二の矢は体を翻しながらの横薙ぎで流し、三の矢は刀の刃を縦に構え、受ける。

瞬間、

斬っ！！

光の矢はカーマインの受け太刀に、真つ二つに斬り裂かれ、宙でかき消えた。その切れ味に瞠目する間もなく、ウィルフレドが迫る。彼の攻撃はまだ止んでいない。鋭いステップインでカーマインの左に入ると、剣を持たない左手で4発の拳を繰り出してくる。ポツと空を切る音速の拳。

バシイ！！

カーマインはそのうちの一つを右手でつかみ、止める。と、ウィルフレドが蹴りを放った。拳を離し、素早く後方へ下がるカーマイン。一瞬後、カーマインが立っていた位置をウィルフレドの足が払っていく。と、今度は逆の足で中段に鋭い蹴打が放たれる。

バキィッ！！

左のひざ蹴りでその一撃を受け止めるカーマイン。その頭部へ鋭いハイキックが迫る。

（　これも見切る、か。……なにッ！？）

躲すと同時、カーマインは宙に飛んでいた。身を翻しながらの後

る回し蹴りがウィルフレドの顔面に炸裂する。

ドゴオツ!!

「ガハアッ!!」

後方へ吹き飛びながらも地面が近づいたところで左手を突き、ウィルフレドはバック転して体勢を立て直す。カーマインは追撃をせず、冷静に剣を左手に構えて、こちらを見据えていた。

カーマインは目を細めた。

「……今の攻撃は、お前の使っていた技ではないな。その羽根の力を手に入れるために……どれ程、人の命を犠牲にした？」

「この俺の糧となった仲間と呼ばれた者たちの技だ。奴らはむしろ感謝するべきではないのか？ 共に戦乙女を殺せる力となるんだからなっ！」

狂気と愉悦に歪む表情ウィルフレドを見たあと、カーマインはジツとネーリスを見る。

「……この波動、やはりお前が全ての元凶か」

「私はただ、ウィルフレド様の手伝いをしただけですが。選んだのは、ウィルフレド様です」

微笑みすら浮かべて語るネリスに、カーマインはその瞳を鋭くした。

「お前は……斬る！」

「その前にこの俺を倒してみるんだなっ！ 出来るわけもないが！
！！」

宣言するカーマインに、ウィルフレドが斬りかかる。

「いいだろう」

カーマインは冷静に告げたあと、縮地法と呼ばれる俊足で、駆る。二人の剣士が正面から斬り合った。

カーマインは左手一本での唐竹、ウィルフレドが両手で袈裟がけにふり切る。

交差法気味に斬り合ったその刹那、ウィルフレドの眼には青白い軌跡が十字に刻まれたのが見えた。唐竹は、袈裟がけの一撃が止めた。だが、カーマインの剣は一撃ではなかったのだ。唐竹と同じ時と思えるほどの神速の十字斬。横薙ぎが見事にウィルフレドの胸を切り裂いていた。

「なんだ、これは……っ!？」

ドツと片膝をつくウィルフレド。ゆっくりと横薙ぎを放った姿勢からふり返るカーマイン。

斬られた胸を握るウィルフレドには、明らかな狼狽が浮かんでいた。

「……体には傷一つないのに、なぜ、こんなにもダメージが……!!
!？」

不死者の肉体には、怪我一つない。なのに、体がいうことを聞かない程のダメージを訴えている。しかも 自分を包んでいた闇の

波動が、今は完全に消滅していた。

「なんだ……！！ この程度の一撃で、なぜ……！！ 女神の羽の力が切れただと！！？」

「俺のレギンレイヴは、俺が斬ろうと思ったモノを斬る。断たせてもらった。お前のその、闇の波動を」

「なっ！？ なんだと……っ！！！？」

こちらを見下ろしながら、カーマインは静かに告げてくる。肉体ではなく、力そのものを切り捨てる。その、驚愕の真実を。

「パワーストーンがないのに、どうしてあんなことが…！」

ティピが、不殺の斬戟が顕現したことに驚く。

パワーストーンと呼ばれる石とカーマインの不殺の信念があつてこそその奇跡の刃。代償は 使い手の命。

だが、今のカーマインにパワーストーンはない。

カーマインは強く強く光る瞳を、ウィルフレドに向けて、語りかけた。

「思いだせ。闇の波動に捕らわれる前の自分を。人としてのお前の心を！」

カーマインの瞳の輝きは ウィルフレドにあることを思い出させた。

数十年前、ウィルフレドがまだ人間だったころの記憶を。

かつては心やさしい青年であった、自分を。

我が主、戦乙女のために！ 行くぞ、ウィル！！

女神の羽根を完成させたとき、戦乙女の尖兵として立ちはだかつたのは、他の誰でもない　　ウィルフレドが愛した父だった。

戦死した父は戦乙女によって勇者の魂エインフェリアと化し、人の心を捨て復讐に身を落とした自分に、刃を向けてきたのだ。

俺には、もう戻る道はないんだよ！　父さん！！

そんな言葉を吐ける程度には、あのとときのウィルフレドははまだ、“人間”の部分こころを残していたのかも知れない。

涙も、憐みすら枯れ果てた、あのとときでも。

あら、あなた……。ウフフ……。もう帰ってきたの？

ウィルフレドの母は、戦死した父の面影を追って、ウィルフレドを“あなた”と呼び続けた。

戦争によって貧窮を極めたウィルフレドの家は、母が精神を病むまでに衰退した。彼女にいくら自分は息子だと言って聞かせても、母はウィルフレドを二度と名前と呼ぶことはなかった。　平和だった昔のようには、二度と。

そして、

お兄ちゃん！　遊びに連れて行って！！

明朗快活な妹は、心を壊した母に涙するウィルフレドを元気づけてくれた。

だがそれも長くは続かず　　彼女はゆるゆると、飢えて死んでいった。ウィルフレドの目の前で。

そして

なにも知らなかった自分が、

嫌だッ！ 死にたくない！ こんなところで死にたくない！！

女神の羽根で最初に殺した、一番大切だった親友を思い出す。
ウィルフレドの心が、壊れた瞬間だった。

「うああああああああっ！！！！」

喉の奥から絶叫する。それは魂の慟哭だった。頭を抱え込み、地面に打ち付けるウィルフレド。その額から、不死者の証でもあるドロ黒く、粘ついた“血”が流れる。

人を捨て、撰理の輪から外れた者が手にする ニブルヘイムの“闇”だ。
ウィルフレドは奥歯を噛みしめ、指の間から忌々しげにカーマインを睨み据えた。

「よくも……、よくも俺に思い出させたなっ！？ 無力だったあのころをつ！！ 人間などという神の道具に過ぎない、あの矮小な存在だったころを！！」

その赤い瞳から血の涙を流しながら、ウィルフレドは怨嗟を吐き捨てた。
こちらを見据えるカーマインの瞳は、揺れない。

「許さん……！ 許さんぞ！ 俺の弱さを露呈させた貴様だけは！ 戦乙女の前に、まずお前を八つ裂きにしてやる！！」

そう宣言したあと、彼の体からは前以上の闇の波動 女神の羽

の力が溢れている。

「い、一度消えかけた波動が、前よりも噴き出してる!?!? なんで!?!?!?」

ティピの驚きようは普通じゃなかった。カーマインのレギンレイヴで斬られて立ちあがってくる者など、元の世界でも二人だけだったからだ。

その二人も、『救世』と呼ばれるカーマインと同じ存在 『最強』 『伝説』 と称されている だった。

(コイツ、シュワルゼヤラルフさんと同じだっていうの!?!)

一度完全に断たれた力を復活させるなんて、ほとんど不可能だからだ。認識したくもないことをティピは考えてしまった。

「……そうか。お前は自分の弱さを認めたくないんだな。だからそうやって、誰かを憎むことで自分の弱さを誤魔化す。自分が弱いことを認めたくない。」

だからといってお前は、誰かを憎むことで自分の弱さから目をそむけ続けるつもりか? これからも多くの人を犠牲にした上で、自分が強いという錯覚を覚えるためだけに」

冷静にカーマインは力を放つ不死者を見据える。圧倒的な存在となつたウィルフレドを。

その瞳はどこか、相手を労る光をたたえていた。

番外 コリアンドル村編2 冥界

「この俺が弱いだと……!? この俺が無力だと!? この俺こそが、この俺こそが最強だああああ!!」

その瞳を不愉快に睨みつけ、ウィルフレドはもう一振りの剣を抜き放つ。

「お前を八つ裂きにしたうえで、そこにいる戦乙女を斬り裂き、証明してやる! この俺が神をも上回る存在だとな!!」

そして、狂気の笑みを浮かべ、宣言するのだった。一度完全に闇の波動を断ったというのに、彼の憎しみの心は、まるで炎のように燃え上がる。それは 父への、友への、あるいは仲間への 贖罪の表れ。

犠牲にしてきた命 今更憎しみを捨てられない。そういう思いが彼の中に有るのかもしれない。

カーマインは静かに、悲しげにウィルフレドの瞳を見据える。

「カーマイン、こいつはもう……」

「ああ。そうみたいだな……」

ティピは眉間に皺をよせ、どことなく言いづらそうに、悲しい視線をカーマインに向けた。

カーマインは静かにそれを受け、瞳を閉じる。

「心配するな。俺はもう迷わない」

そう応えながら、彼は自身の中に眠る闇を起こし始める。自分の本性を　人としての自分ではなく、異形としての自分を……。その口から、これまでとはまるで異質な低く恐ろしく、暴力的な声が紡ぎだされる。

「貴様は　敵だ……！」

次に瞳を開けたとき、その両の眼は闇に彩られている。まるで、周りの光を吸い込むかのような深く　深く底がまるで見えない闇　どこか、人を惹きつけて止まない力を持つ闇の鬼眼。それを、ウィルフレドに向けると同時、カーマインの全身から白い煙のようなものが噴き出しはじめる。

その力を確認し、ウィルフレドは狂気の笑みを浮かべながら、力を全身からあふれさせる。

ネ　リスがそんなカーマインに向けて微笑みかけた。

「ウィルフレド様の力は無限……。戦えば戦うほど強くなる。それを超えることができるかしら？　フツツ、見物ですね」

その言葉を受け、鬼の眼をカーマインはネ　リスに向けた。

「……のぼせ上がるのも、いい加減にしておけよ……！！」

「やっぱりあの女が元凶なんだ……！！」

ティピがカーマインの怒りに触れ、ウィルフレドと言う青年を変えた元凶を確信する。

ガギイツー！！

再び剣と刀がぶつかり合う。両手の剣で斬りつけてくるウィルフレド。カーマインはそれらを紙一重で捌いていく。山地という不安定な足場だと言うのに、カーマインの足運びはまるで拙い所がない。

その太刀捌きも動きも、先ほどまでのような気ままなモノとは違い、より鋭く、より早く、洗練されている。

スピードもパワーも、ウィルフレドが圧倒している。しかしカーマインは、その体捌きと反射神経、剣術で受け、捌き、躲す。

「チイッ!!」

舌打ちをしながら、左の剣で横薙ぎ、下に避けたカーマインに、右手の剣をふり下ろすも、軽く半身に見切つて躲される。左手の剣で即座に突きを放つ、ギンッその一撃はカーマインの刀。左手一本で流される。

次の一撃を放とうとするウィルフレドだが、その左脇にカーマインは踏み込んでいた。

「な!?!」

バキイイイ……ッ!!

カーマインの強烈な柄頭での一撃がウィルフレドにまともに決まり、後方へ仰け反る。

ドゴオッ!!

すかさずカーマインは追撃の回し蹴りを側頭部に決めて吹き飛ばした。

「やったあああ!!」

ティピの歓声が森に響き渡る。

しかし、カーマインの鬼眼は霧の向こうへ　ウィルフレドを吹き飛ばした方向に据えられていた。人影がゆっくりと立ち上がる。

「ダメージなしか……」

その様を低く、静かな声で呟きながらジッと見つめる。

「カーマインの蹴りをまともに喰らって平然としてるなんて……!」

「先に言っておくが、加減はしていない……つもりだったがな。どうやらこの身体、まだ俺の思い通りには動かんようだ」

ティピの発言にポツリと感想のようなモノを漏らすカーマイン。自分の体を見下ろし、感触を確かめるように言う。

「体を作り替えたばかりだから、完全にカーマインの能力を引き出せてない!？」

「フ」

ティピが、カーマインの体に圧倒的な異形の力が漲っていないことに気づく。しかし、当のカーマインは不敵に笑って、ウィルフレドを見据える。低い声で呟くように、刀を相手に向けて、口の端を

つり上げて、宣言する。

「丁度良いハンデだ」

「アンタってばなんでそんなに、ゲヴェルの波動を使うと気がおつきくなんのよお〜!!」

服をかみしめながら、ティピは嘆くように叫ぶ。

ウィルフレドはゆっくりと霧の向こうから現れ、ネーリスの傍らに立つ。突然、その華奢な肩を両手でつかみ、白く細い首にかみついた。

「……………な、ななな……………!?!」

「……………」

ティピはこれ以上ないほど、うろたえている。対して、カーマインはジッとその恐ろしい鬼眼を、おぞましい不死者たちに向けていた。

ネーリスは自分の血肉を喰らうウィルフレドの頭を穏やかに撫でながらカーマインたちを見ている。その口許に笑みすら浮かべて。

「さあ、ウィルフレド様。私を喰らい、すべてを闇へと……………」

ネーリスの体が紫暗の光の粒子と化し、ウィルフレドの肉体に吸い込まれて行った。

「うううううう………！！」

ウィルフレドの背に、ティピが見たこともない化け物の影が現れる。

「う、ウソ……！！ ゲヴェルと同じなの、コイツ！？」

紅い血のように紅い光を纏い、ウィルフレドはその背に、ガラムと呼ばれる冥界の女王ヘルの番犬を負う。

ティピは焦っていた。

敵がゲヴェル因子を全開にしたカーマインたちと同じようなことをしてくるなら、こちらも因子を全開にするべきなのだ。なのに、カーマインはゲヴェル因子を使っているのにゲヴェルの影が現れない。白銀の炎は煙のように弱く、なにより圧倒的な力を感じられない。

だと言うのに、その鬼眼からあふれる鬼気は流石と言うべきか。

ウィルフレドが地面を蹴ると同時、カーマインも縮地法で駆ける。両者の姿が消える。ウィルフレドの両手の剣が、森を次々と切り裂いていく。岩を、地面を、木々を舞い上げらせながら、その刃はカーマインに迫る。

カーマインは、舞い飛ぶ瓦礫の山を宙で駆け、足場にし、空中で方向転換しながら、ジグザグに、網の目を縫うように斬閃を躲しながら、ウィルフレドに接近していく。

両手で刀の柄を握り締めると、カーマインは 自分が唯一、勝ちたい敵を思い浮かべる 袈裟がけに斬りつける。それは 剛剣と呼ぶにふさわしい、一閃。

だが。

ガオオオオンッ！！

落雷のような音をたてながらも、刀はウィルフレドの左手の剣に軽く止められていた。ニヤリと笑うウィルフレド。

左手の剣をそのまま横に薙ぎ、カーマインを吹き飛ばす。地面に手と両足をすりつけながら、着地するカーマイン。そこへ、ウィルフレドの斬戟が飛ぶ。網の眼のように張り巡らされた斬閃はどれも、一撃必殺の威力を持っている。

カツと眼を見開くとカーマインはその全てに連続攻撃を放っていた。

ガガガガアンッ！！

凄まじい爆音が鳴り響き、カーマインは後方へ弾き飛ばされる。

しかし、その斬戟は、ウィルフレドの全ての斬戟を完全に打ち返し、ウィルフレドの剣を止めた。

両足と、刀を持っていない右手を地面にこすりつけ、着地するカーマイン。彼は冷静に自分の痺れる両の手を見る。ウィルフレドの強烈な斬戟は、今のカーマインでは完全には受け切れなかったのだ。

「くっそおおお……！！　カーマインが完全に力を出せば、あんな奴……！！」

防戦一方のカーマインに、ティピが思わず舌打ちする。

「ん？　……なにか、きっかけがあれば、ひよっとして……。」

よしー!!」

ティピがなにかを決意した瞳で、カーマインたちを見る。

「ふふふ、どうした？ この俺を斬るんじゃないやなかったのか？」

勝ち誇るウィルフレドに、小さな影が飛びこんできた。

「ティピちゃん、キークック!!」

ドゴオオツ!!」

その小さいサイズに見合わず、中々強力な一撃はウィルフレドの腕に決まった。ウィルフレドは鬱陶しげに、ティピを見据える。

「先に、あの羽虫から片付けるか？」

ティピに攻撃を仕掛けようとしたウィルフレドの前にカーマインが縮地法で現れ、蹴り飛ばす。後方へ弾け飛ぶウィルフレド。ティピがそのカーマインの動きに歓声を上げた。

「よっしやあああ!!」

次の瞬間、カーマインの全身を白銀の炎が纏う。その背には、ティピの良く知る異形　ゲヴェル　の影が顕現した。

「礼を言っぞ……ティピ。おかげで、俺の中のゲヴェルが目覚めることが出来たようだ……」

「まじつたく、アンタつてばアタシがいらないとなんにも出来ないんだから！ 誰かのピンチじゃないと目覚められないなんてのは、時と場合を選びなさいよ！！」

フツと嗤うカーマイン。圧倒的な鬼気を纏う騎士は、不死者の青年を睨み据える。

「終わりにしてやるっ」

「ほぞけ！！」

ウィルフレドは一瞬で距離を詰めると、右手の剣を一閃。

ギインッ！

今度は、左手だけで止められる。刀の刃の向こうから、圧倒的な鬼気を放つ金と銀の瞳がある。

カーマインは静かに、刀の柄に右手をかける。両手持ち。と同時に、ウィルフレドは、逆の手の剣で袈裟がけに斬りつけつる。

ビュンッ！

その一撃は、カーマインの前髪を揺らすだけ、またしても、見切られる。

ガキイ……ッ！！

両手持ちの刀での胴薙ぎ、ウィルフレドは咄嗟に両手の剣を交差させて止める。次の瞬間、足を止めての高速斬戟の打ち合いが始まる。

ウィルフレドの左剣の横薙ぎを、刀の柄頭で受け止めるカーマイン。直ぐに右剣の突きがカーマインの心臓目掛けて放たれる。それよりも早く、カーマインが左へサイドステップし、袈裟がけを浴びせる。

ギンッ！！

左の剣をウィルフレドは合わせ、止める。

カーマインは止められたと見るや、立て続けに逆袈裟がけ、横薙ぎ、切り上げを放つ。そのどれもが、空間を斬るほどの三連斬戟。

ウィルフレドはその斬戟に真つ向から切り返す。左の剣で、逆袈裟を流しながら右手の剣で突き。これは横薙ぎと相殺。最後の切り上げは身を翻し、両手の剣を交差させ、鈍い金属音を立ててがつちりと受け止める。

睨み合う鬼の眼と不死者。

互いに、その場から剣を繰り出し合う。

「心の痛みをくれ！！ ヴインジェンス・エッジ！！」

「いっけえ！！ 連続攻撃だああああ！！」

ティピの言葉を合図に両者の凄まじい斬戟は、辺り一面の景色をズタズタに切り裂いていく。

ガオオオオ……オンッ！！

両者、剣撃を交えていた中心地から後方へ弾き飛ぶ。と、同時に着地。

「弱者に似合いの結末を用意してやる。死ね!!」

「行け行け!! 返り討ちだああ!!」

ウィルフレドは両の剣を交差させての一撃を放ってきた。それはカーマインの首に迫る。

(でかい口を叩いてこんなものか……。弱者め!!)

「この姿になったとき、最初に言ったな?」

愉悦に歪むウィルフレドの耳に、そんな冷めたく、低い声が届いた。次の瞬間、ウィルフレドは、左の脇腹に強烈な衝撃と黄金の光を感じると同時に、天高く巻き上げられていた。

「終わりにしてやろう」と

カーマインの強打撃、必殺の左切り上げだった。両手持ちの姿勢から斜め左上へ斬り上げ、左手一本に変えてふり切る。剣速、威力、その全てがカーマインのもつ剣技の中で最強の一撃。

カーマインの意志と力を受け、レギンレイヴが黄金の刃と化し、ウィルフレドに炸裂した。

「ガアアッ」

ズドオオオンッ!!

巻き上げられた先で、肺にたまった空気と血を同時に吐きだす。次の瞬間には固い地面がまともにウィルフレドの体を打ちつけた。

「ひいつさあああつ!!」

完全に戻った相棒の一撃に、ティピが歓声を上げる。

地面に叩きつけられたウィルフレドは、指一本動かすことが出来なかった。

「この俺が負ける……!!? おのれえ……っ! だが、だがこの俺は死なん……! この俺は死なんぞおお!! 俺は必ずこの地に舞い戻り、ヴァルキリーをこの手で引き裂いてやる……!! ……フフハハツハツハハハハっ!!」

狂ったように笑いながら、姿を消していくウィルフレドをカーマインは静かに睨み据え、空を見上げた。

「カーマイン?」

「まだ終わっていない……。貴様を斬ると言っただはずだ……!!」

カーマインの言葉に応えるように、赤黒い空に、ウィルフレドが背負った影が実体化した。ティピもカーマインも知る由がなかったが、この化け物こそ、冥界の女王ヘル番犬ガルムだった。

「アイツ……!!」

「……それが貴様の本性か。なるほど、貴様の性根にはお似合いの姿だな」

カーマインの言葉に、ガルム ネ リスは笑った。

「あのウィルフレド様を倒すとは、成程……。化け物じみていらっしゃいますね」

「……お互い様だ」

その目に鬼気を溢れさせ、口許に笑みすら浮かべて、カーマインは静かに構える。

ティピがゴクリと唾を飲み込んだとき、ティピとプラチナを黄金の光が包み込む。

「結界。そういうことか！ よし、プラチナは任せて！ アンタはその化け物をブツ倒しなさいよ！！」

ティピが力強い笑みと共に、カーマインを見る。

「ああ。もう誰も、貴様の好きにはさせん……！！」

強く宣言すると同時、カーマインの刀が　その刃が　黄金へと変化した。

「貴様は　俺が倒す！！」

白銀の異形　ゲヴェル　は目の前の番犬ガルムを睨みつけた。

ウオオオオオオオオ！！

カーマインの口から、異形の咆哮が発せられ、圧倒的な鬼気が、

その全身から放たれている。

「ふふふ、面白い。これほどの力を秘めていたとは……！！
その魂、ヘル様への良き土産と成るでしょう！！」

ガルムは巨大な手を横に一閃した。次の瞬間、空まで届く竜巻がいくつも起こり、カーマインに襲いかかる。しかし、風は白銀の炎に当たると消し飛んでしまう。

ガルムの瞳が細められる。対するカーマインは、悠然と笑う。

「凧風にも感じぬ。多くの罪なき者の命を奪って得た力とは、この程度か？」

その口調は、決して相手を脅すようなものではない。むしろ、落ち着いた冷めた口調だ。

だというのに、聞いている者に恐怖を覚えさせる。低い声。

そこには、先ほどまでの優しさなど、微塵も感じられない。

「この技はお気に召しませんか？　では、これはどうでしょう？」

巨大な掌から、黒い巨大な剣が三振り現れ、カーマインの頭上に降ってくる。地形を変えてしまう程に膨大で強大な魔力のダークセイヴァー。

だが

これも、白銀の炎に触れると消えてしまう。

「なんだと！？」

「気は済んだか？」

カーマインは静かに、一步前に歩を進める。次の瞬間、彼の周囲を紅の炎が爆発した。

バーンストーム

辺り一面を炎が包み込む。魔術師が居れば、その破壊力に思わず我が目を疑ったことだろう。

が、それを悠然と真ん中から引き裂いて、白銀の炎を纏った騎士が歩いてくる。

「生意気な!!」

さまざまな魔法が放たれる。魔力での直接打撃も、白銀の炎が弾き飛ばす。

「これはどうです!?!」

魔法ではダメージを与えられないと悟ったガルムは、自身の背中から巨大な触手を生み出し、それを鞭のようにしならせて、カーマインに放つ。幾本もの生きた蛇のように動き回る触手の攻撃はしかし、網の眼のように宙を奔る斬戟に粉々に斬り裂かれて行った。

「……次はなんだ?」

カーマインは刀をこちらに向けて、不敵な笑みと共に言ってきた。ガルムの放つ全ての攻撃は無駄。地獄の番犬として名高いガルムが、まるで子ども扱いだった。

どんな攻撃も、なにも、通じない。

「フ、ふざけるなあああ!!」

巨大な拳が、ゆっくりとこちらに歩いてくるカーマインに放たれる。カーマインは静かにその鬼眼をガルムの眼に見据え、ゆっくりとその場に止まる。刀を縦に構え、峰に右手を添える。

ドガアアアッ!!

カーマインの立っていた場所が衝撃で吹き飛んでいく。勝利を確信し、ガルムは笑う。だが、それも一瞬のことだった。

拳は、豆粒のように小さい存在に完全に止められていたのだ。

「な!？」

慌てて拳を引き、体勢を立て直すガルム。

「っ、っっ!!」

「じゅあっ……!!」

次の瞬間、その頑丈な拳は縦に斬られ、血を流し始める。

「何者だ……。貴様……。!!」

理解できなかった。有り得なかった。自分を相手にここまで力の差を見せつけられることなど、ガルムにとっては初めてのことだ。“魔狼”や“邪龍”を除けば、自分を超える存在など、ヘルだけだと言っのに。

(こんな、こんな……。ミッドガルドの存在なんか……。!!)

この異形は、自らの存在を誇示しようとはしていない。相手を脅そうとも、見下そうともしていない。ただ、強烈に強い意志が鬼気と成ってその両の眼から放たれている。

「フ、フフ……ならばこの地の全てを消して差し上げましょう……！！ 貴方の大好きな人間と共に、消え去るがいい……！！」

漆黒の波動が、永久とこしえの闇が辺りを包み込む。全ての生者に死を全ての者に滅びを 冥界の波動が平等に消し飛ばす。

「シュヴァルツ・ブリッツェン！！」

闇が全てを飲み込んでいく。
景色が、闇に塗りつぶされる。

瞬間、

「この世界、闇に包まれしとき、光の救世主 グローランサーが現れ、世を救わん！！」

ティピが自分の世界に伝わるおとぎ話を、伝説の一節を紡ぐ。

「 相手が悪かったわね！ ソイツは世界を救った 救世の光
グローランサーなのよ！！」

力強く、闇に包まれた世界でティピは言いきった。その瞳は、救世の騎士の勝利を信じて疑わない

「ふふふ、御馳走さまです……。堪能させていただきました」

ガラムは闇に飲み込まれたカーマインに自身の勝利を確信した。

これが、貴様のいう闇か？

「まさか……！」

この程度で、闇か……？ 笑わせるな！！

次の瞬間、黄金の光が一閃。闇の空間を切り裂いた。ソレは闇を
どンドン食い初め、世界は再び、光のもとへと戻る。

霧は晴れ、赤黒い空は 青空に変わっていた。

「ば、ばかな……！！ 生身の存在が、ニブルヘイムの闇を破った
……！？」

「貴様は 本物の闇を知らない。底知れぬ闇を どこまでも墮
ちて行く感覚を それを知らずに、闇の住人だと？ 吐き違える
のもいい加減にしろ……！！」

白銀の炎が一層たけり狂う。カーマインは、その刃の届く距離ま
でガラムに近づいていた。

「ならば、この近くにある村の人間の命を吸って……！！」

「 終わりだ……！！」

カーマインは天高く跳躍し、真下に刀をふり下ろす。ガラムの巨
体が一刀両断にされる。

ああああああああ！！

ガルムの巨体が光に包まれて行き、消滅した。

川の中に、メイド服の姿に戻ったガルム　ネ　リス　が片膝をついた姿勢でいた。その首筋にカーマインのレギンレイヴが突きつけられていた。

その鬼眼はネ　リスに鬼気を叩きつけている。

「二度と彼女に手を出すな……！！」

「ッ！！」

怯えながらも睨み返してくるネ　リスをジッと見据えたあと、カーマインは刀を退いた。ネ　リスはこちらを睨み上げながら、しかしそのままにも言わず、姿を消していった。

それを見据え、カーマインは瞳を閉じる。すると、全身を覆っていた白銀の炎と、その背に有った異形の影が姿を消した。次に瞳を開けたときには強い光が宿っている。

「　終わったな」

「やったあ！！」

カーマインとティピは互いに微笑み合うのだった。

カーマインとティピは、草むらに気絶しているプラチナの様態を確認していた。

「……どう？　カーマイン」

「ああ、気を失っているだけのようだ……。大丈夫だ、早く家に連れて行ってやるわ」

そのとき、カーマインとティピを時の光が包みこむ。

「わっ！？ また時空遊離！？」

「そのようだ……。この娘に礼を言うことは出来なかったか……。淡々としかし、残念そうにカーマインはプラチナを見る。下手にこの娘に触れれば、巻き込んでしまう。カーマインはソレを恐れたのだ。」

「仕方ないわね……。でもさ、せめてこの子にお礼したいんだけど」

「ああ。そうだな。ヒーリング」

カーマインは、掌から優しく美しい光を放つ。それは、プラチナの肌を暖かく照らす。

「これで、目が覚めるころには、この子は風邪をひくことはないだろう」

「もう他に変な奴はいないよね？」

「ああ。もう大丈夫だ。それに迎えもきたらしい」

カーマインが光に包まれる前に、向こうに現れた少年を確認した。もうほとんどこの世界のことは知覚できない。

「そっか！　じゃあね、プラチナ！」

カーマインとティピ、二人の旅はまだ、終わらない。

「……な、なんだっただ？　今の……？」

まだ幼い　十四歳のころのルシオは、草むらに気絶しているプラチナを発見した。

「プラチナ！」

「……ルシオ？　妖精さんと騎士さんは？」

きよろきよろと辺りを見回すプラチナを、ルシオはキョトンと見る。

「さっき、光に包まれて行く黒い髪の男をみたけど……？」

「！」

プラチナは目を見開いた。

「そっか……。もう自分の世界に帰っちゃったんだ」

そう言って、彼女は肩を落とした。残念そうなプラチナに、ルシオは首を捻って問いかける。

「……なあ、その話、教えてくれないか？　ちょうど俺も熱が下がったし」

「ルシオ……。うんっ！」

プラチナの久しぶりに嬉しそうな顔に、ルシオは心から優しく微笑むのだった。

蒼い空と輝く太陽が二人を優しく照らしている。

黄金の光から生まれる映像は、そこで節目を迎えた。

シーティアとデュランは無言のまま、しばし動かない。

ふと、

デュランが、その場から立ち上がった。

「どこに行くつもりだ？」

「知れたこと、あの方がこの少女と出会った場所に向かう」

シーティアは無言のまま、手に持っていた刀を投げつけた。
受け取る。

見下すと　蘇芳に預けたままにしていたデュランタル白柄の長刀だった。

「自分の得物くらいきっちり持っておけ。　アイツの背を守るの
ならな」

「シーティア殿はどうなされる？」

「私はまだ、こちらの世界でやることがある。それに三年も前の話

だ。次元の歪みが修復されている可能性が高いからな。無駄足となる可能性が高い」

シーティアはそこで言葉を切ると、空を見上げた。

「ならば私は、確実な方法でアイツに会いに行く。もしお前が運良くアイツに会えたなら、“覚悟しておけ”……と伝える」

一瞬、人をも殺しそうな目で告げて、シーティアは不敵に口端を
つり上げた。

デュランは几帳面に一礼し、その場を去って行く。

二人の異形は、こうして別れ、それぞれの道へと向かっていった。

1 ヴィルノア編 探し人

「レナス姉さま！」

弾けるような明るい声を聞いて、レナスは目を丸めた。

ここは下界ミッドガルド。創世記から戦火の絶えたためしがない
荒廃の地である。

彼女たちが住まう神界ガアルハラに比べれば、穢れに穢れきつた不浄の地。

そんな場所に神が降りてくるのは、よほどのことがないかぎり珍しい。

大陸西南にある古代神殿。水没した神殿は人々には忘れ去られた
代物であるけれども、そこに棲まう不死者を浄化するレナスにとっ
ては関係ない。

彼女は剣を鞘に戻し、少女神フレイアをふり返った。

「一体どうしたの？ こんなところまで」

「実は、レナス姉さまにお願いがあつて」

「お願い？」

「ええ」

フレイアは視線を落とすと、わずかに頬を膨らませて困ったよう
な表情を浮かべた。

「それがね。私の飼つてた霊獣が、地上に迷い込んだみたい
なの。フレイ姉さんに言つても怒られるだけだし、まともに捜して

もらえそうにもないから …… ねえ、お願いレナス姉さま。あの
コを探すの、手伝って」

フレイアは眉を八の字に下げて、レナスにすり寄った。

「フレイア。霊獣の位置は分かっているの？」

「あのコは私の神力からできたモノだから感知できることはできる
んだけど……」

「どうしたの？」

「地上に降りた問題の霊獣は、最近調子がよくなって。神力をうまく
開放できないみたいなの」

「つまり、霊獣の気配を感じられない、ということ？」

「ううん。大まかな場所ならわかるわ。 …… でも、範囲が広いし人
間がごちゃごちゃいるから」

そう言ってフレイアは首を横にふった。別段、人間と接するのは
苦ではない。

ただ下界での行いを、のちにフレイにとかく言われるのが面倒だ
ったのだ。

フレイアがその意味を込めてレナスを見つめると、レナスは数秒
の沈黙を置いたあと、小さく頷いた。

「わかったわ。少しの間だけど、一緒に行きましょう」

「ほんと!?!?」

途端、フレイアに笑顔がこぼれた。

「ありがと、レナス姉さま！ 大好き！」

フレイアはそう言って、レナスを抱きしめた。

軍事大国ヴィルノア。

『原初の秘法』と呼ばれる鋼鉄と火薬の技術を応用し、最先端の軍事技術を模索し続けるこの大国は、他国から一歩抜き出る存在である。

長い間、クレルモンフェランとは冷戦が続いていた。だが、『原初の秘法』の転用によって力を増したヴィルノアは、アルトリア侵攻ののちに、クレルモンフェランを陥落させると一般的に噂されている。

当然、この国でもっとも需要があるのは、軍用品、そして兵力だ。慢性化した戦争は、国民の感覚を麻痺させ、力に覚えのある者を不用意に招き入れる。

ヴィルノア城下の中心街に、堂々と盗賊ギルドの建物がそびえ立っているのも、街のゴロツキを歓迎するこの国ならではの光景だった。

街の中心から庶民の住宅街に折れる三叉路の突き当りに、ジーナの宿がある。

戦争特需で国が潤っていても、庶民は長時間労働を強いられる劣悪な環境である。住宅街を埋め尽くすのは、隣家と身を寄せ合うよ

うに建った二階建ての建物だ。多くがアパートで、一家で一室使うのが一般的だった。

ジーナの宿もまた、二階建てだ。一階は薄汚れたロビーで、左手に宿帳をつけるカウンター、右手に炊事場にある。

奥にL字型の階段があつて、客室はすべて二階だった。

三室ある客室は、久しぶりにすべて埋まっている。

「こらっ！ いつまで寝てんだい。仕事はどうしたの?!」

ジーナは水遣りの手をとめた。宿の軒先に、月下美人を植えている。背の高いこのサボテンは、もはや彼女の身長よりも大きく、立派に成長していた。

恰幅の良い胸を張って、ジーナは宿の左端に泊まっている男を仰ぐ。

すると、ごそごそと物音を立てて、白い木枠の窓から、男が顔を出した。四十前後の四角い顔の男だ。目が小さく鋭いが、どこか愛嬌がある。浅黒い顎には無精髭が散っており、短い黒髪には好き放題寝癖がついていた。

男はごつごつした頬を掻きながら、道端でジヨウ口をふり上げる女将のジーナを見下した。

「仕事お？ 俺がなにやってんのか、知らないわけじゃねえだろ？
こんな時間に起こすなよ」

「なに言ってるんだい！ たまには太陽を見なきゃ、腐っちまうよ！
それに掃除もしなくちゃなんないんだからね！」

「ああ、わかったわかった。っせえな」

男の言うとおり、ジーナの宿に泊まる者は、盗賊ギルドになんら

かの縁のある　いわゆるゴロツキが多い。宿泊料が他に比べて安い上に、風呂付が珍しく、それが受けているのだ。

いま、宿の左端に泊まっている男は、バドラック。一週間ほど前にヴィルノアに流れ着いた傭兵　と自称する、何でも屋だ。

彼はジーナに横柄な返事をする、寝癖のついた頭をもう一度掻いて溜息を吐いた。

数分後、言われた通りに寝間着姿のままバドラックが外に出てきた。

相手が誰であろうと怯まないジーナは「肝っ玉母さん」と街でも評判の女だ。だが、このバドラックのように、渋りながらも聞き分けのいい男はそう多くない。金のためなら自らの手を汚すことになんかの抵抗も持たないような男たちが相手なのだ。ジーナの苦勞も無理はない。

バドラックは心地よい陽気に目を細めながら、暢気につぶやいた。

「こうしていると、戦争中だなんて、思えねえよなあ」

「……なに言ってるんだか。あんた、そこらの家の軒先に植えてる花、見たことないのかい？」

「花？　この飾りつけのないやつのことか？」

バドラックが軒先に植えた月下美人を見る。背が高く、細長い葉をつけた植物である。

彼はとんと手を打った。

「そうだ、前に聞こうと思ってたんだ。一体いつになったらこの花、咲くんか？　まったく咲くそぶりも見せないじゃねえか」

「これはサボテンの一種だね」

「は？ サボテン？」

「月夜の晩に一度だけ、数時間だけ花を咲かせる植物なのよ」

「……」

バドラックは顔をくしゃくしゃにして、眉を曲げている。納得がいかない、という表情だ。

ジーナは苦笑しながら、月下美人を見やった。

「ポケットと寝てると見過ごしてしまう。でも逆に、花が咲いたときに願い事をすると言わされてるのさ」

「なるほど……。だからこんなつまんねー植物を育ててんのか」

「つまんないもんかい！」

「そんなに金が欲しいのか？」

言われ、ジーナは瞬いたあとに溜息を吐いた。

街に次から次へとやってくる無頼漢にしてみれば、当然の感覚かもしれない。だが、幼い頃からこの街で育ったジーナにしてみれば、その感覚はあまり歓迎できるものではなかった。

「馬鹿だね！ みんな早く戦争が終わるのを願ってるのさ」

確かに、ゴロツキのおかげで宿の運営は少し楽になっている。しかし、ここに泊まった客が、二度と帰らぬ人となることも、しばしば起こるのだ。

戦争に躍起になっているのはもっぱら男たちで、街の女は冷めていた。

「まっ、俺はもう一眠りさせてもらっわ」

バドラックは大きく伸びをすると、掃除もまだ終わっていない部屋に熊のようにのそのそと戻っていった。

「まったく……」

ジーナは溜息を吐く。根っから悪い男ではないのだが、バドラックは世間を斜めに見ている。

もつとも、兵役以外では割のいい仕事など、ヴィルノアでもそうない。『原初の秘法』を手に入れたものの、恩恵を受けているのは一部の権力者だけだ。

灼熱の現場に十数時間も拘束され続けた報酬が、一日の食事にようやく有りつける額でしかないことを知れば、まっとうな職に就こうとする者が減るのも頷けるのである。

と、

精錬鋼街の方から、客が帰ってきた。こちらは二階の右端に泊まっている客だ。バドラックより数段若く、金髪で整った身なりをしている。

ジーナはこの辺りの人間ではないだろうと当たりを付けていた。

「あら、あんだ。いまお帰りかい？」

「ええ。いつもご苦労様です」

花の世話をしているジーナに、青年が労いの言葉をかけて一礼す

る。

アレン・ガード、と言う名の若者だ。

ジーナは丸い指を頬に当てた。

「そう言ってくれるのはあんただけだよお！」

きゃらきゃらと笑い立てながら、アレンの肩を叩く。行儀のいい人間は、ジーナの宿では絶滅危惧種と言っている。

特に、アレンは息子くらいの年齢であるから、不思議な親近感が湧いていた。

アレンは育ちのよさそうな微笑みを浮かべて、少し困ったように苦笑している。

そのとき、

「兄ちゃん！」

「見つかりましたか、アレンさん!？」

宿の正面の通りからやってきたアレンに対し、二人の少年が住宅街の方から走ってきた。

ロジャーとルシオだ。二人はしっぽを揺らしてアレンの足許まで寄つてくると、不安そうな表情で彼を見上げた。

ジーナは変わった旅人だと思いつつも、深刻そうな三人を遠目に見る。

アレンが首を横にふった。

「だめだ。こちらは見ていない。そつちは？」

「こつちもダメじゃんよ」

「新しい情報も、特にありませんでした」

ルシオとロジャーがうなだれる。

アレンはそうかとつぶやくと眉を寄せて空を仰いだ。

「一体、どこに行ったんだ。……シルメリア」

「連絡がつかなくなって早二月、はやふたつきか」

カシエルはクレルモンフェランの豪華な街並みを眺めながら、ぼつりとつぶやいた。

白い石畳の上に大陸の中でも比較的裕福なこの国は、一軒家が多い。狂信的に神を敬う風習はあるものの、貧困の足音はまだここに迫っていないのだ。

反面、戦死者数はヴィルノアよりも多いという現実があるけれども、すべては『殉教』の一言で済まされる慣例があった。

階段に座った冒険者、カシエルは、足音が背中から近づいてくるのを感じて顔をあげた。

ヴィルノアほどではないが、ここにも『ギルド』がある。裏社会を牛耳る筆頭組織として頭角を現しているギルドは、ヴィルノアに本拠を置いて、大陸中にその勢力を伸ばしているのだ。

ただし、『裏』社会の看板とはいえ旅人であるカシエルたちにとっては恩恵を受ける場所でもある。

すなわち、大陸中に組織されているため、人探しなどの情報網が、

国の正規組織よりも強固なのだ。

そういう事情で、クレルモンフェランのギルドに赴いたセリアが、待ち合わせ場所であるこの階段に、昼ごろ戻ってきた。

「どうだった？」

カシエルが立ちあがって問う。街の聞き込みを担当していたカシエルは、すぎるような思いだった。

「だめ。エイミもグレイも、見た人はいないって……」

「……そっか」

カシエルの視線が下がる。自然と肩を落とした彼は、少しの間を置いて首を傾げた。

「確か、俺たちが二人の情報収集を頼んだのってアルトリアに居たころだよな？」

「グレイに関してはもっと前からだけど、エイミはそうよ。それがどうかしたの？」

「いや。大陸戦争が近いって話だったから、もしかしてエイミの奴、巻き込まれたんじゃないかって」

「それなら目立つハズでしょう？」

セリアに言われて、カシエルは瞬いた。

二人の会話に出てくる『エイミ』という女性は、美人だが男勝りな性格で、自分の身長の倍近くある巨槍を女だてらに操る女傑であ

る。

また、男嫌いのくせに緑鎧を上半身しか着けておらず、鎖帷子の下着から伸びる生足が、行く先々の国で出会う男たちの視線を釘づけにするのだ。

そんな彼女が『軍』という大きな組織に所属して、目立たないわけがない。

思い出して、カシエルは苦笑した。

「それもそうか」

「うん」

頷くセリアを見ながらカシエルは思う。

この二ヶ月。エイミの消息が絶えたために忘れていたが、外見的にも性格的にも目立つのがあの『エイミ』という女だ。

一つ一つ聞き込む場所を広げていけば、他の凡庸な人探しよりも、楽にエイミと合流できるはずであった。

カシエルは前向きに、自分に言い聞かせて顔を上げた。

「それじゃ、もうしばらく散策と行きますか！」

殊更、彼が能天気な声を上げると、心配性なセリアが、彼につられるようにして少しだけ苦笑した。

「ええ」

ギルドが取り仕切る酒場は、バドラックが寝泊まりする宿からまっすぐ歩いた、階段下にある。

ヴィルノア城からもほど近い、この建物は、今日も冒険者やならず者で溢れかえっており、金品の交渉があちこちで行われている。

自堕落な生活を送るバドラックは、『こつこつ』という言葉が嫌いだ。請け負う仕事は正規でなく、大金が一度に手に入る非法なもの。

ギルドは大陸全土に展開する巨大組織であるため、捜し人の依頼から殺人まで、あらゆる仕事をカバーする。

要は「金になれば何でもいい」のだ。そういう信条面では、バドラックもギルドに賛成だった。

ギルドの、ある一点を除いては。

古臭い酒場に入ると、コルク製の丸いテーブルにアルトリアで世話になった女が居る。

バドラックはわき目もふらずに女に近づくと、テーブルに肘をついた。

「手っ取り早く金になる仕事はねえか？」

ジーナに見せた人懐こい表情はなりを潜め、バドラックの鋭い眼差しが女を、睨む。

女はバドラックに視線だけをよこすと、冷たい瞳をわずかに細めた。

「ここがどこなのか、わかっているんでしょうね？」

棘のある言葉だった。

バドラックは金を得るためには手段を選ばない。

前金をもらえる仕事は、たとえ成し遂げる気がなくとも絶対に引き受けるし、大金が手に入れるためであれば相手がギルドであろうと出し抜いた。

バドラックが気に入らない、ギルドの気に入らない点。

それは、あらゆる仕事の情報を提供する代わりに、六割以上の仲介料を取り立ててくることだ。

こちらは命を張っているというのに、ギルドは情報を与えるだけで大金を手にする。そういうシステムが、バドラックはとことん嫌いだったのである。

バドラックは煩わしいものを感じながら、刺すような女の視線を柳のように流し、肩をすくめた。

「あーわかったわかった。仲介料を払えってんだろ。ここは天下のヴィルノア盗賊ギルドのお膝下だ。誰も逆らいやしませんよオ！」

「なら話は早い。明日また来るといい」

「はいよ。んじゃ、また来るぜ」

愛想よく笑い、手を上げて酒場にもなっているギルド本部を出る。しばらく歩いて、口の中で舌打った。

「ケツ！ ザコどもが群れやがって。テメエらに払う金なんかねえ！ 男はなあ、一匹狼がイカすんだっつーの！」

「？」

青年が、不思議そうにバドラックをふり返った。誰かと思えば昨

日、子ども連れでバドラックの泊まる宿にやってきた男だ。
バドラックは、育ちの良さそうな青年がいま一つ気に入らなかったが、ふと思いついて彼に声をかけた。

「よお。兄ちゃん。こんなところで会うとは奇遇だな」

殊更ことごとに声を上げて、バドラックは人懐こい笑みを浮かべる。
同じ宿に泊まる青年　アレンは、几帳面に一礼を返した。

「お仕事帰りですか？」

「そんなとこだ。そういうお前さんの方は例の捜し人かい？」

こう問いかけたのは、先日、アレンが部屋までやってきてバドラックに尋ねたからだ。

この女性を見ていないか、と。

アレンは困ったように眉を寄せながら首を横にふる。

「ええ。ですが、これがなかなか」

溜息を吐くアレンを見て、バドラックはふうんとつぶやいた。

アレンはなぜか、右手の人差指を左手で揉んでいる。指輪をしているわけでもないのに、妙な癖だとバドラックは思った。

昨日のことを思い起こす。

よほど名のある画家に描かせたであろう若い女の絵は、芸術に一切興味のないバドラックでさえ、胸にくるものを感じた。

あれほど写實的で、美しい女の絵は見たことがない。

それゆえにアレンがその女を追って、あのようならびれた宿に

まで自分の私財を投げ売ってやってきたのは　これはバドラックの勝手な想像だが　実際に苦勞なことだと思った。金でしか動かない彼には、到底真似できない行動である。

（ま、やるうとも思わねえけどな。ぼっちゃんのママゴトなんざ）

剣一つ持たずに旅をしているアレンを見て、バドラックは鼻でせせら笑った。だがそれも、ふん、と息一つ吐いたあとには消え失せている。

バドラックは白い歯を見せて、アレンを見上げた。

「ところで、にーさん。俺あちよいと小銭もってくるの忘れちまつてよ。このあとどうしても市に行かなきゃいけないんだが、ちと金貸してくんねえか？」

「お金を？」

「ああ。あとで絶対返すからよ！　頼む！　この通りだ！」

バドラックは拜むように、顔の前で両手を合わせた。

アレンは見るからに貴族的だ。服装は庶民だが、礼儀正しい所作を見ていればわかる。

バドラックは、彼がクレルモンフェランからやって来た男だと直感して、こう頼んだのだ。

あの国では、貧しい者に富める者が惜しまず金を与えるよう、宗教で決められているためである。

バドラックは片目を薄く開けてアレンを見上げた。

「……何に使うおつもりで？」

アレンが問う。
バドラックは間髪置かずに言った。

「俺あ肝臓あたりに持病があつてよ。医者から薬をもらつことになつてる」

「いくらほどあれば？」

バドラックは辛そうに顔を歪めて、すまねえなと何度もいいながら目標の金額を口にする。

すなわち、三千オース。

一ヶ月、暮らしていける額だ。

アレンが目を丸くした。さすがに裕福な生まれでも、旅人が三千オース失つのは辛いらしい。バドラックは内心舌打ちながら続けた。

「俺の持病は特殊だよ。薬がなきゃ生きてけねえんだ……。せめて千……いや八百、八百ありゃあ医者とも交渉できるんだがなあ」

「八百オースですか」

「そ、そ、そ」

唸りながら財布の中身を確認するアレンに、バドラックはほくそ笑む。思ったとおりの力モだった。アレンがこの街に滞在する限り、金をせびりとるぞ、と心の中で誓いながら、にやにやと相手を待つ。しかし、

「すみません。手持ちは二十オースしかありませんので」

「はあ、二十!?!?」

声を荒げた。

それではちよつとした外食をするのも難しい。

「んだよ、テメエ金持ちじゃねえのかよ！」

思わず悪態つくくと、面を喰らうはずの青年がバドラックをみて笑った。

「なに笑ってやがる!？」

「いや。ずいぶん高く評価されたものだと思つて……」

アレンは腹を抱えると、肩を揺らして笑いはじめる。

途端、バドラックがぎよつとして息を呑んだ。ただ笑っているだけだが、アレンには微塵も隙がない。普通に話しているときは気付かなかつたが、青年の常人ならざる身のこなしに、バドラックは胆が冷えるのを感じた。

担がれたのは、自分の方だったらしい。

「テメエ……、俺が金だまし取ろうとしてるのを知つてて」

アレンは一頻り笑うと、口許からそつと手を下ろした。

「まあ」

低くつぶやいた蒼の瞳が、鋭く冷える。視線だけで、人が殺せそうなほどに強烈な鬼気。

バドラックは全身の血が凍りつくのを感じた。

こういつとき、相手を間違えるとそのまま自分に返ってくるのが裏の世界だ。

相手は年若く、暢気なぼっちゃんだと侮った。だが、その実この男は、相当の修羅場をくぐっている。バドラックは自分の認識ミスに総毛立った。

「ま、ままつ！ 待ってくれえ！」

顔の前で両手を合わせながら、今度は必死に嘆願する。
アレンは動かない。

「わ、悪かった！ 俺が悪かったよ！ ちょっと調子に乗って言うてみただけなんだよ！ ホント、アンタから金借りる気なんてこれっぽっちもなかったんだ！ ましてやその金をだまし取るうなんて……」

「いつもこんなことを？」

「ま、まさか……っ！ トロい奴にだけだよ！ アンタのことはその、礼儀作法がきちんとなつてたからで」

「つまり、トロい相手はカモにしたと？」

アレンの声が低くなる。

バドラックは声を震わせながら、いや、と連呼した。

「ああ、いやいや！ えっと、そうだ！ 気の優しそうな奴にだけ、って言った方が効果的だったか！？」

「……………」

「だあつ！ 違う！ いまのは冗談だ、だからちょっと待ってくれえ！」

勘弁してくれよ、頼むよと続けるバドラックを見下して、アレンは静かに目を閉じる。

その間も懇願していると、アレンが顔を上げて、

「不思議な人だな、貴方は」

「へ？」

瞬くバドラックに、アレンはかすかに笑っている。

バドラックは蜘蛛の糸を掴んだように嬉しそうに一つ、大きく跳ねた。

「そそそっ！ なにごとも寛容なのが一番だぜ！ にーさんっ！
まま、仲良くしようや！」

豪快に笑いながらアレンの肩を叩く。

アレンは一つ、苦笑のような短い息を零すと、スツと瞳を鋭くした。

「とはいえ、貴方の行いは決して認められるものではない」

「へ？」

「元軍人として。一つ、拳で語り合う必要があるそうだ」

「ナニヲ？」

きよとんと瞬いたバドラックは、次の瞬間。据わった目をした金
髪蒼眼の青年を見据えて、ジーナの宿にまで響く悲鳴を、上げてい
た。

2 ヴィルノア編 病猫と怪我人

ジーナの宿に腰を据えて、一週間余りが経過した。

「今日も収穫なし、か」

アレンは溜息混じりに荷を置き、硬い椅子に腰かける。
ロジャーがトコトコと寄ってきて、ぽんとアレンの肩を叩いた。

「まだまだ諦めちゃダメじゃんよ？ 兄ちゃん」

「ああ。分かってる」

アレンは微笑しながら頷き、脇に置いた荷をほどいて、夕食のパンを手渡した。ロジャーの表情がほころんだ。丸いタヌキの尻尾が嬉しそうにふりふりと揺れ、サンキューな！ と言ってパンを受け取る。

ちょうど、ルシオも部屋に戻ってくるころだった。

一階からジーナにスープをもらったようで、器になみなみと注いだスープをこぼさないよう注意しながら、ルシオは慎重に丸テーブルに盆を置くと、安堵の息を吐いた。表情をほころばせて、アレンをふり仰ぐ。

「おかえりなさい。アレンさん」

「ただいま。ルシオ」

通信機が報せる時刻は20時。ロジャーとルシオには出歩かないよう、釘を刺している夜の時間帯だ。

三人で丸テーブルを囲んで食事を取ったあと、アレンはまた街に搜索へ行くつもりでいる。

ルシオが野菜スープを口にしながら尋ねてきた。

「アレンさん。この街にシルメリアは居ないんですか？」

「可能性としては、低いな」

アレンはスープを飲む手を止めて、言った。

ロジャーが首を傾げる。

「ちゃんと隅々まで捜したか？ 兄ちゃん。入れ違いになったらシヤレになんねえぜ」

「分かってる。だが、シルメリアはああ見えて目立つ容姿だ。街の人間に当たって行けば、そう遠くない内、情報が入ってくるハズなんだが」

「じゃあ、本当にヴィルノアには来てないんですね」

「多分な」

礼儀正しく食事の手を止めているアレンを見て、ルシオもパンとスープに齧りつくのをやめた。

ロジャーがもぐもぐとパンを咀嚼しながら、口を開く。

「ってことは、次はどこ行くんだ？ ジェラベルンとアルトリアには、シルメリア姉ちゃんの所在が分かったら連絡してくれ、ってクレア姉ちゃんやロウファ兄ちゃんたちに頼んだんだろ？」

「正確には警邏担当の蘇芳さんと、ジェイクリ ナスさんに頼んだ訳だが」

「細かいトコはいいじゃんよ！ 兄ちゃん！」

むつつりと口をへの字にして言い切るロジャーに、アレンは眉を下げて頷いた。

「まあ、行くとするなら、次はヴィルノア北東部にある村だな。コリアンドル、だったか……。幸いにしてクレルモンフェランなら、ファーン騎士団長がいるし、フレンスブルグ方面の搜索にしても、ロレンタ学園長ならば協力してくれると思う」

「ホントに大陸大搜索って感じですね。アレンさん」

ヴィルノアの小道具店に並んでいた大陸地図を思い出して、ルシオが眉を寄せる。徒歩の旅では、重労働になることは明白だった。

ロジャーがスプーンをふり上げる。

「ま！ 皆、協力してくれるんなら心強えな、兄ちゃん！ でも、それならさっさと皆に頼んどいた方がいいんじゃないかねえか？ シルメリア姉ちゃんが居なさそうなヴィルノアに、なんでまだ留まってるんだよ？」

「それは」

「それは？」

ロジャーとルシオが声を揃えて首を傾げる。

アレンはアルスイ・オーブが嵌まっていない右人差し指を握った。

「良く分からないんだが、この街からは嫌な感じがするんだ」

「嫌な感じ？ 不死者ですか？」

「そうじゃない。まだ、はっきりとは言えないんだ。街から感じる嫌な気配は、不死者のモノに似ているが、不死者とは言えそうにない」

「んあ??？」

「えっと……、どういうことですか？」

アレンは記憶を掘り起こすように、意識を集中するように視線を落とすと、

「強大な魔力を感じる……。いや、感じていたんだ。二日前まで。最初、その魔力はどこかの凄腕によるものだろうと思っていたんだが、ここ最近ひどく弱っている……」。

シルメリアは現在、俺と分離して行動しているわけだが、その前にアルスイ・オーブを持って行く余裕があったらろう？ あの石があればなにをするにせよ、彼女の役には立つハズだ。いざとなれば、石が護ってくれる。だが」

「ヴィルノアはそうじゃねえってんだな？ 兄ちゃん」

「……憶測だが。以前、アルスイ・オーブが言っていた。

ドラゴンオーブが地上から奪い取られた理由は、オーデインが至宝の力を集めていることと、地上界が不安定になれば、勇者の魂をエインフェリア得やすいためだからと。

もし俺が感じた強大な魔力が、オーデインの意図に引っかかるものであれば、この先　なんらかの厄介事が起こるハズだ。街を離れる前に、出来ればその正体を掴んでおきたい」

「シルメリアはどうします？　アイツ、一人でも大丈夫なんですか？」

「確証はないが、彼女は割合、慎重な人物だと思う。俺の体から抜け出たのは恐らく、彼女なりに“離脱可能”だと判断したからだ。

とは言え、なんでも一人で抱え込もうとする悪癖が、別の厄介な事態を引き起こさないと限らないんだが」

そこで長い溜息を吐くアレンに、ロジャーがスプーンをくわえながら、

「アルスイ・オーブがねえから、姉ちゃんがなににするかに関しちや、もうサツパリなんだな？　兄ちゃん」

軽く痛い所をついてくる。

アレンは、ぐ、と低く呻いた。

「しよ、食事に専念しよう……」

そう言いながら、スプーンを手にとって改めてスープを口にしようとしたとき、

……くしゅっ

んっ」

外から何者かのくしゃみが聞こえた。ついで、間延びした猫の鳴き声。

ロジャーが目を輝かせる。小動物好きの少年に、アレンは目で「食べてからにしろ」と言つて、食事を再開する。

すると、ロジャーが悲しそうに眉を下げながら仕方なしにガツガツとパンとスープを平らげ、その影で　こちらも小動物好きの少年、ルシオが、コソコソと夕飯を掻きこんでいた。

それに苦笑しながら、アレンも食事を続ける。

すべて平らげ、二人の少年が慌てて宿の窓辺に寄つて行くのを見届けたあと、アレンは食器を抱えて炊事場まで引つ込んでいった。

「野良猫か？　野良猫か？　アホネコ？」

「しっ！　黙れ！」

二人の少年は仲良く窓辺に並んで身を乗り出し、外を見る。

軒先に、明るい毛色の猫が座っていた。太った猫だ。もうかなり
の年寄りで、毛並みに艶がない。その猫はロジャーとルシオを見て、
くしゅっ、ともうくしゃみすると、こりこりと鼻の頭を掻いたあ
とに月下美人を植えた鉢の隙間をすりりと通つて見えなくなった。

「「あ……………」」

二人が残念そうに息をこぼす。

ルシオとロジャーは顔を見合わせると、部屋の扉を一瞥した。

アレンは食器洗いに行つたため、あと五分は帰つてこない。

「ちよつとくらいなら、いいじゃんよね？」

「ま、まあ……ちょっとくらいなら、な」

そう言い合いながら、二人仲良く頷き、玄関から出てはバレルので、窓から外に抜け出た。幸いにしてロジャーたちの部屋は、一階の尖った屋根が近い。そこに飛び乗ったあと、煉瓦に足をかけていけば、路面に下りられるのだ。

「おおーい、ネコネコ」

優しく、ルシオが暗がりに向かって声をかける。

遅れて出てきたロジャーが、にんまりと口端をつり上げながら、人差し指を立てた。

「チツチツチ。甘いぜ、アホネコ。猫を釣るならやっぱりコレじゃんよ」

「ん？ なんだよバカダヌ あ！ それ……っ」

ロジャーのぶかぶか手袋が握っていたのは、一欠けらのパン。それをこれ見よがしに見せつけながら、ロジャーは得意げに鼻を鳴らし、胸を逸らす。

「兄ちゃんの目を盗んで一つストックするくらい、オイラには造作もないことなんだぜ」

「……ホントにバレてねえのか？」

胡散臭そうに目を細めるルシオを置いて、ロジャーはひらひらとパンをふって

「ネコネコ〜！ おお〜い！」

声をひそめながらも、猫に向かって呼びかけた。街灯のない庶民区画では、月明かりだけが頼りである。

何度か声をかけてみるが、暗闇から返事は返ってこなかった。代わりに、安っぽい金属音がロジャーたちの背中で鳴った。

「！」

二人は顔を見合わせる。

「お、お……！」

たらたらと額から汗を流しながら、ロジャーは言い訳を高速で考える。

隣のルシオが、引きつった愛想笑いで宿の入り口を見た。

「こ、これは！ その……アレンさん！」

「探しモノは見つかったか？」

「いつ！」

静かに問われて、二人はびくりと背筋を伸ばした。アレンは宿の扉に鍵をかけたあと、二人の傍までやってくると、両腕を組んで二人を見下ろした。眉間に深い皺を刻んでいる。

彼は目を閉じた。

「言うことは？」

「うー、うー、ごめんなさいっ！」

ルシオが慌てて頭を下げる。それにロジャーも続いた。

「悪かったじゃんよお〜！ ちょっと猫の相手でもしてやりたかったんだよ〜！」

「ヴェルノアはフランスブルグに比べて治安が悪いんだ。猫一匹追うのに、外に出る許可は出せないな」

「うう……っ、兄ちゃん〜ん！」

泣き寝入るロジャーを見下ろし、アレンはため息を吐くと片膝をついた。ぽん、とロジャーの肩を叩く。

「言っただろう？ ここではサーフェリオと違って、いつでもどこでも自由気ままというわけにはいかない。俺が旅をする場所は、そういう所もあるんだと」

「はい。出発前に聞きました」

しゅんと頭を垂れて言うルシオに、アレンは頷く。視線をロジャー、ルシオに向けて

「ロジャー、ルシオ。俺だって、お前たちの腕があれば万が一、事件に巻き込まれても、後れをとるなんて思ってない。だが、自ら犯罪に関わらないよう注意することも、人の社会で生きて行く上では重要なんだ」

「けど、兄ちゃんはいっつも厄介事に関わっていくじゃねえか」

「それは、半分職業病だな。そういう人種と関わっても有益な情報を得られる手段を、叩き込まれている」

「つまり、兄ちゃんは軍で訓練したから関わってもいいのか？」

「まあな」

「じゃあ、オイラが情報を手に入れられるよう、修行したら関わっていいか？」

「駄目だ」

丸い黒瞳をキラキラと輝かせて問うロジャーに、アレンは首を横にふった。

ロジャーがむっつりと口を閉じた。

アレンは言う。

「ロジャー。お前は旅に出る前、なんと言って俺についてきた？」

「確か、“兄ちゃん一人だけじゃ寂しそうだから”」

「その前だ」

「え、えと……“オイラもいろんな世界が見たい”って」

俯きがちに言う。するとアレンは小さく頷いた。ちらりとルシオを見る。

ロジャーよりも聞き分け良く押し黙ったルシオは、黒猫の尻尾をしょんぼりと垂らしながら、小さく頷き返してきた。もちろん

覚えている、と言わんばかりに。

「なら、物事を一方向から見ただけでは駄目だ」

「んあ？」

首を傾げるロジャーとルシオに頷き、アレンは言う。

「世界には、さまざまな習慣や文化がある。サーフェリオでは許されていることが、このヴィルノアでは許されていない、けれども隣のジェラベルンなら許されている、とかな。そのルールを守りながら旅をしないで、どうやって世界を広げるんだ？ 異世界の景色や人、建物を見てみたいだけなら、写真や映像で充分だろう？」

「ルール……」

「そうだ。このヴィルノアでは女・子どもは夜に出歩いてはならない、というルールがある。それはここに住む人たちが、治安の悪い街で、女性や子どもに悲惨な目にあつて欲しくないと願っているからだ。防犯に対する意識が高い。部屋は必ず施錠するよう習慣づけられているし、路地裏や狭い道を通るのは避ける。

そういう土地ならではの工夫やルールを体験した方が、普段気付かなかつた点に気付くようになる。それは誰かを護るとき、必要になつてくる知識だ。

“世界を広げる” っていうのは、そういうことも含めてだろう？」

「むむむ……」

ロジャーはむっつりと押し黙ると、しばらく地面を見つめて、ぴよんつと跳ねた。

「しょうがねえなあ。じゃあ、オイラ。生粋のヴィルノア文化をマスターしてみせるぜっ！」

拳をふり上げるロジャーに、アレンは微笑う。

「ああ。その意気だ」

「ちょ、ちょっと待てよ！ バカダヌキ！ 抜け駆けすんな！」

それから三人はいつも通りワイワイ言いながら、宿に戻っていった。

……くしゅっ、

「！」

部屋の入り口で、ロジャーとルシオが目を見開いた。

先ほどまで夕食の食器を並べていた丸テーブル。そこにいま、丸めた毛布の中にうずくまる老猫がいた。猫は相変わらず、くしゃみをしては小さな鼻をコリコリと掻き、わずらわしそうに顔をしかめていた。

「に、兄ちゃんっ！」

猫に駆け寄ろうとしたロジャーとルシオを、アレンが止めた。不思議そうに見上げてくる二人に、アレンは言う。

「プロテクションをかけているから大丈夫だと思うが。一応、ここ

に居てくれ」

そう言って、彼は艶のない猫に近づくと、硬い椅子に腰かけた。なるほど、猫にプロテクトをかけているのは本当らしく、アレンが猫を撫でたとき、薄い光の膜が半透明のボールのように空間に浮かび上がった。

ロジャーとルシオが、期待でキラキラと輝いた目をアレンに向ける。

それを横目見、アレンは小さく苦笑して、言った。

「二人のために　　というわけじゃないんだが。食器を洗っているときにこの猫を見かけたんだ。それで、風邪を引いているようだったから」

「兄ちゃん、ナイスじゃんよお〜!!」

「アレンさん！　ありがとうー!」

二人はニコニコと笑いながら跳ね回り、言いつけ通り、宿の廊下で待っている。

アレンはそれに頷き、老猫に視線を落した。

老猫は背中を撫でられてもまったく警戒する素ぶりをみせず、うつらうつらと船を漕いではくしゃみをし、鼻を面倒くさそうに掻く。それを何度も繰り返した。

アレンは撫でる手を止めて、猫の両脇に手を差し入れると、むずかる老猫をあやししながら仰向けに寝かせ、ポケットからクオッドスキャナーを取り出して猫の腹に当てた。

細長いスキャナーの胴体部についたボタンを手早く指で叩きなが

ら、腹の数か所と右左の胸を診る。彼はスキャナーを脇に置くと、猫を抱きあげた。

くしゅっ、と老猫がまったくしゃみをした。アレンは気にせず、猫の眼球と鼻、喉頭を診、頷くと老猫の頭を撫でてやりながら、また毛布の上に下ろした。

丸テーブルに置かれたスキャナーが電子音を立て、半透明な立体モニターにさまざまな数値データを書きだしていく。それを見て、アレンはため息を吐いた。

「やっぱり猫風邪か……。厄介だな」

「厄介なのか？ 兄ちゃん」

「ああ」

頷くと、ルシオの顔色が見る見るうちに真っ青に変化した。

「そ、それじゃあ重体なんじゃ……!!」

「幸い、症状はそこまで進んでない。それでも、……そうだな。特にルシオは近づかないよう注意してくれ」

「は、はい!」

怖がるルシオを見て、ロジャーが眉を寄せた。

「なんだよ、アホネコ？ たかが風邪だろ？」

「ネコ族の亜人にとつちゃ、猫風邪は死活問題なんだよ！ 一度か

かるともう治らないって言われてんだ！ ちゃんとした薬もないし、治療法だつてまだ分かってない。特に子猫なんかかかると肺炎になって死んじゃうこともあるんだぞ！」

「えっ！？」

ドキリとしたようにロジャーが胸を押さえて一歩、後ずさる。アレンが納得したように頷いた。

「そうか。ルシオたちネコの亜人は、猫がかかる病気にも注意が必要なんだな」

「はい。だから、俺たちはあんまり人が多くいる所に行くって言われてます」

「そう言えばオイルも、シランドに行くとき“疥癬”^{カイセン}に気をつけるって言われたな。ちゃんとオイルたちみたいに風呂に入ってる奴ばかりなら大丈夫だけど、そうじゃない奴もいるからって」

「なるほど」

衛生面には気をつけてきたつもりであるが、アレンはその辺の事情も含めて自分にはまだ学ぶべきことが多いようだ、と結論付けた。席を立ち、宿のエントランス脇にある炊事場に手とスキャナーを洗いに行ってから、彼は上着を羽織る。

そして部屋を出る前、二人をふり返った。

「それじゃあ、俺は少し出てくるから」

「戸締りはしっかり！ じゃんね？ 兄ちゃん」

「頼む」

「いつてらっしゃい、アレンさん」

二人に見送られて、アレンは宿をあとにした。

「みんな、ごめん。あたしは行けそうもない……」

エイミは頭カブを垂れてつぶやいた。

石室の地下牢は、寒国ヴィルノアにふさわしい冷え込みの厳しさである。背中に貼りついた石壁が、まるでエイミを黄泉の国に引きずりこもうとするかのように、優しく肌を撫でてくる。

吊るされた両腕は、感覚がなくなつて久しい。

それでも運がよかつたのは、部屋に明かりがついていたことだ。明かりと言つても上等なものではなく、拷問用の炉である。井戸型の円形窪みに、製鉄途中の銑鉄が流れている。

通風孔は開けられていたが、十分な換気とは言い難かつた。井戸の中から零れる炉熱を感じながら、エイミが考えるのは、たった一つ。復讐のことだけだ。

昔、アルトリアに傭兵として滞在することがあった。まだクレルモンフェランとヴィルノアの国力が均衡していて、冷戦状態だったころだ。

エイミは仕事をこなすうちに、同じ冒険者のレミアや 그레이、カシエルたちと知り合った。

困難なクエストを、彼らとともにこなしていくことで、友情のよ

うなものが芽生えたのである。とりわけ、レミアは快活で、冒険者稼業をする仲間の中では最年少。寡黙なグレイに恋をし、エイミを姉のように慕って、相談事を持ちかけてくることも少なくなかったのである。

エイミにとっては、可愛い妹分だった。

それを殺した、グレイ。

どうあっても捕まえて、レミアの無念を晴らさねばならない。

そう思った。

グレイがレミアを殺したときの詳細は知らない。ただ、「レミアが殺された」という事実が、エイミにとっては重要だったのだ。

少なくとも、復讐の怒りに身を任せていれば、憎しみに捕えられなければ、現実の痛みにも苦しさにも耐えられる。そして時折、無性に虚しくなるのだ。

いくら気を張っていようと、この牢から抜け出すことはできない。

脱獄を諦めてから、どれくらいの月日が経ったのかも定かではなかった。

ふと、風が吹いた。

エイミは顔を上げ、牢の出入り口に繋がる階段を睨んだ。

「……くどい。何度聞かれても、答える気など、ない」

女豹を思わせる鋭い殺気が、闖入者を睨む。

牢の空気は、いつも滞っている。そのため、完全に部屋の中が見えなくとも、エイミは肌でその存在に気付いたのである。

階段に突っ立っているのは、蒼穹色の鎧を着た女だった。初めて見る顔である。

「……誰だ、貴様」

「私は魂を選定する者」

無愛想に、女が言う。途端、エイミは目を見開いて、ハツと胸に詰まった空気を吐き出した。

「今度は死神のお出ましか。消えな！ 残念だったな。あたしは死なない！」

「先ほど弱音を吐いていた人間の言葉とは思えないな。まあいい」

女はつぶやき終わると、エイミが瞬きしている間に消えた。

白昼夢を見たのかもしれない。

エイミは口の中で悪態をつく。弱気になっているのは、指摘されるまでもなく気づいていた。

ただ「戦乙女」という死の象徴を見て、胸の奥に、冷たいシリがゆっくりとくだっただっていくのを感じた。

「この俺としたことが……。やばいことになっちまったぜ」

バドラックは、心底、毒づいた。

あれから、バドラックはギルドから依頼を受けた冒険者を襲って、報酬を横取りしようとしたのだ。いつものように。

だが今回は勝手が違っていた。仕事を奪った矢先に、ギルドの手の者が待ち構えていたのだ。暗殺者が。

「くそつたれが！ 一体何者だ？」

相手がプロであることは間違いない。だが、殺しにくる敵のことは、それ以上分からなかった。顔を見れば知り合いかもしれないが、とかく応戦しようにも情報が足りない。バドラックは興奮で荒れる呼吸を宥めながら、油断なく左右を見渡す。

夜闇に沈んだヴィルノアの街並。勤勉なヴィルノア人に相応しく、機械部品のように複雑で精緻な街だ。堅牢さを見る者に感じさせ、クレルモンフェランの華麗さとは対になっている。

障害物の多い裏通りに逃げ込んだバドラックは、駆ける度に石畳がじゃりじゃりと鳴るのを苛立たしげに聞いていた。

それでも、この道を行く。背中に霊が貼りついたように、常に他人の視線を感じた。恐らく、近くに潜んでいる。どこからバドラックを狙っている。

それでも、相手の場所が割り出せない。相当の熟練者だ。バドラックは足音を消す作業だけでも苦労しているのに、追手はまったくの無音。

どこから狙われているのか見当すらつかなかった。

（くそつ！ 狙撃か？）

敢えて、外れたことを考えた。

己の得物、ボーガンを右手に、バドラックは建物の屋上、窓を確認する。

ヴィルノアは大陸一、戦争特需で栄えているが、フレンスブルグのような街灯はなかった。

この時代、照明器具は貴重なのだ。

大陸でもフレンスブルグを除けば、昔の名残があるアルトリアにしか存在しない。しかし、アルトリアの場合は国力の低下に伴って、昨今、無灯火でいることが増えているのだった。

そういう事情で、当然、このような細道に、周りを照らすような代物はない。また、障害物が多い裏通りでの狙撃は、難度が異常に高い。恐らく、並みの暗殺者なら昼間でもこの場所を選ばないだろう。

ならばやはり、接近戦だ。おそらくナイフで、敵はバドラックに切りつけてくるはずである。

バドラックの目は、月光だけを頼りに揺れていた。

「乱れているようね、バドラックさん」

どこからか、声が出た。

バドラックは鋭敏になった感覚を研ぎ澄ませる。この路地は建物が密集しており、高架橋もあって音がこもりやすい。

「そこか！」

これが、自らの足音を消すことをも犠牲にして張ったバドラックの罠だった。

敵が接近してくれば、すぐにその位置を察知できる。そのためバドラックは自分の居場所がバレる危険を冒したのだ。

まさに、一か八かの大勝負である。

追手はバドラックの背後。そう当たりをつけ、ポーガンを発射した。が、次の瞬間にはバドラックの頭に、引き攣れるような熱い痛みが走った。

「ぐ……、あ……っ」

思わず顔を覆う。わけがわからない。矢が空を切り、壁に当たって硬い音を立てた。

舌打った。

絶望と怒りを込めて、バドラックは顔を歪めた。

「貴方はやりすぎたのよ」

冷めた声がする。女だ。薄く開いたバドラックの視界に、白い貌の女が、ナイフを携えて立っている。

高架橋から飛び降り、バドラックの額を割った。女は確かな手ごたえを感じて、唇を引きつらせている。

バドラックは毒づいて踵を返し、駆けた。血が垂れて目に入る。

どれだけ手で押さえても、出血が止まらない。血で汚された視界が閉じていった。

「くっ、畜生っ！」

濁った声に嘆きが混じった。

逃げた。

女からできるだけ早く、遠く、離れるために。

こんなの、つまんねえ……つまんねえぞ！

どこをどう走るかなど考えない。とにかく前へ、足の動くかぎり進んだ。前へ、前へ前へ。

「……諦めた、のか……？」

そう思ったのは、悪魔のような高架橋がようやく視界から外れたころだった。バドラックが正常な状態ならば、宿まであと五分程度の道のりだと把握できただろう。

霞む視界。

バドラックの五感が、そろそろ休もうと鈍り始めてくる。それでは死んでしまうと自分に言い聞かせても、彼の脳は休もうと囁き続けた。

「こんなことになるなら、さっさと出ていきやあよかったぜ……」

バドラックは道にへたりこんで、長い息を吐いた。そうすると体に溜めていた力まで抜けるようで、顔を歪める。体が重い。脳が訴えるように少し休もうかとも思ったが、追手がとどめを刺しにくるという緊張感から、彼は足を引きずってでもどこかに移動するべきだと考え直した。

腰を上げる。それだけで眩暈がした。それに寒い。どうしようもなく、寒い。

「死にたくねえ、死にたくねえよ……。痛えよ……。だれか、助けてくれよ……」

そのとき、風を感じた。

ふり返ったバドラックは、人影が見える前に右手のポーガンを発射していた。

三発。弦がふるえ、矢が空を切る。

直後、バドラックは大きく目を見開いた。

震える唇が、意味のない音を　息を吐く。夜にそびえる塔のごとく人影が立っている。顔半分は月光の影になっていて見えない。

薄い光に照らされた髪は金。切れ長の目に収まる瞳は、冬の湖面のように冷えた、蒼色をしていた。

男。

それも、同じ宿に泊まっている青年だ。だがバドラックの驚愕は、そこに居た青年が顔見知りだったからではない。バドラックは茫然と、彼の手を見据えていた。

(素手で、矢を受けたのか……!?)

あまりの驚きに視界が晴れたような気さえした。信じられない。バドラックとの距離は二メートルとて離れていないのだ。その至近距離で放たれた矢を、二本躲し、一本掴み取るなど誰が出来ようか？まるで獰猛な肉食獣に、絶対に逃げられない袋小路に詰められたような気がした。

「そのナイフ……」

と、アレンが言った。細められた視線は、夜でも暗視スコープのごとく正確に、周りのものを見ている。

彼が話しかけたのは、バドラックではなかった。

いつの間にかバドラックの首を掻き切らんと背後に迫った、女暗殺者の方だ。

「クレルモンフェランでも見たな。お前は、王城から機密文書を奪った奴らの仲間か？」

女は呻くだけだ。

(なぜ逃げねえ……?)

不思議に思つてバドラックが目を凝らすと、足許を氷漬けにされた女がもがいているのが見えた。

アレンは表情をぴたりとも動かさずに女に近づいていく。バドラックが放った矢が、彼の手の中で鈍く光った。

「それとジエラベルンだ。城に火を放った奴がいるだろう？ お前たち、ギルドの中に」

「なんのことかしら……？」

女は震える声で言った。恐らく、顔が引きつっている。

だがそんな二人のやりとりを眺める余裕もなく、バドラックは全身から力が抜けるのを感じた。眠気。それに負けて薄く目を閉じたとき、ゴツという鈍い感触が頬を走った。失血で倒れたことには、彼自身は気づいていない。

「バドラックさん！」

アレンが驚いてふり返る。そのとき、女は煙玉を出して、闇夜に逃げ去った。石畳の上に、点々と血痕が残る。足を負傷してでも、捕らえられることを拒んだのだ、彼女は。追わねば、と一歩踏み出したところで、アレンは背後をふり返る。そこに倒れているバドラック。思わず、歯噛みした。

アルスイ・オーブがない今、ギルドの情報を掴むのは並大抵のことではない。だがいまは、人命救助が先だ。そう決断した。

「バドラックさん、気を確かに！」

駆け寄りながら、アレンは紋章術を編み上げる。上級回復紋章術、フェアリーヒール。この技をもって手遅れになることは、九割九分ない。

事実、青い光がバドラックの額に降ると、深い裂傷は、もう痕が見えないほど回復していた。

「バドラックさん」

軽く揺すってみたが、返事はなかった。その代わりに呼吸は安定しており、バドラックは少し、眠りについたようだ。

アレンは息を一つ吐くと、バドラックを担いで宿へと戻った。

3 ヴィルノア編 知識欲ととらわれ人

「竜宝玉？」

アレンは不思議そうに言った。

バドラックが暗殺者に襲われてから、一夜明けたときのことである。

まだ早朝と言ってもいい時間帯に、アレンは、バドラックの部屋を訪れていた。

一方のバドラックは、客人をもてなすわけでもなく、床に四つん這いになって櫛のベッド下をまさぐっている。身の周りの物をリュックに詰めているのだ。

「なんでも、ヴィルノアの軍師様が探してるらしいぜ。その筋じゃ名の知れた魔導師だから、街でも噂になってる」

「それで、その魔導師が女を囲っている？」

「ああ、そうだ。俺がギルドからぶんどった依頼も、地下牢の女をかっさらってこい、って話だったからな。報酬が破格だったもんで、つい欲が出ちまった」

腕を最大限に伸ばして、水筒をリュックに詰める。と、右の棚から雪崩が起きた。ベッド下から抜け出たときに、肘が当たったのだ。じゃらじゃらと騒がしい音を立てて散らばったのは、ジャム瓶の蓋だ。顔をしかめて舌打ちするバドラックの頭上で、アレンが剥き終わった梨を小皿に載せてテーブルに置いた。

不思議そうに見下ろしてくる。

「フレンスブルグの画家が描いたんだよ。一応、金になるんだぜ」

色とりどりのジャム瓶の蓋を拾いながら、バドラックはニツと白い歯を見せた。蓋は路銀が心細いときに役立つ。　そういう換金システムがあることを、一般的にまだ知られていない利点もあった。すべて拾い終え、バドラックはリュックの紐を固く結び始めた。

「それで、体調はどうですか？」

「腰は痛えし、体はドライし、肩凝った。でもよ、そう言ってもらええだろ？　今はちよつとでも急いで、この街からオサラバしねえと」

結び終え、バドラックは棚に置いていたシガレットケースから一本、煙草を取り出した。

横目にアレンを見る。

アレンは少し考え込むような表情だった。

「そうですね。適切な判断だと思います」

「お前さんはどうすんだ？　面割れしちまったのは同じだろ」

「私の場合は、顔が広まるのはむしろ好都合ですから」

バドラックは思わず苦笑した。ギルドに狙われているというのに、大した自信である。

バドラックは摘まんだ煙草を啜えて、目一杯吸いこんでから、ゆっくりと鼻から煙を吐き出した。

「よっぼどこ執心なんだな。その女。そんなに良かったのか？」

以前、見せられた肖像画　とバドラックは思っているが、正確にはプリントアウトしたシルメリアの写真　を思い出して、バドラックは下品に嗤い立てた。

「いえ。むしろ性格は噛み合わないことが多かったかと」

「なら、アッチがよかったんだろ」

卑猥に指を動かすバドラックに、アレンは一瞬固まったあと、眉間に皺を刻んで溜息を吐いた。

いやに力の籠った溜め息である。

バドラックはますます首をひねった。

「なんだそりゃ？　お前、惚れてもねえのに捜し回ってんのか？」

「まあ、乗りかかった船、というやつです」

「はあ〜ん」

煙草を離し、テーブルに置かれた梨を頬張る。

以前なら、他人の厚意など毛ほども信じなかった。だが、この青年のことは少し信じてもいい気になっている。貴族然とした食えない男だが、バドラックとは明らかに毛色が異なるためだ。

恐らくアレンは、面倒事に首を突っ込まずにおれない男だ。バドラックがずっと一匹狼でいるように、不器用なまでに一つの生き方しかない。それが誇りなのである。

「つーことは、しばらくヴィルノアに残るのか」

「ええ。ついでに、地下牢の人物にも会ってみようかと」

「はあ!?!」

思わず素っ頓狂な声を上げた。

「なんだってそんな面倒事に首突っ込むんだよ」

ギルドに狙われるだけでも厳しいというのに、この上、ヴィルノアを敵に回すとアレンは言っているのだ。

命知らずというより、頭のねじが飛んでいるとしか言いようがない。

あきれ返っているバドラックに、アレンは苦笑した。

「竜宝玉に興味があるんです」

「はああ……。お前さん、変わった奴だと思ってたが、本当にわけ分かんねえな。まあ、俺あ止めねえけどよ。せいぜいがんばれや」

「ええ。バドラックさんも、どうかお元気で」

そう言って、アレンはクリスタル状の奇妙なアクセサリーを渡してきた。

受け取って、バドラックは首を捻る。見たこともない姿形である。ウサギに似ているが、二足歩行で、手が短い動物の置物。

子どもが好きそうな、可愛らしいデザインだった。

「なんだこりゃ?」

「身代わり人形ですよ。奇襲に遭ったとき、守ってくれます」

バドラックは目を丸めた。

「そいつを俺に？」

「貴方はきつと、状況が違えば悪人にはならなかったと思いますから」

「……………」

バドラックはぱちぱちと瞬いて、意味を反芻した。

本当に、この男だけは分からない。

むず痒くなつて、顔をゆがめた。

少量の金を恵むことは拒否したくせに、こんな高価な品物を、無償で譲ってくる。

他人に悪態つかれることに慣れているバドラックは、いたたまれなくなつて頭を掻いた。

アレンが苦笑する。

バドラックは踵を返すと、リバースドールを腰のポーチに突っ込んで、リュックを背負った。

「じゃあ、まあ　またな！」

「ええ」

短い挨拶を終えて、バドラックは宿を出る。

柄にもなく、最後に女将ジーナの顔でも見ようかと思つたが、結局、そのまま街の西門へと急いだ。

陽はまだ東にある。西門なら逆光になるため、待ち伏せされることは、まずないのだ。

一匹狼を信条とする男はまた、あてのない旅を始めた。

(にしても、霊獣たつてどうするんだ？ ヴァルキリー)

昼下がり。レナスは柑子色のスカートに、青いコートを羽織った村娘姿で、庶民住宅街を歩いていた。

フレイアの霊獣が、このヴィルノアに紛れ込んだ可能性が高いというのだ。

胸の裡から問いかけてきたアリユーズに、答えた。

(霊獣の神気は、フレイアに似るモノ。それを辿れば捜しだすのは、そう難しいことではない)

(じゃが、その霊獣とやら。ヴァルキリーも見たことがないのである？)

(大丈夫なのか？ あんなのに任せて)

ルシオに「あんなの」呼ばわりされたのは、美の女神、フレイアである。

フレイアは初めて下界に留まることとなり、浮足立っていた。金の刺繍が入ったレザーコート^はをスマートに着こなし、白のロングスカートを穿いている。レナスの村娘姿を参考に、こちらでの服装を決めたのである。

「メリル姉さまっ！ 見て、この首飾り」

フレイアは、レナスが何度諫めても、はしやぎまわるのをやめない。ふらりと通りに姿を消えては、騒ぎを連れて戻ってくる。

たとえばこの場合、フレイアは首に、金銀宝石のついた細い首飾りをぶらさげている。透明感のあるフレイアの銚色の髪と、白い肌に、ルビーがよく似合う。

だが、フレイアは「人間に合わせる」ことを知らない。下界の通貨を払っていないのだ。いくら装飾具がフレイアのために作られたようだとしても、そんな道理は許されない。

すぐに、表通りから、口髭をたくわえた男が駆けてきた。

「お客さん、困るよ！ 店の物を勝手に持ってっちゃ！」

「店の物？」

フレイアは美の神と称せられるだけあって、首を傾げるその仕草にも、艶がある。少女のあどけなさと、成熟した女の濃密な色香を持つ女神、それがフレイアだ。美しさにあてられた宝石店の主が、思わず生唾を呑みこんだ。

レナスが一步、前に出る。

「マルデル。人の迷惑になるようなことはいけないわ。そちらの紳士に返しなさい」

「姉さま。ちょっと待って。ねえ、貴方。私が持つと、迷惑なの？」

「マルデル」

“マルデル”というのは、フレイアが地上で活動するために作っ

た仮名である。

蠱惑的に微笑むフレイアは、そもそも問題の主旨を理解していない。レナスが諫めるも、

「ねえ？」

甘ったるくもう一度、店主を見る。店主は生娘のように耳まで赤くしていた。フレイアの表情はあくまで幼いのに、しなが恐ろしいほど艶めかしい。店主の禿げ上がった額に、汗が浮く。

店主は鼻の下を伸ばしながら、「困ったなあ」とぼやいたあと、フレイアに耳打ちして、紙を握りこませた。

フレイアは嬉しそうに笑った。

「ありがとう」

丸め込んでしまったのである。

レナスは右手で顔を覆った。

フレイアは、腹が減れば露店の物を手に取り、そのまま立ち去ってしまう。それで叱られるかと思えば、このように相手を色香で惑わせて、貢がせるのだ。

下界での滞在時間が長くなれば、それだけ男を多く抱えることになるのである。

それに、問題はそれだけではない。

「おっちゃん！ ミルク四つと、パン三切れだ！」

元気のいい子どもの声が聞こえて、レナスは街の広場を見た。数々の露店が、広場の形に沿うように円形に並んでいる。その一角で、パンを売っている小太りな男が、ヘルメットを被った少年に、ニコリと笑った。

「あいよ」

銀貨4枚　少年から40オースを受け取って、店主は愛想よくパンとミルクを渡した。

前知識がなければ、あの少年の背中に見える毛玉はなんだろう、と思うところだ。レナスにとっては、もはや馴染み深い。

ふりふりと揺れる狸尾の隣で、バンダナをした細身の少年が、手許のメモを見た。

「えつと……あとはキャベツとにんじん、たまねぎ、ローリエ、それから卵だな」

「ちよつ!?　なんだよ、それ!　肉がねえじゃんかあつ!

ぐぬぬ、兄ちゃんめつ。　おい、アホネコ!　なにかつ、なにか肉つばいもんを探すぞ!」

「馬鹿言つな!　路銀だつてそんなに多くねえんだ。無駄遣いしたらアレンさんが困るだろ!」

「けど、兄ちゃんはこの間、肉食わせてくれるって約束したぜ!　オイラ、ちゃんと聞いたぞ!　メラ間違いなえぜ!」

「だ・か・ら、それは昨日の晩、食っただろ!　つーか、猫拾って食い扶持増えてんだから、多少の節約はしょうがねえだろうが」

「ハツ!?」

胸を押さえて、一步退くロジャー!。

ルシオは深い息を吐きながら、首を横に振った。

「まったく。これだからバカダヌキは」

「ぐ、ぐぬぬ……」

ヴィルノアの広場は、中心街とは反対の 庶民住宅街を抜けた先にある。

ここでは露店が軒を連ね、日用品のすべてが揃うようになってい。とは言っても、毎日露店が開かれているわけではなく、三日に一度のペースだ。

そのため、店が出ている日中は、人通りが多く、混雑している。その中でも、相変わらず元気な二人の口論は、否が応にもレナスの耳に入ってきた。

（つくづく、よく会うな）

（まったくだ）

レナスの裡で、アリュウゼとルシオが言い合う。
フレイアがぱちぱちと瞬いた。

「メリル姉さま、あれって……」

ロジャーたちを指して、フレイアは物言いたげな表情である。レナスは黙って頷いた。

途端に、少女神の口許に笑みが浮かんだ。レナスが不吉を感じて手を伸ばしたとき、フレイアは、軽い足取りでロジャーに駆け寄っていた。

「ねえ、あなたたち」

「んあ？」

「ん？」

ロジャーとルシオがふり返る。

フレイアは満面に笑みをのせて同じ目線になるよう、その場にしゃがみこんだ。

「街の人？」

「えっ……」

絶句するルシオの隣で、ロジャーも面を食らったようにぽかんと口を開けていた。茫然と、フレイアと、その後ろについてくるレナスを見ている。

ルシオが眉を顰めながらも言った。

「いや。俺たちは旅人だけだ」

「ここに来て長いの？」

「まだ一週間くらいじゃんよ」

「まだ？　ここでなにかやる目的があるの？」

「実は兄ちゃんが」

言いかけたところで、隣のルシオが強引にロジャーの口を手で覆い隠した。もごもご言ってふり返るロジャーに、ルシオが、しっ、

と言い聞かせる。

「どうしたの？」

「そういう姉ちゃんは、なんだって俺たちに声かけてきたんだ」

つつけんどんな物言いである。ロジャーが眉を寄せて窘めるも、ルシオは困惑した表情で「うるせ」と小さく言うだけで聞き入れない。

「実はね。私、ペットを探してるの」

「ペット？」

「……えっとね、毛並みは茶色と白の縞々シマシマで、目の色は緑なの。いつも大人しいんだけど、お腹が空いてると間延びした声で鳴くこともあるわ」

ルシオとロジャーは互いの顔を見合わせた。

「も、もしかしてそいつって、かなり年寄とか？」

「もちろん」

「で、も、もも、もしかして　こんくらいのやつだったりすんのか？」

ロジャーは手幅で三十センチくらいを示した。

「そういうときもあるわ」

「そついつとき？」

「大きさは自由に換えられるの。だって霊じゅ」

「実は、私たちは魔導師なの。とくにこの子は召喚が得意なのだけ
ど、あるとき召喚獣を逃がしてしまつて。それで、私たち姉妹
は、逃げた召喚獣を追う旅をしているわ」

横合いから、レナスが流暢に助け舟を出す。と言つても、半分以
上が真実である。考えるまでもなかつた。

ルシオとロジャーが、レナスを見てきよとんと瞬いたあと、再び
互いを見合わせて、ほつと溜息を吐いた。

いつもの戦乙女の顔ではなく、良き姉の穏やかな表情が、二人の
警戒心を和らげるのに一躍買ったのである。

「それなら、俺たちに心当たりがあるぜ」

「ちよつと前に、そつちの姉ちゃんが言うやつと似た猫を捕まえた
んだ」

「猫？」

首を傾げるフレリアに、レナスは訊いた。

「違っていそうなの？ マルデル」

「……わからないわ。もしかしたら、姿を変えてることもあるかも
しれないし」

「なら、いつペンオイラたちの家に来るじゃんよ」

「猫風邪引いてるから、あんまり近寄っちゃダメだけどな」

ロジャーとルシオがそう言って、レナスたちをジーナの宿へと招き入れた。

「ガノツサ様の従属の呪でさえ効果が無いとは」

番兵は、酷く驚いている様子だった。

二人の番兵を従えて、エイミの許にやってきたのは、顔に鋭い皺を刻んだ老人だ。白髪を後ろに撫でつけ、赤いスケイルメイルの上に、褐色のマントを羽織っている。

腰の高さの黒杖は、一見すると剣にも見え、

老人の年齢的な衰えを感じさせない。

ヴィルノア軍師、ガノツサ。

“原初の秘法”と呼ばれる古代の製鉄技術を蘇らせた、稀代の天才である。

「竜の血脈は呪の強い耐性があると聞いたことがある。だがこれほどとはな」

ガノツサは口髭の下でパイプを噛みながら、唸った。

「竜宝玉なんて……。あんなものは民間伝承のありもしない嘘っぱちだ！」

「お前はそれを確かめたことはあるのか？ 真実の探求というもの、例え難い快樂の一つだと思わぬかね？」

口角をつり上げて、ガノツサが嗤う。

番兵が鉄棒を持ってき、牢に設置してある井戸の炉に当てた。先端が赤く染まっっていく。

番兵はそれを鉄鋏で掴むと、赤々とした鉄の塊をエイミへと向けた。

いつもの拷問である。

エイミは固く目を閉じ、齒を食いしばる。

「さつさと知っていることを吐いた方が身のためだぞ」

ガノツサの声。

そのとき、風が、エイミの頬に触れた。

顔を上げる前に、兵士のくぐもった声が聞こえる。続いて固い音、鎧が石床にぶつかる、強烈な音だった。

エイミの前に、男が降り立った。

「貴様っ！ 何者だ！」

ガノツサが鋭く叫ぶ。空気が震え、エイミでさえ一瞬尻ごむ。

男の左右に、番兵と、鉄棒が転がっていた。いまの一瞬で倒したのだ。

「竜宝玉について、探っているらしいな」

男が、静かに問いかけた。

ガノツサが眉を曲げて、息を呑む。すると男は指を弾いて光を生

み出し、

「ならば、この女を見たことがあるか？」

「なに？」

なにかを、ガノツサに見せた。エイミは目をつむる。薄く目を開いて、また閉じる。それを何度か繰り返して、ようやく目を開けていられるようになった。

男は驚いたことに丸腰だった。剣や弓、杖すら持たない戦士など珍しい。それに服装も、鎧と言うよりは普段着である。

エイミは面を食らって、床に倒れた番兵と、男　正確には青年を見比べた。

「貴様、いったい何を知っている」

ガノツサの、猛禽類を思わせる鋭い視線。

青年はその反応を見て、構えを解いた。

「外れか」

ぼつりとつぶやいて、指を鳴らす。すると、エイミの両手首を覆う枷が外れ、彼女の身体が石床に向かってくずおれた。

寸前で、力強い両腕に抱き留められる。

茫然とエイミが見上げると、青年はガノツサを凜と見据えていた。

「逃すかつ！」

ガノツサが鋭く杖を突きだした。方陣がガノツサの足許に浮かび、ファイア・ランス 焰熱の槍が三本、猛烈に風を切って飛びかかってくる。

同時、青年の掌が鋭く光って、弾けた。

閃光　とエイミが認識したとき、焰熱の槍が、まったく同じ軌道を描いてガノツサに翻っている。

「反射魔術だと!？」

ガノツサが驚いた。それほど自然で、素早い詠唱だったのである。ガノツサは杖を横たえ、魔力障壁でこれを防ぐ。

爆風が巻き上がった。空気が震え、肌にはりつく。まるで蒸し風呂の中で地震に遇ったかのようなのである。エイミは息苦しくなって奥歯を噛みしめた。

青年はエイミを左腕に抱えると、投球するように右腕を振りかぶった。

「ブラスト！」

叩きつけるように振り下ろす。

途端、人の頭大の魔力球が、ガノツサに向かって疾走する。ガノツサは、さらに分厚い魔力障壁を展開　する寸前で、老人とは思えない機敏な動きで、頸をひねった。

わずか一寸横を、白い魔力球が名残惜しげに風を引きちぎって過ぎていく。

轟音。

部屋が爆発したと思えるほど、激しい轟音がエイミの耳を引っついた。

風にあおられ、エイミは目を閉じる。と。けたたましい固い音を立てて、なにかが床に激突した。それが、地下牢の天井に吊っていた鉄籠が、半ばから鉛細工のように溶けて千切れ、地面に落ちた音だ、などとエイミが知るはずもない。

さらに聞こえてきたのは、猛烈に風を切る焰の音と、不思議な甲

高い音。 魔術方陣の発動音だった。

テレポート
転移魔法が発動したとき、ガノツサは煙を掻き分けてアレンを睨み据えた。

「転移魔法だと!?」
ロストミスティック
失伝魔法を、なぜ貴様が!」

「一目で失伝魔法と見抜くとは。情報通り、危険な男のようだ」
ロストミスティック
アレンは静かにつぶやき、蒼穹の瞳を鋭く細めた。

エイミの気がつくのと、音も、風も、静まり返っていた。頬を撫でてくるのは、暖かな春の風だ。降り注ぐ光に、エイミは薄目を開けながら辺りを見回す。
外だった。

「い、ったい……」

「そのままです」

青年に言われ、エイミは思わず口を閉じた。よく見ると、自分よりも四、五歳若い。特別美しいわけではないが、それなりに整っていて親しみやすい顔つきだ。「ヒーリング」と彼が唱えると、エイミの身体に青い光の玉が、雪のように降ってきた。

「あ……」

光の玉が身体に触れると、いままでの鬱積した疲れや痛みが和ら

いでいく。

狐につままれたようにエイミが眼を丸くしている間に、青年はエイミをゆっくりと地面に降ろした。

「歩けますか？」

「あ、ああ。それで、お前はいつたい？」

頷いて、立ち上がる途中で、足が絡まった。態勢を崩したエイミを、青年が肩を持って支える。

「悪い」

謝ると、青年は「いえ」と言つてエイミの足許を見下ろした。

エイミがもう一度、下肢に力を込める。今度はうまく立つて、立っていられた。周りを見渡す。

ヴィルノア市街だ。それも庶民が住む区画で、通りの左右に、二階建ての住宅がぎゅうぎゅう詰めに並んでいる。

歩き出そうとして、またよろけた。身体のバランスが悪い。ずっと牢で両腕を吊られていたため、脚の筋肉が弱っているのだ。

「こちらへ」

口の中で毒づいていると、青年に手を引かれた。軒先に背の高い植物を植えた、宿に向かって歩いていく。

詳しい話は中です、と言つ青年に、エイミはいくぶん警戒しながらも、頷いた。やはり、彼が自分を助けにきたのには、理由があるらしいからだ。

そのときだった。

「に、にににに、兄ちゃん……っ！」

いま、入ろうとしていた宿から、大きなヘルメットを被った少年が飛び出してきた。

こちらを見上げて、目を丸くしている。栗色の髪と瞳をした、七八歳くらいの少年で、丸々とした頬を、思わず撫でたくなるような愛嬌がある。

「ロジャー、悪いがコップ一杯、水を入れてくれ。それからルシオと協力して寝具の準備を」

青年は、ロジャーにそう言つと、こちらを振り返つて

「体が動くようなら風呂の用意をしますが、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。……ありがとう」

尻込みながら、風呂を頼んだ。流れ者としての経験が、あまり青年を信用すべきでないと告げてくる。しかし、体中にフケや垢が溜まっていて、自分の悪臭すら嗅ぎ取ることが難しい。こんな状況はいくらエイミが他の女よりも無骨に生きているからと言つて、許せるものではなかった。

エイミを見上げているロジャーが、ふと、宿の中に走つて行つた。

「に、兄ちゃんがまた、綺麗な姉ちゃんを連れ込んで来たぞー！」

「人聞きの悪いことを言うなっ！　と言つか、どこで覚えたんだ、そんな言葉っ！」

目を白黒させながら言う青年を、エイミが、そういうことか、と

納得して白い目で見てみると、青年は、はた、と瞬いて、慌てて首を振った。

「いえ。他意はなく」

「怪しい言い方だな」

「ありません！」

力強く、言い切られた。青年は拳を握り、頑固そうに口を真一文字に閉じている。そこまで強く否定されると、逆にエイミの方が、女としての立場がないのだが、生真面目そうな青年は、そんな機微などどこ吹く風であった。

のちに、ヴィルノア文化をマスターするため、ロジャーがバドラツクからあれこれ教わったと知っていれば、バドラツクとの別れもあれほど穏やかなものにはならなかっただろう。と、アレンは、エイミに語っていた。

4 ヴィルノア編 甘い罠

なぜか、正座だった。

ジーナの宿の一階、ロビーには、帳場とキッチンが備え付けてある。普段は土足で歩き回る床の上で、アレンは両手を膝の上に据え、背筋をぴんと伸ばしていた。

窓にかかる月下美人が、昼の陽射しに柔らかな影を落す。

「ジーナさん。これはいつたい……」

「アタシはアンタを見損なつたよ、アレン！ アンタはいまどき珍しい、筋の通つた良い子だと思つてたのに……！」

「いえ。ですから、あれは」

「娘さん三人も連れ込んで、なにか言い訳でもあんのかい」

「誤解です！ 旅の連れは、あくまでロジャーとルシオで」

「言い訳はよしな！ まつたく！ アンタが探してる娘さんも、さぞかし無念だろうねえ。自分の恋人が、知らない所でほかの女にうつつを抜かしてるだなんて」

「ですから！ あれは恋人ではありません！」

「だつたらなんで、長旅までしてあの娘さんを探してんのさ？」

恰幅のいいジーナに上から見下ろされて、アレンは思わず尻ごんだ。母親に叱られた経験があまりないので、年配の女性に真つ向か

ら説教されると、どうすればいいのかわからず、たじろいでしまうのである。

「そ、それは……。乗りかかった船というものでして」

「乗りかかった船え〜？　どんな船だい」

「それは。その、相手にも事情がありますので」

「どんな船だい」

ずい、とジーナが身を乗り出した。丸々とした手が、握られる。見た目よりも大きく感じられる拳だ。他人に殴られることなど慣れ切っているアレンでも、『女将の拳骨』が目の前にあると逆らい難い、異様な圧迫感を覚えるのである。

「ハッ！　私が大事にしている刀を取り返すために、協力してもらっているのです！」

平伏せんばかりの勢いで、肚を括ってはつきり答える。

ジーナの顔が、満足そうにほころんだ。

「なるほどねえ。それじゃ、アンタが連れ込んで来た娘さんたちは？」

「いや、連れ込む……。なんでもありません」

深々と一礼し、話を続けた。

「エイミさんにつきましては己の為したこと、順を追って説明でき

ますが、他の二人については、私も初めて見た顔でして

「初めて見た顔が、いきなりアンタに抱きつくのかい？」

「私も、計り兼ねています」

アレンが心底、不思議そうに首をひねった。ジーナは難しい顔ながらも二、三度頷くと、背筋を伸ばす。

「なるほどねえ。それじゃあ、話を変えるけど、あのエイミって娘、貧民か奴隷か、なにかなのかい？ アンタに言われて風呂に入れてやったけどさ。えらくみずばらしいじゃないか」

「ある情報を引き出すために、長い間、男に拘束されていたようです」

こう言うと、ジーナの顔がサツと変化した。エイミを「貧民」と見ていたときは蔑視が色濃く滲んでいたのに、いまは怒りで顔が赤い。

「まったく、この街の男は、ホントにろくなことをしないね！
つまりアンタは、あの娘を助けてやったんだね？」

「いくつか偶然が重なりまして、幸いながら。しかし、彼らが収集しようとした情報については、伏せさせていただきたく」

「分かってるよ。ギルド絡みとあれば、ろくでもないことはオバサンにも分かるからね。」

「アンタ、よくやったよ」

ジーナの穏やかな声が降ってくる、アレンの頭に、ぼん、と小さな重みがのった。一瞬、なにが起きたのか分からず、視線を上げると、福々としたジーナの手が、アレンの頭を撫でている。

思わず目を丸くした。他人に感謝されることはしばしばあっても、他人に褒められることは、あまりないのである。昔の上官と亡き母を除けば、アレンを褒める相手は皆無と言っていい。

「それで、しょうか……」

思わぬ体験に気恥ずかしくなってアレンが俯くと、ジーナが豪快に肩を叩いてきた。

「なに言っただよ！ アンタはあの娘さんの人生を変えたんだよ？ もっと、しゃんとしな」

「はい」

自然と、アレンの顔がほころんだ。――
そのとき、二階から足音が近づいてきた。ふり返ると、さきほど会ったばかりの件の美女の一人、マルデルが白いロングスカートをひるがえして駆けてくるところだった。彼女は無垢な笑顔をその美貌に乗せて、アレンの腕を取る。

「ねえ、アレン。そんなところに座ってないで、街に行こ？ いろいろ見て回りたいの」

まるで旧知の友人か、恋人に甘えるような声で言ってくる。
一瞬、アレンの指先が震える。

アレンは眉をひそめて、マルデルを見上げた。

「無茶を言つな。エイミさんの容態が万全じゃないんだ。少なくとも今日一日は、様子を見ないと」

「エイミなら平気よ。さつき、ちゃんとスープ食べてたもの」

「……そうか」

アレンは安堵の息を零した。見た目以上にエイミが弱っている場合は、最悪、ヒーリングと手持ちの活性剤で体力を回復させねばなるまいと肚を括っていたのだ。

エイミの枯れ枝のように痩せ細った手足と、目の下にできた分厚い隈、それから強烈な体臭が思い出される。長い間拘束されていたのだろう。

ジーナの助けがあつたとはいえ宿に着くなり風呂に入ったことや、はつきりとした受け答えなど、彼女の頑健ぶりには驚嘆させられるばかりである。

マルデルの報告で消化器系にも問題ないことが分かって、アレンはいい意味で、予想を裏切られた。

これで、当面の心配はなくなった。マルデルが不思議そうに首を傾げている。アレンがなにに安堵したのかわからない、といった表情だ。

「街に行くなら、アンタ。その娘についてっておやりよ。こじや女の一人歩きは昼間と言えど危ないからね」

「でしょ？」

思わぬ所から、後押しが出て、マルデルが嬉しそうに目尻を下げた。

アレンが怪訝に、ジーナを見上げる。

「なんだい、その顔。もしかしてアンタ、エイミって娘は助けてやったのに、その子はどうなってもいいってのかい？」

「いえ。そういうわけではありませんが、私もギルドと関わった以上、不用意な行動は慎むべきかと」

「それもそうだね。 アンタ」

言葉じりで、ジーナの声音が落ちた。顔色が青ざめている。ふと思いだったらしい。アレンが直接「ギルド」という単語を口にした、ことの重大さに。

この街にとつて、「ギルド」は莫大な富をもたらしてくれる商人の組織だ。合法から非合法までなんでもやるが、生活水準を押し上げる一助を担っているため、ヴィルノア人はギルドに悪態こそつくものの、嫌悪感を抱いてはいない。

ただ、その危険性は誰よりも知っていた。ギルドは歯向う者には容赦しない。たとえそれが、アレンとは直接関係のない、宿泊先の女将であっても、危害を加えてくる可能性があるのだ。

アレンは手のひらを見せて、彼女の思考を押し止めた。

「ご心配なく。この宿の位置は相手に特定されないよう、索敵妨害の魔術を月下美人の鉢に施してあります」

「そ、そうかい。……悪いね、勘ぐったりして」

「いえ。ご迷惑をおかけします」

バドラックを宿に担ぎ込んだときに施した細工だった。惑星グロランダの『迷いの森の装置』。あれは人間の視覚、聴覚、触覚を

歪め、目的地に決して辿り着かせないイリユージョンの一種だ。グローランドにのみ存在する『先天性魔力保持者』^{グローション}にこそ効果はないものの、ミッドガルド人であれば、目くらまし以上の効果が期待できる。それを、アレンはジェラベルンで確認した。

さらに、グローションが体内に保有する特殊マナ『グローション』を結晶化させた『グローション結晶』を持っていれば、アレンのような一般人でも、装置の作用は受けない。

つまり、ここがかのグローランドならば、グローションに備えた対策も必要になってくるが、このミッドガルドでは、不要な人物を排除するための、完璧な装置として機能するのである。

こういった使用上での注意事項は、シーティアから教えてもらった。

このグローション結晶にしても、彼女から譲り受けたものだ。アレンはこれを携帯型レプリケータで複製し、ロジャーとルシオにも持たせていた。

ただし、こうするとギルドやヴィルノアの軍人から目をつけられなくなるが、宿泊客が寄り付かなくなってしまう。

アレンはそこを含めて説明すると、ジーナが思案顔をつくりながら、頷いた。

「まあ、しょうがないね。あの娘が動けるような状態じゃないのは、私だって分かるよ。なら、少しの間くらい、客が来なくなっただけじゃないじゃないか」

「申し訳ありません。なるべく早く、この街を発ちますので」

「あんまり気負うんじゃないよ」

ジーナはそう言ったが、アレンは首を縦にふらなかつた。

宿の経営を気にした点もあるが、シルメリア搜索に戻るうという

意志の表れでもある。

ただ、この街に着いたときの嫌な感覚は、まだアレンの胸底にべつとりと染みついていた。

日に日に弱っていく、誰かの、なにかの“力”。その力の根源が、はっきりしないのだ。ガノッサの言動を鑑みると、エイミが関わっているだろうと、当たりをつけているのだが、まだなにも分かっていない。

エイミの傷が癒えれば、アレンは竜宝玉のことも含めて事情を尋ねようと思っていた。

「話は終わった？ それじゃ、行こ」

「……………」

腕を引っ張るマルデルを見上げて、アレンは思わずため息を吐く。

「一応、君も旅人なら、少しはギルドを警戒すべきでは？」

「平気よ。だって、アレンが守るもの」

「どこから湧くんだ、その自信は」

マルデルが不思議そうに首をひねった。

「守ってくれないの？」

「……………まあ。そういう状況に出くわせば、守りはするだろうが」

「でしょ。それじゃ、行こ」

(頭が痛くなってきた)

アレンは額に手を当てて、ため息を吐いた。

すぐに街に行こうとするマルデルを宥めて、まずエイミの様子を見ておく。

二階の右端。アレンたちが宿泊する部屋で、エイミは養生している。バドラックが旅に出たため左端の部屋が空いていたが、ジーナがまだシート交換や部屋の清掃を済ませていないのだ。それも当然で、部屋主が断りもなく早朝に発ってしまった上に、まだ半日も経っていない。

右端の部屋を、アレンがノックすると、ジーナがバタバタと大きめのシートを持って左端の部屋に入ってしまった。一階で説教される前に、バドラックの事情を説明しておいたのが効いたらしい。

ややあって、中から返事があり部屋に入った。丸テーブルに向かうマルデルの姉・メリルの座っているのが、まず目に入る。

「こんにちは」

「お邪魔しています」

アレンが目礼すると、メリルが会釈を返した。マルデルと違い、控えめなメリルはあまり喋らない。

アレンは表面上平静を装ったものの、メリルの容姿に驚いた。つくづく似ているのだ。あの銀髪の戦乙女に。

ただ、メリルが自分たちに接してくる様子を見て、神とは無縁だと結論づけていた。メリルが本物の戦乙女ならば、少なくとも今頃戦っている。

メリルは挨拶を終えると、丸テーブルにうずくまる老猫を物憂げに見つめた。その横顔に、なにか未練のようなものが残されている

気がする。

「やはり、貴方々の猫ですか？」

「違うわ。だって神気が感じられないもの」

答えたのは、マルデルだった。アレンの左腕にしっかりとしがみついているマルデルは、不服そうに頬を膨らませている。買い物に行こうと言っているのに、他を優先させるアレンが、気に入らないようである。

アレンはマルデルが放った「神気」という言葉が引つかかったが、召喚獣の中には神と崇められる存在がいることも知っているため、詮索しなかった。魔神や神獣というのも、契約如何によっては力を貸してくれる。

「それでルシオ、ロジャー。エイミさんは」

「アタシなら、ピンピンしてるよ」

部屋の奥から、エイミが答えた。メリルの向かい　いつもはアレンが寝るベッドで、エイミは座っていた。ヘッドボードに背をもたせ、立てた片膝の上に右腕を乗せている。脱獄直後より、さすがに顔色が良い。小麦色の肌は、卵の殻を剥いたように垢が落ちて艶つやがよみがえり、大きめのブラウスから、無防備に投げ出された長い両脚と、たわわに実った双球の谷間が、零れている。女豹を思わせる肢体だ。

アレンは努めて視線をそらしながら、首をひねった。

「あの。その服」

「ああ、これが。悪いが、アンタのを借りてるよ。宿屋の女将のじゃ、さすがにサイズが大きすぎているいろいろ見えちまうんだ」

「……そうですか」

無論文句など言えるはずもなく、言葉少なに頷きながら、エイミの替えの服を買おうと、頭の隅に留める。

「あ、アレンさん。これ」

ベッド脇のスツールから、ルシオが空の容器を差し出してきた。エイミがジーナに風呂に入れてもらっている間、アレンが作った簡単な食事だ。スープの他に、柔らかく煮た肉も一欠けらだが出しておいた。体力的に食べ切れないだろうと予想していたのだが、彼女は両方とも平らげている。見事な健啖家ぶりである。

「ね、心配ないでしょう」

「そうだな」

皿を受け取りながら、マルデルに頷く。

「少なくとも、アンタが顔出すまでは起きてようと思ってさ。礼の一つでも言うのが、筋だろ」

エイミは背筋を伸ばしながら、眠そうに瞼をこすった。

「気にしないでください。いまはまず、身体を休めることが第一です」

「そうは言つが、こつちもやってもらいっぱなしってのは気味が悪いんだ。少しくらい、いいだろ?」

瞼を重そうに押し上げつつ、エイミが言う。
アレンは頷いた。

「お気持ち、ありがたく受け取りました。あまり身体を冷やされませんよう」

半分背中を向けたまま言うと、エイミは、はた、と瞬いて自分自身を見下ろしたあと、慌てて布団をかぶりこんだ。部屋には女子供しかいなかったため、油断していたのだろう。

アレンは視線をロジャーたちに向けた。

「なにか、買ってきて欲しいものはあるか? いまからマルデルと買い物に出るんだが」

「買い物ですか? 夕飯の材料はさつき買い揃えたし。俺は特になにも」

「そついや姉ちゃんたちは、これからどうすんだ? おばちゃんの掃除が終わったら、隣が空くけど、今晚泊まんのか?」

ロジャーが期待に目を輝かせる。

ふと、マルデルがアレンの手を引いた。見下ろすと、満面の笑みをたたえたマルデルと目が合う。

……ぞく、

そのとき、形容しがたい悪寒が、アレンの背を這った。

一步、マルデルから退こうとするが、腕をつかまれて逃れられない。ニコニコと微笑む彼女は、どこからどう見ても、純粹無垢な少女に違いない。

気のせいか　と、首を傾げる一方で、

(なんだ、いまのは)

とも思う。

殺気とは、種類が違っていた。たとえるなら、沼の中に引きずり込まれるような感覚。マルデルの微笑みを見ていると、頭の中が霧に包まれたようにぼんやりとしてくる。

アレンは、正直に言つとマルデルが苦手だった。

「それじゃ、行きましょ?」

「おお?　姉ちゃん、宿はどうすんだ?」

「メリル姉さまに任せるわ」

マルデルはひらひらと手を振って、アレンの手を引きながら部屋を出て行った。

(どうすんだ、ヴァルキリー)

アリュウゼが暢気に聞いてきて、レナスは不機嫌に眉を寄せた。

(のう、ヴァルキリー。フレイアはアレンをどうするつもりなんじや？ 誘惑するとかなんとか言っておった気もするが)

(そんなのに引つかかるような相手とも思えないけどな)

と、ルシオが冷めた意見を言う。

アリユーズが肩を揺すって低く嗤った。

(そこは多分、神力でどうにかするんだろ。まあ、かつてのJ・D・ウォルスのように八つ裂きにされて終わりがもしれねえがな)

意地の悪い顔である。

ジェラードが、「あゝ」と間延びした声を上げた。

(そう言えば、あのとき、奴は本当に情け容赦なかったのう。本当に、大丈夫なのか？ ヴァルキリー)

(“誘惑”自体はフレイアにとって難しいことではない。彼女がその気になれば、神とて惑わす力がある)

レナスが答えると、ルシオが目を丸めて「そうなのか」とつぶやいた。アリユーズとジェラードは、まだ何か言いたそうにそわそわしている。

クレルモンフェランで遭った不死者 J・D・ウォルスをレナスも思い出す。

死人の土気色の肌と、血のように真っ赤な髪と眼を持つ魔女。あのときは、ルシオの代わりに、先日、リセリアとともに神界に逝った洵が居た。

「　　なんか、知らねえ間にアレンさんと仲良くなっただんだな」

残された少年のルシオが、不服そうにつぶやく。

その声で我に返ったレナスは、猫から視線を外した。

「ごめんなさい。私たちは近く、この街を出る予定なんだけれど、妹は、彼を気に入ったようね」

「あ、いや。別にアンタが悪いって言ってるわけじゃ」

ルシオ少年はきまり悪く頭を掻いて押し黙った。

ロジャーが身を乗り出す。

「ってことは、やっぱり二、三日はヴィルノアに居るのか？　なら、オイラたちと一緒に泊まろうぜ！　な、な、な？」

丸い狸の尻尾を嬉しそうに振るロジャーに、レナスは曖昧に微笑んだ。

「悪いが、あたしはちょっと寝かせてもらっよ」

「おう。俺たちも静かにしてるから」

布団をかぶりこみながら言うエイミに、ルシオがそう返すと、エイミはわずかに彼をふり返って小さく、口端をつつて笑った。

ロジャーがぱちぱちと瞬き、人差し指を口許に当てる。

「しー、じゃんね」

「そうだ。しー、だ」

頷き合う少年に、レナスもつられて微笑っていた。

それからレナスは不死者の気配を追って街を発った。
まだ日もかげっていない、正午のことである。

1 古城編 レザード、再び

鬱蒼と茂る森は、深く眠っているようである。

シルメリアは剣を抜き打ち、霧に沈む不死者を一刀両断する。いくつもの金切り声が続断魔となつて森の奥に吸い込まれていく。木々が震え、しばらくするとまた、元の静けさが満ちてくる。

剣を納め、左に目を向けた。

「ここも外れみたいね。わざわざ不死者をこんな風におびき寄せて、いったいなにを企んでいるの。その屍術師」

濃霧に覆われた森で、視界は役に立たない。代わりに、彼女の左人差し指に嵌つた蒼穹アルスィ・オブの石の指輪が、森の輪郭を正確に映し出す。

ここは、王都クレルモンフェランより北東に数キロ離れた森。人里から隔絶された、数百年前の古城が眠る場所だ。

ただし、城を見るには、もう二、三十メートル先に進む必要がある。そこでようやく森が途絶え、白亜の城がシルメリアを出迎えるのだ。

あの日は、雷がよく降った。

「実に素晴らしい腕だ。惜しむらくは、あなたが、私の知る女神と似て非なる存在ということか」

粘着性のある声が、シルメリアに答える。乳白色の空間に一人、男が浮かび上がってきた。深い紺色のマントを翻し、整った顔立ちを半分ほど覆う丸眼鏡をかけた、若き天才魔導師。その口許には笑みが見え、瞳は対照的に氷のように冷えて、何者も映さない。たった一つの、例外を除いて。

「お前は……、アレンの記憶にあったわ。確かレザード・ヴァレス。神を自分のものにしてしようという、分を弁えない愚か者」

レザードに向き直る。シルメリアはいま、無造作に両手を下げている。棒立ちしているように傍目には見えるが、その実、隙がないレザードが少しでも不審な行動を取れば、頸を刎ねられる位置にいる。

その状況を、まるで感知していないかのように、レザードは飄々と微笑う。掴みどころのない性格はどこかロキに似ていた。もっとも、ロキにレザードほどの粘着性はないが。

レザードが左腕を振って、マントを背中に流した。

「分を弁えない愚か者、ですか。あなたがた神はいつもそうやって人間を甘く見る。ですが、人間の恐ろしさを、あなたがたはもう少し理解するべきでしょう。人の欲というものが、いかなるものにも勝るといふことを」

シルメリアが片眉を上げた。この男の知識量は侮れない。そう、アレンが記憶している。さらに、彼はこう解析していた。

レザード・ヴァレスは戦いの場に相手を誘い込み、相對する敵だけでなくその周辺者さえ意のままに躍らせようとする、劇場型の犯罪者。しかしそうでありながら、自分の逃走経路を確保するしたたかさも備えている。レザードが行動に出た場合は、彼にとって必要な準備がすべて整ったということだ。なにかしらの仕掛けが、彼が作り出した戦場に張りめぐらされている。

厄介な相手なのだ。

「それにしても残念です。あなたは、私が望んだヴァルキュリアではない。ですが、我が女神を呼ぶ良き材料にはなってくれそうだ。なぜならあなたはヴァルキュリア。レナスと輪廻をとみにする女神

なのだから！」

「お前は私たちヴァルキリーのことをどこまで知っている。お前はいつたい何者だ」

アレンの記憶から、相手が賢者の石を持っているのは知っている。それがあれば、いかな知識でさえ入手することは可能だ。理論の上は。

しかし、本来、賢者の石が与える知識量は膨大過ぎて、人間の脳では処理できない。アレンの持っていたアルスイ・オーブと違い、賢者の石は知りたい情報をピンポイントで取り出す機能などない。何十万という情報量が頭の中に一気に流れ込んでき、その情報すべてがルーン文字で表されている。それを「知識」として取り込めるのは、文字を操る神だけだ。

教養のない者には、まったく価値のない代物なのである。それなのに、レザードはどう考えても下界で手に入れられる知識レベルを超えていた。賢者の石から、情報を取り出しているのは間違いない。

ただ、この結果に、神たるシルメリアは驚きこそするものの、深刻に受け止めることはない。「神ならば」扱える代物だからだ。

問題は、一つ。

神具である賢者の石を、この男がいかにして手に入れたのか、ということだ。

「何者か」とシルメリアが問うた真意は、ここにあった。

人間は、生きていくうちに神界に関与することなどできない。肉体が邪魔をして、神界に存在できないからだ。たとえ、檻こくたいから抜け出す秘策があつたとしても、オーデインの目をすり抜けて石を手に入れることは不可能である。宝物庫は、オーデインの背にあるのだ

から。

レザードが喉を鳴らし、大仰に答えた。

「我が名はレザード・ヴァレス。冥界の王、レザード・ヴァレスと覚えおきなさい」

シルメリアは鼻を鳴らす。

レザードの表情から、質問の意図を読み取っているのは分かる。彼ははぐらかしているのだ。シルメリアの疑問の方こそ些末なことだ、とレザードは言っている。

「たかが人間が、賢者の石を使いこなせるなど思っているのか」

「その議論は無意味だ。私は使いこなせている。その仮初の肉体で、どこまで私に届きますか、ヴァルクユリア？ いや、シルメリア、とお呼びした方がよろしいかな」

「度し難き愚か者」

シルメリアは吐き捨てた。剣に手をかける。

「ならば、その身に刻みなさい、我が技を！」

「受けて立ちましょう。そして思い知りなさい。あなたの無力さを」

「笑わせるな！」

言葉じりと抜剣は同時だった。シルメリアが難いのは、空気。必ず斬られる間合いに居ながら、レザードは悠然と笑んでいる。

「なにっ！」

まるで幻を斬ったような心地だった。

「どうしました？ 私は魔法をまったく使っていませんよ」

驚きに呆けた、一瞬後。シルメリアは神速で剣を戻すと腰を入れ、薙ぎ払った。真空波が三層、駆る。

また幻だ。

レザードは半身切って躲している。踏み込んで打ちおろす。雷鳴のようなすさまじい面切り。今度は数ミリ、マントをかすめた。すかさず剣をすくいあげ、払い斬る。上体反らしで避けたレザードの髪を、数本さらう。

レザードが腕を振る。それを知っていた様に、シルメリアが高く跳躍した。見上げたレザードの額に、三閃、剣が刻み込まれる。普通はもんどりを打ってレザードが倒れる、強烈な斬撃。だが、レザードの額に見えたそれは幻だった。本物のレザードは、一寸後ろで変わらず笑んでいる。

獰猛な太刀風が、レザードの髪を揺らした。

「鋭い剣技ですね。いまのレナスをも上回っている。しかし、私は十分にあなたの攻撃を避けられる。このように、腕を組んでいてもね」

レザードが棒立ちして腕を組む。二、三閃、剣で斬り立てるも、彼の言葉を証明するだけだ。まるで水でも切らんとするように、ひらりと躲かわされてしまう。

相手は戦う態勢ですらない。本来はシルメリアに反応することさえできないはずなのに、当たらない。

「貴様、いつたい！」

「賢者の石。これがアレン・ガードという男が持つアルスイ・オーブと同質の物だと言えば、あなたは理解できるものではありませんか」

「私の剣技を読めるというのか」

そのような石の使い方は、シルメリアにとって未知だった。石はあくまで、神にとつての辞書だ。

(この男、ルーン文字以外の手法で、石から知識を取り出している?)

一瞬、そう考えた。だが、実際にシルメリアは賢者の石を使ったことがないため、詳しくわからない。

ただ、なぜ敵がこちらの攻撃を躲せるのか、その仕組みは理解できる。

「ならば、読んだところで防ぎようのない技なら、どう」

正眼に構えたシルメリアの剣から、白い光の羽根が雪のように零れた。

シルメリアが打ち込んだ。先ほどより一層重厚な、鋭い剣尖。かすればレザードの腕ごと斬り落とす威力を秘めている。

だが、レザードは相変わらず紙一重で見切った。さらに、シルメリアは斬り上げ、打ち込み、横薙ぎとレザードを斬り立てていくが、ことごとく躲かわされる。

シルメリアの背に、翼が広がった。白鳥のごとき純白の翼。いまの肉体は、レナスが使っている神の器でもなければ、人の身でもない。それでいて、この器はシルメリアの魂に良く馴染んだ。

三本の巨大な槍が、レザードを刺し貫かんと地面から襲う。

三方同時攻撃の槍を、レザードが寸前で回避する。が、上空で交叉するこの槍たちは、レザードを貫けずとも留め置くことに成功した。

槍を足蹴に、レザードは空を見上げた。目じりを下げる。

「ニーベルン・ヴァレスティですか。やはりそうだ。実に美しい。我が女神、レナスが使っている技だ。あなたの技は、私にどれだけのダメージを与えられるでしょうか。敢えて受けてあげましょう」

両腕を広げるレザードに対し、シルメリアは身長の倍はある巨大な槍を、掌に集った光の中から生み出し、掲げた。

「戯言を！ ニーベルン・ヴァレスティ」

三本の槍が交叉する一点に向けて、シルメリアが巨槍を投げつける。巨槍は神気を帯び、金色の光をまとってレザードに落ちた。風を引きちぎる巨大な質量が、襲い掛かっていく。

レザードは微笑んだ。満足そうに頷き、そつと右手を掲げる。途端、

光が、風が、大気が、爆発を起こしたように吹き荒れ、シルメリアの金髪が後ろに撫でつけられた。顔を手で庇う。耳に届くのは、強烈な轟音、落雷と暴風を兼ねたような凶悪な音だ。耳が痺れる。まるで、^{ニーベルン・ヴァレスティ}巨槍と同じ質量の物体が衝突したような、信じられない音がした。

光が弾け、もうもつたる煙が、シルメリアの視界を一層悪くする。シルメリアは着地し、思わず息を呑んだ。

「無傷……。馬鹿な！」

煙の向こうで レザード・ヴァレスは神技を喰らう以前と全く変わらぬ態勢で立っていた。右腕を突き出し、その服には焦げ目さえ見受けられない。

だが彼の足許は、レザード自身が立っている地面を除いて、深く抉れていた。鬱蒼と茂った木々は槍の威力を示すように薙ぎ倒れ、あるものは消滅してしまっている。

神の器を失って久しいシルメリアだが、いまの体は決して、シルメリアの枷ではなかった。どう見ても、シルメリアは全力のニーベルン・ヴァレスティを放ったのだ。

焦燥が、彼女の胸をつかんだ。

レザードが一層笑みを深く刻み込み、眼鏡を押し上げる。直線上に挟れた大地を背に、一人だけ、時の輪に取り残されたように、美しい姿を保ったまま悠然と。

「どうしました？ この程度の力で私を倒せるなどと、本当に思っていたのですか？」

会話ついでにつぶやくように、「ファイア・ランス」とレザードが言った。

突き出された掌から、三本の炎槍が獣のごとくシルメリアに飛びかかる。

「初級魔法などで！」

切り払う つもりだった。

「なにっ!?!？」

実際は、炎槍を中ほどまで斬ったところで刃が止まり、熱と槍の質量に押されてシルメリアが剣を両手で握りながら後ずさった。

歯を食いしばって、炎槍を押し返さんと両足を広げる。

弾けば　考えた瞬間、

「ぐあっ！」

勢いづいたように、炎槍がシルメリアを圧倒し、引き倒した。爆炎が炸裂し、シルメリアの両腕が焼き爛れる。

地面に転がり、態勢を立て直しながら、シルメリアは呻いた。

「馬鹿な……！」

「いかがです？　賢者の石によって増大した私の魔力は。ただのフ
アイア・ランスが、カラミティ・ブラスト大魔法をも凌駕する。これが賢者の石なので
よ、ヴァルキュリア」

「く……っ！　たかが人間ごときが、どうして、これほどの魔力を」

まるで理解できなかった。不死者ならばともかく、人間の規格をはるかに超える魔力だ。ありえない。戦乙女たるシルメリアの剣をも凌駕する威力など。

レザードが興味深そうに、顎を引いた。

「ほう、さすがはヴァルキュリア。私のファイア・ランスを受けて立ち上がれるとは。意外にその器も頑丈に作っているようだ」

レザードの氷のような栗色の瞳に、わずかに怒りが滲んだ。

「つくづく邪魔をしてくれますね、あの男は。ですが、あなたとあの男が共にいないことは都合がいい。あのアルスイ・オーブは、少々邪魔ですからね」

「そういうこと」

シルメリアは左手の人差し指に触れた。そこに、アレンから奪ってきた指輪、アルスイ・オーブがある。これをレザードやアレンのように辞書や探索・先読みのためには用いず、神界からの目を晦ますためにシルメリアは使っていた。

これによってシルメリアの神気を、ヴァルハラ 監視の目神界の水鏡に映さないのだ。そんなことまで、可能にする指輪なのである。

「ならば、神と人間の力の差を思い知りなさい」

アルスイ・オーブの宝石が蒼穹に輝く。それを見て、レザードは意外そうに目を丸くし、作り物の笑みを浮かべた。

「なるほど、それはアレン・ガードの。少しは面白くなりそうだ」

レザードが喉を鳴らす。

「ファイア・ランス」

「撃ってくるのは、ファイア・ランスね」

炎槍の魔術方陣が、レザードの手許から霧散すると同時、シルメリアは素早く左に跳んだ。が、炎槍には追尾の魔法もかかっている。通常回避は不可能。レザード・ヴァレスは相手の動きを言語道断で止めるシルメリアの技二本の槍を、移送方陣で歪めていた。

対するシルメリアは、剣に神気を通す。炎槍の道筋は視えている。三つの炎が重なり合う瞬間、シルメリアは鋭く突き込んだ。互いにぶつかって一瞬勢いを失った炎槍を、神気でさらに外に押し流す。女神の羽根が散る。

レザードの魔力で構成された炎槍は、追尾能力を神気によって霧散され、あらぬ所で豪快に爆発した。

濛々たる煙が、吹き上がる。

「なるほど、先読みに使いますか。ならばその先を読むまでのこと。アレン・ガードならばまだしも、あなたは本当にその力を使いこなせますか？」

ずいぶんアレンを買っているような台詞である。シルメリアは鼻を鳴らした。

「人間が余計なことを。あの男の方が、このアイテムとは相性が悪いということよ」

「ほう。器用ですね。ならば、これはどうでしょう？ ストーン・トウチ」

詠唱が終わらぬうちに、シルメリアの足許に闇の方陣が浮かび上がっていた。

「リフレクト・ソーサリー」

甲高い金属音が鳴り、緑色の方陣がシルメリアを包む。途端、闇の方陣から飛び出した鉄球が、シルメリアに触れる寸前で姿を消した。

くぐもった激突音。

術を放ったレザードが立つ地面から鉄球が飛び出し、炸裂したのだ。

「思った通りね、いくら強大な魔術でも、初級ならば返せる」

わずかに剣先を下げ、シルメリアがつぶやく。そして、ストーントウチが直撃した魔導師に向かって、声を張った。

「自分の魔力を喰らった気分はどうかしら。まだまだこれからよ。戦乙女を馬鹿にしたこと、後悔しなさい」

「自分の出した魔力で、しかも、初級魔法で私を倒せると本気で思っているのですか」

「！」

レザードは相変わらず、綺麗な姿で立っていた。移送方陣を使った気配はない。直撃を喰らってなお、平然としていられるだけの魔力を、彼は有している。

魔法防御という面では、シルメリアの一枚も二枚も上に行く相手だ。

「ですが、このままあなたを斃すのは面白くない。私が手を下すまでもない相手だ」

「なんですって」

シルメリアの秀麗な眉がっり上がった。プライドの高さで言えば、彼女は運命の三女神の中で群を抜いている。

レザードは作り物の笑みを浮かべながら、両腕を広げた。

「そうだ。この場所がどういう場所か、あなたはご存知ですか？
シルメリア・ヴァルキュリア」

「なにを言っている」

声に、力がこもった。思考が乱れる。アルスイ・オーブが告げてくる。これは予兆だ、と。問いかけてもいないのに、意識する前に魂に刻み込まれた記憶が、あの頃をシルメリアに思い出させる。

なにも知らないアリーシャを、神の刺客から逃がすために責め立てた、あのときを。

「感動の再会をさせてあげましょう。あなたの大切な片割れは、オーダーラインに奪われ消えてしまった」

「お前、なにを、言ってる」

剣を持つ手が震える。

レザードが高らかに笑い、巨大な移送方陣を描き出すと、光が弾け、霧で覆われた森からシルメリアのよく知る天井高い廊下に、景色が一変した。

シルメリアは剣を強く握りしめる。

“オブジェクトリーディング”。

物質に込められた記憶の残滓を読み解く能力があるシルメリアには、アルスイ・オーブが共鳴してしまい、視たくないものまで見せつけてくる。

(やめ、なさい……)

心の声は、喉で詰まった。

レザードが謳^{うた}う。

「あなたは人間として生まれてしまった。神に齒向う人間の王、その王女として。王女あなたの片割れの人格は、あなたの導きにより、そして神々の意思により戦いの中へ放り込まれた。拳句の果てに剣を取らされ、最期の最後に、オーデインに立ち向かい、無残にも」

「貴様……、貴様ごときがあの子を」

「アリーシャ」

「お前ごときが、あの子の名を、言うなああっ！」

シルメリアは剣を握りこむと、鋭く上空へ跳んだ。

青白い光の翼が、彼女の背から広がっていく。

「レザード・ヴァレス！」

相手の動きを止める三槍の枷など、それを練る煩わしさからかなくぐり捨てた。シルメリアは長大な槍を掌の光から生み出し、レザードに向けて投げ下ろす。

ニーベルン・ヴァレスティである。

「おやおや。神だなんだと言いながら、いまのあなたは、ただ癩癩で泣き崩れる小娘も同然だ。それほどオーデインが憎いのですか？

女神サマ」

禿^{かぶ}きつた絨毯と、苔の生えた石畳をニーベルン・ヴァレスティが容赦なく抉り取る。しかし、そこにレザードはなく、彼はシルメリアの左手に、触れるか触れないかの距離まで迫っていた。

「貴様！」

剣を薙ぎ払う。だが、空振り。
レザードは、いつの間にか右側面に廻り込んでいた。

「不死の王ブラムスに護られてまで、アリーシャの仇を取りたいのですか？」

「っ！」

即座に打ち込んだ。

今度は、背後を取られた。

「よほどあなたは、人間の半身を気に入っていたようだ。彼女に対して辛いことしか言えない自分が、本当は嫌で嫌で仕方がなかったのですねえ。心優しい彼女を、自分のせいで苦しめているのが本当は苦しくて仕方がなかった」

「！」

「最期の最後で、共に戦えずに見殺してしまった自分が、とても悔しかった。そうでしょう？ シルメリアさま？」

「あああああっ！」

女神と呼ぶのもためらわれる鬼の形相で、シルメリアは剣を抜き放った。

「フン」

雷のごとく走った横薙ぎを、レザードは指先に魔力を宿し、素手で受け止める。高純度の魔力はシルメリアの剣を止めるだけでなく、それだけで武器となる。

「遅いですね」

「がっ！」

腹部に鈍痛。まるで、棍棒かなにかで殴られたかのような衝撃が走った。

「マジックシエルか」

レザードがつぶやく。人を最も効果的に殴る方法など、レザードは知らない。だが、指先に集めた魔力は、シルメリアの腹を貫く硬度と切尖きっさきとなっているのだ。

それゆえに意外である。アルスイ・オーブは精神に強く感応するアイテムであるため、万能な性能を持つ代わりに、頭が整理できていなければ諸刃の刃となる。その上で、シルメリアが「マジックシエル」という異界の魔法を使ったことが解せない。

(…………あの男…………)

レザードは目を細めた。シルメリアの器は、神のマテリアライズによく似ている。レザードが研究に研究を重ねて造った、ホームクールの器とはわけが違う。

それを、人間が創り出したのが引っかかる。

たとえシルメリアが、あの男の体内で自発的に器を作るための魔力と、生命力をかき集めたとはいえ。

「おやおやどうしました、先ほどまでの鋭い動きは。冷静な先読みもまるで出来ていませんね」

言葉で翻弄し、シルメリアの思考をかき乱す。なんのことはない。いまの彼女は人間の感情それと、まったく同じ精神構造だ。

「くう！」

鈍った剣線を、捌くことも、防ぐことも、切り返すことも、レザードには容易かった。

「激情タイプというのは本当のようですね。あなたは一番情にほだされ、己の感情で先走る。そう、一番未熟で、人間に近い戦ヴァルキユリア乙女。」

ああ、それではダメだ。やはり、あなたは子どもだ。そんなマだから、小娘一人死んだ程度でそうまで取り乱す。悔しいですか？ 自分がなにも出来ないことが」

シルメリアが斬り立ててくる。だが、レザードに届かない。

彼女の心の闇が、賢者の石を通して深く、広がっていくのが分かる。神が憎しみと怒りにとらわれ、堕ちていく様は、この古城に瘴気を集める呼び水となる。

だから、すぐには殺さない。

そのときだった。

「相変わらずよ」

凜と、低く響くエインフェリアの声が耳に届いたのは。

レザードとシルメリアが、同時にそちらを見る。

廊下の入り口、禿げた絨毯の上に、大剣を突き出し、突進してく

る巨漢の傭兵がいた。

「ムカつく面だぜ！ ファイナリティ・ブラスト！」

アリュージェの炎をまとった突きが、レザードに向かって放たれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0199n/>

ヴァルキリープロファイル 神に挑む者、天を穿て

2012年1月2日11時51分発行